

# 機動戦士ガンダムE

グランクラン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マクギリス・ファリド事件から七年が過ぎた。ギヤラルホルンはラスタル・エリオンを失ってから軍事力を拡大させていった。経済防衛機構『EDM』はギヤラルホルンとの間に結んだ不可侵条約を守っていた。しかし、ギヤラルホルンの侵攻をもって世界をも飲み込むほどの大きな渦となつて世界を飲み込む。EDMの代表であるマハラジャ・ダースリンはファントムブラット隊の隊長であるビスケット・グリフォンに『ガンダムバルバトス・リファイン』とパイロットであるサブレ・グリフォンと開発チームの回収を命じられる。ここから始まるのは二人の兄弟が挑む戦いの記録。

———二千万年に及ぶ宇宙に上がった人類の呪いの記録と記憶の戦い。

アース・ガイドⅠ	1
アース・ガイドⅡ	14
アース・ガイドⅢ	25
アース・ガイドⅣ	36
アース・ガイドⅤ	46
スターダスト・インパクトⅠ	58
スターダスト・インパクトⅡ	69
スターダスト・インパクトⅢ	80
スターダスト・インパクトⅣ	91
スターダスト・インパクトⅤ	102
アフリカ・サバイバーⅠ	115
アフリカ・サバイバーⅡ	126
アフリカ・サバイバーⅢ	137
アフリカ・サバイバーⅣ	148
生きた証Ⅰ	159
生きた証Ⅱ	171
生きた証Ⅲ	183
生きた証Ⅳ	195
生きた証Ⅴ	206
仕組まれていた事Ⅰ	217
仕組まれていた事Ⅱ	229
仕組まれていた事Ⅲ	240
仕組まれていた事Ⅳ	251

仕組まれていた事V

262

アイン・トウルーI

272

アイン・トウルーII

283

アイン・トウルーIII 《天使の目覚め》

295

アイン・トウルーIV 《最後のガンダム》

306

レインボー・スカイI 《裏切りの真意》

318

レインボー・スカイII 《マモルという意味》

329

レインボー・スカイIII 《虹色の空》

339

レインボー・スカイIV 《三百年の歴史の終わり》

351

レインボー・スカイV 《繋がる空》

362

## 断章

誰にも語らない話

373

その涙は誰の為に

387

モンスターク

398

鉄の華はいまだ散らず

409

傷だらけの王様

420

## 火星編

設定資料集

431

マーズ・アタックI 《君を待っていた》

450

マーズ・アタックII 《戦いの幕開け》

461

マーズ・アタックIII 《赤い大地》

472

マーズ・アタックIV 《憧れる若者》

483

マーズ・アタックV 《命の還る場所》

495

ラブ・イズ・フォーエバーI 《運命》

506

ラブ・イズ・フォーエバーII 《愛ゆえに》

516

ラブ・イズ・フォーエバーⅢ 《覚悟の聖女》  
 ラブ・イズ・フォーエバーⅣ 《永遠の愛を君に》  
 ウィー・ラブ・ユーⅠ 《償いと闇》  
 ウィー・ラブ・ユーⅡ 《その闇はどす黒い》  
 ウィー・ラブ・ユーⅢ 《たった一人の為に》  
 ウィー・ラブ・ユーⅣ 《君の名を叫ぶ》  
 ウィー・ラブ・ユーⅤ 《集結の刻》  
 ウィー・ラブ・ユーⅥ 《愛ゆえの憎しみ》  
 ウィー・ラブ・ユーⅦ 《微笑と怒りの狭間で》  
 ウィー・ラブ・ユーⅧ 《無を有する者達》  
 ウィー・ラブ・ユーⅨ 《最悪の結末》  
 ウィー・ラブ・ユーⅩ 《赤い大地は緑の大地へ、憎しみは癒しに》

641

暁の空の向こう側へⅠ 《二拠点攻略作戦》  
 暁の空の向こう側へⅡ 《誇り高き子供達へ》  
 暁の空の向こう側へⅢ 《背負う者達》  
 暁の空の向こう側へⅣ 《真実を追い求めて》  
 暁の空の向こう側へⅤ 《終わりへ向けて》

断章Ⅱ

ピエロの怒りの理由  
 悪は背負う  
 俺達はあの日から変わらない

木星編

アカシツクレコードⅠ 《テイワズの意地》  
 アカシツクレコードⅡ 《命の使い方》

アカシックレコードⅢ 《真実の先へ》	735
アカシックレコードⅣ 《この暖かこそが命》	742
君を想うⅠ 《木星会談》	750
君を想うⅡ 《思惑の交差》	757
君を想うⅢ 《誇りの向かう先》	765
君を想うⅣ 《遅すぎた覚醒》	774
君を想うⅤ 《終わりを願う》	783
選り取った未来Ⅰ 《三者会談》	793
選り取った未来Ⅱ 《最後の戦いの始まり》	801
選り取った未来Ⅲ 《ファントムブラッド》	809
選り取った未来Ⅳ 《角笛の闇》	819
選り取った未来Ⅴ 《人類の業》	828
選り取った未来Ⅵ 《罪と罰》	836
選り取った未来Ⅶ 《デブリと称された未来》	845
選り取った未来Ⅷ 《愛ユエニ憎ム》	854
選り取った未来Ⅸ 《愛してる》	862
選り取った未来Ⅹ 《楽園の獣》	871
選り取った未来Ⅺ 《ヴァルハラ》	880
選り取った未来Ⅻ 《安らかな場所》	888
選り取った未来ⅩⅠⅠⅠ 《また逢う日まで》	897
設定集其の二	907
繋がっている世界 エデン・オブ・フォーエバー	914

## 地球編

### アース・ガイドⅠ

<1>

目の前を歩く複数の男の子達に向けて右腕を差し出すように手を向け駆け出す。しかし、彼らに追いつけるわけもなく、ふと姿を消す彼らを探すように周囲をキョロキョロと見回しつつ、息を整えていると足元に血塗れの彼らと血が周囲をちよつとした水たまりのようになっっていた。

——そして、自分の両手を見つみると、彼らの血で真っ赤に染まっている。

不意に恐ろしくなり汗をかき、息が乱れてくると、焦点が合わなくなる。

こんな……!!

血が付いた両手で顔面を覆うように手のひらを置く。指を手のひらを少しづつ下におろしながら俺——ビスケット・グリフォンは叫び声をあげて夢から覚める。

<2>

大きな叫び声をあげてベットから起き上がる、嫌な汗が全身から吹き出すように寝間着と自身の素肌を気持ち悪くくつつける。

今すぐ脱いでしまいたい。

ベットから体を外へと移動させ、足を床につけるとそのまま力を込めて体を起こすとフラフラさせてしまう体を、何とか足に込める力を増やし踏ん張ると、俺は洗面所へと移動し、顔に水を叩きつけ、洗顔し、タオルで拭く。洗面所の鏡に写る自身の表情を眺める。

丸い目に小さい鼻、その反面顔や体は脂肪が付いた大きなものだ。濃い目の肩にギリギリ付かないくらいの茶髪で多少顔を小顔に見せようという俺の涙ぐましい努力は全く無意味だ。むしろサブレのように痩せているほうがかつこよく見えるのに——

寝間着を脱ぎ下着姿になり突き出た自身の情けない腹をさすって

みる。

毎朝走っているのに全く効果が出ない。

走り出すように濃い緑色のジャージを上下で着込み、タオルを首にかけ飛ばないようにジャージの中に入れて固定する。玄関を開け、電子キーを掛けるとそのまま歩いてエレベーターで降りていく。

マンションの入り口は朝早くということもあり閑散としている。特にこのマンションはそこそこ高めのマンションであり、住んでいる人も都市在住としては金持ちに近い人種が多いだろう。

俺や弟のサブレもここに住んでいる。

マンションから外に一步出ると、少しだけ冷たい空気が風となって俺の体を突き抜ける。軽く身震いを起こして歩き出す。

ビルやマンション群に囲まれた月面都市アルンの中心部は俺が所属している傭兵企業である『経済防衛機構』通称『EDM』の本拠地が置かれている。アルンの町は左右上下に伸びていて、それぞれの道の先は港につながっている。そして、その道が交わる場所にEDMの本拠地である高層ビルが高々と存在する。

俺が出たマンションから上下に伸びるアルンで一番大きな中央道である。アルン中央通りとその左右に大きく分けられた道にはさまざまな中央公園は昼時は昼食を食べる人が集まってくるし、まっすぐ伸びるこの道は朝やお昼間わず走ったり、運動している人にとってはこはちようどいい場所だろう。かくいう俺もここで毎朝走っているわけだし。

最初走り出したときシノや周囲は俺のそういう行動に「ダイエットか？」と面白おかしくみんなの話のタネになったものだが、俺はそんな気持ちで走ろうと考えたわけじゃない。

マンションを見上げて自分の生活の豊かさと鉄華団での『働く』と他の『働く』では別だと思い知らされた。実際一人暮らしをしてみても、生活習慣の差や酷さなんてものを痛感させられた。毎朝走ることで少しでもマシになればいいと思い、今こうして歩いている。

横断歩道を駆け足で通り過ぎ、芝生が広がる公園に出る。人工芝が足元で心地よい踏みごたえと感触を与えてくれる。



肌寒さからジャージに口を隠し、両手をポケットに入れている。芝生に立ち芝生の感触を確かめる。屈伸し、ストレッチを入念に行い、そしてポケットから手を出して走り出す。

とたん、俺は七年前のことを思い出す。

マクギリス・フアリド事件の直後の事を――

<3>

今思えば、サブレは火星帰りだったのだろう。

疲れ果てたサブレがどんな仕事をしていたのか、当時に本人に何をしていたのか尋ねたことがあったが、本人は何も答えてくれなかった。しかし、その後に俺はEDMの地下格納庫にボロボロで大破していたバルバトスとグシオンを見た。おそらく火星に赴き二つのガンダムフレームを回収したのだろう。

フラウロスは事前に回収できたと聞いていたし、シノの無事もその後に関わされた。最もシノの場合は生身の体に刻まれた傷より精神的な傷の方が致命的だった。俺が立ち直り本人に会いに行ったとき、シノとは思えないほど精神的に弱り切っていた。

短い茶髪も、耳につけたピアスもどこか痛々しいほどに包帯を巻かれている。

「よお……ビスケット」

小さくつぶやくように吐き出されたその言葉は耳を澄まさなければ聞こえないようだった。

オルガが、三日月が、昭弘が、みんなを失ったことと、今までの失敗がまとめてシノを襲ったのだろう。シノにとってブルワーズの時の失敗より、島での脱出戦での失敗が一番精神的に来たらしい。

――どうやってはげませばいいのだろう。

そういつて相談したらサブレは、

「しらない」

と冷たく突き放してくれた。

むしろ、清々しいとすら思える。

もう少しぐらい考えてほしいと相談すると、仕方なさそうに考えてくれて数分後に、

「分かんない」

という結論をだした。

めんどくさがりは昔から変わらない。全く考えてくれないどころか、脳裏に考えを巡らせるつもりもないらしい。

仕方ないので自分で考えたが、結局意見を出せなかった。

俺は自分の決意を述べ、シノを火星に返すために色々準備をしているところに元気のいいシノが現れた。どうということがあったのか分からないが、どうやらサブレが何か対策を講じたらしい。

「これからお前を守ってやるよ」

右頬から鼻まで傷が残っており、ピアスも一新している。周囲にムードメーカーになろうとするシノに俺はどこか安心してしまう。

そうだ、この楽天的な性格がシノなんだ。周囲に安心感を与えてくれるシノがいてくれてよかった。肝心のシノは昭弘の親戚である明楽・アルトランドとは仲良くしているらしい。二人が仲良く騒いでいると、サブレが忌々しそうに表情を曇らせ毒づく。サブレは小さな舌打ちをしながら二人が仲良く騒いでいる姿をしり目に俺はサブレの元に歩いていく。隣に一緒に並んで立っていると俺は不意に思い出す。

俺が目覚めたとき、サブレの寝室で『鉄華団の最終報告書』と書かれたデータをタブレットから見つけてしまった。最初から最後まで見た後に俺は全身から汗を吹き出し、呼吸が乱れ過呼吸に陥ると、汗と涙と鼻水がちよつとした水たまりを作る。

とたん、ドアが開く音と共にサブレが入ってくる。「やってしまった」という表情で立ち尽くす、俺はそのまま駆け出し立つ激するようサブレの体を何度も叩いた。

「なんで!?!」とか「どうして!?!」とか「助けてくれなかったの!!」という訳の分からない理不尽な叫び声をあげている俺をサブレは何も声を発することなくただ殴られていた。

それからの数日間の俺はひどいものだった。眠って夢を見ればみんなの死ぬ夢を見るし、それを恐れ不眠症に陥ると見る見るうちに食欲もわいてこなかった。それに見かねたのは弟であるサブレだった。

パツンという音と共に俺は驚きと後ろに軽く飛ぶ。尻餅をつく俺はそこでようやくやくひっぱたかれたと認識できた。ジンジン痛む左頬と真つ赤なサブレの右手のひらが俺の思考をまとめるのに時間がかかる。

「な、なにを……!?!」

サブレは俺の襟首をつかんで俺にはつきり聞き取れるように言葉を発した。

「いい加減にしろよ。ふてくされて、辛そうな表情で、死にそうな面しながら何もしないことが今兄さんがするべきことなのか?」

そんなサブレの言葉に俺は憤りを覚え、サブレを押し倒してそのまま殴ろうと右こぶしを上げる。

「なんだよ!?!サブレに何が分かるの!?!オルガを!三日月を!昭弘を!みんなを失った俺の気持ちサブレに分かるの!?!分かるんだったら言ってみろよ!!」

涙を流し情けない表情で叫ぶ言葉をサブレにストレートにぶつける。サブレは少しだけ間を開けると、体を起こし俺の額に自分の額を軽くぶつける。ゴツンという音と共にサブレの表情がまじかに見えてくる。俺の眼前にサブレの無表情が見えてくる。

「昔……こうやって母さんに額をぶつけられたことがあったな。その時の言葉を覚えてる?」「私達やサヴァランや大切な友達がいなくなつた時……自分の隣に兄弟がいることを忘れないでね。あなた達は二人で一つなのだから。もし、何かを見失いそうになった時、何かを失った時、ビスケットはサブレを、サブレはビスケットを頼りなさい。あなた達は双子の兄弟なのだから」って」

俺はそれを覚えている。母さんが事故で亡くなる一週間前のことだった。それを俺は今の今まで忘れていた。いや、違う、忘れていたわけじゃない。思い出そうとしなかったんだ。母さんと父さんが死んだとき、死んだことがショックで俺はそのことを今の今まで忘れようと努力して記憶の片隅に押しやったのだ。

今こそその言葉が本当の意味で力になるときだ。何のために生き、何と共に生きてきたのか……、今の俺はそれを見失っている。目の前

にあるサブレの表情を、視線にまつすぐ答える。

みんなを失った俺はみんなと向き合う事を恐れるように、逃げるように生きている。死に向かつて生きている。

——ふざけんな！

みんなからそんな風に叫ばれそう。俺は今生きている。みんなの代わりに生きるというのも何か違う。今日から、今から俺は自分の為に生きなくちやいけないんだ。

やっと笑顔になれる気がする

そうだ……俺は——みんなの事を忘れないために生きていこう。

<4>

走り出して一時間後には息を整えるために小さな木の木陰でペットボトルに入ったスポーツドリンクを口に含んで口内を潤し、体に活力を取り戻させる。休んでいる間に体に体力が戻っていくのを感じて、体中に気持ちのいい汗をタオルで拭いていく。気が付けば空は先ほどより明るくなっていく。

空を見上げると青空が見える。

この空も人工のドームに映し出された映像に過ぎないが、こうしてみると本物の空に見えてしまう。

このアルンは地球圏では最大規模の都市になるが、それ故にそこで使われる技術は厄祭以前の技術も含まれている。宇宙港自体も厄祭以前に存在したものをそのまま修理し使われた。お陰でこのアルンに停泊しているEDMの戦艦は50隻を超える。

俺達が使っている戦艦に搭載されているエイハブリアクターと連結されている『パーティクルドライブ』は厄祭戦以前には存在しなかった技術で使われている。

<5>

パーティクルドライブ——エイハブリアクターと連結することで本来の出力を上げ、違う兵器を開発できた。ビーム兵器。パーティクルドライブが作り出すビーム兵器はただの熱線兵器ではない。

元々エイハブリアクターとナノラミネートアーマーに熱線兵器は通用しない。ナノラミネートアーマーは熱を拡散させることができる上に、エイハブリアクターを壊すことはできない。ただし……：パーテイクルドライブはその常識を打ち砕く事が出来た。

ラスタル・エリオンが生きていたころ、マハラジャと共に共同で開発したこのドライブは本来の目的としてエイハブリアクターでは出せない出力を出すことを目的としていたのだが、これがほかの副産物を作り出すことになった。それがビーム兵器だった。

パーテイクルドライブが作るビーム兵器は拡散することが無く、貫通能力と切断能力を底上げしたのがパーテイクルドライブだった。つまり、ナノラミネートアーマーでも防げないほどの高出力の熱線兵器を作ることができる。そして同時に、推進剤を必要としない機体を作ることができる。それが、EDMの量産型機である『ジム』だった。

ジム——無個性なほどの単純な角張ったデザインに頭部のモニターはGoogle型が採用された。コックピットは360度全方位モニターが採用され、システムの最適化と進化が促された。それに伴い三機のガンダムフレームも同じような改良案が出された。そして、同時に進められたプロジェクトが『ネオ・ガンダムフレーム・プロジェクト』だった。

しかし、このネオ・ガンダム・フレーム・プロジェクトは全く進んでいない。

単純な連結と違い、最初から一体化されているエイハブリアクターとパーテイクルドライブを2つ同時に並列動作させることが難しかったのと、肝心のエンジンが開発されたのにも関わらず、フレームの1からの開発に難航したためであった。

そんなプロジェクトの裏でグシオンとフラウロスはスムーズに進み、数か月前にはロールアウトになった。しかし、バルバトスは違った。

「違うーもっとスピードがほしいんだー！」

サブレのその一言が開発を難航させていた。

<6>

マンションへの帰り道の途中に自身のスマートフォンにメッセー  
ジが届いた。否、メッセーじではなく指令書である。

『本日0900にガンダムバルバトスリファインの回収任務を行うた  
め軍港から出立すること。ただし、ノルバ・シノは別任務中である為  
に参加不可とする。パイロットはノルバ・シノとサブレ・グリフォン  
を除いたメンバーで行う事。追記：周囲にギヤラルホルンと思わしき  
艦隊が数隻不可侵条約を無視する形で目撃されているため気を付け  
ること』

ギヤラルホルンは宇宙に上がることを条約で禁止されている。そ  
れを破ってまで近くにいる理由が分からない。

ラスタルが一年前に亡くなって以降、ギヤラルホルンは軍事力と支  
配力の速度に拍車をかけて拡大させていった。各経済圏はその支配  
体制に逆らうことができずにいた。

現在の代表である。ロロ・デブリンは軍事力を拡大させることをラ  
スタル生前の頃より唱えており、ラスタルが死んだことをいいことに  
軍事力の拡大と、それに反対する者を遠ざけようとするなど、本格的  
な軍人気質だと思わせる人間だ。

最近ではガエリオ・ボードウインがそんな状況の中でラスタルの遺  
志を残すことを目指して前線に戻って来たらしい。ジュリエッタ・  
ジュリスを伴って前線に姿を現している。しかし、そんな彼らもある  
人物の下についているらしい。確か『エヴォ・エクス』とかいう名前  
の顔を全部隠した仮面を付けた変わった男らしい。

噂ではいつからギヤラルホルンにいるのか分からないとか。

俺はそんなことを考えながら足をそのままマンションに進めてい  
く。

<7>

エイハブリアクターとパーテイクルドライブを搭載した最新式の  
戦艦で、その姿形はほかに似ている戦艦を探すが不可能なほど  
だ。全体的に横に広くモビルスーツの格納数は最大で十機。階層は  
そこまで大きくなく、ブリッジは戦闘時に収納されるようになってい  
る。カタパルトデッキは左右に出ており、まっすぐ伸びたカタパルト

デッキは従来のうつ伏せ状態での射出式ではなく、スキー状態での射出式に変更された。それ以外にも主砲は高出力のビーム兵器に変更し、地球圏での運用も前提されており、単体での大気圏突破と大気圏離脱が想定されている。

外から見るとやはり今までの戦艦とは違うことが把握できる。俺の所属する『フロントムブラット隊』の唯一の戦艦であるユグドラシル級三番艦『ヴァルハラ』がその白いカラーリングが周囲の明かりが反射しているように見える。

ヴァルハラは中央に向けてまっすぐ伸びた連絡路を通り、エレベーターでブリッジまで移動していく。ブリッジのドアが自動で開くと艦長席を中心に後ろに二つほどCIC席が設けられており、前には操舵兼砲撃手席しか存在しない。

CIC席に座っているうちの赤い左側に寄せたサイドポニーテールの女性である『メアリー・シュシュ』が俺に向けて怒鳴り声を上げた。

「ちよつとー艦長が遅れるってどういふことですか!？」

俺は完全にひるんでしまい、苦笑いを浮かべながら艦長席に急ぐ。艦長席に飛び座ると、反対側に座っていた妹である『イオリ・シュシュ』が右側に寄せた赤いサイドポニーテールを振りながら姉のメアリーをなだめる。

この姉妹は顔だちは似ていて小顔で目は丸く、口も小さいうえ鼻も低い。この姉妹を見分けるコツは胸だ。姉のメアリーを悪く言えば胸が小さく、妹のイオリは大きい。互いに小柄であることは違いないが、メアリーは運動神経がいいがその反面性格的に勝気で妹に対して過剰なほどの過保護な一面を持っていたりする。妹であるイオリは運動はあまり得意ではない反面優しく、包容力がある。

そんな会話を無言でかつ無表情で聞いているのは一瞬レスラーかと疑うほどに体格のいいごっこつした顔をしている『ノノメ・レイデン』だ。

そして俺、ビスケットを入れて全部で四人で運用している。基本は最低限の機能を機械がオートで行うため、そこまでの人数を必要とし

ない。しかし、それ以外にはかなりの人数を要する。

俺はそれを確認するため姉ではなく妹であるイオリに視線を向けて問う。

「イオリ、他のメンバーは全員そろってる？」

「は、はい。あとは出発するだけです」

俺は艦長帽をかぶり直し、全身真っ白な制服に黒のネクタイを付けた服を今一度確認し、不備が無いことを確認する。CIC席に座るメアリーが赤い制服をなびかせ怒鳴ってくるのを俺は右から左へと聞き流しつつ、レイデンに出発の合図を送る。

「出発進行！」

レイデンは無言でうなずき、ヴァルハラを少しずつ上へと上昇させていく。上部ハッチが開くとそこには一面の星々が輝いていた。

「目的地廃棄コロニー！前進微速！」

ヴァルハラは少しずつ出力を上げていくとまっすぐと廃棄コロニーへと向けて進んで行く。

<8>

月面都市アルンより高速戦艦でも3時間かかる場所に廃棄コロニーがデブリに囲まれるように存在していた。デブリを外から眺めてもコロニーの存在感は隠せまい。実際、ガンダムバルバトスの全方位モニターに映るコロニーの存在感と言ったらない。

戦艦の残骸のようなデブリを強くけり、その瞬間にサブレは足元のペダルを強く踏みつけ、同時にバルバトスの背中のブースターが強く火を噴き少しだけ速度を上げる。

しかし、その反面俺の求める速度にならないことにいらつく。

実際、バルバトスリファインの速度は従来のモビルスーツが出せる速度のある意味限界のように思えた。単発な速度や回避や小回りを見ても今までのモビルスーツやガンダムフレームで最大の物に思える。

でも、俺の思い描く速度にはならなかった。

パイロットスーツの中が湿ってくると短い癖のある茶髪の前髪に汗が滲んで視界の邪魔になりつつある。



俺は周囲への警戒を、速度を緩めずに一回首を振り汗を弾く。弾かれた汗はゆつくりと周囲に飛び散り、大破したモビルスーツにぶつかりそうになる直後にバルバトスの左腰に備え付けられた白い長細い筒を取り出し、ブウンという音を奏で熱線事ビームが円状に伸びる。バルバトスの首から腰までの長さの通称『ビームサーベル』を取り出し、モビルスーツの体を左腕から右腕にかけて斜めに切り裂いた。その間も速度を決して緩めず、さらに速度を上げていく。

周囲に移るデブリの流れる景色はもはや流星のように流れている。俺の目の前の小さな画面には速度に対する警告が現れる。これ以上速度を出せないようにシステムのなロックが掛けられており、そればかりは俺でも外すことができない。

ビームサーベルで次々とモビルスーツを切り裂いていき、戦艦を蹴って回避しながら速度を緩めないように走り切る。

デブリのを脱した瞬間に全方位モニターの端に移るタイマーを確認すると、目標タイムをぎりぎりのところで守られていた。

一息つき、パイロットスーツのヘルメットを脱ぎ足元に置く、途端周囲が静かになったような錯覚すら覚える。モニターに映る星々や存在感の多い月や地球を眺めると、俺は自分という存在がちっぽけなものに思える。

「地球って……小さいよな」

ヘルメットに映る俺自身の顔を見る。

兄と違い目つきが悪く釣り目で短い鼻、癖のある短めの茶髪がバイザーに写る。

バルバトスはゆつくりと廃棄コロニーへと戻っていく。

<9>

コロニーの側面にモビルスーツが一機ほどがギリギリ通れるほどの隙間を通り、バルバトスはコロニー内の格納庫の中へと仰向けの状態で倒れる。

眼鏡をかけたEDMの整備・開発チーム担当の制服である黒の上に白衣を懸けた女性がサブレの目の前に立ち不がるようにクールに立ちふさがる。ガーターベルトの存在感や短めの白髪、しわの無いつや

のある細めの顔、少しだけ上を向いた目などのすべてがクールに見せる。

そんな開発チームの所長である『ソニア・ペルジン』は微笑むでもなく、怒るでもないようなある意味無表情に近いシニカルな微笑み方をする。

サブレは一瞬後ろに後ずさり、逃げ出そうとする。

ソニアはカツカツと足音を立てながらサブレとの間を数センチでとどめながら立ち尽くす。

「で？どうだったかしら？これ以上の速度を求めてもいいけど、それじゃあバックバック変更方式の意味がないけど？」

「いいよ……納得する」

胸の谷間を見ないように視線を外へとふらつかせ、脳の思考を無理矢理バルバトスの方へと向ける最中、ようやくの思いでソニアはサブレの右隣を通り過ぎ、バルバトスの前へと歩んでいく。

ソニアとの無意味なドギマギをやり過ぎ、一気に眠気が襲うとサブレの意識は奥の仮眠室で途切れてしまった。

<10>

ドカン！

そんな大きな音と共にサブレの思考をたたき起こし、すぐに異常事態だと認識させた。手元の腕時計を確認する。先ほどから四時間が経っていた。本来のスケジュールによれば今ヴァルハラがガンダムバルバトスと開発チームの回収に訪れているはずだ。

仮眠室のベツトから飛び降り、廊下に飛び出る。遠くの視界に燃え盛るビル群にギャラルホルン製のグレイズシリーズの最新型である『グレイズオーレス』が緑色の体に角張ったデザインにビームライフルを放ちながらコロニー中を燃やしていく。

俺は格納庫の奥へと足を進めていくと、開発チームが撤退の準備を終えていた。本来ならパイロットスーツに着替えなければならないのだが、そんな余裕がない俺はEDMの緑色の制服のまま飛び乗る。座席が俺の重さを確認すると自動で座席がコックピットの中へと沈んでいく。その間に足元から小さなモニターが姿を現し、視界の邪魔

にならない位置で停止する。

機体の起動画面の確認と異常状態の確認作業を進めると、モニターの一部にソニアのクールな表情が写る。

「現在、コロニー内にグレイズオーレスが三機、外に五機と、指揮官用レギンレイズオウガスが二機。あなたはコロニー内のモビルスーツを頼んだわよ。私達はヴァルハラに避難させてもらおうわ」

「了解。兄貴にマルチスタイルの射出を頼むって伝えてくれ」

ソニアは「了解よ」と答え似合わない慌てぶりを披露して通信を切る。

小さなモニターに英語でガンダムの名が浮かび上がる。

『ガンダムバルバトス・リファイン』

バルバトスの右足を地面につき、左足も同じようにつく。右腕で機体を支えながら起き上がる。強引に格納庫の屋根を破壊しながら起き上がる。

メキメキという音を立てながらバルバトスは格納庫を壊しながら立ち上がり、コックピット内のモニターに燃える廃墟の都市部が写る。

バルバトスは新たな主を得、新たな力をふるおうとしていた。

———  
行こう！バルバトス！！

## アース・ガイドⅡ

<11>

廃棄コロニーに到着するまであと三十分ほどというタイミングでビスケットとメアリーとイオリは他愛のない話で盛り上がっていた。しかし、その中に一人だけブリッジ要因ではない人物が話に交じっているという点は無視できない。

黒いぼさぼさの短めの髪と童顔、小柄の体は二十代というより十代に見てしまう。

明楽・アルトランドは地べたに座り込みケタケタと笑いながら話し合いに興じていると、ビスケットは長年の疑問を三人に向けて尋ねた。

「そういえば、俺が生き返った時のことを知らないんだけど……どうい話合って俺を回収したの？」

三人は脳内の記憶をかき集める事にフル動員して思い出すと、代表してしゃべり出したのは明楽だった。

「たしか……サブレ先輩と一緒に諸島を根城にしている海賊を狩った後に代表から蒔苗とかいうオジサンと接触して遺体を回収して来いっていわれて……」

いまいち容量を得ない説明だったが、ビスケットは自分なりの解釈を加えるとおおよその話の大筋を立てた。

マハラジャは前から蒔苗東吾ノ介から自身のエドモントンまでの護衛を依頼されていたが、マハラジャはギャラルホルンともめるつもりは無く依頼を正式に断った。しかし、そんな蒔苗は別に鉄華団に依頼を出したが、島での脱出戦の際にビスケット・グリフォンが戦死した。その時、蒔苗はEDMにサブレ・グリフォンと呼ばれる人物がいることを思い出し、マハラジャにモビルワーカーを購入するためEDMに通信を掛けるとマハラジャはビスケット・グリフォンの遺体の引き取りを交換条件にモビルワーカーを与えるということになった。鉄華団の団長であるオルガ・イツカがこの話を知っていたかどうかは知らないが、少なくともメリビット・ステープルトンとクーデリア・

藍那・バーンスタインは知っていたそうだ。実際明楽は二人と接点を持つたらしい。その後、EDMは前々から行いたかった蘇生治療の実験体を求めていたらしく、その実験体にビスケット・グリフオンが選ばれた。そして10%以下の確率で成功したというわけだった。

そこまでの話を脳内に整理するのに軽く20分が経っていた。メアリーは明楽の足りない説明に怒り心頭に突っかかる。

「あんなね！そんだけの説明にどんだけ時間がかかるのよ！」

「説明しなかった人に言われたくないんだけど……」

「なんか言った!？」

メアリーのドスのきいた声と軽い殺意に満ちた睨みに完全に睨んでいると、イオリは微笑みながら二人のやり取りを見守っていた。ビスケットもクスクス笑っていると眼前に廃棄コロニーが見えてくる。イオリは目の前の通信端末を通じてコロニー側との交信をしていると、船はゆつくりと停泊の為にドッグへとバックで入っていくが、それを阻止するように船体が大きく横に揺れた。ビスケットは両手を艦長席にがちりつかんで体を支えると、先ほどまで怒鳴っていたメアリーが索敵を行う。そしてすぐにその正体が割れた。

「敵影キヤッチ。スキップジャック級が二隻が大型デブリに隠れるように停泊しています」

「警戒態勢。全モビルスーツ出撃、船はこのままコロニー内に入って開発チームの回収に入って」

明楽はほぼ同時にブリッジから出ていった。

<12>

スキップジャック級が廃棄コロニーに張り込んだのはここ数日の事だった。実際彼らはギヤラルホルン司令部からの指示を受けEDMの最新鋭機であるガンダムバルバトスの奪取を命令されていた。ちよび髭と強い癖毛が特徴の小柄な中年男性は艦長席に立ち偉そうに怒鳴り散らしていた。男の目の前の画面に映っている金髪の変顔の男はこれまた偉そうにしながら話を受けていた。

「分かっているな!?!失敗はありえんぞ！エドガー！貴様にモビルスーツの指揮を任せる！何としてもガンダムバルバトスを奪取するの

だ！あれは本来なら我々が使うはずだった機体なのだ！」

そんな訳の分からない言い訳じみたセリフをエドガーと言われた男の後ろで聞いていたごっつい顔にでっかい鼻、盛り上がった筋肉が特徴の大男は後ろで苦虫を潰したような表情でイライラしながら話を聞いていた。

ギャラルホルンは変わってしまった。

一年前、エドモントンでの細かい条約の締結に珍しくクーデリア・藍那・バーンスタインを仲介に呼んだ締結を結んだ直後、クーデリアの目の前でラスタルは銃撃され、殺されてしまった。

その後、EDMとギャラルホルンの調査が終わったのは事件の一个月後だった。そして、意外な組織の名前が挙がった——テイワズだった。

その前後にテイワズが拠点として使用している歳星はすぐに姿を消し、クーデリアですら接触ができないような状況が続いていた。実際この一年一切姿を見せようとしなかった。

エドガーは通信を切ると、後ろを振り向き大男に向けて怒鳴り声を上げた。

「イヴァン！すぐに用意しろ！」

イヴァンはエドガーの後ろについていきながら変わり果てたギャラルホルンの内情に内心ショックを受ける反面すでに慣れている自分がいる。

EDMは元々元ギャラルホルンのメンバーだったマハラジャ・ダースリンがギャラルホルンを辞めたのちにかつての部下達を連れて経済防衛機構を立ち上げた。

当初セブンスターズはこれの討伐に部隊を動かした、クジヤン家が代表でEDMに部隊を送ったが、当時のクジヤン家当主の戦死と部隊の全滅に終わり、後続の部隊を派遣しようとした際にラスタル・エリオンがセブンスターズに呼びかけてこれを押さえた。

「これ以上部隊を動かせば、両者共倒れこそ起きないが、地球圏の秩序が乱れるだけだ」

その鶴の一声でギャラルホルンはEDMがギャラルホルンに手を

出そうとしない限りこちらも手を出さないという条件で組織を黙認することにした。

それ以降小さないざこざを起こさないようにEDMはギャラルホルンの代わりに各所の防衛や海賊などの外法狩りを仕事として行うこととした。

それはマクギリス・ファリド事件以降も変わらなかった。しかし、それもラスタル・エリオンが暗殺されて以降、ギャラルホルンは軍事をすさまじい勢いで拡大させる一方で各経済圏への圧力を強め、イヴァンのように旧ラスタル派の中でも平和路線に切り替えた際についてきたような者は降格させていた。実際ガエリオ・ボードウィンも降格した。

イヴァンは元々二佐だったが、新代表に反対した結果二尉まで降格された。

そんなイヴァンに抵抗などできるわけがなく、彼も命令されるままに緑色の量産機であるグレイズオーレスに乗り込んだ。

<13>

様々な思惑を考えに巡らせながらそれでも目の前にやって来た久々な敵の存在に明楽の思考の答えはシンプルなものだった。

『敵なら倒す』

それだけだった。それしかなく、それ以上のことはきつと周囲の間が考えるだろう。今の自分がするべきことは、やって来た脅威と戦うしかない。それ以外の事は戦闘の邪魔になる。

ビスケットの指示に対してすぐに格納庫ではフロントムブラット隊の整備長であり、ビスケットやサブレと同じく幹部の一人、ガタイのいい肩幅の広い体と黄色人種の特徴である肌色。黒い髪とヒゲ、大きな鼻とは別に優しそうな目つきをしたゼム・ロックはすぐに各モビルスーツの発射体制を整えるべく周囲に激を飛ばす。

「おめえらー！まずジムを出すぞ！そのあとグシオンだ！」

その十分後にはすぐにジムのパイロット達が自分達のモビルスーツに乗り込み、さらに十分後に明楽が小さな体で格納庫最上段の柵を蹴ってグシオンに乗り込むべく近づいていく。もちろんその頃には

ゼム・ロツク達整備班もノーマルスーツに着替えており、ゼム・ロツクはグシオンのコックピット前で明楽を待っていた。

茶色いグシオンの体は昔と変わっていないとビスケットは言っていたし、シノに関してはむしろフォルムはさらに大きくごついものに変わり、背中についていたサブアームは同じようにバックパックに隠されつつ、さらに大型のツインバスターライフルを背負っている。もちろん武装は両手にバスターライフル二丁にビームサーベルを二つ、ビームハルバートが特徴的である斧部と鉤部をヘッドの左右に先端には槍部を備えているが、それらのすべてからビームサーベルのように熱線で切る、貫くようにできているハルバートを背中に背負って存在していた。

飛んできた明楽の体をゼムは左手で受け止め、そのままコックピット前で明楽は両足を地につける。ゼムが明楽の背中を強く叩くと明楽はそのまま座席に座り込み、そのままコックピットの奥へと姿を消した。奥へと進んで行く中ゼムの声が聞こえた。

コックピット内は薄暗かったが、次第に鮮明な映像を映し始め足元から小さなモニターが姿を現す。

『ガンダムグシオン・リベイク・リファイン』

そう書かれた文字と共に機体の大まかな全体図のような映像が同時に姿を現し、文字だけが姿を消すと、機体は完全な意味で起動する。

起動したと判断すると、グシオンを自動でカタパルトまで移動させていく。グシオンの体はゆっくりと左側にあるカタパルトデッキとを隔てるドアが開き潜ってそのままカタパルトデッキとのドアは静かに閉まる。足場を固定し腰を低くするとグシオンの射出態勢が整う、左側に寄せたポニーテイルがピコピコ動かしながらメアリーが隣に姿を現した。

「現在ジム七機のうち三機が船やコロニーの防衛、ほか四機がギャラルホルン製モビルスーツであるグレイズ機計二十機ほどを相手にしています。圧倒的に不利です。グシオンは一機でも多くのグレイズを落としてください」

「了解。グシオンリベイクリファイン。明楽・アルトランド、出る」



強くは無いが、しかしはつきりとした声を発すると同時に、明楽は足元にあるペダルを強く踏むと、グシオンの背中にあるブースターが火を噴いて勢いよく射出された。

船から離れるとグシオンは背中ของバスターライフルを敵モビルスーツ群に向けて放つ、大きな二つの熱線が約5、6機ほどのモビルスーツを一気に薙ぎ払う。そして、すぐにハルバートに武器を切り替えるとそのまま突っ込んでいくと、グレイズの体を横なぎに切り払い、速度を緩めずに七機のモビルスーツへ向けて突っ込んでいく。

そんな姿をブリッジで確認していると、三機のモビルスーツが別の出入り口から中に入っていく。それとすれ違いに開発チームが船の中に入ってくる。

誰かを援護に向かわせないかとビスケットが考えるが、今の状況で下手に戦力を割けば全滅しかねないと判断し、サブレに任せるしかない。

<14>

コロニー内に侵入したモビルスーツのパイロットは起き上がったガンダムバルバトスの姿に目的を思い出す。しかし、同時にその困難さに直面する。起き上がったということは既にパイロットが乗っていると考えなくてはならないだろう。

グレイズの右足を前に出すと、同時に一機のグレイズがバルバトスへとビームライフルでの攻撃を仕掛ける。

「指示無しで攻撃するんじゃないー!」

しかし、ビームライフルをバルバトスは大きくジャンプしてグレイズ三機を飛び越える。バルバトスの機動力に舌を巻きつつ、グレイズのパイロットはバルバトスの武装の貧相さに着目した。見たところまともな武器を装備していないように思える。そう考え、周囲に指示を出す。

「回り込め、敵はまともな武器を装備していない!」

他のグレイズがホバーで機体を滑らかに移動しながらバルバトスを囲んでしまう。バルバトスは腰からビームサーベルを二本取り出し、中腰になりサーベルを斜め上に向けて構え、グレイズはライフル

をバルバトスに向ける。

「相手はサーベルだけだ！距離を取りつつライフルで倒せ！」

二機のグレイズが左右から挟み込み、バルバトスめがけてライフルの引き金を引くとバルバトスは前に飛び左側のグレイズへ斬りかかろうとするが、モビルスーツ小隊の司令塔の指揮官のグレイズがバルバトスの進路にライフルの引き金を引き、バルバトスは当たるギリギリで回避するため横に飛ぶ。

「お前たち！距離を取れ！」

バルバトスは今度は距離を取ろうとするバルバトスは少しずつ距離を取ろうとするが、グレイズはそれを追いかけて囲んだまま移動するが、バルバトスはドッグに近い場所まで移動すると、ふと足を止めた。

「こんなところでなにを……!?!」

バルバトスの後方の地面が火を噴き大きな穴が開き、指揮官の視線の先には大きな穴の先でヴァルハラが主砲を穴に向けている姿を確認できた。

<15>

「マルチスタイル射出！」

ビスケットの叫び声、と共に左カタパルトデッキに赤と黒をモチーフとしたシンプルな四つのブースターに赤と白色の対ビーム耐性シールドと黒いビームライフルが左右に装着している。

マルチスタイルと言われたバックパックがバルバトスの背中に向けて射出すると、マルチスタイルはコロニーに空いた穴から流れ出る空気の流れに逆らうスラストターは一寸も変更なくバルバトスの背中に向けて突き進んでいく。

強く突き進むマルチスタイルは大きな衝撃と共にバルバトスの背中にドッキングした。マルチスタイルにくっついていたシールドは左手にライフルは右腕に持ち中央のグレイズのコックピットに向けてライフルの引き金を引いた。

「この風の中で照準が狂う中当ててしまうとは……!?!」

バルバトスのビームライフルはまっすぐとグレイズのコックピット

トに直撃すると、バルバトスは指揮官ともう一方のグレイズめがけてライフルの引き金を引く。しかし、両者のグレイズは左右に移動して攻撃を回避するとサブレは小さな舌打ちを打ち毒づく。

「この風の中じゃ、まともに当たらん……このまま外に出るしかないな」

バルバトスは踏ん張る足を地面から離して、コロニーの外に向けて吹っ飛んでいく。二機のグレイズも追いかけるように空気の流れに乗って外へと出ていく。指揮官のグレイズはバルバトスへ向けてライフルの引き金を引き、攻撃を当てようとするが、バルバトスはそれをシールドで受け止める。シールドはビームに耐え弾く。

「バカな!? ナノラミネートアーマーすら貫通させることができるのに……」

後ろに吹っ飛んでいきながらバルバトスは指揮官のグレイズに向けてライフルの引き金を引いた。射出されたビームは指揮官に向けてまっすぐ伸びていき、空気の流れから逃げることでできないグレイズのコックピットを焼き貫く。最後のグレイズは何とか態勢を整えるが、ヴァルハラの主砲がグレイズの両足を吹き飛ばし、その隙にバルバトスがコックピットごとサーベルで横に切り払う。

「船をこのままコロニーの反対側へ」

ヴァルハラはそのままコロニーの反対側へ向けて船を移動していくと、サブレはバルバトスをコロニーのドッグめがけて突き進む。グシオン達が戦う場所へと向かって。

< 16 >

「何をしているか!?!」

旗艦で偉そうにふんぞり返る艦長の男は憤慨しながらモデルスーツ隊の惨状に怒りを覚えながら何度も何度も地団駄を踏みながら怒鳴り散らす。

バルバトスの回収に向かった小隊からの連絡も途絶え、目の前でこちらに攻撃を仕掛けていた敵の旗艦も姿を消した。それどころかモデルスーツ隊は敵のジムとグシオン相手にようやくの思いで押さえられている。

しかし、反撃できるほど追い詰めているわけでも無く、特にグシオンの方は七機も同時に相手取っており、艦長はイヴァンとエドガーは格納庫の中で出撃のタイミングを計っていた。

「イヴァン・エドガー！貴様たちも参加しろ！何を見ているか!!」

エドガーは涼しい顔をしながら答え、イヴァンは先ほどからイライラしながら話を聞いていた。

<17>

グシオンはハルバートを手に持ちグレイズに斬りかかる。グレイズはそれを後ろにのけぞりながら回避し、距離を取ろうと後ろに大きく飛ぶ。ライフルの攻撃を両手に持っていた小型のシールドで防いだグシオンはツインバスターライフルをグレイズに向けて放つが、それをグレイズ達に回避されてしまう。

「このままじゃ罫が明かない!」

ジム達もほかのグレイズ相手に戦っていて応援に来れそうにない。距離を詰め、グシオンは再び距離を詰め、ハルバートを振り下ろす。グレイズはそれをビームアックスで受け止めている間にグシオンの背中目掛けてグレイズがライフルをかまる。引き金が惹かれようとしたその瞬間にバルバトスのライフルによる攻撃がグレイズのライフルに直撃した。

「何手間取っているんだ明楽!」

明楽の目の前にサブレがパイロットスーツを着ないで姿を現したことにツツコミを入れようかと悩んでいると、左右からグレイズが挟み込むように突っ込んできた。

「パイロットスーツを着ていないことに突っ込んでもいいですか!」

「そんなことより戦え!」

バルバトスが戦いに割って入ろうとするがそれをライフルの攻撃が阻止した。バルバトスの頭上より赤いレギンレイズと青いグレイズが姿を現した。

「あれがギヤラルホルンの指揮官か……?」

赤いレギンレイズに乗っていたエドガーはバルバトスへ向けてライフルを向け、青いグレイズに乗るイヴァンはビームアックスを持ち

ながら両機はバルバトスへ向けて、戦いを挑む。

赤いレギンレイズはビームサーベルでバルバトスに斬りかかり、イヴァンはそれを後ろから援護する。バルバトスは四つのスラストの角度を使い分け細かく回避し続けていく、ビームサーベルで反撃しようとするが、それをグレイズが的確に、かつ邪魔にならないようにライフルで援護する。

「赤い奴より青い奴の方が強くないか？」

戦いを繰り返しているとスキップジャック級のCIC席に座る若い男は後方からの反応に気が付いた。

「艦長！後方より敵艦！」

「何!？」

ヴァルハラは迂回しながらスキップジャック級の後方を取った。主砲と副砲を全開にしながら一斉放射する。

「全砲門一斉発射！」

二つのスキップジャック級のエンジン部分周辺にあたり、両者は左右に艦を離れていき、ヴァルハラはその間を突き進もうとする。そして、突き進みながらヴァルハラはもう一度主砲で攻撃を仕掛ける。主砲の一つが向くのは偉そうにふんぞり返っていた男の乗るブリッジだった。

「回避!!回避!!!」

そんな光景を圧倒されながら立ち止まったエドガーの乗る赤いレギンレイズ目掛けてバルバトスはサーベルを抜いて突き進む、イヴァンはそれをライフルで牽制しようとするが、しかし、バルバトスはそれをうまく回避しながらレギンレイズのコックピットに向けてサーベルを伸ばし、縦から斬り下ろし、そのままの勢いでヴァルハラの進路上に向かう。

グシオンやジム達も同じように進路上に集まると、全員はヴァルハラにつかまって前線を離れていった。

「イヴァン二尉！どうなさいますか？」

「一度撤退する。どうやらエクス准将に報告する必要があるようだ」  
顔を不快に歪ませつつギャラルホルンは追撃をあきらめるしか

な  
っ  
た。  
。

## アース・ガイドⅢ

<18>

ファントムブラット隊の旗艦であるヴァルハラがギャラルホルンの艦隊相手に大立ち回りを廃棄コロニー一帯で演じたのは十分ほど前になる。すでにギャラルホルンの機影や艦艇の影がレーダーに映らないことを確認すると、ビスケットは警戒態勢を一段階下に落とした。

イオリは姉であるメアリーに任して彼女も休憩がてらヴァルハラのどこかへと姿を消した。ビスケットも船の操縦などをメイデンに任せて自身の部屋に向かおうとしたとき、休憩室前で眩暈がビスケットを襲った。

「こ、こんな……………時に」

「隊長ー!」

誰かの声が聞こえた気がした。

<19>

倒れてから何分が経ったか分からないが、何やら後頭部に柔らかい何かがあるのがはつきりと理解でき、うつすらと目を開けると視界にイオリの優しい笑顔が見えてきた。

そこでようやくはつきりと自分がイオリに膝枕されていることに気が付いた。

意識が覚醒し、羞恥に顔を赤らめて慌てながら飛び起きる。

「イ、イオリ!? ななな……………何で!?!」

イオリは微笑みを絶やさないようにしながら口を開いた。

「びっくりしましたよ。廊下を歩いていたら隊長が急に倒れるんですから。話には聞いていましたけど……………後遺症でしたっけ?」

「うん。蘇生治療の後遺症。仕事が終わったらというか……………緊張状態が切れたら意識が途切れることがあるんだよね」

申し訳なさそうに、そしてどこか笑顔で答えるとイオリは俺の顔を自身の谷間に押し付けるように抱きしめる。これが何を意味しているのかも理解できないまま、俺は顔を赤らめた。

「イ、イオリ!？」

「隊長はもうちよつと私達を頼ってもいいですよ」

イオリの声と共に休憩室の壁紙である森林のイメージに沿ったBGMが俺の耳に届く。

「隊長は優しくして思いやりがあつて、そしてすごく強い人です。でも、だからこそ頼ってほしいんです」

その言葉を耳に入れようと努力をするが、この体勢が俺の頭からあらゆる情報を抜き取ってしまう。

ダメだ、胸の柔らかさが――

「エロいですなく、お二人さん」

突然の声にイオリの意識は自分の胸部を向いてしまい、瞬間に表情を変えてしまう。顔が真っ赤に染まった後にあわあわと慌ててしまい、ソファから体を浮かせると飛ぶという表現が似合っているほどに飛び逃げていく。

俺は呆ける意識でソファを挟んだ先にいる人物に意識を向ける。

俺の双子の弟であるサブレはニヤニヤしながらテーブルから顔だけを出して笑っていた。俺も再び意識を覚醒させて頬を赤らめたあと、サブレに強烈な視線を向ける。

「いつから!？」

「最初っから」

へらへらと答えたサブレの表情に怒りを覚え、怒鳴りそうになる気持ちかを何とか抑えて息を整えた後に、もう一度視線をサブレの方に向けるとサブレは既にソファに座っており俺の方を見ないで首に耳当てが革でできている旧式のデザインであるサブレが愛用しているヘッドホンを首にかけ、ミュージックプレイヤーを操作している。サブレのヘッドホンからジャズ特有の独特な音楽が漏れて聞こえてくる。

「今の流行りはジャズ?この前までクラシックを聴いていたくせに」

ほんの数週間前までクラシックを聴いていて、その数か月前には大衆音楽であるPOPに手を付けていた。定期的に好みの音楽が変わるらしく、数か月から数週間の間に音楽が切り替わる。



俺は本を求めようとするが、今はそばにそれが無い。この数年で周囲の環境や状況は切り替わった。電子書籍がメインが今では昔ながらの一冊一冊の重さを持つ本が市場ではメインに変わりつつあり、音楽や電子機器もだいたい様変わりを遂げた。

そばにあの重みのある本が無いことが少しだけ寂しい。

ソファをさみしくなでると俺の鼻先に堅い何かがぶつかる。その何かはソファの上に落とされると、俺は鼻を押さえながらサブレの方を強烈ににらむ。サブレはどこ吹く風と音楽を楽しんでおり、俺は仕方なしにソファの上に落ちたそれに触れる。

本だ。分厚い表紙に葉代わりに赤い紐が付いている。赤い紐は俺が呼んだページに挟まっていて、俺はそれが自分が読んでいる本だと気づかされる。

そして、再び視線をサブレに向け尋ねようとするが……そこには、すでにサブレはいなかった。

<20>

音楽を楽しんでいると、廊下の先で黒髪の背の低い男である明楽を見つけた。冷汗をかきつつ、慌てながら一步一步下がりながら逃げ腰になっている。正面には怒りの表情のメアリーがいた。激怒の真っ赤に染まる顔面がメアリーの目つきをさらにひときわ上にあげているようにすら見える。

メアリーは右握り拳を構え、明楽の左頬に鋭く当てると、明楽の体を遥か後方に吹き飛ばす。

その一連の過程を廊下で見守った俺はメアリーに近づいていく。メアリーは怒りを抑えて俺の存在に気が付いてうえでサブレの方を向く。何かよく分からないが、多分泣いたイオリを見て誤解したとか、そういう話だろう。

メアリーは俺の方に近づくと要件を済ませるために業務的なセリフを吐いた。

「三十分後にオセアニアコロニーの『リアン』に向かい、EDM宛ての荷物を受け取る様に。帰還のルートは別に通知する。以上」

面倒な話になったな。

メアリーはすべきことを終えたのか、すっきりとした表情で再びブリッジへと帰って行った。俺は取り敢えず明楽の横腹に蹴りを入れてそのまま格納庫へと足を進める。

エレベーターで降りると、そのまま曲がることなくまっすぐ進んで行く。一番奥のドアを開けて奥に進むと、そこでは格納庫が多くのもビルスーツと整備班が大忙しで仕事の真っ最中だった。

俺は歩いてバルバトスの右肩へとよじ登り、右手をバルバトス頭部の左側面にそっと触れる。コックピットハッチ周辺では様々なコードが付いていて整備班の男達は俺には理解できない難しい言葉を繰り返しながらいじる。

俺の側にゼム・ロックが近づいてくると、俺の背中を強く叩く。

「おまえさんができることはなんもねえぞ」

「そういうわけじゃないけど……」

優しくなでもバルバトスの機械の体は反応しない。勿論右隣にいるグシオンも何も言わない。

俺はもう一度優しくなでやるとバルバトスの目が光ったような気がした。

<21>

リリアンは商業コロニーとしてはコロニー群の中で飛びぬけて高く、特に火星圏や木星圏からの輸入輸出が収入のほとんどである。

変わった建物も少なく、ビスケット・グリフォンが幼い時に過ごしたドルトコロニーに比べてもさほど大きな違いが見受けられない。実際俺が入った建物もドルトにもあるようなぼろいヒビが入った建物で、看板には『book store』と書かれていた。棚のいたるところには分厚い本や薄めの本まであらゆる本が飾られていて、俺はその中から三冊ほどの本を取り出し、懐に抱えるとそのままレジへと急ぐ。レジで呆けていたお婆さんは俺の本を受け取ると、素早くという言葉とは縁遠いゆっくりとした動きで会計を行う。

お婆さんの会計を終えて、俺は多少駆け足で外に出ていくと、出た先で俺は何かにぶつかり尻餅をつく。何とか本だけは落とさないようにとガツチリつかむ。

「すみません。前をよく見ていなかったもので……」

差し出される手をつかもうと右腕を伸ばし、その人の顔を見ようと視線を向ける。男？女？それが分からないのは目の前にいる人物が髪や表情まですべてを隠すほどの真つ白な仮面が付けていたからだ、頭部全部を隠した白銀の仮面。目の部分に斜めの隙間が付いているが、その隙間からは人物の目が見えない。

実際、俺はこの人物が男か女か判断できずにいたが、先ほどの言葉で彼が辛うじて男だろうと判断できた。

俺は差し出される手を受け取ると、そのままゆっくりと立ち上がる。立ち上がるその瞬間までも警戒の目を持ちつつ、感謝の弁を述べる。

「あ、ありがとうございます」

「いや、気にしなくていい。そもそも、私が注意していたら済んだ話なのだから」

そういつて男は人込みの多い通りの方に姿を消すと、俺は人込みをかき分けるように追いかける。しかし、男の姿を見付けられなかった。

<22>

俺の隣を歩いている明楽は殴られた頬をさすりながら一緒に荷物のあるコロニーのコンテナ置き場まで歩いていると、俺に向けて愚痴を絶やささない。常に「サブレ先輩はどう思います!？」なんて言われても困るという話だ。最も、その原因の一因は間違いなく俺の所為なのだが、だからと言っても謝ってやるつもりはない。そもそもはイオリが無意識のうちだったとはいえ兄を自分の谷間に押し付けたことが原因だったのだから。でも、そんなことは口にも出さないし、口に出せばこいつの性格上確実にメアリーに告げ口するため、俺と兄が間違いないく被害を受けるからだ。

「さっさと行くぞ」

俺は明楽の愚痴を聞き流しながら、宇宙港の人込みを避けながらコンテナ置き場への細い通路に入ろうとすると、視線の先に白銀の仮面を着けた人物が見えた。白銀の仮面の人物もこちらに気が付いたの

か、俺達の視線から外れてしまう。

気になりはしたが、追つても仕方がないことだし、そもそもそのままでする意味がない。

俺達は広く大きな空間に出ると、そこには多くのコンテナが山積みになっており、手元のタブレットを操作しながら俺たちは目的のコンテナを探すために右往左往する羽目になった。

あれでもない、これでもない。そんな言葉を吐きながら俺たちは一番奥であり端に捨てられるように置かれているコンテナを見つけた。

俺はタブレットとコンテナのキーを連動させつつ中に実際に入つて確かめる。実際に中に入るのは明楽の役目で、俺はちよくちよく中に入った明楽を閉じ込めては悲鳴を上げるのを楽しんでたが、三つ目のコンテナを開けた瞬間に俺達の視線はコンテナに入っていた《それ》に向いた。そろって声を発する。

「女!?!」

金髪でタマゴ型の顔つきと整った顔立ちは彼女が目覚めていなくても綺麗だと判断できる。背丈はそこまで高くなく、スタイルは良い方だろう。

スヤスヤと眠っている彼女を起こすことに気が引けてしまうが、しかしこのままにもできないので起こしたものでどうかと悩んでいるとむしろ彼女の方から目を覚ました。

「うにゅ?」

可愛らしい声を発して、目をこすりながら意識を俺達二人に向けてと彼女は微笑み返してくれる。

「おはようございます」

「お、おはようございます」

無意識で返してしまいが、そんなことが気にならないくらいに俺たちは彼女の存在に身を引いてしまった。彼女の瞳は綺麗なクリアブルーで顔立ちも綺麗、華麗という言葉がとても似合う。言葉使いもとても丁寧で、上品さと共に高貴さが見えてくる。

彼女はゆっくりと起き上がりまず明楽の顔を覗き込む。すると――

「若い顔立ちですね。そして、どこかおかしなことを考えていそうな顔立ちです」

明楽はショックを受けるとその場で膝をつきぶつぶつとつぶやき始める。今度は俺の顔を覗き込み、再び――

「綺麗な目。まっすぐな目ですね」

俺の手を握り笑顔を向ける。彼女の笑顔に一瞬ひるむと俺は視線を感じ、警戒を強める。コンテナ置き場の人が出入りする場所は一か所しかない。もちろんコンテナの出入り口はほかにあるが、今回視線を感じたのは俺たちが来た方向だったからだ。

まっすぐ視線を向け、出入り口を凝視すると視線はどこかへと消えてしまった。

彼女はとてもいい笑顔で最後の爆弾を投下した。

「私をあなた様達の代表に会わせてください。私はそのためにここに来ました。私の名前はクレア・ファン・フレイヤと申します」

<23>

白銀の仮面を着けた男はスマートフォンいじりながらメッセージを飛ばした。

『ターゲットをリリアンで発見』

その後すぐに別の人物から画面越しの通信を受け、彼は借りた部屋の一室に入るとそのまま大きな画面に通信を繋げた。

画面に出てきた男は初老の男で、年齢は六十代に見える。白髪としわしわの顔と共に鋭い目つきが彼の風格に威厳を与えてくれる。

「PN01、報告を聞こうか」

PN01と呼ばれた男は深々と頭を下げ、白銀の視線を初老の老人に向けた。

「申し訳ありません。彼女はEDMに回収されたようです」

先ほどサブレたちを覗いていたのはPN01だった。彼はサブレにバレた為にその場から逃げ出し、再びコロニー内の小さな公園の近くの借家の中に入っていった。

初老の老人は目つきをさらに鋭くさせ、声を荒げる。

「お前の役目は奴の監視役だ。その辺に文句をつけるつもりはない。

しかし、彼女を野放しにしておくことはできん。殺してでも接触を阻止しろ！お前達は既に一度作戦をしくじっているのだから！なんの為に奴をそちらに放ったと思っている！」

「奴に指示を出しておきます。皇帝陛下」

皇帝と呼ばれた老人が通信を切ると、PNO1はそのまま家を出ていき大通りへと出てい。すると、先ほど撒いたはずの恰幅の良い大人に出会った。丸っこい顔に肩に付かないぐらいのギリギリの茶髪。そして、野球帽を深くかぶっている。ジーンズに茶色いジャケットを着こんでいるところを見ると先ほどと同じく休暇中なのだろう。もつとも彼がどこの人間か分からなかったが、少なくともこのコロニー出身者には見えない。

彼は丸い目でPNO1を発見すると、数歩距離を取る。

「あ、あなたは……」

PNO1はその場から逃げるように足早に立ち去ろうとする。すると、彼は少しばかり大きな声で尋ねてきた。

「俺と会ったことがありますか？」

しかし、PNO1はそれに答えることは無く、その場から逃げ出すように人込みにまぎれた。

<24>

表情を隠すように額から顎まで隠す仮面は顔の形をかたどっており、髪は透き通るような金髪で長めの前髪が二本伸びており、ギャラルホルン製の制服の上から黒い長めのコートを着込んでいる。体格から男であることしか判断できず、彼自身はひたすらある存在を眺めていた。それがジュリエッタは不服だった。

真つ赤な装甲に金色の装飾、ガンダムフレーム特有のツインアイと二本の角、全体的に曲線美と言ってもいフォルム、背中には大きな鳥の羽を連想させる翼が付いている。コックピットをはさむようにつけられているエイハブリアクターに、翼に装着されているパーティクルドライブが連結されている。武装は両腕に爪型の武器である『ビームクロウ』と同じように両腕についている機関銃こと『ビームガトリング』、背中の翼は変形時には飛行形態の攻撃手段には翼に隠してい

る『ビームウインド』は翼ごと敵を切り裂くことができる。最後にビームサーベルを二つ装備している。

ジュリエッタは不満たっぷりの皮肉に満ちた言葉を容赦なく放つ。「そんなに見ていて楽しいですか？」

ジュリエッタは最近髪をバツサリ切り落とし、昔のように金髪を短く切り揃えている。仮面の男はジュリエッタの方に向きなおすと、おどけて返す。

「なんだ？私と話がしたいのかな君は？」

ジュリエッタが憤怒の表情でその場から立ち去っていく姿を仮面の男は少しだけ笑うと別の方向へと移動していく。

通路へと足を踏み入れると正面からしかめっ面をしながら仮面の男の行く道を塞ぐのは濃いめの青い髪と整えられた顔だちのガエリオ・ボードウィンだった。

「どういたしました？ガエリオ・ボードウィン二佐」

「君は楽しそうだな。エヴォ・エクス准将。俺は知りたくないな、君は何のために戦っている？」

エクスは口元に手を置いて少しだけ考えると躊躇せず答えた。

「自分の為、自分が生きる為だな。そういうあなた達は他人の為に戦っているのかな？」

エクスはクスクスと笑いながら答える、その行動がガエリオの機嫌を悪くする。「何がおかしい？」と反論にすらならない言葉を放つとガエリオはショックを受けるような言葉をすれ違いざまに放たれる。

「だから負けるのですよ、サブレ・グリフォンに」

サブレ・グリフォンという名前にガエリオは反応し、憎悪に近い表情をエクスに向ける。エクスは笑いを絶やさず、はっきりと答える。

「だってそうでしょう？あなた達は火星での討伐任務後にバルバトスとグシオン回収後の彼らと戦い負けた。応急処置しただけの両機相手にあなた達は敗れたのでしょうか？」

「あれは……彼らが阿頼耶識を……」

ガエリオがどこか言い訳をするようにつぶやくとさらに大きく衝撃を与える言葉を放った。

「彼らは阿頼耶識をしていないよ。彼らはジュリエッタ氏と同じ操縦方法であれだけの戦闘ができるのだよ。特にサブレ・グリフォンは化け物じみた実力をしている」

ガエリオは疑うような視線をエクスに向け、探るような言葉を発する。

「やけに彼らの事を知っているのだな」

「いえいえ、何も何も……ただ、ギャラルホルン上層部は彼らの事を要警戒対象として見ている節が在りますからね。何せサブレ・グリフォンの通名は『修羅』ですから」

と笑いながら通路の奥へと進んで行くとエクスは最後に今度の方針を告げた。

「バルバトス回収部隊と合流後ファントムブラット隊を討つための罠を張りますよ。作戦開始は一時間後にします」

通路の奥の闇へと消えていく姿を最後まで見る。ガエリオはエクスという人間を最近知った。

ガエリオが初めて彼を知った時、マクギリス・ファリドではないかと疑いの目を向けたが、どこか彼とは違う雰囲気を感じている。エクスを多くの人に尋ねると、様々な意見があった。

ある者は短気と、ある者は優しそうだ、と、ある者は電波系に見える、と、ある者は冷徹な人物だと見えた、と人によって様々な意見がある。実際ジュリエッタからは淡白や辛辣な態度をとるとよく愚痴を聞かされていた。

見る人によってその人物像が変わってくる。では、エクスという人物の本質はどれなのだろうか？どれこそが彼の本質なのだろうか？そう考えてしまう。

エヴォ・エクスは誰なのだろうか？

<25>

明楽はクレアから言われた言葉がショックでヴァルハラへと帰っていった。俺はクレアを連れてヴァルハラへと行くかどうかで悩んでしまった。安易に彼女をマハラジャの元まで連れて行ってしまっているのだろうか。最近マハラジャは本部から出てこようとしな



一年前に月面都市アルンで起きた不審者事件の後、ラスタル・エリオン暗殺事件が起きてしまい、それ以降用心に用心を銜えたマハラジャが彼女にあつてくれるかどうかわからなかった。

そう考えたとき、マハラジャが急に荷物を取ってこいと言った意味を探る。

もしかしたらマハラジャはクレアという女性の事をどこかで把握していたのかもしれない。だとしたら彼女を連れていくことに意味はあるかもしれない。

いや、彼女を荷物として扱っていいのか？

うんうんと悩んでいると、クレアは満面の笑みで彼にまっすぐな視線を向ける。

なんか、振り回されそうな女性だな。俺はため息を吐き出す。

「サブレさん。どうかよろしくお願いしますね」

艦に乗せてから悩もう。

あきらめて、手を引きながら歩き出す。クレアは歩き出すサブレに尋ねる。

「サブレさんはどうして戦うのでしょうか？」

どうして戦う事が分かるのか？なぜそんなことを聞くのか？という疑問が脳裏によぎったが、尋ねることはせず、はつきりと答えた。

「自分の為、自分が生きるために。そして、知り合った人間を忘れない為にかな。死んだ人間に責任を持つことは大切だと思う。だからこそ、俺は自分の為に戦う。俺が誰かを守り、知る為に戦う」

「……素敵な理由ですね」

微笑み、返すサブレに微笑んで返す言葉に偽りが無いことがはつきりと理解できる。良くも悪くもまっすぐで優しく、そして変な女だ。

そう思うと俺はクレアの暖かな手を引っ張って艦へと急ぐ。

## アース・ガイドⅣ

<26>

「絶対嫌です！」

ジュリエッタが目を釣り上げ周囲を睨みつけていると、ガエリオが頭を掻きながら説得するための言葉を何とか探し出す。

ジュリエッタが嫌がっているのは彼女の搭乗機としてカスタマイズされたガンダムバエルだった。

全体を染め上げる濃いめの緑色と白のコントラストが迷彩カラーに見える。腰にはビームガンソードこと『バエルガンソード』が二丁装備しており、背中には空中戦ができるようにと大出力のスラスタと翼が付いている。

「どうして私がこんな機体に乗らなければならないのですか!？」

ジュリエッタの不満はガンダムバエルに乗りたくないという点だけだった。それだけの為に出撃を数分送らせていた。

エヴォ・エクスは自身の乗機である先ほどジュリエッタが皮肉を述べた機体である真っ赤なガンダムフレーム『ガンダムフェニックス』のcockpitの右隣で待機している。

ガエリオは困り顔で説得するためのセリフを絞り出す。

「だから、先ほど言っただろう。レギンレイズフレームではパーティクルドライブとの連結が難しく、高出力機ができないと、お前のレベルに合わせるにはガンダムフレームが一番なんだ」

「納得いきません! だったらあそこの真っ赤なガンダムでもいいでしょう！」

ジュリエッタはガンダムフェニックスをまっすぐ指さしエクスは肩をすくめる。ガエリオはやれやれと首を左右に振る。

「あれはエヴォ・エクス准将の乗機だと言っただろう? 今お前の為に使える機体はバエルだけなんだ」

ジュリエッタはガエリオの乗機である紫と白でカラーリングされたガンダムフレーム『ガンダムキマリスドミネーション』を重視する。濃いめの紫色の楕円形の大型耐熱性シールドを左手に、右手にはビー

ムライフルの機能と、ビームランスとしての機能を持っている『キマリスガンランス』を装備している。背中には大型のブースターとパーテイクルドライブが装備されており、腰にはビームサーベルが装備されている。

どこか納得のいかないジュリエッタは仕方なしにバエルの方へと進んで行く。

「どうして私がこんな機体に……」

行き場のない憤りを小さな声で吐き出す。

そんな気持ちも首を振って誤魔化そうとする。首を振る度に彼女の金髪が綺麗な輝きを放っていた。

<27>

フロントムブラット隊がリリアンを出てすでに一時間が経過していた。

ビスケットは既にブリッジの艦長席に座りながらリリアンで買ってきたアップルジュースをぐい飲みし、その傍らで操縦席に座るメイデンはアップルパイを右手で持ちながらほうばり、左手で器用に操縦している。

そんな姿を後ろで見っていたメアリーは二人に向けて毒づく。

「リリアンで買ってきたアップルジュースとアップルパイを飲み食いしながら仕事するのやめない？汚いわよ。大体、リリアンってリンゴが名産だったけ？」

そんなメアリーの疑問に今度は同じCIC席に座るイオリが話題を切り替える為に代わりに答える。

「リリアンコロニー4、5はリンゴの果樹園があるはずだよ。他にもブドウや梨みたいな果物の栽培と販売をしているコロニーだからね。他にも野菜何かも栽培してるみたいだよ。一度は果樹園をのぞいてみたいよね」

メアリーはめんどくさそうな表情を作りつつ「私は嫌」と強く拒絶するが、ビスケットは少しだけ思案顔で考えるとくるっと後ろを向き、

「それもいいね。メイデンはリンゴ好きだし、今度フロントムブラッ

ト隊のみんなで果樹園に行こうか」

メアリーは「ええ〜」と心底嫌そうな声を出し、そつと聞き耳を立てていたメイデンはどこかやる気に満ち溢れており、ビスケットは微笑みながらアツプルジュースを飲み干す。

そんな時サブレと明楽はユグドラシル級に備え付けられた娯楽室のボードゲームで遊んでいた。EDM所属のパイロットや整備班が中心となり抗議文を本気で代表に叩きだしたことでかなったこの部屋は様々なボードゲームと飲み物の販売機が並んでいる。それ以外にもソファなども備えつけられている。

サブレが騎士姿の駒を二歩前に進ませて、明楽の魔法使いの駒を破壊する。明楽も負けじと駒を動かすがサブレはことごとく裏を読み続け、開始して十分も持たずに完敗を喫した。

ボードに顔を付けうめき声をあげる明楽にサブレは勝ち誇った表情を浮かべながら手元に置いていたジュースに口を付ける。

明楽はボード上に映し出された完敗の惨状を直視しないようにとゲームの電源を落とす。ほつぺを膨らませながらサブレを睨みつけ、サブレはそれを涼しそうな顔で受け流す。

「なんで……なんで!？」

「お前が弱いからだろ？」

明楽の叫び声にサブレはさも当然という風に返す。

目がしらに涙を浮かべ冷たいサブレに何かを訴えるようにジーンと見つめると、サブレは明楽を見ないようにしながら席を立てる。

席を立てたその瞬間に艦が大きく揺れる。

「なんだ?どうした?」

サブレはドアの右隣の小さな画面を通じてブリッジへと通信する。繋がった瞬間にブリッジの声がすぐさまに入ってくる。

「現在ヴァルハラ周囲にワイヤーが絡まっています!こんなところにワイヤーがあるなんて……!？」

イオリが珍しく声を荒げてしゃべっており、メイデンが操縦桿を動かすたびに艦が揺れる。その姿をサブレが確認したその瞬間にはサブレと明楽は娯楽室からパイロットルームへと移動する。

その間にブリッジではビスケットの指示が受話器型の通信機を通して各所へ飛ぶ。

「モビルスーツ隊は出撃、ワイヤーを斬りながら敵を対処。イオリは敵の索敵に集中。この状況を敵が利用しない手はない。メイデンはアンチビームチャフを展開して、メアリーはモビルスーツ隊との連携を」

ヴァルハラからミサイル型のアンチビームチャフを周囲に巻いていく。薄緑色の粒子が薄い膜のように艦の周囲に散布されていく。そしてすぐに遠くからの攻撃にアンチビームチャフが反応するが、チャフによって威力を著しく減少させられても直撃した瞬間に艦が大きく揺れる。

イオリとメアリーは小さく悲鳴を上げ、ビスケットは艦長席の肘当てに両手を付けて自身の体を支える。

格納庫ではサブレ達が各モビルスーツへと乗り込んでいく。

サブレがバルバトスのコックピットに辿り着くと、バルバトスが動き出す。同時に明楽が乗り込んだグシオンも同じように動き出し、バルバトスは右側カタパルトに足場を固定し、グシオンは左側カタパルトに固定される。

明楽が起動画面を動かしていると、左端にイオリが姿を現す。

「現在グレイズが10機、レギンレイズが2機、ガンダムフレームが2機近づいています。各モビルスーツは敵機を撃破しながらワイヤーを破壊してください。サブレさん、バックパックはどうしますか？」  
「ソードで頼む」

バルバトスの背中から真っ赤なスラスターに対艦刀を一つとビームブーメランを一つ備え付けられており、左右の腕に小型のシザーアークカー付きのシールドを付けられると、バルバトスは腰を屈めて勢いよく射出されていく。

グシオンも同じように腰を屈めて射出されていく、同時にギヤラルホルンの方からモビルスーツ隊の姿が視界に映る。

グレイズが五機とレギンレイズが一機で中隊となっており、ガンダムキマリスとガンダムバエルがさらに後方からヴァルハラに近づい

てくる。

「ジム部隊はチャフの外から艦の護衛と援護射撃を頼む。明楽は先にレギンレイズを頼む、赤いレギンレイズはこの間のグレイズのパイロットだろう。俺はグレイズ相手をしながら着実に数を減らしていく。ガンダムフレームが来たら俺はそっちにあたる。明楽はレギンレイズを片付けてこっちにこい！」

サブレは各機に指示を出すと最初の一撃はジムとグレイズの一斉射撃だった。

ビームライフルからの攻撃がデブリやシールドに当たる瞬間にまばゆい光となって戦場を明るく照らす。

サブレは背中の対艦刀『政宗』をグレイズめがけて振り回そうとする、グレイズのパイロットはそれをビームアックスで受け止めようとするが、それをガエリオが何とか制止する。

「かわすんだ！対艦刀の斬撃の重さはビームサーベル一つでも厳しいんだ！斧なんて相手にすらならない！」

しかし、今更アックスの攻撃をやめることができないわけがなく、アックスは政宗の一撃であつという間に弾かれてしまい、そのままコックピットを切り裂きながら機体を左に引き飛ばす。

グシオンはバスターライフルでレギンレイズへの牽制に入るとレギンレイズはグレイズを囲むように左右に分かれた。

イヴァンは歯ぎしりしながら相方のレギンレイズの攻撃に合わせて後ろから攻撃を仕掛けようとするが、グシオンは前のレギンレイズをハルバートで受け止めつつ、イヴァンのレギンレイズの攻撃をサブアームのビームサーベルで受け止めた。

「なんとという腕前だ。サブアームを手動で動かすだけでも難しいだろうに」

ハルバートで前のレギンレイズを弾いてイヴァンは後ろに大きく飛ぶと、できた隙にバスターライフルでレギンレイズの上半身を吹き飛ばした。

イヴァンはサーベルを左右で装備して、ダメージを受けることを覚悟で突っ込んでいく。右腕のサーベルを素早く振り下ろし、グシオン

はそれを後ろに飛ぶ事で紙一重の回避をするが、今度は左腕のサーベルを左から右へと振ろうとするのをグシオンは両腕でレギンレイズの両腕をつかんで止めたのちに、サブアームはビームサーベルを抜いてレギンレイズのコックピットに叩きつけた。

イヴァンの視界いっぱいには映るまばゆいピンク色の光が彼の最後の光景になった。

<28>

俺が対艦刀でキマリスのランス攻撃を受け止めると、背後から迫るバエルのガンソードのライフル攻撃をシールドで受け止める。バルバトスでキマリスを蹴り飛ばすと、背中のブーメランをバエルめがけて投げつける。バエルはそれを余裕で回避するが、後ろから戻って来たブーメランの攻撃で左足を切り離れた。

ブーメランを受け止めながらも一度対艦刀を両方の機体に向ける。

「しかし、さすがに二対一ではこちらに分が悪いな。イマイチ決定打に欠けるな……先に倒すならバエルの方しかないが……、キマリスが妨害に入ってくるしな」

キマリスは先ほどからバエルをカバーしながら戦っており、ここぞって時には積極的に出てくる。

絶妙なコンビネーションで攻めてくる両機にバルバトスは押していたが、決定打を撃てずに終わっていた。

「バエルに攻撃すればキマリスが前に出てきて、キマリスに攻撃すればバエルが援護に入る。前にコテンパンに叩いているから警戒しているな。どうしたものか……」

悩んでいると、レギンレイズを片付けたグシオンがバスターライフルで援護しながら突っ込んでくる。

「明楽、お前はバエルを頼む。俺はキマリスを直接叩く」  
「了解ですー！」

明楽はバエルめがけて突っ込んでいき、ハルバートを振り下ろしバエルはガンソードで受け止めた。押し負けるバエルの腰をグシオンは左側から蹴り上げる。蹴った瞬間に接触通信からジュリエッタの

悲鳴が聞こえてくる。

キマリスがバエルの援護に入ろうとするが、それをバルバトスが妨害するために正面に構える。キマリスはランスでバルバトスを突き飛ばそうとするが、対艦刀で攻撃を捌いて見せる。同じように接触通信越しにガエリオのイラついた声が聞こえてくる。

「邪魔をするな！」

「こっちの邪魔をしているあんた達がそれを言うのか!？」

互いが互いにイラついた声を発しながら叫んでいると、ジュリエッタと明楽の戦いが変わっていく。追い詰められていくジュリエッタのバエルは既に四肢の半分が取れており、背中の翼がもぎ取られようとする姿がガエリオに一瞬の隙を生じさせる。

今だ！

そう感じた瞬間にバルバトスの対艦刀はキマリスのランスを真っ二つに切り裂いた。キマリスは腰のビームサーベルを抜こうとするが、ブーメランを投げてキマリスの右腕を切り裂き、帰って来たブーメランをシールドで弾くと俺はそれをシザーアンカーで回収する。

あきらめろと言おうと思ったその瞬間に艦に近づく奇妙な感覚を覚えた。

殺気というのだろうか？そんな誰かの感覚が確かに感じ取れたその瞬間には俺はバルバトスの向きを艦上方に向けていた。

「明楽……ここは任せる」

明楽はいきなりの事で一瞬だけ戸惑っていた。

多分もう、こいつ一人でも大丈夫だろうという俺からの期待を受け取った明楽は珍しいぐらいの引き締まった良い表情を浮かべて力強く答えた。

「ここは任せてくださいー！」

俺は黙ってうなずくとそのまま艦へと戻っていく。

<29>

戦闘が始まってすぐにバルバトスとグシオンの戦いをブリッジからビスケットは胃をキリキリさせながら見ている。ジムも艦に近づけさせないようにと戦っており、ジム隊に限っては完全に押されてい



る。

すると、ブリッジとの出入り口からクレアが姿を現した。ビスケットは驚きながら振り返ってクレアを出ていかせようとする。

「何をしているんですか!?!ここは危険ですから住居区画まで避難しててください!」

しかし、一歩も引かないクレアは首を左右に振り、真剣な面持ちで力強く答える。

「どこにいても同じでしょう。私は戦っている皆さんの姿をこの目に収めておきたいのです!」

クレアの綺麗なブルーの瞳をジッと見つめるビスケットは大きなため息をついてあきらめた。

間髪入れずに今度はソニアが部屋の中に入ってくる。腕を組み、大きな胸を強調するように彼女はビスケットの前へと出ていく。ビスケットは二人目の侵入者に口をとがらせると、早口になりながら文句を突きつける。

「ソニアさん、入ってくるなら先に説明してくれませんか?大体あなた、今の今までどこで何をしていたんですか?全く見ませんでしたけど」

ソニアは顔だけをビスケットの方へ向き、体をひねる。再び胸の谷間がビスケットの視界に入ると、先ほどからそれを見ないようにしていたメアリーが自身の胸と比較して周囲を見回す。

イオリも大きく、クレアもそこそこの大きさ、ソニアは言うまでもない。

自分の貧相な胸をポンポンと叩き、考えないようにしながらC I Cに集中する。

ソニアもいつものようないい人を演じるような笑顔を向けると言いくるめようとする。

「別にいいでしょう?私はあくまでも開発局の局長であって、フロントムブラット隊の所属じゃないから暇なのよ。それに、相手のモデルスーツを見ることも重要な仕事だと思わない?例えば……バエルの

装備とかね。しかし、さすがにバルバトスやグシオン相手に苦戦しているようじゃ相手もまだまだだね。さすが私が作った機体ね！」

自画自賛で自らを最大限に褒め称えつつ、居座ろうとするソニアを追い出すことをあきらめたビスケットは再び前へと視線を移す。

気が付けばバルバトスとグシオンが相手を追い詰めている。

その瞬間にビスケットとクレアは視線を上へと向ける。

「何かが上からやって来る！」

ビスケットとクレアの声が完全に一致すると、イオリは慌てながら上へと索敵範囲を広げていく。しかし、デブリの中に存在するエイハブリアクターが索敵の妨害になっており、敵が来ているという確信が持てない。しかし、クレアはそれでも力強く立ち上がる。

「敵が来ます！この艦めがけて！」

「メイデン！回避！」

メイデンが艦を動かそうとするが、まだ少しだけワイヤーが絡まっているせいか、動けない。モビルスーツ隊も敵機相手に苦戦を強いられており、誰一人援護に入れない。そう考えるとバルバトスがすさまじい速度でこちらに帰ってくる。

イオリは帰ってくるバルバトスが上の方に向かっていていることに気が付いた。

「まさか、サブレさんも気が付いたんじゃ……」

バルバトスはチャフのかすかに上に出ると、何かに向かって対艦刀を振り下ろそうとする、その姿を目の前のモニターでは確認できなかった。

<30>

何かが近づいているという感覚が襲った時にはすでにバルバトスを走らせていたし、いまだにそれが近づいていることは分かっていた。すでに視界には真っ赤な鳥のような機体が近づいてくる。

バルバトスの小型モニターが視界に映った機体に反応を見せると、正面のモニターが緑色のサークルで赤い機体を囲み、機体内のデータが機体名を調べだした。

『ガンダムフェニックス』と書かれていた。

フェニックス……不死鳥の悪魔。

赤い体に鳥のような外見は確かに不死鳥を連想させるが、それ以上にあの機体から発せられている殺気のような波動とでもいうのだろうか、そんな言葉にしにくい感覚が確かに俺には感じ取れた。

あの機体のパイロットはやばいような気がする。そんな気がするという感覚だけで俺は自ら隊列や指示を無視していた。

「間に合えー」

さらに足元のペダルを強めに踏むと、さらに速度を増していく。バルバトスの対艦刀を構え、速度に任せて振り回そうとすると、フェニックスガンダムは変形していき、ガンダム特有のツインアイが頭部から現れる。腕や足も変形していくと、翼が背中に戻っていく。フェニックスガンダムは腰につけていたビームサーベルを二つ取り出し、対艦刀の攻撃を受け止めようとする。

対艦刀の薙ぎ払いをサーベル二本で受け止めると、バルバトスとフェニックスの頭部が思いつきりぶつかってしまう。

バルバトスとフェニックスのツインアイとツインアイの視線がぶつかり、その瞬間に俺の耳に聞いたことのない聞き取りづらい声が入る。

「私が君達の存在を感知できるように、君も私の存在を感知できると言う事かな？ 皮肉なものだな」

俺は威嚇するような声を発する。

「なんでお前は俺を……!?!」

笑っているような気がする。なぜこの段階で笑うことができるのか分からないが、それでもこのパイロットがなぜ笑っているのかも俺自身が理解できていない。

狩人の悪魔と不死鳥の悪魔がぶつかり合い、にらみ合う中戦いは次の局面に向かおうとしていた。

## アース・ガイドV

<31>

ガンダムバルバトスとガンダムフェニックスが互いにぶつかり睨み合う状態が数秒だけ続くと、フェニックスが先に離れていく。そして、ガトリングの照準をバルバトスの方へと向けるとバルバトスはチャフの中へと突っ込んでいく。

フェニックスのガトリングの砲撃がチャフの中に隠れているバルバトスへと当たっていく。バルバトスは致命的な攻撃だけを的確に避けるが、少しずつ腕や脚や頭部などに充てられていく。

その姿をブリッジの画面から確認していると、ビスケットは下唇を噛みながら戦いの経過を見届けていたが、それは一方的なものだった。

その戦いの姿はビスケットにかつてのバルバトスのパイロットである三日月・オーガスとティワズの組織『タービーズ』のパイロットであるラファ・フラン克蘭ドの戦いを彷彿させていた。

フェニックスガンダムの姿はどこかティワズフレームの『百里』をサイズダウンしたような姿をしている。飛行形態に変形するところは百里を連想させた。

「まるで百里みたいだ……」

ビスケットのつぶやきにメアリーとイオリはそろって「百里？」とつぶやく、するとソニアがそばの端末を操作して正面の画面に百里のデータを表示させる。双子の姉妹はCICの仕事をこなしながら正面の画面に目を向ける。もともと、今の状況では二人に仕事はほとんどない。

ビスケットは百里の姿とフェニックスの姿を見比べてみると、ソニアが得意の解析を終えていた。

「フェニックスと百里の違いは単純な装甲の差ね。フェニックスは装甲を極限まで薄くすることで大気圏内での運用を可能にしているのに対して、百里は一般のパイロットを前提にしているからある程度防御力が必要なのよね、その為に重たい装甲の分だけ大型のバックパツ

クが必要になった、それが百里の大きさの理由。フェニックスは装甲を極限まで薄くすることで通常モビルスーツが搭載できるギリギリの高性能ブースターですんでいる。機動力と推進剤の量は圧倒的にフェニックスの方が、防御力と攻撃力はバルバトスが上なんだけど、ソードでは機動力が足りない上に遠距離攻撃が全く存在しないから……」

ビスケットは内心相性が悪すぎると思いながらもマルチスタイルを射出するかどうかを悩んでいる。しかし、今更それでどうにかできるような状況ではないし、それにそれを相手が黙って見てくれるような状況ではない。

ビスケットは記憶を紐解きながらかつて鉄華団の三日月は百里にどうやって対抗したか思い出していた。

（思い出せ！思い出すんだ！あの時三日月はどうやって百里を攻略したかどうか思い出すんだ……あの時……三日月は!!）

思い出したビスケットは受話器を手に取り、ひたすら叫んだ。

「サブレイ！旋回中にシザーアンカー!!」

<32>

フェニックスは攻撃をバルバトスのコックピットへと当てようとしつこく攻撃を仕掛けてくる。バルバトスは耐熱性小型シールドで受け止めながら攻撃を避けていくが、チャフの中にいるからと言ってもこのままでは耐久値だって限界が訪れるだろう。

俺は操縦桿を必死に動かしながら攻撃を回避しているが、フェニックスは近づいてこないようにとデブリを駆け抜けながらガトリングでの攻撃に集中している。近づいてきたら何とかできるんだが。

避けることに全神経を集中させていると、声だけがコックピット内に響き渡った。

「サブレイ！旋回中にシザーアンカー!!」

そうか！旋回中なら減速するしかない、だったら！

フェニックスガンダムは一旦距離を取り、こちらに向かう為に大きく旋回する間、速度を落とす段階で俺はバルバトスのシザーアンカーをフェニックス進路上に飛ばした。

飛ばされたシザーアンカーはフェニックスの脚部にとりつくくと、フェニックスはバルバトスを振り払おうと右往左往しながらデブリの中を移動していく。小型故に小回りが利くのがこいつのメリットだろう。

フェニックスはわざと軌道を大きな小惑星へと向けると、小惑星にあたるギリギリのところまで軌道を大きく変え、バルバトスは大きな音をたてて小惑星にあたる。

フェニックスが逃げていくようにヴァルハラ目掛けて移動するが、シザーアンカーがフェニックスの体を引っ張ってしまう。砂煙の中からバルバトスが対艦刀を小惑星に突き刺して体を支えながら現れた。

接触通信越しに男の声が聞こえてきた。

「これを最初から狙っていたのか……!」

くぐもった声が聞こえてくると、俺はバルバトスを操作して思いつきりシザーアンカーを引っ張ってフェニックスをこちらにひきつける。

大きな衝突音と共に俺はフェニックスに向けてビームサーベルを振り下ろす。

フェニックスは右膝をつき、両腕で体を支えている、フェニックスは機動力が高い分防御力が低いため、結果的に小惑星への衝突時にかなりのダメージを受け、振り下ろされたビームサーベルの攻撃をビームクロウで受け止める。

再び互いの視界がぶつかる。

「少々しつこくないかな?」

正面のモニターに仮面を着けた金髪の男が姿を現した。表情を全て覆い隠すような大きな仮面を着けた、辛うじて声で男だと判断できる男は俺に向けて皮肉を吐き出した。

「そつちこそいい加減落ちたらどうだ?」

2人の戦いがヒートアップしようとしていると、視界の先で大きな光の筋がギャラルホルンのスキップジャック級を襲った。

<333>

ビスケット達の視界の端にいたギャラルホルンの攻撃が激しさを増していく中、モビルスーツが交戦している以上艦に絡みついたワイヤーを取り除くことができない。チャフが主砲のビーム攻撃を半減しているが、それでもこれ以上の攻撃はかなりきつい。

対策を考えていると、スキップジャック級の右側面に主砲クラスの攻撃が直撃し、大きなダメージを抱えてしまい、今にも落ちそうになっってしまう。

こんな攻撃をする人物と機体にビスケット達は一つしか心当たりがなかった。

ビスケット達の視界の先にはデブリにガッチリ体を固定して、四つ足で背中の二つの砲台をスキップジャック級へと向けているピンク色の機体を見付けた。

「あんな奇抜な機体色を選ぶ人間がほかにいるとは思えないけど……」

メアリーの引きつった声と共にイオリは固有周波数を確認した。

「固有周波数……『ガンダムフラウロス・リファイン』です！シノさん来てくれたんですね……！」

同時に攻撃しようとしていたフェニックスがバルバトスから離れる為にシザーアンカーを切り裂く、フェニックスはそのまま小惑星を蹴り離れていく。サブレは警戒を高めるが、そのままバルバトスから離れていき、エヴォ・エクスが生き残ったスキップジャックの艦長に指示を出す。

「艦長。撤退信号をあげたまえ」

艦長は必死な形相で「まだ戦えます！」と戦うことを提案する、エヴォ・エクスは仮面の奥の表情を感じさせないよう、先ほどとは全く違う平坦な声で答えた。

「止めておきたまえ。この距離では私が到着する前に君の艦も落とされてしまう。それでも良ければ戦おう。どうかね？」

艦長は落ちることを恐れ、撤退信号を上げる。しかし、エクスの視界には命令に逆らって戦おうとしているバエルの姿があった。

フェニックスの腕でバエルの肩をがっちり捕まえると、そのまま逃

げるように去っていく。バエルにのったジュリエッタは激しく抵抗していく。

「離してください！まだ戦えます！」

「いや、無理だな。君はすでに戦えるような状態じゃないだろう。それに、バルバトスならともかく、グシオンにすら勝てないような実力ではな」

ジュリエッタは悔しそうに下唇を血が出るほどに噛み、離れていくグシオンを睨みつけた。

バエルとフェニックスの後を追うようにキマリスも撤退していく。ビスケットはイオリに指示を出してヴァルハラからも撤退信号を上げさせる。シノや明楽達がそれを確認すると、ワイヤーを切り裂きながら撤退していくが、サブレは壁に突き刺さった対艦刀を抜き取り、撤退していく者達とは違う方向、デブリの一番奥の方を睨みつけた。

<34>

デブリの外から一連の戦いを眺めていた赤とピンクのガンダムキマリスのパイロットである紫色の髪と綺麗な顔立ちの女性が逃げていくガエリオのキマリスを睨みつける。同じように隣で先ほどの戦いを見届けていた青と水色のバエルのパイロットである青い髪の整った顔立ちの若者が紫色の髪の女性に指示を出す。

「アルミリア。PN01からの指示、撤退だつてさ。それに多分……」  
そこまで喋ったところでアルミリアは代わりに答えた。

「ばれているでしょ？分かってるわよ。バルバトスのパイロットからの敵意を感じるし……あのパイロットは覚醒者？そうなの、ジャック」

ジャックと呼ばれたパイロットは肩をすくめながら答えた。

「さあ？可能性ならあるけど……けど、今仕掛けるのはやめた方がいいだろうね。僕としてはグシオンに興味があるけど……君は？」

アルミリアは答えようとはせず、撤退していく。

「私はバレる前に帰らねばならないから。ジャック、あなたと遊んでいる場合じゃないの……」



帰っていくキマリスの跡をバエルが追う。

「僕だって一緒に帰って君の制止役をしなくちゃいけないんだけど」

軽口を叩きまくるジャケットを邪険にしながら逃げていくアルミリアは正面の画面に映る自分の姿を確認する。パイロットには不似合いだからと短く切り落とした短めの髪を少しだけ触っていく。

（目的を達したら……また伸ばさなきゃ。マツキーはこの髪も似合うって言うってくれるかな？）

マクギリスの事を考えると少しだけ心が浮つく自分がいることにアルミリアが気が付いた。

<35>

「シノー・任務はどうしたの？」

俺は艦長としての仕事をメアリーとイオリに任せて格納庫に入ってきたフラウロス（シノー曰く六代目流星号）のコックピットから出てきたシノーに向かって突っ込んでいく。シノーはいつものさわやかフェイスで俺を受け止めてくれた。

シノーの左頬には大きな斜め傷がついていて、新調した新しいピアスが光り短い茶髪を含めて俺には無い要素ばかりで俺は少しだけ嫉妬してしまう。みんなのムードメーカーぶりは健在だ。

もつともファントムブラッド隊のムードメーカーは明楽もいるので、二人そろろうと本当に賑やかになる。もつとも、サブレはそんな賑やかさが嫌らしく、すごく嫌そうな表情をするのが印象的だ。

シノーは笑顔で俺の疑問に答えてくれた。

「いや、マハラジャのおっさんからお前たちがギャラルホルンに襲われたって言われてよ、多分もう一回仕掛けるだろうから追いかけて来いって言われたんだよ。間に合ってたよ」

二人で廊下まで移動すると、何かを考えているサブレが追いついた。その後ろから明楽が大きな声で近づいてくるが、サブレは明楽の顎をアッパーで殴りつけ、格納庫の下の方へと叩きつける。俺とシノーの視線が一瞬だけ明楽の方を向く。明楽は「なんで!?!」と悲鳴を上げていると、サブレはその間も全く表情を変えずにいる。

クレアさんが長めの金髪を後ろでまとめている姿で現れ、手元にド

リンクをたくさんもちながらサブレから順番に配っていく。シノはある程度の事情を知っているのか、簡単に自分の名前と所属を紹介すると、肝心のクレアさんも同じように自己紹介する。

そこで同じ表情で考えていたサブレがようやく口を開いた。

「ブリッジから何も見えなかつたか？ デブリの外からこつちを見ていたキマリスとバエルがいたんだけど。いたって言ってもちらつとだけ見えただけだし……確信が無いんだけど……」

俺は思い出すこともなくすぐさまに否定し、シノは「何の話だ？」と疑問の声は発するとサブレは次の言葉をつづけた。

「赤とピンクのキマリスと青と水色のバエルが一瞬だけ見えた」

サブレの言葉に衝撃を受けたのはクレアさんだった。彼女は口元を押さえて驚き、唐突に正体を明かした。

「多分、『ガンダムキマリス・レッドクイーン』と『ガンダムバエル・ブルーレイ』だと思います。多分、私を回収するために本国から送られた部隊でしょう。この二機は特に有名ですから。私の出身国である……木星帝国からの」

木星帝国という聞きなれない言葉に驚いたのは俺とシノだけで、サブレは特に驚くこともなく再び考え込んでしまう。

木星帝国———どんなところなのだろう？

<36>

本来南側の宇宙港は一般商会などの輸送船が止まる専用の港だが、今俺たちが走っている道路は南側の宇宙港から都市部へ向けて車で走っていく。

本来なら東側の軍港に泊める事が義務づけられているが、現在東軍港は車の出入口は封鎖されており、クレアの安全を考えて南側の港から出ることになった。

俺が車を運転している後ろで兄であるビスケット兄さんとクレアが会話を弾ませていた。

「南側には海水があるので、夏になると海岸で泳ぐことができるんです」

兄さんの説明にクレアはウキウキした様子でその光景を心待ちに

していた。

「海があるんですか？」

「はい、逆に北には山があり、冬はスキーをしたりできるんですよ。このアルンは宇宙都市最大の規模で、過ごすうえで飽きないように娯楽要素が色々あるんですよ」

「いいですね。木星では家からすら中々出させてくれなかったもので……すごい」

光が車の窓から車内に入ってくると、クレアの視界いっぱいには海と海岸、都市部が見えてくる。道路の下には貨物列車や人を運ぶ列車が走っている。今日は晴れているようで天井のドームに映し出される天候は曇りすらない快晴だった。疑似太陽の光が海に反射しているため、十月とは思えないぐらいだが、一步外に出ると十月の寒さが襲うのだから分からない。

車はあつという間に都市部の中心へと移動していくと、そのまま車をEDM本部前の駐車場に止めてしまうと、そのままEDM本部前で立ち止まる、クレアは道路を挟んだ左側に存在するEDM教習学校の方へと視線を向けた。口を開いたのは俺ではなく兄だった。

「あそこはEDMの教習学校で、俺達を含めてEDMに所属している士官や社員のほとんどはあそこを卒業することが前提なんですよ」

クレアを後押しするように自動ドアからロビーに入ろうとしたとき、クレアは端青色のランプの方をじっと見つめて、ロビーの中に入っていく。兄さんが受付嬢に二人の女性に手を向けると、彼女たちは黙ってうなずきそれぞれの仕事に戻っていく。歩いて数分の一歩奥にあるエレベーターに乗り込むと、最後に入った俺はエレベーターの操作盤の黒い認識装置のところ俺の服の腕部分につけている金色のワッペンを当てる。すると、操作盤に書かれている装置の続きに15階から20階が表示される。

後ろで一連の操作を見ていたクレアは俺が19階のパネルに触れた瞬間に声を上げた。

「そのワッペンは何か特殊な物なのでしょうか？」

そこで俺は兄さんの代わりに口を開いた。

「このワツペンは幹部クラスにしか配られていない物なんだけど、このワツペンには特殊チップが内蔵されていて、それを近づけると15階から上に上がることができるようになっているんだ」

クレアはエレベーターが上へと上がっていく中で、俺と兄さんの幹部ワツペンを見比べている。

「ワツペンに数字が書かれていますね。サブレさんが『18』でビスケットさんが『25』？これはどういう意味があるんでしょうか？」

兄さんは言いにくそうに答えた。

「幹部に上下は無いんですが……その……基本は入って来た順番に1〜30までの順番に割り振られるんです。その後は、やめていった幹部ナンバーが開くたびに一個ずつずれていくんです。俺は入ってから25番目の幹部なんですよ。俺はサブレと違って新参者なもので」  
どこか自虐的なセリフに小声で「フン」と発すると、兄さんは「アハハ」と誤魔化すように声を無理矢理出すと、クレアはクスクスと笑ってしまう。

そんな話をしていると19階に辿り着いた。

20階は事実は代表であるマハラジャの居住地なので、EDMの施設は代表室である19階で最後だ。

壁一面に木でできたようなデザインで、床は高級品のカーペットのような造りにすら見える。三人でその床を汚さないような足取りで歩いていき、長い廊下を歩いていく。左右に様々な名前の部屋が存在するが、そのすべての部屋から人の気配を感じない。

歩いて数分で代表室と書かれたプレートが付いている部屋の前に辿り着いた。

両手開きのドアを俺が開くと、部屋の一番奥のデスクにマハラジャが座っていた。

大きな部屋にソファが二つと、はさむようにテーブルが備え付けられている。左右にはあらゆる情報をまとめられたデータが残っており、マハラジャの真後ろは一面が窓で、視界の先に海が見える。

マハラジャは大きな巨体で椅子から立ち上がると、クレアをソファまで案内する。クレアも一回頭を下げてソファに座り込む。すると、

右隣のドアからタイミングを見計らうようにコーヒーを二つもって出てきた眼鏡をかけた黒髪のショートカットの秘書がテーブルに近づいていく。

「ここまででいい。次の任務は追って連絡する」

俺と兄さんは頭を下げてすぐに部屋を出ていく。

時間を掛けながら本社ビルから出てくると、兄が言いにくそうにもじもじしているのを見かけた。

「何？用事？」

「この後……オルガ達の墓参りに行きたいんだけど……」

俺はその言葉には答えず、歩いて車へと移動していく。

<37>

クレアは差し出されたコーヒーを一口だけ飲み、真剣な眼差しでマハラジャの三白眼をじっと見つめる。彼女の目の前に映るその姿は聞いていた以上に大きく見えるが、しかし、だからと言って背が高いという風には見えない。せいぜい180cmと予想する。

気が付けば秘書らしき女性がいなくなっている。

「ご足労すまなかつたな。木星帝国の姫君」

マハラジャの声に体が反応してしまう。クレアは一回ほど頭を下げて口を開いた。

「いえ、ファントムブラッド隊の皆さんに迷惑をかけてしまって……」

クレアはもう一度コーヒーを飲んでみると、マハラジャは単刀直入に尋ねた。

「済まないが、こちらも忙しくてね。本題に入らせてもらおう。今、木星帝国は何を企んでいるのかというのを聞きたい」

クレアは一瞬だけ取り出すのを躊躇うと、ポケットの中から一つのデータ端末を取り出す。マハラジャはノートPCに差し込み中のデータが表示させる、するとそこに出てきたデータはコロニーのように見える。

「コロニーで……は無いな。これは？」

「コロニー型の兵器だと思います。まだ設計書を書いている段階ですが……それに、何かを企んでいるようで……それ以外にも。先ほど

その先遣部隊と思わしき者達の機体をサブレ様が確認しています。何を企んでいるのか……」

マハラジャは立ち上がり、窓まで歩いていく。クレアも同じようについていくと、窓の外ではサブレとビスケットが部屋から出ていくところが見えて取れた。

「人間が宇宙に上がって二千万年が経った。宇宙に上がって以降、人類は進化の呪いに掛けられてしまった。一万年前、人類は滅びの危機に立たされてなお、呪いを紐解くことができなかった」

クレアはマハラジャの悲しげであり、かつ諦めていない確かな熱の籠った瞳を見つめた。

「信じているのですか？人類を苦しめ続ける呪いを紐解けると……」

「ああ、信じている」

二人の視線は静かにあの兄弟へと向いた。

<38>

ビスケットは近くで買ってきたお酒とジュースを墓石の前に置き、最後にお菓子を紙皿に入れると、そのまま同じように置く。

ビスケットは一人、墓石の前でしゃがんで手を合わせる。

墓石には多くの名前と共に『鉄華団犠牲者』と書かれた文字と鉄華団のマークが書かれている。

ビスケットはEDM代表であるマハラジャにこの墓を作ってもらえないかどうかと執拗にお願いし、結果として叶うこととなった。

オルガ・イツカと書かれた人物から始まり、三日月・オーガスなどの名前が書き連ねられている。

そして、最後に『彼らの犠牲を忘れてはならない』と文字で区切られている。

ビスケットは立ち上がると、視界いっぱい広がるアルンの街並みが広がる。いつの日か、鉄華団の死んでいった者達が名前を普通に残せる日が来ると信じていた。

「……帰ろうか？」

ビスケットの声にサブレは空を向きながら答えた。

「そうだな……寒くなりそうだし」

同じように上を向くと、ビスケットの額に冷たく白い何かに触れた。

雪がかすかに降り始めていて、二人は少しだけ季節外れの雪で体が冷える前に帰ることを決めた。

さらに寒くなっていくP・D・332年10月の出来事――

――人類が宇宙に上がってから二千万年が経ってしまった頃の出来事だった。

《アース・ガイド編終わり 次回スターダスト・インパクト編開始》

## スターダスト・インパクトI

1

小惑星やコロニーのような隕石体が地球に落ちるといふ現象は人類が宇宙に上がる前から起きていた現象だと知ったのは、俺と兄さんが学校に通っているときだった。

学校の先生はそう教えてくれた。

EDMの教習学校でも同じような授業を受けたことがあるし、明楽やシノにも同じように説明をしてやった記憶がある。そんな隕石落としてが深刻な環境問題に発展してしまったのは人類が宇宙に上がつてすぐの事だったそうさ。

いくつものコロニーや小惑星が地球を襲い、結果地球の環境は悪化の一途をたどってしまった。

星屑の衝撃が起こした事件は今の時代にも起こされようとしていた。

それもまた、今更だったのかもしれない。だって、人類は二千万年の間永遠に近い時間で滅びと繁栄を繰り返していたのだから。

何度も、何度も、何度も繰り返してきた。

これも、それと同じことなのかもしれない。

それを止めるのもまた——人間なのかもしれない。

2

アルンの街並みは一面が雪で真っ白に染まっており、北の山にはスキーを嗜む人でにぎわっていた。東と西の商業区画はクリスマスモードで人々は浮ついてる。俺が住んでいるマンションは東の区画に含まれており、高いマンションの窓から商業区画の賑わいが見える。

弟であるサブレと会う約束の一時間前には家を出ようと支度をしていた、頭には緑色のニット帽と首にはマフラーを巻く、濃いめの茶色と緑のジャンパーに黒の長ズボンを履いて俺はエンジニアブーツを履いてドアのカギを閉めてエレベーターで降りていく。

マンションのロビーから外へと出ていくと、クリスマスだからかい



つもの数割増しで人通りが多い。東区画のメインストリートの車の通りもいつもより多いような気がする。

ジャンパーのポケットに両手を入れてメインストリートを中心に離れるように歩いていく。バスに乗って三つ目のバス停で降りる。

バスを降りて横断歩道を渡ると、ショッピングモール前にある大きなモミの木のクリスマスグッズと色とりどりの明かりが目をチカチカさせる。

クリスマスツリー前で十分ほど待っていると、俺は小さな声で他人に聞こえないようにつぶやいた。

「久しぶり……かな？」

「そうか？ 毎年の事だろ？」

後ろから話しかけられる状況に俺の心臓が破裂しそうなほど跳ね上がり、俺は「うわあ!?!」という叫び声をあげて後ろを振り向く。

弟のサブレの服装は革ジャンの中からあつたかそうなセーターに胸元からはネクタイがちらりと見え、ジーンズを着こなしている姿は俺と違いカツコ良くもある。しかし、問題はその後ろにいる人物だろう。

綺麗な金髪に白のカーディガンコートを着込んでいて、ロングブーツを履いている。そして色白の肌と金髪に全身真っ白の服装は天使のようにすら見える。絶えず笑顔を絶やさず、サブレに守られるように立っている彼女——クレアは本来ここにいない人物ではない。「お久しぶりです。今日はクリスマスパーティーに招待していただきありがとうございます。サブレさんがクリスマスパーティーの前にショッピングに出かけると聞いて、どうしても同伴させていただきたく思い、こうしてついてきました。よろしいでしょうか？」

「え？ あ、はい」

丁寧に尋ねられることで拒否のタイミングを逸脱してしまう。まあ、拒否をして追い返すのも申し訳ない。俺達と一緒にあってクリスマスのデコレーションされているショッピングモールの出入り口をくぐると、温かい空気が流れてくる。ショッピングモール内もクリスマスムードに変わっており、まず俺達は三階の本屋へと入っていく

と、俺の目的である書物の新作を二冊ほど購入することにした。

本屋で新作の本二冊をわきに抱え、レジで購入すると隣のサイン会へと促される。俺は 流れるようにサイン会へと移動していく。後ろのサブレの冷ややかな視線が苦しいが、俺は笑顔を絶やさないようにサインをしてもらい、サブレとクレアさんの元に小走りで近寄る。「いい笑顔ですね。バスケットさんは本が好きなんです。私も好きなのですが……」

「止めてくれよ。これ以上ここで待つのは御免だ」

やれやれと首を振るサブレはもうここには用が無いと言わんばかりに店を出ていく。俺とクレアさんもついていくように歩き出す、二階からサブレの用事だった音楽ショップへと急ぐ、サブレは音楽ショップに入るとヘッドホンの新型の棚へと移動する。色とりどりのヘッドフォンを眺めて選んでいるサブレの姿を俺は不思議そうに見る。

「今のヘッドフォン壊れたの？」

「別に？コレクションしてるだけだよ。それにこれはもう古いからな。いい加減買い替えようと考えていたんだよ」

サブレが選ぼうと手を伸ばすと、クレアさんが代わりに手を伸ばし、赤と白の縞柄のデザインの大型サイズのヘッドホンを取り出した。

いわゆる紅白デザインのヘッドホンをサブレに渡す。

「……紅白ですか」

小さな声でつぶやくとサブレは紅白デザインのヘッドホンを受け取る、買うか否かで一分ほど悩むと購入すると決めてレジへと足を進める。

レジで購入する姿を後ろで待っている間、近くの音楽リストを見ているが全く分からない。音楽用語を少し理解しているぐらいで、聞いたことはほとんどない。

クレアさんも同じようにリストを見ている。彼女は音楽を理解できるのだろうか？そんな疑問を感じると購入を終えたサブレが近寄って来る。

俺の方に近づいてくるサブレにクレアさんが何か話し込む。ここからではよく聞こえないでいると、彼女は音楽リストから何かを購入してスマホに入れてしまう。俺の本の時はあれほど購入させるのに反対したくせに、音楽の時は意気揚々に購入を進めている。そんな姿に少しだけ嫉妬ではない何かを感じてしまう。

嬉しそうなクレアさんにサブレが近づいてくるのを俺はふてくされた表情で見つめると、サブレが心底不思議そうな表情で俺のことを見ていた。

俺は「フン」と鼻を鳴らしながら店から出ていく。なんで俺は………？

3

赤とピンクのキマリス『ガンダムキマリス・レッドクイーン』を見上げているのは白銀のフルフェイスの仮面を着けたPNO1だった。

今現在彼の乗るこの艦にこの機体のパイロットは存在しない。それは『ガンダムバエル・ブルーレイ』も同じこと。両機のパイロットは諸事情で地球に降りている。

彼の視線は隣の画面へと移る。小惑星の映像へと。

4

自分の部屋に閉じこもることに飽きて部屋の外へと出ていくと下の階のパーティー会場からどこかの貴族のような男女の声が消えてくるのをイライラしながら聞いていた。

日夜こんなことを繰り返して何の意味もないパーティーに参加すると父親であるガルスに言われていたし、マクギリス・ファリド事件以降娘であるアルミリアに何度も結婚の話を持ち込まれたアルミリアだったが、彼女は全て断った。

すべてが終わったあの日、アルミリアはマクギリスに、ガエリオに、全てに絶望した。

一時は家に閉じこもり、何もかもがどうでもよくなった。

死んでしまいたいとすら感じてしまい、彼女は死のうと覚悟し家を飛び出した先である人物と出会い、そしてマクギリスの出生の秘密を知ってしまった。

同時に憎く感じたのはギャラルホルンの存在とその矛盾。平和という秩序を作る過程で生み出される犠牲をよしとする組織に、その犠牲になったマクギリスの生き方を知ってしまった。

悲しみに打ち震え、怒りに恐怖した。

この世界が、ギャラルホルンという組織が、そしてそんなものを許す人々を許さないと決め、彼女は木星帝国に忠誠を誓った。

『プロジェクトE』と呼ばれる計画に参加し、いつかギャラルホルンやマクギリス・フアリドを殺した兄ガエリオを殺すことを誓って。

そんな兄も参加しているであろうパーティーに参加するつもりは毛頭なく、今更いい子にしろと言われてもこちらから御免だと考えていたアルミリアは逃げるように家から出ていこうと玄関に手を付けると彼女を止める声が聞こえた。

「待て、アルミリア」

アルミリアは後ろを振り返ると、パーティー用のスーツに身を包んだ憎い兄であるガエリオ・ボードウインが怒っている風に立っていた。

アルミリアは「関係ある？」という風に分かりやすいめんどくさそうな表情を浮かべ、家から出ていこうとするが、それをガエリオは止める為にアルミリアの肩に手を置く。

「手をどけて」

「元気があるならパーティーに参加しろ。お前のためのパーティーなんだぞ」

「私はそんなことを求めている」

肩の手を払ってどけると、アルミリアはドアを開けてしまう。ガエリオはそれを再び止めようとするが、ガエリオの手元のスマフォが鳴り響きその隙にアルミリアは家を出ていく。

歩いて三十分ほどで大きな公園の前を通ると隣から柵を乗り越えて青髪の少年が声をかけてきた。

「アルミリア。元気そうだね」

アルミリアは紫色の髪が風で揺れ、ジャックの青髪を一瞬だけ見ると無視するように歩く速度を速める。ジャックは公園から飛び出す

と、アルミリアの速度に合わせて後ろについてくる。

「無視しないでよ。ちよつと？アルミリアさん？アルミリア・ボードウィンさん？」

最後の名前に反応したアルミリアは振り返り、思いつきりジャックの頬を叩く。叩かれたジャックにニヤニヤとした表情でゆっくりアルミリアの方を見ると、「やつと僕の方を見た」とつぶやいた。

「その名前で私を呼ばないで。私はアルミリア・ファリドです」

「分かったよ……ごめん、ごめん。それよりPNO1から指示だよ。例の作戦を開始するってさ」

アルミリアは話だけはちゃんと聞きつつ歩いてその場から移動する。すると十字路の角から現れた仮面を着けた男——エヴォ・エクスにぶつかってしまふ。転んでしまふそうになっているとアルミリアの体をエクスが支える。

「すみません。お嬢さん。お怪我は？」

「いいえ。大丈夫です」

それだけ答えると彼女はすれ違うように去ろうとする。ジャックも同じく去ると、後ろにいるアルミリア達に向けるように声を発した。

「寒くなってきましたからね、雲行きも怪しくなってきましたね。何かあるのでしょうか？」

アルミリアは無視するように歩き出す。

5

俺は兄であるビスケットとクレアと共にショッピングを終えたのち、明楽の家へと急ぐ。東区画の端の方にある二階建ての大きめの家。一回は喫茶店になっていて、明楽の母親である絵里・アルトランドが経営している。絵里は元々輸送船団では有名なパイロットだったが、彼女の所属する輸送船団はあるとき海賊に襲われた。

彼女は息子の明楽を連れて逃げ出したが、追いかけてきた海賊に殺される覚悟を決めた彼女の前に俺が姿を現した。

当時訓練生と称して海賊狩りをしていたEDMの一番隊に仮入隊していた俺が独断行動をしており、偶然彼女の姿を見つけた。

それ以降、俺は彼女と知り合った。両親のいない俺に彼女は母性を爆発させ、俺をまるで息子の一人のように可愛がっていた。

それはシノや兄であるビスケットも同じように彼女の母性に巻き込まれた。

俺たちが学生の間は彼女が家に同居させていたし、こういうクリスマスなどのパーティーでは喫茶店を提供してくれる。

クレアは明楽の家を前にしても臆せずニコニコしていた。俺は家のドアを開けようとするが、それを見越したかのように向こうからドアが開く。

黒髪と整った綺麗な顔立ちと、豊満な体つきは四十代には見えない若々しさがある。クレアは彼女の若々しさに驚く。

「若いですね」

「あら、嬉しいことを言ってくれるねえ。あんたがクレアだね？よく来たね。明楽は既に準備しているよ。ゆっくりしていきな」

絵里が喫茶店のキッチンで調理を進めており、ターキーを焼き、ケーキの盛り付けを続けている姿はいい。パーティーの席ではメアリーとイオリがテーブルの上の準備を進めているのもいい。問題はその奥というか、周囲で明楽とシノが死にそうな顔をしながら周囲を掃除したり、準備をしたりしている。

「何があったのでしょうか？」

大体予想ができるが。

「どうせ、さぼって飲み食いだけを考えていたところを絵里さんにしかられてしまったのだろう」

兄も黙って同意する。

さぼり癖が強い二人を無視して俺と兄さんは買ってきた具材を渡す。イカなんかの海鮮類や肉や野菜も買ってきており、絵里は「ありがとう」と答えて調理に入る。

その後一時間程で料理が終わると、全員が席に座りパーティーが始まる。

シノと明楽の暗い雰囲気はパーティーが始まるとすぐに元通りの明るさに早変わりした。二人が大きな声で叫んで騒いでいる姿を見

て俺は小さく舌打ちをした。

「今舌打ちしたか？」

「するわけがないだろ……ちっ！」

「舌打ちしたよな!？」

とぼけつつ俺はターキーに手を付け、口に啜える。食事が進めば進むほど兄やシノ、明楽とメアリーの酒が進んで行く。食事が始まって二時間が経つと、ベロンベロンに酔ってしまっており、絡んでくる絡んでくる。

鬱陶しそうにしながら俺はパーティーの席を抜け出し、庭先に出ていくと持ってきたあつたかいココアに口を付ける。すると、後ろから同じようにココアを手に俺の隣に立ったのはクレアだった。

クレアは微笑み、優しそうな表情を浮かべる。話しかけようとせず、俺の側に立っている。俺はどう話しかけるか悩んでいる間に彼女が小さな声を上げる。

「私、クリスマスパーティーってしたことが無いの。木星に居たころはずっと一人だったから。いるのはみんなお世話さんというか、メイドというか、執事みたいな人ばかりで、私は仲のいい友人は一人もいなかったな……」

それはきつと寂しい人生だっただろう。俺は兄さんやシノの人生だって決していると言うつもりは無いし。メアリーやイオリのような人生が普通という人生なのだろう。彼女の苦しみと俺たちの苦しみは全くの別物だが、それでも俺は彼女の苦しみを受け止めきりたい。

「だからかな、この二か月の間は本当に楽しかったな。メアリーさんやイオリさんは私をよく買い物に連れて行ってくれましたし、ビスケットさんは私をファントムブラッド隊の炊事係として引き入れてくれましたし、サブレさんも私に優しくしてくれて……」

その中に明楽とシノがいない理由を聞けない。怖いので聞けない。「私を見付けてくれたのがあなたでよかった。私はあなたに出会えてよかった」

優しそうに微笑んでいる表情を見て俺は照れ隠しで顔を隠す。頭

を掻き、誤魔化している。俺からすればダイレクトな告白のような気がする。

しかし、俺の視線が後ろを向くと、真っ赤な顔で酔った四人がそこにはいて、ニヤニヤしている姿に怒りを覚え始める。睨むように近づくと四人は走って逃げていく。ふとクレアは空を見つめながらつぶやいた。

「何か近づいてくる。誰かが導いている」

俺も同時に空を見つめる。

邪悪な意思、どす黒い憎しみ、無邪気な悪意、そんな気持ちを感じ取れた。

スマフォの画面にメッセージが添付されていた。

『異常事態発生。明日8時に会議を行う。全ての幹部クラスおよび、局長は会議に参加すること』

世界がどこへ向かおうとしているか分からなかった。

6

明るい茶色のストレートの髪をした男であるEDMの司令官『アルベルト・シユキユナー』は六番隊からの報告を頭を悩ませながら聞いていた。

六番隊の隊長である白髪の女性『エマ・ロージン』は送り付けた映像を説明する。

「現在、アステロイド・ベルトに存在する小惑星の一つが地球圏に向けて移動を始めています。というかもう少ししたら地球圏に到達します」

正八面体の形をした小惑星が推進剤が火を噴き確かな速度で進んで行くのがアルベルトにも確認できた。

よく見ると、いたるところに人の手が加えられた痕跡が見受けられる。アルベルトは近くの男性に話しかける。

「この情報を開発局のソニアに送ってくれ。エマはそのままこちらに帰ってきてくれ。会議を開く。幹部クラスと各開発局長に連絡を回せ」

アルベルトはそのまま歩いて指令室を出ていく。



短めの白髪をめんどくさそうにポニーテイルにしている、彼女は白衣のポケットに手を突っ込みながら新たなバルバトスのスタイルの確認を行っていた。

目の前のガンダムバルバトスは背中に大型のバスターライフルを、左側にはミサイルポットを搭載し、両腕にミサイルポットを付けたシールドを装備していて、両肩にはマシンガンを搭載した追加装甲を装備している。

新装備『バスタースタイル』は後テストするだけの状態で待機していた。ソニアは内心ノリノリで開発を進めており、その周りにはほかにも翼の装備や真っ黒の装甲などが待機していた。それぞれの装備はこれから開発される新スタイルようであった。

どれもソニアの渾身の発明品であり、ソニアはそれを開発するのに集中しようとしていたが、そんな気持ちを根こそぎ奪い取るような声が後ろから聞こえてきた。

やせ細ったソニアと同じ白衣を着た眼鏡をかけた男が駆け足で近づいてきた。

「ソニア開発局長！アルベルト司令官から連絡ですう！」

「何よ？これからウイングスタイルと、ダークスタイルの開発をしたいのだけど？」

やせ細った男は眼鏡をかけなおして手元のタブレットを手渡し、ソニアは仕方なしに視線をそちらに向けると大きなため息を吐き出す。

「めんどくさそうな案件を持ってきたわね……しかし、小惑星落としをしようとしているバカがいるとは思わなかったわね。あんた、降下場所を特定しておきなさい。多分、明日ぐらいに会議があるから、それまでにね。私は開発を進めておくから」

やせ細った男はキョトンとしながら話の成り行きを見守り、焦り始めると走ってそのまま廊下の奥へと消えていく。

ソニアはバルバトスの開発を進め始めた。

エヴォ・エクスは一人でロロ・デブリンの代表室へと足を踏み入れ

る。頭を深々と下げ部屋の中に入ると、手短に済ませることにした。「先ほどアリアドネに小惑星が引つかかっていることに情報局が気が付きました。近いうちに地球に落ちる可能性があります」

厳つい顔つきをしているロロ・デブリンはしかめっ面をして睨むような視線を送る。

ロロ・デブリンは典型的な軍人気質な男で、軍事力を高めて支配することを昔から唱え続けていた。

彼からすればギャラルホルンが一步遅れている状況は我慢がならなかった。

その上二か月前のバルバトス奪取作戦の失敗に次いで、小惑星が地球に迫ろうとする状況にエヴォ・エクスに傲慢な態度を決して緩ませないように指示を出す。

「お前が指揮を取れ！ただし、最低でもここに落とすな！いいな？」「はっ！EDMに後れを取るようなことをしません」

エヴォ・エクスは部屋から出ていく。

エヴォ・エクスは夜空を眺めながら静かにその時を待っていた。

## スターダスト・インパクトⅡ

9

いい加減な志でEDM18階の会議場に訪れたわけではないが、それでもこの状況は俺にこの部屋への入室を拒ませる。嫌になる。

俺の足元へと転がって来た緑色の球体である通称『ハロ』と呼ばれるサポート端末は上の部分（耳？）というか羽？みたいな場所）をパタパタと羽ばたかせて「ハロ！ハロ！ハロ！ハヤクスワレ！」と誘導する。

ハロを持ち上げ、脇に抱えながら会議室の椅子の一つに座り、死にそうな顔をした兄事ビスケット・グリフォンは俺の隣に座り顔を突っ伏して苦しそうにしている。

クリスマス・イヴの翌日12月25日にEDMの幹部クラスと局長クラス全員に会議室に集められていた。

そして、約半数が二日酔いで苦しそうにしている、代表のマハラジャ・ダースリンですら苦しそうに突っ伏している。

俺達で全員らしい。情報局長であるテマル・マイスは短めの黒髪の優男を思わせる人物だが、その反面どこまで計算しているか分からないようなザ・情報局のような人物だ。

テマルですら出席するような会議ということだ。

めったに人前に姿を現さないことで有名なテマルと開発局長であるソニアは有名な人物。

ソニアに関してはファントムブラッド隊ぐらいしか関わりが無いくらいだろう。

テマルはそもそもあまり会ったことが無いが、何を考えているのか分からないような人物だと聞いている。そもそも局長室で仕事をしている姿さえ見たことはあまり無いらしい。

座って十分ほどが経つと、アルベルトが険しい表情で部屋に入り、部屋の右端の台座に移動する。そして、周囲の惨状に頭を抱える。

「昨日の段階でメッセージを飛ばしただろう！どうしてそこから飲み進める!？」

「その前から飲んでいたんだと思うよ」

テマルからのツツコミにもならないような言葉に額に手を置き、首を横に振るアルベルト。視線をソニアとテマルへと向けると、両局長は立ち上がり、テマルが代表で話を始める。

「現在小惑星がこのアルンめがけて衝突コースで移動中です、30日から31日にかけての日取りになると予想されます」

俺を含めて生きている半数の幹部が一気に反応を見せた。

何だ?!?小惑星が衝突!?

俺の目の前の画面に正八面体の小惑星が映し出される。

「何の冗談じゃ!?!」

八番隊の初老の男性が飛び上がり抗議の声を上げる。ソニアがその抗議に答える。

「残念だけど、冗談じゃないわよ。六番隊が確認してくれているわよ」

マハラジャが顔を上げ、大きなため息を吐き出す。

「しかし、まさかこんなに早く動くとは、木星の姫君が亡命したことがそんなにシヨックなのか?」

「かもしれないですね。EDMの本部を攻撃しようとしているのでしょうから。彼女が狙われているというより、こちらが動こうとしてると判断されたため、先手を打っておきたいということでしょうね」

アルベルトはやれやれと首を振り、各隊と局長に指示を出す。

「情報局は民間人の地下格納庫への避難を誘導してくれ、開発局は对小惑星兵器の準備とファントムブラッド隊のガンダムフレームの改良を、一番隊から四番隊は別命があるまで待機、五番隊から八番隊は第一陣として出陣。九番隊と十番隊は第二防衛線を敷くこと。ファントムブラッド隊は開発局で別命があるまで同じく待機。以上!各自仕事にかかれ!!」

立ち去り際に死んでいる人間全員の頭を叩きながら会議室を出ていくアルベルトに続いて俺は兄の首根っこをつかんで会議室から出ていく。

10

開発局は東側軍港のさらに遠くに存在する。そこまで行こうとすれば資材搬入用の港から艦で入るか、電車で一時間移動するしか方法

が無い。地下深くへと掘り進められて作られた開発局の拠点は広大で、見知らぬ人間が入れば一時間と掛からず迷子になること間違い無い。

地下深くへと張られた拠点に電車から降りて入ると、駅から開発局のロビーへと入っていく。『2』と掛かれたドアを潜り、奥へと入っていく。

真っ白の空間に青い線がまっすぐと奥へと誘導してくれる。床が自動で進んで行き、俺と兄さんの体をまとめて奥へと進めていく。

一番奥にある大きな二番工房へとたどり着く。

戦艦が六隻ほど入ることができる工房に、ヴァルハラが一隻とガンダムフレームを入れたモビルスーツ十機ほどと、それ以外にも細々とした装備などの残骸がそこらへんに残っている。開発局の中でも二番目に大きな工房だが、この工房はファントムブラッド隊が独占で使用している。

俺は兄をそこらへんに放っておき、ソニアの元へと急ぐ。ソニアはガンダムバルバトスの元で新装備の開発の最終テストを行っており、その装備は今までとは全く違うものだった。

実際の体のあるところにミサイルポットが付いている。背中にはミサイルタンクが一つと大型ランチャーが一基。重たくなった装備の分だけ背中に大きめのスラスターが付いている。

「これがバスタースタイル」

ソニアは微笑みながら近づいてきて、胸元を強調するように歩いて近づいてくる。

「それ以外にも現在調整中のウイングスタイルとダークスタイルがあるわよ、私のおすすめとしてはウイングスタイルね。現在ジムフレームの新型装備であるウイングシステムをそのままバルバトスに搭載する予定。グシオンとフラウロスは別装備を開発中よ」

それは先ほどから視界の端に映っている光景だろうか？

工房の左端でグシオンとフラウロスの装備らしい何かが見えている。ピンク色の可変ウイング装備とモビルスーツを載せて地上での空中戦闘を可能にするサブフライトシステムの茶色い装備が見える。

おそらく可変ウイング装備はフラウロスでサブフライトはグシオンだろう。

そして、バルバトスの後ろで調整している赤と白の六枚の翼の装備がウイングスタイルの新システムだろうか？

ウイングの根元の部分からスラストーを使うことで、ウイングに疑似的な風を作ることができる。その風をコントロールすることで空中での戦闘を可能にする新システム。

そして問題のダークスタイルだな。暗闇での戦闘を前提にしたスタイルで、高速移動を行うために装甲を丸ごと変更しなくてはいけないのだろう。実際ウイングスタイルと違い真っ黒な装甲がいたるところに見える。

高速で移動し、敵に視認させずエイハブリアクターの固有周波数すら隠すことができる新システムだ。

エイハブリアクター……か。厄祭戦前から開発されたエイハブ・バーラエナが開発した反永久機関であり、モバイルスーツやモバイルアーマー、艦船、スペースコロニーなどで使用されている相転移変換炉である。物理的な破壊が不可能で稼働中は半永久的にエネルギーを生み出し続ける。その反面、通信障害や常に固有周波数で個体差を調べることができる。

しかし、その技術は変化しつつあった。パーテイクルドライブの開発によってエイハブ・リアクターの性質に変化が起きた。そして、最近の技術によって固有周波数を隠すことや変化させることができるようになった。

それはこの時代に恐ろしいまでの革新を生んだのは事実だ。それ以外にも通信妨害を阻止することで都市部の電力機能に使えるようになったりした。

「正に技術革新時代ですね。皮肉だな……」

俺がつぶやくとソニアも苦笑いを浮かべながら答える。

「そうね。若い少年たちの犠牲をもってできた世界。彼らの犠牲の上でこのパーテイクルドライブができた。それはいい事であり、皮肉なことでもある」

マクギリス・フアリド事件の最後は鉄華団掃討作戦で終わったと記載されているが、実はその直後にEDMのファントムブラッド隊と一番隊から四番隊までの部隊とアリアンロッド艦隊による地球から火星間に存在する大規模対戦跡地である小惑星群事災いの地と名付けられた『ランド・オブ・ウオウ』での一連の戦闘が極秘裏に行われた。後ろを取られたアリアンロッド艦隊は挟み撃ちの状態に陥り、ジュリエッタとガエリオを人質に取られた。

その結果マハラジャからの打開案を受け終結した。

裏ではそんな事実が公表されればギャラルホルンの信頼の低下を招くと考えた結果でもある。

本当に皮肉だな。

バルバトスの姿を見上げると、右隣から複数のハロが俺の視界いっぱい振って来る。

11

「まったくこいつは……」

俺はハロを元の場所へとそれぞれ移していき、残りのハロは作業用モバイルワーカーへと移していった。移ったモバイルワーカーはそれぞれの作業に移る。

「ハロ、兄達をたたき起こせ」

「ハロ！ハロ！リョウカイ！」

ハロはモバイルワーカーを使って兄をはじめシノや明楽といった酔いつぶれた人間を強引にたたき起こす。シノや明楽や兄は騒ぎながらたたき起こされていく。

「や、やめろってのー！」

「痛い！痛い！痛い！！」

「ちよ、ちよつと!?あ!?ダメ！そこは……!?」

兄だけ嫌にエロい起こし方だと思っただけだろうか？あのハロは兄を女として認識しているのでは？

そう思わせるほどに嫌に性的な起こし方をしているが……？

俺は視線をソニアへと移すが、ソニアはウインクで返すだけ。

あの人は……全く。

俺は止めるために足を進めようとするが、それを止めたのは情報局局長であるテマルだった。

眼鏡をかけなおし、クレアと共に歩いてくる姿はまるでクレアを連行しているように見える。テマルの姿をソニアは快く思わないのか、不機嫌そうに表情を曇らせる。

「あらあら……腹の内を見せようとしらない優男が来る場所を間違えたらんじゃない？」

「いえいえ……こんな汚い工房で寝泊りができる無神経な女性もどきが住んでいる場所に長居するつもりはありませんよ」

嫌味の言い合いを繰り返す2人に俺はため息交じりで言い放つ。

「醜い言い争いを繰り返すのをやめたのなら帰ったらいいかですか？」

テルマとソニアはEDM発足時からのメンバーで古参メンバーではアルベルトに次ぐ若さを誇る二人だが……とにかく仲が悪い。ギャラルホルン時代から仲が悪かったらしく、同年代の同世代だけに昔からひたすら喧嘩を続けてきた。

片や技術畑出身でもう一方は情報畑出身ということもあるがそれ以上に生活態度や性格がまるで合わないらしい。

会えばこんな感じで喧嘩するのだが、俺からすればただめんどくさいの……しかし、テマルがこんな苦手な仕事場へ来るぐらいなのだから。俺はそつとクレアに話しかけようと近づく。

「テマルさんに何か問い詰められたのか？」

「いいえ、ただ木星帝国の内部事情を多少聞かれました。私はさほど知りませんが、分かることは全部話したつもりでした。テマルさんによればあの要塞は攻撃用のオプションはついていないという予想でして、それ故に敵の戦力を知りたいと……」

知らないという結論を聞き出したのなら、テマルさんはどうしてこの工房に姿を現したのだろうか？

いつの間にかテマルとソニアの言い争いは終わっており、真剣な面持ちで話し合っている。聞き耳を立てて話を聞いてみる。

「あなたね……本当にメテオブレイカーを使うつもり？ 遙か昔の隕石



を砕くための兵器よ？」

「小惑星の軌道を逸らすことに失敗すればだ……この施設で使える例の高出力兵器を使用する」

「!?代表が使用を禁止した『あれ』を使うの? 『メテオブレイカー』どころの騒ぎじゃないわよ!?!」

『あれ』を使わないと軌道を逸らせないと判断した。アルンの全エネルギーギアを使用して『あれ』を使用する」

気になったのかクレアは近づいてきて話しかけた。

『あれ』とは何でしょうか?」

テマルとソニアは何も語らずそのままさらに奥へと足を進めていく。

移動して一時間ほどの場所にそれはあった。

俺にも聞かされたことのない、幹部や局長の中でも古参メンバーだけに知られた禁止級の中の最大級の禁止兵器。

コロニーほどの大きさの空洞の奥にビームを射出するための砲台が備え付けられている。しかし、その砲台の大きさはほかに見たことのない。

クレアはその兵器に心当たりがあるらしく、小さくその名前をつぶやいた。

「コロニーレーザー? そんな、こんなところに……」

「コロニーレーザーってなんだ?」

ソニアは小さく目をつぶり、テマルはその兵器へと視線を移して口を開く。

「私達はこれを『アロンの杖』と呼んでいます……」

『アロンの杖』か……たしか敵対者に災いをもたらすとされた杖。

そんな大層な名前を兵器に名付けるなんてな。

こんなものを使用しようとしているという事か。

しかし、どうしてクレアはこれの名前を知っていたんだ?

そんな疑問を聞こうとも思えなかった。

そう考えたとき俺は兄の事を思い出した。

アルミリアは木星帝国の船へととんぼ返りしていた。

彼女の前に立つ『キマリスレッドクイーン』は腰にドレスのような兵器を携えていた。自分にとって災いというべき『キマリス』の名前を一時的にでも使用している。それがアルミリアはとても嫌だった。

「マツキーを殺した兵器と同じ名前を……」

アルミリアは隣に立つ青色の『バエルブルーレイ』の方を見る。バエルブルーレイは背中に新しい翼を付けている。

「何々？ 僕のバエル君がそんなに気になった？」

「来やすく話しかけてこないでください」

アルミリアは逃げるように格納庫から去ろうとするが、今度は反対側からPN01が話しかける為に前に立ちふさがる。

アルミリアは邪険にするわけではないが、本当の上司ではない彼を信用しているわけではない。彼女は『彼』に帰ってきてほしいと願っていた。

「失礼なことを考えているのかな？」

「いえ、そんなことは……」

立ち去ろうとする彼女にPN01は本心からの疑問をぶつける。

「君は実のお兄さんを手にかけてもいいのかな？」

アルミリアはその問いに感情を動かした様子はなく、穏やかな表情で問いかけた。

「機械であるあなたが人らしい感情を抱くのですね？ 私は決めているんですよ。マツキーを犠牲にする世界なんて私はいらないんです」

彼女の冷たい視線をPN01は受け流す。

PN01はアルミリアをああまで追い詰めた『あの人物』の監視を彼は任務としているが、現在その任務は果たせていない。

ジャックが後ろから話しかけてくる。

「PN01。あのままでいいわけ？ 僕は別にいいんだけどさ」

「私がどうにかできることではない。私の役目は君たちの監視とコントロールだから」

ジャックは小声で「クルルウウ」と冷ややかな声を上げ頭に手を置いてその場から去っていく。

クールなのではない。ただ、感情が無いだけ。私はあくまでも機械の疑似人格に過ぎないのだから。

13

小惑星は確実に近づいている。木星帝国の旗艦はスキップジャック級ほどではないが、EDMのユグドラシル級と同等の性能と大きさをほこり、小惑星を囲むように停泊している。

あと数時間ほどで作戦時間になるだろうという予想をPN01はしていた。

EDMだけでなく、ギャラルホルンとすら敵対する可能性があるかもしれない。だが、それでもこの作戦が失敗するとは思えなかった。それだけの確信がPN01にはあった。

「私にはビスケット・グリフォンの考えが読める。君は俺には勝てないよ」

14

「ひ、ひどい目にあった」

目を覚まし、二日酔いも治ったが俺はサポート端末であるハ口から性的ないじめを受けた。ほぼ裸に近いような恰好まで追い詰められた。

「まあまあ、しゃあねえよ……」

同じように二日酔いから復帰したシノは左頬の傷の辺りをつつきながらフォローしてくれる。性的な命令をしたであろう弟のサブレは情報局長たちとどこかへと消えていった。

明楽は速いうちに逃げ出していき、シノだけが俺を助けてくれた。

ハ口は作業へと移っていき、俺はサブレが消えて行ったであろう奥の通路へと移動していく。しかし、どこかで道を間違えたのか、目的の場所にサブレはいなかった。誰もおらず、人のいた痕跡だけがそこにはあった。

そして一番存在感があるのは目の前のモバイルスーツだろう。フレームがむき出しの新型のネオガンダムフレームがそこには鎮座していた。

コックピット周りのエイハブ・リアクターはパーティクルドライブ

一体型であると推測できる。フレーム自体はガンダムフレームとの違いはまるで見受けられない。

しかし、フレーム自体に様々な細工がしてあるのだろう。フレームは最もエネルギーを送り込みやすいように造形されていて、完全にサブレイようにチューニングされているところが見える。フレームの造り自体からサブレイの為という言葉が見受けられる。

「これって……ネオガンダムフレームの？」

「うん。『ガンダムエデン』だね」

俺は一步だけ前に進もうとするが、その時何かを蹴ってしまった。俺はそれを拾い上げ内容を見てみる。

その中身は俺が今まで見たことも無いような装備内容だった。

「なんだよこれ……？待てよ、今のバルバトスのスタイルシステムはこの為の者だったのか？」

「みたいだね。サブレイの戦闘システムの解析とその分析。そして、新型用のシステムを考案するためなんだね。今の三つの新スタイルもこれのデータ用だったんだ」

そのデータには『ガンダムエデン』の完成形態予定の姿が映されていた。

背中にはウイングスタイルとは別の造形をしている翼に『幻影の翼』と呼ばれている無限の加速を促し幻影を残すほどの高出力の速度を作り出す翼。

両腕にはどんな攻撃も耐える『ビームシールド』と高性能ビームライフルが二丁。

腰にビームサーベルが二つ。それ以外に装備が見受けられないが、多分これで完成というわけではないだろう。多分これからも追加装備を一つ二つ増やすのだろうと予想できる。それでも恐ろしいことである。

「マハラジャさんはサブレイに何を見たんだろう」

「さあな……お前の弟に何かを感じたんだろうな」

これだけの速度をコントロールできればそれは人間をもちややめているも同然だろう。でも、それをマハラジャさんは感じ取れたとい

うことだ。

どこまでも早く。どこまでも先に。誰よりも早く。

音よりも。光りすらも超えて走っていく。

それはサブレが求めているんじゃないとここでようやく理解できた。

多分それはクレアさんも同じことを理解したのかもしれない。マハラジャさんも。

このガンダムとサブレは人類が出せなかった二千万年の呪いの答えを出すために生まれようとしている。それは速さの先に進まなければならぬのかもしれない。地球という星の重さすら超えて進んで行く速度を手に入れる。

それは不死鳥のガンダムのパイロットも同じなのかもしれない。速さの先へとたどり着き、人類が出せなかった永遠の答えを出すことで新しい時代を始める為に。

その時は遠くないのかもしれない。

## スターダスト・インパクトⅢ

15

今現在木星帝国の小惑星『デルタ』の出入り口は二つしか存在せず、正面と後方に一か所ずつ用意されている。前方の出入り口はEDMが、後方の出入り口にはギャラルホルンが攻略の為に部隊を率いていた。

アルミリアは面白くもないモバイルスーツ潰しをしていた。

グレイズが十機ほどが後方出入り口に群がるがキマリスレッドクイーンのドレスの形をしている兵器が十本のビームを放出する。

グレイズの体を貫き一瞬でグレイズが爆散していく。キマリスレッドクイーンはグレイズからのライフル攻撃をかわして見せると、ビームランスで近づいてきたグレイズのコックピットに向けて貫く。

「面白くありません。早く来ればいいのに……来てくれれば……殺してあげるのに。お兄様」

アルミリアは面白くなさそうにしながら戦っており、弱く群がりながらかかってくる敵の姿に嫌気を感じていた。

これがPNO1の作戦だとわかっているし、敵もこれが唯一の攻略法なのかもしれないが、自分に向かってくる敵をこれでもかと潰すだけ。それが面白くないと感じていた。

自分が言い出したことだし、そのこと自体に後悔はしていない。しかし、いくら待ってもガエリオ・ボードウインは現れないし、襲い掛かってくる敵はみんな弱い。歯応えが感じられないような戦いを約一時間ほど続けていた。

「面白くありません」

もう一度呟いてみるが、それを聞いていたのだろう、ジャックが通信に割り込んできた。

「だったら僕と変わろうよ！こっちは激しすぎるよお！」

「あなたは仕事をしてください」

冷たく突き放す。頬を膨らませながら通信を切ってしまうジャックだが、そんなジャックの口ぶりが向こうの激戦を感じさせる。

EDMの方がよっぽど激しく戦っているのだろうが、あちらもあちらでファントムブラット隊はおろか主力のほとんどが姿を現していない。

それでも苦戦するということはPN01の予想はまたしても当たったわけだ。

いい加減ちまちま潰していくこの状況に飽きていたころ、正面に本物のキマリスとバエルが姿を現した。

「お兄様！」

アルミリアにとって自らの目的を遂げるため、グレイズをドレスで破壊していきながらまっすぐと自らの兄の元へと向かっていく。

敵を討つために、今彼女は家族を捨てた。

16

ガエリオがキマリスドミネーションに乗り込んで戦場に姿を現したときには、すぐに内部への突入に成功できると予想していた。

しかし、その予想は辛くも打ち砕かれた。

ギャラルホルンのモビルスーツ隊は赤とピンクのキマリスに阻まれている。

ギャラルホルンはこの敵キマリスに『赤キマリス』と名付けた。

敵のパイロットは？敵の目的は？そんな考えに及ぶほど呑気に構えていられる状況ではなかった。

赤キマリスはドレスのような装備だけでほとんどのグレイズとレインレイズを駆逐していった。他の場所でも敵の主力と思われる黄色の角張ったモビルスーツに阻まれていた。全身が角張っており、頭部は獅電を彷彿させるようなデザインをしているように見えるが、全体的にずんぐりしている。しかし、機動力は高く背中のスラストターで飛び回っている。大型のライフルの攻撃力と命中力はかなり高く、ビームサーベルでグレイズシリーズを倒していく。

「戦力だけでいえばEDMのジムフレームと同等といったところか……」

ガエリオはこれがギャラルホルンがEDMや未確認勢力に一步遅れている理由だと痛感させられる。モビルスーツの性能差で負けて

しまっているのだ。

しかし、そんなことは戦わない理由にはならない。バエルと共に赤キマリスの元へと走っていくが、赤キマリスはまるで鬼のようにこちらに突っかかってくる。

ガエリオはキマリスドミネーションのランスを機動力を生かして突っ込んでいくが、それを赤キマリスはシールドで攻撃軌道を逸らす。

バエルに乗ったジュリエッタは後方に回り込み背中からバエルガンソードで遠距離攻撃を仕掛ける。しかし、赤キマリスのドレスがビームシールドを展開し攻撃を受け止めた。

驚くというレベルではない。そんな技術力を敵は持っているのだと痛感させられた。

それはきつとジュリエッタも同じことだと思う。脳裏にジュリエッタの驚く表情がありありと思い浮かぶ。

こんな時にエヴォ・エクスがいればと考えてしまう。フェニックスガンダムはいまだに修理をしているらしく、嚴重に格納されている。かつてのキマリス以上に機密性が高い機体であるためガエリオとジュリエッタにすら話が届かない。

「情けないですね……お兄様」

「!?……アルミリア?」

話しかけられたという衝撃以上にその話相手が妹だという衝撃の方が強く、ガエリオは数秒間思考を止めてしまった。

画面の奥によく知る妹の顔が姿を現した。

綺麗な顔立ちと自分と同じ紫色の髪、その反面睨むような視線にひるんでしまった。

どうして?という疑問が脳裏によぎる。

「何故だ?どうしてなんだアルミリア!?!」

「お兄様の所為でしょう?お兄様がマツキーを殺したからです」

「マクギリスはお前を利用していたんだぞ!?!お前は騙されていたんだ!それが分からないお前じゃないだろう!?!」

「だからお兄様は理解できなかったのです。私は全てを知りました。



お兄様と違うのです」

まっすぐに向けられる視線には迷いや躊躇は存在しなかった。

今の自分とはまるで違う明確な覚悟、何故戦うのか分からなくなっている自分とは全く違うと痛感させられる。

同時に感じる感情は自分への明確な敵意と復讐心。

マクギリスを殺したという感情がガエリオへと向けられ、ガエリオはアルミリアの後ろにマクギリスの姿を重ねた。

(まだ……俺を苦しめるのか？マクギリス。俺は一生お前に苦しめられる運命なのか?)

心の中で問いかける自問自答のような問いにアルミリアが答えた。

「そうですね。マッキーは一生お兄様を苦しめ続けるのです。後悔して死んでください！」

アルミリアはランスを構えて突き刺そうとする。ガエリオは死ぬことすら覚悟してしまった。アルミリアを追い詰めたのは確かに自分だと理解している。そう考えていた。

(アルミリアの事を考えず、マクギリスを殺せばどうなるかまるで理解しなかった自分はアルミリアに殺されるしかないのかもしれない) 　しかし、アルミリアの攻撃を受け止めたのジュリエッタのバエルだった。

バエルガンソードで攻撃を受け止めつつ、ガエリオのキマリスを連れて後ろに下がっていく。

「しっかりしなさい！今更怖気づいたのですか!?妹が敵だからどうしたというのですか?だったら説得して連れ戻せばいいだけではないですか!!違いますか!?!」

ジュリエッタの力強い言葉にガエリオは自身の意志をしっかりと持ち始める。

(アルミリアを説得して、そして一緒に帰るんだ!)

この時、ガエリオは考えていなかった。アルミリアを変えた人物の正体に。

17

ジャックはガンダムバエルブルーレイの背中の翼からまるでビー

ムの翼のような高出力兵器をジム達へ向けて放つ。しかし、攻撃をかわらうじて回避して大破だけは免れていた。

ジャックはEDMの熟練度と訓練度の高さに舌を巻いていた。

ギヤラルホルンの相手をしているほうがよっぽど楽だと認識していた。

統率がよくとれており、一機一機がうちのモビルスーツ隊員と互角とみていいと認識した。

実際うちのモビルスーツであるテイワズ製モビルスーツ公式改良機である『霊電』は黄色いずんぐりとした体をうまく使ってジムと互角に戦っている。

数でこちらが押されている以上ジャックが頑張るしかない状況で未だにほとんどモビルスーツを落とせていない状況は単純にストレスだった。

どんどん落とせるか単純に自分と互角に戦えるならこんなストレスを感じてはいなかったはずだ。

さらにジムが三機回り込むように囲む。翼で後ろの二機の両腕を飛ばし、正面のジムの足を切り裂く。

「ああ、もうーストレスになりそう!」

ジャックはコックピット内で怒鳴り散らしながら戦っていく。

18

PN01は小惑星『デルタ』の指令室の司令席に座り正面の画面に映る各戦場の状況をすべて同時に確認していた。

「ギヤラルホルンの方はあのままでも行けそうだが、問題はEDMの方だな。だいぶ苦戦させられているようだ。ジャックがまともにモビルスーツを叩けずにいる。問題だな……アルミリアもアルミリアで怨敵に食って掛かっている」

PN01の視線に映る画面にはEDMの主力隊の状況と同時にギヤラルホルンサイドの状況も入ってきている。

「霊電を左側に集められるだけ集めてくれ。三勢力の三つ巴に持っていけ。うまくいけばギヤラルホルンが先につぶれてくれるかもしれない」

霊電の主力の一部が左側に集まりジムとグレイズに攻撃を始める。グレイズの攻撃がジムにあたろうとするとジムからの反撃をもつてついに三つ巴の戦いに移っていく。

「しかし、EDMが左側に戦力を集めているように見るが……」

19

俺の所属するファントムブラッド隊の旗艦ヴァルハラが兄であるビスケットを中心に前線に向けてこの工房を発ったのはほんの一時間前の事だった。

現在アルンに使われている全エネルギーは全てこの工房の近くに設置されているコロニーレーザーへと向けられている。

開発局の一番大きな工房は一番工房だが、この工房は開発局が私用目的で使用している工房。その工房の半分を占めているのはバルバトスリファインようにチューニングされている大型拠点攻撃用強化外装である『トール』である。

強化外装——『パワーツール』と呼ばれているEDMが独自開発したのはモビルスーツの強化用追加パーツである。サブレ専用が開発されたのは『トール』だった。

大きなミサイルと爆薬を内蔵したワイヤーやナノラミネートチップ内蔵ミサイル、ナパーム弾を内蔵した大きな武器コンテナが三つ。大きなクローアームが一つと同サイズのビームサーベルにメガ・ビームライフルが一丁装備されている。

「かなり大きいよな……戦艦一隻と半分の大ききがあるよな」

ソニアは『トール』の付近でノーマルスーツを着込んで最終調整に明け暮れていた。

俺は新型のパイロットスーツの感触を着て確かめている。素材やデザイン自体が変わった感じはしないが、最大の変更点はヘルメットだろう。フルフェイス用にカスタマイズされ基本的にバイザーは閉じて戦闘することが絶対になっている。多少の息苦しさを感じてしまうが、安全性は高いと開発局が太鼓判を叩くのだから間違いないだろう。それに、このパイロットスーツには脳波を図るための細工も施されていると言っていた。

もう一度バイザーを上げ、息を思いっきり吸い上げ肺に空気をいっぱい入れる。

そして、視界にバルバトスリファインの姿を確認する。

バルバトスリファインはバスタースタイルで待機状態に座っている。ごつつい装備を体中に取り付けており、俺はそんなバルバトスの方へ体を向ける。地を蹴りバルバトスの肩の上に降り立つ。

「サブレ……用意ができたわよ」

ソニアがそう呼びかけると俺は頷きコックピットへと入っていく。

20

ジャックが思いっきり後ろに飛び回避すると、ジムのコックピット目掛けてビームサーベルを振り下ろす。しかし、途端に情報から視線を上方へと向ける。グシオンのハルバードが振り下ろされ、バエルブルーレイはそれをかろうじて回避する。

ジャック自身はようやくの想いで現れた自身の標的に一目散に襲い掛かって行く。明楽もハルバードを両腕で構えサブアームでビームサーベルとバスターライフルを構える。

グシオンのバスターライフルの一撃をビームの翼で受け止めつつ、サブアームのビームサーベルで攻撃を仕掛ける。しかし、ジャックはそれを同じようにビームサーベルで受け止めた。

ジャックは興奮を抑えきれないように襲い掛かる。

「明楽！ 予定通りに敵の視線を左側に集めて」

「了解！」

同時にシノの背中に搭載された高出力のバスターライフルの攻撃をデルタの正面入口へ向けて思いっきり放つ。大きな爆発音とともに頑丈な正面ゲートが破壊されていしまう。

シノはヴァルハラから離れていくと左側に向けて機体を走らせていく。敵部隊が釣られるように左側に寄っていく。

「よくしーもつとだーもつと来い!!」

シノは今度の照準を正面ゲート周辺の艦隊目掛けてバスターライフルの火を放った。敵モビルスーツが大軍のように左側に寄っていく。それがEDMの狙いだと知る由もなく。

P N O 1は画面越しの監視に違和感を感じ始めていた。

何かがおかしいという感覚がP N O 1の脳裏をよぎる。この段階でフアントムブラッド隊を使ってきた意図が理解できない。

「正面ゲート付近のモビルスーツが左側に寄っています」

部下の一人がそう進言したことであろうEDM司令官の目的を理解できた。

気が付けば右側にEDMのモビルスーツ隊がいなくなっているのに気が付く。それどころかギャラルホルンともつれ合うような形で霊電の主力の一部が右側に集まっていた。

「モニターを月面に集めろ」

部下が焦る様に正面画面を月面に切り替える。いつの間にか月面は視界に映るほどに近づいており、同時に月門施設の大きな円状の蓋が開いていく。

「……まずいな。まさかあんな隠し玉を持っていたとは」

月面に隠していた兵器の本当の目的にP N O 1が気づいてしまった。

「P N O 1！あれは我が軍が開発しているコロニーレーザー!？」

「ああ、まずいな。狙いは右側に集まっている我が軍のモビルスーツ隊と小惑星の軌道変更か。全員に衝撃に備えるように伝えろ」

P N O 1が指示を出す但那れより早くEDMが動いた。月面が強い光を放つと同時に恐ろしいまでの衝撃が指令室に届いた。

揺れ動く床に全員が踏ん張る。画面にノイズが走り、途端にそれが回復すると同時にP N O 1が珍しい怒鳴り声を上げた。

「デルタと各部隊、各所のダメージを申告しろ！」

「デルタ右側に大きな穴が開きました！それに伴い霊電部隊の一部が消滅！前線に動揺が走っています！」

しかし、軌道をそらすほどのダメージにはならなかったが、それで終わるとP N O 1は思わなかった。

彼にはこの攻撃の裏にあるEDMの考えを読むことに集中する。

そして、一つの可能性に辿り着いた。

「現在の降下軌道コースを急遽変更。降下コースを地球のギャラルホルン本部に変更」

「で、ですが!? EDMを潰す方が先では?」

「気が付かんか? 敵の狙は右側より内部に上陸することだ。このまま近づけば上陸を許すことになる。今軌道を変更すれば作戦が失敗することは無い。むしろ強行突破をすれば失敗する。分かったら軌道を変更しろ」

「は、はい!」

部下が急いで軌道の変更を始めると、PN01は何か近づいてくると感じ取ってしまう。

22

ソニアは電源が回復した空になった第一工房に一人佇んでいた。

工房の中にテマルが入り込んでくるのを確認する。テマルは眼鏡の位置を直すと工房の奥へと突き進んでいく。ソニアは一瞬だけ嫌そうに表情を曇らせるが、途端に真面目そうな表情に早変わりする。

「行ったのかい? 彼は既に?」

「ええ、行くとわかったら早かったわよ。『ツール』をかつさうように持って行ったわよ……全く。あれだけの兵器を雑に扱うんでしょね……」

ソニアはどこかうんざりするように首を横に振る。テマルは面白そうにクスクスと笑って聞き流す。

「無理無理。彼にデリケートっていう言葉が通じるほど物分かりが良いのなら君は困らないだろ? 彼は代表と同じで問題の渦中に自らつっこんでいく物好き二世だからね」

「そうね。全く……どうやったら代表に似るんだか……」

ソニアはやれやれと首を横に振りながら通路の奥へと消えていく。テマルはどこに行くのか分かっていながらあえて尋ねる。

「どこ?」

「分かっているでしょう? 彼らの機体は実験用機なのよ? 私がいなくてどうするの?」

ソニアはシャトルへ向けて歩き始める。テマルはニコニコと笑顔

を絶やさずに肩をすくめた。

「気になるっていいばいのに……素直じゃないな」

23

戦場に立つ一人の少年は今まさに渦中という言葉が似あう場面に遭遇した。

事前に聞かされていたと言っても聞くで見るとまるで違う。コロニーレーザーが放った一撃は敵モバイルスーツを一掃しただけでなく、小惑星に大きな穴をあけた。

少年がEDMに入ろうとしたきっかけはドルトの一件だった。

それ以前からコロニーの扱いはひどく、コロニー出身者の労働条件は酷いというレベルではなかった。それは少年の両親も同じこと。しかし、そんなときにドルトの一件は起きた。

『ドルトの革命』

そう呼ばれた一連の騒動の後、コロニーでは同じような反抗作戦が開始されたと同時に反抗作戦にギャラルホルンは駆逐という形を取った。

その後革命軍と鉄華団の革命も失敗に終わり、その後革命を起こそうという流れは起きなかった。

しかし、それで終われば話は簡単だっただろう。それで終わらなかったのがマクギリス・ファリド事件だった。

EDMという名前はこの時からコロニー圏に広まっていくようになった。事件の一年後に彼らは幹部メンバーを、各コロニー圏の秩序と平和の締結によこした。この時少年はビスケット・グリフォンとサブレ・グリフォンに出会った。

当時、スラムの労働者層のトップに立っていた少年の父親の元に二人は訪れた。二人の若者は会社のコロニー圏撤退とそれに伴う新しい社会の締結を提案した。

大の大人と真正面から食って掛かる二人の若者に少年は憧れを抱いた。

モバイルスーツパイロットは苦手だったが、それでも頑張れたのはあの二人のようになりたいと願ったからだ。

そんな少年もこの間16歳になり正規兵として扱われるようになった。恰幅の良い自分がパイロットでいいのかどうか悩んでいた。いつかあの二人に会いたいという願いを抱いていると、少年である『メロ・デロン』の視界に霊電が現れた。

操縦桿を動かして回避しようとするともメロのジムの腕が吹き飛ばす。死を覚悟するが、そんな敵モビルスーツが大きなビームで蒸発する。少年を捕まえてヴァルハラまで移動するのは強化外装に乗り込んだガンダムバルバトスリファインだった。

ガンダムバルバトスはミサイルを大量に打ち出すと、弾幕が視界をふさいでいる間に逃げ出していく。

「大丈夫か？メロ」

「ど、どうして僕の名前を？」

メロは驚きを隠せず、つい聞いてしまう。サブレはまるで当然のように答えた。

「忘れないさ。君は俺達に似ているから」

24

俺はメロのジムを本来の所属ではないヴァルハラへと格納する。同時にソニアからのメッセージを兄へと伝える。

「ソニアからメッセージ。ファントムブラッド隊は一旦引いて本体に合流しろと司令官からの命令。同時にソニアがこっちに接触する。以上」

ヴァルハラの前に鎮座するツールにビスケットは艦長帽をかぶり直し、にやけながらサブレに力強く声を発する。

「じゃあ、俺たちが撤退するまでの間に敵の相手は任せたよ」

「はいはい。遅れた分はしっかり働かせ」

同時に小惑星の軌道が大きくそれ、地球降下コースへと変更していく。



## スターダスト・インパクトⅣ

25

メロがパイロットになったのは単純に稼ぎが良かったためである。EDMで一番稼ぎがいい職種は幹部クラスでその次が本部の職員と艦長クラスである。しかし、本部の職員になるには教習学校の他に幹部もしくは本部職員の推薦が必要になる。メロにはそんな人脈などあるはずも無い。艦長クラスになるには百科事典のようなサイズの戦術理論が書かれた参考書をフル暗記する必要がある為、あっさりあきらめた。泣く泣く最後の案として就職したのはパイロットだった。

戦うことは苦手だし、というよりできることなら戦いたくない。しかし、いくら両親の収入がよくなっても、兄弟達の学費のためにまだお金は必要である。そのため、少しでもお金を稼ごうと考えてパイロットになった。

メロは休憩室でのんびりしている。けっしてサボっているわけではないし、サボりたいわけでも無い。今後の予定をビスケットから聞くためにここで待機していた。

自分が今後どうするべきなのか？このままこの艦と共に行動をするのか、本来の部隊に戻るのか？

自動ドアからビスケットが大きな体を休憩室へと入れると、メロの右腕をつかんで廊下に出ていく。メロは戸惑いながら廊下を歩いていく。

「??？」

ビスケットは笑顔を絶やささないように微笑みながら振り返り早口で喋りかける。

「今補給部隊から補給を受けているからメロ君はそのまま補給部隊と一緒に本部まで戻ってもらう。その後は本部の人から人事異動の場所を聞くからその通りに動いて」

「人事異動？僕、どこに行くんですか？」

「秘密。行けば分かるよ」

メロとビスケットの前には大きなコンテナが通るための艦と艦を

繋げる通路ができていて、そこで足を付けメロを送り出す。

ビスケットはメロの背中を叩いて送り出す。メロは一度ビスケットの方を確認するようを見ると、ビスケットは戸惑うように歩き出すメロを笑顔で送り出す。

今は何をするのも分からない。それでも憧れの人を背に歩き出す。

26

ジャックは苛立ちを隠せずにいる。先ほどからEDMの部隊が撤退する為にとバルバトスと強化外装『トール』は戦場を蹂躪しながら木星帝国量産機である『霊電』とバエルブルーレイ相手に奮戦していた。高速で移動を続けながらミサイルと高出力ビーム砲でかく乱しながら撤退の援護に入る。

ジャックはバルバトスに遠距離攻撃を仕掛けるが、大きな巨体に似合わないような俊敏さと速度であっさり回避する。

サブレの視線は無事前線から撤退したEDMの艦隊を確認すると、武器コンテナに隠してあるナノラミネートチャフトスモッグミサイルで視界的にも機械的にもかく乱することに成功する。大急ぎで戦場から離脱する。

「くそー逃げんな!!」

追いかけてようとするジャックにPN01からの冷静な声が聞こえてくる。

「ジャック。いったん戻って補給しろ。EDMがサイドの攻撃に入るのには時間がかかる。ギャラルホルンの方も一旦撤退したと連絡があった。お前も戻れ」

ジャックは悔しさを滲ませながらデルタの中へと入っていく。

デルタの中は大きく分けていくつかの区画に分かれている。モビルスーツや艦隊の格納区画と指令室などの重要区画。そしてスラスターなどのエンジン区画に分かれる。さらに、この小惑星はそれ以外にも四つの小惑星を組み合わせてできており、そのつなぎ目に何本かの巨大なパイプみたいなものがいたるところについている。このパイプを全部破壊すると最大で四つに分けることができる。

ジャックはそのパイプをよけながらモビルスーツ区画ではなく休憩室がある区画へと足を進めていく。

着替えるのも億劫だと思い、パイロットスーツから着替えようとしてないジャックは休憩室に飛び込み、近くのソファに自身の体を預る。そのまま微睡、寝てしまおうかどうかを悩んでいると、再び休憩室のドアが開くのを音で認識し、首を動かして視線をドアを方に向ける。「だらしないですね」

不満が爆発したような機嫌の悪さがアルミリアの表情のいたるところからうかがうことができる。ジャックはそのアルミリアの表情から目的の人物を逃がしたのだろうと想像した。

「そつちも不満そうな表情をしているよ」

アルミリアは「フン」と返すとそのまま椅子に座り、意識を投げ出す。

アルミリアからすれば直前で兄に逃げられたと痛感していた。

しかし、焦ることは無いと自身の意識を整えてもう一度復讐の炎をともらせる。必ず殺すとマクギリスに誓い、そしてマクギリスが求めた世界を自分が作る。

瞳を閉じ、脳裏にマクギリスの様々な表情を思い出す。マクギリスが何を思っただけで行動していたのかを理解しているつもりだったアルミリアだが、だからといってマクギリスの全てを許しているわけではない。しかし、マクギリスの生き様はこの世界の歪みを現していると感じている。

PNO1はこの世界のシステムを別におかしくはないと言っていた。

それでもアルミリアは変えてやろうと思った。

復讐の為に殺す人間はまだまだ存在する。焦ることは無いと自分の心を落ち着かせ、ゆつくり目を開ける。

「待っていてねマッキー。マッキーを否定する世界を、お兄様を殺して見せる。マッキーが寂しくないようにいっぱい殺すね」

笑うアルミリア。ジャックはそんなアルミリアを冷やかすでもなく、止めようともしない。どうでもいいと考えている。

ジャック自身は自分が何もないと認識してしまっていた。

27

スキップジャック級に戻るとガエリオは精神的に追い詰められており、周囲の言葉に耳も貸さず自室へと足を進める。

妹が復讐心を燃やして敵として対峙していること、同時にその復讐心を作り出したのは自分であるという認めたくない真実。アルミアの言葉一つ一つが心に刺さり、揺さぶられる。戦うたびに精神的にも肉体的にも追い詰められていくことを自覚してしまっている。

マクギリスを殺したこと自体は後悔していない。しかし、この件だけは後悔してもいいと思ってしまう。もっとアルミアの気持ちを考えていればよかった。

そして、同時にアルミアは自分より強くなっており、下手をすればバルバトスのパイロットに迫ろうとする実力があるように思える。

単純な実力以外にも突出した強さがある。まるでこちらの動きが完全に読まれているようにすら思える。

EDMにも木星帝国にも負けているギャラルホルンの実態の原因はセブンスターズの怠慢だろう。仮想敵がいなかった三百年の状態は技術革新を遅らせるどころか、この数年で追い越されてしまうところまで進んでしまった。

その上ラスタルが死んでしまったことで新型開発計画が事実上の凍結状態になってしまった。

ラスタルが進めていた新型モビルスーツ『キツシュ』と呼ばれる新型開発に携わっていたヤマジン・トーカが行方不明になってしまい。計画を継いだ人物も計画の細かい内容までは聞かされていなかったらしく、その結果開発は進まず計画は凍結状態になってしまった。

キツシュの開発さえ間に合っていればこんなにも遅れることは無かった。

いや、それさえも言い訳だとわかっている。こんな言い訳をしてしまいうぐらいに自分が弱っているのだと認識していた。

アルミアの事を見向きもせず、ふさぎ込んだ妹に全く声を掛けようとしなかったのは何を隠そうと自分なのだ。

最も愚かなのは自分なのだというどうしようもない事実。

ジュリエッタはこれ以上ガエリオにどう声を掛ければいいのか分からず部屋の前で立ち尽くしていた。

28

ソニアが補給艦からヴァルハラに入ってきたのはサブレがヴァルハラに戻る一時間前の事だった。

大きなコンテナが三つ、それぞれのコンテナに『バルバトス』『グシオン』『フラウロス』と書かれており、高さだけでも人2・5人分に相当する。横幅も相当でモビルスーツの全高の四分の三ほどである。

そんなコンテナ三つが後方格納庫に収められると、ソニアはそのまま中のチェックに入る。チェックが済んでいる頃にはサブレは既に戻ってきていた。

トールはヴァルハラの下の部分にワイヤーで固定され、補給部隊からの補給を受けていた。

サブレはバルバトスを格納庫で整備のバトンを整備班に任せ、そのままブリッジへと足を進める。ブリッジに入るとサブレの顔面目掛けてハロが突っ込んでくるのを右手で受け止める。

「シノヤクタタズ！シノヤクタタズ！」

「シノさん！シノさんのハロがすごいことを言ってますよ！」

明楽がどこか面白そうにしている姿とシノのあきらめたような清々しい表情が対照的だ。シノは小さい声で「いいんだよ……」とつぶやいている。苦笑いを浮かべて話に入って来たのはイオリだった。

「戦闘中もずっとこの調子なんですか？」

「ああ、外した確率が多ければ多いほど文句が増えていくんだよ。今回は結構外れたからな」

サブレがハロをビスケットに向けて放り投げると正面の画面にアルベルトの生真面目な表情が映し出される。

「既に1〜4番隊が防衛線を作っている。お前たちは補給が終わり次第最前線に向かってもらおう。阻止限界点まであと少しまで迫っている」

数人が「阻止限界点」と呟くのと同時にアルベルトの画面を割る様

に右半分に阻止限界点の場所が映される。

阻止限界点……小惑星やコロニーなどの大きな物体が地球に落ちる前に軌道を逸らすことができる限界地点であり、同時にそこを突破されれば軌道を逸らすことは事実上不可能とも言われている。

そうならばプランBとして内部から破壊するしかなくなる。そうならば最終手段でファントムブラッド隊は地球降下を考えなければならぬ。その為に補給部隊は大気圏突破用のモビルスーツ専用兵器を用意していた。

「地球降下予想時間は1月1日の午前3時になると予想される。降下地点はギャラルホルン本部であると考えられる。それ以上に地球に落ちれば湾岸部に甚大な被害を被ることになる。お前たちは遊撃部隊としての役目を果たせ。以上」

アルベルトが通信を一方的に切ると緊張していた空気に耐えきれなくなった明楽が大きな声を上げた。

「耐えられない！話も難しいし！何言ってるのか分かんない!!」

「それはお前が馬鹿なだけだろ」

サブレが明楽にひどいツツコミを浴びせている間にもシノは神妙な面持ちを崩さない。

「結構厳しいよな？このままいけば6時間後には降下している計算だろ？あと三時間後には軌道を逸らす必要があるわけだろ？時間が少ないだろ」

「でも、ここで私達が何とかするしかないわよ。イオリ、一番隊との信任させていい？私補給部隊との通信に集中するから」

「コンドハヤクニタテヨ！」

「口が悪いな」

ビスケットの膝の上で文句を垂れるハロはそれ以降も罵倒の嵐を浴びせまくる。サブレは内心「ソニアはこいつの性格をどう設定したんだ？」と疑問を抱いた。

ビスケットはハロの頭を撫でながら「駄目だよ」と声をかける。

「ちよつと待ってください！それは本当ですか!？」

イオリが焦りだし、早口で通信先に確認を取る。通信が終わると絶

望的な表情を浮かべる。

「先ほど小惑星が速度を増したそうです。このままでは予定より早く阻止限界点を突破されると」

「補給部隊！補給完了！いつでも出れます！」

「全員持ち場に！ヴァルハラは阻止限界点に直接向かいます！」

メイデンが進路を阻止限界点に向けてヴァルハラを移動させる。

29

メロが補給艦で本部に戻ったのはヴァルハラが阻止限界点に向かってから一時間が経つてからの事だった。

本部地下に存在する指令室に向かう為にはアルンの都市部に入る必要性がある。先ほどようやく電力が戻ったアルンの町は人はいないもののそれ以外は元通りになっているように見える。

車を動かしているのは本部勤務の職員であり、ザ・生真面目という七三分けの髪型に職員用のスーツのような制服を着ていてかっこいいと思ってしまう。

自分の体はビスケットさんまでとは言わないまでも恰幅のいい体格をしている、サブレやシノのように細身な体がとっても羨ましい。

(早く帰って妹や弟達に会いたいなく)

北の港からアルンに出ると、山の谷間から道路がまっすぐ伸びている。山には雪が積もっていて、そのままビル群に向けて移動していく。

不安なまま本部ビルの地下駐車場に入ると、そのままエレベーターに入る。赤いカードキーを当てると、エレベーターが地下へと進んで行く。地下5階でエレベーターが止まり、メロは職員と共に広い空間に出た。二階構成の部屋でメロが立っているのは二階部分だった。一回には30人ほどが指令の仕事をしている。

メロの目の前にEDMにおいて二番目に権力を持っている人物が体をメロに向ける。

アルベルトがメロの近くに寄ってくる。メロは緊張でがくがく震え始める。

「初めましてだな。アルベルト・シュキユナーでEDMの副代表と司

令官をしている」

「メ、メロ・デロンです！」

「メロ君は本部の職員がどうやってなることができるか知っているかな？」

アルベルトからの質問に一瞬だけ考えてしまい、記憶の糸をたどって確かめる。

「確か、幹部クラスか本部職員の推薦が必要って。もしくは大学の経済学なんかを学んでいることでしたっけ？」

「その通りだ。要するに、簡単に言う。先ほどサブレ・グリフォンとビスケット・グリフォンから君を本部の職員に推薦を受け、それを我々が受理した。ビスケット・グリフォンはともかく、サブレは幹部の中でも結構有名人だからな。この本部が君の職場になる」

サブレとビスケットのやさしさに涙があふれてくる。

しかし、泣いている場合ではないと言わんばかりに部屋に入ってきた男は焦ったように声を荒げる。

「アルベルト司令官！先ほど一番隊からの報告です！小惑星デルタが速度を上昇しています。このままではあと少しで阻止限界点を突破します」

「……敵の司令官に裏をかかれるとはな。最初っから第二スラストの出力を押さえていたわけか。敵の狙いは最初っから地球だったわけだ。アルンは囷か……」

「せ、先輩……」

今、阻止限界点で第二の攻防が起きていた。

30

一面がトウモロコシ畑で茶髪の髪をした双子の女の子は畑から体を起こし、持っていた籠を近くのトラックの荷台にトウモロコシを入れてしまう。他にも孤児院の子供達も同じように手伝っており、双子の妹は笑いながらいつもの仕事を終え、孤児院の子供達を院まで送り、家に帰ろうとする足を金髪の髪的女性が止めた。

「クツキー、クラツカ。仕事終わりですか？」

クツキー、クラツカと呼ばれた双子の女の子はクーデリアを発見す



ると駆け寄っていく。そして、二人の祖母である桜・プレッツェルが腰をトントン叩きながらクーデリアに近づいていく。

「仕事は終わったのかい？」

「はい、二人も仕事は終わったのですか？」

「クラツカがサボってただけだね」

「さ、サボってないよ！」

三人で笑いながら家の中に入っていくと、車を止めていた金髪の男性であるユージン・セブンスタークと黒目の肌をしているチャド・チャダーンが家の中に入っていく。

「背が高くなって……あのチビ達が立派になったもんだよな」

感慨深いとばかりにうんうんと唸るユージンにクツキーが不満を隠さないように頬を膨らませてユージンの体を殴りつける。ユージンはその攻撃を軽く受け止め笑いを誘う。

「失礼だよ！あれから何年たったと思ってるの!?そりゃあ大きくなるよ！」

そんな言葉にほぼ全員が反応する。部屋の奥から姿を現した明るい薄い茶髪のアトラも同じように少しだけ俯く。クツキーの視線は自然と棚の上にある鉄華団の集合写真に写る。そして隣にあるビスケットと共に移った写真も触りながら涙を流す。

「あの頃は楽しかったのにな……。今でも楽しんだけどよ……」

しみりしてしまふみんなと違い桜はビスケットの写真を見て意味深な微笑みを浮かべるが、周囲はそんな微笑みには気が付かない。

アトラと同じ髪色の少年が二階から駆け足で降りてくる。テーブルを叩きよじ登ろうとするが、その拍子にテーブルの上のリモコンが落ちてテレビの電源が入る。すると、テレビでは小惑星を取り囲むように戦闘が起きている様子が映されていた。

「な、なんだよこれは？」

チャドが急いでリモコンを広い音量を上げる。すると、リポーターの声が聞こえてくる。

『EDMとギャラルホルンは今現在小惑星を地球に落とそうとしている謎勢力に対して攻撃を行っております』

「小惑星を地球に落とす?」

すると、画面の奥から大きな武器コンテナを装備しているバルバトスとグシオンが画面すれすれを通り過ぎ、リポーターの乗る船にあたりとうとしている攻撃をフラウロスが受け止め、一度こちらに顔を向ける。

家にいる全員の視線はピンク色にカラーリングされたフラウロスの姿に誰かが呟いた。

「流星号? シノなのか?」

ありえないと自分に言い聞かせながら目の前の戦いに視線を移していく。

31

ミサイルがデルタに空いた大きな穴を防衛している霊電群に対して放たれ、霊電はそれをライフルで落としていく。ワイヤーに内蔵してる爆薬を三機ほど霊電の体に巻き付け、一気に爆発させていく。

グシオンはハルバートを振り下ろし、バエルブルーレイと正面からぶつかる。テレビ局の船を安全圏まで逃がしていたシノが背中のバスターライフルで霊電の体を貫いていく。

「やばいぜーこのままじゃ……」

誰一人としてスラスターに取りつけずにいた。

バルバトスが回り込むようスラスターの方に向かうと、霊電が陰からトールの武器コンテナにとりつく。振り払おうと体を揺さぶる為に速度を落とすと、その隙にとどんどん霊電がくっついてくる。

「くそー意地でも時間を稼ぐつもりか?」

武器コンテナを破壊していく霊電を巻き込むため武器コンテナの自爆装置を起動させ、バルバトスはそのまま逃げていく。トールを破壊し霊電を巻いてさらに奥へと進んで行きスラスター前に辿り着くが、それすらも霊電が妨害に入る。

「邪魔をするなあ!」

珍しく声を荒げて背中のバスターライフルを霊電に向けて放つ。6機の霊電相手に苦戦を強いられるバルバトスはスラスターにすらたどり着けない。

「阻止限界点突破まで10、9、8」

イオリが声を上げて数え始める。一部のパイロットも同じように数え始め、PN01の正面の画面にも同じように映し出される。

「7、6、5……」

サブレの焦りがさらに加速していき、反対側からシノが姿を現すがそれを霊電がもみくちやにする形で妨害する。

「突っ込んでくるんじゃねえよ!」

「4、3……」

上からガエリオがキマリスを駆けて姿を現すと、それをアルミリアが妨害する。

「アルミリア!地球にはお前の父上だったいるんだぞ!」

「関係ありません」

そのままガエリオを連れて後方ハッチまで連れていく。

「2、1……」

バルバトスとフラウロスが同時にバスターライフルで攻撃しようとするが、霊電がそれを身を挺して軌道を大きく逸らさせる。ビームは当ることなく宇宙の果てに向けて放たれ、同時に三勢力のモビルスーツに同じような声が響いた。

「0!小惑星、アルタ!阻止限界点突破!」

その瞬間だけ全機の動きが完全に止まってしまふ。

速度を増しながら地球に向けて動いてく小惑星は地球の重力に引かれるように移動していく。

## スターダスト・インパクトV

32

小惑星デルタが地球降下までおおよその時間で約一時間が過ぎようとしていた。

眼前に通り過ぎていく、そんな姿をジッと眺めていられるほど俺達ファントムブラッド隊に猶予はありはしない。実際こうしている間も小惑星デルタは地球に近づいているわけだし、考えている時間すら惜しい。

俺はバルバトスの強化外装であるトールの出力を最大まで上げ、そのまま正面ゲートへと向かおうとする。

「サブレー！正面ゲートはだめだ！青いバエルと明楽の戦闘が激しすぎて……！作戦変更しよう！」

「……チツ！分かった。プランBで行く」

プランB……本来正面ゲートからバルバトスが壊れた穴からフラウロスが侵入する手筈になっている所をバルバトスは裏ゲートから強引に突破する。それがプランB。

トールが向かう方向を裏ゲートの方へと変更する。裏ゲートに近づくとつれ木星製のモビルスーツが数機ほど襲い掛かってくる。爆弾入りワイヤーを展開し、5機ほどの機体をまとめて吹き飛ばしていく。

「サブレー……っちは突入準備ができたぜ！そつとはどうだ？」

シノからそんな声が聞こえてくるのを俺は「あと少し……5分ほど」と簡単に答えつつ高出力ビーム砲がさらに二機のモビルスーツを焼き殺していく。空いたモビルスーツの隙間をさらに強引に通り過ぎる。

正面に二機のキマリスと緑色のバエルが戦っているのが見えてきたが、俺はそんなことは知ったことから、武器コンテナのミサイルのカードリッジをスモックミサイルとナノラミネートチャフ搭載型ミサイルに変更した。後ろから追いかけてくる三機のモビルスーツを武器コンテナの一つを分離して目くらまし代わりにする。

「トール最後の仕事だ。盛大に決めよう」

武器コンテナの中のミサイルを全て射出していく。裏ゲートの周辺に白い煙とチャフをまき散らしていく。視界と同時にレーザーがまとめて不能状態に陥ってしまう。

高出力ビーム砲を裏ゲートに向けて放ち、かすかに貫かれた裏ゲートにそのままトール事突っ込んでいく。爆散したトールからバルバトスの体を守るための守護コンテナが裏ゲートの中へと強引に入っていく。

「シノー！作戦開始！」

「おうよ！」

同時に壊れた穴からフラウロスが強引に入っていく。

バルバトスとフラウロスの作戦が同時に始まろうとしていた。

33

三機のガンダムフレームの姿を確認したユージンの狼狽は桜の家にいる誰よりも強かった。

「なんだよ！バルバトスもグシオンもフラウロスも……大破したんじゃないかったのかよ!？」

落ち着かないユージンの肩を黒い肌をしたチャドの手が置かれ、首を左右に振る。一旦落ち着いたユージンはソファに座って靴を何度も何度も床に叩いていく。

代わりに調べ物を頼んでいたクーデリアが電話を切るところだった。

「ククビータさんとテクスターさんが代わりに調べてくれました。バルバトスとグシオン、フラウロスは掃討作戦の前後に経済防衛機構という組織がギャラルホルンから強奪したそうです」

「……強奪ですか？」

チャドが驚きと共に立ち上がり、周囲にいる人物も桜を除いて驚きが大半を占めている。あのギャラルホルンから強奪するという蛮行と言ってもいい行いをどうしてギャラルホルンは黙認したのだろうか？そういう疑問を声に出したのは薄い茶髪の大人の女性であるアトラだった。

「そ、そんなことをしてギャラルホルンが黙っていないでしょう？」  
「その通りです。そして、それこそが経済防衛機構代表であるマハラ  
ジャ・ダースリンの狙いだったんです」

クーデリアの口運びは重く、視線を桜・プレッツェルの方へと向け  
意味深な微笑みを浮かべる桜を複雑な表情に向ける。

クーデリアは知る限りの情報を開示した。

「経済防衛機構は一度だけギャラルホルンから攻撃を受けたことがあ  
ります。しかし、経済防衛機構はこれを退け、ギャラルホルンは最終  
的に当時のクジャン家当家が命を落としたことでこれ以上の戦いは  
不毛な争いになると和平条約を極秘裏に結びました。しかし、その内  
容を簡単に言えば『互いに戦闘はしない』と『戦闘仕掛けた方が悪い』  
という内容です。これは簡単にまとめたのですが、本当に簡単に言  
えばそんな内容です」

そんな言葉に反応したのはやはりユージンだった。

「だったら……！」

しかし、クーデリアが言葉を続ける前にグリフォン姉妹の一人であ  
るクラツカが何かに気づいたように小声でつぶやいた。

「戦うことを禁止しているけど盗むことを禁止はしていない」

小声が聞こえてきた周囲もようやくマハラジャという見たことも  
無い人物の狙いが分かってしまったようで、「ハッ！」と意識し始め  
た。

「そうです。条約には盗難に関する項目は存在しません」

「で、でも……普通」

再びチャドが納得できないという風に食いつくが、それにクーデリ  
アは毅然と返す。

「では、バルバトスたちはギャラルホルンの所有物でしょうか？違  
うはず。鉄華団の所有物をほとんど強奪に近い形で奪ったのは  
ギャラルホルンです。フラウロスに関してはギャラルホルンが回収  
する前に経済防衛機構が回収しました。彼らはギャラルホルンが所  
有権を主張する前に盗んだだけで争いごととは起こしていないのです。  
しかし、当時はそんなことは知りもしない。だからこそそこに経済防

衛機構は罨を張りました。『災いの地』と呼ばれる地にラスタルは罨を張り、強奪犯を襲いました。先に仕掛けたのはアリアンロッド艦隊の方でした。それを口実に前後はさむように艦隊を配置し、同時にラスタルの腹心の二人を拘束し、ラスタルは状況的に降伏するしか無かったのです」

重い口を閉じ、周囲にいる者達は口を閉ざしたまま頭の中で思考を巡らせる。しかし、その話にクーデリアが口を開くことを躊躇する理由にはならない。全員はその話に続きがあると理解した。クーデリアの口が重たくさせる、そんな理由が。

「クーデリア……？」

「……ラスタルに提示された条件は互いの仕事をきっちり分けるということです。経済防衛機構がコロニーなどの宇宙の自治権を、ギャラルホルンは地球と火星の自治権を分けようという話。そして……今後鉄華団残党への掃討を含めた作戦や攻撃の全面禁止でした」

ユージンは力強く机をたたいて啞然としていった。ユージンにはあの作戦の後、ギャラルホルンが自分達に掃討作戦の為に部隊を動かさなかったのは単純に必要なないと判断したと勝手に決めていった。しかし、真実はEDMが裏取引でそういう風に決めた結果だということが分かってしまった。

しかし、同時にどうしてそんなことをEDMが取引に入れたのかが疑問だ。ユージンだけでなく、他のメンバーも同じような意見に辿り着いたらしい。実際チャドが聞こうと前のめりになるが、それを遮る様にクーデリアは桜・プレッツェルの方へと向く。

あくまでも桜・プレッツェルは微笑んで返すだけ。

「桜さん。あなたは知っていたんですね？」

全員は首を傾げ視線をそれぞれに向ける。桜が答えようとしなない代わりにとクーデリアが口を開いた。

「ビスケット・グリフォンさんには双子の弟さんがいらっしやいます。サブレ・グリフォンさん。経済防衛機構の幹部クラスの人だそうですね。そして……多分、団長さんと接点があったのだと思います。実際……ビスケットさんは現在EDMの幹部クラスに名前が載っている

そうです」

シヨックでクッキーは涙をぼろぼろ流し、ユージン達は「ありえねえよ……」と事実を受け止めきれずにいた。クラツカは帽子を抱きしめ二度と会えないと思っていた兄の名前をつぶやく。

「お兄……会いたいよ……」

34

俺の予想では多分弟であるサブレはオルガと接点があると予想している。理由としては、EDMが革命軍や鉄華団掃討作戦を利用してアルンを手に入れる作戦には革命軍の情報が必要だと思う。実際革命が起きてから災いの地での罠を張るまで時間を考えても革命が始まってから準備をしたのでは足りないような気がする。実際、フラウロスを回収した手際は見事といってもいい。戦いから追撃作戦に移るまでのほんの一時間に満たない時間で回収後、ばれないように離脱している。それだけでも革命軍や鉄華団からの情報提供があったと確信していた。

サブレは語ろうとしないし、問いただしても絶対に答えないだろうことは明白だ。

でも、オルガに聞くことはできないし、シノも何も知らなかった。一度だけサブレの通信履歴を調べたことがある。不明な通信履歴が二件。シノとの話で聞いた鉄華団の行動と合わせた結果、名瀬さんがギャラルホルンから追われ始めたときと、ジャスレイ討伐後革命開始前の時間に一度ずつ同じ人物と連絡を取っている。

オルガだという確信する理由は特にない。

オルガがいつの時点でサブレと接点を持ったのか、同時に何があったのかは想像できる。多分島での戦いの後だろうと想像できる。あの時だけはサブレが自ら鉄華団のそばまで近づいていた。

俺の遺体という謎の言葉にはこの際突っ込まないようにするが、俺の遺体をめぐってサブレとオルガの間に何かがあり、互いに連絡先を交換したと予想する。そして、オルガは革命前にサブレに連絡がいった。その結果、EDMはギャラルホルンの裏をかくことができたと思した。



いつの日かその辺の話を知りたいと思っている。

35

バスタースタイルを装備したバルバトスで小惑星内の通路を進んで行く。四つに分かれた区画の一つの機密区画の奥へ奥へと突き進んでいく。

兄の作戦の一つはシノがフラウロスで四つに分かれた区画を破壊し、小惑星を分割する作戦を行う傍らで俺はスラスターを破壊して地球降下までの時間を稼ぐ。

その為に小惑星のスラスターのある区画のドアが開き、大きな空間に出る。艦船三隻分はあろうかというほどの大きな空間。球体の空間に反対側に赤とピンクのキマリスが待ち構えていた。

「兄さんの作戦がばれていたというわけか……」

「ここまで来るとは思いませんでしたが、PN01はこれを予想していたわけですね……。初めまして、アルミア・フェアリドです」

「フェアリド？じゃあ……君はマクギリス・フェアリドの……」

互いにならみ合うような状況になっているが、このままジツとしていることはできない。今、こうしている間にも小惑星は地球へと落ちていく。

背中のミサイルポットから六個のミサイルをまとめて放つ、キマリスレッドクイーンはフルドレスからの拡散ビームがミサイルをまとめて叩き落とす。バルバトスはその隙に近づき、背中のバスターライフルでキマリスに攻撃を加えようとするが、キマリスはフルドレスを展開し、ビームシールドで攻撃を受け止める。

「何じゃそりゃ……」

ついおじさん言葉を放ってしまいが、実際それ位の衝撃を受けた。

「あくまでも足止めですが、死んでしまっても恨まないでくださいね」

「じゃあ、俺が殺しても恨まないわけだ」

「無理です」

「じゃあ、そんなことを言うんじゃねえよ！」

フルドレスはバルバトスの周囲から一斉に同時に攻撃を仕掛けてきた。連続で繰り出される攻撃をかいくぐり、まるで踊る様に移動し

ながら腰に追加装備していたライフルで反撃する。

ドレスの一つは爆発しながら破片を周囲にまき散らしていく。予想通りの結果ではある。攻撃をしているときは防御が出来ず、防御をしているときは攻撃ができない。なら、攻撃を確実に回避しつつドレスを落としていくしかない。

「サブレ！まだなの？」

「兄さんの作戦がばれてたみたいだけど……悪いけど、スラストターの破壊は不可能みたいだ。俺も生き残るのに忙しから後はシノの作戦が成功するように祈っておいてくれ！」

そういうと俺は兄からの連絡を切り、戦うことに集中する。

ドレスはアルミリアの周りに漂い、こちらに向けて銃砲を向ける。

俺はバスターライフルをキマリスの方に向け睨み合いが続き、フルドレスとバスターライフルが同時に火を噴いた。

36

サブレの行く先が分かり、その行く先にキマリスレッドクイーンを先回りさせたというわけだ。そんな敵の存在に焦り、再び作戦の為に思考を始める。

「シノ！サブレの方は作戦失敗だ！早く破壊して！」

「そんなことを言ってもよお！敵の数が多すぎて……こつちも無理だ！」

EDMのほとんどの部隊が撤退を始めていて、ギャラルホルンですら後退をし始めている。小惑星の軌道は大きく逸れたとは言っても地球に劣ることが変更したわけじゃない。

俺は覚悟を決め、作戦をファントムブラッド隊に向ける。

「これよりファントムブラッド隊は地球降下作戦を同時並行しながら小惑星への最後の攻撃に入る。敵は小惑星が地球降下時には戦力が低下すると考えられる。本部へ報告後、降下準備に入る。ソニアさんとゼムさんにサブフライトシステム機を射出後大気圏突破モードに移行する！」

「了解！！」

各員から連絡が入り、俺はもう一度目の前の敵に集中する。

PNO1は指令室に存在する自身の椅子から立ち上がり周囲に聞こえるぐらいの声を発する。

「これより作戦の成功を告げる。各員作戦通りに撤退し以後、各隊長クラスの指示に従う事。ご苦勞だった」

オペレーターを含めた男女は右腕を額の上に乗せる敬礼を行うと、そのまま全員が部屋から出ていく。PNO1も指令室が空になったことを確認した後部屋を退室していく。

人がいなくなった小惑星を地球に落とすという意味を彼は理解していない。そもそも理解するつもりは彼には無かった。

PNO1『personal network』の略称であり、あくまでも自分はある人物の観察が自身の主だった仕事であり、それ以上に興味はない。

観察し、それを本体に報告するだけ。その為に木星帝国はあくまでも彼自身の依り代でしかない。さらに言えば、EDMに観察対象がいればEDMに入っていただろう。それぐらい、彼にとって組織とは単純な依り代でしかない。

もひとつ考えてしまおう。EDMに観察対象がいれば彼はEDMに入っていただろう。

歩いてシャトルに辿り着く。目の前に立つ木星帝国の士官ですら興味はない。

「今後我々は旧ヨーロッパ地区に降り立つ。以降一週間以内にヨーロッパ地区を占拠する。外にいる部隊も指示通りに動くよう伝えてくれ。私達も降下するぞ」

「はっ！アルミリア様とジャック様にも同様に伝えます」  
彼らもPNO1からすれば観察対象の代わりでしかない。

しかし、今回の戦闘データで気になるデータが存在することに気が付く。バルバトスの脳波が前回からかなり上がっていることに気が付いた。

『アカシックレコードにアクセス開始。データを転送。最優先観察対象『エヴォ・エクス』は変更なし、第二候補に『サブレ・グリフォン』

に変更』

彼はアカシツクレコードにデータを転送し、地球へと降下準備に入る。

床ハッチが開き、シャトルはゆっくりと降下を始める。シャトルの視界の先に青い地球が見えてきた。

38

アルミリアのドレスの連撃とバルバトスのバスターライフルが外壁を砕いていく。いよいよ時間が無くなって来た。

アルミリアのキマリスは俺が侵入した隔壁から脱出するため、バルバトスに向けてフルドレスの弾幕を張り視界を2, 3秒だけ塞いでしまう。できた隙を見逃す敵ではなく。走ってその場から離脱していくアルミリア。

「先にスラスターを破壊していくか……」

アルミリアが頑なに通そうとしなかった隔壁を破壊して先に進んで行く、すると正面の空間には巨大エンジンが複数にわたって並列動作しており、俺はバルバトスのミサイルを全弾使用するつもりで破壊した。

「あいつを追いかけた方がよさそうだな」

バルバトスのスラスターを全力にして分割区画に現れると、フラウロスが十機近くのモビルスーツ相手に苦戦しているところだった。俺はバスターライフルで二機のモビルスーツを落とす、シノのそばまで近づく。

「シノ、撤退するぞ」

「待ってくれ。あと少しで半分につきそうなんだ」

「ここまで降下すれば半分にしたところで破壊できない。むしろ被害が増えるだけだ。それにそろそろ離脱しないと重力に引きずり込まれて終わるぞ」

シノは悔しそうに表情を歪ませる姿を確認する前に小惑星の外へと出ていく。シノも続いて逃げ出していき、二人で明楽の援護に向かうが、その前にサブフライトシステム機である通称『ハヤブサ』が姿を現した。

黄色に近い茶色をしており、平べったい姿は人の操作する区画が見当たらない。フラウロスとバルバトスはハヤブサに乗り込むと正面ゲートで戦っている明楽の元まで一気に進んで行く。

数分で正面ゲートに辿り着くと、明楽もハヤブサに乗り込んで戦っている。俺の予想通りにアルミリアの乗り込むキマリスも明楽をバエルと共同で囲むように戦っており、俺はアルミリアの乗るキマリスに向けてバスターライフルで攻撃を仕掛ける。シノは背中のツインバスターライフルの連射攻撃をバエルブルーレイに向けて放ち、バエルブルーレイは背中の翼でこれを受け止め距離を取る。

「死ぬかと思いましたよお!!助けに来るの遅くないっすか!？」

「何だったらここで死んでいてもいいんだぞ?機体はちゃんと回収してやるよ」

明楽の心の叫びを俺は冷たく引き離す。シノが代わりに通信に割って入る。

「助けに来たんだからいいじゃねえかよ」

「そういう問題じゃないでしょ!!こいつらめっちゃ強いんっすよ!」  
「多分敵の主力だろうなあ」

ミサイルでキマリスをかく乱させつつバスターライフルで攻撃するがフルドレスのシールド機能が完全に攻撃を防ぐ。

バエルのツインビームサーベルがキマリスとフラウロスに同時に襲い掛かる。

「いい加減死ねよ!!」

バエルブルーレイの荒れ具合は少々異常に見える。どういう戦闘を繰り返せばあんなに荒れることができるんだ。

「どういう戦闘を繰り返せば相手を荒らさせることができるんだお前は」

「知らないっすよお!!俺だってこいつを殺せないでストレス何っすから!!」

もはや狂気と言ってもいい戦闘方法で突っ込んでくる。今のバエルブルーレイはバーサーカー状態と言っても過言ではないだろう。うってかわりアルミリア・フェアルドの方は落ち着いて戦っている。

距離が近いせいか相手の話声が聞こえてくる。

「ジャック。少し落ち着いて戦いなさい」

「うるさい！こいつ中々落ちないんだよ！」

「それはごちらも同じことです。それにこれ以上ここで戦う意味もありませんよ。すでに小惑星の完全な降下は既に始まってしまっています。今離脱しないと危ないです」

それはこちらにも言えることだ。ジャックという名のパイロットは忌々しそうな声を発して捨てセリフを放って逃げる。

「次は絶対に殺す！」

ヴアルハラも攻撃を加えながら少しづつ降下していく。今離脱しないと手遅れになるか……。

「サブレ！シノ！明楽！早く離脱を！」

「了解！シノ、明楽離脱するぞ」

「了解」

三機で小惑星を少しづつ削りながら下がっていく。

削る行為に意味はないと分かっているても多少は被害を少なくできるのではないかと、ありもしない期待してしまっている自分がある。

小惑星を分離することは危険以上に被害をひどくするだけだとわかっていても、それだとしても俺は……。

「イオリ、降下ポイントは？」

「効果ポイントは……地中海です！」

ハヤブサが俺たちの機体を守りながら降下していつているので俺達の機体も問題ない。しかし、そろそろヴアルハラは降下シークエンスに入らなければ遅くなるだろ。兄もそろそろ限界だと判断したのだろう。大きな声で降下シークエンスを始めた。

「降下シークエンスを開始！両翼とブリッジを格納。艦底に耐熱特殊装甲展開！降下開始」

両翼が畳まれブリッジがヴアルハラの中へと格納されていく。艦底にクリアブルーのシールドのようなものが展開され、真っ赤な摩擦熱がヴアルハラを傷つけることは無い。

離脱していき燃え盛る炎は小惑星を削りながら地表へと落ちてい

く。

39

エドモントンの議会から降りてきたのは金髪の細身の男性だった。全体的にすらっとした体格に整った顔立ちを含めてもなかなかの人氣がありそうだ。エドモントンで議長の秘書をしているタカキ・ウノは議会前の階段を降りると妹のフウカ・ウノが学生服でタカキを迎えに来ていた。兄と同じ金髪はタカキと同じく肩に付くぐらいの短さ。顔立ちもとても兄と似ている。

タカキはどこか嬉しそうに階段を下りていくと、フウカの側に近づく。

「今日は早かったんだね」

「うん。何か変わったことは無かった？」

二人はたわいもない会話で盛り上がっていくと、フウカはふと空を眺めて驚きの表情を浮かべる。

「お兄ちゃん……落ちてくる」

タカキも同じように空を眺め、同時に驚きに表情を変えてしまう。「空が落ちてくる」

そんな表現がしつくりくるぐらいタカキ達の前に映っている光景は異様なものだった。ゆつくりと視界の端から端へと動いていく小惑星はそのうち視界の端へと消えていった。

「お兄ちゃん」

「大丈夫だよ……きつと」

不安がるフウカを抱きしめ、二人で帰路につく。

40

世界は変わる。

それがどんなきつかけでも変わらなければいけないのだろう。

星屑事件と呼ばれる戦いはこうして幕を下ろした。木星帝国は降下部隊を旧ヨーロッパ地区に展開させた。

ファントムブラッド隊はアフリカ大陸へと降下をはじめ、視界の先では小惑星デルタが大きな衝突音と共に大きな水しぶきと砂煙を立ち上げらせ、衝突した。

小惑星の衝突と共に地中海の水は完全に干上がってしまい。砂煙は空を覆い、地中海沿岸部の都市は壊滅的な打撃を受けてしまった。空に舞った砂埃は周囲に一時的な核の冬をもたらした。多くの人が命を落とした。

クレアは死者の思い出を受け取りながら一人涙を流す。

エヴォ・エクスはギャラルホルン本部で事の経過を確認したのちに地中海へ向けて移動を始める。

アフリカの地へと戦力が集まっていく。

P・D・333年1月1日0:01:00……小惑星デルタ地中海に衝突。アフリカ戦線へと戦いは引き継がれていく。

《スターダスト・インパクト編終わり 次回アフリカ・サバイバー編開始》



## アフリカ・サバイバーⅠ

1

こんな形で地球に降下する日がまた訪れようとは思わなかった。鉄華団に所属していたころ、俺はシャトルに乗って強引な大気圏突破を試み、辛くも降下に成功したことだけはよく覚えている。

実際かなり強引だったし、今思えばもつと他に方法なんていくらでもあつたはずなのだ。

若さゆえの過ちという言葉を乱用してみたくなる、それほど恥ずかしい行いだつたと自負している。

サブレに話せば笑い話として処理してくれるかもしれないし、シノなら同じように苦笑いで済ませてくれるかもしれない。明樂はどうだろう？

本来なら明るい朝日が昇って見えるのかもしれないが、現在は小惑星デルタが地中海に衝突した際の影響で舞い上がった砂埃が空を覆い、結果としてまともな朝日すら見えないのが現状だつた。

今でこそ視界に映らないが、降下している間にも見えていた地中海のど真ん中に突き刺さる様に鎮座していたのは小惑星デルタだ。現在は地中海の海水のほとんどを上空に待ちあげ、アフリカやヨーロッパ地方、そして中東一帯に大規模な吹雪を与えていた。

「寒すぎんだろお」

そんな元気のない声を発しているのは他でもないシノだつた。いつものぼさぼさ頭に特徴的な斜め傷はどこか元気がなさそうに防寒着で寒さをしのぎながら戦艦ヴァルハラに積もっている雪を下へと落としていく。

「おやすみなさい……」

「寝るんじゃねえ……！寝るんじゃねえよ……明樂！」

「zzzz」

二人でふざけ合いながら新しい年の幕開けを祝う暇すらなく、積雪にいそしんでいる。もちろん後ろではサブレが般若のようならみで二人を監視しているし、俺自身もその下で落ちてきた雪を紅海に落

としていく。

「いいから黙って仕事をしろ!!」

「……はい」

三人のそんなやり取りを見ているとこっちまで微笑ましくなってくる。しかし、状況はあまりこっちにいいとは言えない。

小惑星デルタが落ちた影響からか、本部との通信ができずにいる。本部からの指示が下りないまま、数時間が経過していた。

「飽きた。つまらん。めんどい」

「いいから働けよー」

二人してめんどくさそうに除雪していくが、除雪してもすぐに雪が積もるのだからやってもやってもきりがない。

いまごろソニアさん達は中で開発作業にいそしんでいるのだろうし、休憩している者達は温かい部屋でぬくぬくしているのだと思うと少しだけ理不尽さを感じずにはいられない。

二人はぶつくさ文句を言いながらサブレからの監視をどうやって切り抜けようかと考えているのだろう。

俺が苦笑いを浮かべていると、ヴァルハラから一人の女性が姿を現した。

「ビスケットさん。今後の事を話し合おうとソニアさん達が……」

「交代か!?!」

「お前たちは仕事をしている!」

二人が絶望に満ち溢れた表情を浮かべながらサブレは他の人物に監視を変えて中へと入っていく。

## 2

ヴァルハラ of 作戦立案室は三十人ほどの人間が余裕で入るほどの正方形の形をした部屋になっている。床一面には周囲の情報や地図を映し出すためのモニターが設置されているし、部屋の端に一か所操作盤が設置されている以外は殺風景の部屋と言っている。

イオリが明るい髪を左右に揺らしながら操作盤を操作しながら、床モニターに周辺の地図と情報を映し出す。

ソニアは眼鏡の位置を直しつつ周辺の地図に視線を移す。ゼム・

ロックとサブレも同じように情報に視線を移す。

地図には紅海と地中海を中心とした地図が映されており、地中海のど真ん中に小惑星デルタが突き刺さる様に追加で書かれている。

イオリは涼しい声色で周囲に癒しを振りまきながら現状の説明に入る。

「現在小惑星デルタは地中海のど真ん中に鎮座しています。同じようにテレビ中継ではヨーロッパ侵攻作戦を木星帝国が行っていると報道されています」

地図上でヨーロッパ地方の旧イタリアを中心に赤い範囲が広がっていく。

「そして、先ほど木星帝国から地球圏全域に対して宣戦布告がありました」

床モニターには木星帝国の男性士官のような人物が宣戦布告している様子が映し出されている。

『木星帝国は経済圏とギャラルホルン、そして経済防衛機構に対し宣戦を布告する！』

ソニアはため息交じりに愚痴を漏らす。

「まあ、小惑星を地表に落としておいて今更宣戦布告もくそもないでしょけど」

「それとビスケットさんから頼まれていました現在の通信妨害ですが、どうも小惑星デルタが原因では無いようです」

イオリに反応したのはゼム・ロックだった。

「だろうな。ヨーロッパ地方の報道がこちらに届いているんだ。という事はアフリカ大陸だけで通信妨害電波が起きているという事か？」

「そうなりますね。現在原因を調査中です」

沈黙を守っていたサブレがようやく口を開いた。

「確かこの場所から下に行ったところに中立都市があったよな？ 確か『ルーガン』だったけ？」

そこまで言っただけ俺が口を開く。

「そうだよ！ルーガンまで行けば上と通信する手段があるかもしれないな

い！」

地図の位置がルーガンまで移動すると同時にルーガンの情報が映し出される。

ルーガン……出来て十年ほどしか経っていない中立都市を名乗っており、カジノなどの娯楽施設が多い街でも有名である。別命『眠らない都市』だ。

サブレが入り口の方をチラ見しており、何かを機にかけているようにも見える。

「どうかした？サブレ」

「いや……何でもない………と思う」

どうも出入り口が気になるようだが、あきらめたような感じで話に戻ってくる。

「で、問題は誰がルーガンに行くのかということだが……？俺やソニアは仕事があるから無理だしな」

ゼムはソニアの方を見ながらそういうのけると、もはや消去法で行く人間が決まる。サブレがあきれたように声を発する。

「そこら辺の奴らに生かせるわけにはいかないし、ほかに幹部なんて俺しかいないだろ？兄さんの参加はほぼ必須だろう？兄さんがいないと話し合いにならないんだから」

俺ですらため息を吐き出したくなるぐらいめんどくさい状況でもあるし、できることなら断りたい。

外は大雪で雪が積もっており、その中をバギーでルーガンまで移動する。距離を考えると二時間はかかるだろう。

こんな寒い中で二時間もかけて出たくないという欲求が存在する。しかし、ほかに行くべき人物もいないので黙認するしかない。

ソニアとゼムからすればめんどくさい仕事を俺達に押し付けられたので会議としては満足だろう。

実際ソニアは満足げに部屋の外へと出ていくし、ゼムも手元のスマフォで格納庫のメンバーと話をしながら出ていく。

部屋にいたイオリは苦笑いを浮かべながら逃げるように部屋から出ていく。

取り残されたのは俺とサブレだけ。

お互いに気まずい沈黙が続き、沈黙をサブレが破る。

「……準備するか」

「……そうだね」

二人そろって部屋から出ていく。

3

作戦指令室のドアにピッタリと左耳をくっつけている黒髪の少年のようにも見える。クレアはその姿に不自然さを感じ取り、そうっと近づきながら後ろから話しかけようと右手を伸ばす。

トントン。

「!?」

肩を叩かれたことに驚いて後ろを振り返り、受け身を取ろうとする。振り向いて視界に移った人物がクレアだったことに安どの息を漏らし、もう一度右耳を作戦指令室のドアへと当てる。

「何をなさっているのですか?」

「今、今後の作戦を練っているんですよ。俺はそれを立ち聞きしているんで……!?!」

室内から聞こえてきた声に内心ドキッとしながら作戦指令室から逃げ出す。クレアの左腕をがちりつかみながら小走りで廊下を駆け抜けていき、後方格納庫へとだどりつく。

二人して肩で息をしながらその場で息を整える。

明楽が先ほど入手した情報を興奮しながらも脳内で考えを巡らせており、クレアはその姿を不思議そうに見ていた。

「どうかなさったのですか?」

もとよりおかしな性格をしているので今更のようにも感じられたが、今の状況はいささかいつもの状況より数割増しでおかしいと思う。

クレアがそう思い尋ねると、明楽は動揺しながらも興奮を隠しきれないようによくしたてつつ話し始めた。

「さっき言っていたんだけど、この後先輩たちはルーガンまで移動するみたいなんだよ」

「ル、ルーガンですか？」

ルーガンという都市の名前を初めて聞いたのだろう。彼女は首を傾げどんな都市なのか想像してみた。しかし、名前からでも想像も中途半端になってしまう。

「ルーガンというのはですね。カジノなんかの娯楽施設が多い、娯楽都市でもあるんですよ！今、世界で唯一と言っていい娯楽都市！世界中の娯楽という娯楽がこの街に集まっているんです！俺、一度行ってみたかったんですよ！」

クレアにも娯楽の興奮の理由がようやく理解できた。

遊ぶことに全力を注ぎ、その為に働いていると言っても決して過言ではない娯楽。その娯楽の遊び心を満たしてくれる都市が今、目の前にあるのだ。

こうしている間も都市に行きたかったのに違いなし、その為の準備は降りてきてから欠かさなかったのだろう。

そのチャンスが目の前にやって来たと判断したのだ。

それはクレアも少しだけ理解できた。

生まれてこの方娯楽というものに疎遠で生きてきたし、カジノという存在に一種の憧れがあるのも事実だ。実際カジノをはじめ、まとも存在する娯楽のほとんどはこの街にしか存在しないと信じていても過言ではない。火星やコロニー圏などにもそれぞれ多少は存在するが、それだって小さなものだ。

都市レベルでそんな娯楽を堪能できる場所を彼女はどこかで求めている。

二人の意識を都市に乗り込むことに切り替え、どうやって都市についていくのか考えることにした。

二人でサブレに交渉したとしても断られることは今までの経験でよく理解している。なら多少強引にでも隠れてついていくしかない二人は判断する。

「話だえと二人はバギーで行くみたいだ。そしてバギーは……」

「あれしかありませんよね？」

二人の視界に移るバギーを確認する。

五人乗りを前提とした座席数と後方に荷物を置くためのスペースが存在する。さらにそこから後方に少し離れたところには青いブルーシートが捨てられている。

4 二人は視界を合わせ、やるべきことを理解した。

アフリカ大陸はドルトの革命以降荒れ始めた。

本格的に荒れ始めたのは、マクギリス・ファリド事件の二年後にアフリカユニオンが経済回復を図った政策による土地を追い出された者達の反乱だった。

それ以降アフリカユニオンの議会はまともに機能しておらず、アフリカ大陸は革命派と保守派による水面下の争いは本格的な武力衝突へと突き進んでいった。

当初ギャラルホルンとEDMはそれぞれに分かれて支援をしようとした。

「ここで双方が支援すればそれは事実上の戦争状態に移行してしまう。ここは静観した方がいい」

そのように進言したのはテイワズのマクマードだった。

それ以降アフリカ革命紛争には参加することは無かった。

だからこそ、今のアフリカの現状に気が付かなかった。

5

二人で防寒をばっちりにしてバギーに乗り込む。バギーの荷台にはブルーシートがかかった荷物が目立つ。

「荷台を下ろす？」

「……別にいいだろ。何か荷物を載せるつもりもないしな」

そういつてサブレは座席に乗り込み、後部ハッチから雪道へと降りていく。雪道に跡を作りながら移動していく。あつという間にヴァルハラが視界から消えていく。

寒さに耐えながらバギー走らせていくと、約一時間が経ったころ荷台のブルーシート辺りから「くしゅん〜」という声が聞こえてきたような気がした。

サブレは車を止めジトーと睨みつけるようにブルーシートを眺め

る。

「……荷台を確認するべきだったな」

「??」

俺はよく分からず、首をかしげてしまうが、サブレはそのまま座席から外へと出ていきブルーシートに手を掛ける。思いつきり引つ張って中を確認する。

「!?明楽!?クレアさん!」

荷台には俺達と同様にぼつちり傍観しているうえで体を折りたたんで器用に隠れている二人の姿があった。

俺が動揺している間にサブレは二人を荷台から降ろして後部座席に座らせる前に説教と状況説明を求めた。

「で?説明してもらおうか。説教はそれからだ」

「……えつと」

二人の意見&言い訳はとても長く、全部をまともに聞いていたらそれこそ三十分はかかるだろうということは明白だった。

「要するに指令室での話し合いを立ち聞きして行き先についていきたくないからついてきたと?」

「はい」

サブレは小さな声で「まったく」と言いながら座席に戻っていく。

二人は許されたと判断し後部座席に座り込む。

「帰ったら説教するからな」

そっぴいなながら車を再び走らせる。

話し相手が増えただけでも、多少心意気が違うような気がする。こんなことならイオリやメアリー、シノも連れてきた方が楽しかったかな?なんて考えてしまうが、それだけのメンバーを連れて出ることは危険以外何者でもない。

クレアはふと不思議に思ったことを尋ねた。

「アフリカで起きたという革命の事について聞かせてもらってもよろしいでしょうか?私はてつきりドルトの革命後は経済的に安定したのだと思っただけですが……」

サブレは説明するつもりがないのか、運転に集中しており、明楽に



関しては難しい話はオールスルーを決め込んだのか「ポカーン」と口をあげながら呆けている。

俺はため息を吐きながら説明するために脳内の情報を整理して口を開く。

「ドルトの革命が終わったのちにアフリカユニオンは経済的な落ち込みがありました。当然ですよ。その回復手段として新しい事業を始めることを決めた。それはこのアフリカ大陸にすむ一部の人達を追い出す手段でしかなかったんです。それが反発の理由になり、水面下での静かな争いごとへとつながっていったんです。事業推進を図るイーサン議員をはじめとした保守派と事業廃止と別の事業推進を図ったハイガ議員の革命派に分かれて議論が巻き起こったんです。ことが起きてしまったのはマクギリス・ファリド事件の二年後に問題が起きてしまったんですよ」

「問題ですか？」

問題という言葉の先を述べたのは運転をしているサブレだった。

「イーサン議員とハイガ議員が事故で無くなってしまうんだよ。接触事故だという説と意図した事故じゃないのかという二つの説があるがな」

それだけ言い切るとサブレは再び黙り込む。俺は話を引き継ぐことにした。

「それ以降本格的な武力衝突が始まって、現在アフリカ大陸は上下に分かれて戦っているんです。地中海の方を保守派が下の方に降りていくと革新派が争っているはずですよ。最も、現在の状況で紛争ができるとは思えません……」

実際周囲を見回しても紛争の面影も見えてこない。一面雪が積もった綺麗な光景だけが見えていた。

6

ヨーロッパの積雪は普段の数割増しで多いような気がすると感じたのはアルミリア・ファリドだった。

キマリスレッドクイーンのコックピットから出てくると、周囲を見回す。

ビルに突き刺さったギャラルホルンのモバイルスーツ、地面にも散乱するのはモバイルスーツとモバイルワーカーだろうということは戦った自分がよく分かる。倒壊したエツフェル塔の根元ではバエルブルーレイが最後のグレイズのコックピットに武器を突き刺す。

「つまらないですね。もつと張り合いがあるのかと期待したのですが……全く強くないですね」

「それ僕も同じ意見。なんか殺されにきましたって感じがするよ」

二人はどこか面白くなさそうにしながら逃げていくギャラルホルンのモバイルスーツ隊を眺めていた。

襲ってくるモバイルスーツ隊も練度もやる気も違うように感じている。

「そろそろ移動しようよ。一週間以内にヨーロッパ全域を支配しなくちゃいけないんだからさ」

ジャックのその言葉に反応したアルミリアはそのまま機体を大西洋方面まで移動することにした。

7

宇宙のどこか、木星よりさらに離れたところに存在するそれは小惑星というにはあまりにも大きいように感じる。

PNO1の本体というべき存在は一種の衛星のようににも見える。

なんもないはずの宙域に近づくとそれは姿を現した。

隠れていた姿を現したそれは木星より大きく、下手をすれば太陽と同等の大きさではないかと推測される。

それこそはアカシックレコード本体でもある。

『アカシックレコード……太陽系に到着。これより、人類への干渉を開始する』

何かが起きようとしていることだけ確かに言えることだった。

8

小惑星が落ちてから数時間が経過していたが、タカキ・ウノは議事堂で一人情報が錯そうする状況でも情報を集めていた。

苦情から詳しい情報を求めるものまでさまざまだった。

そんな時ドアを叩いている人物を部屋の中に招き入れる。

部屋の中に入って来たのはタカキの妹であるフウカであった。

どこか申し訳なさそうにしながら部屋の中に入ってくる中、忙しそうにしているタカキに弁当を持ってきたフウカはタカキにお弁当を渡す。

「帰れないの？」

「ごめんフウカ、少し歩こうか？」

休憩がてら歩いて議会の出入り口から歩いて出ていると、フウカがこけそうになる。フウカの体を支えていると、タカキの視線はフウカがこけそうになった階段の端に視線が移る。

「なんだろう？」

どうしても気になったそれは今まで隠れていた何かだった。

階段の端の奥に埋もれているように隠れているその何かを取り出す。

「これって……ライフルの弾丸？」

血の付いたライフルの弾丸。そして、その弾を拾ったタカキはある想像が襲う。

「もしかしたら、とんでもない勘違いをしていたんじゃない……」

恐ろしい勘違いが脳裏をよぎる。不思議そうにしていたフウカの目の前でタカキつぶやいた。

「ラストル・エリオンを殺したのはあの時の襲撃者ではなく……別の人物だったという事だったのか？」

弾丸を握りしめ、そのまま小走りで議会の中に入っていく。

9

バギーは少しづつルーガンに近づいていく。砂埃が上がっており、その砂埃に向けて摩天楼がまっすぐ伸びている。まばゆいまでの景色は眠らない都市という名前が良く似合う。

「おおー!!」

明楽が興奮を隠しきれないようで興奮しながら立ち上がろうとする。クレアも嬉しそうにしながら浮足立っている。

雪と摩天楼の明かりがどこか不可思議な風景に見える。

## アフリカ・サバイバーII

10

夕刻から夜へ向けて少しづつ暗くなっていく、それでもルーガンの摩天楼は輝きを増していくようにも見える。砂つぽさより寒さの原因の雪が積もっており、一面が真っ白に見える。

車の運転に集中している俺でも思うところがある。明楽は今にでも走って消えていきそうだ。

クレアは窓の外の景色にうつとりしており、摩天楼の周辺に広がるのはカジノなどの娯楽施設がひしめくように広がっている。網目のように広がる道路は車が何台も同時に走っている。

兄であるビスケットも外の景色を眺めて呆けている。

都市の中心へ向けて車を走らせようとするが、明楽は今すぐにでもカジノへと行きたいらしく、後ろから俺の座席をドカドカと叩いてくる。

仕方なしに車を路肩に止めてやると、明楽は急ぎ足で車から出ていく。続いてクレアも同じように降りていくのを確認すると俺は明楽の方へと警告を発する。

「いいな。遊ぶのもいいが、ちゃんとクレアの護衛もこなせよ?」

「分かっていますって!」

本当に分かっているんだろうな? 浮かれておかしなことを起こさないといいが……。

明楽はクレアを連れて街蔭へと消えていくのを視線で確認すると、再び車を車線の中へと戻していく。兄は心配そうにしながら意識を切り替える。俺も車を操作しながらさらにルーガンの中心へと進めていく。

ルーガンの中心はセレブなどのリッチな人たちが暮らすタワーマンションの集まりでもあるのだ。俺たちが向かうのはその中でも特に有名な人物の元に行こうとしている。おそらくその人物こそがこのあたりの通信障害の原因を知っているかもしれないという理由で。「マック・フェンサーさん。マハラジャ代表の個人的な友人らしいよ。

頼つても問題ない人物かもしれないという人物……のはず……だ  
けど」

話していくうちに自身がなくなっているのが少し面白く感じる。

実際俺達はそれがどんな人物なのか知らないのだ。豪快な人なの  
だろうか？それともさわやか系？それとも……卑屈な人間？そんな  
予想が俺たちの脳裏をよぎるし、同時に不安を駆り立てられる。

ルーガンの中でも人一倍大きな建物の近くで車を止めてタワーマ  
ンションの入り口前で立ち止まり、緊張と共に足を踏み入れる。

豪華という言葉が貧相に見えるくらいの豪華さ。三階まで突き抜  
けのロビーの明かりはダイヤでもついているんじゃないのかという  
明かりでは証明できないような輝きを放っている。地面も俺たちの  
軍用ブーツには全く似合わないくらいの大理石が加工された床。ソ  
ファやテーブルも高級素材がふんだんに使われていることがはつき  
りと理解できる。

兄に関してはドン引きする気持ちを表情に出さないようにと努力  
を続けている。

俺はマンションロビーの受付嬢へと話を通して、マック・フェン  
サーさんという人物へと話を通してもらう。マハラジャ・ダースリン  
の知り合いだと伝えてほしいと付け加えることを忘れない。

マックさんは意外と俺達に会う気になってくれたらしく。受付嬢  
はマックさんの部屋の前まで案内してくれた。

最上階を含めて上位三階はマックさんの居住区画になっているら  
しく、俺達はその入り口で待機していた。

ドアを二度ノックすると、中から豪快な声で「どうぞ」と呼ばれる。  
鍵が解除される音と共に俺たちは「お邪魔します」と声をはっきり放  
ち、家の中へと入っていく。とてもきれいにされている部屋でまっす  
ぐ伸びている廊下の幅が人が五人分ぐらい歩けるのではないかと思  
わせるほどだ。

こんな幅で家全体の造りはどうなっているんだ？

突き当りの木造りのドアを開けると、三階まで突き抜けたただっぴ  
ろいリビングに足を踏み出す。リビングの端から端まで飾っている

道具一つ一つに金がかかっているということがはつきりと理解できる。

そこで1, 2秒ほど呆けていると、リビングの戸棚の上に飾っている小さなサボテンに水を与えているスーツ姿のりりしい女性が一人と、さらに奥のドア付近で立っているダボ付いた服を着た大男が立っている。

女性は凛々しいという言葉が似合うほどにスレンダーな体格をしており、黒髪と眼鏡がとつてもよく似合う。

男性の方はこの家の家主というイメージが似合うぐらいの大柄だ。筋肉質な体だが、全体的に分厚く盛り上がった筋肉をしている。おそらく俺達に「どうぞ」と声をかけたのは彼だろう。

兄さんは男性の方に頭を下げようと声を放とうとするが、俺は女性の方に視線を外さないようにしている。女性は「クス」と少しだけ笑って見せた。

「そっちの太った坊やはともかく、細い坊やは随分勘が鋭いようね」  
兄は不思議そうな顔をしながら俺の方に意見を求める。俺はため息交じりに答えを兄へと向ける。

「そっちの女性がマック・フェンサーさんだよ。多分そっちの男性は執事か何かだろう」

「!?、ごめんなさい!」

女性は霧吹きを戸棚の上へと置き、ソファへと腰を下ろす。

「気にしないで。私はだらしない恰好が嫌いなだけで、彼は息苦しい恰好が嫌いなだけ。それにこんな体格で暑苦しい恰好されたらまらないわ。あなた達がマハラジャの関係者という言葉完全に信用したわけじゃないけれど……そうね、話を聞かせてもらいましょうか」

俺たちは促されるように腰を床に落とす。

11

明楽がカジノの正面に辿り着いたのはサブレたちと別れて三十分の事だった。二人でスマフォと睨み合いながら歩いていくと、ようやくの思い出三つあるカジノのうちの一つドーム型の建物に辿り着い

た。

クレアも目をキラキラと輝かせ期待に胸を膨らませていた。正面のドーム状の建物の周囲は七つ色のライトが上に向けてまっすぐ明るく照らしている。

カジノのドアは開いており、真つ赤なカーペットが敷かれている床を歩いていく。ロビーを超え、コインに変えてそのままドアを開けてカジノの中に入っていく。

「おお!!」

クレアはスロット台に興味を抱くが、明楽の興味はランプ台へと移っていく。すると、ポーカーの台で一人の男が大きな声を発しながらテーブルに突っ伏している。

「チクショーー!また負けちまった!もう一回だ」

多少鍛えているであろう短めの金髪の男は五枚の手札をディーラーから渡され、相手の太った男も受け取る。どうやら大きな声を発したのは短めの金髪の男らしく。太った男は余裕そうにしながら手札を変えていく。

クレアも夢中になりながらその過程を眺めている。

しかし、明楽は太った男がイカサマをしていることに瞬時に気が付いた。

おそらくディーラーも気が付いているだろうが、ディーラーとしては相手が気が付かない限り口を出さないつもりだろう。

ポーカーを含めたランプゲームなんて基本的にはイカサマが前提のゲームだと思っているのは明楽だけではない。

イカサマの方法や手段、どうやって見抜くのかはマハラジャが教えてくれた。

マハラジャはマックさんという人から教えてもらったと言っていたのをふと思い出す。

そして、案の定金髪の男は再び負けてしまった。

男は掛け金が無くなったらしく、悔しそうに席を立つ。太った男は偉そうにしながら踏ん反りかえる。その態度にムカツとしたらしいクレアは太った男の前に立つと大きな声を威嚇するように放つ。

「あなたのように人の金をむしり取るしかない人が偉そうにするのですか？」

「なんだよお嬢さん。お前さんが今度は相手してくれるのかい？」

「いいえ、相手はあそこの黒髪の人がしてくれませう」

（おや？俺が矢面に立たされてる？）

珍しいぐらいに面倒ごとに巻き込まれた明楽は、楽しくカジノを楽しもうとしていた矢先だったのでどうやって断ろうかと思案してしまふ。

似合わない思案を続けている姿をどうとらえたのか、太った男は大笑いしながら大きな声を放つ。

「おいおい！冗談は顔だけにしておけよ。そんな間抜け面をしたチビのガキに負けるつもりはねえぞ！」

ガキ、間抜け面、チビという発言にムカツとした明楽は手元のコインを増やし、全額を一気に掛け金として設定して席に座る。

周囲の男女も面白そうな顔をして誰しもが明楽の敗北を想像していた。

明楽と太った男が互いに手札を数枚交換し、太った男は勝ち誇った顔をしながら「コール」と叫び手札を公開する。

『ハートのストレートフラッシュ』

「坊主、降り立っていいんだぜ？」

周囲も大笑いしながら勝ちを確信するが、明楽は微笑み「コール」とつぶやいたのち手札を公開する。

『スピードのストレートフラッシュ』

太った男は真っ青になり顔を引きつらせ、周囲も唾然としているなか、明楽は内心（ざまーみる！）と叫んだ。

その後も五回ほどポーカーを繰り返し、太った男の着ている服まで全て奪ってやると男は涙を流しながら逃げていった。

しかし、結果として手に入ったコインは少々多すぎる。というか、かなり多すぎるだろう。元々の軽く十倍以上は手に入ってしまった。

明楽の視線は後ろで感心しつつ、金がなくなった事を悔しそうにしている金髪の男に向ける。



「すみません。このコインの七割を現金に換えてもらって、残りを三つに分けてもらえますか？」

明樂の願い通り現金に変えてもらい、残りのコインをクレアと金髪の男で分けることにした明樂はコインを男へと手渡す。

「う、受け取れねえよ……」

「いらぬから受け取ってくれ」

譲るつもりのない明樂のコインを嬉しそうにしながら受け取り一緒にスロット台に移動して遊び始める。

「俺はファンだ！お前は？」

「俺は明樂！よろしく」

お互いに握手しながら笑顔で語り合った。

12

サブレと一緒にマックさんのマンションから出ていくと足元で何かがぶつかった事に気が付いた。

「どこ見て歩いてんだよ!？」

「ご、ごめんね」

足元では荒っぽいバサバサした金髪の男の子がキツと睨みつけられる。しかし、背が小さいせいかさほど迫力がない。正直に言えば謝っている今現在もこの子にどう接していいのかすら分からない。

「このデブーちゃんと見るよな!」

そしてその後ろで仕方なさそうに立っている男は視線を俺からサブレへと移動していく。

革でできたジャケットにジーンズを着ており、片手はジーンズのポケットに入れている。男の髪は真っ黒のオールバックだ。目線も釣り目で少し怖い。というか雰囲気サブレと似ているような気がする。

「大体、お前は……なんだよ?」

サブレが俺の前に立ち、殺気立たせる。や、やばい!あの顔は……。そう思っていると後ろに立っていた男が大きな声で場を制した。

「止めないか!デルマ!!」

デルマと呼ばれた少年は途端にオドオドしながら「だって……」と

意気消沈してしまう。黒髪の男は頭を下げ、詫びを入れてきた。

「済まなかった。うちの連れが迷惑をかけた」

俺も慌てて頭を下げる。

「ごっちゃんも申し訳ありませんでした」

「いや、そもそもデルマがよそ見をしながら歩いてきたことが原因だったからな」

デルマも仕方なさそうにしながら頭を下げ前を歩き出す。俺も歩き出そうとしているとサブレと黒髪の男は視線を外さないように一瞬だけ微笑む。

サブレと黒髪の男は反対方向へと歩き出し、少し歩いた頃に俺はマックさんの話を振り返る。

「マックさんがいい人で良かったね。まさかルーガンの端にあるドツグを使わせてくれるなんてね。でも……」

「ああ、マックさんでも通信障害の原因が分からないなんてな。しかし……」

サブレは意味深な思案顔をしていると、俺の胸ポケットに入っているスマホが鳴り響く。

13

クレアと明楽は大金を抱えて歩いてくる姿に俺たちの背中には嫌な汗をかき始める。車に乗せる四人でマックさんが予約してくれたロイヤルホテルのVIPルームへと入っていく。

マックさんの部屋とまではいかないが、似たり寄ったりの部屋だと思ふ。

明楽側の話を一通り聞くと、これからどうするかという方の話へと切り替わっていく。

「これから明日の朝一番にヴァルハラをドックに入れるから、その後に通信障害を起こしている問題を探さないといけないね」

俺がそういいだすとクレアさんが意見を出す。

「そういえばこのホテル代金もマックさんが出してくださっているんでしょうか？一度会ってみたいのですが……」

俺は手元のスマホを開き、少し離れる。

クレアさんが会いたいというのならできることなら合わせてあげたい。そう願うことは決して悪いことではないはずだ。

「あ、マックさんですか？実は……」

マックさんと話をしていると、俺の隣を明楽と一緒に歩き出すサブレの姿を確認できた。

「出かけてくる。夜ご飯は各自食べるってことでいいよな？」

俺は黙ってうなずき、マックさんの話に耳を傾ける。サブレに引き連れながら歩く明楽はどこかふてくされていているように見える。

俺は再び部屋の中に入っていくとクレアさんにマックさんの言葉を届ける。

「マックさん。今用事でこのホテルにいるそうで、今からでよければ会うそうですよ。それで何ですが……」

「？…どうかなさいました？」

「俺……おなかすいちやって……」

クレアさんに笑われてしまうと「どうぞ」と促されるのを俺は苦笑いを浮かべながら歩き出す。正直に言えば、クレアさんがマックさんどこか知り合いではないかという気はずっとしていたし、二人で話をさせてあげた方がいいのではないかと思っただけだった。

内心、外で売り出されていた出店の商品を悩みながらホテルを出ていく。

14

クレアがマックを待っていると、マックは意外とすぐに部屋まで姿を現した。「上のレストランで食べながら話をしましょう」と言われたクレアはそのままついていく。

エレベーターで最上階に辿り着くと、一面ガラス張りの部屋に豪華な椅子とテーブルが見えてくる。

マックが誘うがままに席に座るクレアだが、今更自分の服装が場にそぐわないものだど気が付く。多少の恥ずかしさがあるがそんなものを気にしている姿をマックは微笑み返してくる。

「気にしなくていいと思うわよ。私の姿も決して場にあっているとは言えないし。でも、そういうところは変わらないわね。テイワズと取

引させてもらった時もそうだけれど。あなたは少々周囲を気づかいすぎる点があるわね。私の事を想つてのことだとは理解しているけれど、今はそんなことを考えずに食べましょう」

そういうと、マツクは手元のメニュー表から適当な料理のコースを選んでくれる。

こういう本格的な食事はいつたいつ以来だろうか？そう考えていると、マツクはクレアを見ながら微笑みを絶やささない。そんな彼女の視線が少しだけ恥ずかしくなってくる。

「な、何か変でしようか？」

「いいえ、少しだけ楽しそうだなって思ってたね。彼らから少しあなたの事を聞いていたものだから。でも、よかったわ。ダーちゃんに預けていけば大丈夫そうね」

マツクから放たれた言葉に耳を疑ってしまう。

ダーちゃん？ダースリンだからダーちゃんなのだろうか？そう思い尋ねようとするが、その気持ちは沸いてこない。しかし、ただ仲がいいからというわけではなさそうだ。

「ダーちゃんはね、あれで意外とモテるのよ。ただ、誠実であろうとするから、付き合うまで行つたのは私を入れて三人だけだったけどね」

「お、お付き合いをしていたのですか？」

「ええ、ただ……彼がギャラルホルンに入るときに分かれたけれどね」

どこか懐かしそうに語るマツクの横顔はどこか儂く見えた。眼鏡の奥にある目は今でも恋をしているように見える。

そんな姿も一瞬で終わり、マツクはテーブルに置かれた料理を前にクレアにどうぞつと手を出す。

クレアはナイフとフォークをうまく使い料理を口へと運んでいく。おいしい料理に舌鼓をうちながらマツクと話を深めていく。

「そういうええ、ゲイナーさんはお元気がしら？」

マツクから出てきた名前に一瞬反応すると、首を横に振る。

「いいえ、直接会ってはいないので。あくまでもゲイナー様の使者の方に手伝ってもらって逃げ出したので……」

マツクは「そう」とつぶやくと遠く口を開く。

「ゲイナーさんはテイワズにいたところに少しだけあったのだけどね。なんていうか偏屈爺さんって感じの人かしらね。偏屈というより素直ではないっていう感じなんだけど」

クレアは食い入るように話に耳を傾けた。

15

赤に近い茶色をしている巻き毛の男性であるライドは迷路のよう  
に続く通路の中を歩いている。二年前にノブリス・ゴルドンを殺して  
ギャラルホルンから追われる身に落ちてしまったライド達をゲイ  
ナーという老人が拾い上げた。

『ここで死ぬくらいなら儂の元では働かないか?』

胡散臭いと思っていたが特に行く当てがなかったし、当分の宿替わ  
りにしようと思っただけなのだが、ゲイナーは予想もしないこと  
を言い放つ。

『ラスタルは二二年後には殺されると思うぞ』

その言葉を真実で、実際一年後にはラスタルはエドモントンで殺さ  
れてしまった。

自分たちがこれからどうやって生きていけばいいのか分からない  
ままライド達はゲイナーという老人の元で暮らしていた。

迷路のような廊下を歩いていく中、ようやくの思いでゲイナーがい  
つも籠っている実験室へとたどり着く。

部屋のドアをドンドンと強めに叩き返事を待つ前に部屋の中に  
入っていく。実験室の奥のパソコンのような端末を一心不乱に打ち  
込みながらこちらを見ようともしない。髪の毛は全く生えておらず、  
ツルツルの頭と白衣が異様にマッチしているようにも見える。そし  
て、その後ろには目元以外を布で隠している小柄の人物がいる。体格  
を外から見た限り多分男性であることしか確認できない。全身を覆  
うほどの長いロングコートと両手は手袋をつけている。むしろ素肌  
の部分が少ないように見える。

ロングコートの男は右側の義眼をこちらに向け、再び視線をゲイ  
ナーの方へと向ける。

「おい、爺さん。地球の方は放っておいていいのかよ?」

ゲイナーは鋭い目つきをライドに向ける。ライドは多少ひるんでしまい、それを悟られないようにと内心グツと引き締め前に一歩出る。ゲイナーは一瞬で興味を失ったのか再びキーボードを打ち始める。

「ふん！ 必要ないじやろう。EDMの代表がこのまま後手に回り続けるほど愚かではない」

そうだけ言われてしまうとライドは話を聞いてくれないと判断し、部屋を出ていく。

廊下に戻ると寂しく、どこか薄暗い雰囲気、鉄華団本部を思い出させる。

だからこそここにいるのかもしれない。

## アフリカ・サバイバーⅢ

16

初めて黒髪の男と出会った時、どこか俺に似ているような気がすると感じてしまった。見た目、恰好がでは無く。心というべき点で俺たちは似ているような気がしたのだ。あくまで似ているような気がするというレベルだけであってそれ以上に似ている点を証明できる手立てが存在するわけがなかった。

マツクの家の前ですれ違った際、この黒髪の男は革命派のリーダーかもしれないという不思議な予感に襲われた。

だからかもしれない。俺がマツクから手渡された革命派が拠点にしているだろうというバーに行く気になったのは。しかし、もちろんそんな行為が成功するとは思えないし、むしろ失敗する可能性の方が高いだろう。

夜中にホテルを出てどこに行くのかと明楽に問われた時、俺は素直に答えた。

「革命派が拠点にしているバーに行く」

明楽の驚愕した表情を見た瞬間にざまあみろと言う勝ち誇った感傷に浸ることができた。

俺たちが泊まっているホテルから車で三十分ほど進んだ先にそのバーはある。カジノなどの娯楽施設に囲まれる形で周囲が飲食店の一つにそれはある。

赤いレンガ造りの壁に木造りのドアを開けると、ドアの上部についているベルが数回鳴り響く。店内もどこか古臭さを感じさせるような空気をしている。カウンターの後ろは酒などの瓶が綺麗に並んでおり、テーブル席は全部で15以上はあるだろう。しかし、それでも少々店内は手狭に感じる。

俺が店内に入ったとたんカウンターの店主以外に7、8人の男女がこちらをちらり見てくるのを確認する。おそらくその半分は革命派の連中だろう。こちらに向けられる視線が興味深いような目ではなく、疑るような視線だからだ。

しかし、そんな視線に一喜一憂してはこんな仕事をしてもらえない。俺は目的の人物を入れてから3秒で発見すると同時に一番奥のテーブルに足を運ぼうとするが、先ほどのやり返しなのではないかと疑うような大きな声で叫ぶのは明楽だ。

「あぁー！ファンじゃん！」

「おお！明楽じゃねえか！」

どうやら先ほど話に出てきたカジノで知り合ったばかりの友人らしい。しかし、問題は隣の座る男こそ俺が探していた黒髪の男だ。

黒髪の男は俺の姿を確認すると、カウンターの店主に向けて右手を上げた。

「マスター、適当な酒を二つ頼む」

明楽が一人でとことこと歩いていき、俺は後を追うように歩き出すが、それを妨害しようと二メートルを悠々と超える大男が立ちはだかろうと自分の席を立とうとする瞬間に店中の男女が殺気立った。

(ここにいるマスターを含めた人間全員が革命派の連中なわけだ)

しかし、立とうとした大男に向けて、いや周囲の全員に向けて警告を発したのは黒髪の男だった。

「おめえら余計なことをすんじゃねえ!!こいつらは俺に話があるみたいだしな」

明楽は大男を邪魔そうに見ながらファンと呼んだ男の向かいに座り、俺は黒髪の男の前に立ち尽くす。

「どうぞ、歓迎するぜEDMのファントムブラッド隊」

「どうやら俺たちの事は事前に調べていたらしいな」

俺は席に座り明楽とファンは既に話し込んでいるようで俺たちの会話など気にもかけていない。マスターは適当な酒が俺と明楽の前に置かれ、明楽とファンは既に酒を飲みながら盛り上がっている。

「どうやら俺の友人が世話になったらしいな。すまなかった。まさか、買い物用に渡した金を使い果たすとは思わなかったんだが……。あんたの友人に助けられるとはな」

「気にしないでくれ、そもそも二人してカジノに遊びに行くこと自体



苦言を呈したい思いだったんだ」

俺が酒に手を出そうとしない姿を見て男は苦笑いを浮かべる。

「酒は嫌いかい？」

「嫌いじゃないが、よっぽどのが無いと酒は飲まないと決めている」

男は俺の酒を取ると、飲みながら自己紹介を進める。

「俺の名前はサイガという。革命派のリーダーをしている」

「俺はサブレで、ファントムブラット隊のモビルスーツ隊の隊長。幹部クラスの人間だ」

17

翌日の朝一番に一番端に存在するドッグに入艦する姿を確認した後、サブレがすごく驚くようなことをさらりと全員の前でさらりと発言した。

「今から革命派のリーダーと一緒に通信妨害電波を発している施設を見てくる」

ソニアさんのあつけにとられる表情など中々見れるものではない。眼鏡の奥の目が完全に点になっている。

ゼムさんもメアリーやイオリ、シノですらあつけにとられており話の流れが見えてこない。明楽だけが車をしっかり準備している。

あつけにとられているみんなの代表として話を聞くことにした。

「サブレ? どういう話からそういう話になったの?」

サブレは不思議そうに首をかしげるが、クレアさんだけが何かを理解したように表情を変えて声を発した。

「分かりました。昨日出かけたときですね? あの時革命派の拠点に行ってきたんですね?」

「「ええ!」」

再び全員で驚愕の声を放ち、サブレは「そうだけど?」とさも悪びれなさを發揮してくれる。しびれを切らしたシノがさげすぶ。

「報・連・相をしるよな! だいたい明楽はずるいじゃねえか!! 遊びに行った拳句にこの後も出かけんのかよお!!」

サブレは懐から札束を取り出した。珍しいものを取り出すなあ。

今時札束なんて珍しいだろうに。

「この街では今でも貨幣が使えるんだよ。それを踏まえたうえでこの札束……お前たちにやろう」

シノをはじめ、メアリーなどのイオリを除いたメンバーは喉を鳴らす。シノが代表で札束を受け取った瞬間に札束の奪い合いが始まった。

「イオリとソニアはついてきてくれ、兄さんと明楽は引き続き。クレアはここに居ろ」

車に乗ろうとするクレアの首根っこを軽くつまんで車から追い出す。クレアは両方のほっぺをプククと膨らませていた。

渋々乗り込むソニアと一緒にイオリ達も準備に乗り込んでいる。俺も同じように車に乗り込むと、シノたちは金の取り合いをしながらヴァルハラから降りていく姿を確認した後、俺達も後を追うように車を走らせる。

18

火星の空は青くどこまでも広がっているように見える。ビスケットとサブレの双子の妹であるクツキーは自分の部屋の荷物を片付けていた。兄を失ってから姉妹の部屋を別にして以降、色んな物を買って、買った物を部屋に飾ったりしていた部屋が今では何も無い真っ白な部屋になっていた。

兄が生きているというクーデリアからの話を聞いたクツキーはその日の晩にみんなで話し合い、結果アトラたちと一緒に兄の元で過ごさないかという話になった。

鉄華団の禍根が残るこの地では暁・オーガスが学校に行けても、いじめられる可能性をどうしても捨てきれなかった。

兄がいる場所なら問題ないかもしれないという発想をしたのは桜・プレッツェルだった。兄が今過ごしている場所は月面都市という場所らしく、そこなら過ごせるかもしれないという発想だったが、問題もある。

つい先ほど正式に宣戦布告を行ったのは木星帝国だったが、地球圏は現在事実上の戦争状態に移行したらしく、今出てもすぐにたどり

着けるかどうかは分からないそうだ。

それでも待ちきれない思い出部屋をかたずけている。今、桜・プレッツェルは地球に居るビスケットに話をしようとしている。

「駄目だね。個人回線じゃつながらないよ」

桜・プレッツェルがクツキーの部屋に入ってくるとそういつて首を横に振った。

「そっか……」

「どうも二人共作戦の為に地球に降りているらしいよ。それだけは確認が取れたよ」

すると、下からドアが開く音が聞こえてきた。

桜・プレッツェルと共に階段を下りていくと、顔中を布で隠している背の低い男と白衣を着た老人、ゲイナーが立っていた。

「すまんねえ。こいつがどうしてもあんた達に警告しておきたいという話をしていてね」

二人して警戒しながら近づいていくと、ゲイナーははつきりとした声を放つ。

「出るなら地球圏の争いが終わる前が良いぞ。火星もすぐに戦火を開くことになる」

ゲイナーは家から出ていこうとひるがえしていく姿をクツキーが途端に止めた。

「ど、どうしてそんなことがわかるんですか？」

「木星帝国の作戦をもしEDMが破ることができればなら木星帝国の次の狙いは火星の戦力だ。儂はこれから対策に追われることになる。お前さん達だけでも早めにここを発った方がいい。地球圏での戦いは長くない。おそらく半年もかからず終わるじゃろう」

「は、半年？」

クツキーは驚きと共に空いた口が閉じなかった。クツキーにとつての初めての戦争がたったの半年で終わると言っているのだ。しかも、最悪半年もかからない。

しかし、同時に戦争が火星まで広がると言われ、大人しくここを去る気にはならない。

「お前達がここに居てもろくなことにはならんぞ。むしろEDMに居る家族の元へ向かえ。そして、伝えるのじゃ、火星が危ういな」

どうしたらいいのか。自分達にできることは？そんな疑問と共に襲い来る決断。ふと覆面をした男の視線とクツキーの視線がぶつかった。

まるで男は「行け。兄に会いに行け」と言っているようだ。そんな力強い目に押されてクツキーは決断する。

「おばあちゃん。私達、早めに行こうと思うの」

桜・プレツツエルはクツキーの決意の目に押され、自らも決意する。

「そういうことならあたしが付いていった方がいいだろうね。そっちの方が話が通じやすいだろう」

気が付くと二人はいなくなり、クツキーは覆面の男を思い出す。

「三日月？」

死んだはずの彼の名をつぶやく。

覆面を付けた男も自分の後ろを振り向き、遠くなっている桜・プレツツエルの家を見つめていた。

19

サブレたちがルーガンを出て既に4時間が経過していた。現在は革命派との集まる地点として中規模の村に来ていた。おそらく千人規模で住んでいるように見える。

ソニアだけが車から出ていこうとせず、俺とサブレとイオリが代表でリーダーの前に出ていく。

「リーダーのサイガだ。よろしく頼む」

昨日も見た独特の釣り目は健在で、本人は睨んでいるつもりは無いのだろうが、こっちから見たら睨んでいるように見える。実際イオリも軽くひるんでおり、サブレだけが普通に話し合っている。

いつの間に仲良くなったのかと疑問を抱いていると、俺の足を蹴る小さな衝撃を感じた。

ふと足元を見ると昨日の夕方に出会ったデルマという少年だ。

鼻をならして遠くへと逃げていく。

「済まないな。昨日起こったことをだいたい根に持っているようだ」

「いいえ、いいんです」

俺は話を切り替えるため、首を左右に一度振り真剣な面持ちでサイガに話しかけた。

「それで、通信妨害施設を知っているって話ですけど……」

サイガは表情を引き締め、黙ってうなづく。

「ああ、それとは別にみてほしい施設もある。まあ、ここからさほど遠くはない。ここからさらに北に行ったところだ」

ついてきてくれと言わんばかりにひるがえし、明楽はファンという男と一緒にどこかへと消えていった。

俺たちはソニアを何とか車から追い出し、一緒に歩いて一時間の丘の上までたどり着く。サイガは背を低くし、物陰に隠れるようにと指示を出す。全員で背を低くしながら近づいていくと、物陰からそつと指示する方を視線に移した。

「あれは……！」

広大な平地に六階建ての大きな建物が見えた。さらにはあちらこちらにアンテナのようなものが立っているのを確認した。

「あれでアフリカ大陸の空に妨害電波を発しているんだ。そして、問題はあの奥の建物だ」

そういわれてさらに奥へと視線を移す。先ほどの施設とはまた違った建物が見えてきた。

妨害施設が防御力を高めた要塞のような施設なのに対し、奥にある施設は工場のような見た目で煙突のようだ。

ソニアがそれを確認し、隅から隅まで視認していると、ぼそりつぶやいた。

「あれは……パーティクルドライブ生成工場ね。しかも大規模施設」

「やはりか……あいつら、俺たちのように購入しているのではなく……作っていたのか。おかしいと思ったんだ。俺達もパーティクルドライブは裏取引でいくらか手に入れていた。しかし、あいつらはここ最近大量にパーティクルドライブ搭載機が異様な速さで前線に出てきやがった。そんなときにあれを見付けちゃったんだ」

サイガはどうしようもない真実に怒りを覚えてしまう。サイガは

さらに妨害施設のすぐ隣を指さす。そちらの方には薄紫色の方などの細部が丸くなっている機体を見付けた。

「あれは？」

俺の疑問を横に置き、サブレが代わりに答えた。その表情は驚きが含まれている。

「あれは……!? ギャラルホルンが開発しているって言うていた。パーティークルドライブを搭載することを前提とした新型モバイルスーツ、名前は……」

後に続いてソニアが口を開いた。

『『キツシュ』だったかしらね。間違いないわね。キマリスを元に開発した為にデザインがキマリスに似ているわね。だったら、パーティークルドライブの提供先はギャラルホルンでしょうね』

サイガは悔しそうに歯ぎしりをしながら睨むような視線を正面の施設に向ける。イオリが目の前のパソコンをいじりながらデータを照合し始める。

「そうですね。前にラスタル・エリオンから交換した情報の中にキツシュのデータがありました。照合してみました。あれはキツシュで間違いありません」

サブレは訓練用の施設の奥へとさらに視線を向ける。俺も気になつて同じ方向に視線を向けるとそこにはギャラルホルンサイドのキマリスとバエルが鎮座しているように見える。

「多分、穏健派と接触しているんだろ。ここはキツシュの開発施設でもあるんだろう。アフリカの紛争に水面下で介入すると同時にキツシュの実戦テストを行う施設何だろうな。多分、通信妨害をしているのも革命派がEDMと通信を取られると困るからだな」

「だと思ふよ。EDMがそれを知れば部隊を派遣しかねないし。ギャラルホルンの代表のデブリンとしてはバレたくなかつたんだろうね。パーティークルドライブの開発数の確保とキツシュの開発期間を短くさせたかつたんだろうけど」

二人で視認していると、キマリスとバエルはそのまま走り去っていく。サブレに耳打ちする。

「アフリカ大陸に拠点を置いているのかな？」

「どうなんだろうな」

二人では結論が出ない。サイガに尋ねようとサブレが近づいていくとサイガは思いのほかあっさりとは答えてくれた。

「ギャラルホルンは中東とアフリカ大陸の間に位置するスエズ湾の辺りに要塞があるらしい。ここから少し遠いな」

ということはあの二機はその要塞からこちらの方に向かって機体を走らせたことになる。おそらく目的は俺達ファントムブラッド隊の状況を知ることと、キツシユの実戦テストの状況データの回収だろう。

しかし、通信妨害電波を発しているあの施設を事実上攻略しないことには話にならないのも事実だ。

どうしたものか俺自身決めあぐねており、ソニアとイオリはキツシユのデータ回収にいそしんでいる為話し合いには参加してくれない。

そうしているとサブレが「俺がやろう」と言い出した。

「元々ファントムブラッド隊は潜入・破壊工作が主だった部隊だったんだ。あそこに侵入すること自体は難しくない。最も施設全部を回ってしまいうわけにはいかないし、あの施設と後ろの工場を破壊するにはやはりモビルスーツの戦力が必要だろう。そうなるとモビルスーツの方の戦力が正直心もとないが……」

確かに、モビルスーツ隊の半分を侵入部隊に割くと考えても、戦力のかなめであるバルバトスは少なくとも使えない計算だ。そればかりはかなり痛い。

できれば明楽をこちらに残してもらいたいけど。

「明楽は潜入部隊に？」

「ああ、明楽も潜入部隊だ。あいつの小柄な体は潜入にはうってつけだ」

だとしたらますます痛い。シノを中心に部隊を編成しても、通信施設を破壊してからの戦闘。夜間に忍び込むと考え、そしてその上で敵の戦力。敵は見た感じキツシユが20は存在する。それ以外にもモ

ビルワーカーもいるだろうし。モビルワーカーはうちは持つてないし、モビルスーツを20機も相手にはできない。

唸って悩んでいる俺にサイガが話しかけてきた。

「そういう事なら俺に提案がある。うちのモビルスーツを戦力として使ってくれ。そもそも、こちらはEDMと取引させてもらいたいという条件を出した。その為にもあそこの施設が邪魔なら俺たちが手伝おう」

なるほど、そういう取引だったわけだ。

そういう取引なのだとしたらあそこを破壊することは絶対ということだ。問題はその行為が穏健派との全面对決を迎えてしまうという点だ。事実上ギヤラルホルンとの対決を誘発してしまう。

いや、そもそも今の状況で俺達と連絡が取れない状況にEDM本部はどうとらえているのだろうか？もしかしたら、ギヤラルホルンはその状況を利用するつもりかもしれない。もし、このままの状況が続ければギヤラルホルンはEDMの戦力を取り込もうとするかもしれない。いや、その為にギヤラルホルンの二人はここに来たのかもしれない。「でしたら、頼んでもよろしいでしょうか？」

「もちろんだ。潜入はいっつ行う？さすがに今日の夜中は無理だろう」

ソニアさんの方に視線を向け、ソニアさんに状況を共有する。ソニアさんは顎に手をふれ、結論だけを述べた。

「色々と試したいこともあるから二日だけ待つてくれるかしら？」

「サブレ、二日後の夜中には動ける？」

サブレの方に視線を移すが、サブレは頷いた。

俺はサイガさんの方に視線を移動して計画実行日を告げる。

「二日後、一月四日の夜中でいいでしょうか？」

「もちろんだ。こちらも準備しておこう」

20

機体を走らせるキマリスに乗っているガエリオの後ろから追いかけてくるバエルのパイロットであるジュリエッタは納得していないような表情を浮かべていた。

彼らは先ほどまでアフリカ穏健派の施設まで直接赴いていた。



エヴォ・エクスがこちらに到着前に作戦を起こす必要がある。というキャサリン要塞の司令官からある伝達任務を帯びていた。

それが何を意味しているのかもよく分からないまま。

二人してキャサリン要塞へと帰還する。

キャサリン山が厄祭戦の際にほとんど平らな土地になったとき、その上に作られたのがギャラルホルンにとつての要塞へと変貌を遂げた。上から上へと増築を続けていくうちに要塞は複雑な形をとるようになった。もちろん要塞の中も迷路のようになっていく。しかし、その反面要塞としての施設は大したものがある。おそらく戦力としても本部を余裕で超えるだろう。

二人して司令官の元へと赴く。ギャラルホルンの腐った空気を吸ったような歪んだ男がそこにはいた。

「で？どうだったかな？ガエリオ・ボードウィン」

ガエリオはデータの入ったディスクを司令官に手渡して二人を退室させた。

クククと笑いながらディスクをパソコンへと入れる。

そこにはキツシユの生産データが書かれており、その数字は既に目標の機体数まで到達したことを示していた。

「副司令官に伝えておけ、ファントムブラッド隊が仕掛けたら、こちらも仕掛けるぞ。これ以上アフリカの地を紛争の地にしておくわけにはいかない。全部吹き飛ばしてくれ」

司令官は近くで立ち尽くしていた士官に指示を出している間も彼は悪どい微笑みを絶やさない。

ガエリオとジュリエッタにとつても苦々しい戦いを強いられようとしていた。

## アフリカ・サバイバーⅣ

21

サブレ達が施設への偵察をしている間に明楽が何をしていたのかというと、村の中をファンに連れられてまわっていた。木などの簡易的な素材で作られた同じような家が所狭しと続いているのが見て取れる。小さな子供から100歳に届きそうな老人まで様々だ。

明楽を連れてファンが足を止めたのが一階建ての横長の建物だった。

中からは子供達の元気のいい声が聞こえてくるのが分かる。多分という気持ちで窓から中を覗いてみると、中では子供たちがタブレットを使った授業を受けていた。

みんなめんどくさがらず一生懸命に勉強してる姿は年相応の子供の姿に見える。そんな子供達の姿を遠目で見ながら口を開く。

「ここに住んでいる子供たちは元々このアフリカ大陸全土で存在していた小さな村や街で過ごしていた子供達なんだ。子供だけじゃない、老人や大人だって同じだ。みんな村や町から追い出されてしまった。穏健派の連中はドルトの一件以降落ち込んだ経済を立て直すのに俺たちの故郷を奪い、工場やセレブ達のリゾート施設建設に精を出すようになった。もちろん議員の一部はそんな案件を否定してくれたが……聞いてくれなかった……!おかしいだろ!?なんで自分たちのミスで……自分たちの責任をあの子たちが代わりに受けなくちゃいけないんだよ……」

重苦しいまでの空気と周囲から漂っている落ち込んだ雰囲気を感じ取れる。この村に入ってから感じていた雰囲気の本体を今知ってしまう。

二人して再び街中に繰り出していくと、つい視線がある旗に向く。各所の良く見える場所に黒い背景に赤い花のマークが見えた。

「あれは……?」

明楽はその旗に身に覚えがあつた。というか、実際に見たことがある。

火星で存在し、ラスタルの手によつて滅ぼされた。

『鉄華団』という名前の組織が使つていた鉄の華のマークだったはずだ。そう思い、ファンに尋ねようと足を止める。

ファンは問わんとしていることを理解し、笑顔で答えてくれる。

「よく分かんないんだけどさ……ドルトの時にドルトの人達の為に戦つた奴らがこんなマークを背負つていただろ？世界の人達が何をどう攻めても、俺達みたいな人間からすればこのマークは……革命の印なんだよ」

サブレがかつて言つていた言葉を思い出す。

「死んでも、忘れられても、残せるモノはあるはずだ」

彼らの思いも、名前も忘れてしまつていても、残つたものはあるということだ。残せたものはあつたのだ。

今度こそ守れるのだろうか？

22

会議室に集められたメンバーは二日後に控えた作戦の説明に入ろうとしていた。シノをはじめとしたモビルスーツ隊とサブレを中心とした破壊工作部隊の二つに分けられる。

シノが手を上げ俺の方に向かって質問を繰り返す。

「モビルスーツ隊は半分だけか？相手がギャラルホルン製のモビルスーツならさすがに多少きついんだけどよ……」

「大丈夫だよ。革命派の人達が協力してくれるらしいし、俺たちは村から大きく離れた高台を拠点にして指示を出すね。突入部隊はサブレの指示をちゃんと聞いてね」

俺が笑顔で返すと、シノの不安は明楽の方に向けられる。

「大丈夫なのかよ……明楽はモビルスーツ隊の方がいいじゃねえか？」

俺は困り顔でサブレの方を見ると、サブレはため息を吐きながらファンとメッセージのやり取りをしていて話をほとんど聞いていない明楽の方を見ながら答える。

「小柄だから潜入する際には意外に役に立つんだよ。ただ、へんなどころでトラップやセンサーに普通に引っかかるから困るんだけどな。」

俺の目の届かないところで変な行動をされるよりましだな」

全員が「ああ」と納得するような声を発し、本人だけが、そんな話を知らずに遊んでいる。シノは小声で「大丈夫なのかよ……」とつぶやいているのが良く理解できる。

本当に明楽を潜入部隊に入れても大丈夫なのかと心配になつてくる。

23

作戦前日にルーガンにある別の酒場でサイガは一人酒を飲みながら物思いにふけていた。

酒場のドアが開き、そちらの方に視線を移すと、そこにはまるでサイガの行動を完璧に把握しているかのようにサブレ・グリフォンが立っていた。

サブレは歩きサイガの隣の席へと座り込む。マスターに適当なジュースを頼み、マスターもジュースを一口分だけ口内に含み飲み込んでから改めてサイガは口を開いた。

「よくここが分かったな。探したのか？」

「いや、なんとなくかな。こういう勘が良く当たるんだ。昔から勘が良いらしくてね、一年前のラスタル暗殺事件の前にマハラジャ近辺を嗅ぎ回っている奴を偶然見つけたりしたし。まあ、だから勘だよ……」

サイガは酒を一口だけ飲み込み、記憶の糸を手繰り寄せる。

「大昔にそんな人がたくさんいたと聞いたことがあるな。厄祭戦よりはるか昔、人類は何度も繁栄と滅びを繰り返してきた。その間にいつだっていたのは進化した人類だったそうさ。お前が行ったように感が良かったり、すごい奴は死んだ人間と話ができるって人もいたそうさ」

乾いた喉を潤す為に酒をさらに一口口の中に入れ、サブレもジュースを一口飲み込む。

「そんな人間がいるなんて……知らなかったよ」

「無理もない。元々阿頼耶識はそういう人間を疑似的に再現できないかと検討されたと聞いている。もちろん最初の最初は工業用だった

らしいけどな。軍事転換される際に疑似進化を促せることに注目したらしい」

「でも、それってそんな簡単な話か？多分進化するってそんな手ごころな話じゃないだろ？」

サブレはなんとなくそういう疑問にたどり着いた。話がそんなに簡単な話なら今頃全人類が阿頼耶識システムを研究していたはずだと。

「そうだな。一説では阿頼耶識で進化するのは速い分自然の形で進化する方とは違いどうしてもできることの差や能力に大きな壁があるそうさ。最も当時はそんなことをいちいち検証していられるほどゆっくりしているような状況ではなかったそうだがな。まあ、体に異物を埋め込むということ自体に否定的なつていったという理由もあるんだらうが」

それはある。実際ビスケットとシノの背中にあつた阿頼耶識も今では完全に取り除かれている。シノの時はビスケットの阿頼耶識の知識があつた分安全に外すことができたが、ビスケットの時は背骨ごと取り除き、長男であるサヴァランの背骨を移植することで事なきを得た。元々、ビスケットの体の一部はサヴァランの体を使って助かっている。

そういう経緯を見たうえで、サブレはふと思う。阿頼耶識の危険性を。

「サブレ。お前あの兄貴になんか後ろめたいことを抱えているだろ？」

心を見透かされるような言葉に内心ドキンという高鳴り、しかし表面上だけは平静を保ちつつ問う。

「なんでそう思うんだ？」

「周囲の人間に対して多少厳しめに接しているようにも見える。これは単純に上下関係もあるんだらうが、公私をちゃんと分けているように見える。それに対して兄貴に対するお前の態度は少々甘目に見えるからな。まあ、答えたくないなら別にいいけどな」

空になったグラスの底をのぞき込む。

「別に別段甘目に接しているつもりは無いんだけどな。まあ、任されちまったからな。自分の言葉には責任を持つさ。背負うなんて彼らが一番嫌がる言葉だろうからな」

その言葉は多分サイガも少なくとも知っているような気がする。あつたことは無く、ニュースで見たことがある程度だろうが、それでもサブレの性格を少しだけ理解できた。どんなことにでも責任をもつて接する。多分その人物もそんなサブレだったからそこ任せられたのだろう。

サブレがこういう性格でなければ、任せようとしなかったはずだ。死んだ者達は背負ってまで、他人に生き方を変えてもらうことを望むまい。

「いいんじゃないか？それがお前の生き方なら仕方がないさ。忘れるなよ。俺もお前を知る人間なんだってことを」

「忘れないさ。忘れないでいることが俺ができるたった一つの大切なことなんだから」

決して忘れないでいること。いつでも心の中で覚えていること。それがサブレにできるたった一つの大切なことなのだから。

だからこそ、サブレはこの出会いに、彼との過ごしたこの数日を決して忘れない。

24

全身黒ずくめのパイロットスーツを着込んでいるのはサブレを筆頭とした侵入部隊だった。電子戦用の道具を腕につけた男は腕につけた端末を動かしながら突入する場所の最後の確認を行っていた。

隠れる場所の少ない施設周辺を隠れる場所を探しながら前へ前へと進んで行く。裏口も正面ゲートも警備が厳重で侵入は容易ではない。しかし、この施設には致命的な穴があった一つだけ存在する。

通信妨害施設の地下には訳あって昔の街並みが色濃く残っており、今は使われていない下水道が残っている。勿論下水道をそのまま使用できるわけではない。

少し離れたところでサブレはゼスチャーで指示を出し、二人の男が足元の軽く掘り進んでいく。すぐにマンホールを見つけ出し、マン

ホールを持ち上げて側に置き、暗闇の奥をのぞき込む。

匂いは無く、使われなくなつて時間が軽くなつていているせいでもあるのだろう。明楽が先に降りていき、最後にサブレが降りていく。下水が完全に存在しない暗い空間が伸びていく。

端末を操作する男のナビゲーションで突き進んでいき、ある空間に出る。不自然に途切れたその空間の壁を明楽が叩きながら奥の空間を確認する。端末上の地図と施設の地図を照らし合わせて右端の壁を人一人がようやく通れるほどの隙間を最小の音で穴を作る。崩れる穴を複数人の男たちが手前に崩していく。

ようやくできた最小の隙間を体を隙間に合わせて進んで行き、ロッカーを前に動かしながら部屋の中に入っていく。

「予定通りですね。では作戦内容の最終確認に入りますよ」

「お前達よく聞いておけ、特に明楽お前はよく聞けよ」

明楽は呑気そうに答える。

「エレベーターで上がりたいところではあるが、監視カメラが存在するだろうからな、通気口から移動しながら上方を目指す。三階に通信妨害装置が置かれているらしいからな。そこに爆弾を設置して爆発させる。同時に外側からモビルスーツ隊が攻撃を仕掛けてくるはずだ。俺はバルバトスで戦闘に参加するが、お前たちは下水道から逃げろ。以上」

全員が黙つてうなずき、明楽がまず通気口から侵入し廊下の確認を行う。廊下には誰もおらず、監視カメラも無いことを確認すると廊下側から鍵を開ける。

五人が周囲への警戒を高めながら廊下を進んで行く、エレベーター前を無視して一番奥の非常階段のドアへと手を付ける。耳をドアに当て非常階段の音に耳を澄ませる。

音がしないことを確信すると、まず明楽が非常階段へと入っていく、警戒しながら上へと進んで行く。一階から二階へ、二階から三階へと進んで行く。

「夜だからつすかね？人がいないですけど……」

「だろ。警戒もほとんどが外の警戒に当たっているんだろ。うし、

さすがに通信妨害自体は少数でも操作できるんだろう。それに、この状況下でこんな施設に攻め込む馬鹿がいると想定していないだろうしな」

三階はさすがに警備が多少嚴重で廊下に出るだけでもかなり神経をすり減らした。

明樂が無警戒に外に出るのに他の四名は最大限の集中力を引き出す結果になったが、その原因が先ほどから明樂の緊張感の無いやり取りが原因であることだけは言うべくもない。明樂は後ろから感じる視線を知る由もなく、ノリノリで廊下の人通りが途絶えるのを見届ける。

((ハラハラするな……!!))

ファントムブラット隊が結成されてからこういう潜入ミッションは数えきれないほど行ってきた。しかし、その成功率は半分半分だ。そしてその一番の原因は目の前の明樂だった。

あの楽天的な性格が災いを起こすのだから、彼らからすればハラハラしないわけが無いのだ。今こうしている間も失敗するのではないかと気が気ではない。

(サブレ隊長！毎回毎回ですけど、耐えられないっすよ)

(俺もです、なんで無駄に神経をすり減らさなきゃいけないんですか?)  
(前にも言っただろ。待機部隊に置いておいてもそれはそれで作戦ミスをしそうで怖いからだ。外の連中はいざとなった時の囷役になつてもらわないと困る。あいつは囷になる可能性どころかこっちに突っ込んできそうさ。そもそも作戦内容は把握しているかどうかも怪しい)

全員が確かにという気持ちと同じくし、成功するようにと祈る。するとようやく明樂が外に出ていき、警備員を一発で倒して室内に引きずり込む。

「作戦通りにいくぞ。監視カメラの死角に警備員を引きずり込み、一人ずつ確実に……殺せ」

全員がうなずき、サブレが先に警備員の制服に衣服を切り替え、廊下に出ていく。そして、すれ違いそうになる警備員と監視カメラに最



大の注意をむけつつ、監視カメラから外れたところで警備員を倒す。十分後には三階の一角の警備員はほぼ全員が潜入した部隊が成り代わることとなる。

そこからの手順はさらに簡単だった。監視カメラに偽の映像をループさせることでごまかし、俺たちは悠々と妨害室へと侵入した。「な、なんだ!? おま……!!?」

大声になる前に始末する。案の定担当している人間は一人だけだったらしく、あくまでも通信妨害装置の定期的なメンテナンスだけの簡単な作業。腕に端末を付けた男が操作盤をいじり始め、もう一人がサポートに入る。

できることなら破壊せずに構造を知りたいという願いを込めた一連の行動は明楽の特に理由の無い行動の前に霧散した。

暇になった明楽は装置のスイッチの一つを何気なく押し、最悪の結果としてそのスイッチは警報スイッチだったのだ。

全員が咄嗟に明楽の方を睨みつけ、ここぞとばかりに叫ぶ。

「「やっぱりお前かよ!!!」」

サブレは冷静に事の対処に入った。

「誰でもいい、信号弾をあげろ! 色は青! 残りは装置を破壊しながら撤退!」

そういいながらサブレは廊下に出ていき、走りながら警備員を拳銃で殺しながら正面ゲートが良く見えるテラスへと出ていく。

サブレの視界の一番奥にヴァルハラが待機していた。

25

村から車で三時間もかかる高台はちょうど正面にまっすぐ進めば正面ゲートが見えてくる。すると、施設の三階から青色の信号弾が上がるのが見えた。サブレと決めていた信号弾の中でも青色の信号弾が意味するのは……。

「潜入作戦の失敗、破壊作戦に変更!」

ビスケットは耳につけていた通信端末に向けて大きな声をあげる。

「シノ! 作戦変更。アンテナを破壊して! サイガさん、バルバトスを出します! 敵モビルスーツの抵抗があると想像できるので、できる限

り敵の戦力を左右に分けてください」

シノの「了解！」という声とサイガの「了解した」という落ち着いた声がほぼ同時に聞こえてきた。

シノはフラウロスを砲撃モードに切り替え順番に丁寧にバスターライフルをアンテナに当てていく。一発一発を放つたびにフラウロスの体が沈んでいく。しかし、あつという間に全てのアンテナを落とすことに成功する。

サイガの方も自前のゲイレルとグレイズを合わせたようなモバイルスーツを操作しながら、大きなバトルアックスを振り回す。他のモバイルスーツもビームライフルなんかで交戦していきながらも敵のモバイルスーツを左右に分けることに成功した。

「イオリー！バルバトスを射出」

「分かりました。バルバトスダークスタイル射出態勢に入ります。パイロット不在の為、自動モードに切り替え射出します。足場を固定、発進します」

黒く薄い装甲にビームダガーという装備としては少々心もとないバルバトスは勢いよく射出され、敵味方モバイルスーツの間をあつという間に突き進んでいく。サブレのすぐ隣に着地する姿を確認すると俺は立ち上がって次の指示を飛ばした。

26

俺の隣にバルバトスは着地というには少々強引な形で突っこんできた。

俺はバルバトスの新しいスタイルに目もくれず即座に乗り込む、座席が下に沈み込み、正面に小さなパネルが姿を見せる。操縦桿を即座に握り、隣から現れたキツシュ相手にダガーを構える。

相手がバルバトスに向かってライフルの引き金を引く前に俺はダークスタイルの目玉装備を起動する。正面のパネルに『ミラージユ・システム』と書かれた文字が姿を現した。

とたんに敵モバイルスーツであるキツシュはこちらの姿を見失ったように左右にライフルを向ける。まっすぐにモバイルスーツを走らせ、ダガーをキツシュのコックピットに突き刺し、そのままモバイルスーツ

を盾にするように突っ走る。そこでようやくキツシユもバルバトスの姿を見付けたようにライフルを構える。

接触通信から彼らの会話内容が聞こえてくる。

「姿を消すことができるなんて卑怯じゃねえかよ」

「ふざけんなあ!!」

ライフルで牽制しつつサーベルで斬りつけようと突っ走ってくるのを俺はもっていたキツシユを投げつける。サーベルを構えていたキツシユを大きく体制を崩したところでバルバトスはダガーでコックピットを斬りつけつつ、キツシユを踏み台としつつ最後のキツシユを踏み倒しコックピットに突き刺した。

その瞬間、俺の脳裏に多くの老若男女の悲鳴とそんな悲鳴が一つ一つ消えていくのが感じ取れた。

「なんだよ……これ」

27

施設の一部を占拠したシノの姿を見た途端、作戦の成功を俺自身確信した。ギャラルホルンからの応援が駆け付けるようなそぶりが見えず、俺は施設の占拠が完全になれば上層部に意見を求める必要がある。

だが、この時、俺は不審に思うべきだったと後になって悔しみと共に襲い掛かって来た。

あの時とあまり変わらない。うまく行き過ぎるからこそいざという時に油断する。そんなことはあの島でのやり取りで痛感したはずだ。油断したうえでの見逃し。

今にして思えば、地球に降下したことをギャラルホルンが認識していないわけが無いのだ。今にして思えば、全部俺達を利用した計画だったのだと理解できる。

実際今油断しきっており、クレアさんが大きな声で俺に話しかけてこなければさらに致命的なことになっていたかもしれない。

「ビ、ビスケット!!」

クレアさんの悲鳴に最も近い声を俺はぎよつとしながら聞き耳を立てた。

「村から……村から声が……声が、消えていく」

クレアさんが放つ言葉の意味をいまいち理解できなかったが、その後、イオリの言葉に俺は驚きを隠せなかった。

「隊長!!村が……革命軍の人達の村が……焼かれているんです!!」

その時、俺はよくやくギャラルホルンの狙いが分かかってしまった。分かりすぎるほどに分かってしまう。

ギャラルホルンの狙いは村に残った革命軍を殺して証拠を焼き払った後、後ろから俺達を襲う算段だったのだろう。直前にクレアさんが何らかの理由で気が付き、イオリが調べたのだろう。

またしても俺たちは致命的なミスを犯してしまった。

この時、アフリカ戦線はギャラルホルン対ファントムブラット隊と革命派との戦いに移っていった。

《アフリカ・サバイバー編終わり 生きて証編へと続く》

## 生きた証Ⅰ

1

EDMの教習学校に通い始めて一年が経つと俺の元にもある程度のグループができていた。イオリとメアリー、メイデンと集まって一緒に遊んだり、一緒に学んでいたりしていると、ある日マハラジャ・ダースリンがやって来た。

「この子の面倒を見てやってほしい」

マハラジャの足元に隠れて顔だけをこちらに向けてくるのは黒髪の少年だった。10代にしてもさらに幼いように見える童顔と出会ったのはそのころだった。

ひたすら笑顔を向けるその童顔を疑いながら俺はマハラジャに問う。

「誰？おっさんの知り合い？」

「お前が助けたパイロットの息子さんだ」

先月の話だと確信したのはそういう説明を受けてから30秒経つてからだった。

確かに先月初頭に初めて教習生としてパイロットに参加した際、自由気ままに動き回っていたら海賊十機に囲まれている機体とパイロットを発見してしまった。

成り行き上見捨てるわけにもいかない俺は助けることになってしまう。さすがに十機ぐらいなら時間を稼げるだろうと意気揚々と突っかかっていった。そして、全ての敵機を倒すことができたのは驚きでしかなかった。

こんなつもりじゃなかったんだ。

まさか、その結果こんな子供になつかれるとは思わなかった。

「明楽・アルトランド……ですー！」

どこか楽しそうに笑っているその少年を見ながら頭を掻く。困り顔でマハラジャを見ると、マハラジャは俺に押し付ける気が満々の顔をしている。

どうやっても俺に押し付けようとしている。逃げようと思考する

が、その結果は従ったほうが楽だという結論になった。

「……サブレ・グリフォン」

明楽の満面の笑みと共に俺の騒がしい学校生活が進んで行った。

2

バトルアックを持ち上げるサイガの機体は村を蹂躪するギャラルホルン製のグレイズのコックピットに叩きつける。

サイガの視界いっぱいには炎が広がっていく村の姿と、村人を守る為に革命派のモビルワーカーがやられていく光景だった。

村の奥から指示を出すキマリスとバエルの姿を見付けた。倒すべき敵を見付けたサイガはキマリスの方に機体を走らせてバトルアックスを構える。キマリスは攻撃に気が付き、ランスでバトルアックスの攻撃を弾く。

「貴様あ!!よくもよくもお!!」

キマリスはさらに距離を取り、ランスを構える。ガエリオは戦いながら指示を出す。

「こいつは俺がやる!お前たちは革命派の拠点を潰せ」

心苦しい気持ちはガエリオにも存在する。しかし、革命派と穏健派の紛争を終わらせることができる一石二鳥の機会がようやく回ってきた。うまく立ち回ればファントムブラット隊を叩くことができる。だからこそこの作戦に乗ったのだ。

この村の人間を犠牲に多くの人、この場合はアフリカ大陸全土の人々の安全を手に入れると考えるなら必要な犠牲だと諭された。

元々、この村の人間は革命派の手が及んでいるとガエリオは聞いていた。

この光景を目にして心苦しさを覚えるが、そんなことで心ぐるしさを覚えていては戦ってられない。

キマリスのランスを低めに構え、丸盾に仕込んだ爆薬をサイガの機体に向けてはじき出す。爆薬が足場を揺らし、ガエリオは機体を走らせランスを下方から上方に向けて突き上げる。しかし、コックピットを下からの攻撃をバルバトスのダガーが軌道を逸らさせる。

「革命派を襲うだけならこの村を攻撃する理由は無いはずだ」

サブレの言葉にガエリオはあえて返さず、再び距離を取る。すかさずバエルが両腕に持っているバエルビームソードをバルバトスへ向けて斬りつけようとする。しかし、今度はサイガがバトルアックスで攻撃を弾きバエルに隙を作る。

「罪のない子供たちを！未来を生きる者達を！どうしてそんなことができるんだ!!」

バルバトスがダガーでバエルのコックピットに攻撃を仕掛けようとするが、キマリス盾を攻撃を弾く。

「お前達が流してきた無駄な血が多くの人を不幸にしているのだ。その不幸の連鎖をここで断って見せる！」

ガエリオの強めのセリフにサブレの感情が高まり声を荒げる。

「正義という気前のいい言葉に酔いしれ、正義の名のもとに行う行動が全て正しいと思ったら大間違いだ。お前たちの正義は欲望と同じ意味だ」

ジュリエッタも感情を高ぶらせ、大きな怒鳴り声をあげる。

「世界を乱すものを討つことが我々の仕事なのです！そんなことも理解できない人間に！」

しかし、ジュリエッタの言葉に憤りを覚え、この場の全員のこころに響く声を放ったのはサイガだった。

「死んでいった者への敬意を示そうとしない子供が口をはさむのか!!人の死を数でしか理解しないものが!!守ることを知らないものが!!死んで守りたいという気持ちを理解しない者達が世界を支配するのか!!」

バルバトスがダガーをまっすぐキマリスとバエルの方に向ける。

「お前達は正しいという言葉に酔いしれるのかもしれないが、これだけは言えるぞ……。お前たちは『悪』ですらない。ただのわがままな

『子供』だ」

ガエリオはそんなサブレの言葉に心に刺さる痛みを抱えながら反論を口にする。

「正しさを突き詰めていくことは間違いではないはずだ。君は『正義』を間違えというつもりか？」

「この世界に『正義』なんて存在しない。世界を『正義』と『悪』で分けようとするだけで体が幼い証拠なんだ。『正義』と『悪』なんて周囲の人間が見て、聞いて決めていくことなんだ」

「彼らの戦いが多くの血を流しているんだ！それを『悪』ではなく、それを止めようとしている我々が『悪』だともいうのか？」

「革命派が流した血とお前たちが流した血では意味が違うんだよ。革命派が流す血は仲間の血だ。お前たちが流した血は罪なき子供達の血だ。足元を見ろ！周りを見ろ！！流れている血をちゃんと目に入れろ！！言い訳をするな！目を背けるな！！これはお前達の責任なんだぞ！！」

サブレの最後の咆哮にたじろぐガエリオはバルバトスたちの後方から革命派とファントムブラット隊の増援が駆け付けてくる姿を見ると、撤退の合図をあげる。

ガエリオ達を撤退していく姿をサブレをサイガを止めながら見つめていく。

3

俺が村に再び足を踏み入れた時、炎が燃え盛り、血の匂いが鼻につく。一歩一歩ゆつくりと歩いていき、村のあちらこちらで救助活動をしているが、こんな状況で助けることができるのか疑問が残る。

ふと、何かを蹴ったことに気が付きそれを拾う。拾ったそれが子供の靴であるとわかって、その靴がデマルと呼ばれていたあの子供のものだと気が付いた。

このあたりのあの子の家があるのかもしれないと、小走りで探していると、ファンが顔を地面にうずめて泣きながら苦しんでいる姿が見えた。ファンの目の前には燃えてつぶれている家があり、ゆつくり近づいていく。

「ここは……………ここはデマルの家なんだよ……………俺達になついていて、いつか俺達と一緒に戦うんだっていつも……………いつもよお……………なんでだよ……………」

俺自身ショックから立ち直れない。すると、大きな通りのど真ん中で明樂とサブレが立ち尽くしているのを見付けた。後ろから近づい



ていき、話声が聞こえてくる。

「俺の所為で……ごめんなさい」

「お前の所為じゃない。気にするなどは言わないが、自分を責めるな」  
「でも……でも……」

サブレが明楽の頭を軽く叩き救助活動へと向かわせる。

明楽とすれ違いで俺がサブレの隣に立つ。サブレの表情は右側からよく見えない。子の惨状に涙を流しているのかもしれない、怒りに表情を歪ませているのかもしれない。

しかし、そんなサブレの顔を真正面から見る根性が今の自分にあるわけが無く、恐ろしくて見る事ができない。

サブレ、今どんな気持ちなのだろう。どんな気持ちでここにいるのだろう。

そもそも、サブレが戦う理由は何なのだろうか？サブレはどうして戦い続けるのだろうか？いつだって、みんなの前で戦い、今だって……これからだって……。

どう話しかけたものか悩んでいると、後ろからイオリが駆け足で近づいてくる。

「先ほど本部と連絡が付ききました」

4

ヴァルハラ会議室に集まったのは整備班のゼム・ロック。開発局長のソニア。モビルスーツ隊長のサブレ・グリフォン。ファントムブラット隊長のビスケット・グリフォンだった。

目の前にある大きな画面にはマハラジャの渋めの顔を映っている。ビスケットの説明に表情を変えず、事の成り行きと、通信ができた理由。そして、村の惨状を含めて全て説明した。

マハラジャは最後の説明を聞くと大きく息を吐き出す。

「通信妨害が起きているのだろうかということは分かっていたが、まさか穏健派とギャラルホルンがひそかに手を結んでいたとはな……ラストルが死んだ後かな？」

マハラジャの疑問にサブレが代わりに答えた。

「だと思いが、キッシュの実戦テストのデータを効率よく手に入れる

には本格的な介入は控えたんだと思うけど……」

サブレが言葉を濁した理由をなんとなく理解したマハラジャはその先を口にする。

「穏健派と革命派の両方を潰したのはキツシユが完成が近づいたためだろうな。両方を潰したうえで、アフリカ大陸全域にモバイルスーツの生産工場を配備しようと考えていたんだだろうな」

ソニアは眼鏡を光らせながらうなずく。

「あの工場で作れるパーティクルドライブとモバイルスーツの数には限界がすぐに来るでしょうから。その為には革命派は邪魔でしょうし、工場を作れば穏健派も抵抗を示すでしょう。そもそも、自分達にとつて余計な情報を知っている穏健派を生かす理由はあまりないでしょうし」

ソニアは先ほどまで工場を実際に視察し、生産データの確認をしていた。黙っていたゼムもそこで口を開いた。

「どちらにせよ動くなら早い方がいい、穏健派はともかく革命派は近いうちにギャラルホルンへの敵討ちに動くぞ」

それはビスケット自身感じていることでもある。彼らの纏っている空気は鉄華団を連想させる。鉄華団はビスケットを失ったのち、敵討ちに走ってしまった。

敵討ちを止めることも真剣に考えたが、鉄華団ならいざ知らず、革命派を止めることができるとは思えなかった。

「止められないのか？降下部隊を配置するにも時間がかかるぞ」

「多分、無理だと思います。高まった感情を沈めることができるとは思えません。鉄華団の時だってそうですけど、一度高まった感情を強引に落ち着かせれば逆に俺たちが敵になる可能性があります」

「ふむ。そうなるかと、降下部隊の準備を急がせるしかないが……誰でもいい革命派のリーダーと一度話をさせてくれ」

誰が行くか視線での押し付け合いがソニアとゼムがはじめ、ビスケットは視線をサブレの方に向ける。怖い表情を変えないままサブレが口を開いた。

「俺が適任だな」

5 そういつて部屋を出ていった。

村の端には大きく盛り上がった高台が存在し、その高台の上には革命派の亡くなった仲間たちが眠る墓標が存在する。新しく亡くなった仲間たちもそこに集められていた。

サイガはそこで酒をもつて死んだ仲間たちの分だけ盃を用意する。用意した盃に酒を濯ぐ。最後に自分の分の盃に酒を入れ座って酒をゆっくり飲み始める。

そこへ後ろから近づいてくる気配に気が付き後ろへと振り向く。サブレがちょうど丘を登ってくるころだった。

サイガの隣に座ると言いにくそうにしているサブレの横顔に「クス」と少し笑ってしまった。サブレは照れながら「笑うなよ」とつぶやく。

「ありがとな。こいつらまで見つけてくれて、お陰で……助かったよ」  
真剣な面持ちにサブレも気持ちを引き締め、本題に入ることにした。

「さつきEDM本部と連絡が取れた。それで本題なんだが、代表がお前と話をしたいと言っているんだ。お前も代表と話をしたがっていただろ？出来れば今から話をしてくれないか？」

サイガは何かを言いかけようとするが、すぐに言葉を飲み込み、最後の酒を飲み干してしまう。

「分かった。もう少ししたらそっちに行こう」

そう言つて立ち上がり、まっすぐ仲間たちを眺める。サブレは気になったことを聞くことにした。

「村の人達もここに？」

サイガは首を横に振り村の西の方へと視線を向ける。

「村の人達の遺体は村から西へと一キロ走ったところにある集団墓地に埋めてある。今頃墓の中に埋めているところかな」

サイガが丘の上から降りてくると、サブレは丘の上に並ぶ遺体に向けて黙とうを数秒だけ祈り丘を降りていく。

6

サイガをヴァルハラ内で案内していくと、会議室の前で一旦止まってしまう。

「ここが会議室。で、マハラジャとすぐにつなげるか大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

サイガの覚悟を決めた表情にサブレも覚悟を決め部屋の中へと入っていく。部屋の中にはソニアもゼムもないところを見ると、別件の仕事にかかっているのだろう。

しかし、問題もある。会議室の通信機が普通に切っている。仕方なしにもう一度通信を繋げると、壮絶ないびきが聞こえてきた。

咄嗟に耳を塞いでしまい、兄の方に意見を求めると兄は平然とした顔で耳をふさいでいる。

「サブレを待っている間に寝てしまったんだよ。あまりにもいびきが大きいから通信を切ったんだよ。起きないし……」

俺は心に抱く怒りを何とか抑えてマハラジャに声をかける。

「おい、起きろよ。革命派のリーダーを連れてきたんだぞ？」

「ぐがー」

「おい！起きろって言ってんだろ!!」

「ぐがー」

「!! (怒) (怒) (怒)」

「ストップ!!サブレ！それだけは勘弁して!!通信機を壊さないで」

俺が通信機を壊そうと両腕をあげたところで兄が後ろからガツクリつかんでくるのを俺は忌々しい気持ちで見ている。

その後イオリを連れてきてモーニングコール代わりのけたたましい警報音を鳴り響くとようやく目を覚ました。

「始めまして。革命派のリーダーをしているサイガと申します。今回は彼らに協力してもらいたいこうして話し合いの場を持たせてもらいました。大変長くお待たせして申し訳ありませんでした」

サイガが社交辞令を混ぜた見事な手本というべき言葉を選んでしゃべりだすと、マハラジャは顎に手を置き一瞬だけ考え込み、口を開く。

「堅苦しい言葉は止めておこう。俺自身そういう言葉はあまり好きで

はなくてな。単刀直入に聞こう。ギャラルホルンの連中への攻撃はいつ行うつもりだ？」

マハラジャの鋭い指摘に眉を一瞬だけ動かし、表情を決して動かさないようにしながら口を開く。

「準備を終えて突撃を仕掛けるのは多分一週間以内には……今はそれしか言えない」

「そうか、一週間あればこちらも最低限の準備ができる。できれば一週間待つてほしいがな」

「こつちのメンバーを押さえていられない。一部のメンバーは今にも走り出してしまいそうだ。今回の攻撃はあまりにも……ひどかった。俺達への攻撃ならまだ抑える手段が色々あったが……今回は無関係な人へ向けての攻撃だ。抑えられる気がしない」

「そうか……こちらもなるべく早めに部隊を下ろせるように準備をしよう」

サイガはもう一度マハラジャを強めに見て頭を下げた。

「あんたの直轄部隊を好き勝手動かして悪いと思ってる。最悪の場合俺達だけでも戦うつもりだ」

覚悟を決めた男に説得は無駄だろう。サイガは決めてしまったのだ。報復を、戦い、そして散っていくことを決めたのだ。

仲間たちの元へと帰ることを決めたのだろう。そんな男の覚悟に俺は文句を言えない。

「覚悟はある。俺たちは戦う」

そう言つて部屋から出ていくサイガ。ビスケットもマハラジャの前に出ていく。

「では、俺たちもそのつもりで動きます」

「ああ、最悪はお前達だけでも動け」

部屋から出ていく兄を見ながら腕を組み、一番後ろで考え込んでしまふ。すると、マハラジャはニヤニヤと笑いながらこちらに視線を向ける。

「随分仲良くなったようだな。明楽と違い短時間で仲良くなったようだな」

「別に……仲良くなんて」

といったところで否定しきれない自分がいると確認する。

「そうだな……明樂の時は随分時間がかった」

「当時の明樂のハイテンションにお前はついていけていなかったな。どうだ？ああいう男の方が友人としては安心するのではないか？」

少しだけ笑いながら答えた。

「そうかもしれないな。それでも、明樂と出会わなくてよかった何て思った日は一日も無いよ。俺は明樂と出会えて本当に良かった。明樂は俺の道だ。あいつはいつだって正しい感性を持っている。だからこそ俺はあいつを指針にできるんだ。どんだけあいつがうざかろうとな。いつの日かサイガと出会えてよかったと言える日が来るんだろうか？」

マハラジャは優しそうな表情を浮かべて返してきた。

「来るさ。どんなに辛かろうと、苦しかろうと、悲しかろうと、いつの日かそんな出会いや別れが良い思い出だったと言える日が来る。お前がそうなる様に努力を怠らなければな」

とても意味深な言葉で、とても深みのある言葉だ。今の俺には完全には理解できない。それでもいつの日かそう思える日が来ると信じよう。

「お前は何も知らない。お前が知らないことはこれからお前が色々な人と関わり色々な人と戦って理解していくことだ。ゆつくり時間をかけて答えを出せ」

ゆつくりと時間をかけて答えを出す。それも今更なのかもしれないが、答えを出さなければならぬときなのかもしれない。

気が付くとマハラジャとの通信が完全に切れている。

本当に分かったようなことを言っけむに巻く人だ。

7

ある日、EDM教習学校の中庭を歩いていると、池の端で池の中を凝視している明樂の姿を見つけた。

明樂と出会ってから2か月がたったときの事だった。

二か月経っても明樂という少年の事はよくわからない。いように

ハイテンションで、にぎやかで、うるさい。正直一人でおとなしくしたい時ですら大騒ぎだった。

教育係を命じられている身としては話かけるべきなのだろうが、どうしても抵抗を覚えてしまう。話しかければ騒がしい時間がやってくる。

しかし、どうしても気になったのは明楽の後ろ姿がどこか悲しげに見えたからだ。

騒がしくなることを覚悟に決め後ろから話しかけた。

「どうした？何かあったのか？」

「先輩。ここの魚が元気が無くて……最近どんどん元気がなくなっていく」

そういわれればそうかもしれないが、そこまで詳しく見ているわけじゃないし、少なくとも毎日見ているわけじゃないし、魚だって寿命もあるだろうし。

そんな文句にもならないような言葉が喉の奥から出てきかけるが、ぐつと飲み込む。

「寿命だろう？お前はそんなことをしている場合か？一週間後のテストで赤点取ると俺も困るんだがな」

「……でも」

どうしても気になるらしく、魚から視線を外そうとしない。どうしたものか。ここで遊んでいる場合ではないし、かといってこのままでは梃子でも動かないだろう。

仕方なしに、学校側に直接お願いし、魚を見てもらうことにしたが、もちろん魚の状態が分かるまで梃子でも動こうとしないこの男を待っていた。

魚が数日で元気になると聞いているときの明楽はとてもいい笑顔だった。

不意に不思議に思い尋ねてみた。

「なんでそんなに魚が気になるんだ？」

「だって、かわいそうじゃない……生きれるんなら生きてほしいし……」

そんな言葉に唾然としながら聞いていた。当たり前のように見えるが、いちいち気にする奴なんていない。それでも、気にしたのだ。少しだけ気に見てもいいかもしれない。そういう気持ちにさせた。



## 生きた証Ⅱ

8

俺と明樂が出会ってからどれだけ経ったのか忘れてしまったが、いつの間にか明樂と常に一緒に行動するようになった。気が付けば俺は教習学校を卒業していた。

卒業してすぐにEDMから幹部クラスへの招集をへてすぐに幹部になった。

明樂はまるで自分の事のように喜び、嬉しそうにはしゃいでいる姿を見ていた。

「幹部クラス就任おめでとう！さすが先輩！今度何か奢ってください」

「お前は黙って祝うということができないのか？」

結局奢らされた上に店から店へとはしごさせられてしまう。そんな時、あの事件が起きた。ドルトの革命が。

「サブレ。ドルトに向かい、仲介をしてこい」

マハラジャから無慈悲な命令を受けた俺は不機嫌と拒否の表情を半々で浮かべつつ、露骨な拒否の姿勢を示す。

「嫌。絶対嫌。それは代表の仕事でしょ」

「拒否権に拒否権を行使する」

不毛なやり取りをしていると我ながら思う。拒否をしても無駄そうなので話を先に進めることにした。

「で？何？ドルト？なんかあったの？」

「ああ、ドルトで従業員がデモ行為を行おうとしていると情報提供があった。クーデリア・藍那・バーンスタインがドルトを訪れるらしく、それに合わせてデモ行為を行おうらしい。最悪の場合は戦闘にもなるそうだ」

ドルトがそこまで追い詰められていたとは知らなかった。

元々ドルトをはじめとしたコロニー圏出身者は過酷な労働条件で仕事をしている。しかし、そんな労働条件に対して保証も何も無い。働けなくなれば斬り捨てられ、働ける限りは最低限の賃金で働かせ

られる。それに対しての行動だろう。

しかし、クーデリアという人の事は知らなかった。何だろう、革命家なのだろうか？

そんな疑問をマハラジャが吹き飛ばす。

「クーデリア・藍那・バーンスタインは火星で独立運動を起こしている  
バーンスタイン家の令嬢だ。地球への航路の途中にドルトに寄るそ  
うだ」

「寄るといのが気になるが……何で寄るんだ？」

マハラジャが知るかと突き放すように声は発する。俺もそれ以上聞くわけにはいかないし、少しだけ考え込んでしまうと最後に最大級の爆弾を落とした。

「最後にアリアンロッド艦隊が今回の一件に関わっているからなよろしく」

「……………はい？」

顔を上げ、マハラジャがいたであろうその場所を見ると既に逃げていた。啞然とした表情で数秒だけ呆けていると、明楽が俺を押さえながら叫んだ。

「ぞけんな!!最後の最後に面倒なんてレベルじゃないこと言いやがって!!!」

「先輩!落ち着いて!!」

「てめえ!!出てこいやクソおやじ!!!めんどくさい仕事を率先して俺に回しやがって!!」

暴れ回る俺は明楽に抑えられながら叫び続けていた。

9

バルバトスの正面に位置する機体の名前を聞いたのはシュミレーションで戦う前の事だった。ゲイレールとグレイズの名前を合わせた造語らしく。名前を『ゲイグ』というらしい。胴体と頭部はゲイレールで両腕と両足はグレイズがくっついている感じだ。パーティクルドライブの連動率はそこそこ悪いらしいが、グレイズほどではないとは本人の弁だ。

ゲイグはバトルアックスという名前の大型の両刃斧を両手で構え

ており、俺はバルバトスのビームアックスを両手で両方とも持っている。

シユミレーションを始めてから軽く一時間経っており、いまだに互いに決定打が決められずにいた。

攻めのゲイグと守りのバルバトスという感じになっている。最もこちらから攻撃することもあるので完全に分かれているわけではない。しかし、サイガの攻撃的過ぎる攻撃に対して少々防御より偏っているのは認めるところだ。

外では革命派のメンバーとファントムブラッド隊のメンバーが一緒になって戦いを眺めてはざわざわしている。

サイガは再びバトルアックスを振り回しバルバトスの腰をだるま落としの要領で落とそうとするが、俺はそれを後ろにステップで回避しつつ態勢が崩れたところにすかさず切り込む。

バトルアックスで崩れた体勢を持ち直しバトルアックスを反対方向に向けて振り回す。バトルアックスのビームの刃とビームサーベルの刃がピンク色のスパークを放ちながらせめぎ合う。

しかし、サーベルと大型の両刃斧では攻撃の重さが違う。互いにつかり合えば負けるのはサーベルだ。勿論二本のサーベルで受ければ互角だろうが、今回は攻撃をするために右腕のサーベルだけで攻撃をした。

バルバトスの体勢が大きく崩れゲイグも同様に崩れる。再び互いの距離が開き、武器を構える。

「あの体勢からバトルアックスを返してくるとは。サイガもなかなかやるな」

俺が小声でつぶやきつつ再び戦う為にサーベルを構えようとする。しかし、その瞬間に正面の画面に『タイムアップ』の文字が表示され、途端に周囲の明かりが落ちていく。コックピットが上へと上がっていき、俺の視界が一気に明るくなっていき、周囲の景色はヴァルハラ の格納庫だった。

隣では背伸びしているサイガの姿があった。こっちを見ながらにやける。

「流石だな。EDM最強の男の噂はほんとうらしいな」

あと数日で作戦準備が整うという段階でできれば時間を稼ぎたい、サイガと共に革命派の特訓を言い訳に時間稼ぎをすることになった。しかし、サイガはともかく俺の実力を見せておく必要があると判断した。それゆえの俺とサイガの一騎討ち方式の特訓をして見せることで俺の実力を示す必要がある。

サイガの言葉に俺はニヒルな表情で返す。

「そつちこそ。明楽ぐらいだから俺と互角に戦えるのは」  
すると下の方から様々な声が俺の元に集まってくる。

「お、俺を鍛えてくれ！」

「俺もだ！」

そんな言葉を俺は大きな声で返す。

「五人ほどでまとめて来い！まとめて鍛えてやる！」

サイガが笑いながら下へと降りていく。

10

数機のモビルスーツを使ってサブレに襲い掛かってくるが、サブレはそれを難なく叩き潰している。

サイガは画面越しにその姿を確認していると、サイガの視線は一番後ろでコンテナの上で呆けている明楽の姿を目撃した。

(確か……明楽・アルトランドだったか?)

サイガは明楽の元へと歩いていき話しかける為に右手を伸ばし明楽の肩を叩く。

「よう、どうしたんだ？前にあつた時は結構元気そうな感じがしたが……」

「……俺の所為で」

明楽はいまだにこの間の作戦の失敗を引きずっていることにサイガは気が付いた。サイガはサブレからその辺の事情を聴かされていた。

実際にその姿を見るまで信じているわけではなかったが、こうしてみると落ち込み具合は半端ではない。いつものテンションが全くというほど無い。

サイガは笑って誤魔化すことができない。はつきり言うべきだろうかと悩み口を開く。

「……お前が失敗したからじゃないって言われたんだろ？」

サブレはそう言ったらしい、聞いてはいただろう。しかし、そんな一言で気持ちが立て直せるほど気持ちの落ち込みは軽くない。

「でも、いつもいつも俺だけが失敗してる。なのに先輩はどうして俺なんかをいつも……」

明楽が心配しているのはサブレがどうして自分なんかをいつもそばに置いておいているのかという事なのだろう。

サイガにはその理由位はなんとなく理解できた。

サブレとはここ数日の付き合いだが、今では親友と言ってもいい立場になっている。サイガからすれば気の合う間だと理解できた。

ああいう人間を親友というのかもしれない。

「俺には理解できるけどな……あいつが君をそばに置いておきたい理由」

明楽は驚きながら食いつくが、サイガは笑うだけでそれ以上は答えてくれない。

サブレが明楽をそばに置いておく理由。

それは――

11

要塞に帰還したガエリオは作戦の失敗を司令官に報告すると、その場を後にした。

司令官がため息を吐き出しながら両手を額に置きながら呆れかえる。司令官の正面のソファでは細めの目としわが広がっている顔が特徴的な顔面年齢だけを言えば50代、60代に見える外見をしている男がいた。

司令官は申し訳なさそうにしながら頭を軽く下げる。

「申し訳ありませんイズナリオ様。証拠を隠滅するための作戦がこうして失敗しまして。せっかくイズナリオ様が協力していただいたおかげでキツシュが完成いたしましたのに」

イズナリオは「フン」とふんぞり返り杖を強めに地面に打ち付ける。

ガエリオとはすれ違いになったためにあつていないが、そもそもガエリオとは会うつもりは無い。

「そもそも、ガエリオ・ボードウインの奴がエヴォ・エクスを好きだと言ってきたからこそ我々の計画に組んでやったというのに……役に立たん男だ。マクギリスのような奴も嫌だが、あいつのように役に立たん男も考えものだな」

司令官も同意するようにうなずき報酬の金を振り込んだタブレットをイズナリオに手渡す。

「イズナリオ様が穏健派との仲介役をかって出てくれたお陰でキツシュを完成させられました。本当にありがとうございます」

イズナリオはタブレットを受け取り、報酬の金額を確認しつつタブレットを手元の鞆の中に入れる。

「こつちからすれば金がもらえれば何でもいいがな」

司令官は立ち上がりキツシュの生産データをイズナリオに見せる。キツシュのデータには『ヤマジン・トーカ』と掛かっていた。

「そもそも、ラスタル派の一人であるヤマジン・トーカが生きていればそもそも済んだ話なのですが。ヤマジン・トーカはラスタル暗殺の後で行方不明ですから」

イズナリオはどうでもよさそうにふんぞり返り、キツシュの生産計画へと画面を移す。

「そもそも、ヤマジン・トーカ自体はゼム・ロックの弟子のひとりだったからな。最もラスタル自体がマハラジャ・ダースリンの劣化コピーのような存在だ。アリアンロッド艦隊自体がEDMの劣化組織ともいえる」

司令官はイズナリオの言葉に関心に似た感情を浮かべて何度もうなずく。イズナリオは話の続きを一人話し続ける。

「ラスタルにはどこかでマハラジャの事を尊敬しているようなところがあったからな。それは我々の間ではある程度理解しているところはあった。まあ、ラスタルとマハラジャの違いを簡潔に述べれば」

司令官の秘書が出した紅茶に口内を潤しながら睨むように答える。

「ラスタル派思想の伴わない実力主義者であるのに対し、マハラジャ

は理想家であると同時にそれを現実に変えることができる実力主義者であるという点だ。常に周囲の人間に気を配ることができるのがマハラジャだ」

「では、マハラジャ・ダースリンの方が人間の中ではよっぽど上という事でしょうか？」

イズナリオはカップを机に置く。

「だから言っただろ？ラスタルはマハラジャの劣化コピーでしかない。むしろ理想が無い分ラスタルの方が幾分がひどいだろう。マハラジャより警戒するべきなのは……この場合は『修羅』が最も恐ろしいと聞く。あのラスタルを土下座させたと聞くからな」

司令官が驚きと共に顔を前に突き出す。イズナリオは驚いた司令官の表情を楽しみながら再び紅茶を飲む。

12

ビスケットは考え込みながら休憩室で集まった情報を脳内で纏めようとしていた。すると休憩室のドアを開けて中に入ってくる人影を見付けた。

「クレアさん。どうしたんですか？」

「いえ、格納では皆さんが必死な表情で訓練にいそしんでいるので話しかけづらくて……その点ビスケットさんは話しかけやすいんですよ」

微笑みながらビスケットの向かい側に座るとビスケットは苦笑いを浮かべる。

「それって褒めてませんよね」

いわゆる威厳が無いと言われているようなものだ。訂正を求める意味で言った言葉だったが、そんなビスケットの言葉をクレアはニコニコしただけで訂正しない。

「そんなことより……」

「そ、そんなことって……!」

そんなことと言って話を逸らすクレアにビスケットが軽く食いつくが、クレアは完全に無視しながら話を続ける。

「何かあったんですか？先ほどから唸っているようですが……」

「いいえ……誰が穏健派にキツシユとパーティクルドライブ情報を与えたのかなって思っています。パーティクルドライブの構造は同じでも使っているパーツは全く違いますからね」

ビスケットは手元のタブレットをいじってデータを整理しながらしゃべっている。すると、クレアは思い出したように口を開いた。

「そういえば、ゼムさんがおっしゃっていましたが……キツシユのパーティクルドライブと革命派のパーティクルドライブは全く同じパーツを使用していたっつと」

それを聞いていたビスケットはソファから勢いよく立ち上がり前のめりにクレアに顔がくっつきそうになる。クレアは顔を後ろにそらす。

「そ、それは本当ですか!?!」

「ええ。そうおっしゃっていましたが……それがどうしたんですか?」

ビスケットはゆっくりもう一度ソファに座りなおす。

「その話が正しいなら革命派と穏健派にパーティクルドライブを提供したのはギヤラルホルンということになります。でも……何の為に?」

ビスケットが悩んでいるとクレアが思いついた言葉をそのまま口にする。

「戦闘シミュレーションを取るためではありませんか? 私のお姉さまがおっしゃっていましたが、ギヤラルホルンはチェスや将棋のように戦いを捉えていると」

それを聞いていたビスケットは「なるほど……」とつぶやいたのち、一分ほど間を開けて驚きの声をあげた。

「ええ!! クレアさんお姉さん居るんですか?」

「え? 驚くところはそこなのですか?」

話が多少逸れたところでビスケットが自分の意思で話を元に戻した。

「ギヤラルホルンがチェスや将棋のようにとらえているってどういう意味ですか?」



「お姉さまは『ギャラルホルンは混戦になるととても弱い。これは様式にこだわるからこそであり、その理由は三百年の支配が生んだ歪んだ認識。だから私はEDMこそが脅威になると思っただけね。中々お爺様にはわかってもらえないわ』と仰っていました」

クレアのお姉さんに興味が出てしまったが、ビスケットはその誘惑を振り切りお姉さんの話を詳しく考えてみた。

「要するにギャラルホルンは一対一での真剣勝負などの様式にこだわった戦いにこだわっているってことですよ。だから実践データを取るためにも一方的な戦いより、ある程度互角の戦いを望んでいたってことか……」

タブレットのデータを消しつつ、最後のコーヒーを飲み込んで一息つく。

「でも、そんなこと一指揮官や司令官が考え付くとは思えないけど。だとするとセブンスターがかかわっているのかな？でも……元セブンスターズはギャラルホルン本部から出ていくとは思えないけど……だったらやっぱり司令官が勝手に？」

脳内でグルグル考えを巡らせているとクレアは思いついたことをそのまま口に出した。

「そういえば。セブンスターズで思い出したのですが、イズナリオ・ファリドという人は今でもギャラルホルン本部に居るのでしようか？」

その名前を聞き一瞬呆けた瞬間再び立ち上がり前のめりで叫ぶ。

「イ、イズナリオ・ファリド！そうだ、その人がいた!!」

13

明楽は誰もいなくなった格納庫で一人いまだに呆けていた。やる気がいまいち出てこない。悩みから解放できず、ずっと考えている。

「先輩だったらこんな悩みあつという間に答えを出すんだろうな」

そんな言葉を口に出しつつコンテナの上に座り込み、悶々とした悩みに苦しんでいると真後ろから声がかかる。

「らしくない悩みに悩んでいるのはどこのどいつかな？」

「うわあ!？」

驚いて後ろを振り向こうと体を浮かせるが、途端に自分がコンテナの端に座っていることに気が付いたときには時既に遅く、コンテナの下に落ちていく。

「うがぁー」

そんな悲鳴をあげながら悶えていると声の主であるサブレが明楽の隣に降りてくる。明楽は涙目でサブレの方を見上げる。明楽が口を開く前にサブレが口を開いた。

「明楽、今からシユミレーターを使った一騎討ちをするぞ」

明楽は口を開いたままその場で止まっているとサブレはバルバトスの方へと歩いている。数秒遅れてグシオンの方へと移動していく。互いにコックピットの中へと入っていく、一時間のタイムリミットを設けるとスタートの文字と共に戦いが始まる。

格納庫には二人以外いないために二人の戦い以外の音が聞こえない。

バルバトス目掛けてハルバードを振り下ろすが、バルバトスはそれを日本のビームサーベルで受け止める。上へと攻撃を弾かれ、ビームサーベルの攻撃がグシオンの右肩へと食い込む。

正面の小さな画面にはグシオンの右肩にダメージが入ったという警告がアラームと同時に写る。

「流石先輩。こっちの攻撃がなかなか通らない」

自分を過小評価してしまうほど悩んでいる。

バルバトスはグシオンの攻撃を再び防ぎグシオンを蹴り飛ばす。体勢を整えようと右腕を動かそうとするが、グシオンの右肩にダメージが入っているため立ち上がれない。仕方なしに左腕で立ち上がるが、同時にバルバトスのサーベルがグシオンの喉元で止まる。

立ち上がることもできず、その場で停止しているとサブレの声が明楽の元に届いた。

「お前は俺が強いから自分が勝てないと思っっているのかもしれないが、そうじゃないぞ。お前が今の俺に勝てないのは単純にお前の悩みが攻撃する手や思考を妨げているからだ。だからと言って悩むなどは言わないがな」

明楽をまるで諭すように穏やかな声が明楽の元に届く。

「悩め。悩むことをやめ、他人に考えを預けるようになるぞ、ガエリオ・ボードウィンやジュリエッタ・ジュリスのようになるぞ。お前の悩みはお前の物だ。明楽、お前は俺が悩みをすぐに解決できていると思っているのかもしれないが、俺はお前以上にいつも悩んで過ごしているんだ。明楽……悩みと戦え。悩むことができるのは人間の最大の武器だ」

「せ、先輩……俺」

「明楽、俺は今でも覚えているんだ。兄さんの事で俺が悩んでいた時、お前言ったよな。『子供が大人の都合で振り回された挙句殺されるなんて間違っているって。助けられるなら助けるべきだ』ってな。だから俺は兄さんを助けようと思ったんだ。いや、それだけじゃないな、鉄華団の残党を助けようと思ったのもお前が理由だ。お前が俺の道を作ってくれたんだ。お前らしくあればいいんだよ。いつもみたいに関を振り回すお前でいればいいんだ。心のままに怒り、心のままに動けばいいんだよ」

サブレの言葉に明楽はいい笑顔に変わる。

14

ドルトの一件の解決のためドルトカンパニーを訪れた俺は労働者側の代表代行を案内している際にある人に話しかけられてしまった。「君、グリフォン夫妻の息子さんのサブレ君かい？覚えていいるかな君の家の隣だった……」

「あ、はい。お久しぶりです」

本当はよく覚えていなかったが、覚えているようなそぶりを見せながら適当に相槌を打つ。すると、相手の男は深刻そうな表情を浮かべると信じられないような声を放つ。

「サヴァラン君のことは残念だったね。ビスケット君にも伝えてあげたかったんだけど……」

「ビスケット兄さん？サヴァラン兄さん？何の話ですか？」

そもそも二人とは別れてから通信すらしたことが無いので今更なんの話をしてるのかと疑問を抱くと男は「知らなかったのかい？」と

逆に尋ねられた。

「サヴァラン君は先ほど自殺したんだよ。なんでもビスケット君と何かあったらしくてね」

俺は仲介役の仕事を手早く終え、自殺した場所へと走って行く。広い空間に自殺に使ったであろう縄が天井から下がっており、二人のドラトカンパニー関係者の男がサヴァラン兄さんの遺体を入れた袋を連れて出ていくところだった。

先ほどの男から受け取った音声データを握りしめた。

ビスケット兄さんへ向けられたデータは鉄華団へとコピーは届けられたらしい。だったら俺ができることは無いだろう。

しかし、同時に嫌な予感だっけしている。だが、今更兄さんと会って何を話すのだろう。そう言っただけで悩みが加速する。

悩みを抱えたまま船に戻ると、家庭の事情を聞いていた明楽が難しそうな表情を浮かべながら近づいてきた。

「先輩！助けに行かないんですか？」

「なんで助けに行かなきゃならないんだよ。今更……」

「だって……だって……！」

明楽は一瞬だけ俯きはつきりと声を放つ。

「子供が大人の都合で振り回された拳句殺されるなんて間違っている。助けられるなら助けるべきです！それでしょ？子供が大人の都合に振り回されて死ぬなんておかしいですよ！」

明楽の言葉は俺の悩みを吹き飛ばした。

やっぱりお前は俺の道だよ。

## 生きた証Ⅲ

15

兄さん達鉄華団を追いかけて地球に再び降下することになった時には既に事態は決着を迎えたところだった。

雨が降り出し外に出ると体が冷えるのが理解できる。夜中になり船をピツタリくつつけると、作業員に紛れ込む形で中に入り込んだ。

中に入り込み、格納庫に辿り着くとそこには二人の女性と一人の老人が待ち構えていた。

「初めまして。クーデリア・藍那・バーンスタインとお申します」

金髪の長い髪をまとめている一人の女性は頭を下げた。

その隣に立っていたのは髪の短いカールのかかった金髪の女性で、「メリビット・ステープルトンとお申します」と告げてきた。

そして、最後に一番左端に立っていたのは俺でも知っている人物だった。

長いひげをいじりながら立ち尽くす老人こそ蒔苗東護ノ介本人だろう。

「初めまして。私達はEDMのファントムブラッド隊と申します。私はオペレーターのイオリとお申します。それで……」

イオリが困った表情でこちらを見てくる。それもそうだろう。俺は今雨合羽で顔を隠しているのだから。しかし、蒔苗は笑いながら俺の方をじつと見つめてきた。

「初めましてじゃな。修羅で間違いなかろう?」

俺も頭を軽く下げつつイオリに話を託して奥へと姿を消していた。

なんとなくで船の中を歩いていると、ここだという場所に辿り重たいドアを開けようと手を掛けるとそこから声が漏れてきた。

「……ビスケット」

ゆつくりドアを開けるとドアはギギイという音を立てる。白髪の若者の特徴的な長い前髪を揺らしながらこちらを見つめる。

「お前は……?」

俺は隠していた顔をさらしながら自分の名前をさらす。

「サブレ・グリフォン」

これが俺とオルガとの出会い。

16

「作戦の説明を始めるぞ。まず、革命派が穏健派の最後の拠点に対して攻撃を仕掛ける。しかし、その間ギャラルホルンが横やりを仕掛けてこないとも限らない。だから俺たちは要塞から出てきたギャラルホルンを叩く。要塞自体は降下部隊が叩く手はずになっている。こちらの敵が少なくなってきたら革命派の応援に向かう。何か質問は？」

俺がそう言っただけで会議室に集まったパイロットたちにそう叫ぶと、特に質問は無かったらしく静寂が会議室を満たした。

俺は解散と言いつつ部屋から出ていく。すると、廊下の奥にサイガが待ち構えていた。

「少しいいか？」

そういつつ俺たちは休憩室へと足を運んだ。

この船には酒は積んでおらず、ゆえにサイガに酒を出すことができない。それだけが俺自身不満ではあるのだが、そればかりは仕方ない。

サイガの前に飲み物を出し、俺はサイガの対面に座る。

「ありがとな。あいつらに指導してもらって、それに武装の一部も恵んでもらったし、これだけあれば穏健派だけなら何とかなる」

「気にしないでくれ。こつちも必要投資だよ。今後は多分アフリカ大陸を活動拠点にする予定らしいからな」

「それでも……いや、本題は別だな」

サイガは飲み物には一切手を出さずこつちをまつすぐ見つめながら笑顔を向けた。

「この作戦が終わったら一緒に酒を飲もう」

俺はその微かに存在した間に多少思うところはあったが、だからと言っただけでそれに対して否定するつもりもない。

「ああ、絶対だ」

サイガはヴァルハラを降りてしまうとそのまま歩いて自分たちの機体まで移動していく。サイガ自身は結局自分のしたい話ができなかった。

これからいくらでもできるだろうという気持ちがあるわけではない。自分達の仕事ゆえにこれからなんてあるとは思えない。

サイガは歩きゲイグの元までたどり着くとゲイグのコックピットに上り、コックピットから20を超えるモビルスーツたちを眺めながら大きな声で叫んだ。

「俺たちの大切な者を奪い、殺した！俺達に変える場所なんてもう無い！！だから突き進むんだ！」

「「オオー！！」」

立ち止まることなど無いと言わんばかりに大きな叫び声をあげて周囲の仲間たちも同じように叫び声をあげる。

もう今更引き返せない。

オルガは黙ってこちらを見ながら俺の名前を呟いた。

「サブレ……グリフォン？グリフォンってことは……ビスケットの？」

「そう、双子の弟だよ。似ていないだろ？」

オルガは罪悪感に満ち溢れた表情を浮かべながら俺に背を向けた。「俺を責めに来たのか？そうだよな、俺が殺したようなもんなんだから」

一人でぶつぶつぶやくオルガに対して俺はあくまでも冷たく突き放す。

「責めてほしいんならそう言えよな」

「責めてほしい……か。そうだな、俺は責めてほしいんだろうな。お前にじゃなく……ビスケットに」

「嘘はよくないと思うけど？あんたが求めているのは責めではなく……止めてくれる人間なんじゃないのか？」

オルガは薄笑いを浮かべながら「そうかもな……」とつぶやいた。

つぶやき続けた。

「いつだってビスケットは俺の言うことに文句を言いながらもついてきてくれた。これからだってそうだって信じていたよ」

俺はオルガの隣を歩いていきながら兄の体が入った死体袋の前に立つ。

「だからってそれを俺に求めるなよ。あと、これ俺たちが預かるからな。今なら蘇生治療で間に合うかもしれないからな」

オルガが勢いよく立ち上がり一歩近づくのを俺はまっすぐ視線を合わせて牽制する。

「た、助かるのか!？」

「だから? たとえ助かったとしても俺があんた達に兄さんを返すとは限らないぞ」

オルガの表情が暗く落ちていくが、次第に顔を上げ達観した表情を受けべる。

「そうだな。いや、ビスケットにとっては俺達といるよりお前と一緒にいる方がいいのかもしれないねえな」

気に入らない、そう思いながら俺は振り返りオルガを軽く睨む。

「達観するなよ。自分の願いや願望すらいえないような大人になるなよ。お前はそんなに物分かりのいい大人なのか?」

オルガは下唇をかみしめながら俺の話の聞いていると、いよいよ我慢の限界を迎えたのか周囲に響かないような声で怒鳴る。

「俺だって悔しいさ。お前に分かるのかよ。誰が庇ってくれて言ったんだよ……お前と一緒に歩けりゃ俺はどこでもよかったんだよ。なんで……庇ったんだよ」

床に膝をつき両手で顔を覆いながら涙を流したオルガは嗚咽をもらした。

多分、弱音を吐くことなく心を強く持たなければ生きれなかったのだろう。だからこそ兄にその居場所を求めたのだろう。

それに他人を庇って命を落とすか……変わらないな。

俺は明樂を部屋の中に入れて死体袋を持たせて部屋の外へと連れていく。俺はオルガに連絡先を書いた紙を渡す。



「弱音なら聞いてやるよ……友人としてならな」

オルガは立ち上がって複雑な表情を浮かべる。

「それも……いいかもな」

19

サイガの目の前には穩健派の最後の拠点が広がっている。通信妨害施設がつぶれてしまった穩健派の最後の拠点はアフリカ大陸の北に位置する拠点しかない。逆に言えばあそこさえ潰してしまえば穩健派を完全に潰すことができるはずだ。

サイガは自分の部隊を指示を出し、穩健派の拠点に向けて駆け出していく。ゲイグのバトルアックスを振り回しながら二体のキツシュを潰していく。

「俺達が敵の主力をひきつけるぞ！」

サイガ達が敵の主力をひきつけている間にもう一方の部隊が穩健派の拠点を潰す。そういう作戦で行こうと決めた。

サイガは三機のキツシュを同時に戦っている間に他の革命派のモバイルスーツがキツシュを相手にしていた。次第に増えていくキツシュの数に多少追い込まれていくが、サイガから言えばまだまだ増えなくてもらわなくては困る。

「もつとひきつけるぞ!!持たせる!!」

二機のキツシュの胴体をバトルアックスで真つ二つにしつつ、さらにキツシュの数を増やしていく。

タツクルでキツシュを吹き飛ばすと、サイガはキツシュのサーベルを腰に取り付けられたサーベルで受け止めつつ、蹴り飛ばす。

体制の崩れたキツシュをバトルアックスで真つ二つに切り裂く。

「まだいける……」

言葉がふと止まり視界の先に存在するモバイルスーツを確認した。

「あれは……グレイズ!?レギンレイズ!?ギャラルホルンがどうしてこっちに!?!」

サイガの視界には予想より多い数のモバイルスーツの大群がサイガ達の方に移動してくる姿が見えた。

レギンレイズとグレイズが数のほとんどを占めている。

「まずい……施設を攻撃する部隊が……!?!」

サイガはキツシユをはねのけながらレギンレイズとグレイズの大群に向けてバトルアックスを振り回す。

「ファン!!俺が囷になってる間にお前たちはひいてファントムブラット隊と合流しろ!!」

「サイガはどうするんだ!!?」

「俺は施設攻撃部隊を回収しに行く!!」

そう言っつてグレイズとレギンレイズ達に向けて無謀な戦いを挑んだ。

20

ヴアルハラが要塞から距離を取りつつ、要塞からの舞台に注目をしている間に明楽は貧乏ゆすりをしながら革命派の事が気になって仕方がないようで、先ほどから顔を動かす。

そんな姿に気になっていたシノが声をかけた。

「落ち着けよ。こっちの戦いが終われば応援に行けるだろ」

「でもー」

サブレ自身は多少落ち着きながらも今の状況に違和感を覚えていた。

(どうしてギャラルホルンの部隊が見えてこない?まるで……)

と考えつつサブレは思考を重ねていく。明楽はついに我慢が限界になったのか明楽はグシオンめがけて駆け出していく。

グシオンを含めてガンダムフレームは全機が改良が加えられている。

グシオンは背中のサブアーム以外にサブフライト機がくつついている。サブフライトシステムは平べったい姿が背中からよく見え。存在感を放っている。

フラウロスは背中に可変機構に適応した翼が追加でついており、飛行形態への変形を可能としている。

バルバトスは背中に八枚の白い翼を生やしており、装備はマルチスタイルと同じシールドとライフルを装備している。単純な装備でいえばシンプルだろう。

明楽は走ってグシオンに乗り込み動かしていく。シノが焦った様子で駆け出しそうになる体を押さえる。しかし、その隣でサブレが駆け足でバルバトスの方へと駆け出していく。グシオンの体が自動で動き出し始め、カタパルトデッキに移動する。

「ビスケット!!明楽がカタパルトデッキを勝手につかつてるぞ」

シノは急いでビスケットに通信を繋げると、ビスケットは焦った様子でイオリに確認させる。

「駄目です!こっちからでは操作できません」

グシオンの足場が固定され腰を低くしつつ出撃体制を作る。

「明楽・アルトランド。グシオンリファイン行きます!」

明楽の叫び声をあげながら勢いよく射出されると、サブフライト機が背中から離れてグシオンの足場に移動する。サブフライトに乗りながら勢いよく革命派の元へと移動していく。

少し遅れてバルバトスも同じようにカタパルトデッキに移動して足場が固定される。

目の前にブリッジからの通信でビスケットの顔を移る。

「サ、サブレ!」

「悪い!俺も行く。ギャラルホルンが動かない理由が気になる。下手をすれば既にギャラルホルンはもう……」

「既に革命派のところ!」

「だから……行く!!ガンダムバルバトスリファイン・ウイングスタイル!!サブレ・グリフォン行くぞ!!」

勢いよく射出されそのまま背中の翼が風を受けつつバルバトスの体を浮かせていく。

遠く離れていくバルバトスの姿を確認した後に、ビスケットは少しだけ考え込む。

(もし、この状況であのイズナリオ・ファリドならどうするのかを考えるんだ)

そう考えたのちにビスケットは決断を下す。

「シノ……頼みがあるんだけど……」

「?なんだよ?」

シノは疑問顔で首をかしげるとビスケツトは真面目な表情で告げる。

「行ってきてほしい場所があるんだよ。一か所怪しい場所があるんだ」

「いいのかよ？これ以上戦力を減らしてもよ……」

「降下部隊がもうすぐ降りてくるはずだ。それに、この人を放っておけばこの後も大変なことになると思うんだ」

シノは少しだけ考えたと「分かった」と言いつつフラウロスに乗り込んでいく。フラウロスの体がカタパルトデッキに移動して足場を固定する。腰を低くしつつ出撃体制を取る。

「六代目流星号!!ノルバ・シノ出るぜ!!」

カタパルトから勢いよく射出されると空中で変形していく。飛行形態へと変形するとバルバトスとは違う方向へと移動していく。

21

「革命派と穏健派が今頃戦っている頃だな。うまくつぶし合ってくれれば……」

スーツ姿のイズナリオは手元のスマフォをいじりながら今頃始まっているであろう革命派と穏健派のつぶし合いに興味を示さない。

イズナリオからすればすでに自身のやるべきことを終えたような男の顔をしつつ地中海沿いで迎えの人間を待っていた。

彼が左手で持っている鞆の中に入っているのは一枚のディスクだった。

「このディスクのお陰でうまく交渉が進んだものだ。この点ではマクギリスに感謝だな」

マクギリスの死後、彼の近辺を探っていたイズナリオはある人物のデータを見つけ出し、違和感に気が付いた。

「勝つのはこの私だ」

22

ファンの仲間の一人がバエルのビームサーベルで殺されてしまった。一人一人と潰していく。

「や、やめろ!!」

耐えかねたファンはボロボロのゲイレルで駆け出していき斧を振り下ろすが、バエルはそれは無造作と言ってもいいほどに簡単に回避してビームサーベルで切りつける。

ファンのゲイレルは致命傷こそ回避したものの既に戦える状況ではなくなった。両腕は既に切り落とされている。

「くそ……くそ……くそ!!」

悔しく拳を操作盤に叩きつける。後死ぬしかないと覚悟を決めるとファンのゲイレルとバエルの間にグシオンが舞い降りた。

ハルバードを叩きつけ、バエルは少し後ろに下がる。周囲にいるキツシユやグレイズ達が多少距離を取る。

「まさかこの距離を戻ってくるとは」

ジュリエッタは多少驚きこそしたものの今更だと感じていた。たった一機では多数のモビルスーツに囲まれておりどうしようもないと考えた。

しかし、その考えは上空から奇襲をもって簡単に打ち砕かれた。

ドガン!

そんな爆発音が数回させながら上空から何発もビーム攻撃が襲い掛かる。グレイズやレギンレイズを含めて多数のモビルスーツが5機近くまで減ってしまった。

ジュリエッタを含めた明楽以外の視線がグレイズの上へと移動する。八枚の翼で体を浮かせているバルバトスがそこにはいた。

「か、神みたいだ」

誰かがそうつぶやいて見せた。

「明楽なのか?ファントムブラッド隊なのか?なんで?」

ファンが絞り出した言葉に明楽は笑顔で答えた。

「友達だからに決まってるじゃないか……」

明楽のやさしさに涙を流し嗚咽を漏らす。そして明楽とサブレへと告げる。

「サイガが……サイガが俺達を逃がすために……!!」

サブレは少し遠くへと視界を移す。遠くではまだ戦闘が行われているように見える。

明楽はジュリエッタへの視線を外さないようにサブレへと声をかける。

「この革命派は俺が守ります。先輩はサイガさんのところへ」

「明楽……ここは任せる」

そう言つてバルバトスをサイガの元へと進ませる。

ジュリエッタから視線をそらさずに怒りを胸に抱きさらに前へと進んで行く。ジュリエッタは一気に手持ちのモビルスーツを減らされた事へと焦りをにじませる。

「なぜ、そこまでして戦うのですか？」

明楽は普段は出さないような冷たい声を放つ。

「お前に俺たちの何が分かるんだよ。先輩は何かを失わないと何かを手に入れられない人間なんだよ」

両親を失う代わりにマハラジャを手に入れた。

サヴァランを失う代わりにビスケツトを手に入れた。

オルガ達を失う代わりにバルバトス達を手に入れた。

何かを失わないと何かを手に入れられない。

それがサブレ・グリフォンという人間だった。

「何かを失うたびに心を痛める。それでも先輩が自分の事で怒ることは無いんだ。あの人が怒るのはいつだって他人の為なんだ。叫べない人が、怒れない人が、困っている人がいる度にあの人は怒り戦うんだ。そんな優しいあの人だからこそ……!」

明楽は告げる。怒りを抱えて、サブレの代わりにあの人の怒りをぶつける為に。

「俺はあの人についていくんだ!!あの人怒りは俺が払う!!!」

23

ゲイグの左腕が吹き飛んでいくキツシユやグレイズ達の後ろで隠れながらキマリスは指示を出すだけ。しかし、サイガが戦っている間に味方は撤退を始めている。

サイガの腹に刺さった部品を引き抜き、血が出るのを何とか抑えていると後方から大きな爆発音が聞こえてくる。

「サ、サブレかな?……追いかけてきたのか」

サイガは目の前で隠れながら指示を出すだけのキマリスに向かつてもう一度近づこうとする。

「なら……見ていてくれよ!!俺の生きざまを!!」

そう覚悟を決めゲイグで再び前へと駆け出していく。キツシユのやり攻撃をぎりぎり回避するが、グレイズの斧攻撃がコックピット左端に当たるとコックピックに再び小さな爆発音とともに破片が飛び散る。

「ッグ……まだだ……」

グレイズとキツシユをバトルアックスで吹き飛ばしさらに前へと進んで行く。最後のキツシユがランス攻撃をゲイグの腰へと当てるが、サイガはサーベルをキツシユに突き刺しほとんど動かないゲイグを動かし前へと進んで行く。

「まだだ……まだ……だ」

ゆっくり、ゆっくり進んで行く。執念というべきその行動力にガエリオは背中に嫌な汗をかき始める。後ろに一歩だけ下がりながら恐怖を覚えていた。

ボロボロのゲイグを引きずり、執念だけで戦うサイガへの恐怖がガエリオを突き動かそうとしていた。

(サブレ……見ていてくれよ。俺の執念、生き様を。お前は……俺にとつて……)

バトルアックスを引きずってキマリスの正面までたどり着く、しかし我慢の限界に辿り着いたガエリオは叫び声をあげてゲイグのコックピット目掛けてランスを突き刺す。

「ウオオオオ!!」

サイガの右半身を吹き飛ばす。虫の息になってしまったサイガはそれでもバトルアックスをそれでも前へと突き出そうとする。

ガエリオは恐怖がぬぐえないまま後ろに数歩下がる。

「なんで?どうしてそこまでして……!?!」

上空からの攻撃をかううじて回避するとサイガはバトルアックスをさらに前に突き出した。

「あ、あと……は……まかせ……た」

バルバトスはゲイグの前に降り立ちバトルアックスを受け取りガエリオをにらみつつ答える。

「後は……任せろ！」

サイガは最後に笑った。

24

俺は何かを失わないと手に入れないのだと悟ってしまった時、これは呪いなのではないかと思った。

ずっと聞きたかったことがある。サイガ。オルガ。

彼らにずっと聞きたかったこと、今だったら聞けるかもしれない。

俺はお前たちの友人になれたのかな？

お前たちの大切な人間になれたのかな？

「なれたさ……お前は俺たちの大切な親友だ」  
だっただけいいな。



## 生きた証Ⅳ

25

オルガが亡くなった時激しい憤りを覚えた。

ギャラルホルンに、アリアンロッドに、なにより自分に憤りを覚えてしまう。オルガを止めなかったことを、何より彼を助けなかったことを、でも……結局俺は同じ結末をたどってしまった。

いつも、いつだって俺は置いていかれるだけだ。

母さんも、父さんも俺を置いて逝ってしまった。

だから俺は明楽が気になるのだろう。何も失わずに何かを手に入られるあいつのことが気になるのだ。

26

「どうしてそこまで戦えるんだ。何が君たちを突き動かすんだ!」

ガエリオの焦りに満ちた表情でサブレを見つめると、サブレはゆっくり顔を俯かせる。

どうして戦うのか、そんなものはサブレこそ分かっていなかった。

『そんなことはねえだろう?』

オルガ・イツカの声が脳裏によぎる。そして、サイガの声も同様に脳裏によぎってサブレを突き動かす。

バルバトスが握るバトルアックスを横なぎに振りぬき、ガエリオはバトルアックスの攻撃をぎりぎり回避しつつ反撃しようとする。しかし、バルバトスのビームサーベルがその攻撃を受け流す。

『お前は優しいからいつだって他人の為に戦っているんだ』

サイガがそうサブレに諭す、いまだに顔をあげず俯きながら戦う。バトルアックスを同じ軌道で切り返すとガエリオはシールドで何とか受け流す。サブレはキマリスを蹴り飛ばす。

『怒れねえ奴や悲しんでいる奴が叫べない奴の代わりに叫び戦うんだ。そんなお前だからこそ俺たちはお前に任せることができたんだ』  
『それがお前の戦う理由だろ?』

オルガとサイガがそういつてくれるのを俺は頼もしく思う。

キマリスが砂埃を上げランスで死角からの攻撃を試みようとして

いることが分かっってしまう。映像のように視界にその動きが分かり、実際キマリスは全く同じ動きで攻撃を仕掛けてきた。

サブレはその攻撃をサーベルで簡単にあしらう。

『俺達が戦えたのはお前がいたからさ』

『お前がいたから俺達は生きることができたんだ』

俺はゆっくり顔をあげる。サブレの声にオルガとサイガの声が重なる。

「俺がお前達の生きた証だ」

『『お前が俺達の生きた証だ』』

サブレの瞳は虹色の輝きを見せていた。

サブレ……覚醒！

27

サブレが覚醒した瞬間に月面で建設していたガンダムエデンの組み込まれていたサイコ・フレームがかすかに反応を見せ、サブレの強い脳波に合わせるようにグシオンとフラウロスのサイコ・フレームを通じて死者の思いを周囲に響かせる。

グシオンから発せられたサイコ・フレームの共振はファンにサイガの思いを届けた。

『ファン、あいつらの事頼んだぜ』

「サイガ……？……馬鹿野郎」

ファンは涙を流しその場でうずくまってしまう。同じように明楽の元にもサイガの声が届いた。

『あいつらを守ってくれてありがとな』

明楽は涙を流さないように歯を食いしばりながらジュリエッタをにらむ。

サイコ・フレームの共振はシノの元にオルガの声を届けた。

『シノ。ビスケットの奴を頼んだぜ』

シノは驚きと共に振り返りそうになる心をグツと抑えた。

シノは一筋の涙を流しつつキリッと表情を引き締め答える。かつての仲間に、家族と言ってくれた者に。

「あつたりめえだ！言われるまでもねえよ！」

同じようにヴァルハラブリッジの艦長席に座っていたビスケットの元にも声は届いた。懐かしく、もう会えないはずの声が届く。

『新しい仲間を守ってやれよ。俺みたいになるなよ』

ビスケットは下唇をかみしめながらオルガの声に反応した。

「身勝手だよ……いつも、いつも………いつだって」

みんなが傷つき、みんなの心に深い痛みを与える。その怒りがまるでサブレの元に集まる様にサブレを突き動かす。

28

イズナリオはカバンを持ちながらやってくるだろう人物を待ち構えていた。

地中海の向こうから一機のモビルスーツが近づいてくるのが分かる。ピンク色のキマリスは同じカラーリングのサブフライト機に乗って水平移動で近づいてくる。

イズナリオは勝ちを確信した。

彼からすればギヤラルホルンがどこの誰と争おうと知ったことではなかった。

もはやギヤラルホルンという組織にそこまでの愛着は無い、かつて自分と同じ高みに立つことだけが彼のたった一つの目的になっていた。

そのために木星帝国なる組織とコンタクトを取ったのはマクギリス・ファリド事件の直後だった。

マクギリスの近辺を調べているとき、おかしな情報を手に入れたことが元々のきっかけだった。

「まさか……あいつの部下にあんな秘密があったとはな」

マクギリスとガエリオが中心となって完成させた『阿頼耶識タイプE』の秘密に感づいたイズナリオは木星帝国と接点を持つためある人物と接触した。

イズナリオはポケットに入れていた『アイン・ダルトン』と掛かれたディスクを取り出す。このディスクこそが彼が木星帝国に組み入れられた理由だった。

イズナリオはそのディスクを今度はカバンの中に入れる。正面ま

で近づいてきたキマリスレッドクイーンを見上げながら片手をあげる。

「ご苦労だったな」

アルミリアはコックピットの中で歯噛みをしながらイズナリオを見下ろす。見下すと言つても過言ではないかもしれない。

アルミリアからすれば彼もまたマクギリスへの復讐対象でしかない。上から許可さえ下りればこんな男は殺していたはずだ。

イズナリオが初めて現れたとき、すぐにでも殺してやると思った。しかし、そんな思いは我慢しなくてはいけなかった。

あれからずっとチャンスがうかがっているアルミリア。

「あなたを回収する前に……………」

例のディスクを確認しようとしたその時、遠くからこちらに近づいてくる影に気が付いた。影は大きくなっていき戦闘機のような形に変わっていく、キマリスレッドクイーンと同じかそれ以上に明るいピंकに目を細める。

戦闘機形態からモビルスーツ形態へと変形する、その姿をみたその瞬間にアルミリアは口を開く。

「ガンダムフラウロス……………」

「ば、バカナ……………どうしてこんなところ!?」

イズナリオの驚愕を絵にしたような表情を見たアルミリアはこれが予想外の状況だと判断できた。

その瞬間にはアルミリアはチャンスだととらえた。

目の前のこの男を殺すチャンスなのだと、そう判断した瞬間にはアルミリアはランスを持ち上げていた。

シノの目にもその攻撃が自分に向くのだと判断した瞬間、その攻撃の刃はイズナリオへと向けられた。

「な、なぜ!?!」

「私は、あなたが嫌いです」

ランスを打ち付けようとした瞬間にシノは叫びながら機体を前に伸ばす。

「ま、待て!?!」

しかし、一瞬だけ遅くランスは容赦なくイズナリオの体を吹き飛ばした。

シノとアルミリアの間に数秒の空白が訪れる。シノとアルミリアの視線はイズナリオがもっていた鞆に視線が向く、殺された瞬間の攻撃で鞆はほとんど壊れている。しかし、ここでそれを見逃すような二人では無かった。

ほぼ同時に二人は手を伸ばす。再びにらみ合いが続きキマリスレッドクイーンのランス攻撃とフラウロスのダガー攻撃が激しいスパークを散らせながらぶつかる。フラウロスの右肩のランチャーから直線状にまっすぐビーム砲の攻撃が放たれた。しかし、アルミリアはそれを直感で感じ取りギリギリで回避して見せるが、その瞬間に態勢がかすかに崩れてしまう。すかさずシノはフラウロスで頭突きを決めると、キマリスレッドクイーンは後ろに下がる。

「あなたは……嫌いです」

「俺もだ。女は好きだけだよ……お前は嫌いだな！」

今度はシノの方から近づいていく。再び両機がぶつかりスパークをはじけさせる。

29

明楽のハルバートの一撃を受け切れずバエルの右腕が吹き飛んでいく。バエルがさらに前に出ていくと、その間に新しいレギンレイズが間に割って入ってきた。

「ジュリエッタ様は一度引いてください。エヴォ・エクス様からの指示です！撤退だそうです」

「……!? エヴォ・エクスが来ているのですか!？」

「はい。戻って来いと」

明楽はハルバートを振り回しながら一瞬でレギンレイズのコックピットを真っ二つに切り裂く。次々とレギンレイズやグレイズがバエルとグシオンの間に割って入ってくる。割って入ってくる機体を次々に壊していきながら突き進もうとするグシオンをしり目にジュリエッタはその場から離脱していく。

30

エヴォ・エクスが現場に駆け付けられた最大の理由はサブレが放った脳波故だった。エヴォ・エクスはあれほどの脳波を感じたことが無く、それ故にその脳波の強さに自身に何かが生まれる瞬間を感じ取れた。

フェニックスガンダムが本来12時間かかる距離を4時間かけて現場まで近づいたところで脳波を感じた。

この時エヴォ・エクスはなんとなく理解した。自分とサブレの間にあるつながりを。

「私はお前の影なのだろう。サブレ・グリフォン。お前は光、私は影だ。世界の光と影はいつだって戦う運命なんだ」

フェニックスガンダムにもサイコ・フレームは内蔵されてはいない。それはバルバトスも同じだとエヴォ・エクスは把握した。なぜならこの脳波は月面から中継して放たれているからだ。そして、それはエヴォ・エクスの未来の乗機になるエンペラーガンダムのサイコ・フレームが受信してエヴォ・エクスへと送信したのだから。

エンペラーガンダムとガンダムエデンは争う運命だとエヴォ・エクスは感じ取り、それをどこかで楽しみにしている。

あと少してサブレ・グリフォンと再会できる。戦える。それだけ心待ちにしている。

31

キマリスを一方的に追い詰め、ガエリオの味方はサイガとの戦闘でほぼ全滅してしまった。

あと少してガエリオを殺すことができるというところで殺意が上空から襲い掛かってくることを理解し、サーベルを抜いて上空からのビーム攻撃を打ち落とす。

「……………なんだそれは？ どうやればそんな芸当ができる？」

ガエリオは自分と全く違う才能の片鱗に恐怖を覚え、後ずさつてしまふ。ビームの攻撃速度などライフフルだけでも実弾を超える。そんな速度の攻撃をサーベルだけで叩き落したということだ。

そんなことはただ訓練を積もうとも不可能だと考えた。

少なくともガエリオは自分には不可能だと思ってしまう。最小限

の動きで攻撃を防ぐ。そんな人間離れた動きを操作できても脳が追いつくわけがない。ほとんど一瞬で攻撃を読み、同じ速度で神経から命令を伝達し、操縦する。阿頼耶識というショートカットを使用しても不可能だろう。なのに、サブレはそれを簡単そうにして見せた。そんなサブレの視界の先にはフェニックスガンダムがライフルをバルバトスへ向けて構えていた。

ガエリオもフェニックスガンダムの存在に気が付き、声をあげようと口を開いた瞬間に先にエヴォ・エクスが声をあげた。

「ガエリオ・ボードウィン二佐。撤退を指示する。独断専行については後々に」

冷たく底冷えするような声がガエリオの心を落ち着かせるには十分だった。

しかし、同時にガエリオはそれ以上にエヴォ・エクスが向ける視線と意識の相手がサブレ・グリフォンであるとなんとなく思った。同時にサブレ・グリフォンの意識も完全にエヴォ・エクスへと向けられていた。

32

俺はエヴォ・エクスと対峙した瞬間に圧倒的な闇を感じ取った。

真つ暗な闇、何も感じず、何も聞こえない。手を伸ばしてもどこにも届かないのは異様に感じ取れた。

『サブレ！引き込まれるな！』

サイガの言葉が俺を現実に戻した。

闇というより虚無という感じの方が正しいかもしれない。しかし、そんな虚無の中に聞こえたたった一つの名前。

『アイン』

その意味を知らなくてはならない。そう考えるとき、エヴォ・エクスからの攻撃を感じ取れ、反射的に操縦桿を強引に動かしてサーベルを握らせた。

バトルアックスでは戦いにくいと判断に心の中でサイガに謝りつつバトルアックスを手ばなしてもう一本のサーベルを握る。

十発ほどのビームのほとんどを叩き落しつつ空へと飛翔してフェ

ニックスガンダムへと突っ込んでいく。フェニックスも同様にサーベルを抜き、お互いのサーベルとサーベルがぶつかり合い、激しいスパークを散らしながら空中で対峙する。

数秒だけその場で静止すると、再び距離を開け数度ぶつかっては離れて再びぶつかるという行為を繰り返す。

何度目かの衝突の際に俺は尋ねた。

「アイン……って誰だ？お前は誰なんだ？」

「私の心を覗いたな」

虚無という心。最初はそう思ったが、そうじゃない、この男には心言うべき部分が存在しない。いや、存在しないのではなく生まれようとしている。しかし、それは憎しみや怒りでできていて、その中心に『アイン』という名前の何かが存在する。

「お前にとってアインとはなんだ？アインって何なんだ？」

「さあ？なんだろうな。もう一人の私？いや、違うな……」

まるで自問自答のような言葉を吐きつつ、考えながら戦う手を緩めない。再び距離を取り、にらみ合いが続く。

アインとはなんだ？誰なんだ？

「鉄華団のメンバーに聞けばいいさ、彼らは知っているよ。因縁深い相手だからね」

「お前は……」

まるで自分は何も知らないという風な態度だった。

こいつは本当に何も知らないのかもしれない。いや、知ってはいてもそれを理解はしていないのかもしれない。

俺は誰と戦っているんだ？こいつは誰なんだ？

「お前は……誰で、何を目的にしているんだ？」

エヴォ・エクスは不敵な微笑みを浮かべながら高笑いを浮かべ突っ込んでくる。

「ハハハハハハ!!私の目的なんて私が一番知りたいよ」

こいつはギャラルホルンじゃない。それだけは理解できる。こんな作られた人間をギャラルホルンが容認するわけが……作られた人間？



そういえば昔ソニアから聞いたことがある。確か、『人工人間』とかいう人間を聞いた。

「お前……人工人間？」

「さあ？どうかな？」

フェニックスガンダムがバルバトスを押し付けながら地中海まで押していく。俺はバルバトスを動かしてフェニックスガンダムを振り払いサーベルで切りつける。フェニックスもサーベルで攻撃を受け止めながら下へと降下していく。

「このまま海の底へと叩き落してやる！」

「狩人の悪魔が空を飛ぶなんて夢物語を終わらせてあげよう！」

お互いにつつまれ合いになりながら落ちていき、海面すれすれになりながら飛びサーベルで攻撃しあっていく。

フェニックスを蹴り飛ばし、ライフルで攻撃を仕掛けるが変形し素早く移動して攻撃を回避する。ライフルのビーム攻撃は水柱をあげながら消えていき、ファニックスは上空にまわって上からライフル攻撃を仕掛けてくる。

俺は素早く操縦桿を動かしながら攻撃を叩き落としサーベルをフェニックスに向けると、フェニックスのウイングサーベルがほぼ同時にあたる。

バルバトスのサーベルはフェニックスの右翼を切り裂き、ファニックスのウイングサーベルはバルバトスの左腕を切り裂く。

フェニックスは海に突っ込んでいきバルバトスは大陸へと墜落していく。

お互いに動けないまま静かに鎮座する。

気が付けばオルガとサイガの声が聞こえなくなっていることに気が付いた。

涙が流れる中空気だけが冷たく感じた。

33

フラウロスの左肩のランチャーの拡散ビームをキマリスレッドクインがビームシールドで防いで見せると、ランスで突こうと構えるがそれを一つの声が遮る。

「そこまで！アルミリア、撤退だよ。残念だけどギャラルホルンが撤退を始めてる。要塞にも降下部隊が占拠し始めてるし……ここで撤退しないとタイミング無くなるよ」

上空からやって来たジャックに忌々しいような表情を浮かべるアルミリアはシノに対してにらみつける。

「あなたは私が必ず殺します」

アルミリアの捨て台詞にシノはあえて反応しないままその場に立ち尽くし、ジャックは一度振り返り一言だけ口を開いて走り去っていく。

「じゃあね！グシオンのパイロットにもよろしく。今度こそ殺し合おうって！」

シノはコックピットから出ていくと下に降り、イズナリオの鞆を回収する中コックピットから放送が聞こえてきた。

それはビスケット達も同じように聞こえていた。

『ギャラルホルンは平和の維持という名目のもとで多くの虐殺を行い、それをひた隠しにしてきた。それだけではない！』

ビスケットの目の前でマハラジャが高らかに演説する中、演説する傍らで虐殺行為の映像がひたすら流されていく。

『それだけではない。移送組織であるタービンスに対し冤罪をなすりつけ、違法兵器による虐殺を行った！』

続いてタービンスに対する攻撃映像が流れるが、そんなとき隣の画面に木星帝国からの映像が流れ始める。

『我々木星は今まで苦汗をなめさせられてきた！地球は遠くから木星などを支配し、ついには独立しようとしていた者達に一方的な虐殺行為を行った！』

木星帝国の方は鉄華団がダインスレイブを使った虐殺行為が映されている。映像はクーデリア達も同じように見ている。

画面に映される映像にクーデリアは真剣に見つめ、ユージンは画面をつかみそうになる思いをグツと抑えて立ち尽くす。

「鉄華団の事を利用して……」

続いてマハラジャが演説を続ける。

『このままでいいのだろうか？未来ある子供たちをその手にかけ、我が物顔で世界を支配し、支配しようとする者達を許してはいけな  
い』

そして、対抗するように木星帝国側の士官も同じように声をあげる。

『もはや地球からの支配など古すぎる!!我々木星帝国こそが支配するにふさわしい!今までの悔しさを剣に込め!今こそ立ち上がろう』

エヴォ・エクスはギャラルホルン基地へと帰還すると基地内で演説を聞いているガエリオとジュリエッタが唾然としている光景を見ながら一人聞こえないようにつぶやく。

「予定とは違ったがまあいい。これで戦争だ。もう少しだけ私の掌の上で踊ってもらうぞ。ガエリオ・ボードウィン」

最後だとマハラジャは大きな声をあげる。

『我々EDMはギャラルホルンと木星帝国に対し宣戦を布告する!!』

そして、木星帝国の士官も同じように声をあげた。

『我々木星帝国はギャラルホルンとEDMに対し宣戦を布告する!!』

木星戦争の火蓋はは切って落とされた。

## 生きた証V

34

宣戦布告から既に一時間に経過していると、衛星軌道上に集結しているのはEDMの主力艦隊である1〜4番艦隊だった。

同時にギャラルホルンの宇宙艦隊を展開していると、彼らの視界に大きな廃棄コロニーが十基ほど地球に向けてまっすぐ向かっていた。

ほぼ同時にEDMの地球降下部隊の本隊も各地へと降下をはじめ、木星帝国の主力も同じように地球へ降りていく。降下部隊の視界にもギリギリまで廃棄コロニー群が見えていた。

そんな廃棄コロニー群に対してEDMは再びコロニーレーザーを使用、十基の廃棄コロニーのうち半分を掃討することに成功した。

しかし、その後の奮戦むなしく2基の廃棄コロニーが太平洋と大西洋に降下することになる。

EDMは先に降下した七番隊とファントムブラッド隊がアフリカ大陸を占拠すると、アフリカ一帯から撤退すると中東端まで離脱し、態勢を整えた。木星帝国もヨーロッパからデルタまでを占拠、デルタ海戦が開かれた。

EDMの6番隊と8番隊がエドモントンを占拠、ギャラルホルンの南アメリカ大陸の部隊と激突、中南米戦が始まる。

9番隊と10番隊がオセアニア連邦に降下すると木星帝国主力隊とギャラルホルン本部部隊が東南アジア諸島一帯で本格的な戦闘に入る。

EDMがエドモントンを占拠する3時間前にタカキ・ウノとフウカ・ウノはファントムブラッド隊へと接触するために出立しており、すれ違う形になってしまった。

地球圏全体で本格的な戦争状態へと移行しつつあった。

35

火星は穏やかなもので桜農場ではトウモロコシ畑の周りを孤児院の子供たちがはしゃいで遊んでおり、それをクーデリアは家の中から微笑ましく見つめていた。

しかし、家の中に設置されたテレビでは地球圏の戦争の状態が鮮明に移されており、モビルスーツ同士の衝突や爆撃の様子が映されていた。

窓際でユージンが真剣な面持ちでどこかへと電話をかけていた。

「そこを何とか！お願いしますよ！」

しかし、奮戦むなしく相手は「無理ですよ」と断り電話を切られてしまう。ユージンの前で待機していたチャドは「どうだった？」と尋ねるとユージンは首を横に振った。

「無理だつてよ。地球は戦争状態で安全じゃねえからどこも荷物を運ぶ予定はないそうだ。この様子じゃどこも無理そうだな」

ユージンは椅子にドカッと座り、対面に座っていたクラツカはふてくされるように頬を膨らませる。

クラツカ達は地球に行く準備をする傍らで地球へと向かう輸送会社を探していた。しかし、どの会社も戦争がはじまると同時に地球行きを断念した。

おかしなことではないし、むしろこの状況下で地球へと行きたいというこちらが変だというのは十分に理解しているつもりだった。

「当然無理だよ。言ったじゃねえか。戦争が始まったんだからよ、無理なんだよ無理」

ユージンがふてくされるように背もたれに体を預けるとクラツカはさらに頬を膨らませてユージンをにらみつける。ユージンは見なかつたふりをしながら手元に置かれた飲み物に手を出す。

「ですが……どうして今更戦争なんかを……テイワズが姿を消してから世界がおかしくなっていく。ラストル・エリオンは亡くなり、ギヤラルホルンは暴走を続け、ついには戦争」

クーデリアの言葉にその場にいる全員が落ち込む。画面内の戦争状況は激しさを増す一方だった。

「皆さんが犠牲にして得られた平和なのに……まるで……」

クーデリアはそこから先を言うことができなかった。でも、みんな分かっていた、まるで……鉄華団の犠牲も全てが仕組まれていたことのようにだった。

ルーガンの廃病院をマックが購入し、そこを革命派と村人達の治療用にと提供された。それについてのお礼にビスケットはマックの自宅まで訪れていた。

「彼らを受け入れてもらいありがとうございます」

ビスケットが深く頭を下げると、マックは笑いながら「いいのよ」と受け流す。

「どうせだれも使っていない病院を改造しただけなもの、治療をしているのはEDMの人が雇っているのでしょ？私がしたことはあくまでも中身を使えるように改造しただけよ」

謙遜するように話すためビスケットはやりずらそうにしていると、マックは何かを思い出し、手を叩いて誰かを招き入れる。

「そうだ、アンタたちを紹介してほしいって頼まれてね……入っておいで」

マックは奥のドアを叩いてそう告げると、部屋の奥から金髪の若者が部屋に入ってきた。

ビスケットも入ってきたタカキもお互いの正体が一瞬わからなかったが、タカキがビスケットだと理解すると口を開く。

「ビ、ビスケットさん？」

その声を聴き、ようやくビスケットも相手がタカキだと理解すると、タカキは我慢していた思いと一緒にビスケットの豊満な体に抱き着く。

「タカキ……大きくなったね」

優しく背中を撫でてやる。タカキが落ち着くまで数分ほど待ち全員が再びソファに腰掛けるころにはタカキは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「す、すいません。死んだはずのビスケットさんに会えた感激のあまり……恥ずかしい所を……ビスケットさんもすいません」

「いや、いいよ……タカキには迷惑をかけたね」

ビスケットもどこか照れくさそうにし、マックは微笑む。タカキは落ち着きもう一度深呼吸をすると、本題に入る為に真剣な面持ちを作

りビスケットの前にアタツシケースを置き、中身を空ける。中には透明な小箱が入っており、小箱の中にはライフル弾が入っていた。

ビスケットはタカキの方に視線を向けるとタカキは頷いて見せる。ビスケットはそつと手に取り小箱をよく眺める。正確には小箱の中身のライフル弾をよく眺める。

「木星製？いや、テイワズ製のライフル弾だね。しかも……サイレント弾」

「サ、サイレント弾ですか？」

ビスケットの言葉の中に聞き覚えのない言葉をきいたタカキは首をかしげる。ビスケットの代わりにマツクが答えた。

「テイワズが開発した発砲音を限りなく抑えるために開発された弾の事よ。最も素材に特殊な物を使った上に空気抵抗を受けやすいっていうんで少ししか生産されていないはずだけどね」

タカキは感心したようにビスケットの方を見て瞳を輝かせる。

「流石ですね。そんな弾の事を知っているなんて！」

タカキの尊敬の念が再び燃え始めると、ビスケットは慌てて弁明の弁を述べる。

「EDMの幹部に就任する前に色々教えてもらったんだよ。やばめの兵器なんかは一通り……ね。だから……物知りっというわけじゃ」

そんなことでタカキの尊敬の念が消えるわけじゃなく、むしろ高まっていくばかりだった。ビスケットは何とか話の流れを変えるためタカキに話を振る。

「それで……このライフルがどうしたの？」

「あ、そうでした。そのライフルからラスタルの血痕が付いていたんです。偶然とは思えなくて、それに角度的に見ても、ラスタルはその弾丸を受けて体が遮蔽物から出てしまったんだと思うんです。これは防衛軍も同じ意見です。議会の出入り口の正面から撃たれた弾とは角度的にも九十度違いましたから。ただ、ライフル弾で殺せばよかったのに、どううしてそんなまどろっこしい真似をしたのか分からなくて。ギャラルホルンよりEDMの方がいいんじゃないかって俺が提案して、議長からも許可を得て。そうしているとアフリカ大陸に

EDMの部隊が降りてきているという話を聞いたもので」

タカキの話を聞き終わると、ビスケットは小箱をアタツシユケースへと戻し、頭で纏めていた話の自分なりの推測を述べる。

「ライフルで殺さなかったのはこの弾の所為だね。空気抵抗を強く受けてしまう弾を使用すれば一発で殺すのは不可能だろうし」

「でも、だったら普通のライフルに切り替えればいいんじゃない。あんな大規模の事件を起こさなくても……」

ビスケットの言葉にタカキは反応するが、それにはマックが代わりに答えた。

「多分だけど、テイワズに罪をなすりつけるためにはテイワズが殺したっていう分かりやすい証拠が欲しかったんでしょうね。物ではなく者の方のね」

ビスケットは頷いて見せると少々シリアス気味に声の質を落とす。

「ラスタルをテイワズが殺したつとなればテイワズは一気に犯罪組織だ。マクマードさんの性格上姿を消すだろうし……だとすると、この暗殺の犯人は」

タカキでもこの話の行く末が見えてきた。

「木星帝国なんだろうな。テイワズを乗っ取り、邪魔なラスタルを殺す。一石二鳥な作戦だ。ただし、この作戦にミスがあるとすれば……マハラジャさんを殺し損ねたところだろうね」

タカキはビスケットの言葉に疑問をもってしまう。

「マハラジャさんは暗殺されかけたことがあるんですか？」

「うん。その時はサブレが不審者に気が付いてね。シノが追い詰めたんだけど……捕まえられそうになる直前に拳銃自殺して焼身してしまったんだ。身元も不明だし……その一か月後にラスタルが亡くなって俺達も忙しくなったからね。あやふやになっちゃっているんだよ」

話を聞いていたタカキはある疑問を聞いてみた。

「そもそも、木星帝国って何なんですか？聞いたことありませんけど。テイワズの関係組織何ですか？」

ビスケットも首をかしげるとマックが代わりに答える。しかし、そ



の表情はどこかくらい。

「私がゲイナーという初老から聞いた話じゃ、木星帝国の原型は確か木星独立軍らしいけど……。ゲイナーがかかわっていた時は『プロジェクトE』とかいう計画を進めていたそうだけどね。人体開発のスペシャリストであるゲイナーを読んで何かを作っていたそうよ。それと同時に並行で開発が難航していたガンダムフレーム『ガンダムエンペラー』と同じ『E』の名を持つ何かを……。確か……。忘れたわね。名前があつたはずよ……。『あ』から始まる名前だつたと思うけど」

タカキと一緒にビスケットも首を傾げつつビスケットが口を開く。

「Eから始まるのに『あ』ですか？」

「ええ、そんな名前だつたはずよ……。大体の計画のあらゆる名前に『E』が使われているところから『プロジェクトE』という名前が決まつたそうだから」

マックがそこまで話すとタカキは何か引つかかつたらしく思案顔で考え込んでしまう。タカキの変化に気が付いたビスケットは「どうしたの？」とのぞき込むように尋ねた。

タカキは思案顔のままゆっくりと口を開く。

「三日月さんがそれっぽい名前を言っていたような気がするんですよ。確か、エドモントン戦の後の事だつたと思うんですけど……。なんて言つてたのかな？」

ビスケットには島脱出の直前から鉄華団壊滅後の間の記憶がないため全く理解できないが、幹部間の情報共有した際にはそんな話は聞かなかつた。

少なくともEDMはその人物に心当たりはいない。

「エドモントン市街地で暴れ回つたつていう例の？私も名前は知らないのよね。ギャラルホルンだけの秘密にされているらしくて。パイロットも秘匿にされているらしいし」

マックがそういつて情報を共有してくれると、タカキは頷いて見せた。

「三日月さんが強かつたつて言つていたので……」

何か気になるビスケット達だつたが、それ以上話を進めても何も得

られなかった。

37

長い銀髪の髪をなびかせながら背の高い清楚な女性が大理石のような廊下を歩いていった。

彼女が歩くたびにカツカツというヒールの音が聞こえてくる。彼女の目の前に大きなドアが自動で開き始めると、謁見室のように広い部屋へと入っていく。階段を昇っていくと、部屋の一番奥には王が着るような服に身を包み、白髪の初老の老人が大きな椅子にふんぞり返っている。

「ククナか？何ようか？」

ククナと呼ばれた女性は膝をつき首を垂れる。落ち着いた透き通るような声で初老の老人に敬意をもって声をかけた。

「閣下。先ほど量産型Eが完成いたしました。量産型の初期タイプとこのことで機体は『MA-01 エルヴォル』が採用されました。実戦の許可を」

閣下と呼ばれた人物は愉快そうに笑いだすと、たしなめるような声を放つ。

「失敗は許さん。実戦で使えると証明して見せろ」

ククナは顔を上げ、微笑みながら答えた。

「もちろんでございます。勝利は保証いたしません但至少とも実戦でも使えると証明して見せましょう。半年後には地球圏に到着するようご用意いたします」

「半年後ということは地球における計画もひと段落しておるころだな？」

「はい、その前には必ず」

閣下は低い声で笑って見せると、ククナに「顔をあげよ」と命令を出し、命令通りにククナは顔をあげる。

「ついでだ、お前の妹のクレアを……殺せ！」

ククナは決して動揺することも無く、むしろそれを当たり前のことのように受け止めた。

「もちろんでございます」

ククナが謁見室を出ていき、一時間もかからない格納庫にそれはあった。三機のモビルアーマーサイズのそれはハシユマルよりさらに大型。しかし、ハシユマルの委託をにおわせるそれを眺めながらククナは一人微笑んで見せた。

38

EDMが革命軍とその関係のある村々の人達の受け入れ先としてマックと一緒に用意した病院は街のはずれにあった。

明樂はお見舞い用の適当な食べ物を持ち込みながらエレベーターを昇っていく。三階でエレベーターを降り廊下を左側へと曲がって三つ目の右側の部屋のドアを叩く。相手からの返事を待たずに部屋の中へとずかずかと入っていく。

「ファン！お見舞いに来たぞ！」

元気よく部屋へと入っていく明樂にファンは笑顔で返す。ファンの隣にある椅子に座ると持ってきた食べ物をテーブルの上に広げていく。

「まず、ポテチにチョコレートだろ、それに炭酸系の飲み物やプリン……」

袋から次々と出てくる食べ物や飲み物に苦笑いを浮かべるファンは「そんなに食べられねえよ……！」と返し、結局広げた食べ物類を明樂は一人で食べ始めた。

ファンが食べ物に手が出さずどこか元気がなさそうにしていると、明樂は話を切り出した。

「実は村の生き残りの人達もここに運ばれているんだぜ。結構子供も生きているんだってさ、でもみんな両親を失っていてな。誰かが引き取るべきじゃないかって」

明樂はファンの顔を覗き込み本題を告げる。

「ファンに引き取ってほしいんだってさ」

「……はい？」

話の急展開についていけず、一瞬呆けてしまうが思考が追いついていき動揺しながら食って掛かる。

「お、俺が!?なんでだよ!施設にでも預けるとか!」

「俺はそれでもいいけどさ……名義上の親が必要だと思うし、施設に入ってもみんな同じ場所に居られるわけじゃない。いい施設に預けられる保証だつてないし……それに名義上でも親がいれば安心だと思うよ。先輩とビスケットさんだつて名義上の親がいるんだぜ。E D Mの代表である『マハラジャ・ダーズリン』が名義上の親だし。まあ、施設に預けたいっていうならいいけど……」

明楽も無理強いができないと引き下がろうとすると、ファンは苦々しい思いを抱えながら明楽に問う。

「なあ、サイガならあいつらの父親になつたかな？」

予想もつかない問いに明楽は一瞬呆けてしまうが、少しだけ考えつつ自身の答えを出す。

「分かんない。でも……サイガはサイガだし、ファンはファンだよ。誰かがこうするかな？じゃなくて自分がどうしたいかだよ。きつとサイガならそう言うよ」

ファンは「俺は俺……かあ」と呟きつつ窓の外を眺めつつすつきりしたような表情を浮かべる。

「俺さ……小さいころ両親が金を出してくれて学校に連れて行ってくれたんだ。でもよ、両親はその時からの過労で俺が学校を卒業したときに亡くなつてしまったんだ。そんな風になりたいとは言わないけどさ……でも、両親がしてくれた風に俺も返したいな……つて。できるかな？」

明楽は笑顔を浮かべながら「できるさー」と告げる、ファンは涙を溜め零しながら自身の気持ちを明楽へと告げる。

「だからさ……あいつらの……みんなの無念を、はらして……くれよ………！」

「……俺が……必ず！」

ファンの手を握りながらそう答えた。

39

サブレは洋酒を右手に持ち、左手にグラスをもって墓までの道で登っていく。寒くもっている両手の感覚がなくなっていくのを感じながらサブレは墓の前までたどり着いた。

前までの墓よりさらに大きくなっており、そこには亡くなった者達の名前が刻まれていた。

花も咲かない寒く枯れた大地にあるたった一つの人工物。後ろの村の跡にはもう人はおらず、右側にはEDMの車両が移動できるようにと車道が作られている。さらに大きな着陸場が作られており、現在アルンからの物資を下ろしたり、逆に物資をあげたりしている作業の真ただ中であり、たった今開発局のソニアが上へと上がったところだった。

彼女の目的だったバルバトスのデータ収集は完全に終わり、これよりエデン開発に本格的にかかるためでもあった。

墓の前にグラスを置き、グラスに酒を入れていくとサブレはもう一つのグラスに酒を入れて飲み始める。

半分ほど飲んだところで後ろから声がかかってきたことに気が付いた。

「お酒は飲まないと聞きましたが？」

そちらの方に視線を向けて訪れた人物と視線が合う。綺麗は金髪を一本に束ねて落ち着いた物腰のクレアは微笑みながらサブレの隣に座る。

「飲まないわけじゃない。意味がないと飲まないだけだ」

と意味を言いつつグラスに口を付けほんの少しだけ飲んでいく。

「今回は……サイガと約束したからな。一緒に飲もうって」

約束を果たすためにわざわざここまで酒を飲みを訪れたもう一つの理由を知りつつクレアはあえて何も言わなかった。

黙っていると、サブレの方から口を開き始める。

「約束したんだけどな……俺、本当は嫌な予感があったんだ。こういうりそうな気がした。いっただってそうだ……俺はいっただって何かを失わなきゃ何かを手に入れられない」

呪いのような言葉を呪詛のようにつぶやく。

幼いころ目の前で死んだ両親を見て、自殺した兄の姿を見て、オルガやサイガの姿を思う事。本当は分かっていること、呪いなんかではなく、本当は……誰かを守る為ではなく、サブレが自分を守る

過程の中で見逃し続けてきた。

仕方がないと言い訳をして、代わりの何かを手に入れてきた。

『それは言い訳です。あなただって本当は分かっているはずですよ』  
そんな心の中にそんな声が響き、クレアに驚きの表情を向ける。

『あなたは先ほどの戦いの中で覚醒者としての進化を遂げた。それは何かを失ったわけじゃない。あなたはサイガさんを守りたい一心で手に入れた力じゃないんですか?』

「俺は……守れないんじゃないじゃ意味なんてないじゃないか!!守れないんじゃない……」

サブレは大きな叫び声を上げるとクレアは優しく抱きしめる。

「だったら守って下さい。これからは……」

サブレは涙を流しつつ彼女に、そして仲間たちに誓う。

「守るよ。君は、みんなは俺が絶対に守る!」

するとサイガとオルガの声が聞こえた気がした。

『それがお前の新しい戦う理由だな』

サブレは心の中で「そうだな」とつぶやき、声にしてはつきり誓う。

「それが俺の戦う理由だ」

オルガ、サイガ……見ていてくれよ。俺は守って見せるからさ。

《生きた証編終わり 仕組まれていたこと編開始》

## 仕組まれていた事Ⅰ

1

笑う孤児院の子供達は桜農場のトウモロコシ畑のトウモロコシ回収作業を楽しそうにしており、そこに同じように手伝いをしているのはクーデリアだった。彼女が初めてトウモロコシの回収作業をし始めてから何回か目の仕事。毎年のように回収しているのです。数えていないが、今では日課の一つになってしまった。上下の簡易作業着に身を包み、厚手のグローブでトウモロコシを回収しては籠の中に入れていく。

あの頃は隣に一人の少年がいたことにいつも感傷的になってしまふ。

命の値段などあの頃は考えもしなかった。

厄祭戦後の世界はギャラルホルンが支配している一方で反ギャラルホルンが活発化し、孤児やヒューマンデブリが増えていく一方だった。だからこそ、彼女はそんな支配体制を変えるため、そしてそんな世界で犠牲になった大切な人の為にこの七年間を戦い続けてきたつもりだった。しかし、そんな行動も半年前の宣戦布告に消えてしまった。

地球圏ではギャラルホルンとEDMと木星帝国による三つ巴の戦争状態に移行しており、今も犠牲が増えていく。そばで見ることもしやらず、願うことしかできない今の自分と昔の自分を重ねたとき、何も変わっていないことに落ち込んでしまふ。

手元にあるトウモロコシを眺めていると鉄華団の人々を思い出してセンチメンタルな気持ちになる。

「三日月、団長さん、昭弘さん、皆さん私は何ができるでしょうか？」  
小声でそうつぶやくもそんな答えが返ってくるわけがなく、思い出だけが脳裏をよぎり作業に集中できない。

地球行きがいまだに決まらない中クッキーたちも農作業に集中しており、家の中から漏れ出すニュースではEDMの幹部らのインタビュー内容を映している。もっともビスケットがニュースに姿を現

したことは全くないが……

『では、続いては地中海戦で指揮を執るフアントムブラッド隊隊長のビスケット・グリフォン氏にお話をお聞きします』

そんなニュースコメンテーターが話を続けると、クッキーやクラツカだけでなく、アトラやユージン達旧鉄華団メンバーであるほぼ全員が反応した。もちろんクーデリアも反応してテレビに近づいていく。ただ、この場には雪之丞たちはいない。

『ビスケットさんは地中海戦を指揮しておりますが、今のところ戦局に変化はないとみてもいいのでしょうか？』

綺麗な黒髪の美人がマイクを移動させると同時にテレビ画面に見慣れたビスケットの姿が映し出される。ユージン達の知るビスケットより多少背が伸びている以外は変化が見られない。

『そうですね。しかし、ギャラルホルンの方はかなり疲弊が見えますから、一か月以内に大きな変化があるかもしれません』

穏やかそうに答える声のどこかに力強さがうかがえる。懐かしさにクッキーとクラツカは泣き出しそうになり、ほかのメンバーも死んだと思っていたかつての仲間存在に心に来るものを感じていた。

「変わんねえよなく。しかし、ああいう制服が似合わねえな」

ユージンがどこか茶化すような声を放つと周囲に笑いが起きる。「確かに、でも指揮官っていうのは分かるな。あいつオルガよりうまいしな」

ダンテが同意しつつチャドもおかしそうに笑うが、クーデリアだけが浮かぬ顔をしていた。アトラが隣に近寄りながら小声で話しかけた。

「どうかしたの？浮かぬ顔だけど」

「え？私そんな顔をしていましたか？」

クーデリアは驚きの表情と共に声を出す。数秒後には再び俯き低めの声を放つ。

「どうしてビスケットさんは戦うのでしょうか？オルガさん達が犠牲にして手に入れた世界なのに……」

周囲にいるみんなも同じように俯くが、アトラだけが顔をあげたま



まなんとなくの答えを出す。

「多分……オルガさんだけじゃないからじゃないかな？今のビスケットはいろんなものを抱えているんだと思うんだ。戦わないと手に入らない物ってどうしてもあるでしょ？クーデリアだってこの七年間戦ってきた。ビスケットもきつと同じ……」

テレビの奥でインタビューに答えるビスケットの方を見ながら懐かしい表情を浮かべ、みんなも同意したようにうなづく。

「あの時、三日月や昭弘さんが命を懸けて私達を守ってくれたからこそ私達はここにいます。同じだよ。守るためにも戦うの、あのビスケットが守りたいものだよ？信じてあげようよ」

アトラに促されるように首を縦に振るクーデリア。信じて見守るしかない。

2

兄であるビスケットがインタビューをしている間にシノと明楽がおかしなアクションを起こさないようにと口にガムテープを張り、体中をロープでグルグル巻きにされた二人がその場で放置されており、動いてロープを緩めようと必死になっている。

「そのロープから這い出たら承知しないからな」

見下すように睨む俺の視線に再びひるむ二人は黙って兄のインタビューが終わるのを待っていた。美人インタビューアーが頭を軽く下げ一歩引くと笑顔で去っていく。美人インタビューアーへ鼻の下を伸ばし続けている兄の元に赴き（その間にロープから逃げ出した明楽とシノも追いかける）、後ろからこそつと脅かすことを目的に話しかける。

「美人さん相手に随分鼻の下を伸ばしておられたようで……」

「いいな〜」

「うわあ!?!」

俺の言葉に続いてシノと明楽も恨めそうな低い声を放つ、悪寒が走りそうなほど鳥肌を立てさせて驚きながら体を百八十度回転させる。

「は、鼻の下なんて伸ばしてない!!」

「よく言うよ、美人さんがいなくなった後でへらへらしてたら誰だっ

てそんな感想になるっての……」

「いいな〜」

再び恨めそうな声を放つ二人の頭を叩き大人しくさせると幾分か冷静になったシノがはつきりとした声を出した。

「しかしよ、これで火星の奴らにおめえの生存がばれちまったんじやねえか？チビ共もこっちに来ちまうぜ」

シノのそんな声に今度は俺が代わりに返す。

「だとしても戦場状態の地球に行くシャトルは無いだろ？」

シノの体に乗っかって明楽が会話に混ざってきた。

「でも、荷物を運ぶ輸送船なら話が別でしょ？金さえ払えば行けそうなのがするけど……」

「重てえってー！」

「ふが!？」

シノが強引に立ち上がり明楽がその拍子に頭を強く打ってその場に転がってしまふ。頭を押さえたままその場でゴロゴロと苦しんでいる姿をみんな内心「ざまーみろ」と返しておき、シノが心配した表情で返すと、兄は「大丈夫だよ」と返した。

「いつまでだつてごまかせるわけじゃないからね。俺は生きているよつて伝えるいい機会なのかなつて」

空を見上げ遠い場所を見るように目を細める。それは俺も同じことだった。二人だつていつまでも子供じゃない。真実を自分で知る日だつて訪れるだろう。自分で歩き、考え、そして行動する日が必ず来る。俺や兄さんがそうやって今この場所を歩いているように、あの二人も。そう思ったからこそ兄もインタビューに答えようと思ったのだ。

『俺はここにいますよ。生きていますよ』

そう伝える為に、だとしたら俺が伝えられるメッセージは……

『自分の意思で決めて生きろ』

そう伝えたい。一人一人の命の価値は自分で決めるしかない、他人に決めさせるか、それとも価値を見出すために戦うか、それしかできないのだ。鉄華団がそのために戦ったように。あの二人も戦つていく

しかない。自分と、他人の価値観と……

話が落ち込んでくると、空気を読まない、読めないで絶賛有名な明楽がKYを發揮した。

「ところで……二人の妹って美人なんすか？」

この状況で妹の容姿を尋ねる明楽……マジパネエ。明楽はニコニコしたまま悪意の無い笑顔を見せ、兄の表情が一旦止まる。シノが内心汗をかきつつ数歩後ろに下がっていく。兄の性格を分かっているシノには明楽が踏んでしまったとびつきり大きな地雷に恐怖してしまう。明楽の笑顔とは別種の笑顔を明楽に向けつつ明楽の手首をつかむ。

「明楽、奥に行こうか？」

「??」

笑顔の奥にある殺意に気が付くわけのない明楽を連れて物陰に隠れると、数秒後には明楽の悲鳴が周囲にいる人々に驚きを与えつつ、静かに物陰から明楽を連れて兄が姿を現した。明楽は白目をむきつつ気絶しているようにも見える。

「踏むかね、ビスケットの一番大きな地雷に」

「KYの極みだな。考えれば分かりそうなもんだが」

明楽をその場に放置しつつ怖い笑顔でシノの方にも向ける。

「まさかとは思うけど、シノもクッキーとクラツカをそういう目で見ているの?」

目が据わっていらっしやる。まっすぐシノの目を見るその様は一種のお化けすらほうふつとさせる。瞳の感情を分析すれば、怒り半分、疑い半分だ。おかしい感情を吐露すれば同じ目にあうことは既に理解できるだろう。よどんだ瞳にひるんでシノは首を横に強く振る。別種の笑顔に変わるとビスケットは部屋の中へと姿を消していく。

明楽を残して。

「久しぶりに見たぜあんなビスケット。昔から鉄華団のメンバーにも言えることだけどよ、チビ達に手を出す奴は誰も許さないからな」

「シスコンの極み……そしてKYの極み。ここにいるメンバーは何かを極めないといけないのかね？」

呆れ半分でその場を後にする俺は明楽をその場で見捨てる形で移動していく。

3

この半年で戦局は大きな変化はなかったが、ギャラルホルンからEDMに流れてきた人は大きく、俺達アフリカ降下部隊に流れた人はいる。

大きな廊下にくつもの人が流れていくが、そのうち3割はギャラルホルンからEDMに流れてきた人物だ。

俺達ファントムブラッド隊が現在駐屯しているこの施設は別命『移動要塞』であり、その理由はこの要塞が用途によって移動することができるように分離飛行機能を持っているためだった。各所が分かれて移動することができ、大気圏突入や離脱まで自由にできる。元々は拠点攻略用の施設として開発されたものだ。その為に非常に複雑な造りになっており、組み合わせ次第でどんな形にもなる為に、施設の内装は色を含めて全く同じで、そんな点も迷子にさせる要因になっている。真つ白な色調に窓のほとんどついていない廊下、一定間隔で自動ドアが左右に広がっており、同じように一定間隔で十字路が必ず存在する。より多くの人間を施設内に入れておくための造りが逆に複雑にしている。

シンプルゆえに複雑である。

ほかにも大量の格納庫に訓練施設などが配備されており、ギャラルホルンのメンバーが最初に見た感想は支部の施設よりかなりマシという意見だった。施設の中身は基本的に充実しており、ギャラルホルンの本部に比べたら見劣りすることは確かだが、支部から見ればかなり充実しているそうだ。

そんな複雑にしてシンプルというおかしな構造の建物を縦横に移動していくと、ついに廊下の十字路の左角より銀髪の女性と金髪の童顔の女性が姿を現した。

「あら〜修羅君じゃない」

銀髪の女性はひらひらと手を振り笑顔で接してくる。金髪の童顔は逆に俺を睨むように鋭い目つきをするようになる。苦手なんだよ

なくこの二人。

元ギャラルホルンの士官にして、別命氷の女帝と恐れられるモビルスーツ乗りである銀髪の女性『キャリー・ランジュリー』と、その副官の『レレ・キャン』。キャリーは所謂大人の女性という感じの風貌、腕組をしていると大きな胸が協調されてしまう。それ以上に整った綺麗な顔立ちは嫌が応でも大人な女性として認識させる。その反面レレは童顔をしており、体つきもどこか幼く見えてしまう。明楽ほどではないにしても、背も低く体型敵にも凸凹の無いスレンダーな体格をしている。しかし、副官としての能力と肉弾戦の高さは俺自身評価してもいいレベルだ。

「こんなところで何をしていますか？まさか……」

この施設の構造上迷子になりにくいというのは俺は先日よく理解したつもりだし、実際今もマップが手放せない状態だ。そういう情報を開示したうえで彼女の状態を見ても、副官のレレはタブレットを持っていて、彼女の方は特に何かを持っている様子はない。そして、副官が案内をしているというより彼女が勝手に歩き回っているという表現が正しそうだ。だとすると……

そんな俺の考えを理解したのはレレであり、睨む目をより上に上げ一歩俺の前に出て見せる。

「キャリー様が迷子になるはずが無かろう!!」

「何も言っていないだろうに……むしろお前が発言することで確信すら得られるぞ」

「うぐ……キャ、キャリー様は今食堂を目指しておられて……」

「食堂は今出た来た場所を戻っていけば行けるはずだが？」

話せば話すほどドツボにはまるというのはこのことを指すのだろう。睨む目にかすかに涙を浮かべはじめ、さすがに憐みの同情の念が生まれるがそれすらも察してくる。

「同情するな!!」

「おおー！ついに以心伝心すら!?!それとも心を読んで見せた？」

「顔に書いている!!」

なんだかんだ言って彼女といると少しだけ面白くいられるから不

思議だ。性格的には苦手だけど。

前に一歩出ていき睨むように俺の瞳を移す。するとキャリアークスクス笑い出し、レレは驚きと共に振り返る。

「相変わらず仲がいいのね？」

「そんなことはありません!!」

「そんな強めに否定しなくてもな」

ますますキャリアークが笑い出し、笑顔でその場から去っていく。食堂とは別方向へと。俺の視線はレレの方に向き、レレは苦し紛れに顔を逸らす。

「食堂は全く逆方向だといったばかりでまっすぐ進みますか……方向音痴にこの構造は逆効果だな」

「せめて……方向が分かる様に案内掲示板のようなものがあれば……！」

心からの言葉だな。

レレは置いてかれまいと駆け出していく姿を後ろから眺めながら彼女たちが無事食堂に辿り着けることを祈る。

俺はプライベートルームへ向けて再び歩き出すと俺の部屋の目の前でもう一人の元ギヤラルホルン士官と七番隊所属のパイロットが話し込んでいた。

元ギヤラルホルン士官である通称『隻眼』の異名をとる『ワインダー・グラスリー』はめんどくさそうな表情を浮かべながら話を聞き流している。隻眼の異名通りの片方の目がつぶれており、少々年老いたその顔つきと共に貫禄さえ見せている。

そして、もう一方の男がこちらに気づいた瞬間に俺は内心ゲツと思ってしまった。

さわやかフェイスに短めの癖の無い金髪、シノ同様に細身の鍛えられた長身、一番苦手な誰にでも親しく接するあの態度は苦手だ。

「師匠じゃないですか!？」

「師匠と呼ぶな」

今回から七番隊に所属することになった『レオ・クリスハイト』が笑顔で近づいてくる。俺が直接モビルスーツテクニクを教えた数

少ない人間の一人。今回の地中海戦において招集をかけた人間なのでどこかで会うだろうと心していたが、まさかプライベートルーム前で会うとは……。

ワインダーは面倒ごとを押し付けられたと気が付かないうちに姿を消している。

正直に言えばこいつは苦手なんだよな。悪気が無い分断りづらいし。

「師匠！俺を呼んでもらってありがとうございます！」

「べ、別に……俺が前線に出ない分の補給分だし……本部で腐らせておくにはもつたないと思っただけだし……あと近い」

「本部に居ても訓練だけでつまらないと思っただけだところなんです!! やはり実戦を経験しないと強くなれませんし！」

「そう、そして……近い」

いい加減に離れてほしく最後の言葉は多少強めに行ったが、ようやく離れてくれた。すると、すぐ隣の窓には金色のジムが見えた。

大型パーティクルドライブ一体型エイハブリアクターを搭載した初のモビルスーツにして、近接戦闘に特化させたレオ専用機。頭は十本のアンテナが設置されており、このアンテナはより正確に索敵ができるようになっていいる。そして何よりも最も特徴的なのが背中にある。存在感を感じさせる大剣と高速戦闘を可能にする大型スラスタである。

「次世代型の試作型ジムだったか？よりガンダムフレームに近づけるようにと開発されたという……フォルムもジムより大型か？」

「はい！これは近接用になっていますが、遠距離型はもつと大型ですよ！」

さらに大型である機体を想像してみる、お相撲さん体型なのだろうか？まあ、大型ライフルやミサイルの発射時の反動を押さえる為に機体を重くしているのだろうが、移動時はどうするのだろうか？なんか特殊な素材や装置が存在するのだろうか？

そんな疑問を抱くが、俺は途中で考えることをやめ自分の部屋に向けて歩き出す。後ろからついて来ようとするレオに対して指をさし

言ってる。

「ついでくるな!!」

俺はそのまま部屋の中へと入っていく。そして、一つのディスクを手に取りそこに書かれている名前を口にする。

「アイン………ダルトン」

俺の知らない人物の名前。

4

ダルトンの名前自体は聞いたことがある。まだ俺が研修生時代に火星で起きた変死事件をEDMが調べた際の死体の名前だったと記憶している。

クリュセのスラム街の下水道に浮かぶ二つの死体。そのうちの一つはギャラルホルン士官のダルトンという男だった。拳銃で殺された痕跡が残っていることから他殺が検討され、ギャラルホルン内部で暗殺騒ぎが起きたことはEDMでも話題に上った。

その際にアブラウ政府から極秘裏に依頼がやってきた際に四番隊が調べに行くことになった。そんなメンバーの中に俺も含まれていたのによく覚えている。

クリュセで起きた変死事件ということもあり俺は兄や妹たちに合わないで済みますようにと存在するか分からない神様をお願いをした。しかし、神様は無残な性格をしていたらしく、俺は危なく妹たちに会いそうになった。走ってその場から駆け出した俺が偶然にもダルトン夫妻の死体現場に辿り着いたことは幸運だった。しかし、その後ろから二人の妹たちと兄の声が聞こえてきた時、俺は日汗をかきながら人込みをかき分けていき、捜査官に紛れ込んだ。

「お兄ーなにこれ!」

「危ないですよー!」

EDMと胸に書いており制服を着ている姿を見てもどうやら兄にはピンとこなかったらしく、危ないという言葉にいち早く反応し素早くその場を後にした。

内心ホツとしながら立ち上がり、死体を見ると、既に腐りきっており異臭が激しいことに気が付いた。鼻を押さえて一歩だけ後ずさる。



「くっさー」

すると周囲の民間人は俺の姿を見ると全員が同じ感想を抱いたらしく、声を出して俺の耳に届いた。

「「なんで子供がこんなところに？」」

「子供っていうんじゃねえよ!!」

反射的に怒鳴ってしまおうが、その声にかすかに反応したのか兄の声が聞こえた。

「?今声が聞こえなかった?」

「いろんな人がいるから分かんない」

俺はとつさに口を紡ぎその場に座り込む。四番隊隊長がシラーという目を向ける。内心「何をしているんだお前は……」と言われていくような気がする。ジェスチャーで「好きでしているわけじゃない」と返す。

その際に知ったのがダルトン夫妻だ。しかし、ダルトン夫妻には子供はいなかったと調査結果が上がっている。

同時にダルトン暗殺疑惑が上がったのがコーラル前支部長がノブリス・ゴルドンと結託した結果ではないかと推測されたが、明確な証拠が出てきたわけではなく、結果的に調査を引き上げざる得なかった。

帰る前日の夜に俺は桜農場へと赴いて桜ばあちゃんに会ったことは兄には秘密だ。

「会っていかないのかい?」

「いいよ。無事そうな姿を見れたし……」

俺はフードを頭にかけて遠くに止めた車に乗り込もうとするが、後ろから声がかかる。

「マハラジャによく伝えておいておくれ。彼が言うなら三人を送ることも考えるさ」

「何も言わないと思うけどね。あの人、基本は放任主義だし」

俺は苦笑いを浮かべながらその場から立ち去っていく。家の中から聞こえてくる兄と妹たちの話声を今でもよく覚えている。

父さんと母さんと一緒にみんな楽しんでたあの頃に戻れるだろ

うか？

ダルトンの事より、俺はそこ事だけが心配だった。

## 仕組まれていた事Ⅱ

5

アイン・ダルトンの正体に迫ることがEDMに所属している俺『サブレ・グリフォン』の最大の目的になっていた。

そもそも、アイン・ダルトンとは何なのか？どんな人物なのかを知る為にギャラルホルンからの受け入れを許可した、と言っても過言ではない。

そして、アフリカ戦線が終わってから半年がたった今、ようやくアイン・ダルトンの正体に迫る為に俺達は動こうとしていた。

彼が誰でどこから来たのか？その正体に迫る為に呼んだ人物こそが情報局局长『テマル・マイル』だった。

彼が降りてきたのは俺がアイン・ダルトンと書かれたディスクを取りに行つたほぼ同時期の事だった。

6

大きすぎる会議室の席に俺とレレが距離を置いて（俺がではなくレレであるが）座っており、対面の席（この場合は教卓のような場所にテマルがいつもの優男ぶりを発揮するような笑顔をこちらに向ける。

胡散臭そうな笑顔だな。

「胡散臭そうな笑顔ですね」

俺と全く同じ感想を口に出すレレに対してジト目を向けてみるが、鼻でフンと反論されてしまうだけだ。俺は他の反応を窺う為にちよつかいを出してみる。

「話があるからき、きやあー！」

話をしている最中に俺がレレの横腹を優しくなでてあげると、こそばゆい感覚がレレの全身を駆け抜けたのだろう。悲鳴を上げて涙目でこちらを睨む。

「あなたが参加しろと言ったから参加したのですよ!？」

「反応が面白いなっと思いませんか？いや、普通ならしないんだけど君は面白いなっ。ついついからかいたくなる（笑）」

「言葉の最後にわざとらしく（笑）とか付けない！」

「じゃあ（・▽・）」

「今どんな言葉を発しましたか!？」

「君たちは仲がいいな」

テマルの言葉にレレがいち早く反応し反論しようとするがテマルはそれをわきに置いて話を切り替えた。

目の前のスクリーンにアイン・ダルトンなる人物のプロフィールが書かれているぐらいのものだが、それ以上に気になる項目は存在しない。

「質問何だが、そこにあるダルトン夫妻の息子っていうのは本当なのか？」

俺からレレに対する質問なのだが、どうやら先ほどからかったのがまずかつたらしく、同じように鼻を鳴らして返されてしまった。仕方がない、またわき腹をいじるか。っと思ったが即座にガードされてしまい口惜しさが残る。

残念だ。

「経歴上ははな、本当はどうだか分からん」

ニコニコ顔を決してやめないテマルを見てみると反対に怒り心頭のレレとの違いに笑いが噴き出しそうになる。肩をプルプルと震わせている俺をキツと睨みつるレレはため息を吐きながらテマルの方を向く。

「私が把握している限りでは、鉄華団の一件の少し前に紹介という形でギャラルホルンに配属されたらしく、当時のクランク二尉が面倒を押し付けられていたそうです。ですが、クランク・ゼントとアイン・ダルトンとの仲は決して悪くなくむしろ良好だったそうです。クランク・ゼントはアイン・ダルトンを差別することなく接していたそうです……これも鉄華団が結成されるまでだったそうですが。鉄華団が結成されてからの前後でクランク・ゼントは単独で戦いを挑み、亡くなったそうです」

亡くなったという言葉に多少重みを感じるくらいで、話はよくありそうな話ではなある。差別されていた環境でしない人に敬愛か信頼

を寄せようとする。きつとアイン・ダルトンからすればクラंक・ゼントという男はそういう男だったのだろう。

だったら死んでからの動向がすごく気になるが……

口をジュースで潤すと再び口を開いた。重たい口を――

「クラंक・ゼントを失ってからは鉄華団への復讐の為に行動していたそうです。それが筋違いだと理解できないまま」

「筋違いとは？」

テマルはすかさず質問をはさむとレレは一度だけうなずくとその理由を語りだす。

「クラंक・ゼントは上からの命令と自分の中にある良心との葛藤が存在していたようです。鉄華団は子供の集まりで、彼らを殺すという行為に抵抗を覚えていた。故に彼は鉄華団に討たれることで事件が幕を引くことを願っていたのではないのでしょうか？ 私達はそう判断しました」

「アインという火星出身者を差別しないような奴だしな、葛藤しておかしくはないだろうな」

テマルが勝手に納得しただけだが、俺の方からは文句は特にならない。なので沈黙を貫くことにした。変にちよっかいを掛けたら睨まれるでは済まないだろうし。

「その後、アイン・ダルトンは地球からの監査官として同行していたガエリオ・ボードウインの部下として同行し、鉄華団を討つための戦いに明け暮れていたそうです」

ガエリオ・ボードウインという名前を前にして小声で「死の渡り鳥め」と口を滑らせる。レレが軽く反応して見せるが意識しないようにして話を続ける。

「しかし、彼らの願いとは違い鉄華団は順調に航路を進めたそうです。その為に二人は地球外縁軌道統制統合艦隊司令官であるカルタ・イシューを頼ったようです。しかし、再び取り逃がしてしまいます」

その辺の話は兄やシノから聞いているので大体は理解しているつもりだが、二人の話を思い出せばここから分岐点だと思うが……

「アイン・ダルトンは地球降下阻止作戦の際に回復不能の重傷を負っ

たようです。その為……急遽阿頼耶識の処置を施すことを極秘裏に決めたようです。これが私が知るエドモントン市街地戦までの流れです」

兄とシノとの話と通じるから本当なんだろうけど、この話にはマクギリス・ファリドがどの程度関わっていたのかが分からない。まあ、やったことは阿頼耶識云々ぐらいだろう。

問題は……と考えたところでテマルが俺の思考を読んだように思ったことを口に出した。

「問題はなぜそんな短期間に阿頼耶識研究を成功させたかということだな。元々のデータがあったと言ってもだ。本来研究とは失敗を繰り返してミスの一つずつ潰していく行為だ。たとえばアイン・ダルトンが研究に参加していたとしても一週間もしないうちに成功するとは思えないが……」

そこなんだ。俺が気になったのは。

何かあるんだ。彼らが実験を成功させた背景に、それこそマクギリス・ファリドが隠しているような何か……

そう思っているとテマルはスクリーンの内容を変更してしまう。今度は今現在の場所から数キロ離れている場所をさしている。

「ここはこの辺でギャラルホルンの情報を手に入れられる受信システムが存在する旧施設の場所だ。ここに侵入すれば最低限の情報が得られる可能性がある」

ああ、この話の結論が見えてしまった。

「よするに、私達二人でそこに侵入してギャラルホルン本部のデータからアイン・ダルトンの情報を調べてくればいいのですね？」

そういう事である。前線に出ない俺と出れないレレを捕まえて調べに行つて来いということだ。下手をすればギャラルホルンからの妨害を受ける可能性があるにも関わらず……

ニコニコ顔をやめないこの男の表情をどうやれば崩せるのだろうか？

俺達を勝手に動かすことに何のためらいが無い。

「あんたはどうするんだ？」

「私は戦いはできないのでね」

嘘つけ！つと文句を言っても仕方がないうえに何を言ってもついてこないのだろう。こうなっては俺達で行くしかない。レレも文句を言おうとするが無駄だと知り下唇をかみしめながら俺をにらむ。

何故俺をにらむ？俺の所為ではないのに……理不尽な。

「なぜこんな男と二人つきりで!?納得ができない！」

「この施設の中で暇人は君達だけなんだが……」

不名誉な呼び方に今度は俺が激しく不満を漏らす。

「暇人という言葉を撤回しろ！この女ならともかく俺はこれでも色々!!」

この間までだけど……という言葉は言わずにいよう。しかし、たった一言で反論を封じられた。

「だが今は暇だろうか？」

反論しづらいことを言う……と黙ってしまったら今度はレレが反論をまくしたてようとした。

「私にもキャリアー様のスケジュール管理や業務関連の仕事があるのですよ」

「それは別の人物が変わってくれるそうだ」

ドアの向こう側にクレアとイオリが手を振っている姿が見えた。レレは「余計なことを……」と言わんばかりの表情で忌々しくテマルをにらみつける。

クソ！ここ数日仕事が減っていったのはこいつの所為だったのか……バルバトスに乗らないことをいいことに……レオがやけに速く来たのはそういうスケジュールが情報局とEDMの間で決まっていたのだろう。

レレもそこに辿り着いたらしく指の爪を噛みながら事前に手を打てなかった事に悔しさをにじませる。

こいつ……そうまでして俺達を行かせたいのか？

しかし、これといった反論ができずにいるとテマルはスクリーンを閉じてそそくさと部屋のドアを開けてしまう。

「直ぐに支度して向かってくれたまえ」

「お前ろくな死に方をしないぞ」

呪詛を投げかけると、テマルは手を振るといふ形で回避した。

7

明楽の目の前でグシオンが出撃前の調整を終わらせよとしていた。グシオンは半年前と同じように背中に大きなフライトユニットを背負っている。しかし、武装に関しては変更がなされている。両方の腰に備え付けられた斧はサイガが使用していたバトルアックスを装備しやすくするために半分にされたものだった。

明楽とシノはパイロットルームの窓から忙しく、せわしなく準備をしている整備士たちを横目に見ながら飲み物を飲んで過ごしていた。「しっかしよ〜結局サブレは今回も不参加かよ。明楽、お前なんか聞いてねえのか？」

半分飲み込んだところで「ふが？」と反応し、頭で考えてみるが結論など出るわけもなく首を黙って横に振る。

すると、パイロットルームのドアが再び開き奥からビスケットが現れた。

「サブレなら情報局から仕事の依頼だよ。なんでもギャラルホルンの情報受信施設に殴り込みに行くとか……」

「殴り込み？」

二人して不穏な言葉に心配になっていた。サブレではなく、ギャラルホルンの方をである。

「大丈夫なのかよ？」

ギャラルホルンはつという言葉を抜かしたセリフに反応したビスケットは誤解したままで正確なセリフを選び出す。

「大丈夫だよ。誰もいないらしいし。今はほとんど使われない施設に行くだけだから……」

「まぎらわしい言い方を！」

なら殴りこむという言葉は間違いではないのだろうかという気持ちだが心の奥底でくすぶる二人だったが、そんな中レオが同じように部屋の中に入ってくる。

「明楽先輩！師匠も出撃するんすよね!？」



「しないよ。先輩他の仕事で出かけるってさ」

やる気と覇気の無い声に疑問を抱いたのはその場にいたほぼ全員だった。

「どうしたの？明楽、今回は思いっきりやる気がなさそうだけど……」  
ストローに口を付けたまま少しだけ考えてみる明楽は心の内を吐露する。

「別にこの前の戦いではバエルが出てこなかったから……」

やる気がなさそうな表情や座り方をしているが、その瞳は何かを求めているようにも見える。

明楽はここ半年ギャラルホルンのバエルを倒すことに執念を燃やしているように思えたのはビスケットだけではなかった。バエルとキマリス二機相手に互角以上の戦いをしてくれるおかげでシノも木星帝国相手に奮戦できている。

「ていうか……師匠が最近前線に出ていないっていう噂は本当だったんだ……」

レオがそう呟いて見せるとビスケットが上を向き考え込みながら答えた。

「うん。ここ数か月は最前線に出ていないね。なんでもバルバトスのシステムとサブレの操縦技術が合わなくなったって嘆いていたよ」

合わなくなったという言葉に引かかったのはレオだった。

「どう意味っすか？合わなくなった？」

「うん、なんでもサブレが避けれると判断して動かすんだけど、バルバトスがその反応についていけていないんだって。『ずれる』って言うてたよ。すごくギリギリの戦いになるんだって。早く『エデン』が欲しいって文句を開発局に出したらしいよ」

シノが苦笑いを浮かべてジュースを飲み干す。

「そんなことで苦情を出されたら開発局の連中も苦笑い浮かべるしかないだろうな」

「そもそも、バルバトスにはサイコ・フレームが使われていないからシステム的なショートカットができないんだよね。グシオンやフラウロスは阿頼耶識システムを改良したシステムを搭載していて、サイコ

フレームが二人の脳波をダイレクトに受け取ってそれを機体のシステムに適応することで微調整をしてくれたりするけど、サブレはそれができない。だからどうしても機体的な限界はあるんだよね」

シノはごみをゴミ箱に投げ入れる。

「でもよ、そんなシステムを使わなくても十分強いだろ？」

「本人は納得できないんだって。どうも例のエヴォ・エクスとかいうパイロットも最近また出てこなくなったし……」

サブレが異様に警戒している相手があのパイロットだということは既に分かっていた。

8

何のために自分が戦っているのか既に理解できていないと感じているのはガエリオ・ボードウィンだった。

七年前には感じたことも無い無力感と居場所の無さ。

マクギリスを討った後の戦いで彼は不可能を可能したあのパイロットを目撃してしまった時、自分の世界の小ささを感じてしまった。

バルバトスのパイロットだったあの少年にもできなかった、ダインスレイヴの攻撃を弾くという大業をなした瞬間を今でも覚えている。

災いの地で罨を張っていたEDMのパイロットだったサブレ・グリフォンと明楽・アルトランドはダインスレイヴの攻撃を避け、弾いて見せたのだ。

『貫通力があるだけだ。当たらなきゃどうってことは無いさ』

そんな言葉を平然とはき、それを実行に移すあの人物にガエリオは無理矢理マクギリスを重ねたのかもしれない。しかし、そんな幻想はあの強さの前に霧散してしまった。

冷静過ぎるほどの洞察能力、大胆不敵と一騎当千のような強さ、そしてマクギリスやガエリオには無い精神的な強さ。どれをとっても自分には無いモノばかり。

それだけならそこまでショックではなかった。もっとショックだったのはそんな人物に近いレベルの人間がEDMには溢れているという事だった。要するに実戦慣れをしており、なおかつ強い。

一体多数という状況を作り、こちらはダインスレイヴを事実上封じられてしまったと言ってもそれでも圧倒的なほど有利だった。しかし、艦隊戦からモビルスーツ戦まで彼等にはかなわなかった。

気を失って、目が覚めたときは彼らの捕虜となりラスタル・エリオンがEDMと契約を強いられた後だった。

ジュリエッタは周囲悔しそうに涙を漏らしていた。しかし、自分達に彼らに勝つことができるかと言えばそれは不可能だと言えな  
いだろう。

ガエリオは納得などできなかつたが、それでも負けたという気持ちは自然と引退への道を選ばせた。しかし、それはあのエヴォ・エクスという男が家に現れたあの時には変化してしまった。

ラスタルが亡くなったということはすぐに聞かされたガエリオはすぐにジュリエッタの元へと急いだ。

彼女の目には虚ろで何も映してはいなかった。しいて言うならばインに似ているようにも思えた。

同時に立ち直らせるのは容易だった。

しかし、それが今でも正しかったのかはよくわからない。

ラスタルが亡くなる一週間前に自分の元を訪れたことがあった。彼は『停滞した平和は真の平和と言えるのだろうか?』と尋ねられたガエリオは、『俺はそう思う』と答えた。しかし、それ以上に今更そんなこと言うのだろうかという疑問を覚えた。

今思えば彼はあの時自分が死んでしまうことを理解していたのかもしれない。

ガエリオは思った。

『なぜ俺達に何も告げてはくれなかった!?!』

ラスタルは何かを知り、そしてこの戦争のための生贄になる道を選んだのだ。だったらこの戦争の真実はガエリオには理解できない。

9

ラスタルがゲイナーに連絡を取ったのは彼が亡くなる半年ほど前の事だった。彼はゲイナーの知る情報を欲しがった。

ゲイナーは彼の覚悟をした目を見たとき、彼は何かを知ろうとして

いるのだと思った。

だからこそゲイナーはラスタルに全てを語った。『真の平和』について。その為の道しるべを、ゲイナーが知るその険しい道のりを話した。

すると、ラスタルはある一人の若者の話をゲイナーに語った。

『私はサブレ・グリフォンという若者に出会った』

そう告げるラスタルはその若者に感じた何かを率直に告げた。

『あの若者には絶対に曲がらず突き進む信念とそれをなすための力を感じた。あの若者には何か生まれてきた特別な理由があるような気がした』

そう語ったラスタルはその意味と理由を知ることになった。

ゲイナーは語って見せた。アカシック・レコードが告げた予言に似たその言葉を。

『いずれ人類の未来を決める人間が必ず現れる。それは昔の人類『イオリア・シユヘンベルグ』が真に提唱した『イノベーター』や『ニュータイプ』すら超える存在。『選別者《セレクチャー》』と呼ばれる人間が人類の破滅か存続かを決めてくれる。人類に進化に値するのか、それとも滅ぶべきなのか。その為の人間は二人いると。その一人がきつとあの若者なのだろう』

ゲイナーがそう語るとラスタルは何かを悟ったように通信を切った。その半年後に彼は亡くなってしまった。

ゲイナーは全てを悟った。

彼は真の平和のための礎になったのだと。なら、自分達はその先を彼に伝えなければならぬ。その為にはここまで導く道先案内人が必要だ。

そう考えたとき、ゲイナーはその人物は彼を支えられる人間がいいと思い、クレアを選び取った。

彼女なら……そして、その弟の『ビスケット・グリフォン』なら彼を支え導けるだろう。そう感じたとき、彼はマクマードにも連絡を取っていた。

この世界の真の平和の為に自分たちが道しるべになるときが来た

のだと彼は判断して立ち上がった。

そしてその一年が彼はクレアとサブレの接触到成功した。

二千万年の間人類が願った真の平和の為に……

サブレ・グリフォンが勝てるように導かなければならない。その為の犠牲なのだから。

彼がそれを知るのはゲイナーの元を訪れるときになるだろう。

それがいつになるのかは分からない。

この仕組みれた戦争がいつまで続くのかは誰にも分からない。

アカシック・レコードが告げた最後の言葉。

『七色の光が世界を包んだ時、人類は選別の時を強いられるだろう』

その時だけは近い。それだけは分かっている。

## 仕組まれていた事Ⅲ

10

バギーに乗り込んで移動を始めて数分しか経ってないと腕時計で確認してみる。周囲は閑散とした風景が続いており走っても走っても続くのはただの荒野のみ。枯れた木のみで、ほかに人一人どころか動物すらいない。

「この辺は環境汚染の影響下で動物が住めない場所になってしまったんです。今では枯れ木がひたすら広がっているだけです」

そういつて見せたのは運転席に座って運転に集中しているレレだった。俺は後ろの席で大きく体を広げてくつろいでいた。

レレは小さな間を開けてもう一度口を開き俺に向けて尋ねる。

『『死の渡り鳥』ってどういう意味ですか？』

答えにくい質問ではないし、別段秘密にすることではないのだが、しかし口を開くのがとてつもなく重く、さらに間を開けて俺はようやく言葉にした。

「ガエリオ・ボードウインは誰に頼らないと生きていけない人間だと思う。幼いころからカルタ・イシユーに頼って生きてきた。そして、マクギリス・ファリドを頼って殺した。カルタ・イシユーだつてそう。彼がそもそも巻き込んだんだ。ガエリオ・ボードウインが巻き込まなければ死なずに済んだかもしれないのに。カルタ・イシユーの事で責められるべきはマクギリスではなく彼だったんだ。いろんな人を頼つては巻き込んで殺していく。だから……『死の渡り鳥』みたいだと思つたんだ」

レレはあえて何も言わないまま運転し続ける。しかし、レレは予想もつかないようなセリフを口に出した。

「前にキャリー様がおっしゃっていましたが。貴族主義のような考え方をするギャラルホルンを気に入らないと考えている人はいると。結局貴族として生まれてきた者は貴族としてしか考えられないし、権力のある者に認められると心酔してしまうものだ。それが『アリアンロッド艦隊』だと。でも、私にはそれがよく分かりません」

キャリアが何を言いたいのか俺にはよく理解できた。だってそれは俺やマハラジャがラスタルに告げた言葉だったからだ。

「ラスタルがどうしてあんなに慕われているのか君にはわかるかい？」

レレは首をかしげて少しだけ考え込むと無理だと判断して首を横に振る。

俺はギャラルホルンの最大のミスをここで指摘せざる終えないのだと思ってしまった。

「エリオンだからだよ……彼がセブンスターズのエリオン公だからだ。それだけなんだよ」

「それだけで？」

レレは驚愕の表情を浮かべて、信じられないような声をあげる。

たったそれだけのことでギャラルホルンは成り立っている。

「あのアリアンロッド艦隊にいる者のほとんどはエリオン公に認められたという認識だけであそこまで心酔しているんだよ。何も無い人間が何か実力を認められるということはうれしいものなのさ。それが組織では正直いきすぎているんだよ。それが貴族主義なんだ。キャリアという人もワインダーという人も元々そういう考えに反抗があつたんだろ？そういう反抗が火星支部の腐敗を増やしていたんだ」

「腐敗を……ですか」

「そう、彼はそれを理解していなかった。無理もない、考えたことも無いのさ。自分が慕われる理由を、自分の為に尽くしてくれる理由を。彼はそれを知らないままに自分勝手な正義を振り回しているんだその為に死んでいくことを妥当だと判断する。彼は誰かが死んでいくことを本当の意味で理解していない」

だからこそ彼が理解していればそもそもオルフェンズ達の戦いは起きなかったんだ。彼がそれをちゃんと理解してさえいれば、そしてあの坊ちゃんが分かっていたいけば。結局彼らはそのすべてを理解できていなかった。そして、あの坊ちゃんはいまだに理解できていない。

「ガエリオ・ボードウインはいまだにそれが理解できていない。彼が

結局のところ、周囲から信頼されたのは彼がボードウィンだからだ。それも理解出来ないからこそ坊ちゃんなのにな……」

「それが理解できないのが彼なのでしょう？ E D Mはその辺は少し曖昧ですよね……皆さんマハラジャさんを心酔しているわけじゃないよね？」

「そうかもしれない。それも仕方ない……とは思わないが、それが俺達だと思っからな。だって……!？」

大きくバギーが揺れるのを感じ取ると、俺は体を起こし周囲を見回して叫ぶ。

「何が起きた!？」

「攻撃です！後ろからバイクが近づいてくる」

俺が後ろを振り向くと確かにバギーに追いつくような速度で近づいてくるのを確認できた。顔を覆うような金属の仮面を着けているように見える。

「誰だ!?!知り合いか!？」

レレはミラーから後ろを確認しその姿を見た途端表情を引き締めた。バギーの速度を上げていく。

「エヴォ・エクスですよ。あなたがずっと気にしていた男です」

「あれが……!?!胡散臭い仮面だな」

声を聴いたことがある。戦ったことさえもある。でも……顔を見たことはたった一度もない。

でも、今はこうして生身で対峙している。

エクスはハンドガンをこちらに構え容赦なく引き金を引いた。

11

小惑星デルタを囲むように各勢力のモビルスーツ隊が出撃しようとしていた。現在小惑星デルタを占領下においてるのは木星帝国だった。

近づこうとするモビルスーツを迎撃していた。

移動要塞の指令室にワインダーが入ってくると、全員が気を引き締める。

「今週中に小惑星デルタを攻略する！全機全艦発進!!」



ワインダーがそう激を飛ばす、すると先陣を切ろうとレオの新型ジムが移動要塞のカタパルトデッキに姿を現した。

金色の装甲に大きな大剣『エクスカリバー』が指令室からでもよく分かる。そんなジムの前にサブフライト機が固定される。レオのジムがその上に四つん這いの形で乗り込み、出撃準備が完了する。

「レオ・クリスハイト！ジムⅡカスタム行きます！」

彼に続こうとジムが次々と出撃する中、ファントムブラッド隊の艦である『ヴァルハラ』がほかの同型艦と同じく出撃していく。そして、それに合わせるようにヴァルハラのカタパルトデッキから出撃体制に入っていく。

グシオンが右側のカタパルトデッキに、フラウロスが左側のカタパルトデッキにセットされる。

グシオンのコックピット内にイオリの透き通るような声が響く。

「ギャラルホルンからバエルとキマリスです！木星帝国同型機と交戦中！」

「出てきてるんだ……」

一気にやる気を起こす明楽は速く出撃しようと腰を低くしていち早く整える。足場が完全に固定される。

「グシオン・リベイク・リファイン！明楽アルトランド!!」

足場がスキーマの要領で放り出され、スラスタの出力を大きく上げながら上へと上がろうとする、しかし、案の定機体の重さ故下に落ちようとする機体を背中のサブフライトが受け止めて大きく飛翔していく。

やる気を見せる明楽をしり目にシノもひそかにやる気をたぎらせていく。

ノーマルスーツの手袋の感触を確かめつつ、同じように出撃体制を作る。

「六代目流星号！ノルバ・シノ！出るぜ！」

空中に放り出される瞬間に機体を戦闘機へと変形させる。すると、その隣をキャリーのキッシュが平行移動していく。

「派手な色ね」

「そつちこそ……銀色なんて派手じゃねえか」

キャリーのキツシユは装甲が派手な銀色をメインとしている。さらにその隣で移動しているレオからすればみんなどっこいどっこのような気がしてならない。

こう見ればグシオンの地味な茶色がさらに地味に見えてくる。

少しばかり移動すると目の前に戦闘光が見えてきた。

グシオンが勢いよく動き始め、ギャラルホルンのキマリスとバエルに向かつて突っ込んでいく。その姿をシノは少しだけ心配しながら見送るとキャリーが先行して木星帝国のキマリスとバエルに向かつていく。シノとレオも同じようにキャリーの方に向かつていく。

「三対二だけど不満は無いわよね？」

挑発するようにアルミリアとジャックに声をかける、ジャックはむしろ興奮しながら突っ込んでいく。ジャックのブルーレイは青い光を翼から放ちながらキャリーに向かつて突っ込んでいく。

「もちろんさー殺し合おうよ!!」

キャリーへの鋭い攻撃にレオが真っ先に反応して受け止める。レッドクイーンとキャリーのキツシユのランスが火花を散らしつつ距離を取り合って戦う。後ろからフラウロスが援護射撃をしながら突っ込んでいく。

明楽はガエリオとジュリエッタ相手に猛攻を繰り返しており、バトルアックスを振り回しながら二人を連携させまいと分断して戦っていた。

ガエリオのキマリスを蹴り飛ばし、ジュリエッタがランスで突き刺そうと奮起する。しかし、それを軽く受け止めジュリエッタのコックピットにアックスを叩きこもうとするが、それをガエリオが受け止める。

「絶対にお前は俺が倒す！」

12

バイクから何とか落としてしまおうとこちらもハンドガンで対抗しようとするが、しかし、落ちるわけもなくエクスは相も変わらず追いつこうとして来る。

すると、目の前に見慣れない廃墟が見えてきた。

「アレは!？」

「昔の都市跡です!!あそこにあるんですよ例の施設が!」

バギーは勢いよく廃墟へと突き進んでいき、エクスバイクもそれに食いつこうとしつこく追いかけてくる。

「例の施設まであとどのくらいなんだ!？」

「聞いていなかったのですか!?まだ少しかかりますよ」

バイクは直線の大きな通りをまっすぐ曲がることなく突き進んでいく。後ろからの攻撃がさらに激しさを増す中、エクスが俺達の近くまで近づいてくる。

「何が狙いだ!?今更何を隠そうとする?」

笑っているのか、それとも怒っているのか、もしかしたら焦っているのかもしれない。そんなエクスは感情をのぞかせないような低い声でこちらに返してきた。

「さあね。それを君が知る必要があるのかな?」

大きく揺れるバギーは攻撃を回避しようと左右に大きく揺れ、俺もハンドガンの引き金をためらいなく引く。

ふざけているようでそうでないようなセリフをはき、まるで誤魔化そうとしているようにすら思える。

「お前は何なんだ!?!何のために戦う。誰の為に戦おうとする!？」

尋ねた言葉にエクスは沈黙で返すだけかと思ったら予想もしないような答えを返した。

「ククナ様の為に……それが変わらない私の願いだ」

どこかで聞いたことのある名前だと自分の記憶領域を探ってみる。数秒だけ考えたとその答えはあっさり見つかった。

「確か……クレアの姉の名前だったか?なら!?!お前の本当の所属先は!?!」

「木星帝国……!?!ならどうして?」

大きな十字路を左に曲がると遠くにドーム型の施設が見えてきた。

俺は同じように十字路で左に曲がるエクスに向けてハンドガンの引き金を引きつつ尋ねる。

「あれがそうか？」

「ええ、あの施設が例の通信施設のはずですが……写真より少しだけ大きいような？」

確かに、だからこそ不安になったのだ。写真で見たときはこんなに大きくはなかった。

写真は同じドーム型でも二階建てぐらいだったが、あれはもっと大きい五階建てか六階建てぐらいだろう。

まだ、何かを情報局は隠しているのかもしれない。それが何なのかは分からないが、後ろから追いかけている以上探し回っている暇は無い。

「仕方がない！あの施設に入るしかないぞ」

「ですが……まだ十分以上はかかりますよ」

エクスは俺たちの状況を冷静に判断し不穏な言葉を投げかけてきた。

「君たちはあの施設を知ってここまで来たのではないのかな？あの研究所Eの事を知って……」

二人して小さな声で『E？』とつぶやいて見せるとエクスはぶつぶつと何かを呟きつつ、一人で思考をまとめ判断したのか、再びこちらに視線を向ける。

「そうか……情報局だな。あえて君をあそこに連れて行こうとしているということとは……ヤマジン・トーカの行方を見付けたという事か」

この男から意外な人物の名前を聞いた。

ヤマジン・トーカ。ラスタル・エリオンの腹心の一人と言ってもいい人物だったが、彼が亡くなる前に行方をくらませている。その行方を情報局が探し出した？

あの場所はヤマジン・トーカがかかわっているのか？

「君はヤマジン・トーカの行方を聞いているのかな？」

突然に投げつけられる質問にハンドガンを撃ちつつ答える。

「何も聞いていないさー！」

「なら教えよう。あそこはヤマジン・トーカが最後に訪れた場所さ……そして、亡くなった場所でもある」

「!?!」

驚きと共に疑問が脳裏をよぎった。

何故この男はそんなことを知っているのか?そもそもこいつとヤマジン・トーカに関係などあるのだろうか?

そう疑問に思っているのと急に視界が下がっていくのを感じた。

何が!?!と思つて前を向くと地下駐車場へ向けて坂を下っている最中だった。しかし、エクスはついて来ようとしなない。

「ついてきませんね」

「気を付けていた方がいいだろう」

ゆっくり駐車場の中へと入っていくとそのまま適当なところでバギーを止めた。

ドアを開け、二人してハンドガンを構えながらゆっくりと駐車場から上へとつながらる場所へと歩き出す。車がない閑散とした空間に歩く二人の靴音が寂しく響く。

「ただの通信施設じゃありませんよね?」

「ああ、なんかの研究施設の可能性もあるな。しかし、テマルの奴……!ここがそうじゃないと知っていたな?」

あと少しでたどり着けると思つて歩く速度を速めようとするがその途端にレレが悲鳴をあげながらこけてしまう。

「ちよつと……何なの?」

足元が暗いせいだろう足元に何かがあるとは気が付かなかった。俺はポケットの中に入れていたライトをレレの足元へと向けると……そこには白骨が目立たないような黒目のライダースーツを着ていた。

「な!?!白骨化した遺体?誰のですか!?!」

レレは怯えた様子で俺の後ろに飛ぶように逃げていく。怯えた声を放ちつつ虚勢を張る気持ちすらなくなつてしまったのだろう。さすがの俺もこんなところで白骨を見ることになるとは思わなかった。すると、白骨のポケットから何か落ちそうになっていることに気が付いた。

「ちよつと!?!取るつもりですか?」

後ろから信じられないみたいな奇声をあげられるこの状況に睨むように返した。

「仕方ないだろ!?放っておくわけにもいかないだろ?」

そういつてポケットのそれを抜き出し中身を調べ始める。様々なカードが姿を現すと、最後に覚悟していた物が姿を現した。

「ヤマジン・トーカの身分証明書」

「だったら……この遺体は!？」

レレが吐き出しそうになる気持ちをおさえるように視線を逸らす。しかし、俺の視線がいまだにこの遺体に注目している。うつ伏せになった遺体を仰向けに変えると、左胸の辺りに小さな穴と出血の後が見えた。床一面に広がっている血痕の後から考えても心臓を撃たれてしまったのは間違いのない真実だろう。

「死因は銃弾で心臓を撃ち抜かれたせいだな。ということは他殺だ。自殺するのならこめかみに銃を当てるだろうし……」

なら殺したのは……あの男か？

俺はそれ以上遺体を探ろうとはせず、邪魔にならないように端に寄せておくと心の中で「後で回収するから勘弁してくれ」とだけ告げてその場を後にした。

それ以上に確認しておくべき事柄がある。

怯えるレレをわきに抱えながら俺は駐車場にある警備室へと足を踏み込み、レレを管理室の椅子に座らせる。

「二年前の監視カメラのデータが欲しい」

「分かっていますよ……」

あまり事件当時の映像を見ることに抵抗があるらしいが、今はそんな私情をはさんでいる場合ではないと肝を引き締めつつ覚悟して映像を探り出す。

約二年前の監視カメラの映像を移していると、一階からエレベーターに乗り込むヤマジン・トーカが確認を取れた。黒いライダースーツを着込み、エレベーターの中で何かスマホのようなものに外部デバイスを差し込んで確認しているのを見て取れた。

「音量を上げられないのか?」

『…………これがラストルが欲しがっていた『プロジェクトE』っていう研究の成果ね。まさかこんな辺境の地に最後のデータが残っているとは思わなかったわ。全くうちの情報局を使用できないからって私を頼るんだもの』

鬱陶しそうというより少しだけ嬉しそうにしているのはおそらく自分を頼ってもらえたからだろう。彼女はそのデバイスを自分の腰のポーチの中に入れてそのまま外へと出ていく。地下駐車場に入ると途端銃声が響き、彼女はうつ伏せで倒れてしまった。

突然のことで何が起きたのか全く理解できずにいると俺の予想を超えた人物がそこには姿を現した。

俺はてつきりエヴォ・エクスが姿を現すのかと思っていたが、そこに現れたのは『アルミリア・ファリド』で間違いはないだろう。紫色の髪に幼く見える顔立ちは間違えるはずの無い彼女だという証明になる。それに続くように青色の若い男も後から続きポーチの中にある外部デバイスとスマフォを取り出してその場で回収されてしまう。「彼女の死は木星帝国が仕組んだもの……!?!」

すると、ジャックと思わしき青髪の人物に呼ばれるように仮面を着けた男が歩いてきた。その姿は先ほど目撃した『エヴォ・エクス』と全く同じだ。

「決定的な証拠だな。エヴォ・エクスは木星帝国がギャラルホルンに向けた刺客だろうな……目的が見えてこないが」

その後も彼女が見つけたデバイスの中身を監視カメラから探そうとするが、結局彼女が六階の一番奥にある研究室だという事しか分からなかった。

「直接赴くしかないという事か……仕方ない、さっきの映像を録画しておいてくれ」

レレはポーチの中から小さな外部デバイスを取り出し、差し込んで記録映像をそのまま録画してそれを俺に渡す。

「あなたがもっていた方が安全だと思えますよ」

俺はそれを受け取りつつ自分のポーチの中へと入れる。

「さて……六階を目指したいが……」

そう思つてエレベーター前で立ち止まりボタンを押してみるが無反応という結果で終わる。その隣に存在する階段という場所へのドアをにらみつける。

めんどくせえなあ。

しかも、この階段は地下一階までしかつながつておらず、さらにその上に行こうと思えば他の手段を探さなければならぬのか……。

「めんどくせえ〜」

「口にしないでください。私も同じ気持ちなんですから」

レレから見下すような視線を受けつつ、階段へのドアを開ける。埃をかぶった階段をゆつくり登っていき、一階のドアに手を掛けつつ俺は開ける前にレレの方を見る。レレはハンドガンを構える。

俺自身意識をドアの外へと向け、ゆつくりとドアを開ける。外に誰もいないことを確認すると、一気にドアを開く。閑散とした長いだけの廊下と隣にはエレベーターが鎮座しているだけ。

二人の足音が廊下を響かせ、明るい場所へと足を進める。物陰に隠れるように大きなロビーへと視線を向け、俺達の警戒をまるで無視するようにスピーカーから声が響く。

『さあ……話そうじゃないかオルフェンズ達の不幸とそれを促した愚かな道化の物語をね』

俺達はかつての真実の手前まで近づいていた。



## 仕組まれていた事Ⅳ

13

愚かな道化という言葉が誰をさしているのかはたいい想像がっていたが、俺はそんな話を聞きにここまで来たわけではない。腹を括って二人そろって駆け出していきエスカレーターのそばまで近づくと三階からハンドガンの弾丸が足元で火花を散らす。

「三階にいるのか？」

「上からの射撃はかなり危険です。こちらは別ルートで行きましょう」

レレの提案を呑もうとわずくが上から余計な声が聞こえてくる。「ちなみに上に来なければそのエスカレーターを昇るしかないよ。他には階段すらない上にエレベーター電源を落としているからね」

お前が落としたんだろつと言いたい気持ちグツと抑えてハンドガンを握りしめたまま上の方に警戒を高める。

「俺が囷になるから君はそのまま……」

「待ってください!!囷なら私の方が上です!!」

俺は後ろに隠れているレレに強めに「駄目だ!」と怒鳴りつけてしまった。俺はすぐに正気に戻り冷静になったふりをして上を警戒する。

「駄目だ。あいつは覚醒者である程度なら相手の行動を読むことができる。なら同じ覚醒者の俺の方が囷としては有利だ」

「……納得できません。だったら囷は私で十分なはずです。あなたは彼に唯一抵抗することができなのでしょう?だったら……!!」

レレはさらに前のめりになってくらくらいついてくるのを俺はイライラしながら返した。

「だから……!君は死んでもいいっていうのか!」

「そうです!!作戦の成功確率を高めるためにはそうした方がいいはずです!!」

彼女の言葉に俺は怒りを隠そうとせず再び視線を彼女の方へと向ける。

「駄目だ！俺がいる限り仲間を見殺しには絶対にしない。そういうのはごめんだ」

サイガやオルガを思い出しながら俺は再び上に警戒を高める。その中レレの落ち着いた声が聞こえてきた。

「どうして……そんなに……？」

「もう……誰かを目の前で失うのは嫌だからだ。そういうのは十分だ。俺が目の前で戦っている間は見殺しはもうしない。死ぬとわかっていて見殺しにするのは……卑怯な気がする」

俺が黙ってしまうとレレはうつむいてしまう。俺は銃弾が着弾した場所が気になってしまう。

エスカレーターを昇りながら隠れられるか？

「もしかして……」

俺は右腕を一瞬だけ出してエクスの攻撃角度を探ると銃弾が俺の手をかすめそうになる。角度を頭の中で計算し見つめた場所はエスカレーターから多少離れた柱だった。

「隠れながらエスカレーターを昇るぞ」

「ですが……」

「ここは五階までは突き抜けになっていて周囲はガラス張りになっている。エスカレーターは右から左へとしか伸びていない。登りながら相手を撃つことは不可能だろう。あの柱から出れば撃たれる可能性がある。それにあいつはもう気が付いているようだ。俺のハンドガンの貫通力が異様に高いことに。多分カーチェイス中に気が付いたんだろうな。だから不用意に柱から出れば逆に撃たれるということだ。俺が後からついてくるから、君が先に上ってくれ」

レレは少しだけ考えると「分かりました」っと答えて様子を見て駆け出していく。彼女がハンドガン（連射性能を高めたためほとんどマシンガンのようになっているが）を連射しながらエスカレーターを駆けだし、俺もハンドガンで牽制をしながら続いていく。

エクスは俺を倒すのを無理だと判断したのかエスカレーターに向かって駆け出す。

俺達は二階にエクスは四階に辿り着いたところで互いに柱に隠れ

てお互いをけん制し合う。

エクスはこちらに姿を現す、俺はエクスを撃とうと照準を向けようとするがエクスから放たれた言葉に俺は声を失ってしまった。

「では不幸なオルフェンズの話をしようか。君がオルガと二年間で何をしていたのか……君がラスタルを捕まえるまでにどういう経緯があるのかを……ね。それからいいだろう愚かな道化であるガエリオのお話は」

なんで……そのことを？

レレが驚きながらこちらを見つめるが俺はその視線に答えることができず。少しだけ俯いてしまう。

「君はオルガからマクギリス・ファリドの作戦を事前に聞かされていた為にあの作戦が間に合ったという事だろう？」

確かに俺はあの時オルガから作戦内容を聞かされていたからある程度の経緯は知っていたし、だからこそ俺達は罠を仕掛けることができた。しかし、情報局からマハラジャから聞かれた時も俺は幹部クラスの黙秘権を行使したし、そのせいで俺は一時期監視が付いていた時期もある。

結果からすれば作戦が成功したし、結果からすればギャラルホルンの監視権を手に入れたおかげで監視は無くなったが、俺は心に傷を負うことになった。

だから語りたくはない。嫌、語らないと決めた。

俺は誰にも語らない。

俺は話の中身を変えるためにある人物へとシフトする。

「俺としてはアイン・ダルトンの事をお前達から聞きたいな。クレアから聞いたプロジェクトEの中身と一緒に……」

エクスは黙ってしまい少しだけ俯くと嫌がらせのように俺に向けて「攻撃しないでくれ」と指示を出す。レレも黙ってうなずきできるだけここで情報を聞き出そうとする。

「アイン・ダルトンはダルトン夫妻の子ではないと想定した場合、ではアイン・ダルトンは誰の子なのかということになる。ここで考えるべ

きはプロジェクトEの内容だが、クレアは人を作るための計画だったと聞いていたが、俺はそこに別の理由を考えた」

クレアと話していた時のことを思い出す。

14

俺は食堂で食器洗いという格闘戦を繰り広げるクレアの前に姿を現しつつ目的であるある出来事を探ねる。

「なあ、聞きたいことがあるんだが……」

「なら手伝って」

俺は聞き間違えたのかと聞き耳を立ててもう一度聞きなおす。

「ワンモアプリーズ」

「なら手伝って」

一言一句全く同じ言葉が続き、俺は頭の中で葛藤してしまふ。ここで逃げてしまふか、手伝って好きな情報を聞き出すか。数秒間だけ考え込むと葛藤の結果俺が出した答えは手伝うという事だった。

三十分だけ手伝うと俺はようやく話を聞ける体制を整えた。

クレアは顔を赤らめながらやけに胸元を開いてアプローチをしているように見えるがきつと気のせいだろう。

「き、聞きたいことって私の好みとか……?」

「いや、木星帝国がなんか計画とか無いかな? つとか思ってたな」

クレアは心底がっかりしたと言わんばかりに落ち込むとしばらくという視線をこちらに向ける。

「分かってはいましたよ……あなたが天然の女たらしなのでは? という疑問があることは……今までは特に気にしませんでしたし。でも、実際行為して好意を持つとあなたの誰に対しても同じような態度をとるんですもん」

「なんか言ったか?」

小声でつぶやくので聞き取れないが、こちらをジト目で見ながら何かを呟く。

普段はお互いに心を覗かないようにと集中しているので何を考えているのかは分からない。

何か不満があるのだろうか?

「で？何を聞きたいのですか？」

不満たつぷりの声を放ちながらこちらの問いを待っているようだ。俺は何か間違ったことをしたのか全く理解できない。

「？まあいいや。さつきも言ったけど何か知らないか？」

クレアは真剣に考え込むと口に出した名前が『プロジェクトE』という名前だった。

「プロジェクトEはおねえ様が直接携わっている計画で、確か……………人類の進化を探る計画だったかな？」

「それだけ？」

「分かりませんが……………確かそれ以外にも人工人間も計画内に入っていたはずです」

人工人間か……………それがアインとどうつながってくるのかが気になるところだが……………つと考え込むとクレアは顔を一気に近づけてくる。

俺が「うお!？」と一気に距離を取ろうとするが、クレアはさらに一歩距離を詰めてくる。

何なんだ？なんだこの状況は？なんでこんなにアプローチを駆けてくるんだ？

「やつと二人つきりになれたんですもん。ここでアプローチを仕掛けないと……………(やつと見つけた別の覚醒者。それに……………こんなに気になる相手は初めてですから……………もう少し仲良くなりたいたいというか……………)」

なんか心の声が聞こえた気がする。気のせいだと思うけど。

一歩一歩逃げる俺と追いかけるクレア。

誰か助けてくれよ……………!

「誰かが来たかどうかどうするんだ？」

「今は実働部隊はデルタ海域で戦闘中、ほかも仕事の最中で近づくかわい。それに昼ご飯が終わったばかりで誰も食堂には来ないでしょうし」

「いや……………でも……………!」

兄さん来い！兄さん来い！兄さん来い！

すると俺の願いを聞いたのか鼻歌交じりに部屋に入ってきたのは俺の兄事ビスケット・グリフォンがダボ付いた私服姿で現れた。

「♪」

（誰か来た！）

小声で指摘するとクレアは心底残念そうにしながら立ち上がりビスケットの方を向いて笑顔を向ける。

「あら、ビスケットさん。なにか御用ですか？」

「あ、クレアさんいたんです……か？なんか……機嫌が悪そうに見えるんですけど」

怯えたように体を軽く震わせる兄はその場から移動できそうになり。俺はこそこそと移動しながら食堂から逃げ出していった。

15

「人工人間が計画内に含まれているということは、アイン・ダルトンの正体を推測することはできる」

俺がそこまで言うとうまくエクスは口を開いた。まるで、笑っているかのよう。

「聞きたいな。君が考えるアイン・ダルトンの正体を……」

俺は間を閉けつつ意を決して言葉を投げかける。

「アイン・ダルトンは木星帝国が作った人間の感情や脳の神経の電気信号メカニズムの解析と戦闘能力を完成させるための存在」

俺の答えをどうとらえたのかは分からないが、エクスはあえて黙りこむ。俺は駆け出すべきかどうかで悩むが下手に撃たれてはたまらないとあきらめてその場に残る。

「アイン・ダルトンを使った阿頼耶識システム開発がなぜあれほど早く終わったのか、それは元々アイン・ダルトンには阿頼耶識システムと似たシステムが搭載されていたからだと考えれば把握できる」

レレはその場で「なるほど……それであんなに早く」とつぶやいている。

そう、そう考えれば話は速かった。

ただ、これはここについてから想像した話だが、『研究所E』という名前を聞いたとき俺が真っ先に思い出したのが『プロジェクトE』

だったからだ。

人類の進化のメカニズムと人工人間を使った計画。

そこにアイン・ダルトンを繋げた結果ともいえる。

「お前達は人工人間を作る上である壁にぶち当たってしまったんだ」

「ある壁とは？」

レレの疑問に俺はどう答えたらいいものかどうかを悩んでしまい、一瞬だけ間を開けるとストレートに告げた。

「要するに人工人間を作るにはいくつかの過程が必要にある。まずは遺伝子問題、これは簡単にクリアできるだろう。問題は脳や記憶だ。人間が使うものをそのままコピーしたのでは問題がある。何故かはわかるか？」

レレは少しだけ考え込むと自分なりの答えを提示した。

「多分……ですが、記憶をコピーした場合は同じ記憶、人格を持った人間が増えることになりますよね……その場合は人格が崩壊してしまいう？」

「その通り、人間は自分と同じ人間、同じ経験をしている人間がいる場合は人格を維持できない。自分がコピーだということを意識してしまふと人格が崩壊してしまう。なぜかというところ……」

話の続きをエクスの声が遮った。

「それは人間の知能の高さゆえだ。人間が自分がコピーだと知った時それを受け入れることができない。かつてこんな実験があった。十人の遺伝子から作ったコピーを各十人とその分だけの記憶のコピーを作って入れてみたところコピーされた人間の人格はものの数分で崩壊し心肺停止まで行ってしまった。結局のところ人間がコピー人間を作っても一から育てる必要があるということだ」

その通り。だからこそ人間のクローンは禁止されたし、今までそれが破られたことはそうない。問題はそこにどうプロジェクトEがかかわってきて、アイン・ダルトンの秘密はなんなのかということだ。

そのままエクスは黙ってしまった。

「俺はそこから考えた。問題は基本人格を数種類揃えるうえで必要な脳内データを取る必要がある。しかし、その為にはリアルタイムでの

電気信号の行き来のデータが必要というわけだ。だからこそ……いや、今はそういう話じゃないな。エクス。お前の話を聞こうか」

エクスは再び歩き出し、まっすぐエスカレーターへと移動する。

「ガエリオ・ボードウインの存在は我々にとって都合のいいものだった。正義を信じ、仲間を信じ、友人を信じる。愚かなほど信じるその姿勢は我々にとってとても都合のいいものだった。だからこそアイン・ダルトンを送ることで彼の人生をコントロールした。そして、奪うことで彼は道を踏み外した」

エスカレーターを昇っていくあいつに俺は走りながら追いかけていく。しかし、追いつける気配すらない。しかし、そんな中エクスは唐突に俺達に語り掛けた。

「ところで我々にとって邪魔な存在もあつた。どれかわかるかな？」

思考を走らせ、記憶を巡らせる。そして、たどり着いた結論を口に出した。

「鉄華団？お前たちは鉄華団崩壊までも関係しているのか？」

アイン・ダルトンの件が関係しているならガエリオ・ボードウインの件も関係しているだろうと呼んでいたが、鉄華団の崩壊までもこいつらがかかわっているのか!?

「鉄華団がティワズと組む前まではよかつた。戦果を挙げていくことはこちらからすれば面白くない。ティワズは木星の複合企業だ。いずれはこちらの存在に感づく可能性があつた。しかし、ただ滅ぼすのではなく乗っ取ることが最低の目的だった。しかし、そんなときに面倒な戦力が入ってきた。こちらからすればジャスレイを使った乗っ取り作戦に支障が出てしまった」

ジャスレイ……か、もしかしたらという疑問が存在したが……ジャスレイは鉄華団を滅ぼした後ティワズを乗っ取ろうとしていた。それを元々計画していたのか。

「だからこそ我々は鉄華団を滅ぼすためにガエリオをぶつける必要があつた。その為にアイン・ダルトンの憎しみを利用した。しかし、失敗した」

レレは話の内容が見えてこない。しかし、俺には話の経緯を別の視



点で知っているためある推測がたった。

「お前はジャスレイに何かをそそのかしたのか？」

「そういう事さ。彼に『鉄華団がこのまま出世していけば君の立場は危険なのではないのかな？』つとね。そうしたら彼はみるみる焦っていった。イオクを持ち出すまでは予想外だったが、結果からしてモビルアーマーのデータを取れたのは運が良かったな。しかし、それだけでは不可能だった。だからマクギリス・ファリドを使うことで鉄華団を崩壊させつつギャラルホルンに刺客を送り込む。それが第一段階だった。ギャラルホルンが組織の再編成に追い込まれることは予想できた。ファリド家の血脈が途絶えれば結果からすればセブンスターズ制が廃止される、そうすれば再編せざる終えなくなる。そして、その隙に私が侵入した」

おおよそ想定していた内容だった。レレは終始信じられないという風に表情を変えていき、今は完全に青ざめている。

分からないでもない。彼女はこの前まではギャラルホルンに所属していたのだ。自分が元々所属していた組織の現状が彼らの思いのままだということは信じられないだろう。

「鉄華団がマクギリスと手を組むというのはどこから手に入れた？」

俺のささやかな疑問に答えながら彼は五階から六階へのエスカレーターの入りに立ち尽くす。

「別に……しいて言うならギャラルホルンからだというしかないかな……さて！この先が真実の入り口だ。私が知っている鉄華団崩壊の真実と愚かな道化の話の続き。それはこの先で話そう。この研究室最大の秘密へと」

そういつて六階へと消えていく彼の姿。六階だけは吹き抜けにはなっておらず。ワンフロアへのある意味唯一の出入り口がエスカレーターなのだが……問題が二つ。

そう思っておれたちは六階へのエスカレーターの近くまで走っていき一度立ち止まる。先ほどから黙っているレレを置いて俺は監視カメラに視線を向ける。

やはり動いている。誰かいるんだ、おかしいと思った。

地下駐車場での部屋はおそらくサブコントロールルームだ。実際エレベーターの操作はできなかったし、だとするならメインコントロールルームが存在するはずだ。しかし、一階から五階までそれらしい部屋には行きあたらなかった。っていうか有ったら侵入している。それに監視カメラが俺たちが近づいてくるたびに動いていることは知っていた。ということは……誰かが監視カメラからモニタリングしているということだ。

そしてそれは六階しかない。

そう思考しているとレレが一人呟きながら歩き出す。

「私が囿になる間にあなたは情報を手に入れてください」

俺はすぐさまにレレの右腕をつかんで引き留める。一言「ふざけるな」と言おうと思ったが、振り返る彼女の瞳は涙でいっぱいだった。俺には彼女の涙の理由が分からない。先ほどまでの話にどんな……

「離してください。あなたには関係の無いことです。元ギャラルホルンの人間が犠牲になる。それ以上の理由は無いでしょう?」

俺はまっすぐ彼女の瞳を見つめその言葉を拒否する。

「それはだめだ。俺と君は既に仲間だ。俺は仲間を見殺しにしない、それは君に言っただろ?」

「それはあなたの理由です。私は違う。キャリー様が所属したギャラルホルンがそんな理由で潰されそうになっている。キャリー様どころか、彼らは私達全員をもてあそんだ。私は!!ギャラルホルン所属に誇りを持っていました……なのに!」

「それでも……俺は君に死んでほしくない」

レレは怒り半分自分への憤り半分の瞳を込めてこちらをにらむ。

「だったら!!私達を救ってくださいよ!!ギャラルホルンを!!」

俺の胸元を強く叩き涙を流し続ける彼女を俺は抱きしめることができずにいた。どうしたらいいのかわからずただひたすら彼女に殴られるままになっていた。

「俺はギャラルホルンを救いたいとは思わない。でも……鉄華団と同じなんだ。今更どうしようもない。だったら生き残る者達は死んでいった者達の方まで戦うしかないんだ。俺はこれからもそうする。」

それがあの日オルガを救えなかった俺なりの償いなんだ」

レレは叩くのをやめてゆっくり顔をあげる。今度は自分の額を俺の胸元に当てながら彼女は小さく、はつきりとつぶやいた。

「私はキャリー様の為に戦う。あなたはそれを愚かだと言いますか？」

「誰かの為にという感情を愚かだと思わない……しかし、相手を想うことと相手に尽くすことは全く違う。君はどっちなんだ？」

「私はキャリー様を想っています。キャリー様が道をたがえればそれを正してあげたいと思うほどに」

「なら間違っていない。君は間違えてない」

レレは涙を拭きもう一度俺から背を向ける。その表情は少しだけ笑っているようにも見えた。

## 仕組まれていた事V

16

エスカレーターを二人で昇る目の前には建物の壁が見える。最上階は壁による区切りが無く、広大な空間に柱と人が一人余裕で入るような筒が十基近く設置されている。そして、俺達のいる場所から反対側にメインコントロール装置が置かれている。その場所に仮面を着けたエクスが立っており、金髪の女性が座っていた。

クレアと同じ綺麗な金髪だが、表情や顔つきはクレアと違ってどこか女王をおわせるような感じがする。おそらく……彼女こそが……

「初めましてサブレ・グリフォン君。妹のクレアがお世話になってるわね。私の名前はククナと申します。今後お見知りおきを……その小さな女の子もね」

無邪気ととれるような笑顔でありながらどこか意味を含ませている。小さい女の子という言葉にレレが軽く反応して見せる。しかし、そこは大人すぐに飲み込んでにらみつける。

俺が銃をククナに向けるがその瞬間に俺達とククナ達との間に壁が存在すると理解した。透明な壁が空間を区切っている。

「今回はあなたと殺し合うために来たのでは無いのよ。だから安心してクレアを殺すつもりは無いから。皇帝はともかく、私はあの子の命には価値があると思っっているの。皇帝があの子をもう娘だと思っっていないようだし。私はあの子のお陰であなたと話ができているわけだし……ゲイナーにも感謝しないとね」

ククナが言う言葉のどこまでを信用していいのかは分からないが、今のところクレアの一件は無視してもいいだろう。問題は木星帝国が何を企んでいて、彼女個人がどういう経緯をもってこの地に居るのか？そして……ここは何なのかということだ。

「警戒しなくても……ここが何なのか教えてあげるわ。私はあなたにある程度話しておきたいと思ったの。私の目的のためにも……ね」

俺は打ち合いが無駄だと理解し銃を下ろす。

ククナは微笑みを絶やさず口を開く。

「私達の目的はすでにある程度達成しているのよ。あなたはおかしいと思わなかった？ギャラルホルンとEDM相手に一歩も引かなかった私達がアフリカ戦線に介入しなかったのか？デルタ海域戦で防衛線に終始しているのか？あなたが気づいていないとは言わせないわよ」

笑顔の奥にあるすごみにレレが少しだけ怖気づきそうになる。

俺自身はその話には既に気が付いていたし、兄さんやキャリー達も気が付いていた。木星帝国が時間を稼いでいる理由は何だろうか。

脳内で考えめぐらせる。そもそもアフリカ戦線の際にエヴォ・エクスが介入しなかったのはなぜだ？あいつがガエリオ・ボードウィンに首輪をしっかりとつけていればあんなことにはならず済んだかもしれないのに。いや……あの戦いの際にエクスが介入できなかったとしたら？

そうしてある結果に辿り着いた俺はエクスとククナを強くにらみつける。

「お前達!!ロロ・デブリンを殺害してギャラルホルンの戦力を手に入れよう?!」

「素晴らしいわね。その通り」

ククナが微笑み、エクスが間に入ってきた。

「あの時の私の仕事はロロ・デブリンの始末とギャラルホルン内にEDMと木星帝国には勝てないという認識を植え付けることだった。その上でアフリカ戦線を引き起こし、元アリアンロッド艦隊の悪事を他のギャラルホルンのメンバーに認識させることだった。そうすることで憎しみを集め、同時に引き込みやすくした」

「なら、お前がラスタル・エリオンの後継者にロロ・デブリンという軍人気質の強い人間を選んだのはギャラルホルン内の腐敗を暴走させる片手間に始末した後につとりやすくするためか？」

「その通り、セブンスターズのメンバーが引き継げば乗っ取りに時間がかかるからね。彼の方が処理後も乗っ取りやすいうえに、そのかしやすかった。ああいう愚かな人間の方がちようどいい」

俺は睨むことをやめない一方で話をソフトさせる。

「木星帝国の目的は分かった。でも、お前の……ククナの目的はまだだよな？お前はさつき皇帝の事なんてどうでもいいみたいな言い方をした。ということはお前は皇帝に従うふりをして別の何かを企んでいるということだ」

ククナは悪そうな微笑みを浮かべ、まっすぐこちらの瞳を見つめる。

「そう、皇帝の目的なんてどうでもいい。私個人の目的は別にあるの。私は人間の進化に興味があるの……」

どこか切ない表情を浮かべる彼女を俺はクレアが告げた言葉を重ねて感じ取る。

なんでもできるのに、完璧には程遠い場所にいる人。

それが感が見えた気がする。彼女は……

「あんたは俺やクレアとは違って進化していかないんだな」

進化できないからこそ進化の事を知りたい。それが彼女の願いなのだろう。

ククナは一瞬だけ冷たい目をしてこちらを見た気がした。

「私達の間では進化人の事を『覚醒者』と呼んでいるの。時代によって『ニュータイプ』や『イノベーター』などの呼び方はあるけど、進化した人類のプロトタイプだと認識してもらえばいいわ。そして、ここはそれを研究するために作られた厄祭戦前の研究施設。その最後の一つ。それがこの場所」

もう一度周囲にある大きな筒を丁寧に眺める。人が入るには十分な大きさで外にはそれを操作するための操作盤が設置されている。要するにこの筒は人工子宮か培養器というわけだ。

「進化人類を作る片手間に彼らは人工人間の創造にもかかわっていた。『人工人間』。要するに『人工的に作られた人間』という意味。あなたは知っているわよね？」

ククナからそう問われてしまうと俺は黙ってうなづく。レレもある程度知識としては仕入れているらしく黙ってうなづく。

「受精卵の段階で遺伝子なんかを組み替えて造らる人間だろ？『強化

人間』や『人造人間』とも違う存在だな」

「そうね、強化人間は『薬品なんかを使つて人間をそのまま強化した人間』で人造人間は『人間に機械などを埋め込むことで強化や補強を行った人間』大まかには強化した人間だけど、もつともの違いは薬品による強化は人格や体に悪影響を与える為に短命になってしまう点。それを克服したのが人造人間というわけよ。しかし、この二つにはある問題があった」

それ以上は言わなくても十分わかつていた。

「ある程度成長している人間が必要という事だろ？いくら精神を操れなくても完全にコントロールできるわけじゃない。だから必要だったわけだ……人工人間が」

人工人間は受精卵の段階で手を加える為にある程度好みに作る事ができる。

「厄祭戦が始まると人工人間を前線に出すために研究資金に金が費やされるようになった。けれど、実戦に出せるほどの人格や戦闘能力を身につけるには至らなかつた。だから代わりにAIを使った戦力を実践投入した」

それがモバイルアーマーというわけだ。ということは、元々モバイルアーマーには人工人間を乗せるつもりだったというわけだ。

そして、そこまで詳しく知っているという事は……

「お前たちは研究を引き継いで最近まで進めていたというわけだ」

「その通り。AIの研究に危機感を覚えていた研究者が逃げ場所として求めたのが木星というわけ。そして、私達は最近まで研究を続けていた。私が現在の研究統括者」

クレアがそれっぽいことを言っていたが、そういう事だったとは彼女は研究を引き継いで完成させたというわけだ。完成型のプロトタイプが完成したというわけだ。それが……

「量産型人工人間のプロトタイプが『アイン・ダルトン』というわけよ」

レレが小さな声で「やはり……そういう事でしたか」とつぶやき、俺は全て腑に落ちた。

「じゃあ、アイン・ダルトンには阿頼耶識に似た器官が元々作られてい

たわけだ」

「そうよ。アイン・ダルトンの目的は戦闘データの収集と感情バイタルとそこから生じる電気信号の波長を知ること。おかげさまでいいデータが取れたわ」

鉄華団はその過程の中で滅ぼされたというわけだ。彼らは鉄華団からとれるデータを収集するために彼らを犠牲にしたのだ。そして……今回は元アリアンロッド艦隊を犠牲にしようとしている。

レレはひときわ厳しくククナ達を睨みつけククナは涼しそうにしている。

俺はエクスの方をじつと見つめ、エクスもこちらを見つめているように見えてしまう。エクスは人工人間なのだろうか？そう考えているとククナが不意に立ち上がり、両サイドに存在するエレベーターのうち左側へと歩いていく。よく見ると右側はこちらから入れるようになっていいる。

「では、あなたに会えてよかったわ。いろいろ分かったこともあったし……」

「???なんの話だ?」

俺達も警戒しながら右側のエレベーターの方に移動すると、いつの間にかエレベーターの電源が入っている。

「安心してあなたは私にとつても大切な人だから殺したりしないわ。また会いましょう」

エレベーターの中に入っていくククナは最後までいい笑顔で返してき、俺は先にレレをエレベーターの中に入れる。続いて俺が入ろうとすると俺は初めてエクスに声を掛けられた。

「君の誤解を解いておこう。私は人工人間ではないよ」

俺は驚きのあまり振り返るとそこにはエクスが変わらぬ仮面姿をこちらに見せていた。

「近いうちに君は私の答えに辿り着くだろう。その時は、君の前でこの仮面を脱ぐことを誓おう」

「なら、俺は実力でお前から仮面を取ってやるよ」

両者の間にある因縁はある意味ここから始まったのかもしれない。



いつ終わるのかも今は分からない因縁だが、だけど、これだけは言える。

俺はエクスと言う通り、近いうちに彼の正体を知ることになった。俺が彼の正体を知るのはこの後すぐに行われたアルン防衛戦の時だった。

17

ククナは微笑みながらエレベーターを降りていく。内心機嫌がともよく、今回の話し合いに彼女は有意義な何かを感じ取れた。結果からすれば彼が『選別者』ということが把握できたし、ゲイナーが地球に来なかったということが分かった。ゲイナーのおおよその居場所には見当をつけた。

「あなたと同じ選別者だけはあるわね。中々面白かったわ。有意義な時間を過ごさせてもらった。あなたはどうか？」

「そうですね。早く彼と戦ってみたいところです」

二人はエレベーターを降りて外に用意しておいた車に乗り込もうと移動する。

「大丈夫よ、もう一度追い詰めてみようと思うから。彼が仲間を守ろうと必死になっているのは分かったから、もう一度周囲を追い詰めれば確実に『ガンダムエデン』で出てくると思うから」

ククナが車のドアをに手を伸ばした瞬間にエクスの動きがぴたりと止まった。地中海の方を見つめて何かを感じ取る。ククナが意味ありげな表情を浮かべつつ同じように立ち止まる。

「何を感じ取ったの？」

「強力な脳波を感じ取った。あれは……かなり危険だ」

「じゃあ、止めたら？」

エクスは右腕を伸ばし遠い空へと向けるとサイコショックを放つ。同時にサブレとクレアも同じ方向へ向けてサイコショックを放つ。

明楽・アルトランドの方に向けて。

18

デルタ海戦が勃発してから半年が過ぎている頃、いい加減木星帝国所属であるアルミリアとジャックは不満を爆発させそうになってい

た。あくまでも防衛戦に専念し時間を稼ぐように。という命令を守りつつの防衛戦、特にガエリオ・ボードウインは殺してはいけないという命令を守らねばならないアルミアからすれば復讐対象であるガエリオはまだ殺すなという命令にストレスを抱えていた。

アルミアとジャックは三機のモビルスーツと互角に戦いながら確実に防衛戦に集中していた。

ゆえに問題は明楽の方でもあった。

これから起きることを想えば彼らはガエリオを守る為に動くべきだったのだろうが、この時だけは自分を守るための生存本能が優先された。

明楽がジュリエッタのバエルに向けて降ろされたバトルアックスの攻撃をガエリオが受け止めると、ガエリオのキマリスの左腕が吹き飛んでしまう。

明楽の脳内には殺意が刃になって渦巻いていた。目の前に死なせてしまったアフリカの人達。傷つき悲しみにあふれている彼を思えば思うほどジュリエッタやガエリオに向けた殺意が大きくなっていった。

それ故にグシオンに搭載されていたサイコフレームが明楽の脳波をダイレクトに周囲に振りまく、振りまかれた殺意は周囲の人間に危険だと判断させるには十分だった。

シノやキャリー達ですら明楽の危険性に撤退を始める。しかし、ガエリオだけはジュリエッタを庇った状況で撤退が遅れる。明楽は暴走したままガエリオを殺すために近づいていく。

サブレたちのサイコシヨックはギリギリ間に合わず、ガエリオに伸びていく右腕はまるで死神が死へいざなう腕に見える。

伸びたグシオンの右腕に庇うようにジュリエッタが割って入った。決して理解していたわけじゃない。ただ、目の前に死ぬかもしれないと思った瞬間彼女の体は素直に動き、ガエリオを庇った。

グシオンの右腕がバエルの体を捉えるとジュリエッタの心は一瞬でパンクした。

落ちていくジュリエッタを捕まえて撤退していくガエリオは必死

になって彼女に語り掛ける。

「ジュリエッタ!!しつかりしろ!!」

「ああ……………うう……………」

それしか話せないように潰されてしまった彼女の意識は真つ暗な闇の奥底に叩き落された。

その時明楽の脳内にサブレたちの声が響き一瞬で意識を取り戻す。

19

運ばれているジュリエッタは虚ろな目をしながら奥へと運ばれていく。ガエリオに後悔に襲われてしまう。あの時……………つと。

しかし、そんなガエリオの前に一人の士官が現れる。

「ガエリオ様！東南アジア戦線が崩壊しました！各地で戦っている元アリアンロッド艦隊のメンバーも敗走を余儀なくされています。我々も離脱しないと逃げ場がなくなります！」

内心どうしてこんなことに……………つと考えてしまうガエリオだった。

時を同じくしてアルミリアとジャックは基地に帰還して不満を爆発させそうになっていた。しかし、そんな二人の前にエクスが通り過ぎる。アルミリアはうれしさのあまり彼に抱き着いてしまう。

「やあ、久しぶりだねアルミリア」

「当分はこちらにいらっしやるんですか？」

「ああ、あとは彼らを始末するだけさ。君の願いももうじき叶うだろう」

うれしさのあまり涙を流し抱きしめる力を増す。彼女あの願いももう少して可能かもしれないところまで来ていた。

ジャックはアルミリアを無視してエクスに尋ねる。

「ねえ、グシオンのパイロットって覚醒者になったの？」

エクスは少しだけ考え込むとはつきりとした答えを放つ。

「いや、なりかけている段階だろう。お前たちや彼の兄と同じようにな。まだ完全に変化したわけじゃない。だが、あれならそう時間はかかるまい」

ジャックは内心嬉しさのあまりその場で飛び跳ねそうになるのを押さえる。もう一度戦えば、もう一度殺し合えば彼はもつと強くなる

かもしれないという期待が彼の感情を高める。

あと少して木星帝国の作戦は終了しようとしていた。

20

ファントムブラッドだけが撤退の為の準備に入っている中、キャリーとレレが何かを話し合っていた。

サブレが最後の荷物を鞆に入れて部屋を出たところでレオが涙を流している姿に完全に引いてしまう。

「ひっ!!」

「ぜんぱい〜!俺と訓練する前に変えるなんてずるいつすよ!!」

「ず、ずるいって……」

泣きついてくるレオを引き離しつつ、歩き出すがレオがくつついたまま引きずられる。サブレは何とか引き離し一気に駆け抜けていく。

何とか引き離れたところで食堂から出てきたクレアはどこか気落ちしているように見える。サブレはクレアの肩を軽く叩くがそれに驚いたクレアが悲鳴を上げる。

「どうかしたのか?」

「……いえ、お姉さまの事を少しだけ考えていて」

俺はククナと会ったということを少し前に話した。彼女はそれ以降どこか上の空状態が続いている。

「怖い……か?」

「少しだけ……ですが。私は今までお姉さまから逃げてきました。なんでもできる姉とその妹。でも、父は私の中にある母親の面影だけを求めている、姉には母を生き返らせるための道具ぐらいにしか見ていません。姉はそんな父親を憎むことも無く、むしろ自分の目的のための道具ぐらいにしか見ていません。私は多分あの人と戦わなくてはいけなのでしょう。それが少しだけ怖いのです」

俺は彼女の両肩に手を置き語り掛ける。

「怖くない人なんていないさ。怖いから足踏みするか、それとも踏み出すかだ。君は踏み出そうとしている。今はそれだけで十分だ」

クレアは嬉しそうな表情を浮かべながら涙を一筋だけ流す。流す涙をぬぐい笑顔を作って小走りで距離を取りもう一度こちらを向く。

「私も今はその言葉だけで充分です。でも……いつか！」

そういつてその場から駆け出していく。

俺はそのまま歩き出すと曲がり角で兄と偶然出会った。兄も同じように片手に鞆を持って姿を現したところを見ると最後の荷物をまとめたのだろう。

「忙しかったよね。いつか仕事抜きで遊びにきたいよ」

そういつて遠い場所を見つめる兄と一緒に歩いているとヴァルハラの前でレレと出会った。レレも同じように鞆を抱えたままの姿だった。

「……何？船に乗るの？」

「キャリー様から許可はいただきました。それに私はこれでも役に立てるのでですよ？」

どこかいたずらっぽく微笑む彼女を俺と兄は茫然と見送るしかなかった。俺はそれも悪くないと思いつつそのまま船の中に歩いていく。

仕組まれていた戦争は終わりに向かって進んで行く。

その結末を知る者は誰もいない。

ヴァルハラは空高く上がっていき、アフリカの地で生きる者達はヴァルハラが上がっていく姿を見ているのかもしれない。

俺はエクススの正体に向けて歩き出し始めた。

《仕組まれていた事編終わり アイーン・トウルー編開始》

## アイン・トウルーI

1

ヴァルハラは現在アルンへと帰還へのルートを移動しており、もう一時間ほどでアルンが目の前に見えてくるだろうという距離まで来ていた。アフリカ一帯での攻防戦からさほど経っておらずみんなに疲れが見え始める。

俺が廊下を歩いていても誰も歩いていない。

疲れているのは分かっていった。時間だけを言えば今は食堂にも誰もいないはず。そう考えた俺は食堂に忍び込む。

案の定誰もおらず静まり返った空間に俺の足音だけが響く。冷蔵庫前に辿り着くと俺はゆっくりと音を立てないように開く。

麦茶や様々なジュース、瓶に入っている調味料のようなものまで見えてきた。

俺は他の棚を開きその奥にあるチョコレートを発見した。

チョコレートの袋を開けて小さな小袋を開けて口の中にチョコレートを入れる。口に入ったチョコレートの甘さを感じる度に甘い味覚が反応した。

「甘〜い」

口の中で遊ばしているチョコレートの甘さを感じると二つ目のチョコレートを口の中へと入れてしまう。

「これこれ。これが無いとね」

一つ、また一つと口の中に消えていくと俺は食堂に近づいてくる足音に気が付かなくなった。数えることすらしなくなったチョコレートの袋の中身が半分以上消えてしまうと同時に部屋の中にレレさんが入ってきた。

これ以上なく冷たい目で見られてしまうと空気が凍り付いたような感じすらする。

ようやくの思いで開いたレレさんの口は俺の心を傷つけるのには十分だった。

「これ以上太ってどうするんですか？」

グサツという音が響くのではないかという感じすらするほどドストレートな言葉に心がえぐられた。

「えっと……見なかったことにしていただけと……」  
「別にいいですけど」

冷たい目をしたレレさんは食堂から出ていき俺は誰もいなくなった食堂内でさらに一口入れてしまう俺……ビスケット・グリフォンは反省してはいないのかもしれない。

2

レレは手元に大事そうに抱えているタブレットにはある人物たちの航路が記載されていて、彼女はそれをビスケットに報告しようとした矢先にビスケットが盗み食いをしているところを目撃してしまった。

それを見てしまった彼女は報告することをすっかり忘れてその場から離れてしまった。

「まあ、彼の方に報告すればいいですかね」

特に困ることも無くサブレを探すために艦内をウロウロしていた。ギヤラルホルンで艦に乗ることも珍しくなかった為、当初は大丈夫だろうと高を括っていたが、しかし、実際は今までの戦艦とはまるで違う構造に少しだけ間寄ってしまいそうになっていた。

しかし、それもものの数分で慣れてしまい。彼女は特に迷うことなく艦内を歩いて回っていた。しかし、目的のサブレを探して三十分が立つがいまだ会うことができない。格納庫にも顔を出したし、ブリッジにも顔を出した。それでも見つからない彼をレレは探している。

すると、曲がり角の奥からサブレのイヤホンから漏れ出した音が聞こえてきた。曲がり角の奥のジューススタンドで飲み物を飲んで休憩しているサブレを発見した。

「ようやく見つけましたよ」

「？俺を探していたのか？」

音楽を聴きながら椅子に座ってジュースを飲んでいる姿はどこかカッコ良くも見え、対照的な兄であるビスケットと比べてしまう。

隠れてお菓子を食べる兄のビスケットとジュースを飲み音楽を聴

きながら休憩する弟サブレ。彼女は内心『生まれてくる順番を間違えたのではないだろうか?』と疑問に思ってしまう。

「失礼なことを考えていないか?」

まるで心を見透かすような言葉に内心無反応をしつつ彼女は連絡を手早く済ませる為、タブレット画面をサブレの方に向ける。

「ヴァルハラが地球からアルンへ向けて出発した同時期に火星からアルンへと向けて数隻の輸送船が出発しました。それに同伴している人の中にあなたと同じ姓の人物を発見しました」

タブレットの画面には『クツキー・グリフォン』と『クラツカ・グリフォン』と掛かれており、写真を見てみても彼らの兄弟かもしれないということはある程度把握できた。

「荷物はどこ行きだ?」

「アルンの開発局行きです。荷物の中身は鉱石と書かれていますね」

サブレは口元を押さえながら少しだけ考え込むが、彼には妹たちが来るのではないかという考えはあったし、その際に輸送会社に乘せてもらうのではないかと予想していた。

数年前からEDMは宇宙海賊を撃滅させ、輸送自体は比較的安全にはなった。火星からアルンへの移送コースにはアリアドネと呼ばれる経緯点を配置している。

定期的にEDMの艦隊が見張りをしているので、その経緯から自体が把握したのだろうが、問題は戦争状態で地球に近づこうとしなかった火星の輸送会社が今になって地球に近づいているという点だと考えた。

「地球に向かってるのはその会社の輸送船だけか?」

「いえ、それがかなりの数の輸送会社が様々な理由でこちらに近づいているらしいのです。EDMが現在把握しているだけでざっと100会社」

「かなりの数だな。まるで……」

まるで火星から避難しているようだったと思ってしまう手前、何者かの手を感じてしまう。しかし、そんなことをしてメリットを感じるような人間がどこにいるのだろうか考える。



「二人だけで地球に向かっているのか？」

「いいえ。あとアトラと桜と呼ばれる女性に元ユージンと呼ばれている鉄華団メンバーの五人です」

それ以上は分かりそうもなく、サブレは荷物の中身の方に話をシフトする。

「鉱石ってなんだ？」

「えっと……分かりませんね。差出人の名前は『ゲイナー』としか書かれていません。誰でしょうねゲイナーって……どうかしたのですか？」

サブレにはゲイナーという名前に心当たりがあった。人体開発のスペシャリストで蘇生治療を開発した人物。そして、クレアが言うには元木星帝国関係者でもある人物。市くなくともサブレがかかわっていた時は彼は木星帝国とは縁を切っていたそうだが、しかし、彼が関係者だったという事実は変わらない。

サブレの脳内には白衣を着て現れた剥げた老人の姿を思い出す。

「ゲイナーは俺が火星でバルバトスを回収した際に出会っているんだ。その際に二つの遺体を引き取りたいって言ってな。処理に困っていたからそのままゲイナーに渡したがな。元々EDM個人は蘇生治療器を作ってもらった際に貸しが存在したしな。ちようどいいってなったんだ」

だから引き渡したと当時を振り返る。仕方ないというつもりは無いし……それが最善だったといえるわけがない。だからこそそれを彼はシノとビスケットには話さなかった。話せばややこしいことになるとわかっていたからだだった。

「現在は分からないのですか？」

「さあな、元々自由気ままな人だからな。長くどこかに滞在することは無いと聞いているよ。そもそも、自由人がどうやって鉱石を手に入れたのか分かんないけどさ……どうせ石ころ程度の大ききさだろ？」

レレはサブレからの言葉を聞いてタブレット画面を切り替えて鉱石量を調べる。サブレはジュースを飲むために口の中にジュースでいっぱいにする。

「鉦石量は……ぎつとモバイルスーツ二機分ですね」

「ブツ！」

「汚い！」

ジューズを吹き出してしまい、咄嗟に回避行動をとるレレは腰を引く。せき込むサブレをしり目に軽く怒りをあらわにするレレ。

「に、二機分って相当な金額になるだろ!？」

「えつと……これぐらいですね」

画面を凝視するとそこには0が6個ほど見える。サブレはごしごしと目をこすりもう一度確認してもそこには0が6個見える。

「百万？おかしいな、俺の目はどうやらいかれてしまったらしい」

「大丈夫ですよ。誰の目にも数字は変わりませんので」

百万単位で金額をつぎ込むとなるとゲイナーにそんな金があるのかが気になってしまうサブレ、しかし彼女がさらに加えた情報は驚きを通り越す結果になってしまった。

「こんなことで驚いていてはこの後の情報に耐えられませんよ」

レレがさらに見せる画面の無いようには同じような金額が10個ほどの会社に似たような輸送依頼をだしていた。そして、そのすべてがゲイナー名義での依頼だった。

「これ全部ゲイナーからの依頼か？」

「そうですよ」

驚きを隠せないサブレに少しだけ勝ち誇った気持ちになったレレは一瞬だけ頬を緩めるとすぐにまじめな表情に切り替えた。

「問題が依頼主の口座何ですが。金はいろいろな方面から経由して振り込まれたらしく、出所が分からなかったそうなんです」

「口座ってそんなに存在するか？」

「火星は元々治安が悪く様々な闇企業が存在します。その為口座も隠れたものから公式に発表されているものまで様々です。30は超える銀行口座を経由しているんです」

「そんな怪しい依頼なら断りそうだけだな」

「それが、突然10の会社に荷物と金が一方的に届けられたらしいです。ただ、一か月前から輸送会社の間で妙な噂が立っていたそう

す」

サブレはジューズをゴミ箱に入れながら噂の中身に興味が出た。

「噂ってなんだ？」

「それが……木星帝国の次のターゲットは火星だと。実際地球での戦いが終わりに向かっているとニュースになっていて不安になっているそうで、それが荷物を届ける片手間で……」

「逃げようと思ったわけだ」

サブレが半分呆れ顔を作りつつどこか納得したようなできないような思いになる。サブレはタブレットを受け取りつつ答えた。

「分かった。この案件は俺から情報局の方に報告しておく。兄さん達にも黙っていてくれ」

「分かりました。ところで……」

顔を赤らめるレレにサブレは首をかしげるだけで疑問顔を浮かべるだけの鈍感を発揮する。すると、見るからに不機嫌なクレアの声が聞こえてきた。

「楽しそうですね」

二人の視線が同時にクレアが現れた方へと向けられると、いつもの笑顔とは違う明らかな不機嫌具合を見せつける表情。レレも途端に不機嫌に変化する。

「いえいえ。私はこれでもこの船において情報管理をしておりますので……ただの炊事係とは違うんですよ」

「家事炊事をしないような女性に言われたくありません」

互いに笑顔を向けるが、内心は敵意丸出しの声を放つ。しかし、この状況でも鈍感を発揮するサブレは互いが敵意を出し合っていることにすら気が付かない。

「大体後から出てきたヒロイン風情が」

「あらあら、先に船に乗っている人が器量の小さい」

罵り合いを繰り返すサブレはその中心に自分がいるとは夢にも思っていなかった。

そして、最終的にクレアが右腕に腕を通し、レレが左腕に同じよう

に通す。サブレをはさんで睨み合ってすら気が付かないサブレ。

疑問顔でヒロインズから奪い合いになっている現場を目撃したのは明楽とシノだった。涼しい顔をしながら奪い合いに身をゆだねているサブレ、そしてそれを目撃してしまったシノと明楽。二人は小さく震えながら驚愕の表情を浮かべる。そのうち大きな悲鳴をあげながら走り出していく。

「なんでサブレ（先輩）ばかり!!」

途端にシーンという効果音が鳴るほどの静けさが周囲に広がり、途端にクレアとレレは冷静になって腕から離れる。

「少しだけ悪いことをしましたね」

レレがそう言うのとクレアも同意したようにうなずく。しかし、サブレだけがそんなシノと明楽に対して厳しめの判断を下した。

「別にいいんじゃないか？ふだんからナンパなりしている二人だからな、天罰だろ」

逃げ出した方向を眺めたまま三人は身動きが取れずにいた。

3

ユージン達が船に乗り込んで既に数時間が経過しており、船は地球へ向けて安全航路に差し掛かっている。途中でEDMの艦艇に拾われて以降安全さでいえばさらに高まったように思う。アリアドネの航路に勝手に通ろうなどさすがに木星帝国も考えないだろうと彼等だっと思ってている。そもそも、輸送船を襲うメリットが木星帝国にあるとは考えていない。

長い廊下を飛んでわたっていると、荷物が置かれている格納庫に辿り着いた。そこでは荷物を管理するための10人ほどのメンバーが作業している。

ユージンはそのうちの格納庫のリーダーらしき人物に話しかける。

ツナギ姿をしていて頭には髪を隠すように青と赤のバンダナが巻かれている。肌は褐色肌の大男だった。

「すみませんね。急にらせてほしいなんてわがままを言って。乗せてもらってありがとうございます」

頭を下げるユージンに豪快な笑い声を放つ。

「別にいいさー！こちらも地球行きの荷物が急に来たしな」

「これがそうですか？」

ユージンが下の方に視線を向けると多数のコンテナが重なるように置かれている。細かい事情までは聞かされていなかったが、急遽届けてほしいと言われた荷物の中身は鉱石らしく、それをEDMの開発局当てになっっているらしいという事しか知らない。

「鉱石っていう話ですけど……なんの鉱石ですか？ハーフメタルですか？」

鉄華団がかつて所有していたハーフメタル。エイハブ・リアクターによる電波妨害を阻止する作用があるとされている金属で未だに多くの金属が採掘されている。

てつきりユージンもそれかと思った。しかし、バンダナのリーダーはユージンにとって聞いたことも無い鉱石の名前を口に出した。

「えーっとだな。『サイコ・フレーム』だな。こりゃあ鉱石じゃなくて……金属板だな。鉱石じゃないぞ」

「それって大丈夫なんすか？」

「まあ、大丈夫だろ。加工しているかしていないかどうかの違いだしな」

笑ってごまかすバンダナの男にユージンは苦笑いを浮かべる。そうしているとEDMの士官の女性がユージンに近づいてきた。短みの黒髪にびしっと着こなしている緑色の士官服、厳しめの表情をしている反面どこか若々しさがにじみ出ている。

「EDMの護衛艦隊のモビルスーツ隊に所属しているサラ・ベールンと申します。先ほど皆さんの前に現れた黒色の細身のジムに乗っているのが私です。『サブレ・チルドレン』と呼ばれているメンバーの一人です」

「サ、サブレ・チルドレンってなんだ？」

ユージンが疑問に感じたことをすぐさまに尋ねる。彼女は特に隠す様子もない様子。

「サブレと呼ばれている人物にモビルスーツテクニクを教わった10人の事をさす言葉です。私以外に他9人が存在し、そのすべてが

エース級と呼ばれるパイロットです」

「へ〜どんな奴なんだ？」

ユージンやバンダナの男は勝手におっさんや歳を取った老人などを想像すると、そんな彼らの考えをまるで読んだように意外な言葉を放つ。

「サブレ先輩は私達とそんなに変わらない若い方ですよ。まだ20代ですし」

ユージンがアホっぽい表情を浮かべつつ驚きを隠せずにいる、するとバンダナの男は別の質問で尋ねた。

「じゃあ、アンタはどれぐらいに強きなんだ？」

「比べる基準になるとは思えません、私は十人の中で三番目の強さです。明楽先輩が一番強く、次にレオと呼ばれている人物が強いですね。ただ、二人はパイロットの中でも精神的に多少問題があるのでリーダーには向いていないとサブレ先輩が判断し、私にはリーダーになれるような艦隊を紹介してくださいました」

彼女の言葉の端々に自身が優秀なのだという自信が見えてくる。実際優秀なのだろうし、若いなりに努力も重ねたのだろう。ユージンには昔の自分がこんな風に戦えただろうかと疑問に思ってしまう。

実際彼女のまっすぐさとひたむきな努力、そして先輩と慕う人物がどんな人間なのかと思ったところでサブレという名前に自分は聞き覚えがあると感じた。

「なあ、そのサブレっていう人物のフルネームはなんだ？」

「？サブレ・グリフォンですか？」

グリフォンという名前はユージンが一番よく知っている。かつて鉄華団と共に行動していたころからの古参の付き合いだった。途端に彼の事を思い出してしまう。

「なあ、ならビスケットっていうやつは知っているよな？」

「ええ、知っていますか？」

「学校とか仕事先ではどんな感じだった？」

「？そうですね。サブレ先輩と違ってビスケット先輩はおとなしく食べ物を食べながら本を読んでいる印象が強いですね。おとなしいっ

ていうか」

変わらないと思う手前、成長を感じられないと不安に思う。だが、ユージンは自分の知らないところで成長しているのだろうと思ってしまう。いつだって嫉妬していた。ユージンからすればオルガがいつだって信頼しているのは三日月とビスケットだった。彼からすれば三日月はよかった。でも、ビスケットは違った。彼のように信頼されたかったし、オルガ・イツカに信用されたかった。

しかし、結果からすれば彼を追い詰める結果になった。

追い詰めて彼を苦しめる結果になる。後悔し続けたし、いまでも思い出せば後悔する。オルガ・イツカが亡くなって初めて彼が助けてほしがっていることに気が付いた。

結局自分はビスケットのようには生きられない。生きられなかったと思ってしまった。

「私達の強さはアリアンロッド戦の戦いを見ていただければわかると思っていますよ」

そう聞いた瞬間にはユージンは彼らの強さに興味が抱いたし、同時に見てみたいという想いにかられた。

「それって俺でも見る事ができるのか？」

サラはあっさりと言葉を取り出してユージンに手渡してくれた。ユージンはお礼を言いながら部屋へと戻っていき、パソコン越しにその映像を見始める。

バルバトスとグシオンが先に突っ込んでいく姿が映し出され、その後続くようにゲイレールに似た機体が飛び出していく。ゲイレールにしては少々装備や関節部などの細部が違っているのが分かる。

一つは金色の装甲に、もう一方は黒い装甲になっていてバルバトスとグシオンについていくように突っ込んでいく。戦闘が多少続くとアリアンロッド艦隊はダインスレイヴを持ち出して容赦なく引き金を引いた。この瞬間だけはユージンは腰を浮かせてしまうが、しかし、彼にとってはこの後の光景の方が印象的になった。

バルバトス、グシオン、ゲイレールカスタム機の二機の合計四機はダインスレイヴの攻撃を弾き落としていく。

「なんだよそれ……いくら細かい操作性をあげたからってあんなに早い弾丸を落とすことが出来んのかよ」

サラが去り際に言っていた言葉を思い出す。

『弾道を予測できれば大抵の弾は叩き落すことができるそうですよ』  
彼らはダインスレイヴの弾道を予想して武器を振り回しているのだ。

その後の光景もバルバトスたちを含めた約10機のモビルスーツが縦横無尽に動き回って戦力を次々に破っていく。

見れば見るほど落ち込んでいくユージン。

「なんで……俺達ですらできなかつたことが……できるんだよ」

悔しさ、みじめさが込み上げてくる。同時にふがいなさも。最終的に10機のモビルスーツが大半のモビルスーツを捕獲したことで戦闘が事実上終了した映像が映し出された。最後にバルバトスがスキップジャック級の目の前に辿り着いたところで映像が終了する。

悔しさから一粒の涙がユージンのズボンを濡らした。



## アイン・トウルーII

4

ククナはどこか楽しそうに長い廊下を歩いていた。彼女自身はきっとその理由をよくは分かっていない。

隣で一緒に歩いているエクスは彼女が何を考えているかあえて探らないようにしているが、エクスはそれ以上に気になることが存在した。

「大丈夫なのですか？量産型だけで？念のためにもう一方の方も実装した方がいいのでは？」

ククナは笑顔でエクスの方を眺めると顔を覗き込もうとする。エクスは視線をそとへと外してしまう。

「今回の目的はあくまでもEDMの新型のガンダムフレームである『ガンダムエデン』を起動させる必要があるからよ。追い詰めれば必ずエデンを起動できる。それがアフリカ戦線で確信に変わったの」

「確かに彼は追い詰められれば火事場のバカ力を発揮すると思いますが、そんな事でネオガンダムフレームが起動できるものなんですか？」

ククナは高笑いを浮かべとてもいい笑顔でエクスの前へと立ちふさがった。

「フフフ……あなたは自分の手で倒したいんじゃないかしら？」

「分かっています……彼らだけで大丈夫なのですか？」

エクスの前へと突き進んでいくククナはあくどい笑顔を向ける。

「大丈夫よ……彼なら大丈夫。必ず私達の期待に応えてくれるわよ。だって……彼はこの人類を救うかもしれない『選別者』なのだから。選別者……イオリア・シユヘンベルグがひそかに提唱した人類全てを進化させるべき存在、もしくは……人類を滅ぼす存在。あなたはどっちかしらね？」

エクスは歩く足を止めククナの右手を握りしめ軽く持ち上げる。口元に付きそうなほど持ち上げ顔と仮面がくつつきそうなほどの距

離をたもつ。

「私はあなた以外の人間に興味はありません。あなたと共に新しい人類の夜明けを作る」

「あら、新しいアダムとイブになると?」

「それが私の願いです」

ククナはまんざらでもないような気分になりそのまま一緒に歩き出す。

選別の時は近づいていく。

5

隣で同じ大型の機体に乗る込む人間など彼らには考えたことも無かった。彼らはモルモットとしての生を受けた。その後もその為のみ改造を繰り返された。

ただ憎み、嫉妬して、殺すだけ。

右隣の女も、左隣の男も同じような顔、同じような体格をしており、そこに性別としての差すら感じ取れない。彼等には自分という個人の考え方すらできないのかもしれない。

同じ大きなモビルアーマーに乗り込み、ただ戦うだけ。

それだけだった。それ以外には存在しない。

彼らはただの兵器にしかねれない。

5

ヴアルハラがアルンを視界に捕らえたとき、EDMの本部ではモビルアーマーの襲来を予感させていた。

EDMの地下に存在する司令本部にようやくアルベルトが姿を現していた。

「アルベルト様!」

「名前をいちいち呼ばなくてよい。それより敵の規模と勢力を確認しろ」

アルベルトが指令席に座ると同時に目の前の大きな画面に三機のモビルアーマーとそのはるか後方に地球圏を離脱する軍勢を確認した。

「モビルアーマーがしんがりを担当するか……面倒な存在を持ち出し

たものだ」

目の前に移るモビルアーマーはかつてクリュセへと侵攻戦を仕掛けて鉄華団のガンダムバルバトスと死闘を繰り広げた『ハシユマル』に非常に酷似している。

両サイドへと伸びた羽のようなアーマー、鳥のくちばしのような頭、鳥の足を彷彿とさせるような足、伸びる尻尾。その全てがハシユマルをほうふつとさせた。

「しかし、その細部には変更が見られるな。頭部の左右に板のような装備が見られるな。それにあの尻尾の装備……ただのブレードには見えないが」

「見掛け倒しであればよいがな」

後ろからマハラジャが姿を現し、アルベルトの一步後方に控える。

「まあ、それだけは無いだろう……艦隊の様子は？」

マハラジャがアルベルトへと尋ねると、アルベルトは画面を艦隊編成画面へと切り替える。

「正面に左から五番、四番、三番艦隊、後方に同じく左から二番、一番艦隊です。現在ファントムブラッド隊が近づいてますので、それを正面の艦隊に編成します。敵はモビルアーマー三機ですが、実力が未知数です。全艦には全力でかかるようにと伝えてあります。その後方の撤退している部隊に関しては無視するしかないでしょう。モビルアーマーと言えば厄祭戦を引き起こしたほどの存在。これぐらいの力でも不安でしょうね。もう少しだけ早くファントムブラッド隊が帰還していけば……」

アルベルトの視線が正面から右手付近の小さな画面へと移動する。そこには開発局の様子が映されており、一機のガンダムが映されていた。

両腕と両足は白くカラーリングされており、胴体は上半分が青、下半分が赤。頭部のデザインはアンテナが白と黄色、両目はクリアブルーで口というべき場所は赤色。耳とアンテナの先にはクリアレットの宝石のようなパーツがはめ込まれている。そこには小さな文字で『ガンダム』と書かれている。背中には真っ白の翼と天使の輪を彷彿

佛とさせるような輪っかが装備されている。

「それが新型のガンダムか？やれやれ……たとえ早めに戻らせたとしてもこいつの起動すらできていないのだろうか？そんな代物どうやって実戦に使うんだか」

「どうもガンダムエデンに内蔵してあるサイコ・フレームにOSを組み合わせてあるらしく、エデンがパイロットが自身を扱うにふさわしいパイロットを選んでいるそうですよ」

マハラジャが小さいため息を吐き出し、やれやれと首を左右に振る。

「そんな欠陥品のようなシステムをよく開発する気になったな」

「操縦システムとサイコ・フレームをより細かくくみ上げているらしくそのせいらしいですよ」

「操縦性能を上げる為なのだろうが……少々やりすぎなのではないか？」

アルベルトは席を回しマハラジャの方をまっすぐ見つめる。その表情は鬱陶しそうな感情をにじませる。

「私に言われても困りますよ。それに……開発局の連中にでも苦情を叩きつければよろしいでしょう」

「それで苦情を聞く連中なら苦労はせん」

どちらにしても使えない機体を使用することはできない。現存の戦力だけでどうにかするしかない。それは誰もが分かっていた。

6

正面に多くの艦艇が集まっている姿を見ると今から艦隊戦でも始まるのかと思うほどである。しかし、今から始めるのは艦隊戦ではなく、三機のモビルアーマーを迎撃しようとしているのだ。それは誰もが分かっている。

右端にヴァルハラを固定し、そのまま指令室へと連絡を入れる中サブレ達はパイロットルームに集まっていた。

「先輩、俺達三機だけで何とかするつもりなんですか？」

明楽がどこか不安そうに貧乏ゆすりを起こしながらどこか集中しきれずにいる。サブレは背中をロッカーに預けたままパイロット

スーツに着替えて待機していた。

「どうにかするしかないだろう？モビルアーマー戦に俺たち以外のパイロットは死に行くようなもんだ」

シノはロツカーのドアを閉じてサブレと明樂の方を向く。

「でも、本当なのかよあのモビルアーマーに酷似している奴が三機もいるってよ。ならこの戦力だけで大丈夫なのか？」

モビルアーマーの強さを知っているシノには不安要素しかなかった。

鉄華団はモビルアーマーと戦い勝利を収めている。しかし、それは三日月・オーガスの右半身を犠牲にして勝利した。

シノはモビルアーマーの脅威を知っているからこそ、不安なのだろう。実際、明樂とは別の意味で落ち着いていない。本来なら素早く着替え終わっているにもかかわらず、明樂やサブレ以上に時間がかかってしまった。

「大丈夫だと信じるしかない。だからこそ俺達ガンダムフレームがいるんだからな」

二人は納得できないような表情を浮かべており、彼らはガラス越しに見える三機のガンダムフレームが調整を終えて戦う準備を整えていた。

『正面にモビルアーマーを三機見つけました。あと数分で戦闘宙域に突入します。各モビルスーツは出撃準備に入ってください』

イオリのアナウンスが艦内に響き、サブレの三人は格納庫に入って各ガンダムフレームに乗り込む。真っ先にフラウロスが動き出し始める。

カタパルトデッキに移動するとフラウロスの両腕にビームライフルが装着される。

「流星号！ノルバ・シノ！出るぜ！」

続いてグシオンがカタパルトデッキに移動して腰を低くする。

「ガンダムグシオンリベイク・リファイン！明樂・アルトランド！出ます！」

サブレの乗るバルバトスも最後にカタパルトに移動すると、背中に

マルチスタイルと同じブースターパックと右肩に大きな対艦刀、左肩に大型のバスターライフルが装着される。左腕に耐熱シールドに右腕にライフル。

久しぶりに触るバルバトスの操縦桿は少しだけ熱を帯びているようにも感じる。

優しくなでてやり、再び正面に視線を移す。

『ガンダムバルバトス・リファイン。パーフェクトパック発進どうぞ！』

イオリの静かで落ち着いていながらも力づよい声はサブレの気持ちを引き締め、視線を細めさせる。視界の奥にモビルアーマーが存在する。

心の奥にはエデンさえ存在すればという気持ちがあるのは確かだった。

(無い物を欲しても仕方がないか……)

操縦桿を強く握りしめ、足元のペダルと踏み込む。

「サブレ・グリフォン！ガンダムバルバトス・リファイン！出るぞ!!」

勢いよく出撃するバルバトスは他のガンダムフレームと共にモビルアーマーの元へと向かった。

7

目の前にモビルアーマーが三機横並びになっており、全てのモビルスーツの視界にきっちり映っている。シノのフラウロスが背中の中の大形バスターランチャーを放つために構えを取る。

「先手を打つぜ！メテオキャノン!!」

「ダサい！」

シノの独特のネーミングセンスに明楽がすかさずツツコミを入れた。俺としては心底どうでもいい事なので無視しながら事の成り行きを見守っているとフラウロスから発射された大型ビームはモビルアーマーを貫くと思われたが、モビルアーマーにあたる目前で拡散するように弾かれてしまう。

その光景を目撃した時には一瞬だけだが腰を浮かしかけた。

「Iフィールド?！」

俺の言葉にほぼ全員が反応し明楽が代表するように尋ねる。

「何なんっすか!?!あれ」

「Iフィールド。ビームを弾くことができない見えないバリアのようなものだと思え。めんどくさそうな装備を!」

するとモビルアーマーの口が開き高出力のビームを俺たちの方に向けて放つ。全機が同時に散開して回避行動をとる。

俺は全員に指示を出すために通信機越しに声を発する。

「Iフィールドといっても無限に防ぎ続けられるわけじゃない!遠距離部隊はとにかくバスターライフルを放て!近接部隊の攻撃をひきつける!」

「了解!」

俺も同時に走り出し中央のモビルアーマーにとりつく、するとモビルアーマーは尻尾を伸ばし、先端をこちらに向けた。その瞬間に尻尾の先端部が見えた。

尻尾はまるでブレードのような形になっているがその先端には細い筒が付いているのが見えた。

その先端の筒がピンク色の光を放ち始めると俺達目掛けて細かいビームが襲い掛かる。

俺と明楽が左右に避けるがジムが二機だけが逃げ遅れ尻尾が右に動くのと同時にビームもレーザーのように細かくかつ素早く動いた。

「ビームライフル!」

「いや、サーベルの方だろう。そこまで飛距離が無かった。ライフルならビームを動かすことは無い。あれはテールブレードを改良して作られたテールビームブレードだ」

三機のモビルアーマーは再び大きな口を開き大きなビームを放つ。しかし、今度のビームは口から放たれたと同時に大きく屈曲する。

「ビームがまがるだあ!」

シノが驚きの声を放ちつつ真横に大きく回避して見せる。今度は五機のジムが巻き込まれる形で爆発する。

どんどん被害が増えていくこの状況に俺はシールドに内蔵されていた信号弾を上げた。

戦場から青色の信号弾があがるのを俺は確認すると他の艦隊から増援が出撃し始める。

正面に位置する全艦隊が一斉にモバイルアーマーに向けて一斉に主砲を発射させる。

すると、クレアさんがブリッジに上がってくるのを俺はいつもの対応で反応した。

「隣で座っていてくださいね？」

「はい。ありがとうございます」

そういつつ彼女の視線はまっすぐと戦場の方から離れず、同時にレレさんはブリッジの右端で本部からの情報を整理している。しかし、レレも心どこかここにあらずな状況で、時折視線を戦場の方へと向けている。

その気持ちは俺には分からないことは無い。

戦場にいるサブレの事が気になってしまう。

今までの相手とは違い今度の相手は完全な機械だ。そう思った時、クレアさんは小さな口を開き、とんでもないことを口走る。

「アレは………機械じゃない。お姉様!!なんていうことを!?!人を作るなんて!?!」

「人を作る?」

聞きなれない言葉に疑問を抱き尋ねてみた。

「どういう意味ですか?」

「そのままの意味です!あれには人間が乗っている」

するとレレさんは表情を一変させ、驚き半分悲しみ半分のような表情を浮かべると戦場の方をじっと見つめる。

「人工人間!?そんな……プロジェクトEは完成していたの?」

プロジェクトE?人工人間?

聞きなれない言葉ばかりが周囲を満たし、俺は心配になりながら戦場に視線を移す。

サブレは何を知っているのだろうか?

「前線より報告が上がりました!敵モバイルアーマーは……ビームを屈



曲させることが可能！それ以外にも切断能力の高いテールビームブレードが確認されているそうです。既にジムが数機落とされてしまったとのことですよ」

イオリの報告を聞き終わると俺は下唇を噛み締め最前線の状況が気になってしまう。

今すぐにも戦場の情報が分かる様に正面の画面に拡大映像を移す。

戦場にはガンダムフレイム気が縦横無尽に動き回って三機のモビルアーマーからの攻撃を必死でよけながらジム隊を守っている姿が映っている。

「サブレ……シノ、明楽」

その時、バルバトスの動きが突然変わった。

「まさか!? サブレ！ダメだ!!」

それはソニアから使用を禁止されていたシステムだった。

9

回避しても勝てる気がしない。ジム隊には着実に被害が出始めている。遠距離攻撃を当てても弾かれ、近距離ではテールビームブレードが邪魔をする。遠距離攻撃では屈曲させることができるビーム砲が襲い掛かり、俺達ガンダムフレイムはモビルアーマーの足に搭載されていた爪のカタチをしたファンネルに襲われていてそれどころではない。

上から攻撃が来たかと思えば下の方からも攻撃がやってくる。

一個一個のファンネルに対応するように回避しては叩き落とそうとしながらランチャーで反撃を試みるが、大きな攻撃は攻撃前の動作さえ確認すれば回避は可能だ。

一回一回の攻撃を受けそうになるたびに確信に変わっていく。

このモビルアーマーはパイロットが存在する。

しかし、このパイロットを果たして人間と表現してもいいのかと疑いたくもなる。感じ取れる感情は『憎しみ』『怒り』『殺意』のみで、ほかは何一つ感じ取れない。仲間という認識さえなければ、それ以外に考えを巡らせようとすらしない。

彼らはいくまでも機械のように戦っているだけ。下手をすれば彼らは機械より質が悪いかもしれない。脳波を使いこなし、ファンネルなどの兵器を使い、成長さえすればある程度の戦術に対応できる。

面倒なんてものではない。

木星帝国はとんでもない兵器を作り上げたことになる。

しかし、逆に彼らを知りさえすればエクススの正体に近づけるかもしれない。エクスがプロジェクトEに無関係だとは思えない。

ファンネルを回避しながらひたすら攻撃を繰り返そうとするが、勝てる気がしない。このままでは一時間と持たずに艦隊までたどり着かれるだろう。そうなれば艦隊が壊滅的な被害ができることぐらいは簡単に想定できる。

もう少し時間があればこいつらの装備を調べることが出来て多少の対策は練れたはずだ。

そう思いながら俺は頭の中で打開策を考えていると、ふとソニアから言われていたシステムを思い出す。

目の前にある小さな画面をいじっていると『危険』と赤い文字で書かれており、俺は最後の警告画面の下にある『YES/NO』のYESをタッチしようと思ったが、そのすんでのところで一瞬だけ躊躇する。

これをタッチすればきつとバルバトスは壊れるだろう。しかし、ここで躊躇すれば多くの人が命を落とす。

それは俺が一番恐れていることだ。

シノ、明楽、メアリー、イオリ、兄さん、レレ、クレア……みんな。みんなの表情とアルンの人々が脳裏に浮かび上がると俺は躊躇なくYESをタッチした。

とたん、バルバトスの両目が赤く光はじめ、全身をめぐるエイハブ粒子がフレームに内蔵されているパイプを通るたびに異常なほどの熱を放つ。

今にもパイプが破裂しそうになっている。破裂すればその場所のフレームも引き飛ぶ可能性が高い。

「バルバトス……お前の限界を見せてみろ!!」

ユージンは廊下の窓のただ広がる星空を眺めていた。まさか、この空の向こう側では激しい戦闘など起きていないかのようだった。

一人黄昏る様に呆けていると右頬に冷たい感覚が襲った。驚きながら後ろへと振り返るとそこには変わらず真剣そうな面持ちで両手に飲み物を持っていた。

「飲み物をどうぞ」

おどおどしながら飲み物を受け取り、サラはユージンの隣に立ちながら肘を窓際に掛ける。

「どうなさったのですか？」

端的な質問でありながらユージンの異変に気が付いたという意味も含んでいる。サラと同じように体を窓際に預ける。

「自分たちのふがいなさを感じ取ってな。あんた達はある少数で戦って勝てたんだからな」

サラは一瞬だけ考えるとユージンの事を考えているのか考えていないのか不思議な答えを発した。

「それは……あなた達が良く考えずに戦っていただけでしょ？」

ズバリな発言に思いつきり傷ついてしまうユージンは多少ジト目で彼女を見てしまう。真剣な面持ちながらどこか微笑んでいるようにも見える。

「でも、そういうところ嫌いじゃありませんよ」

「へーサブレとかいうやつとは天と地の差だろ？」

文句を垂れるように不満を垂れると今度こそ微笑みながら傷つくようなことを言う。

「もちろんです。でも、あの人は少しだけ怖いから。私は付き合いたいとは思わないんですよ」

「だったらあんたは誰と付き合いたいんだ？どんな奴なら付き合いたいんだよ？」

サラは指を顎先に当てて少しだけ考えたとそのままの体勢でさりげなく答えた。

「そうですね……少しだけ馬鹿っぽいけど、真剣で真面目な人かな？」

「だったら俺なんてどうだ？なくんてな」

ユージンが冗談で答えるとサラはいい笑顔を浮かべて答える。

「いいですよ」

「はあ？」

そのまま呆けるユージンをほったらかしにして彼女は静かに廊下を歩いていった。

「ど、どういう意味だ？なあ？」

今起きたことを把握できないユージンがそこにはいた。

## アイン・トウルーⅢ 《天使の目覚め》

11

リミッター強制解除をソニアから聞かされているのは俺、サブレ・グリフォン以外に兄などの一部の幹部のみ。その時に俺達が言われたことはリミッターを解除してはいけないという事だった。

「本来パーテイクルドライブ搭載型エイハブ・リアクターは出力上半分までしか出せないようになってるわ。これは出せないわけではなく、現在の機体開発技術では100%の出力を出した場合機体もたないからなの」

ソニアはもし最大出力を出せば作られた高濃度圧出粒子が消費しきれないほど生産される。しかし、消費しきれない粒子が行き場を失いフレーム内で爆発してしまうそうだ。

高濃度圧出粒子になるとエイハブ粒子は視認できるほどである。しかし、どんな効果を持つのかいまだ分かっていない。

『HCCCPモード』

そう命名された名前の由来は『高濃度圧出粒子』の英語の略称『High concentration of compressed particles』の頭文字であるHとC、O、C、Pからきた名前だ。

ジムなど様々な機体が試してきたが全滅してしまった。

そんな場面を見てきた俺がこのモードに躊躇をしなかつたといえようそになるが、ここで躊躇して仲間になれたら困る。

サイガやオルガの事を思い出してしまい、結果俺はリミッターを解除してしまった。

12

戦場の方から赤い粒子がかすかに見えた気がした。俺はとつさに画面を拡大して戦場の状況を正面の画面に映す。

そこにはバルバトスが真っ赤な粒子を機体中からまき散らしている姿が見えた。

とつさに艦長席から体を浮かせて叫ぶ。

「それだけはだめだ!!サブレ!」

全身から漏れ出しているエイハブ粒子が行き場を失い始めている。クレアは両手を胸の前でギュツと握りしめ、震える体を落ち着かせようとしている。

リミッター解除してはいけないというソニアからの言いつけをものの見事に無視した形になる。

と、思ったところでそもそも人との約束事なんてよっぽどのが無い限り守ろうとしないサブレがいつものように約束を破ったといえばいいのかもしれない。

という勝手なことを想っている間にも状況は変わっていく。

13

昔からサブレが約束事を守ったことがあまりないことをビスケットはよく知っている。小さいころ学校の行事であった遠足で朝の9時集合だったにも関わらず、サブレが集合場所に来ることは無かった。

その後遠足している最中に反対側で遊んでいる姿を見付けた瞬間に先生が走って追いかけたことは同級生の間では語り草である。

もともと人との約束事なんてほとんど聞いていない上にいざとなったら逃げてしまう性格をしている。結局遠足の時も先生から逃げきってしまった。

だからこそなのかもしれない。

ビスケットは知りたいたいと思った。そんなサブレが守り抜こうとしているオルガとの約束を。

いざとなったら約束を破り、逃げて生きて来たサブレが守ろうとしている約束がなんなのか。

しかし、いくら聞いても教えてくれない。時折する儂い表情を想えばこれ以上聞こうとは思わなくなった。

怖くなったのではなく、聞けばオルガを裏切ることになりそうだったから。

あのサブレが話そうとしないということは、それだけオルガとの関係が大切という事なのだろうということはビスケットにも分かっ

いた。

妬けてしまおうし、嫉妬もしてしまいました。

オルガにとつてビスケットと過ごした数年間と、サブレと過ごした二年間ではどちらが大切だったのだろうかと比べてしまおう。

もしかしたらオルガ・イツカにとつて自由奔放なサブレが羨ましかったのかもしれない。

自由でありながら、大切なことの為に戦い、時に冷たく突き放し、時に温かく受け止める。それはオルガ・イツカには無いことだし、できなかった事なのだろう。

だからこそ彼の周りには人が集まっているのだろう。

明楽、レオ、サラ、メアリー、イオリ、メイデン。数え始めたらしきりがない。

彼がEDMの教習学校時代に培った人脈が結果的にラスタルは敗北することになった。

ビスケットはEDMの教習学校に入学したときにサブレの話を聞いた。

「いつだって楽しく、いつだって厳しく生活していた」

いつだって大切な者の為に戦うサブレがこの時も約束を破つただけの事だった。

14

解放された高濃度粒子が行き場を失ってしまい、そのまま体中から放出されている。このままでは五分と経たずにバルバトスは動けなくなるだろう。

俺は壊れそうになっているバルバトスのスラスターを最大まで吹かす、背中のスラスターが悲鳴を上げながらバルバトスはモビルアーマーのうちの一機の側面に拳を叩き込み、装甲を無理矢理剥がす。

「先輩!!」

「サブレ!」

「来るんじゃない!!」

サブレの怒鳴り声が周囲の人間を一気に制止させた。バルバトスの対艦刀を抜き出し、モビルアーマーのテールビームブレードを切り

裂こうと振りかぶる。しかし、テールビームブレードが変形し対艦刀と同じ形に変わってしまう。

バルバトスの対艦刀とモビルアーマーの対艦刀がぶつかり合い弾かれる。バルバトスが素早く後ろに距離を取り、背中のバスターライフルを別のモビルアーマーへと向ける。

「落ちろー!!」

叫び声と共にモビルアーマーのIフィールドが弾ききれないビームがモビルアーマーの側面を焼く。しかし、威力が削られ過ぎて表面を多少焼く程度にとどまっている。

モビルアーマーの口から放たれたビームを屈曲させてバルバトスを襲う。バルバトスは縦横無尽に動いて屈曲するビームをギリギリで回避する。

「当たらなければ!!」

Iフィールドが完全復活する前に叩くつもりで距離を再び詰め、対艦刀を振り下ろす。モビルアーマーの腕が対艦刀を受け止める。

その瞬間、彼らの深層心理の奥深くに一瞬だが入れそうな気がした。

サイコ・フレイムさえあればという思いが心の奥底から沸々と湧き上がってくる。言い出さずはキリが無いし、思っては仕方がないこと。

彼らを知ればアイン・ダルトンとエクススの真実にたどり着けそうな気がする。

心に生まれた一瞬の隙をモビルアーマー達は見逃さなかった。取り囲むように襲い掛かってくる。対艦刀で衝突の威力を受け止めながらスラスターを吹かせて均衡させる。

すると彼らの声が聞こえてきた。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!」

殺意があるにもかかわらずそれを感じさせないほどの平坦な口調。人形のような声がこちらの心を襲い掛かる。

戦うための単純な人形。もしかすると機械の方が人間味を感じられるかもしれない。



三人からの全く同じ声が脳内で反復する。

「「殺す殺す殺す殺す殺す殺すスコロスコロス!!」」

その声を聞きたびにククナというあの女を思い出す。冷徹で底冷えするほどに冷たい。彼女の傑作でもあるのかもしれないが、命をもてあそび、実験のための道具くらいにしか思っていない彼女に怒りを覚える。

俺はその怒りを彼らに向ける。

バスターライフルを構え引き金を引くがバスターライフルが高濃度圧出粒子に耐えられなくなり、ライフルの根元から爆発してしまう。

「だったらあ!!」

対艦刀を引き抜き抜きモバイルアーマー達のテールビームブレードの攻撃をかくぐつて一機のモバイルアーマーの背中に突き刺す。しかし、対艦刀も根元から折れてしまう。

モバイルアーマーは最後の抵抗と出力を最大まで高めて自爆覚悟の特攻を俺に向けてきた。

回避しようとスラスターを吹かせたところでスラスターも限界に達して大きな爆発音とともに潰されてしまう。

「お前だけでも絶対に倒す!」

ビームサーベルを抜き出してモバイルアーマーの胴体に突き刺す。モバイルアーマーと共に月面に向けて吹き飛んでいく中、俺の視界には二機のモバイルアーマーと戦う明楽達の姿が写っていた。

15

ユージンはサラからもらったジュースを飲めないまま窓の外の風景を眺め、思考をほぼ停止に近づけていた。

サラが去り際に告げた一言を思い出しては無意味な思考を続けていた。

「ありや……どういう意味だ?」

「ハニートラップにでもひかかったの?」

隣にクラツカ・グリフォンが立っていることに気が付かなかったユージンはジュースを取りこぼしそうになりながら数歩後ろに後ず

さる。

「な、何の話だよ!？」

ユージンの顔を覗き込むことやめないクラツカはユージンが一步逃げる度に一步追いかける。

しかし、クツキーがクラツカの襟をがちりつかんでユージンから引き離す。

「コラー・クラツカ!」

「捕まったか……」

クラツカは残念そうにしながら舌をだす。さらに後ろからアトラも追いかけるように姿を現した。しかし、そんな中に暁と桜がいないことに疑問を抱いたユージンはクツキーがクラツカを説教している間にアトラに尋ねることにした。

「桜の婆さんと暁はどうしたんだ？」

「桜さんはなれない船旅で疲れたって、暁は遊び疲れて寝ちゃった」  
しかし、そんなアトラの後ろから暁がトテトテと歩きながら姿を現した。

「あれ？暁、あんた寝てたんじやないの？」

クラツカがクツキーからの説教から逃れたいがために話を逸らしにかかるが、それを逃がすクツキーではない。クラツカはその場で説教をやめようとはしなかった。

「ついた？」

窓の外を眺めたいとよじ登ろうとするが中々上ることができずに不機嫌そうになる。見かねたユージンは暁を抱えて窓際まで運んでやる。

暁は窓に両手を添えジーっと窓の外を眺める。

「まだ付かない？」

「まだまだだよ」

すると、暁は予想もつかないことを言い始めた。

「パパにもうすぐ会えるっ？」

「パパ？」

暁にとっての父親は三日月に他ならない。しかし、暁は一度として

父親に会ったことが無い。それどころか暁は父親の写真を見ても「パパ」などとは言わなかった。

そんな暁が初めてパパと呼んだ。

「やっぱりあの覆面の人が……」

「クッキーまた言ってる。クッキーとおばあちゃんの前に現れたって言う覆面の人でしょ？ありえない」

クラツカはポケットから取り出した鉄華団のメンバーの写真を暁に見せる。

「パパってこの背の低い人の事でしょ？」

三日月・オーガスをまつすぐ指さすクラツカに暁は数秒だけ眺めると首を横に振って否定して見せた。

「違う」

そう端的な言葉と共に暁は別の人物を指さした。

パパと呼ぶその人物は三日月・オーガスに似ても似つかない人物だった。鉄華団の中で唯一太っていて、ツナギの上に鉄華団トレードマークの緑色のジャケットを羽織っていて、特徴的な帽子をかぶっているのは、今から会いに行く『ビスケット・グリフォン』その人であった。

啞然としてしまう一行を代表してクラツカが否定しようとする。

「違うよ。暁のパパはこの三日月っていう人」

「ううん。この人がパパ」

頑固として意見を変えようとしないう暁にどうしたものかと思っていると、これまた唐突に後ろからサラが話しかける。

「その子は覚醒者かもしれませんね」

ユージンのドギマギは一気に高まったが、サラはゆっくりと暁の視線に合わせるようにしやがみ込み暁の視線と視線を合わせる。

「覚醒者って何ですか？」

クッキーが疑問に思うことを素直にぶつけた。

「覚醒者とは進化した人類の事だと言われています。実際の能力としては脳波を使ったテレパシーや殺気などの感覚を感じ取ることができると言われています。多分、幼いころからビスケットさんが常に

駄々漏らしになっている脳波を無意識に感じ取っていたのでしよう。この子とビスケットさんはどこか似た脳波の波形パターンがあるのかもしれないね」

微笑むサラに言葉の難しさに首をかしげてどこかへと逃げていく暁、それを追いかけるクッキーとクラツカ、アトラがその場から移動していく。

自然とサラと二人つきりになってしまいうー진은、ドギマギしながら内心を悟られたくないと自然さをにじませながら話を切り替える。

「でもよ、火星と地球でその……脳波っていうのは届くもんなのかよ」実際に思った素朴な疑問をサラにぶつけると、サラは顎先に指を置きながら多少悩むそぶりをさせる。うー진からすればサラの行動の全てでドギマギしてしまう。

「うーくん、私も詳しいわけではないではありませんからね。脳波がある程度似ていれば可能らしいですよ。勿論、何かを感じる程度の間隔でしょうけど。私も覚醒者じゃないから何とも言えませんね。才能はあるとは言われましたけど」

笑顔を浮かべうー진의瞳とサラの瞳がガツチリかち合う。うー진은とっさに視線を外へとそらす、まるでうー진의心が読めるかのような言動を吐き出す。

「もしかして少し前のセリフを気にしてくれませんか？」  
「気にしない奴なんているのかよ？」

そつけない態度を取りつつうー진은あくまでも平静を装う。

「いましたよ。サブレ先輩は私の態度を見てもウンともスンとも言いませんでしたから。あれは……悔しかったな。結局告白しても振られるだけでしたから」

「へへ、サブレってやつは相当な鈍感野郎なんだな。俺だったらあんたから告白されたら速攻で付き合ってやるけどな」

軽口を叩きだすとサラはとってもいい笑顔で返した。

「なら付き合ってみます？」

「いっせ」

振り返り最後に「冗談だよ」と返してやろうと首をサラの方に向けるとサラからの不意打ち気味のキスがユージンの意識を停止させた。

「ファーストキス……」

そういつてからかいながらその場から去っていく姿をユージンは再び呆けたまま眺めるだけだった。

16

バルバトスはモビルアーマーの下敷きになる様に月面を移動し行く。ガリガリと削れる音と共にバルバトスはすっかりエンジンを停止させていた。

そのうち押しつぶされるのではないかというところでバルバトスの背後の地面が開く、途端にバルバトスを地下深くまで突き落とす。モビルアーマーはその巨体で穴をふさいでしまう。

落下していく間もバルバトスは常に体で壁を削っていく。

ものの数秒でバルバトスは一番下までたどり着くと静かに鎮座してしまう。

「動け……頼む!!」

「いらつしやい。サブレ」

広い空間の端に横長の窓が付いておりその奥にソニアがいつもの白髪姿をこちらに見せる。しかし、俺の視線はバルバトスの隣に立っているガンダムフレームの方に向いていた。

「ソニア……これは？」

「ガンダムエデン。あなたが求めていたガンダムよ。でも、このガンダムは一つだけ問題があるの。サイコ・フレームとのシステム連動の際に強い脳波を持つものしか起動できなくなってしまうってね。武器とサイコ・フレームとの連動もあつたし……それで、ぶっつけ本番で悪いけど、戦いたいなら今すぐ起動実験を試すわよ」

俺はソニアの話聞きながら黙ってコックピットの中に入っていく。座席が沈んでいき、お決まりの小さな画面が座席の下から小さな画面が上がってくる。

ここでいつもと違う行動が起きた。周囲を囲む360。モニターが虹色の光を一瞬だけ輝かせた。

その瞬間にコックピットをはさむように設置しているパーティクルドライブ一体型エイハブリアクター通称『PHリアクター』（名前が長いから略称が欲しいというほぼ全員からの願いで命名された）を起動させる。

小さい画面では両サイドのPHリアクターの連動率が上がっている、順調に上がっていた連動率が60%の段階で止まってしまい、少しずつ落ち込んでいく。

「なんでだ!? 順調に上がっていたのに!!」

「やつぱり……これでも一番高い方なんだけど……」

ソニアの表情に微かな焦りが見え始める。俺は操縦桿を力強く握りしめながら何度も何度もつぶやく。

「頼むよ……頼むから動いてくれ!!」

おれが叫ぶと同時に俺の両手に色々な人々の手が重なる。

『君の願いは何?』『ガンダムは人の願いの象徴』『ガンダムは希望の象徴』『いつだってガンダムは人々を助けてきた』『争いが起きる度にガンダムに乗るパイロットたちは人の心と心を繋いできた』『君だってできるはずだよ』『あんたもガンダムのパイロットなのだから』

『『さあ、最後のガンダムを起動させよう』』

俺は祈りを拳に乗せる。

「ガンダム……目覚めてくれ!俺は救いたただけなんだ。仲間を!家族を!!彼女たちを!!だから目覚めろ!!」

とたんガンダムの連動率が再び上昇し始める。

「ソニアさん!!連動率が一気に上昇していきます!」

「70、80……100!やったわ!」

しかし、連動率はさらに上昇していく。作業を手伝っていた作業員が少しずつ声のトーンを落としていきながら告げていく。

「120……150……200%突破」

すると、ガンダムエエンの体中から虹色の粒子が格納庫中を包み込んでいく。

とたん様々な人の意思が俺の体を突き抜けていく。

どこかで赤子が泣いている、子供が遊んでいるようだ、家に帰ろう

とする大人たち、縁側でぼんやりしている老人たち。そのすべての光景がその場に居るような感覚になる。

それだけではない、コロニーが落ちてくる光景から様々な戦争の様子が見えてきた。

そんな中には奇妙な形をした金属生命体のような存在や、ガンダムに見えないようなヒゲのモビルスーツが戦っている光景まで様々な戦いが一瞬で過ぎ去っていく。

そのすべてに出てくる『ガンダム』という機体。そして、戦う少年たちの苦悩の連続。

俺はようやく自分が生まれてきた意味を知ったような気がする。

ゆっくり目を開き静かな声でソニアに告げる。

「ソニア、上部ハッチを開けてくれ」

「え、ええ」

いまだガンダムエデンが起こしている現象に結論が出ないようであり、混乱しながら上部ハッチが開く。ソニアは一瞬で脳内を切り替え、アナウンスを格納庫内に響かせる。

「EDM-Ω01ガンダムエデン、発進どうぞ」

俺は一瞬だけバルバトスの方を眺める。

ありがとうなバルバトス。

「サブレ・グリフォン！ガンダムエデン！出るぞ！」

勢いよく旅立つエデンは戦場に向かっていく。

サイガ、オルガ……見ていてくれ。俺は今度こそ守って見せる。仲間を家族を彼女たちを！

## アイン・トゥルーIV 《最後のガンダム》

17

月面ハッチが開くのを待てばいいのに、俺はエデンのライフルでハッチをぶち壊すという、後々に始末書になりそうになりそうな行動を後悔することなく、俺は月面から少しだけ離れたところで戦場を確かめようとする。

明楽とシノが辛うじて前線を維持しているが、そこに戦艦が戦いに関わって辛うじて押し切られないようにしている。

「行くぞエデン。リングファンネル、加速モード」

背中にくつついている八枚に分かれるリング状のファンネルが淡い青色の粒子状の光を放ち始める。淡い光が強い光へと変わっていく。途端にエデンは消えるような速度で戦場に向かった。

すると、モビルアーマーが口から放つ屈曲ビーム砲をヴァルハラに向けようとする。しかし、その攻撃をグシオンがバルバトスが落とし耐熱シールドを使用して攻撃を受け止めようとする。しかし、もう一つの屈曲ビーム砲が別の方向からヴァルハラを襲う。

その土壇場のところでエデンの両腕のビームシールドで攻撃を受け止める。

「サブレ?」

「先輩!」

俺はそのまま上方の方に移動していく。ボロボロのモビルスーツと今にも落ちそうな戦艦まで存在する。

この後アルベルトからどれだけの説教が待っているのか考えることすら鬱になりそうだ。

それ以上にこのまま戦場を拡散させるわけにはいかない。

俺はエデンでテールビームブレードを両方ともつかみ強引に戦場から離脱させていく。ある程度離れたところで手を放して改めてモビルアーマーに向かい合う。

「こいよ。ここなら邪魔されずに戦える」

背中にくつついているリングファンネルが頭部の上に移動すると



その姿はまるで本物の天使のように思えた。

リングファンネルを周囲に展開させ防御シールドを展開させる。屈曲ビーム砲の攻撃を拡散させる。

「Iフィールド実装テスト終了。続いてバスターモードのテストを行う」

俺はリングファンネルを二つの円状に展開させ、それぞれの中心に赤い光の膜を作りそこをライフルのビームが貫通するとフラウロスを超える高出力バスターライフルがモビルアーマーを攻撃した。

モビルアーマーの一機を貫き、もう一機はテールビームブレードを犠牲にする形で回避して見せる。

「お前たちは……なんなんだ？お前達は……」

俺はビームサーベルを抜き取り、モビルアーマーの屈曲ビーム砲を出そうとする頭部に向けて貫く。

「なんなんだ!?お前は!!」

その瞬間に俺の脳内にサイコフレームを経由したモビルアーマーのパイロットの脳内を映し出す。

どこか遠い研究所、重苦しい培養器が空間を苦しめているように見える。そこにククナが歩いてきて培養器の中の存在を微笑んでみる。その後ろから別の男が歩いてきたところで俺はその男の正体がエクスだとは思えなかった。

「うそ……だろ?それがエクスの正体?」

爆発していくモビルアーマーを離れながら見送ると俺はどうしようもない苦しみに襲われた。

「ああ……あああー!!」

苦しみじゃない、これは後悔だ。

こんな結果なら早いことオルガと出会っていればよかったと、もつと早くに気づいていればという後悔が襲う。

パイロットスーツごしの涙があふれ出てくる。

オルガ・イツカ、サイガ・フルーゲル。彼らの犠牲は俺がもう少しだけ努力と運があればなんとかなったはずだ。なのに……俺は!

どうしてつと考えてしまい、自分自身に絶望した。苦しみが胸の奥

からこみあげてきて、息苦しさが襲う。

自分を呪いそうになった。

18

戦闘が終わるとそのまま船には戻らず、まっすぐ開発局に戻ると急ぎ足で近くの休憩室で駆け込みそのまま近くの椅子に勢いよく座る。ため息すら出てこないほどに体が重くそのまま椅子に体の重力を預ける。頭を抱えて悩んでしまう。

あの研究所からの帰り道の時、レレが言っていたもしかしたらという話が当たっていたという事実が今更ながらどうしようもない。

数分経つと休憩室にクレアとレレが心配そうな表情を浮かべながら部屋に少しづつ入ってくる。

クレアが「大丈夫ですか？」と尋ね、レレはひたすら無言を貫く。しかし、俺は一瞬だけそちらを向くともう一度俯いてしまう。

「レレ……お前帰り道に言ったよな。アイン・ダルトンの正体。今更どうしようもないとわかっているんだけどな」

初めてその可能性に触れたとき考えないようにしていた。でも、開いてみればそれが真実だったし嫌になりそうだった。

「分かっているんだ。今更どうしようもないし、どうしても苦しさが込み上げてくるんだ。オルガやサイガを救えたんじゃないかって」

するとクレアが右側からレレが左側から俺を抱きしめる。

「でも……あなたは誰にも言わないと決めたのでしよう？ だったら言っってはいけませんよ」

レレにそういわれると俺はオルガとの約束を思い出す。すると今度はクレアが優しい声を放つ。

「サブレは優しいのですね。苦しみと悲しみを受け止めようとしている。できれば私達にも背負わせてください」

苦しさと後悔から涙が次々とあふれ出てくる。

俺は涙を流しながら俺はアインとエクスの正体を口に出す。

「エクスの本当の名前は『アイン・ダルトン』だ。そしてギャラルホルンの『アイン・ダルトン』はオリジナルのクローン強化人間だ」

19

動く金属など実際触れて触ってみれば気持ち悪い感触がすると人間は言うのだろうとPNO1は金属の無機質な廊下を歩いていく。するとただ広い空間に出る。

縦横高さが一キロほどの空間に球体の物体が浮かんでいる。アカシックレコードの本体だとは思わないだろう。一キロの部屋の半分にも満たない大きさの物体がアカシックレコードとしての記憶媒体であり、意思そのものであり魂といってもいいだろう。

PNO1からすれば自身のオリジナルといってもいい存在であり、いくなれば自分にとつてはクローンというべき存在であるPNO1という名前を恥じることは無い。

アカシックレコードの足元へと移動するとアカシックレコードからの光がPNO1の記憶領域を覗く。

「どうやら予定通りサブレ・グリフオンの覚醒へと導いたようですね。これからは介入を控えるとしましょう」

「はい。しかし、彼はここまで来れるでしょうか？」

PNO1の素朴な疑問にアカシックレコードは迷ったそぶりを見せずに素早くこたえる。

「それを判断する必要はありません。私達はサブレ・グリフオンとアイン・ダルトンを試し、どちらの答えが人類の答えかを聞くだけです」

どうしてほしいんじゃないのかではなく、あくまでも自分達は人類の道を見守るだけ。というスタンスを決して崩さないアカシックレコードの落ち着いた姿勢にPNO1は低姿勢を崩さない。

「そのための道は作りました。あとは……どちらが人類の答えを示すかです」

サブレ達が戦っている間にアカシックレコードはその道を作り続けていた。PNO1はその間にサブレ・グリフオンが覚醒できるようにと裏舞台から整えてきた。

全ては……

「全ては人類が進化するために」

20

全ての人間が幸福になることはできないし、自分達はそれが分かっ

ていてこの世界に居場所を求めた。その結果がマクギリス・フアリド事件だったし、だからこそその結果を噛み締めたつもりだった。

悔しさはもちろんあったし、それ以上にむなしさだってあった。でも、そんな結果があったとしてもこれからはオルガの命令と共に生きていくつもりでいた。しかし、ビスケットやシノはその命令からある意味遠ざかっているような気がした。しかし、もしかしたら彼等こそが「止まるんじゃない」という命令を体現しているのかもしれないとユージンは考えるようになった。

そもそも、彼らはオルガの最後すら見ていないのだ。

どんな気持ちでその後を過ごしたのか。少なくともビスケットに關してはIDの書き換えすらしていないように見える。そう考えたとき、彼らがどれだけ悔しく生きてきたのかを自分がどれだけ考えなかつたのかと悩んでしまった。

止まるわけにはいかないと自分を奮い立たせてきたつもりだった。もしかしたらそれ以上に奮い立たせてきたのは彼等かもしれないのだ。

コーヒーを少しだけ飲み遠い宇宙の先を眺める。

こうしている間だけでも面倒なことを悩まずにいられる。ような気がする。

サラからの不意打ちを回避するために人が多くいる場所を選んで行動していた。それが彼が食堂で彼が食事を終えてもい続ける理由である。

コーヒーが切れそうになっておりお代わりの為に席を立ち食堂のおばちゃんにコーヒーをもらうと、自分の席に戻る最中に窓の外で黒い大きなジムが通り過ぎるのを確認した。

そのままフラフラと窓にくつつきそのままジムの動きを視線で追う。

大きな図体に見合わず素早く動き続ける黒いジムは両肩にタンクのようなキャノン砲と両腕にバスターライフルを装備している。

おそらくでなくともあれがサラだということは誰でも理解できた。

ユージンはホツとした思いでそのままコーヒーを片手に食堂から

離れていった。

サラに会うたびにドギマギする自分がいてそんな自分に戸惑うのだ。だからサラを避けて逃げてしまう。

そのまま走り切り曲がり角で双子の兄妹に出会った。いや、兄妹かは分からないが、ぱつと見で判断してしまった。

「すまねえ。ちよつと前を見てなくてな」

俯いていた双子が同時にユージンを見ると改めつてその幼さに驚かされる。

「気を付けろつてなもんです」

女の子がそんな激しい言葉遣いをするので戸惑ってしまうが、それを隣の男の子がこれまた失礼な言葉遣いをする。

「待つてノイン。もしかしたらこの人盲目な人なのかもしれないよ。だからこそ僕たちにぶつかったのかも」

「失礼なこと言うんじゃないよ！そもそもてめえら達みたいながきがどうして船に……」

といったところで彼らの制服がEDMの緑色の制服を着ていると、いうことに気が付いた。

「失礼なのはあなたなのです」

「僕たちはれっきとしたEDMのパイロットなのですよ」

「私達は」「僕達は」

「サブレ・チルドレンですから」

こんな子供がっと考えてしまうが、幼く見えるだけでれっきとした大人なのかもしれない。

「二年齢は20歳です」

「幼!!」

つい口から本音が出てしまうユージンはとっさに口元を押さえる。ノインと呼ばれた方はホッペを膨らませ機嫌を損ねてしまう。代わりに男の子の方が自己紹介をするために一歩前に出る。

改めて背の低さに驚かされるが、そもそも背がユージンの胸にも届かないというのはいかがなものだろう。

「僕の名前はジャニー・モルデンと申します。こっちは双子の妹のノ

イン・モルデンです。先ほど申した通りサブレ・チルドレンです」  
「じゃあ、お前たちは七年前の作戦にも……？」

「はい、参加していました。勿論、サブレ師匠は反対しましたが」

無表情で答えるジャニーに対してノインは不機嫌そうな表情を崩さない。

感情を表に出そうとしないジャニーに、感情表現が豊かなノイン。

「どっちが下でどっちが上なんだ？」

「僕が兄でノインが妹です」

淡々と答える間も決して瞬きをしない兄に機械じみた何かを感じ取る。

「お前は機械かよ」

素直な感情を吐露するがその言葉にノインが素早くかみついた。

「失礼過ぎる！ ジャニーはサブレさんの事だったら一生かけても話しかけられるし！」

「それもどうなんだよ」

ノインの的外れな言葉に律儀に突っ込みつつジャニーとノインを交互に見る。

ノインは透き通るような茶髪を後ろで集めて束ねており顔は幼く見えてしまうほどに童顔である。ジョニーは短めの癖の強い茶髪に背の低さとは裏腹に凛々しい顔つきをしている。

「こう見ると兄貴の方がましに見えるよな」

「し、失礼だし！ あんたみたいなアホ面みたいなやつは一生モテないし!!」

唐突な喧嘩がその場で始まりお互いがお互いに罵り合うような場面に今度はサラが遭遇する。

「あら？ 二人共彼と仲良くなったのですね」

「サラ姉！」

二人同時にサラに飛びつく姿を見ると心の底からのツツコミが口から叫びだしてくる。

「幼!! サブレってやつ以外にも性格が変わるじゃねえかよ!!」

大声を聞いたノインとジャニーが同じ不機嫌な表情を浮かべなが

らユージンをにらむ。睨む視線はユージンに「うるさい」と言っているように思える。

「うるさい」

「口に出すんじゃないよー!」

サラは三人が罵り合いを繰り返す姿に微笑みを絶やさない。

「大体サブレさんがあんた達を連れて来いっていうから来てやったのに!!」

「ノイン!!」

ジャニーとサラが今まで聞いたこと追ないような声を出し、それにビクツとしながら怯える姿があった。

「何の話だ? サブレが連れて来い? 何の話だよ?」

ジャニーとサラはやってしまったという表情を作りどうするかアイコンタクトで話し合おうとサラが代表で前に出る。綺麗な瞳からは考えられないほど真剣な色をしていた。

「このことは誰にも話さないください。サブレさんはマハラジャさんとアルベルトさん達と話し合い、木星帝国が火星侵攻を進めるのではないかと想像していました。だからこそ、その前に人質になりそうなサブレさんの兄妹達だけでも回収して来いと言われています」

サラの襟首を掴んで鋭くにらみつける。一度だけ俯き怒鳴る様に叫ぶ。

「なんで……なんでそれを言わねえんだよ!!」

「それを言えばあなたの事ですから必ず引き返すと言いついでしよう。だから言えなかつたのです。一度回収した場合は絶対に引き返さずにつれて来いと言われています」

「理屈は分かるけどよ……理屈は分かる。けど……」

理解しているつもりだ、それもクツキーとクラツカを考えた結果なのだろう。できることなら戦場から遠ざけたいという気持ちもわかる。

それをクツキーとクラツカに話せば戻ると言い出すだろう。

それはユージンが戻っても同じことを言い出すだけなのだ。

「分かってる。そうだよな」

「理解してほしいとは言いません。でも、サブレさんはあなたから文句を言われても仕方ないと思っっています。ですから文句はサブレさんによりしくお願いします」

サラの真剣さの前に気圧されそうになったが、その瞳の奥の本当の感情をユージンは短期間であるが一緒に居て読み取れるようになった。

「お前……サブレってやつに責任を押し付けようとしているだろ？」

「よろしくお願いします」

頭を下げずに表情を読みとらせようとしないサラに読み取ろうとするユージンの姿はジャーニーとノインの笑いを誘っていた。

21

地球圏各地で反ギャラルホルン運動が起きる中、テレビではその様子が起きていた。その報道の中身はラスタルやイオクの悪行の数々が次々と映し出されるが、最後に映し出されたのはガエリオとジュリエッタがしてしまったアフリカの村を焼き払うという悪行が連続で映し出される。

同時にラスタル・エリオンなどのセブンスターズの写真などを焼く人々の映像も映し出される。

テレビ中継を見る度にクーデリアは心を痛めてしまう。胸の前手のひらを握りしめ、テレビに向かって祈ることしかできない。

今更ギャラルホルンに味方することは自分達の立場を悪くするだけだということはよく理解している。

現在火星のギャラルホルン支部も自分達の身の振り方を考えている。

火星は取り立てて問題を抱えているわけではないが、そう遠からず火星の人々から何らかの抗議運動が起きてもおかしくはない。

クーデリアはなるべくそうならないようにと努力を重ねているが、どうにもならないのが正直なところだった。

火星の人々の中にも今までの不満をここで爆発させてしまおうとしている連中は存在する。

「どうしてこんなこと……？」



中には元鉄華団のメンバーを雇いたいと孤児院まで詰めかけるような連中までいる始末だ。クーデリアの元にも多くの人が駆け込んできた。

「このままでは再び火星内でデモ活動が起きかねません。何とかして対応しなくては……」

「しかし、お嬢。正直な話、これ以上押し付ければこっちがギャラルホルン派として弾圧されかねません」

チャドの言葉に表情をさらに曇らせ俯くクーデリアはどうしたらいいのかと悩んでしまう。鉄華団の時も自分は何もできなかったと思いつき後悔する。

「しかし……」

あきらめきれないという感情が沸々と湧き上がる。チャドは真剣な面持ちで語り掛ける。

「決断をすべき時です。このままでは元鉄華団のメンバーの中にもデモに参加する者が出てくるかもしれない」

チャドの言葉にかつての三日月やオルガの姿が重なった。

「実際孤児院の方にもかなりの人が駆け込んできていると聞きます。どこから鉄華団の情報を聞いたのか？」

ふとドアを強く叩く音が聞こえる。

「なんだ？」

チャドがドアを開けようと手を伸ばすとドアの奥から叫び声が聞こえてきた。

「開けてはいけない!!」

とたんにチャドは反射的に体をひねらせてクーデリアの方に飛びつく。すると大きな爆発がクーデリアの視界と耳をふさいだ。クーデリアの上からチャドが覆いかぶさり、爆発から身を挺して守ってくれる。

「チャドさん!!」

「大丈夫ですーそれより逃げましょう」

チャドはクーデリアと共に窓から外に出ていくと、壊れたドアから細身のスーツの男が姿を現した。

青と白の縦縞々の模様の服に胡散臭い笑顔、金と銀のまだら模様の髪に手袋と革の靴を履いている。

「先ほどの攻撃で亡くなつてくだされれば結構ですが……しかし、そううまくは行きませんか」

「誰だ!？」

チャドの叫び声を聞いても動揺するどころかむしろニコニコ度合いを増しているように思える。

「木星帝国より参りました。『F』と申します。以後お見知りおきお」といいつつハンドガンとナイフを片手にすたすたと歩いてくる。

「チャドさん?」

「クーデリアさん……逃げてください」

クーデリアはチャドの背中から血が流れていることに気が付いた。

「わ、私を庇って」

そんな時クーデリアのころろにあの頃の三日月の言葉が響いた気がした。

『俺の仲間をバカにしないで』

そんな時Fのの側面の壁が壊れハンドガンの弾がFを襲う。布で顔を覆った男が素早くナイフをFの喉元に伸ばす。Fはその攻撃をナイフで捌ききる。クーデリアとチャドの眼前で超人というべき二人の高速戦闘が繰り広げられている。

ナイフがそれぞれの急所目掛けて振り回し、ハンドガンの弾丸が部屋中の壁に当たっていく。一旦Fと覆面の男が大きく距離を取る。

すると下の方からサイレン音が鳴り響く。

「残念です。三日月・オーガスさんともう少しだけ戦えると思つていたのですが。では、クーデリアさん。いずれお会いしましょう。私は

『F』木星帝国実行部隊幹部でございます」

そう言うとFはそのまま爆炎にまぎれて姿を消した。

しかし、クーデリアは他に気になることがあった。ゆっくりと立ち上がり、三日月と呼ばれた覆面の男の方を見る。覆面の男はチャドを片手で抱えるとそのまま部屋から出ていこうとする。ドアがあった場所で一旦止まりクーデリアの方を見る。

「私について来いど？」

三日月と呼ばれた男はコクリとうなずき、部屋を出ていく。

『F』の出現をきっかけに火星は大きく荒れようとしていた。

同じとき、ギャラルホルン本部はEDMによって包囲され、最後の時を迎えようとした。

《アイン・トゥルー編終わり レインボー・スカイ編開始》

## レインボー・スカイI 《裏切りの真意》

1

ギャラルホルン本部がEDMの主力隊と反ラスタル勢力によって囲まれてかれこれ24時間が経過していた。本部防衛には最後まで戦うと信じたラスタル派がキツシュなどのモビルスーツで戦っており、一部の民間人は宇宙に逃げるために多くのシャトルが発射体制で待機していた。

ガエリオは防衛戦の指揮を執りつつ実家に顔を出し、父親を説得しなければいけなかった。

「父上、そろそろ脱出のための準備を……」

「う、うるさい!!」

ガエリオの父ガルスはガエリオに向かって花瓶を思いっきり投げつけガエリオは一瞬だけ目をつぶると花瓶はガエリオのすぐ隣をかすめていった。

「おまえの所為で……」

「罵倒なら後でいくらでも受けます。今は逃げる準備を……」

「うるさい！お前が……!!お前なんか生まなければよかった!!」

ガルスのそんな言葉に衝撃を受け、ガエリオは一瞬だけ俯く。

「ですが……」

ガエリオは何とかしてガルスを説得するため一歩前に出る。しかし、そんなガエリオの行動とは裏腹にガエリオの右腕は懐にあるハンドガンを取り出す。

「お、お前……お前は実の父親を……!?!」

「ち、違う！右腕が勝手に？」

ハンドガンを握りしめた右腕をまっすぐ伸ばし銃口をガルスの左胸に向ける。ガエリオは左手でハンドガンの銃口の先を変えようと努力する。

「なんで!?!勝手に？」

「や、やめろ!!」

ガルスは覚えながら後ろに下がっていく。少しずつ指先に力が入

る。引き金が確実に引かれていく。そして、乾いた発砲音と共にガルス  
の心臓を貫いた弾丸。左胸から血が大量に溢れ出てくる。

「お、お前は……私……を……ころ」

そういつて息絶えてしまう。

「ど、どうして……俺は？」

「やってしまいましたね。お兄様」

「ア、アルミリア!」

振り返るとそこには木星帝国に所属した妹のアルミリアが静かに  
たたずんでいた。そして、その後ろからエクスが仮面を着けたまま立  
ち尽くす。

「エクス!! 貴様かあ!?!」

ガエリオはハンドガンの銃口をエクスの方に向ける。しかし、再び  
右腕が言うことを聞かない。

「どうしてだ!?! なんで? 俺の右腕なのに!?!」

アルミリアは悪そうな表情を浮かべている。ガエリオはエクスに  
対して睨むことをやめない。

「俺の体に何をした!?!」

エクスが答えようとしない代わりにアルミリアが答えようとする。

「タイプEの阿頼耶識にはある人物の為に最低限の通信機能が付いて  
いるの。元々これは木星帝国が量産型人工人間の感情プロトコルの  
完成の為にクローンに取り付けていた疑似阿頼耶識、それがタイプE  
の真相。だから、最低限の支配権を握ることができる。だからこそ、  
エクス様には同じタイプEをコントロールすることができる。まあ、  
自我が強くなると人体の一部しか支配できないらしいけど」

「そ、それができるのがエクスだというのか?」

ガエリオは衝撃を受けてしまう。しかし、それ以上の衝撃を受ける  
羽目になる。

エクスはゆっくりと仮面に手を取りゆっくりと外していく。同時  
に金髪も少しづつずれていくのが分かる。金髪の奥から綺麗な黒い  
髪が現れた。顔は多少釣り目だが整った顔立ちをしている。

そして、顔が全て現れたときガエリオは今まで以上の衝撃を受けて

しまった。フラフラした足取りで後ろに下がると、その人物の名前を口に出す。

「アイン？アイン・ダルトン？」

エクスはあえて喋ろうとはせず悪そうな表情を浮かべるだけだった。

2

「本当なのかよ？エクスとかいうやつのは正体がアイン・ダルトン本人っていうのは？だったら俺たちが戦ったあのアインは何なんだよ？」

シノが多少前のめりになりながらコンテナに背を当てて落ち着いた物腰で話を聞いているサブレに尋ねる。

サブレはガンダムエデンを見上げている。

「ああ、ここからはおおよそでしか語れないが、元々ギヤラルホルンに所属していたアイン・ダルトンはオリジナルのクローンとしてギヤラルホルンに渡されたんだろう。父親からの紹介というていだな」

レレが手元のタブレットを操作しながら話を変わる。

「アイン・ダルトンには元々阿頼耶識と類似した人工器官が付いており、アイン・ダルトンが得ている経験などを木星帝国が欲していたんだと思います。それをそのまま利用して改良されたのがタイプEだと思えます。ですが……」

このシステムには大きな穴が見つかった。

「もし、このまま同じシステムが使われているなら多少近づければ体の一部をコントローラはできるはずです」

「ああ、それを利用すればガエリオ・ボードウィンを利用することはできる。もしかしたら、明楽からの攻撃をむしろ望んでいたかもな。精神崩壊を起こせば体に乗っ取ることが可能だからな」

明楽は先ほどから大人しくコンテナの上に座っていた。サブレは静かな視線を一瞬だけ明楽に向けそのまま視線を外す。

「まあ、エクスが……いや、アインが何を望んでいるのか分からん。もしかしたら、自分達以外の存在はどうでもいいのかもな。ガエリオ・ボードウィン達がどうなろうと知ったことではないのかもしれない

な」

サブレは目を瞑りガラス越しに出会った仮面の男を思い出す。エクスが笑っているのかも分からないあの男を思い出す。

戦って銃口を向けなければいけない。それを恐ろしいと思ったことはサブレには無かった。

「じゃあ、俺達も戦うってことでいいんだよな？」

「ああ、明楽とシノはガンダム偽装解除が終わり次第出立だ。兄さん達はここで留守番だな」

レレとクレアが不満そうな表情をかすかに浮かべるが仕方ないつつばやいて手を引く。

サブレたちの後ろではフラウロスとグシオンの偽装解除作業が進められており、作業員のタブレットにはフラウロスの固有周波数が変化していくのが見て分かった。フラウロスという名前が『ガンダムメテオ』に変化していく。

グシオンは『ガンダムシムカス』に変化する。

「しつかし、ようやく本来の姿に戻ったぜ。今でも名前は『ガンダム流星』がいいと思うんだけどな」

「センスが無いと言われたことを少しは思い出せよ」

サブレのツッコミと同時に背中についてた追加エイハブリアクターがトラックに乗ってそのままどこかへと連れていかれる。

「なんでグシオンがシムカスなんて名前になるんだ？」

シノの素朴な疑問にこれまたサブレが答えた。

「単純な強さの文字を組み合わせたものだ。明楽に相応しいだろう？ シンプル・イズ・ベスト」

失礼なことを言いつつ明楽の方を再びちらつと確認するが、明楽はどこか不満そうな表情を浮かべる。シノはそれとは知らずにメテオの元に向かって歩き出す。サブレは明楽に向かって手を伸ばし来いとジェスチャーで指示を出す。

「珍しく不機嫌そうだな」

「先輩は悔しくないんですか？」

サブレはようやく明楽の不機嫌さの理由を把握する。サブレは明

楽の鼻先をつまんでしまう。明楽は引つ張られながら抵抗をし、サブ  
レはものの十秒ほどで手を離してニヒルな微笑みを浮かべる。

「明楽、昔言ったよな？ 忠誠心は相手をなくせばすぐさまに復讐心にと  
とって代わる。ギャラルホルンには特にその傾向が強い。大切な相  
手をなくせば復讐の為に部隊を動かす。それはカルタ・イシューやガ  
エリオ・ボードウィンも同じことだった。彼らは身内を亡くしたばか  
りに復讐心にかられた。厄介なのは彼らがそれを自覚していないと  
いうことだ」

サブレは明楽の頭に手を載せる。

「気が付かない復讐心というのが一番厄介なんだ。明楽、復讐心で戦  
うな。その感情を乗り越えて見せろ。それができればお前は本当の  
意味で一人前だ」

明楽は黙って視線をサブレの瞳に合わせる。

「俺にできると?」

「ああ、俺は信じている。お前なら俺に迫るだけのパイロットにな  
るってな」

サブレの言葉を飲み込み、少しだけ考えてみる。明楽は上を仰いで  
いた。

3

シノは偽装が終わりつつある『ガンダムメテオ』をしたから満足げ  
に眺めていると、左隣から突然に話しかけてきた。

「お久しぶりですね。シノさん」

「げっ！マーク?」

緑色の毛先に癖がついている長い髪。不良学生のような目つきや  
口元、背はシノほどではなく170cmほどであると把握できる。

シノにとってサブレ・チルドレンの中でも仲良くできないと思わせ  
てくれる相手であった。

マーク・イツキはノルバ・シノとの仲をサブレはよく知っている。  
サブレ自身はチルドレンといわれる事を特に嫌がるが、今更だとあき  
らめていた。

チルドレンのメンバーは『明楽・アルトランド』『レオ・クリスハイ



ト』『サラ・ペールン』『ジャーニー・モルデン』『ノイン・モルデン』『ノメ・メイデン』『ノルバ・シノ』『マーク・イツキ』『ジョシユア・レッドハイ』『渉・アスカ』の十名である。

『明楽・アルトランド』は優れたパイロットセンスを持っていて全体的にバランスが良い。操縦技術はサブレに次ぐ実力者である。

『レオ・クリスハイト』は近接戦闘だけを言えばサブレと互角のパイロット。

『サラ・ペールン』は遠距離戦闘が得意とし、スナイパーとしても一流である。

『ジャーニー・モルデン』と『ノイン・モルデン』はコンビネーションがうまく、基本的に二人で行動することが殆どである。

『ノメ・メイデン』は操縦技術が高く、本人の希望もありそのままヴアルハラヴァルハラの操縦士に志願した。

『ノルバ・シノ』は元々鉄華団で鍛えていただけであり、基礎能力は高かった。まだまだ発展途上だったがハロのサポートを受けることで他にも追隨できる実力者になりつつある。

『マーク・イツキ』は重砲を得意とするパイロットで実際作戦本部も重宝するパイロットである。

『ジョシユア・レッドハイ』はワイヤーやブーメランなど変則戦闘を得意としている。

『渉・アスカ』は可変戦闘などを使用する高機動一撃離脱戦法を得意とするパイロットである。

それぞれが強力なパイロットである、最大の問題は全員が性格的な問題を持っているという事である。一人一人が癖の強いパイロットであり、それを束ねることができるサブレ・グリフォンはすごいという噂が独り歩きしていた。

そんな本人の希望も叶わぬままサブレは無視を続けることにした。そんなマークもその一人だったが、シノは性格的な理由もありよく衝突していた。

「お前がこんなところで何しているんだよ？」

シノが嫌味を込めて尋ねるとマークはニヤリと笑いながら答えた。

「いえ、新型ガンダムフレームが完成したので私だけでもサブレ先輩と共に実戦テストを行うことになったのですよ」

シノはその予想をしていなかったわけではない。先ほどから左端にマーク専用機と思わせる緑色にカラーリングされた分厚い装甲を装備しているごっついガンダムが見えていたからだ。

両肩に重砲型ビームタンクを背負っており、腰にも同型が付いている。両腕にはバスターライフルを二丁装備済み。

その凶体から見てもお相撲さんを彷彿させる大きさを持っている。

「目立つ大きな体だな」

皮肉を込めながらシノが言うとマークも負けじと答える。

「細いばかりで一撃で死んでしまいそうな機体と違って防御力にも気にかけているんですよ」

お互いに睨み合いながらいがみ合う中、サブレが後ろから話しかける。

「お前たちは仲がいいな」

「よくない」

明楽と一緒に歩いてくると、サブレはマーク専用ガンダムを見上げる。

「ガンダム……カノンかな？」

「よく分かりましたね」

マークは素朴な疑問をサブレにぶつけるが、サブレは黙ってガンダムカノンの額を指さす。他三人の視線がサブレの指先の方に向けるとそこには他のEDM製のガンダムフレーム共通の赤い五角形の結晶のような部品が付いていて、そこにはガンダム『ガンダムカノン』と書かれていた。

「よく見えたな」

シノが関心したような声を上げ、明楽は先ほどの話などすっかり忘れたように隣に並ぶガンダムの名前をひとしきりに確認していた。

「あんなところに名前を書くなんて……」

「ソニアじゃないだろうな。あんな地味な目立ち方をあいつはしないだろう」

サブレがそういつて見せると全員の脳裏にソニアが渋々ながらアイデアを採用した姿を想像できた。

「要するに次の作戦にはマークも参加するの?」

明楽の素朴な疑問にマークは「はい」としか答えなかった。代わりにサブレが代表で三人に作戦内容を伝えた。

「エデンを入れた四機のガンダムフレームの調整が終わり次第の作戦を始める。ギヤラルホルン本部は現在EDMの主力隊により包囲されている。俺達は大気圏を突破して直接本部を叩く。作戦参加人数はここにいる四人で行う」

シノがおどおどと手をあげて質問を繰り返す。

「それってよ……俺達だけでギヤラルホルンを潰すってことか?」

「無理ならシノさんは外れます?」

マークの挑発に正面から受け取ったシノは「俺一人だけでも十分だよ!」と返してきた。サブレは話をスルーし、引き続き作戦内容を告げる。

「基本は俺がアインの相手、明楽はジャックというパイロットだ。こいつはギヤラルホルン内に侵入していると報告があった。邪魔をされたらたまらん。シノはアルミリアの相手だ。マークはその間にギヤラルホルン本部を潰せ」

マークはあくどい微笑みを浮かべ尋ねる。

「やり方は?」

「任せる。好きなようにしろ」

マークは握り拳を作って喜びを表現する。シノが小さく舌打ちを鳴らす。明楽は二人の関係をキョトンとしながら見続けていた。

「以上。反論意見は認めない。行ったら後でひどい目に合うと思え」

「「独裁政治だ」」

恐怖による支配を宣言するサブレに同時につぶやいた。

4

握りしめたハンドガンに嫌な汗をかき始める。

心の中で「嘘だ」という言葉を何度も何度も思い描く。しかし、同時にガエリオの記憶の中にいるアイン・ダルトンの姿を鮮明に映し出

す。

息が荒くなっていき、呼吸が一定しない。足元がふらついてくるとガエリオはもう一度正面の黒髪の男を見つめる。

そこになってようやくかかってマクギリスがモニターを名乗った時にカツラと一体になった仮面を着けていたと思い出す。

ようするにあれと同じ構造なのだろう。

ガエリオは一度でもエクスの顔を見ていなかった。

「おまえ……お前は?!?」

「情けない声を出さないでください」

その顔で、その声はアインを嫌でも彷彿とさせる。それを意識するのが嫌で視線を逸らす。

「そうやって逃げてきたんですよね。お兄様は。マツキーからも、カルタという女性からも、いろんな人たちからも逃げてきた。本当に情けない。そもそも、ドルトの時にマツキーに意見を聞いていればマツキーが裏切ることには無かった……」

「だ、黙れえ!!」

アルミリアの言葉を怒鳴り声で遮るガエリオはその場で激しく憤りを見せる。ハアハアと息づかいを激しくさせながら場を静まり返させた。

しかし、そんな言葉ではアルミリアの言葉を完全には止めることはできなかった。

「結局お兄様の責任なんですよ。アインという人はちゃんと言ったはずですよマツキーに意見を聞くべきじゃないかって」

確かにそう尋ねた。しかし、ガエリオは……

「必要ないと返したんだっただか?その結果マクギリスの部隊を勝手に動かした挙句失敗。そのうえでカルタ・イシユを頼ってカルタと鉄華団の間に因縁を作ってしまった。そう、全部貴様が悪いんだ」

エクスことアインはガエリオの見下すような視線を送り、ガエリオはその視線に体がうまく動かなくなる。

「その上、アインやカルタが死ねば全部マクギリスが悪いと駄々をこね。自分も紛争を引き起こしていたアリアンロッドの人間だという

のにそれを黙認する。都合のいい人間だ。傍から見ていたが、とんだ喜劇悲劇だと思つて楽しませてもらった」

「お、俺は……」

「実際真実を知っている者からすれば爆笑必死だったよ。実際木星帝国内の幹部メンバーには君の人生は爆笑コメディーに見えていたよ。うだ。特に『F』には好評だった」

アインの脳裏にFが爆笑した姿を思い浮かんだ。

ククナは「よくできた悲劇譚なこと」と途端に興味を失っていた。

「誰も裏切っていないよ。それは分かるだろう？君の知るアイン・ダルトンは無意識に協力をしていた。カルタもマクギリスさえも裏切っていない。裏切っていたのは……君だけなんだよ。みんなが誠実であろうとした中、君だけが裏切った。親友を、部下を……みんなの期待を」

ガエリオが最後に壁に背中を押し付けるとアインの言葉を何度も脳裏を襲う。しかし、その瞬間にガエリオとアイン、アルミリアの間にモバイルスーツの手が遮りガエリオを連れていく。

ガエリオはその姿を目撃した途端驚きを隠せない。

「じゅ、ジュリエッタなのか？」

ガンダムバエルが黙つてガエリオをさらい去っていく。ガエリオの必死の言葉にジュリエッタが返すことは無かった。

「ま、まもる……ぜつたいに……こんどこそ」

「ジュリエッタ……お前……!?!」

意識が戻ったわけではなかった。単純にガエリオのピンチに無意識といつてもいい意識状態で彼女は立ち上がったのだ。

「予想通り……」

しかし、そんなジュリエッタの前にジャックの青いバエルが立ちふさがった。しかし、その姿はさらに細身になっていて、背中の翼はX字の板に変わっている。固有周波数も変化していて名前は『ガンダムブルーレイ』に変更されている。

アルミリアはガエリオを下ろし、戦うために武器を取る。

「よ、よすんだ!!アルミリア!!」

後ろからは今度はアルミリアのキマリス偽装解除型が立ちふさが  
る。

腰のドレス上のファンネルはそのままに、頭部は騎士よりクイーン  
を思わせるデザインに変更されている。レイピアのような近接武器  
に小型のシールドを持っていた。名前は『ガンダムクイーン』に代  
わっていた。

「お兄様……キマリスに乗ってください。殺してあげるから」

アルミリアはガエリオの方にキマリスを投げつける。ガエリオは  
一瞬躊躇するがジュリエッタがガエリオを守る為に戦っているのに  
逃げるわけにはいかなかった。

乗り込んで改めてアルミリアの方を見つめるとその後ろから見た  
事の無いガンダムが姿を現した。全体的にかつてのガエリオの乗機  
でもあった『ガンダムヴィダール』と彷彿とさせる角張ったデザイン。  
東部のアンテナは四十五度の角度に広がっており、背中には目立つよ  
うな装備を見られないが、何かの噴出口が見える。それ以外にはビー  
ムライフル一丁とビームサーベルを二つ。それ以外は見受けられな  
い。全体的に黒と赤の色調をしている。

「エンペラーガンダム。アイン・ダルトン。さあ、裏切り者同士殺し  
合ってみるかね？」

裏切りの真意は本人たちにしか分からず。ガエリオは生き残る可  
能性が低い戦いに身を投じようとしていた。

その時少しづつ四機のガンダムフレームが近づいていた。

## レインボー・スカイII 《マモルという意味》

5

ギャラルホルン本部の包囲作戦の中にサブレ・チルドレンの最後の二人が参加していた。

ジョシユア・レッドハイは胸元大きく開けた奇抜なパイロットスーツを着ている女パイロットであり、真っ赤に塗り染めた髪を逆立てている。大きな奇声を上げながら操るジムは、小太刀のようなビームダガーを右手に握りしめ、ワイヤーでキツシユの動きを封じつつ上下左右に動き回りながら敵機を落とし続けている。

しかし、ジョシユア・レッドハイと呼ばれる女性パイロットの攻撃対象は、ギャラルホルンのキツシユではなくさらに前方で戦闘機形態に変形させたジムだった。背中に取り付けたミサイルタンクから大量のミサイルをばら撒きながらひたすら戦場を突っ切ったかと思えば再び戻ってくる。

その変形機構を取り入れたジムのパイロットがサブレ・チルドレンの最後の一人である渉・アスカであった。

ジョシユア・レッドハイが奇声を上げながら戦っているのに対し、渉・アスカは悲鳴を上げながら逃げ回っている。

渉・アスカ。サブレ・チルドレンにとってある意味個性の強さは周囲から認識されるために必要な身分証明書のような者なのかもしれない。それ故に彼らは問題児としてひとくくりにされる。そんな中渉だけは異彩を放っていた。

渉・アスカは個性が無いという問題児でもあった。

明楽と同じ黒髪で毛先が跳ねているのが特徴である。背丈はサブレと同じほどあるが顔立ちは少なくとも戦うような顔立ちではない。どこにでもいるようなおとなしそうな顔立ちは彼がパイロットであるとは思えないほどである。中肉中背の普通の男の子である。

彼は奇人である、ジョシユア・レッドハイとは逆の人間である。

ジョシユアは変人奇人の集まりであるサブレ・チルドレンの中でも最高の変人である。戦闘狂の露出狂という最高の変態であるジョ

シユア・レッドハイ。

それに対して渉は生まれも育ちも普通である。しいてゆうなら個性が殆ど無いのだ。そんな彼と彼女の話を最初にしておく必要があるだろう。

ジョシユアは辺境のコロニーのさらにスラム街出身であり、そんな孤児たちの中でも荒れ果てた生活を送っていた。幼いながらも人を殺すことに対してためらいを持たず、むしろ追いかけて、戦うことに生きがいを見出した。そして、出会うことになったサブレ・グリフォンに誘われるのだ、そして知るようになる、守るとい言葉の重みを。

渉はオセアニア連邦出身者であり、特別な家柄でも無くなんらかの特出すべき特技も無かった。また、親しい友人なども存在しなかった。そんな中、彼はEDMの教習学校に通うことを父親から勧められた。平凡な毎日を過ごす彼の薄い存在感は周囲から認識されないほどだった。そんな彼に話しかけたのはサブレだった。そして、攻めることの大切さを教えられたのだ。攻めることは守ることだと。

そんな二人は同期ということもありチーム戦では高確率でダツクを組まされた。しかし、このタッグに問題があるとすればジョシユアが渉をいたく気に入る戦闘中は彼を追いかけまわしているという点である。

そんな正反対のこのコンビは卒業後も最大の戦果を挙げるコンビとして有名となった。それ故に渉の意見など聞かれることも無くコンビを組まされている。

今回の作戦も同じことであった。

6

サブレ達の出撃を見送りビスケットは格納庫二階で呆けていた。すると腕を組んだつなぎの上に羽織った白衣と白髪が良く似合うソニアが雰囲気を出さずに右側に立っていた。

「あれを完成させたんですか？」

あれという表現方法だけでは一般的には通じないだろう。しかし、流石のソニアにはビスケットがいったあれという単語に覚えがあった。



「PED」

「そうです。『Particle extensive diffusion』と呼ばれる粒子広範囲拡散と呼ばれる現象の頭文字をとってつけられたシステム。基本はPHリアクターが生成する膨大な粒子を装甲を通して周囲の空間に拡散させるシステム、そうすることでフレーム越しに伝わる粒子量を調性することが出来る」

ソニアが今言ったシステムは数年前から最近まで行われていた実験の一つであった。しかし、ある悲しい事件ゆえに一時的に封印されたシステムだった。

ソニアはビスケットについてきなさいと言いながら暗い通路の先へと突き進んでいく。

「あなたが幹部クラスに召集された時だったかしらね。かつてマクギリス・ファリドが使っていたヴァルキュリアフレームをうちが回収して改良した実験機が惑星間航行の実験中に行方不明になった。原因はPEDシステムの不具合からくるものだった。

ビスケットはその実験自体は結果を知っていた。PEDシステムを取り入れた惑星間航行を可能にする為に実験が行われた。地球から火星間を行き来するシステムは合計で二日間で完了するはずであった。しかし……

「結果、実験は失敗しパイロットは亡くなってしまった。原因はPEDシステムが十分に機能していなかったことによる内部爆発だった」

ソニアが続けざまに言った真実はビスケットはよく知っていた。そのパイロット自身は全く知らない人物だったが、そのパイロットは黒焦げになってしまい原型をとどめなてなかった。

「その後実験が危険だという判断がおりて開発は見送られたはずだった。なのに……」

ビスケットの言いたいこともソニアにはよく分かっていた。

「その後、ガンダム・エテンをはじめとする新型ガンダムフレームの開発にはどうしてもPEDシステムが必要だという結論にいたったの。だから先に先行で完成させたメテオとシムカスはフラウロスとグシオンに偽装して戦場に導入した。拘束衣がわりになればと思ったの。

そうすることでPEDシステム無しでも戦えないか考えたけど、うまくいかなかったわね。だから、アフリカ戦線が始まってから改良機による実験が極秘裏に勧められ完成したのがガンダム・エデン。ガンダムフレームによる実験はカノンを使ったわ」

数メートルさきから微かな明かりが見えてきた。

ビスケットの視界に少しずつ明かり広がってくるとそこには薄紫と濃い紫のツートンカラーの細く曲線を意識したシルエット、頭部はガンダムを意識しているかのようにツインアイとV字型のアンテナ、各部に変形機構を取り入れられている。肩、頭部、胴体、膝などに濃い紫が使われており、それ以外は薄紫で構成されている。

「新型ヴァルキュリアフレーム『ガフェインマークII』。惑星間航行を行った唯一の機体よ」

目の前に鎮座するこの機体が初めて単機で惑星間航行を行った機体だとは誰も思わないだろう。

そうしているとビスケットはこの機体にガンダムフレームが一部で使われていることに気が付いた。

「もしかして、この機体ガンダムフレームの素材を使ってます？」

「そうよ。といっても一部だけけどね。あとはヴァルキュリアフレーム用に新規に作り直したフレームよ。よくできてるでしょ」

とつてもいい笑顔でビスケットの方を向く彼女はきつと危険な実験をしたという罪悪感は無であった。

7

ジュリエッタにとって守るといふ行為は当然のことだった。なぜなら、主君であるラスタルやヒゲのおじ様と慕ったガランに拾われたという恩義があったからだ。それは、盲信とも呼べる忠誠心の高さであった。

親の愛情を知らず、だからこそその代りを誰かに求めたのかもしれない。だって、そんなことは必要ないと彼女は速いうちに斬り捨てたからだ。彼女が真っ先に見たものは恩義とそれに彼らの敵を殲滅するという義務感であった。

サブレが忠誠心を危険視する理由は忠誠心は守るといふ感情から

程遠いからである。忠誠している相手の為に殺すという想いをサブ  
レは守ると表現したくはないと思った。

大切な人の為に容赦なく誰かを殺すことができる。しかも、その対  
象が民間人であろうと疑うことなく遂行する。それは、サブレが理解  
したくもない感情であった。だから彼は明楽に復讐で行動するなど  
忠告を発したのだ。

愛する人の為に、大切な友人の為に、仲間の為に戦うサブレ。そし  
て、それは意外なことにエクスことアインも同じことだった。ただ、  
異なるのはアインにとってはそれ以外はどうでもいいと思っ  
ている点である。そのたった一つといってもいい点で彼らは深い溝が存  
在し、分かり合えないのだ。

サブレは他人ですら大切にしようとする。たとえそれが自分の大  
切な人を殺した相手であろうと。だからラスタルを殺さなかった。

ジュリエッタには憎んでいる相手すら時に助けたいという感情は  
理解できなかった。彼女にはそれができないから。

しかし、守るということは彼女には理解できなかった。だって……  
彼女は誰も守れなかったからだ。ガランもイオクもラスタルでさえ  
守れなかった。

ガランの元に駆け付けなければよかったと後悔し。

イオクが目の前で亡くなったときも助けようとするしなかった。

ラスタルが亡くなった時も身を挺して助ければよかったと後悔し  
た。

どうしてこうしなかった？あの時どうして行動しなかった？そん  
な後悔だけが彼女を襲っていた。

ラスタルが亡くなった時、激しい後悔に襲われてしまった。ガエリ  
オが立ち上がった時、彼に優しくされてもなこの後悔が薄れることは  
無かった。

深い絶望の海に落ちていくような感覚がいつだって襲ってくる。  
睡眠をとると必ず夢の中にガラン、イオク、ラスタルが順番に現れて  
去っていく。

そんな中、彼女はあることに気が付いてしまった。かつて自分が悪

魔と恐れた三日月という少年は大切な仲間を守る為に命を懸けた。なら……自分はそれができたか？答えは簡単だった。できなかった。結果からすればジュリエッタは三日月・オーガスを人間だったと思っただった。自分は何なのか。そんな中明楽の言葉が彼女を襲った。

「化け物！」

三日月・オーガスが悪魔であるなら、ジュリエッタは化け物だった。目的の為になんのためらいもなく民間人を殺した。何よりショックだったのはそれを特に疑問を持たずに実行できた自分がショックだった。

あの少年より私の方が悪魔ではないかと自覚してしまった。

悪魔で化け物というどうしようもない自分の本性に彼女は心を閉ざし、明楽の殺意が襲った。脳細胞の一部を破壊するような精神攻撃と自分の罪悪感と後悔が重なって彼女は精神崩壊してしまった。

その後の彼女は深い海の奥のような場所でうずくまって立ち上がる気力すらわいてこない。すると、目の前にもう一人の自分が立っていた。そんなものはただの幻影だとわかっている。もしかしたら、ジュリエッタの中に残っている人間らしさの欠片なのかもしれない。「最後に守ろうよ。今まで誰も守れなかったけど、彼のように最後まで命を懸けて守ろうよ。彼を守ろうよ」

差し出される手を取ることを一瞬だけ躊躇するが、それでも勇気をもってその手を握って立ち上がる。

8

アルミリアのレッドクイーンのレイピアの攻撃を後ろに下がりがら回避しようと試みるが、腕や足の的確に当たっていく。攻撃を受けていてガエリオにははつきりとわかっていた。

アルミリアは意図的に手を抜いている。遊んでいるのだということに。

ジャックの乗るブルーレイも明らかに手を抜いていた。両手に持っていたビームサーベルの攻撃は命を奪うようなところは避けている。

ガエリオはジュリエッタだけは守ろうと頭の中で必死に策を練るが、攻撃をよけるのに精一杯でとてもではないが逃げることでできそうもない。

逃げなければという想いとジュリエッタを守らなければという想いがせめぎ合い身動きが取れずにいる。

アインを倒さなければと思えばランスに内蔵されたビームライフルの引き金を引く。しかし、エンペラーガンダムは背中からマントのよな半透明の粒子を放出させ、マントの端をつかんで胸元まで持ち上げる。

マントにあたったビームは打ち消されてしまう。

「おしい……」

ニヤニヤ笑うのを決してやめようとしないうアイン。ガエリオはひたすら睨むがそんな合間にもアルミリアは攻撃の手をやめない。

「やめろ……やめてくれ。アルミリア」

「いやです。お兄様が懺悔しながら死んでいく、それこそが私の望みなのですから」

少しづついたぶりながら距離を詰めていく。ジュリエッタの方も一方的に追い詰められていく。そんな戦いの中ジャックは不満を口にする。

「なんだよく全然つまらないじゃんか。もっと強い奴の方が良かったなくお前、弱いんだもんさ」

真面目にするつもりなどはなっから無いのかもしれない。ジャックが常に求めているものは明楽のように自分と互角に戦える相手であり、ジュリエッタでは力不足だった。

背中についているX字の板の先にはブースターが付いていて、大気圏内でも素早く動き回ることができるブルーレイはジュリエッタのバエルの周りをグルグル回りながら切り裂いていく。

ジュリエッタは攻撃を回避するだけの思考すら残されてはいなかった。それどころか自分の命があと少しで尽きようとしていることに気が付いた。

後悔はない。決めたことだと腹を括り、ジュリエッタは自分の最後

の仕事を果たすために操縦桿を握る。

ジャックが自分の正面に来た瞬間にジュリエッタは後ろに大きく飛ぶ。バエルがもっていた武器を手放して、レッドクイーンとキマリスの間に割って入るとガエリオのキマリスを突き放した。

ガエリオは何が起きたのか分からず、大きく空いた距離をただ見つめることしかできなかった。

ジュリエッタはアルミリアのレッドクイーンにしがみつく。

「何をするのですか!? 離れなさい」

アルミリアはレイピアで刺そうにも近づかれてはそれも難しい。ジャックはジュリエッタの目的が分かりバエルの背中を斬りつけアルミリアから引き離す。レッドクイーンを連れて多少後ろに下がりバエルとジャック達の間エンペラーが立ちふさがる。

エンペラーはマントを再び出現させると自身の前に盾のように張る。

ガエリオもそこでようやくジュリエッタが何をしようとしているのかを理解した。ガエリオが機体を走らせようとするが、それを遮る様にジュリエッタの声が聞こえた。

「ありが……とう。い……きて……」

その言葉を聞いた瞬間、動きが止まってしまふ。彼女の心境に何があつたのかは分からない。しかし、ガエリオを守りたいという一心で行動している彼女を止めることは出来なかった。

機体が光を放ち、次の瞬間に大きな爆発音とともにバエルは粉々に砕け散ってしまった。

周囲にバエルの破片だけが散らばっているのが確認できた。そんな爆発の中心ではバエルのコックピットらしき部品が燃えていた。

先ほどの言葉が脳内で何度もリピートされる。

「生きて」

そんな言葉が何度も繰り返され、彼女に守られたという事実だけがガエリオを襲う。

「どうしてなんだ? 俺は……おまえさえ……生きていてくれれば」

アルミリアがとどめを刺すために最後の一步を踏み出す。そし

て、進路上にあるバエルの頭部を踏みつぶした。

まるでそれをゴミのように扱うアルミリア。しかし、怒りより自分に対する失望とジュリエッタを失ったという悲しみしか存在しなかった。

ガエリオは少しづつ近づいてくるアルミリアを見上げる。いつの間にか両目には涙がいっぱい溜まっていて、アルミリアはそんな兄の姿を見た途端至福に満ち溢れた表情を浮かべた。

「マツキー……」

しかし、そんな彼女の行動はヴィーンゴールヴへ向けられた大きなビーム攻撃によって中断された。

「キターーーー!!」

ジャックのテンションが最高潮まで高まると四機のガンダムフレームが降下してくる。そのうちの大きな巨体のガンダムだけが離脱していき、ほかの三機がアイン達の前に降り立とうとする。

アルミリアは一旦アインのところまで下がり、サブレ達はガエリオとアルミリアの間に降り立った。

「また会えたな」

「そうだな……」

サブレとアインがにらみ合う中因縁の戦いが始まろうとしていた。

9

苦しい夢を見ていたような気がした。ジュリエッタはふわふわした気持ちで眠っていることに気が付いた。ゆっくり目を覚まし体を起こす。自分の身に何が起こったのか全く理解できず、呆けていると遠くにラスタルやガラン、イオクが立っていることに気が付いた。

どうして?という疑問が浮かんだと同時にこれは夢なのだと思うた。

苦しい現実を思い出すことも無くジュリエッタは立ち上がり、走り出そうとする。

今度こそ教えてもらおう。どうやって守るのか。そして……今度こそ。そう思って走り去っていく中彼女の意識は遠くへと消えていった。

同じとき、アルンのEDM本部ビル代表室で透明なグラスにウイスキーを入れて飲んでいるマハラジャだったが、グラスを机に置くと同時にグラスに大きな縦の亀裂が入る。

もしかしたらそんな思いが一瞬脳裏によぎるとマハラジャは視線を窓の外へと向ける。

「ジュリエッタ」

ジュリエッタ・ジュリス戦死



## レインボー・スカイⅢ 《虹色の空》

10

レオ・クリスハイトはアフリカ戦線からギャラルホルン本部包囲作戦に参加するため、長い旅路の果てにようやく目的地にたどり着いた。

しかし、彼のやる気は著しく低い。そもそも彼はこの作戦に乗り気ではない。殲滅戦ほど彼のやる気をそぐものは存在しないからだ。

別に戦う事が好きというわけでも無い、ギャラルホルンの殲滅戦なんて勝手にしてくれればいいとすら考えていた。だからこそ、彼はやる気のない恰好でその場に浮かんでいた。

「やるきでね〜」

しかし、そんな彼の元にとてつもない速度で近づいてくる機体を確認した。

一瞬「敵か？」っと思いき身構えた。よく見たら可変機構機と真っ赤なジムの姿を視界に収め、瞬間落ち込む。

「なんだ涉とジョシユアか」

構えた体勢を再び変えて正面を向く。すると涉はアメフトのタックルの要領で飛びつく。ジムの腰回りで半回転してしがみついた。器用なこととその態勢でブースターを吹かせて浮かせている。

「器用だなくほんと」

「助けてください!!レオさん!!殺されるうー!」

コックピットの小さな画面から警告音が鳴り響く。レオは「そんなことを言われてもな〜」と三度やる気のない姿を見せる。

「せ〜くんぱ〜い!ど〜い〜て〜」

ジョシユアはレオをはさんで涉の反対側でぴったし止まり、ビーム小太刀を構えたまま涉を狙っている。

「戦場で遊ぶなよ〜」

「戦場でやる気を見せない人よりいいかと〜」

「中々の確なところを突くな。殲滅戦って一方的な虐殺みたいで俺は……きらい〜」

「殺せるからいいじゃない」

ずれたやり取りを続けるレオとジョシユアに対して渉は大きな怒鳴り声をあげる。

「どっちも問題あるから!!」

「おっしやる通りで」

やる気がないレオともっと殺したいと意思を示すジョシユアは同時に答えて見せた。すると、ギャラルホルン本部であるヴィーンゴールヴに大きな熱線が落ちていく。

「「っあ、先輩だ!」」

そう思ったとたん、三人は視線を合わせて取るべき行動を見据えた。ほぼ同時に本部に向かうために敵陣を突破する。

たった三機だけでなだれ込むように突き進む姿はイノシシのようであった。

11

クツキーとクラツカは食堂でアトラと桜が作ったクツキーを暁と共に試食していた。大きな皿に盛ってあったクツキーはあつという間になくなっていく。

クラツカは「そういえば」とずっと疑問に思っていたことを桜へと尋ねる。

「サブレお兄だっけ? その人はどうしてマハラジャっていう人の所に行っちゃったの?」

桜は内心『話すときかね』と覚悟を決め話始める。

「あんた達とマハラジャが親戚にあたるからさ。母親の父親の弟の孫がマハラジャじゃなかったかね。だから亡くなった時にマハラジャが引き取るって言うってくれたらしいよ。彼は元ギャラルホルンで一部経済圏にも顔が利く男らしくてね。両親が亡くなった時に話をしに来たって聞いたよ」

温かいお茶を呑みつつ答えてくれた桜にアトラは気になったことをそのまま尋ねる。

「だったらどうしてビスケットは桜さんの家に来たんですか?」

「初めて会った時にマハラジャの姿を見てビスケットが「怖くていや

だ！」って駄々をこねたらしくてね。それでサヴァランっていう兄の勧めであたしの家に行くことに決めたのさ。するとサブレの奴はものすごい怒ったらしくてね。「ふぎけるな！おばあちゃんの事を考えろよ！」って言ったんだってね。あの子はあたしの家が貧しいって知っていたらしいから余計に反対したんだけど。ビスケットは一度決めたら変えようとしなからね」

「ビスケット、変なところで頑固だから」

クッキーとクラツカは同時に微笑む。

確かにそういうところがあるのは二人もよく知っていた。アトラは微笑みながら暁の口に付いた食べかすを取ってあげる。

「でも、クーデリアが言ってたけど。今は同じ所属だから仲が悪いというのは無いんじゃないかな」

暁は最後のクッキーに手を伸ばしそのままかじりつく。暁だけが話を聞きながらクッキーをかじっていた。

12

サブレ達が戦場に向かう少し前に時間は遡る。

月面から飛び立った四人は新しいガンダムの感触を確かめながら進んでいた。マークは正面の小さな画面で新しいシステム『PEDシステム』の感触を確かめていた。

「要するにこれって体中からエネルギーを粒子状にして放出するシステムってことではないのか？」

シノの素朴な疑問にサブレが答えた。

「そういうことだ。理論上はこれでHCCCPモードのコントロールも可能だと言われているな。まあ、実際に試すんならある程度の失敗は覚悟しておいた方がいいが……」

明楽はよく分かかっておらず呆けていた。

「先輩。明楽は分かかっていないようですが？」

マークは携帯ゲームをそう言うのとシノはマークの方をにらみながら突っ込む。

「お前も聞いてねえんじゃないのか？」

「失敬な。俺くらいになればゲームしながらでも聞けるんですよ。先

輩のようにメモを取らないと記憶できない真面目もどきとは違うんですよ」

毒に毒で返すマークに苛立ちを募らせるシノはさらにヒートアップさせる。

「メモなんてなくても理解できるつつうの！お前こそ下手なくせにゲームしてて楽しいのかよ！」

シノの言葉に苛立つマークは血管を浮かび上がらせながらシノの方をにらむ。

「三日坊主で趣味が変わるような変人が何を言うのか？続く趣味なんてどうせ風俗巡りぐらいだろ？」

「んだと!?最近はおウリングにはまってんだぜ!？」

「それもどうせ三日坊主で終わるに決まってるから！」

「一週間は続いとるわ！」

「かわんねえよ!!!」

ドスの聞いたにらみを続ける二人の間に割って入るサブレは手を一回叩いて場を整える。

「はい！終了！というか、明楽も止めなさい」

「だって……二人がヒートアップしたら止められるのサラか先輩ぐらいでしょ」

サラの名前が出た途端シノとマークの背筋に嫌な汗が流れる。

「サラは止まらなかつた場合は色気で攻めてくるからなく結構被害が出てるし」

サブレは同情の視線をシノとマークに向ける。明楽はヘラヘラ笑いながらしゃべり始める。

「二人は被害をうけたもんね〜」

「二笑い事じゃねえよ!!」

マークとシノは同時に怒鳴りつける。その後も二人が口論に入ろうとしたところでサブレが再び割って入った。

「それより、PEDシステムの準備に入れよ。ぶっつけ本番で挑むからな」

「「了解」」

四人はPEDシステムを起動させ、周囲に粒子化したエネルギーでフィールドバリアを張り大気圏突破モードに変わる。

「うまくいくのかよ」

シノは不安になりつつそのままの勢いで大気圏に入っていく。フィールドバリアが大気圏の摩擦熱を周囲に拡散させていき、コックピットの熱は平常温度を維持している。

「怖いっすー」

明楽はしがみつこうとシムカスをエデンの方に寄せるが、サブレはエデンの頭部をシムカスの方に向けて低い声を聴かせる。

「大気圏突破中にしがみついてみる、地面につく前にお前を落とす」

明楽にはエデンが睨んでいる天使に見えた。彼らの眼前には熱を周囲に拡散させるフィールドバリアが張られている。拡散する粒子の色は青色をしているがそれが摩擦熱と混ざって紫色に変わっていった。

数秒で大気圏を突破すると眼前にギャラルホルン本部が見えてきた。

マークはすぐに六つの砲台を動かしてヴァインゴールヴに向けその引き金を引く。大きなビームの柱がヴァインゴールヴを焼いている。

しかし、サブレの眼前には燃えるバエルとキマリスにとどめを刺そうと近づくレッドクイーンの姿があった。

「予定通りマークは内側からギャラルホルン防衛隊を攻めろ。俺達はアインの相手をするぞ」

「了解」

マークだけが現場から離れていき、サブレ達はアイン達の眼前に降り立った。

エデンとエンペラーが互いを睨む中、運命の時を迎えようとしていた。

13

互いに睨み合う状況の中エデンはリングを頭部に移動させて少しづつ浮かび上がっていく。エンペラーも同じ速度で浮かんでいくと

自然とその場には四機のガンダムがにらみ合う状況に変わった。

シムカスはブルーレイを睨み、メテオはレッドクイーンを睨む。エデンとエンペラーが高高度で一旦静止すると武器を構える。

既に言葉はいらず、武器を構える六機のガンダムはカノンの一撃を皮切りに戦闘を開始した。

真つ先にエデンとエンペラーがビームの衝突音を響かせる。

シムカスは腰に装備したショートアックスを両手に装備してそのままブルーレイに仕掛ける。それに対し、ブルーレイは両手に装備したビームサーベルで攻撃を受け止める。

「戦おうよ。やっとお互いに本気で戦えるだろ？」

「お前は倒すー！」

同じときレッドクイーンはレイピアをキマリスに突き刺そうと腕を伸ばす。そんな攻撃をメテオはビームライフルと一体化したジャマダハルで受け止める。

「邪魔をするならあなたを先に殺します」

「お前の思い通りにはさせねえよ！」

メテオは背中に搭載した拡散ビーム砲をショットガンの要領で発射するが、レッドクイーンはビームシールドで攻撃を受け止めつつ後方に一旦下がる。そして、腰につけたフルドレスからのビーム攻撃をメテオに向けた。メテオは腕に装備したジャマダハルのもう一つの機能を使用することにした。

ジャマダハルは切るより刺すような刃の形状をしており、持つところはH字になっている。拳で殴る様に突き出すことで攻撃できるジャマダハルの形状は、元々剣での戦闘の訓練をあまり積んでこなかったシノからすれば、殴る様に戦えるので非常に扱いやすかった。槍のような形をした刃が高速で回転し始めると、それは小さなシールドのようになっていく。

フルドレスの攻撃をきっちり捌ききるとメテオのジャマダハルとレッドクイーンのレイピアがぶつかり合う。

同じとき、ブルーレイの高速移動と連続攻撃をきっちり捌くシムカスの運動性能にジャックはさらにテンションを高めていく。こんな

戦いは二度とこないのではないかという高まりはジャックを否応なしに戦いに引きずり込む。

反対に明楽はバエルのパイロットの事をかすかに考えるようになった。殺したいと思った相手が死んでしまったという事実は明楽の心にぽっかりと穴をあける。しかし、反対にサブレの言葉を反復するいい機会を得た。

サブレは復讐心で戦ってはいけなさと教習学校時代からチルドレンたちにしつこく告げた。自分の為に戦えるようになれば、その上で他人の為に戦うんだ。見返りを求めるな、誰かを救うことに意味を見出すな。それはサブレの言葉だった。

今それを考えたうえで出したたった一つの答えは明楽をシンプルな戦いへと導く。

二つのショートアックスをくみ上げバトルアックスに変えてブルーレイの動きを止める。

「ただお前を潰す！」

明楽の純粹な殺意にジャックは本心で答える。

「僕もお前を潰す！」

そして、四人は同時に声を上げて声帯認証システムが四人の声に反応する。

「[[[H C O C Pモード!!]]]」

H C O C Pモードと同時にP E Dシステムが起動し周囲に余分なエネルギーを粒子化して放出していく。

四機のガンダムフレームは同時に真っ赤な粒子を周囲に放出させ同時に武器を互いにぶつけ合う。

「[[[絶対に潰す]]]」

そのころ上空では二人の戦いが過激さを増していた。

14

同時にぶつかるライフル攻撃をきっかけにエデンとエンペラーは戦いを始めた。エンペラーは背中からファンネルを出現させる。小型のファンネルは背中や腕に収納できるほど小さく、その分出力は抑えられている。しかし、小さい分大量に収納でき、それ以外にもいろ

いろと用途がある。背中に取り付けられたファンネルは縦長になっており、腕に収納されたファンネルは円盤のような形状になっている。

エデンの周囲には縦長のファンネルが飛び交い同時に攻撃を仕掛ける。

「殺気!?!」

サブレが感じ取った殺気にリングファンネルが反応し周囲に展開される。リングファンネルはIフィールドを張るとオールレンジ攻撃を受け止め、ビームライフルでファンネルを落とそうと引き金を引く。

サブレはオールレンジ攻撃を回避しつつエンペラーに近づいていく。お互いにビームサーベルを抜きぶつかり合う。

背中から高出力のブースターが火を噴かせる。

いったん離れるとエデンとエンペラーは凄まじい速度でぶつかっては離れるを繰り返す。エンペラーは一旦戦場を変えるため、ギヤラルホルンがモビルスーツ隊を配置しているビル群に突っ込んでいった。

エデンも追いかけるようにビル群に突っこんで行きファンネルによる攻防がより激しさを増していく。

「なぜギヤラルホルンを潰そうとする!?!両親を殺したことへの復讐か!?!」

サブレの疑問にアインはファンネルを脳波でコントロールしながら答えた。

「復讐か……それもあるかもしれないな。両親はギヤラルホルンにとって都合の悪い存在だった。だからこそ、ノブリス・ゴルドンに殺された。両親は亡くなる前にこっそりと私を生み、路上に捨てた」

語っていくうちに殺意が込み上げてくる。それは今まで抑えていた感情であり、同時に他人に見せようとはしなかった感情でもあった。だからこそ他人の感情をコピーし、真似をして生きてきた。

しかし、そんな生活はサブレ・グリフォンとの接触で変わった。彼から感じた過剰な脳波は彼に自然と個性を思い出させたのだ。



ククナの為に生きると決めた自分には個性など必要ないと思いつき、結果彼は感情を押し殺して、兵器になろうと考えた。

しかし、彼と戦ってからアインは感情を思い出すようになった。だからかもしれない、ククナへの愛情を知れば知るほど、両親を殺そうとしたギャラルホルンへの復讐心が生まれていった。

自分達が不都合だと知る者や組織は徹底的に潰し、情報を統制してコントロールするギャラルホルンをこの手でつぶすと決めた。

その上でラストアルやセブンスターズに復讐をする。

そんな時、彼はアルミリアに出会った。

「私にとってアルミリアはまさしくクイーンだったのだよ。まるでチェスの駒のように、ギャラルホルンを潰すうえで最適な駒だった。ジャックは私にとってはルークさ、単純な殺意や行動原理にはいつも助けられる」

「だったらお前はキングか？」

「いや、キングはククナだ。私はそれを守るナイトさ」

お互いに離れていた距離をエデンはサーベルを抜きながら詰めていく。

サーベルとサーベルがぶつかり火花を散らす。

きっとチェスの例えはサブレからしても同じ認識だった。しかし、周囲との相違はあっただろう。彼等からすればサブレやアインこそキングであるのだから。

「それでも!!復讐なんて!!」

「貴様に何が分かる!!こんな組織はつぶれるべきなんだ!」

「それには同意する!しかし、だからって!!」

お互いに再び高高度へと移動していきぶつかっては離れるを繰り返す。

少しづつサイコフレームが共鳴し合い、体中から虹色の光を放ち始める。

互いの感情が高まるとついにエデンとエンペラーは互いに両手を組み額をぶつけ合う。

「それでも!守りたいんだ!」

「必要のないものを排除する！その上で新しい世界を作るんだ！だから人間を消してみせる!!」

「貴様だって……!!人間だろうに!!」

一旦間を置き、同時に叫ぶ。

「H C O C P モード!!」

シムカスたちとは違いサイコフレームの共振と相まって体中から放たれる粒子の色は虹色を放つ。最初のうちはシムカスたちと同じ粒子量を放っていたが、少しづつ放つ粒子量が増えていくと、明らかに過剰な粒子量が出ていく。

次第に放つ粒子は空を虹色に染める。

15

空を虹色に染めるエイハブ粒子はギャラルホルン本部から広がっていき、地球中を包み込む。エドモントンに帰ってきたタカキ姉妹はふと空を眺めると虹色の粒子がまるでオーロラに見えた。

「お兄ちゃん」

綺麗であると同時に恐怖すら感じてしまう妹のフウカは黙ってタカキの右腕にしがみつく。そんなフウカを落ち着かせるため黙って背中に手を回す。

「大丈夫だよ」

そういつている間に虹色の粒子はアフリカの空を染め上げる。

腕を組んで虹色の空を見つめるマック。子供達の相手をしながらサイガ達の墓参りをするファン。アフリカ支部で同じ景色を見つめるキャリーとワインダー。

虹色の粒子は次第に宇宙に出ていく。

アルンの空にも虹色の粒子は広がっていきそんな姿をEDM本部でマハラジャたちは見ていた。ビスケットもクレアとレレと一緒に同じ光景を見ていた。

クツキーとクラツカ達の所にも虹色の光は見えていた。

そんな光はあつという間に火星や木星にも辿り着く。多くの人の目に留まる光景はテレビに映される二機のガンダムの姿を見るとそれが機械と人が生み出しているのだと認識させた。

そんな姿は可能性を人類に見せつけるには十分な姿だった。人の持つ命の可能性。

その姿は火星のクーデリアの元にも届いていた。

テレビでその姿を見たクーデリアはゲイナーの隠れ家のベランダから虹色の空を見る。

「ようやく始まったか……お嬢さん、見ていくといい。これが運命の時じゃ。これより人類は試される。滅亡か存続か……二人の人物にゆだねられた」

ゲイナーの言葉にクーデリアは即座に反応する。

「なぜそのようなことを!?今の人類に必要なことなのですか?みんなが犠牲を重ねた結果なのに……」

「必要なことなのだよ。今更止められない。君が火星連合の座から無理矢理落とされたように、すでに始まっているのじゃよ」

クーデリアは火星連合のトップからFの策略によって引きずり落とされ、今や火星連合は木星帝国の傀儡になってしまった。

ドアをノックせずにライドが入り込む。

「おい！爺！テイワズが近くに現れたって木星帝国の奴らが騒いでるぜ」

「ふん……マクマードめ」

既にクーデリアにはどうすることもできず、残してきた人々の安全を祈るだけだった。すると、クーデリアを中に入れてようと三日月が近づいてきた。

「中に入れと？」

クーデリアの言葉にうなづく三日月に黙って従う。

ゲイナーは立ち上がることも無く虹色の空を見ながらクーデリアに告げる。

「これからの戦いは人類の未来を決める戦いじゃ。わしらはその結果に備えなければならん」

ライドは食い気味に尋ねる。

「俺達はどうするんだよ!?!」

ゲイナーはふと考え込みはつきりと答えた。

「わしらは……ギャラルホルンの火星支部の残存勢力をまとめ、木星帝国を迎え撃つぞ」

クーデリアは不安のまなざしを虹色の空へと向ける。

止まらない戦いの火種は小さくはなく、火星を包み込む。

虹色の空にクーデリアは祈ることしかできなかつた。

(どうか……皆さんが無事でありますように)

## レインボー・スカイⅣ 《三百年の歴史の終わり》

16

時間は虹色の空が現れる少し前まで遡る。

エレベーターで地下駐車場へ降りていくと薄暗い駐車場を三日月はチャドを抱えたまま歩いていく。しかし、クーデリアはふと足を止めてしまう。このまま外に出るのだとクーデリアにはよく分かっていた。

「待つてください」

クーデリアにはここを離れるわけにはいかなかった。多くの人の協力で火星連合の議会を作り、ようやくの思いでここまで来た。そんな場所から一人だけ逃げるなんて出来なかった。

「ここには今まで協力してくださった人がいます。彼らをおいて逃げることができません」

三日月は三秒だけジツとしていると、少しづつ近づいてくる。その行為がクーデリアを連れていく行為だとすぐに判断できた。

近づいた分だけ遠ざかっていくクーデリア。しかし、そんな彼女の目の前で地下駐車場に豪快に一台の車が入ってくるのが確認できた。

その車は軍用車のような形をしている。頑丈そうな装甲に分厚いタイヤ、守備軍が使っている軍用車だと判断できた。しかし、クーデリアにはこんな軍用車を使う人間に心当たりがなかった。

その車は三日月から数メートル隣で止まりドアを勢いよく開けた。

「三日月さん！早く乗ってください！クーデリアさんも！」  
「ラ、ライド君？」

探していた人物の唐突の再会にクーデリアは驚きを隠せなかった。しかし、三日月はそんなことを待っていてくれるほど優しくは無かった。素早くクーデリアの右腕をつかんで車の後部座席に座らせ。チャドを荷台に乗せてしまう。クーデリアが後部座席でおとなしくしていることを確認した後、助手席に乗り込む。

全員が乗り込んだことを確認したライドは車のアクセルを全開まで踏んで地下駐車場から出ていく。

出ていくとすぐに道なりに進んで行く、左右に曲がりながら街へ出ていこうとしたところで数キロメートル先の次の曲がり角に一人の太った男が立ち尽くしていた。すると、どんだん人が集まってくるのも確認できる。

「駄目です引き返しましょう」

クーデリアは目の前に集まっている人を気づかいそう発言したがライドは構わずまっすぐ突き進む。

「ライドさん！」

「あれは偽物です!!」

ライドがそう発言するとクーデリアの視界には少しづつ人影が近づいてくる。クーデリアには人をひき殺すことが怖く感じた。咄嗟に手を伸ばしてハンドルを取ろうと思ったが、その腕は三日月によって阻止された。

まるでダメだと言ってるように。

少しづつ近づいてくる人影の中心の太った男の姿が良く見える。赤や青なんかの派手な色の服を着こんでいて顔は白化粧で染めてある。所謂ピエロのような恰好をしている男だった。

ライドは決して速度を緩めることは無く、突っ込むつもりで速度を上げる。ピエロのような男が車への衝突と同時に空へと舞う。他の人間を巻き込みながらそれでも突き進む。

クーデリアは悲鳴を上げそうになるが、三日月は窓際にくっついた腕をクーデリアに見せる。ショックを受けそうな気持を押さえて三日月が見せる腕を見てみるとそれは精巧に作られた人形であった。

「人形ですか？」

「ええ、あれは……きつと」

ライドの言葉を妨げるように声がかから響いた。

「ひどいなく僕を引くなんてく君達はく人でなしかい？」

ピエロの男が天井から顔だけを後部座席にのぞかせる。窓を割りクーデリアの方に拳銃を向ける。

「悪い人にはくお仕置きだく」

ライドは左右に揺れながら振り落とそうとし、三日月は窓の外に手

を出してピエロをつまみ出そうとする。

「無理無理くお仕置きくたくイム！」

拳銃の引き金を引こうとした瞬間にその腕が大きく右にそれてしまふ。

「車の天井から銃を発砲するなんてあまりお利巧さんとは思えませんね」

ピエロと同じ天井に居たのはメイド服を来た一人の女性であった。黒く短い髪は一切の癖が無く、髪先は整えられている。綺麗な顔立ちをしており、顔立ちだけを見れば誰かを殺すとは思えない。彼女の服装も殺しをするよな恰好ではなく、黒と白のメイド服を着ている。しかし、彼女が右手で握っているのは鉄線のワイヤーであった。

「おやおやくこれはこれはく胸の大きいお嬢さんだく」

「初めまして。木星帝国幹部『ペペロ』さんですね？私はゲイナー様に奉仕しているコットン・アドモスと申します。ここから落ちてなのおお見知りおきを」

そういつてピエロは唐突な衝撃を足に感じた瞬間には彼の体は空中に浮かんでいた。遠ざかっていくピエロの姿をライドは確認した後、勢いよく街を出ていく。

「コットンさん！助かりました」

ライドが視線を逸らさないように天井に居るはずのコットンに話しかける。コットンは速度が出ている車の上で立ったまま答える。

「いいえ、ゲイナー様から皆さんを迎えに行くようにと伝えられておりましたので。それに……どうやらテラがこの地にやって来たようですよ」

話についていけないクーデリアはテラやコットンについて尋ねた。

「テラとは誰なのですか？彼女は？」

ライドはどこまで話したらいいものかどうか悩んでいる、すると上からコットンの「話してもいいですよ」という言葉がやってきて覚悟を決める。

「コットンさんはフミタンさんの年の離れた妹さんです。幼いころに生き別れたらしいんですが……」

クーデリアは胸を締め付けられるような気持ちにさせられた。

フミタン・アドモスはかつてクーデリアに仕えていたメイドであった。しかし、そんなときドルトコロニーでクーデリアを庇い死んでしまった。そんな時の言葉を思い出してしまった。

フミタンはクーデリアを庇って亡くなったのだから。そんな思いがクーデリアを襲う。

ライドはクーデリアにもう一人の事を離し始める。

「テラとは……木星帝国の幹部の一人です。皇帝の右腕と称される男で……白いひげを蓄えた右目がつぶれた隻眼の男です」

クーデリアはその人物像を聞いた途端記憶に新しい人物に心当たりがあった。

「確か……あの男が襲う一時間前にロビーで見かけました」

その時、テラはロビーにいた。

人はいつ死ぬのだろうと目の前の死体にテラと呼ばれた老人はロビーで佇んでいた。目の前に転がる死体の数々を見つめそう考えていた。いつ死に、どこに運ばれるのだろうか。

すると、ロビーの男性二人がこそこそと話声が聞こえてくる。

「クーデリアさんが消息を絶った!?これからどうすれば……」

彼らにテラは誘導するための声をかける。

「彼女も人の子、襲われて怖くなったのだろう。二度と戻ってこないかもしれないな」

二人は「まさか……」と信じられないと首を振りながら顔面蒼白になる。

けが人があちらこちらに点在しており、どう収集したらいいのか分からない状況が続いている。彼女を求める声があ外でも鳴り響く中、一人の女性が立ち上がり周囲に指示を出す。

「まずけが人の治療の為に各部屋の準備に入ってください。亡くなった人がどなたか調べ遺族に連絡を！表の通りに居る人の中に治療に協力してくれる人を探してください。急いで！」

明るい茶色のショートボブの髪をしたスレンダーな女性は腕を組み指示を飛ばす。そのまま外に出ると彼女は表の人達に一通りの説



明を終えると、協力を仰ぐ。その姿は新しい革命の乙女のようにであった。周囲から押されるように彼女は火星連合の代表代理に就任した。選ばれた女性は一通りの指示を出した後壊れた代表室の代わりの部屋に入る。そのまま書類に目を通してしているとテラが部屋の中に入ってきた。

「うまくいったようだな。テトラ・ギュウジャン」

テトラと呼ばれた代表代理は立ち上がって窓の外をそつとのぞき込む。しかし、その表情は代表には似つかわしくない悪意に満ちた表情だった。

「ざまらないわね。あの忌々しい女。私の父に協力しないからこうなるのよ」

「分かっておろうな？お前はあくまでも火星連合を木星帝国の思い通りに動かすための傀儡だということにな……」

テラは釘を刺し、テトラは「分かっているわ」と答える。

「私も木星帝国の幹部。閣下の命令には従うわ。あなたこそ木星帝国のナンバー2としてうまくサポートしてちょうだいよ」

「むろんだ。私のこの目の傷を『奴』に返すまではこの地で協力してやろう」

テトラは怪しむような視線を向ける。

「あなたの目を潰した相手って……誰？」

テラはドアに伸ばした手をを止めて一言だけ答えた。

「……鬼神のような少年だった」

火星連合は木星帝国に飲み込まれた。

17

互いに手を握り合い空を虹色に染める二つの機体はにらみ合いを続ける。

多くの兵士が戦う手を止めてしまう。美しく恐ろしくもあるその光景はそのうちに太陽系すら超え果ての宇宙にまで届いた。

その虹色の輝きは命の限界すら超え、知性という知性に衝撃を与えた。

「命には限界なんてない！」

サブレの言葉に反論するようにアインも声を張り上げる。

「人という種族はいつまでたつても自らを滅ぼすことしかできない。だから新しい人類だけの世界を作るんだよ！」

「傲慢だよ！それは!!」

サブレはアインの言葉に異論しか存在しなかった。

それは傲慢だと。しかし、アインはそうは考えなかった。彼からすれば今までの人類こそが傲慢だと思っていたからだ。

「傲慢なのは今までの人類だ！だから殺さねばならないんだ！」

「それでも人類は何度だってやり直してきたんだ！これからだって！少しづつ前に向かって進んで行けるはずだ！」

立ち向かい、どんな滅びの危機にも人類は何度だって立ち向かった。サブレはこれからもそうやって立ち向かっていくのだろうと確信があった。

二人は互いに意見を変えようとせず、二人の感情はさらに濃い虹の粒子を生み出していく。

明楽とジャック、シノとアルミリアの四人による地上の戦闘はさらに過激さを増していく。その場の地形が変わるほどのぶつかり合いを繰り返していた。

しかし、そんな時間も唐突に終わりを迎えた。

HCCPモードが終わり、粒子の色が赤から青色に変わる。

レッドクイーンとブルーレイのコックピット内に警告音と共に『TIMEUP』の文字が浮かび上がる。

「アルミリア！撤退の時間」

アルミリアは忌々しい物を見る表情をシノとガエリオに向ける。マクギリスの仇であるガエリオを殺しきれなかったことによる無念がアルミリアの心の内に宿っていた。

無駄に戦場で遊んだ結果目的を果たせなかったことを後悔すると共に、自分の邪魔をした目の前のピンク色のガンダムフレームに殺意を向ける。

レッドクイーンとブルーレイは空中に浮かんでアインの元へと向かう。シノと明楽も追いかけるように空中に浮かび上がる。

下から襲い掛かってくる機体にエデンとエンペラーは互いの手を離して距離を取る。エンペラーの前にレッドクイーンとブルーレイが庇うように立ち塞がり、エデンの前にメテオとシムカスが立ち塞がる。

「時間切れか……」

素早く撤退していくエンペラーたちにサブレはエデンの背中にリングファンネルを展開して拡散ビームモードに切り替えようとするが、下からの唐突な襲撃に驚き、飛びのく。

「なんだ!？」

シノの驚きの声と共に全員の視線が下へと向く。大きな穴から機械の手が伸びてくる。その姿はまるで地獄から這い出ようとする化け物のようなだった。

赤い体にハサミのような両腕、足は見受けられずアルン襲撃したモビルアーマーと形状が類似している。

「以前、襲ってきたモビルアーマーの地上型か？」

「こんな時に……!？」

そんなモビルアーマーのイーフィールドをカノンの六連ビーム重砲が貫通する。

そして、ガンダム・カノンは友軍と思わしき三機のジムを後方に控え、モビルアーマーへ向かって突撃する。

サブレはアイン達がどうやって撤退するのかという事に思考を巡らせていた。モビルアーマーに向かって突っ込んでいく可変機構を取り入れたジムは小型ナパーム弾を雨のように放つ。

赤いジムは背中にくつついていたビームブーメランをモビルアーマーの尻尾を切り落とすように投げ飛ばす。見事に尻尾を切り落としてレオの金色のジムが片方の腕を切り落とした。

明楽は正面から反対側の腕を切り落とし、シノは背中からエイハブリアクターを破壊するためにジャマダハルを突き刺す。

その間サブレは恐ろしい光景を目にする。

その間にサブレは数個のシャトルが戦闘空域とは別の場所から宇宙に上がっていく姿を見つけ出す。しかし、問題はそのシャトルに

くつついている三機の機影である。

エンペラーとレッドクイーン、ブルーレイがシャトルの側面にくつついていて上に逃げようとする。サブレはバスターモードに切り替えようとするが、そんなエデンに攻撃を阻止するため屈曲ビーム砲を放つ。

カノンが防御フィールドを展開しその攻撃を受け止める。そして、カノンを動かすマークはサブレに怒鳴り声をあげる。

「先輩・ダメだ！そっちはコロニーがある。エデンのバスターモードのフルパワーじゃコロニーにあたる可能性がある！」

引き金を引く指が止まる。だったらとサブレはリングファンネルの数を三つまで減らしてもう一度ターゲットを捉える。

既に離脱圏内に迫っているターゲットに当てるチャンスは一度だけ。躊躇なく放たれた攻撃はあつという間にシャトルに届く。しかし、あと少しで当たるところでエンペラーのマントが攻撃を打ち消す。

「!?防いだ？」

「対ビーム装備を持っていたんでしよう」

サブレは、マークの冷静な考察を聞きながら安全圏まで離脱していくシャトルを見送るしか出来なかった。

「逃げられた」

サブレがそうつぶやいたころレオとシノの連撃がモビルアーマーを仕留めた。

モビルアーマーが完全に沈黙したことを確認したメンバーがサブレの元が集まっていく。サブレはいまだにシャトルが上がっている方向を眺めていると、低い声でレオ達に語り掛ける。

「レオ、ジョシユア、渉。お前たちは最前線部隊と一緒に掃討作戦だったはずだが？」

「「そ、それは……」」

三人は気まずそうな声を出しながら俯く。すると、エデンが三人の機体の方を向き人一倍強い光を瞳に宿す。

「掃討戦に戻れ。数日以内に掃討を終えて本部に戻るぞ。ここにいる

全員でな。だから……」

だからという言葉の後に間を置き、全員の体感温度を落とすような声で語り掛ける。

「さっさと掃討戦を再開しろ!!」

「「イエッサー!」」

シノや明楽を含めた全メンバーを追い出すとゆっくりキマリスの方へと降りていく。

キマリスのコックピットのハッチを強引に取り外し、ガエリオ・ボードウインの生存を確認する。

ガエリオはうつむき、目は死んだ者のように光を失っており、両腕は力なくぶら下がっていた。

サブレはコックピットから出てくるとヘルメットを取り、右腰についているホルスターからハンドガンを取り出しガエリオに向ける。

そんなサブレに対し、ガエリオは小さな声で懇願する。

「殺してくれ……」

その言葉を聞いた瞬間、サブレはガエリオに向けたハンドガンの引き金を引く。しかし、弾丸が着弾したのはガエリオの頭部の頭一個分隣だった。

「死にたければ勝手に自殺すればいいだろう。死に他人を求めるなよ」

厳しい一言がガエリオに投げかけられる。ガエリオは小さな声でボソボソと話し始める。

「全てを失った。家族も、友人も、愛する人も、居場所すらも……もう何も残っていない」

ガエリオの言葉に微かな怒りを覚えたサブレはハンドガンを握る手を強くする。

「まるで自分は悪くないみたいない方をするな。友人に関してはお前の所為だろう。家族だってそうだ。あんたはいつだって責任を他者におしつけながら人を殺してきた。俺達兵士は殺した数だけ誰かを救わなければいけないんだ。お前は殺した数だけ誰かを救ってきたのか? あんたは自分の都合のいいようにしか現実を認識しなかつ

たんじやないのか!？」

ガエリオは両手で顔を押しさえ苦しそうな表情を浮かべる。

「信じていた友人を殺し、幼馴染をそそのかした。あんたがドルトの時にちやんとマクギリスに意見を仰いでいればよかつたんだ。そうすれば彼があんなことをすることだつてなかつたんじゃないのか?! カルタ・イシユードだつてそうだ。あんたは勝手に鉄華団との間に因縁を作るだけ作り、何の責任も果たさなかつた。違うか?」

涙を流し苦しむガエリオにサブレもオルガの事を思い出して涙を流しそうになる。サブレは内心この男さえいなければと思わない日は無かつた。

「君に何が分かるんだ!俺の何が!」

ガエリオの言葉にサブレがいち早く反応した。瞳に怒りを宿し人一倍大きな声を上げた。

「友人を殺しておいてよくも口を開く。親友だつたんだらう!?友人なら信じてやれよ!裏切られた?それでも信じるからこそ親友なんだらう!!」

「!?」

ガエリオはショックを受け表情を変える。

「一回裏切られたからなんだよ……アンタだつて彼を信じなかつたじやないか……裏切られても……最後に許し合うのが……親友なんじやないのか?少なくとも……少なくとも俺は……彼らの親友になれてよかつた。信じられない?裏切られるかもしれない?そりやあ人間だ。裏切るだらう。信じられなくなるだらう。それでも……それでも最後に笑つて許してやれよ。両手を見ればいいのか!」

大切な人が見ていてくれる。あんたの両手には誰もいないのか!」

ガエリオは自分の両手を見る。すると、カルタ・イシユード、マクギリス・フアリド、アイン・ダルトン、ラストル・エリオン、ジュリエッタ・ジュリス。多くの人がいてくれた。しかし、そのすべてが今はもういない。

「俺が奪ってしまったんだ。自分の意思で……本当は分かっていたあいつの事を……分かつていたんだ」

最初から彼にはわかってはいた事なのだ。ガエリオが勝手に行動したからこそマクギリスは一人で行動したのだ。

サブレには彼を助ける方法はいまだに見つからなかった。ハンドガンを下ろし、覚悟を決める。

「ガエリオ・ボードウィン。あなたを確保する。抵抗なきよう。独房の中でやり直す道を探してくれ」

どうしようもないことぐらいは分かっていた。

サブレにできることは今は無い。

だが……彼がやり直す道があるとサブレは信じていた。

(これで……いいか？オルガ、サイガ)

心の中で問いかけてももう、彼らの声は返ってこなかった。

遠くから多くのギャラルホルンのメンバーが投降、もしくは倒れていく。もはや、ここが三百年の栄光をほしいままにした場所だとは誰も思わないだろう。

三百年の歴史は終わりをづけ、新しい組織へと引き継がれる。

各地で掃討戦へと移行していく中、EDMと木星帝国による頂上決戦が始まろうとしていた。

## レインボー・スカイV 《繋がる空》

《地球編エピソード》

『ビスケットサイド』

世界は変わるのかすら分からない。

自宅であるマンション前で迎いの車を待っていると、後ろからクレアさんの声が聞えてきた。俺もそんな声に導かれるようにマンションの方を向く。

「先ほどアルベルトさんから連絡がありましたよ。もう少しで到着するとのことですよ」

俺は笑顔で「ありがとうございます」っとお礼を言ったところでさらにその後ろからレレさんがエプロン姿で姿を現した。

「ちよつと！掃除の途中で逃げないでください！」

そういつてレレさんはクレアさんの右手首をがっちりつかんでしまふ。そこで俺はようやく二人がマンションの中から出てきたことが不思議になった。

「あのくお二人はどこに住んでいるんですか？」

クレアさんとレレさんは首をかしげて答えてくれた。

「サブレの家ですが？」

明楽とシノが悶絶しそうな話だな。ある程度秘密にしておいた方がいいかもしれない。

そのままレレはクレアを連れてマンションの中に入っていったしまった。

俺は苦笑いを浮かべながらその光景を見ていた。すると、本社ビルの方とは逆方向から一台の車がやってきた。すると、それに乗り込もうとクレアさんがレレさんの拘束を逃げ出して止まった車の中に入ってきた。

「ちよつとクレアさん!？」

「早く出してください！」

「ちよつと待ちなさい！」

車の運転手はその必死の表情におびえた様子でそのまま車を出し



てしまった。後ろから車を追いかけるレレさんの姿は少しだけおかしかった。

強引に押し込まれる形で入ったため車の中に誰がいるのか全く分からなかった。

誰かが後ろにいるような気がする。嫌な感じがするのでそつと後ろを振り向くとそこには……。

「君は副代表の上に乗ろうとするのかな？」

俺の後ろには副代表であるアルベルトさんが怒りで身を震わせながら下敷きになっているのを確認できた。

「うわあ〜!!すいません!!」

俺は勢いよく立ち上がりその場から素早く移動し、素早く土下座する。

すいません!すいません!すいません!

何度も心の中で謝り、その度頭を床にぶつける。

アルベルトさんは「もういい。座れ」というので俺は近くの席に座り、多少落ち着く。

「まったく。少しでも落ち着くということができないのか?」

「本当に申し訳ありません」

指をもじもじさせながら反省していると、クレアさんも多少悪いと思っているのか俯いている。

アルベルトさんは服装をただし改めてこちらに向く。

「まったく。君たちは……。クレア君。ついてくるのはいいが、最下層まではついてくれんぞ」

クレアさんは小さくうなづく。

俺達はこれからアルン最下層に向かうことにしていた。アルン最下層に位置する場所にいるある人物に会いに行くことだった。

もつとも会うのは俺だけだが。

アルベルトさんは迎えと事後処理の報告の為に来てもらった。

「今のところギャラルホルンの残党勢力はほぼ駆逐済みだ。サブレ・チルドレンのメンバーの力で各地の残党は勢いを落ち着かせている。捕縛された士官たちを含めて現在はアルンの地下刑務所でおとなし

くしている人物ばかりだ」

あれから四日が過ぎ、ギヤラルホルンは歴史の教科書に載るような悪の組織に成り下がってしまった。ある意味ギヤラルホルンに所属していたという事が汚名になるだろうと言われている。

もちろんEDMにとっても完全勝利とはいかなかった。多くの命が失われたし、一部の人は批判的な言葉を口にする。しかし、それでもEDMをはじめ、各経済圏の議員たちの一部はの努力により少しづつ立ち直ろうとしている。

「現在アルン議会が開かれている」

クレアは聞きなれない言葉に首をかしげる。俺が答えようとしたところでアルベルトさんが一歩速く答えた。

「現在アルンでは各コロニー圏の代表者を募って、話し合いの場を設けようというのが一年前から試みとして、続いていた。そこから、ギヤラルホルン崩壊を切っ掛けに地球圏の意思を統一し、これからの戦いに備えようという話になった。まずはコロニー代表者が今、話し合い各経済圏との間に共通の法律を作り、平等な立場を望むという意思を示したい。ようするにコロニーにも独立を認めよ、という事だ。その結果でアルン議会が開かれているんだ。議題内容は経済圏統一政権を自立させる。そして、今後はEDMを入れた新防衛軍の創設だ」

俺がホッペを膨らませていると、クレアさんはよく分かったと微笑んだ。

俺は少しは良い所を見せようと頭をひねらせる。

「アルンには五段階の警戒レベルが存在するんです。一段階は市街地です。二段階が一般港と民間移送会社が使用する港。三段階はEDM本社ビルと軍港。四段階はアルン議会などの議会関連施設と開発局と情報局。そして、最後の五段階めが全部で三つ存在するんです」  
そこまで話をしたところでアルベルトさんが話を持って行ってしまった。

「まずはEDM本部ビル直下にあるアルン最高司令部。さらに、コロニーレーザー。そして……これから向かうアルン刑務所がそこにあ

たる」

「アルン刑務所ってどこにあるんですか？」

クレアさんの疑問に再びアルベルトさんが答えた。

「最高司令部からさらに地下に建設されたんだ。縦に作られた穴の外周の壁一つ一つに牢屋が造られた。今から行くのはその最下層警備レベルのある人物への面会だ」

また言葉を遮られた。

先ほどの恨みだろうか？

そんな話をしているとあつという間にEDM本部に辿り着いた。

「では……クレア君はここで降りたまえ」

「ブー……」

クレアはホッペを膨らませながら車で再びマンションまで送られていった。

アルベルトさんとは本部の中で別れ、俺は地下刑務所への道を進んで行く。エレベーターである程度まで降りていくと、そこから歩いて階段を下っていく。十回ほど降りたところで大きな縦穴に辿り着く。

一つのフロアに十個ほどの真っ白な牢屋があり、それが十階まで伸びている。一つの牢屋に四人が集まって捕まっている。

一番下に降りるには中心に伸びているエレベーターへと外周を歩いていく。そして、中心のエレベーターへの一本道になっている栈橋へと足を懸けた瞬間に、周囲の牢屋から一斉に罵詈雑言が俺に向けられた。

「てめえ！幹部!!」「こつち来い！殺してやる!」「あんた達の所為で!!」

様々な罵詈雑言を聞かないように中心のエレベーターへ向かう。

この中心のエレベーターはEDMの幹部や議会、情報局の人間でなければ使用できない。なので、自然とこの栈橋を渡るEDMの制服を着ている人間は幹部かさらに上の代表、副代表クラスという事になる。

なのだろうか、捕まっているギャラルホルンの人達は俺に対して敵意を向けてくる。しかし、彼らの言い分は実に身勝手だと思う。だつ

て、彼等だつて勝つていたらそうしてはたはずなのだ。

身勝手な意見を無視してそのままエレベーターに乗り込む。

一番地下へのボタンしか用意されていないので、自然と一番地下へのボタンを押す。エレベーターは素早く下へと降りていく。少しづつ暗くなつていき、一番地下へとたどり着く。

薄暗く狭い空間に小さな牢獄がいくつか用意されており、使用しているのはたった一つだけだった。

一番奥の牢獄に辿り着くとそこには拘束衣を身にまとい、革のベルトで両腕を拘束衣に縫い付けており、両足には足かせが付いて、椅子に固定されている。顔だけを見るとあちらこちらにむち打ちの跡が見える。

昨日情報局が尋問を行ったと言っていたからその名残だろうことはすぐに理解できた。

紫色の髪がだらしなく伸びており、あちらこちらに傷が残っており、それでも元セブンスターズの跡取りとしての名残はきっちり残っている。

俺は牢獄の中に入るとその人物の元まで近づく。その人はゆつくりと顔を上げ、俺の顔を覗き込むように視線を上げる。

「お久しぶりですね。ガエリオ・ボードウィンさん」

「君は……十年前に火星にいた三日月・オーガスと一緒に……そうか、君はEDMに入っていたのか」

声に勢いが存在しない。拷問時に恐らく何かしらの自白剤もしようしたのだろう。セブンスターズだけが使う何かを求めて。

俺はこの人に言いたいことがあった。しかし、ガエリオは先に言葉を出す。

「まるであのころとは逆だな。報いというべきなのだろう。友を信じ切れず、その挙句の果てに裏切った。きつと……俺には」

その言葉を聞いて俺はかつてのサブレの言葉を思い出す。

俺はサブレにガエリオの事を訪ねた際、サブレは自分という個性を持つていない人間という評価を下した。

「彼には正義が無い。しいて言うなら他人の正義が自分の正義なん

だ。カルタ・イシユールと一緒にいたところはカルタ・イシユールの正義が彼の正義だった。だが、彼の前に現れたマクギリスはカルタが惚れた男、彼の中にある優先順位はカルタからマクギリスに変わった。だからこそ、ガエリオの正義はマクギリスの正義に変わった。兄さん達が初めて会ったのはそのころのガエリオだろう。ある意味一途で、まっすぐだが逆にそれは他人に任せっきりになっているという証拠だ。だが、それは彼からの裏切りを経て曲がってしまった。分からなくなったんだよ。彼の正義を信じていいいいのか、だから彼はマクギリスの正義かラスタルの正義か、悩み、自身が裏切ることで彼は新しい正義を手に入れた。しいて言うなら彼に正義なんて存在しない」

そんな人間がオルガ達を追い詰めた。そう思った時、俺はこの人だけは許せなかった。だが、サブレはこの人を許さない為に生かすことを決めた。

この人がここに收容されたと聞いたときは絶対に会おうと決めていた。

俯き、小さな声でボソボソとしゃべるこの人にいら立ってしまう。つい彼の胸元をつかんで引き寄せる。

「ふ、ふざけるな！そんな人が鉄華団を滅ぼしたのか!?大切にしている家族を裏切ったのか!?アンタの所為でどれだけの人間が不幸になったと思っているんだ!?!」

「そうだな……俺の所為で多くの人が」

俺の叫び声で勢いがさらにそがれてしまったようだ。怒鳴り散らして殴ることは簡単だ、だけどそんなことをしても誰も喜ばないのは分かる。

さっさと用事を済ませようと俺はガエリオから手を離して小さく頭を下げる。

「あの時、妹たちを避けてもらってありがとうございますごさいました」

俺は黙って部屋から出ていく。

意外と暇になったと思いきれからどうしようかと思んでいる。

これからオルガたちのお墓参りでもしようかな〜と考えてそのままを目前す。

『サブレサイド』

タカキ・ウノと呼ばれる人物を待っていてかれこれ一時間が経過していた。いつになったら現れるのだろうかとうと議会前で車を止めて待っていた。

すると、写真と同じ人物が議会の中から歩いて出てくるのを確認した。

俺は素早く車から出て、彼に近づく。

EDMの緑色の制服で彼はEDM士官だと判断してくれたらしく、意外と警戒心は無かった。

「タカキ・ウノだね？ちよつと話をいいかな？」

「はい。それで……何でしょうか？」

俺はタカキ・ウノを連れてその場から車で移動していき、彼の家に向かう片手間で俺は要件を済ませることになった。

「俺の名前はサブレ・グリフォンだ。ビスケット・グリフォンの双子の弟だ」

「タカキ・ウノです。ビスケットさんとは鉄華団時代にお世話になりました」

「あの人に人の世話ができるかは後でじっくり議論するとして、要件はこの手紙だ」

タカキ・ウノは紙で書かれた今時珍しい手紙を開けると、中をしつかり、ゆっくりと時間をかけて読み始める。

「アルンで統一議会を始めるから一部の議員を集めているですか？それで自分を？」

「そういうことだ。各経済圏から議員になれる人物を集めているんだ。君はアブラウ議長からの推薦だ。きつと役に立つと、同時に統一議会の議長からも同じように推薦が来ている。推薦人物はマックさん。知っているかな？」

「はい、アフリカにいたところにお世話になりました。マックさんが議長をするのですか？」

「ああ、ああ見えてあの人は元々はアフリカの内戦が起きる前に一期議長をしていた事がある。一部じゃ有名だ」

タカキは手紙を握りしめたまま俯いてしまう。

「君が嫌なら俺の方から断っておくよ。あくまでも俺に一任してくれているしな。どうしてもって言う条件があればこちらはある程度飲むつもりだ」

タカキは覚悟を決めた男の顔を見ると、こちらを真剣に見つめてきた。

「やりますーやらせてくださいー!」

俺は少しだけ微笑むとはつきりと告げる。

「だったら今から移動するぞ。早く来てほしいと言われているしな。荷物は後日管理人から送ってもらう。妹にも迎えが行っているはずだ」

タカキは啞然とした表情のまま車の進路を宇宙港方面に向ける。

アーブラウからアルンの民間移送用の港にシャトルを止め、俺たちのモバイルスーツは開発局員に引き渡し、俺達はタカキ・ウノと共に忙しそうにあわただしい雰囲気に含まれている港で周囲を見回している。

「なんかあわただしいっすね」

レオがそうつぶやいたとき、渉とジョシユアがレオの体の周りで追いかけて合意をしている。明楽とシノがあわただしい港を見回しており、マークに関してはゲームをしていて既に聞いていない。

俺は奥から走ってくる三人を見た瞬間にそれが火星からやって来たのだと判断できた。できることならこの場から逃げたいことこの上ないが、それをさせまいと、久しぶりに俺の前に現れたメイデンがガツチリ俺の腰を押さえていた。

「久しぶりだなメイデン。お前いつの間にここにいたんだ?」

「お前の妹たちが来るから、お前が逃げるかもしれないと代表から告げられた」

あのクソおやじ!!どこまで俺の邪魔をする。

そう思っているとサラが突撃しようとするのを俺は明楽を使って回避する。

「明楽ガード!!」

「くっ！やりますね先輩！」

明樂を押し倒し倒しこちらを女々しく見上げる。何っていう目で見てくるんだ。小走りですらにその後ろから二人がやってきた。

「サブレさん」「サブレ先輩」

ノインとジャニーの順番でやってくるのをまさしく体を張って受け止めると、俺は二人の頭を撫でてやる。

奥から懐かしい人物が歩いてきた。

順番に桜おばあちゃん、クツキーとクラツカ、知らない女性と男性。多分アトラという女性にユージンとかいう男性だとは思う。

桜おばあちゃんはクツキーとクラツカをこちらへと出してくる。俺はそんな二人の頭を撫でてやる。

「おつきくなったな……クツキー、クラツカ」

本当に大きくなったと思う。赤子のような頃しか知らない俺は160cmまで伸びた身長、苦勞をしたのだろうが兄さんに合わせるのが楽しみだ。

隣を見るとユージンと思わしき男がシノの近くまで近づいていた。

「久しぶりだなてめえ！」

ユージンはシノに向けて軽めのジャブを決め、シノも嬉しそうに俺を受け止める。

「久しぶりだな」

あの二人なりのコミュニケーション方法なのだろう。その後ろでは嬉しそうなアトラと思わしき女性が微笑んでいる。

するとサラとジャニーとノインは頭を撫でてほしそうにしているのを無視して、俺はメイデンに「手を離せ」と睨みながら告げる。

するとメイデンは俺に「ビスケットは？」と聞いてきたので俺は兄にメッセージを飛ばす。すると、ものの数分で返事が返ってきた。

「墓参りをするってき。先に墓地に行ってるそうだ」

「だったら行くか？」

メイデンは周囲の人間を突き動かす。

なんでお前が行動への選択権を持っているんだよ……不思議に思わざるを得なかった。



みんながお菓子などのお供え物を狩っている間に俺は先に兄の元へと移動していく。すると、ある程度の掃除を済ませていた兄がお墓の前でしゃがんで呆けていた。

俺はその隣でしゃがみ込み兄に向けてバニラアイスバーを運ぶ。すると、無意識にそれを銜えてしまう兄に俺は「おいしい？」と聞くと兄は「おいしい」と答える。

数秒だけ呆けているとようやく俺の存在に気が付いたらしく俺の方を見て驚く。

「サブレ!?いつの間に!?!」

「さっきからだけど?なんで呆けているんだ?」

「その……えへ!」

「誤魔化せてないぞ」

二人で立ち上がると後ろからみんなの声が聞えてきた。俺も後ろを向くとすこしづつクツキーとクラツカの姿が見えてきた。

「あつ……クツキー?クラツカ?」

「お兄ちゃん」

「お兄」

三人はお互いの存在に驚き数秒だけ間が開くと同時に走り出し抱き合う。

「二会いたかったよ……お兄ちゃん(お兄)」

二人が抱き合う光景をみんなが見つめる。

アトラやユージン、シノ、タカキ、フウカなんかは涙ぐみながらその光景を見ていた。サブレ・チルドレンのメンバーもどこか嬉しそうな表情を浮かべる。

これでよかったのか俺にはまだ分からない。

戦いが終わったわけではなく、これからも続いていく。

つらいことだっただけこれからも起きていくものだ。いつそのことつらいことを忘れていられたらと何度も思った。

そうすればきっと……こんなに苦しい思いをせずとも住むというのに……。

『たとえ……二度と会えなくなっても』

オルガのそんな声が聞えてきた。

『道を違えて二度と会えなくなっても』

サイガの声が続いて聞こえてきて、二人は俺に語り掛ける。

『俺達の心はいつだって一緒だ。いつだってお前と共にある。今一緒に歩いている奴らとだっていつか分かれる日が来る。覚えていてくれよ……俺達がここにいたという事を』

俺はみんなの後ろにオルガとサイガ……それ以外の多くの死んでいった人たちを見た。敵として死んでいった人や会った事も無い鉄華団のメンバーまでもがこちらを笑顔で見ってくる。

『『忘れないでくれ。ここにいたという事を。生きていたという事を』』

俺は彼らを見つめて笑顔でいられた。

つらいとおもえてもいつの日かいい思い出だったと思える日がきつとくる。その日を信じて歩き続けよう。

どんな人との出会いも忘れずに歩く。

俺は心で彼らにメッセージを告げる。

『忘れないよ。どんな事があっても……みんなが生きていたという事を。絶対に』

彼らの思いを繋げてどこまでも歩こう。この空のように繋がって歩いていくことをみんなに誓う。

忘れずに繋げてどこまでも……

それが俺にできる俺のたった一つの道なのだから。

《レインボー・スカイ編 地球編終わり 断章開始》

## 断章

### 誰にも語らない話

「——なあ、サブレ。頼みがあるんだ」

そうオルガは俺に一つの頼みごとをした。俺はその頼みごとを決して忘れることは無い。

「ああ……分かったよ」

そういつて切れる電話を前に俺は少しだけ呆けてしまった。

止めることができなかった。

革命に参加する。もしもその時は鉄華団のメンバーを頼む。それを止めることができたはずだ。しかし、俺はその言葉を口にすることができなかった。

俺はどうしたいのかそれが今の俺には分からなかった。

革命までそこまで時間があるわけではない。もし、革命が失敗するのならせめて鉄華団のメンバーだけでも助けてやりたい。それがオルガとの約束なのだから。

俺はもしの事を考えて一人で行動することにした。

しかし、俺の行動はメイデンに見抜かれていた。

「なんでわかった?」

メイデンにそう尋ねると、メイデンはギャラルホルンから横流しを受けたレギンレイズのカスタマイズを済ませながら答えた。

「……最近行動がおかしかったから。みんな気づいている」

無表情で作業すると、奥の方から明楽が頭を下げながら歩いてきた。しかし、問題はその後ろの人物だった。

一番隊から五番隊の隊長クラスの幹部が勢ぞろいだった。

「明楽くてめえ〜!」

「俺の所為じゃないですよ〜」

言い訳をするように両手をこすり合わせて謝ってくる明楽よりも俺は幹部にどう言い訳をしたものか悩んでいる。

「面白いことをしているじゃないか。私達も一枚かませてください」

「断つたら?」

幹部クラスへの疑いの目線を向ける。

「話が代表に漏れる。なあに、君のすることに協力をしようといっているんだ。その代り君の事情には決して立ち入らないと誓おう。どうだ?」

俺は悩んでしまう。

断ることは簡単だ。協力したほうが何をするのも楽なのは確かなのだ。しかし、この五人が俺の事情に立ち入らないという保証はどこにもない。

いや、問題はその言葉を信ずるか否かである。

信じてみるか、信じず自分だけで作戦を遂行するかの違い。

少しの間悩んだ末、俺は決断を下す。

「分かった……ただし、俺の事情には決して立ち入らないという事」

「分かっているさ。ここでは聞かれる可能性がある。どこか隠れられる場所に行くか」

そういつて移動する俺たちの後ろからソニアもこつそりつついつてきていた。

近くの会議室に入って誰にも聞かれていないことを確認すると、メソツを確認する。一番隊の幹部が立った一人の人物に問いかける。

「ソニア、君を呼んだ覚えはないはずだが?」

ソニアはとつてもいい笑顔で答えた。

「暇なのよ。それに開発局が総出で手伝うのよ、お得でしょ?」

出ていく気が全くないソニアを無視しようという意見でまとまると、まず俺は自分が知っている限りの情報を開示した。

「数日後にギャラルホルンのマクギリス・ファリドを中心に革命派が動くらしい。ターゲットはラスタル・エリオン。鉄華団のメンバーを含めたメンバーが革命に参加する。どちらが勝つてもいいように動きたい」

本心はラスタルなどどうでもいいが、それをおくびにも口にも出さない。

五人は目の前のタブレットの情報を見ると、一番隊の幹部が意

見を出してきた。

「タービンスという組織にダインスレイヴを使用したというのは本当か？」

「間違いないようだ。実は記録映像も手に入れた」

俺はオルガから入手したダインスレイヴを使用する瞬間と、その攻撃で輸送船に当たる瞬間が記録されていた。

「証拠映像だな。言い逃れのできないレベルの。だが……ラスタルなら使用する可能性が高いな」

俺はさすがにっと思っただが、他の幹部ですら何度もうなずく姿に俺は嫌な想像をしてしまう。ソニアですら「やるでしょうね」とつぶやく。

彼らはEDM結成時からのメンバーでラスタルを知る数少ないメンバーである。そんな彼らがラスタルなら撃つっと言っているのだ。間違いないのかもしれない。

「でも……確証は？」

俺は確証が欲しかった。すると、一番隊の幹部は重い口を開いた。「ラスタルの事だ、たとえ自分の悪事の証拠を押さえられても他人の上げ足を取ることで回避するだろう。そんなことであきらめるのであれば、あいつは今の地位に落ち着くことは無かった。もし、マクギリスとラスタルが戦うのであれば、ラスタルにとっては鉄華団という不確定要素が一番不安なはずだ。実際、資料にも鉄華団に何回か後れを取っているようだし、警戒はしているはずだ。確かにアリアンロツド艦隊は確かに戦力が膨大だ、しかし、数が戦力に直接なるわけではない。それは君がよく分かっているはずだが？」

そういわれると反論しにくい。俺達EDMは数の差を質で盛り返すやり方を何度もしてきた。俺達サブレ・チルドレンはそういう戦い方を得意とする。

一機当千、戦略と戦術をもって敵を叩いてきた。それに地の利も重要になってくる。

「そんな不確定要素を一気に叩くことができるのがダインスレイヴだ。モビルスーツのナノラミネート装甲ですら防ぐことができない

ほどの貫通能力。使えるなら使ったほうがいいだろう?」

しかし、それは使えればという話である。使おうにも使えないのが禁止兵器なのだ。それをあの男はどう使うのだろうか?

そもそも、ダインスレイヴを勝手に使用したからこそ追い詰められているのだ。

しかし、そんな答えは簡単に出された。

「マクギリスに使わせればいいんだよ。一発だけ、それだけでラスタルは使用する権利を得る。その為なら自分の部下を殺すぐらいはするだろうな。そして、その一発で状況を一変させる。それぐらいダインスレイヴは魅力的な兵器だ」

信用したくない。そう思う傍らで、説得力のある話でもある。

結局話はラスタルとマクギリスの戦い次第で決めようという事になった。

結局ラスタルがどう出たかという点、彼はダインスレイヴを使用した。それによって、作戦が決定された。

俺は戦艦に乗って火星に他の誰よりも素早く向かうことになった。会議室に集めたサブレ・チルドレンのメンバーとメアリーとイオリを入れたメンバーで作戦内容を告げるようになった。

「まず俺たちの部隊がラスタル陣営が動く理由になるような行動をとる。これは実際の経過を見て判断する。作戦を実行するにあたりギヤラルホルン火星支部が手伝ってくれるように今四番隊が交渉しているところだ。俺達はそれの実行役と作戦開始時に敵の目を引く役目をおう」

明楽が手をあげて質問をしてきた。

「何をするんですか!?!」

俺は明楽の方にタブレットを投げつける。明楽はタブレットを鼻っ面で受け止めつつ後ろに落ちてしまう。サラが軽蔑を含めた目で見つめ、レオがさらに手をあげる。

「俺達も火星に降りるんですか?」

「ああ、火星で直截戦うことはしないが、何をすることも多い方がいいかな」

ゲームをしているマークははなつから話を聞く気が無いらしく、代わりにサラが気になったことを尋ねる。

「だったらどこで戦うのですか?」

「災いの地。そこで迎え撃つ」

サラが「理由は?」っと訪ねてきたのを俺は事前に話あつて決めたことを話した。

「理由の一つがダインスレイヴを封印するという意味がある。さすがに俺達が優秀でも、なん十本も同時に攻められたら勝てない。しかし、ダインスレイヴにも弱点は存在する。なんだと思う?」

サラとレオが真剣に考えるとマークが声を出す。というか、聞いていたのか。

「弾が質量を持っているという事。特殊弾頭は摩擦熱に耐える為に人一倍重力の影響を受けやすい、だったら周囲から重力を発生させられているデブリ帯ならダインスレイヴは効力を持たないから」

「マークの言うとおりだ。だから重力場であり艦隊で戦うことができ『災いの地』で戦う」

重力場があり艦隊が容易に入れるのは『災いの地』だけである。だからこそ、この作戦が成立した。

火星に降りた俺達を待っていたのは鉄華団掃討作戦だった。

一連の戦いが約二時間前の事であり、ダインスレイヴによる攻撃は地響きを響かせるにいったつた。

レオはため息すら吐き出し、攻撃の余波にある意味感動すら覚えていた。

「すつごい戦いだつたなく混ざりたくないけどさ」

「あなたならいい戦いするわよ。何だったら混ざってくればよかったのに」

サラとレオが言い争いをしている傍らで、メイデンとジョニーとノインは準備に入っていた。

「じゃあ、素早く回収を頼む。アリアンロッド艦隊が地球圏へ撤退している今がチャンスなんだ。せめてガンダムフレームだけでも回収しろよ」

ソニアが欲しがっているっていうだけなのだが、おくびにも口に出さない。

すると、俺の考えを見抜いたようにぼそりとマークがつぶやいた。「ソニアが欲しがっているだけじゃない?」

渉とジョシユアが追いかけてつこを繰り返している中、俺は誤魔化すように二人を注意する。

「お前たちも仕事をしなさい」

「誤魔化したな」

俺はマークから視線を回避するために自ら仕事へと向かっていく。三十分ほどで回収を終わったが、問題は鉄華団の遺体をどうするかという事だった。

すると、どこから姿を現したのか、老人が現れた。俺はその老人に身に覚えがあつた。混乱する周囲に居たいして俺は冷静にその名を呼ぶ。

「初めてお会いしますね。ゲイナーさん。今回はどのようなご用件で?」

ゲイナーの後ろには見慣れないメイドが立っているが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「なあに、鉄華団の遺体のうちガンダムに乗っておった二人を引き取りたくてな」

困ったことになったな。遺体は鉄華団にこっそり返却することになっていたのだが、どうしたものかつと悩んでいると、サラ達が意見を言い始める。

サラは『反対だ』といい、レオとマークは『賛成だ』といい始めた。俺は渡すことへのメリットを求めることにした。

「遺体を引き渡すことへのメリットを求めますが?」

「まずは、蘇生治療での貸し借りを無し。もう一つが、鉄華団団長のアリアンロッド艦隊への降伏勧告の記録映像でどうじゃ?」

ここで感じた事はまずやはりという事だった。

オルガはアリアンロッド艦隊に降伏したという事だ。しかし、ラスタルはそれを拒否したのだろう。理由としては鉄華団を滅ぼした方



がギャラルホルンの権威を復活できるからとかそういう理由だろう。なのだとしたらその記録映像は俺達にとっては持っていてもいいものだ。

それでもう一つの感じたことは疑いであった。

しかし、疑っても仕方がないので、ここは聞き入れることにした。こんなことでゲイナーを敵に回したくはない。

「分かった。しかし、ガンダム二機はこちらがもらうからな」

「いいじやろう。取引成立じやなコックトン、持っていけ」

にこやかに立ち去っていく彼らをしり目に俺は他のみんなに指示を出す。

「ガンダムを積んで上に上がるぞ！ 作戦が控えているんだからな！」

作戦実行まであと少しというところで俺達はそれぞれの場所で待機していた。

俺と明楽とメイデン以外は各場所で隠れており、サラ達はすでにデブリに隠れており、後はバルバトスとグシオンの修理が終わるのを待つだけだった。

俺と明楽は二人でバルバトスとグシオンの前で待機していた。すると、ソニアが修理と小規模の改修が終わった合図を送る。

明楽はグシオンに、俺はバルバトスに急ぐとソニアは俺に最低限の説明を口に出す。

「いいわね。バルバトスも基本はグシオンと同じようにコックピット周りの取り換えと、システムの最適化、装備などの一新を行ったわ。特にあなたの要望でブースターには力を入れたわ。といってもほとんど入れ替えただけだから改修といってもいいのか疑問になるけどね。装備は太刀を二本、両腕に内蔵式のマシンガン。最後に対艦用のメイスを腰に装備させているわ。装備も最低限だからね？ 壊さないで帰ってきてちょうだいね」

俺は座席に座ってコックピットへと降りながら「保証しかねる」とだけ答えた。

EDMのモビルスーツシステムには、キーを差し込むことでシステムが起動するようになってる。ガンダム用に改良が進んでいるだ

けで基本は変わっていないはずだ。

システムが起動すると俺は念のためにメイデンに指示を出す。

「メイデンは最初の攻撃を受けたのちに素早く船を安全圏まで離脱、その後出撃だ。イオリ、あとは作戦開始合図はお前に任せる。合図で各艦隊が作戦行動に移る」

メイデンとイオリから返事が返ってくる、俺は作戦開始まで目をつぶって大人しく待っている。すると、イオリはすぐに作戦開始のカウントダウンを始める。

「敵艦との戦闘可能距離まであと十、九……」

少しづつカウントが進み、一と同時に正面にアリアンロッド艦隊が姿を現した。それと同時にイオリの号令をもって作戦が始まった。

「オペレーションホルンブレイク！開始します！」

戦いは唐突に始まった。

ドカン！というアリアンロッド艦隊からの攻撃を皮切りにEDMは条約禁止による反撃行動に出た。ダインスレイヴによる駆逐を即座に決めたのはラスタルの一存だった。

「ダインスレイヴによる駆逐を行う。総員構え」

ラスタルの号令と共に攻撃が行われるが、攻撃が敵艦隊に当ることは無かった。それどころか四機のモビルスーツ、バルバトス、グシオン、黒いゲイレール、金色のゲイレールが放たれたダインスレイヴの攻撃を弾いたところでラスタルはいやな予想を浮かべてしまった。

ダインスレイヴを回避することは不可能ではない……と言われていた。しかし、実際に行動を起こそうと思えばかなりの難易度になる。

それに、敵の戦艦に一度も当たらないというのは明らかにおかしかった。

最初のアリアンロッド艦隊から砲撃が一回だけ当たっただけで、あとはなしのつぶてである。

明らかにおかしい。なによりこの短時間にバルバトスとグシオンを修理して実戦に出せるだけの技術力が相手にはあるという事だ。

しかし、この時のラスタルはまだ相手がEDMだという事には頭が

回っていないかった。

ダインスレイヴが通用しないのであれば、もうあとはモビルスーツ隊による駆逐戦に移行するしかない。さすがに四機だけではモビルスーツ隊にかなうはずもないだろう。そう考えていたのはラスタル以外の士官たちだった。きつとジユリエッタやガエリオでさえそう考えていただろう。

実際、四機のガンダムは深追いをするまいとあまり動かない。しかし、その傍らで彼らの長距離攻撃はダインスレイヴ隊に甚大なダメージを与えていた。

「ダインスレイヴ隊はいったん後退。モビルスーツ隊は前進」

ひとまずそういう指示を出すしかないと判断したラスタルはモビルスーツ隊が一定の距離まで詰まったところで、彼らが一定の距離で止まっているもう一つの理由によるやく気が付いた。しかし、時は遅くラスタルの怒号だけがブリッジに響いた。

「モビルスーツ隊を一旦後退させろ！」

しかし、遅く、少し右に離れていた艦のデブリの中から小型のミサイルが大量にモビルスーツ部隊を襲う。

反応したものも多くれたが、彼らが引き金を引く前にミサイルはさらに小さな棒状まで分離、そのまま大きな閃光にも似た熱量を放つ。ラスタルはそれを見た途端敵の狙いが分かってしまった。

「ナ・パーム弾？まさか？」

しかし、そんなラスタルの思いとは別にモビルスーツ隊には目立った被害が無いために油断しきっていた。

だからこそだろう、そのままミサイルを放っているであろう艦の元まで機体を走らせる部隊と四機のモビルスーツ隊への攻撃部隊へと別れた。

「二度引いて後続部隊と交代するように伝えろ」

しかし、時は既に遅くモビルスーツ隊の前に赤いレギンレイズが立ちふさがった。両手に装備した小太刀のような武器でモビルスーツを簡単に切り裂き、熱が通ったワイヤーが一瞬で大量のモビルスーツを切断する。

「どういうことだ!?!なんでこんなに簡単に?」「いくらナノラミネートアーマーだからって!?!」

モビルスーツ隊の混乱をよそにラスタルはその答えを口にした。

「先ほどのナパーム弾でナノラミネートアーマーを弱体化させ、簡単に切断しやすくしたんだ。あの状態では通常のライフルでさえ致命的だ」

すぐに後続部隊が手助けに入ろうとする。しかし、それすらも敵の思惑の上で会ったことはすぐに理解できた。

後続部隊がある程度モビルスーツ隊に近づいたところでさらにナパーム弾が別方向から姿を現した。それもほぼ真後ろからである。

そして、さらに現れたそっくりに作られたグレイズが二機、お互いを結ぶようにワイヤーで結ばれている。そのワイヤーもまたあつという間にモビルスーツを二十機ほどあつという間に落とすべく、

黒いゲイレルが後方からレールガンで援護しつつ、敵の船から現れた新しいレギンレイズがゲイレルに近づきそうなモビルスーツをあつという間に落とすべく、

ラスタルの脳裏に最も嫌な予想が現実になりつつあると思っていた。

「今回の相手は……EDMの可能性が高いな。なら今ここで撤退しておかねば」

そう思い撤退の指示を出そうとしたところでラスタルはガエリオとジュリエッタに撤退までの間、時間を稼いでもらえるように頼む。

そして、ガエリオ達が出撃したタイミングで艦隊の一部をいつでも撤退できるように後退させる。

ガエリオとジュリエッタがそれぞれバルバトスとグシオンと戦っている間にそれは唐突に現れた。後退していた艦隊の前にEDMの主力艦隊と主力モビルスーツ艦隊が囲む形で姿を現した。

ラスタルはまずいという気持ちにかられ、艦隊ごと正面を突破する作戦を取ろうとする。艦隊を後方の敵もビツスーツ隊に押されたことも重なり、艦隊事部隊を戦場に近づけたところでさらに敵艦の後方から艦隊が姿を現した。

「囲まれたか……」

全て敵の作戦通りに進んでいたことによろやくの思いで気が付いた。ここに誘い出された時点で全て敵の思惑通りに進んでいた。

ガエリオとジュリエッタもバルバトスとグシオンの前にあつという間にとらえられてしまった。そこで、バルバトスとグシオン、金色のゲイレールがラスタル達艦隊までたどり着く。

バルバトスがラスタルの艦隊に近づこうとしたとき、部下の一人がおどおどとしながら報告を上げる。

「ラスタル様。鉄華団とEDMの関係を調べていたのですが……つながりがありました」

「なんだ？」

「EDMの幹部と鉄華団の死亡者に共通の性を見付けました。EDMの幹部の名前は『サブレ・グリフォン』で鉄華団の方は『ビスケット・グリフォン』です。そして……その二人の親代わりになっている者の名前がマハラジャ・ダースリンです。マハラジャ・ダースリンと二人は親戚関係だという事です」

ラスタルは歯噛みするしかなかった。そこに気が付いていれば、少なくともEDMが動くかもしれないという事には考えがたどり着いたはずなのだ。

そう考えたときにはバルバトスは正面に迫り着いた。

ラスタルは最後のあがきをすることにした。

「敵パイロットにつなげてくれ」

すぐさまつながった敵パイロットはあまりにも若かった。怒っているような表情を浮かべ、こちらをある意味軽蔑しているような目をしている。

「交渉をしたい」

「は？…交渉？…出来るの？」

士官の一人が立ち上がり怒鳴り散らす。

「貴様！ラスタル様になんていう。貴様達なんかギャラルホルンの総力をもつてすれば駆逐など簡単なんだぞ！」

そんな脅しには全く耳を傾けないサブレは脅しに脅しで返した。

「お前達の条約違反行動なんてこつちには腐るほど存在するんだぞ。それに、駆逐しようと思えばもつと手段だつてあつたんだ。むしろこちらはそのちにチャンスを与えてやったつもりだぞ」

そういいながらオルガ・イツカの降伏勧告を拒否する映像や、マクギリス・ファリド艦隊から放たれたダインスレイヴを撃つたモビルスーツパイロットの記録がアリアンロッド艦隊所属である証拠や、タービNZに対する過剰攻撃、そのた諸々の証拠映像の数々。

言い訳のしようもない。

「お前たちは降伏をしようとした彼らを無視して、違反兵器を無断使用した。許してはいけないことだと思うが？どうなんだ？ラスタル」  
ラスタルには彼の目がある一筋の光をともしていることに気が付いた。

同時に感じた違和感の正体にも気が付いた。

そうだ、彼等にはラスタル達を殺そうとすればいくらでもできたのだ。殺した後に諸々の証拠を経済圏を通じて世界に発表すればギラルホルン解体は簡単だった。

ラスタルは自分達が試されていることに気が付いた。同時に、彼が自分の中にある憎しみを押さえ、世界の為に、同時に守りたいものをちやんとした考えで行動しようとしていると気が付いた。

怒りは自分への怒り、軽蔑はラスタルへのものだ。

ラスタルには戦い始めたところで降伏することもできた。いや、それが本来彼が取るべき行動だったのだ。

しかし、それでもサブレは信じた。ラスタルが考え直してくれることを祈り、同時にそれを待たなければいけない自分に怒りを現した。ラスタルはここにいるみんなを守る為に膝を折り、両手を地につけ、土下座をする。

「どうか、ここに居る皆を助けてやってくれ」

その後、サブレの一声で戦いを収束した。

今回のエピソード

あれから一か月がたち、EDMとギラルホルン間の不平等条約は無事、制定された。俺達は各地で引越しの作業やアルン建設に大忙

しになっていた。

家で朝食の為にスープを作ったり、スクランブルエッグを焼いたりしながらサラと連絡を取り合っていた。

「半年後には完全に引越すつもりで動いてほしいそうです。でも、よかったですね。無断行動については不問に付すという形になって」「まあ、謹慎ぐらいは覚悟していたがな」

オルガの望み通り、鉄華団のメンバーは無事、ID書き換えを終え火星に戻っていった。彼らを守った以上もう、俺には彼らを庇ってやる義理は無い。

「鉄華団のメンバーも無事なようですし、これで一件落着ですかね?」「どうかな。木星圏でも相変わらず不審な動きがあるようだし、これまで以上に油断できんだろう。EDMは今後ギャラルホルンから譲歩されたエイハブ・リアクター生産所を最大限利用して量産モビルスーツを生産するだろうな。それも大量に」

スクランブルエッグを皿に盛り、厚切りベーコンを今度は焼き始める。

サラは鬱陶しいような表情を受けべる。

「鬱陶しい限りですね。みんな大人しくしていればいいのに。まあ、こちらでいくつか仕事を持っていますから来てくださいいね」

「へいへい……じゃあな。あつ!?!」

パンを焼こうと棚を調べたところでパンが無いと気が付いた。

「買いに行くしかないか……」

近くにパン屋があったはずだから食パンを買ってくるしかない。

連絡用に使っていたタブレットの画面表示を『鉄華団の処理』という資料に変えておく。朝食を食べながら見る予定だったし。

俺は時間を確認するためにスマートフォン画面を付けつつ、ドアに手を掛けて外に出ていく。すると、オルガとの着信履歴が真っ先に目に移ってしまった。

俺はドアを閉める前に俺はオルガとの証拠を全て削除した。

『俺との関係はみんなには話さないでくれよ。お前に支えられたって気づいたらあいつらはショックだろ?俺はあいつらの前ではかつこ

いいオルガ・イツカでいたいんだ』

約束は守るよ、オルガ。

これで俺とオルガは完全に関係は無かったという事になる。思い出はあくまでも俺の中だけだ。

誰にも語らない。

俺はドアを閉め、鍵を掛けながらそう誓った。

これは誰にも語らない話。

血が固まり、鉄のように固まった絆の物語。でも、その物語を俺が語ることは無い。

そして、一日が始まる。

さあ、物語を始めよう。



## その涙は誰の為に

瞳を開くとそこはかつてオルガ・イツカと喧嘩したあの海岸であった。大きな岩の上で眠っていた理由はよく分からないが、周囲を見回して確認を取ると、時間帯は夜、場所は海岸。それ以外には何も分からないと思っていたが一人海に足を浸かっているのが分かる。

銀髪の髪に特徴的な前髪に褐色肌の男だった。

オルガ・イツカ。

そう思っ駆け出しオルガの元へと急ぐ。

「オルガ！」

「よう……ビスケット。久しぶりだな」

久しぶり？ そんなに経つかな？ よく分からないけど……。

ひとしきり悩んでしまうと、オルガはこっちにこいと手招きしてくる。俺はオルガの隣に移動する。

よく見るとオルガは見慣れないスーツ姿である。

「懐かしいよな。……ここでお前を怒らせてしまったんだよな」

「あ、あれは……ごめん」

頭を下げ謝ってしまう。

「謝らないでくれ。そもそもお前の事情を知らないですぎたことを言ったのは俺だ……」

オルガが少しだけ申し訳なさそうにしながらどこか遠くを眺める。

なんで俺はこんなところで寝ていたんだろう？

「思い出してみろ。お前をいつだって大切に思っていたのは誰だ？」

「へ？」

誰だろう。いつだって大切に思っていたのは？

『おばあちゃんに迷惑をかけてどうするんだよ！』

そんな声が聞えて振り返るといきなり風景が変わり、今度は懐かしいドルトコロニーのスラム街である。

小さいころ、よく虐められていた時弟のサブレが助けに入ってくれた。しかし、サブレはその行為でやり過ぎた。

俺が廃墟の中で見た光景は俺にとって恐怖ですらなかった。少な

くとも六歳以上年上の男子二十人にサブレはたった一人で血塗れの傷だらけにしてしまった。死体のように積み上げられた体の上に返り血で真っ赤に染まった体、睨むように俺の方を見ると表情は多少穏やかになった。

俺は無理矢理忘れたいとすら思ったんだ。

両親が死んだのはちょうどその直後の事だった。

だから無理矢理忘れ、つらいことから逃げた。サブレの気持ちもつらさも忘れ、逃げ出したんだ。おばあちゃん家へ逃げ延びた。

本当はサブレが俺を大事におもっていたことも、家族を守ろうとした結果だという事も分かっていた。

サブレと比べられるのが嫌だった。

サブレが手を差し伸べる。その姿は昔のサブレではなく、見たことない緑色の制服を着ている。

「いつだって見てくれていただろ？」

俺はサブレの手を握ろうと右手を伸ばすとオルガは小さな声で俺に向かってつぶやいた。

「サブレに……ありがとって伝えてくれ」

俺は振り返ろうとしたとき、サブレの手を握った瞬間に衝撃のようなものを受けて俺の意識を吹き飛ばした。

意識が戻っていくのを感じ取り、五感が目覚めていくのを感じ取った。ふかふかする感触、フローラルの香りが眠気を誘ってくる。明かりはついておらず、カーテンがなびく。そして……部屋中に所狭しと置かれている睡眠を促進するグッズの数々。

何だろう。この家の主は俺を眠らせようとしているのだろうか？

不安を駆り立てられる。

体を起こそうとする瞬間に体に痛みが走る。そこでようやく自分の体を見ると、過去に見たことも無いぐらいに妬け細っている。つといても標準的な体型に落ち着いているぐらいだが。

少なくとも筋肉は落ちてしまっており、体を動かすことがつらく感じる。しかし、動かせないほどではなく、体を必死に動かしながら廊

下に出ていく。一步一步歩くごとに体中が軋む音が聞こえてきそうだった。

広いリビングに辿り着く。キッチンには朝食を作っていた最中に抜け出したのか、散らかっている。そして、自然と視線はそのままリビングのテーブルの上に置かれているタブレットに視線を移す。

そつと手を伸ばし、タブレットをスリープ状態から解除すると、目の前に表示された文字にくぎ付けになってしまった。

『鉄華団壊滅』

息苦しくなり、焦点が合わなくなってくる。過呼吸になったような感覚に落ち込んでしまい、俺はフラフラした足取りで後退してしまふ。

すると、部屋に入ってくる人間と視点があつてしまふ。

俺より五センチほど高いが、俺と同じ茶髪の男。昔、から変わらぬ釣り目が目に入った。

「あ、あ……あああ!!」

俺は体がきしむ痛みすら忘れて駆け出していき、寝ていた部屋に戻っていく。ベットに顔を預け、涙でベットが濡れていく。

オルガの顔が、三日月の顔が、みんなの顔が次々とあふれ出てくる。思い出せば思い出すほど胸が苦しくなってくる。

『なあ、ビスケット』つとオルガが呼ぶことも無いのだろう。

「オルガが……言ったんじゃないか。島を……出たら、話をしようって……!？」

胸が苦しくなり、何度も意識が消えそうになる。それを怖いと感じていた。眠ればオルガ達の事を思い出しそうになる。

しかし、それからの数日間は何どく、食事をまともに取ろうともせず、サブレが入ろうとすれば物を投げるなどの抵抗をつづけた。

あれから数日、まともに食事をとろうとしない兄に対してどうすればいいのか分からず、結果として放っていた。

兄自身はいい加減自分で決めて歩くべき時なのだ。俺ができることは無い、そう思っていると、サラが隣に歩いてきた。

「いいんですか？あのまま放っておいて」

「別にいいさ。兄さんが逃げたいというのならそれでもいいし、立ち向かいたいと願うのならそれでもいい。兄さんが決めることだ」

それでいいんだ。強引なやり方をした結果、俺は兄さんの説得に失敗してしまった。だから今度はこれでいいんだ。そう思っているとサラはさらに近づいてきてはつきり告げる。

「先輩らしくありませんよ。いつもだったら自分が思ったことにまっすぐ突き進む。それがサブレ・グリフォンでしょ？」

サラは微笑みながらこちらを見てきた。俺ってそんな奴だっけ？それはそれで反省するが……。

少しだけ考え込む。

確かに、オルガの事だっただ俺がもう少し突っ込んだ行動をしていれば阻止できたかもしれない。

そう考えたとき、どっちが正解なのか疑問を抱いてしまう。

きつと正解は無いのだろう。だったら……俺は。

そう思っただち上がるとそのまま仕事部屋から出ていく。

ベットの上で泣きじやくっていたら、俺を引っ張る力で強引に立ち上がると、右頬に鋭い痛みと共に俺の体は強引にベットへと戻された。そこまで来てようやく自分がたたかれたという事に気が付いた。

「な、なにを……!？」

俺の襟首をつかみ顔に近づけたのは弟のサブレだった。

「いい加減にしろよ。ふてくされて、辛そうな表情で、死にそうな面しながら何もしないことが今兄さんがするべきことなのか？」

そんなサブレの言葉に憤りを覚えた俺はサブレを押し倒して、殴り飛ばそうと右腕を上げる。

「なんだよ!? サブレに何が分かるの!? オルガを! 三日月を! 昭弘を! みんなを失った俺の気持ちにサブレに分かるの!? 分かるんだったら言ってみろよ!」

涙を流しながら情けない表情をしている俺にサブレは一瞬だけ間を開ける。その時のサブレの表情は何とも言えない悲しげな表情をしていた。

サブレは俺の額に自分の額をぶつけてくる。



きる。しかし、妹たちへの連絡は俺の進路次第だといわれてしまった。

なんでも、妹たちの元へ帰るのならIDを書き換えてから連絡を許可する。しかし、こちらに残るのならEDMに入り、妹たちへの連絡は一切禁止するつと言われた。

どちらを選択するにせよ、まず行動するべきだろう。

そう思い靴を履き、家を出たところで俺はシノの元に行こうと決める。

歩いてバス停まで移動し、そこからバスで中心地まで移動する。

「確か……EDM本社ビル前を通って……」

つと一人眩きながら本社ビル前を横切る前と本社ビル前の小さな広場に集まっている人ばかりを眺めてしまう。すると、制服を来た女性が俺とぼつちり視線が合う。

「あなたも見学志願者ですか？もう少しで入場です」

といわれながら強引に人だかりの中へと入れられてしまう。

そんなつもりじゃなかったんだけどなく。まあ、サブレの仕事を知っているいい機会ではあるけど。

そう思うと、俺は入場者と一緒にEDM本社ビル内に入っていく。

本社ビル内の案内員は社員が担当することになっている。先ほどバスケットを本社ビル内に居れようとしたのは……サラだった。

興奮した様子のサラはそのまま他の案内員の元に急ぐ。レオはマークがゲームしたまままで仕事をしようとしないうことを咎め、明樂はお菓子を食べていてをするつもりがなさそうである。

「来たわよ……」

「誰が？」

レオとマークがそれぞれ忙しそうにしているので仕方なさそうに明樂が答えた。その態度に納得できないような表情を浮かべつつ諦めて答える。

「サブレさんのお兄さんよ！先ほど中に入っていったわ」

「へーそうなんだ」

「興味ないのね」

明樂はお菓子を喰いながら黙ってうなづく。

今日日本の業務内容にサブレは入っていない。だからだろうが、サブレチルドレンのメンバーは自由気ままに行動していた。

今日もきつとサブレの元に報告がいくだろうっという事だけはサラにはわかっていた。

(まあ、私はまじめに仕事するけどね)

そう思い、そそくさと仕事に戻っていく。

大まかに分けてみて回ったフロアは事務フロア、射撃訓練やモバイルスーツ、モバイルアーマーの操縦訓練用のシミュレーションマシーンフロアの順に見てまわる。その後、昼食は社員食堂でカレーライスを食べる。その後は、地下列車を通って港一带にある格納庫フロアを見学していた。

格納庫フロアには小規模だがモバイルスーツの整備をしていた。そのモバイルスーツの一つは自分がよく知る機体だった。

「こんなところにあつたんだ……バルバトス」

二年ぶりに見たその機体は懐かしくあつた。ゆっくり見て回ると、奥の扉からサブレが姿を現した。

周囲にいる人達は小声でこここそと話し始める。

「あれってサブレ・グリフォン?」

「まじで?あの鬼神とか言われている?」

「うわあ〜!俺初めて見たぜ」

サブレって人気なんだ。そう思うと同時にこれがサブレと自分が歩いた時間の違いだと認識した。

俺はどんな数年間を歩いてきたのだろう。マハラジャという人が怖くて逃げだし、おばあちゃんにすら迷惑をかけた。

そうだ、今までのままだやダメなんだ。

そう思った時、俺は自分の歩くべき道が見えた気がした。

シノが入院している病院に辿り着いたのは既に夕方になってからだった。五階の入院している部屋の前に辿り着くと、俺は部屋のドアをノックする。しかし、返事が返ってくることは無く、俺は恐る恐る部屋のドアを開ける。

部屋の中にはシノがベッドの上で横になっていた。上半身だけを起こし、体中は包帯で身を包み、目は死にそうな虚ろで、一瞬だけ俺の方を見ると、もう一度俯いてしまう。

「ひ、久しぶり……シノ」

やはり反応が無い。俺は近くの椅子に座る。無言の間が長らく続く。シノの方から言葉を発した。

「動けるようになったんだな。お前が生きている聞いてから正直心配していたんだ」

「シノの方は大丈夫？再生治療器を使った治療を嫌がっているって聞いたけど」

シノは苦笑いのような微笑みに変わる。

「もういい。辛いことも……火星に変えるよ。ヤマギ達と一緒に平和に暮らしたい。ビスケットだつて帰るだろう？」

きつと今のシノが、少し前までの俺なのだろう。俺は覚悟を決め、自分の進路をきつちり告げる。

「俺は……こつちに残るよ。帰ってもチビ達に気を使いながら生きるだけだし、それにいい加減俺自身の意思で歩きたいんだ。辛いからこそ、その辛いを楽しいに変えたいんだ」

俺は笑顔を作る。シノは少しだけ驚きながらこちらを見る。しかし、それは一瞬だけで、また俯いてしまう。

「でも……俺は」

「いいんだ、シノの道もある意味いいと思うし。でも、俺は……サブレと一緒に歩いていきたいんだ。俺はもう……逃げない」

俺は立ち上がりそのまま部屋のドアに手を掛ける。もう一度シノの方を見る。

「じゃあ、またね」

そう告げて、部屋から出ていく。

エレベーターに乗ろうとしたとき、サブレみたいな人がシノの病室に入っていく姿を見た。

サブレは仕事だろうし……気のせいだね。

そのままエレベーターに乗り込んでいく。



家の前まで来ると、サブレからメツセージが送られてきた。

『今日は忙しいから近くにいる絵里さんのレストランで食事を済ませてくれ。追伸：明楽はサボった罰で夜勤で帰らないと伝えてくれ』  
仕方なしに俺はメツセージに書いてあった地図の通りにすすみ、目的地へとたどり着いた。

木でできた古さを醸し出すレストラン、丸太を積んでできたような家で、ほのかに匂う気のいい匂いが漂ってくる。

俺はそのままレストランの中に入ると、一人の女性が「いらっしやい」とこちらに向く。人はそこそこ集まっっていて、俺は絵里さんという人を探すため、店内をきよろきよろと眺める。

すると、厨房の方から40代に見える黒髪の女性がこちらにやってきた。

「あんたがビスケットだね？サブレから聞いてるよ。心配な兄貴だったね」

「あ。今日はよろしくお願いします。あと……明楽君はサボった罰で今日は帰らないそうです」

「まったく、あの子は……誰に似たんだろうね。まあ、あの子への罰は帰ってきてから済ませるとして、アンタは食事をすませてしまいな」

そういって、絵里さんは厨房の奥に入り、人の顔ほどはありそうなほどの大盛オムライスにサラダが出てきた。

おいしそうだな。ついよだれが出てしまい。

「そんなにおいしそうなお顔をしたら作ったかいはあるね。さあ、冷める前に食べてしまいな」

俺は「いただきます」といったのち、オムライスを頬張る。ケチャップで味付けされたチキンライスの特徴的なべっちゃつとした感触に、卵のふわふわさがまるやかを与えている。とってもおいしい。

「あなたの事情はある程度サブレから聞いてるのさ」

俺は絵里さんから昭弘の親戚だという事を聞かされた。

「昭弘たちはどんな子達だった？」

そんな風に聞かれて、俺はありのままの事を教えた。昭弘はヒューマンデブリとしてであったという事、弟の事を気にしていながら死別

してしまつたこと。俺とは特に兄弟がらみで時折話したことなども話した。

そのうちに思い出していくと、俺達はいつの間にか涙を流していた。

つらいと思つたわけではない。でも……涙が止まらないでいると、絵里さんは頭を撫でてくれる。

そのやさしさにこらえきれない思いが大粒の涙に変わる。

「泣いてもいいんだよ。辛いことを涙に変えて出し切りなさい。そして立ち上がって歩き出しなさい。私は付き合つてあげるからさ」

俺は絵里さんの胸で泣き続けた。

今回のエピソード

あれから半年が経ち、アルンが完成すると俺はアルンに新設されたEDM教習学校への入学することになった。

今日はその初日である。

本来はサブレの家に泊まらせてもらおうと思つたのだが、サブレは「嫌だ」とはつきり断られてしまったので、絵里さんのご厚意に甘えさせてもらうことにした。

絵里さんの家からバスで近くまで移動した後、おりて五分の所にある教習学校へ歩くと、校門前にサブレが待ち構えていた。

「あれ？仕事は？」

「今からいくさ。その前に兄さんの顔を一目見ておこうと思つてな」

サブレはまっすぐこちらを見ると微笑む。

「涙は晴れたか？」

そこまで言われえたとところでサブレが半年前に絵里さんのレストランに俺を連れて行つた本当の理由がよく分かつた。

つらいことを無理矢理抱え込もうとしていたことにサブレは気が付いたからだと判断できた。絵里さんに合わせることで少しでもそれが晴れるようにという気づかいなのだろう。

「うん。もう晴れたよ」

サブレはそれだけ確認するとEDM本社ビルの方へと行こうと体を移動させる。俺は伝えるべきことを伝えよう。

「サブレ。俺はオルガ達の為に涙を流した。だから、これからはオルガ達に分まで笑って生きるよ。後悔しないように前を向いて笑う」

俺はできる限りのいい笑顔を浮かべた。

サブレはその答えを聞いて安心したのか、微笑みながら立ち去ろうとする。そこで俺は夢の事をかすかに思い出し、サブレに伝えるべきことを口にする。

「サブレ。オルガが夢で言っていたんだけど……「ありがとう」って」

サブレは一瞬だけ間拔けな表情を浮かべて、そのまま立ち去ろうとする。

「知らない奴に「ありがとう」って言われてもな」

「そ、そうだよ。また放課後に」

そういつて手を振ると、サブレは手を振って返してくれた。そのまま俺は校門を潜り、歩いて校舎の方に向かうと、後ろからタツクルを決められ、俺の首に手が回る。

「何？何？」

「よう！久しぶりだなビスケット」

そこには元気になったシノの姿があった。

「シノ？火星に帰ったんじゃない？」

「いや、帰ったって暇だしな。それに、お前だけを置いていくわけにはいかないだろう？」

なんだろう。本心ではないことぐらいしか分からないが、しかし、知っている人が一緒に学校を通ってくれるとだいぶ違う。

俺は無性にうれしくなってしまう。

すると、校舎の方からチャイムが聞えてきた。

「しまった！急ぐぞ！ビスケット」

シノが先に駆け出しいき、その後ろを俺が追いかける。

きっとこれからも涙を流すだろう。でも、きっとこれからは誰かを想って流せるはずだ。そして、同じように涙を流す人に俺はこう尋ねる。

『その涙は誰の為に流している？』

## モンターク

ビスケットの家の玄関が開き、中に多くの人が流れ込むようにはいつてくる。しかし、入ってくるメンバーの中にビスケットはいない。

ビスケットは墓での再開の直後に本部からある伝令を伝えられ、サブレと共に本部へと向かってしまったからだ。

タカキもアルン議会に呼ばれて一旦別行動をしていた。

そして、サブレ・チルドレンのメンバーの殆ども興味を失ったかのように別行動、現在残っているのはシノと明楽だけだった。

クツキーとクラツカやユージンですら表情はあまりよくない。本来ならビスケットの家を堪能するところであるが、「木星帝国の火星侵攻」という悪いニュース、火星に残してきた鉄華団の元メンバーやクーデリア達、そんな仲間たちが心配だというクツキーとクラツカやユージンに対して、アトラや桜は意外と落ち着いていた。

シノはそんなアトラと桜に素朴な疑問を尋ねる。

「二人は心配じゃないのか？」

そんな質問に対して桜が真っ先に答えた。

「まあ、心配したってしょうがないしね」

そんな淡白といつてもいい答えに対し、アトラも自然な表情で答えた。

「きつと大丈夫だよ。それに、私達が騒いでも仕方ないし。みんなくお茶だよ」

そういつて桜と二人で淹れたお茶をテーブルに置き、それぞれに配る。

みんなが気が気でないような時間が二時間だけ続くと、玄関のかぎが開き、中に入ってくる人物が三人。

真っ先にタカキが、続いてビスケットにサブレが入ってくる。その後、激しい音と共にクレアとそれを追いかけるレレが入ってくる。二人はサブレの周りをくるくるしながら追いかけ合いをしている。

「あのな、いい加減にしてくれないか」

困った表情で立ち尽くすサブレに、追いかけられながら微笑むクレア、必死な表情で追いかけるレレを微笑ましく見守るビスケットという微妙な空気を周囲にいる深刻な空気を纏う人達に襲い掛かる。

どうしたらいいのかというユージン達にアトラがビスケットの袖を引っ張りどうなったのかと尋ねる。すると、ビスケットは真剣な表情を浮かべる。

「どうも火星に木星帝国が侵攻したのは事実みたいだよ。クーデリアさんの安否は不明だけど、議会在テロにあった時、誰かと一緒に逃げる姿を目撃されているみたいだから、多分無事だと思うよ。現在火星連合の議長はテトラ・ギユウジャンという女性だそうです」

ギユウジャンという名前に反応したのはユージンとシノ、アトラ、タカキだった。

「ギユウジャンって名前に心当たりがあんだけどよ」

シノの言葉に三人は同意する。ビスケットだけが首をかしげて疑問顔を作る中、全てを知っているサブレがクレアにいじられている間にレレが答える。

「おそらく、皆さん鉄華団が対峙したテラリベリオンの代表の人ではありませんか？アリウム・ギユウジャン」

「「ああ!!あの人か」」

「忘れてたんだね、みんな。自分達が殺した相手を」

すっかり存在を忘れていたシノたちは半分照れつつ、ビスケットは呆れ顔だった。しかし、ビスケットはレレに「よく知ってましたね」と聞くと、レレはさも当然のように答えた。

「サブレの家に泊めてもらっているときに鉄華団の活動報告というレポートを確認させてもらったのですが、その中に夜明けの地平線団との戦いの経緯が書かれていたので」

シノと明楽が「泊まった」という単語に反応し声を上げようとした瞬間に、ビスケットからあからさまな黒い怒りのオーラを放ち始めた。

その怒りの矛先がシノ、ユージン、タカキに向けられていることがなんとなくわかってしまった三人はその場で黙って正座した。

「どういうこと？夜明けの地平線団との交戦って？」

「えつとなんといいましょうか」

明楽がサブレの後ろで怯えている中、ビスケットはその場で三人に説教が始まった。サブレはクレアと明楽をめんどくさがって対処していないながらビスケットの代わりに答えた。

「ここからはEDMの判断だが、テトラ・ギユウジャンはおそらく木星帝国の幹部か、それにあたるメンバーではないかという判断だ。それ以外にもそれらしいメンバーが目撃されている。それでだ、クレア。この写真の束の中に木星帝国の幹部は何人いる？」

クレアは渡された写真を見ると、テトラ・ギユウジャンを含めて四人を選び取った。

「左端のテトラ・ギユウジャンを覗けば、隻眼のテラ、この優男っぽいのがFでピエロっぽいのがペロです」

「四人か……多いのか、少ないのか」

「多い方でしょう。少なくとも、幹部が四人も作戦行動に参加しているとは聞いたことがあります」

クレアは珍しく真剣な面持ちを続けている。その表情が事の深刻さを現していることはサブレがよく分かった。

「それに……テラが出てきているなんて」

「有名な人物か？」

「ええ、木星帝国のナンバー2です。モバイルスーツにこそ乗りませんが、生身による白兵戦では最強だといわれています。ただ……彼の右目は唯一、白兵戦で負けた証だそうです。彼曰く「鬼神のような少年だった」とのこと」

鬼神のような少年という言葉に引っかけたのはサブレ自身だった。それに、彼には右目を潰した人物に心当たりがあった。

かつて、十三年前に彼は海賊を襲った際に右目を潰した相手がい

た。

しかし、ここでいうべきことではないと判断し、口を紡ぐ。

そんなことをしている間にビスケットの説教が終わり、一通りの静寂が場を襲う。そんな中ビスケットの一言に反応したのはサブレ

だった。

「まったく、昔モンタークとして接してきたマクギリスさんを信用する時点でどうかと思うけど、全く……」

サブレは「モンターク？」と呟きながらある一つの道を模索し始めていた。

あれから一か月がたち、クツキーとクラツカはフウカと共に海洋大学という大学の入学説明会に参加しており、アトラはビスケットからの勧めで、クレアと共にファントムブラット隊の給仕係に任命され、タカキも議会に参加で忙しくしていた。ユージンも新しい会社をビスケットの手助けで立ち上げた。その名も「鉄華宅急便」という何ともギリギリの名前を使っていた。

ちなみにその名前を聞いたときの兄であるビスケットを含めた元鉄華団メンバーは苦笑いを避けられなかった。兄に関しては「それはどうなの？」と突っ込んだほどである。

そんな中俺はある情報を探して日夜データベースを検索していた。

「モンターク」という名前を探し出して。

そして、一か月たち、ある情報と道具をもってアルン刑務所への階段を下りていく。

俺の後ろにはメイデンが付いてきている。本来であれば目立とうとは思わないメイデンはこの一か月の調査について口をはさむ。

「で？モンタークの調査結果は？」

「マクギリス・ファリドが別名義で活動するさいに使用した名前だった。モンターク商会という名前を使って当時の鉄華団に接触していた」

「でも、それならマクギリス・ファリドが亡くなったのちに会社として終わってそうな気がするけど？」

「いや、それが……その後はトド・ミルコネンという人物が一年前まで代表を務めていた」

「一年前？という事は……戦争が始まった前後位？」

「いや、その直前だな。ちなみにトド・ミルコネンは行方不明になって

いる。その際に調査の手が入っている。さらにちなみにだが、その二か月後に身元不明の死体がインド洋の海岸で見つかっている。死後かなり経っており腐敗がきつかったために身元不明で処理されている」

一連の説明を聞いたメイデンは表情を引きつらせていた。メイデンは「それって……」といいつつドン引きをやめない。

やめてくれよ、説明している俺も嫌なんだから。

「殺されたってことだよな？それも……状況からしたら……木星帝国？」

「そういう事だな。多分アイン・ダルトンが関係していると思うけど……もしかしたらアルミリアかもな。彼女からすれば、マクギリスの後に我が物顔で会社を使われていること自体が不愉快だろうし」

階段が終わり刑務所の外周を歩いていると、牢屋の中にいた元ギャラルホルンのメンバーの罵詈雑言が俺にむけられる。

癪に障る野郎共だな。

思いつきり牢獄を蹴り、怒鳴り声をあげる。

「てめえら!! 負けた時ぐらい大人しくしろや! 死刑にされなだけでまだとおもえよ!! それとも全員死刑にしてほしいってか!？」

「どこのやくざだよ」

メイデンからのツッコミはめんどくさいので無視するとして、俺は反抗する気が失せたギャラルホルンのメンバーにもう一度睨みつつそのまま中心のエレベーターまで距離を詰めていく。

「それで? これからどうするんだ?」

「あの男に再起してもらう。そうでなければ償うという事にはならない」

生きて償わせる、それがあのガエリオ・ボードウィンにしてほしいことだ。

そう思い、エレベーターで下へと降りていく。

あつという間に最深部に辿り着くと、そこには一つの牢獄が真っ白な外壁を明かりで明るく照らしている。内装が多少変わったというのは聞いていたが、本当だったか。



俺は鍵を牢屋の外で待機していた職員から受け取ると、メイデンと共に中に入っていく。

牢屋の中には拘束衣を来たガエリオ・ボードウィンが椅子に座っていた。

いつからだろう。ガエリオ・ボードウィンの事を腹立たしく感じ始めたのは。初めて会ったのは災いの地での決戦の時だったが、その時だって別段話したわけではない。しかし、当時から彼に対してイライラしていたのは事実だ。

何に対してのイライラだったのかがはつきり分からなかったが、分かったことは……彼の態度に対してだったのだろうことだけは分かった。

その後も、彼の事を間接的に聞いていく間に彼に対してのイライラは増していくばかりだった。

そのことをはつきりと理解したきっかけは彼を捕まえる時の彼の表情からだった。

俺はあの情けない顔を見たとき、殺したいではなく、哀れだとすら思った。

だから殺さなかった。

殺してしまうのは簡単なことだ、しかし彼の為にはならないだろう。何より、俺自身は納得できない。

そんな時に、モンタークの名前を聞いた。

これなら彼の償いになるかもしれないと思ったからだ。仮面をもつて彼の元へと行く。もしかしたら、仮面も彼の元に行きたがっていたのかもしれない。

ガエリオ・ボードウィンの前に立ちふさがり、落ち込んだままの彼に殴りかかりたい感情を抑え、彼に語り掛ける。

「久しぶりだな。ずいぶん情けない表情でおとなしく投獄されていると聞いている」

「君か……情けない表情……ね。そうかもしれないな」

そんな姿を見ても何とも嬉しくない。

あんたに再起してもらわなければならぬんだ。

「マクギリス・フアリドを裏切った自分への思いからの落ち込みか？それとも自分がかわいそうだからか？どうなんだ？」

その辺ははつきりしておきたかった。

「両方かもしれないな」

「後半の方なら殴りたくなるが」

はつきり言っただけの方がいいのかもしれない。俺の考えをこいつに伝えよう。まずはそこから始めるべきだ。

「兵士としてでも、たとえそうでなくても、一度銃の引き金を引いた以上、引いた人間は責任を取るべきだ。そこから逃げることは不誠実だ。そうだろ？引き金を引くという事は命を奪う事だ。奪う命に責任を取ること、それは人として大切なことだと思うが？アンタはどうなんだ？奪った命に責任を取っているか？」

そういわれてガエリオは顔を上げる。

「よく分からない。多分、そんな重要なことだと思わなかったんだろうな。家柄上、ギャラルホルンに入ることには義務化していた。セブンスターズの子となれば自然と周囲から期待もされる。それに、ギャラルホルンは俺の頃には既に経済圏の平和を維持する組織としての義務感もあった」

「それを義務感って言葉でかたづけなくてくれ、それは逃げているだけだ。義務感や家を言い訳の道具にするな」

きつと俺は真剣な視線を向けているだろう。

「どんな理由があったにせよ、銃の引き金を引くことへの言い訳にははいけない。あんたが殺した相手を考えろって言っているわけじゃない。せめて、殺した分だけ誰かを助けられるようにしろって言っているんだ」

真摯に真剣な表情で語り掛けてみる。

「そうだな……俺は逃げてきたんだ。殺すことの意味も考えないようにした。友人の気持ちすら」

俺はモンタークの話の口にする。

「あんたがドルトの作戦に参加している際に、マクギリスはモンタークの名を名乗ってクーデリア・藍那・バーンスタインに接触している。

きつと、アンタが黙って行動しなければ彼はあんたには真実を告げたくないんじゃないのか？カルタ・イシューだつてそうだ。あんたの因縁に巻き込んで、いざとなつたら彼女を見捨てた。いざつという時にまるで役に立たず」

傷に塩を塗り込む行為と分かっているが、これだけははつきりさせておきたい。

「あんたは周囲の事を考えているようで自分の事しか考えていない。それどころか、周囲の事を考えていると勘違いすらしている。いいか？」

いいか？分かっているのか？

俺ははつきり告げよう。

「人は生きる限り一人だよ。だからこそ、他人のぬくもりを感じることもできるんだろ？手を握った時感じる体温、話すことで相手に傷つけられることもあるだろう。だけど、人と話すことでしか人は本当の意味で気持ちを伝えることができるんだよ。自分だけ傷ついたふりをするな。自分の中だけで完結させるな、どうせ傷つくなら誰かに話してみろよ。あんたのそれは自分の事を他人の事としてしか処理できているんだよ。マクギリスに裏切ら事への怒りを周囲への裏切りへと解釈することでしか行動できなかつたんだろ？その時にもつと他の誰かに相談できていたら変わったんじゃないのか？自分の中で完結させるな」

きつとこの人に必要だったのは教えてくれる人間だったのだろう。信じることと、自分の気持ちを伝えることは別だと。自分の気持ちを伝えられないで他人を信じるなんて愚かなことだ。

「二人……か。俺は自分の中でしか完結できなかつたんだろうな。もしもう一度チャンスがあれば……」

本来の予定と大きく違ったが……ここしかない。

そう考えた俺はメイデンがもっていたある道具を取り出し、ガエリオに二つの選択肢を選ばせる。

「選択肢は二つだ。まず一つ目、ここで一生後悔と懺悔で過ごす。二つ目が……」

俺はある道具ことモンタークの仮面を取り出す。カツラと一体になつた顔上半分を隠すための仮面。それを突き出す。

「モンタークとしてこれからの一生を償いの為に生きる。でも、誰かがあんたを信用してくれるわけじゃない。あんたが余計なことをすれば俺が直接殺しに行く。そう思いながら生きるんだ。あんたはどうする？」

「俺は……」

ガエリオの選ぶ道は……茨の道だ。

今回のエピソード

「で？結局お前はどこまで読んでいたんだ？」

あれから数日が経ち、開発局の格納庫の一つの前にある廊下で俺はメイデンに話しかけられた。

どこまで……どちらかといえば行き当たりばつたりで話を進めたんだけど。本来立てた計画通りには全く進まなかったし……

「別に……ただ、モンタークが火星に先に行ってくればラツキーぐらいの感覚だっただけだ」

俺の本心まで話すつもりは無い。ただ、傷ついた顔になっていることが気に入らなかつたなんて口が裂けつたって言えないしな。

メイデンはまるで本心が分かつたように身を引いた。

ある人物を待っている、それは開発局長のソニアと共に現れた。

顔の上半分は全体的に金色の金属、黒いラインが伸びている仮面。仮面からは銀髪のカツラが付いている。服装はスーツを着ており、少なくとも今から宇宙空間に向かう人間の服装ではない。

「初めましてだな。モンターク」

あくまでも初めましてなのだ。彼はもうガエリオ・ボードウィンではない。ここにいる人間はモンタークという別人なのだ。

そういうことにしておく。

「さて、モンタークさん。この奥の格納庫にあんたが昔使用していたグリムゲルデを改造して作ったガフェイン・マークIIがあるよ。好きなように使って。うまくいけば火星まで一日で行けるはずよ。失敗したときのことは……分かるでしょ？」

この時のソニアの笑顔は怖い。

モンタークは「分かっている」つとだけ答えると、むしろ機体をく  
れることへの感謝の言葉を告げる。

「感謝する。俺もこれで戦える」

気になるな。そう思ったところを指摘する。

「俺じゃなくて私の方がそれっぽいと思うけど？」

「そうだな……じゃあ、そうしておこう。ありがとう、君にも世話に  
なったな」

「何のことだが」

俺はそっぽを向き、何のことやらと無視する。モンタークは口元で  
微笑みながら歩き出す。ゆっくりと開かれる扉の向こう側には紫色  
の機体事『ガフェイン・マークII』が鎮座している。

ソニアは最後の連絡とばかりに武装などの説明をする。

「この機体も基本は一体式のエンジンを組み込んであるからよっぽど  
のことが無ければ補給の必要はないわ。武装は両腕に内蔵式のビー  
ムマシンガン、に四肢の先にそれぞれビームサーベルが内蔵してある  
わ。基本は武器を持って戦うことは無い。全部内蔵式の武器よ。そ  
ういう意味でも、完全な意味で補給の必要もない機体ってところね」  
ソニアの表情はドヤアって感じのドヤ顔になっている。

この「どうよ。わたしつてすごいでしょ？」みたいな表情。ものす  
ごくイラっとする。歳が大きく離れてさえないなければ殴っている  
ところである。

「感謝する」

そういつて機体に乗りに込んでいこうとする彼にもう一つある物を  
渡す。

モンタークは疑問を持ちながらそれを受け取る。

「これは？」

「マクギリス・ファリドがモンターク時代に持っていた写真だ。経済  
圏が保管していたのを俺がもらって来たんだよ。ガエリオ・ボード  
ウィンやカルタ・イシユートと一緒に写った写真だ」

彼はどう思ったのか、微笑みながらそれを握って機体の中に入って

いく。

俺はそれを黙って見送る。

俺だけだったんだな。信じていなかったのは。

写真をよく見える位置にはさむように置き、俺……いや、私は操縦桿を握る。

「マクギリス。カルタ。俺にもう一度力を貸してくれ」

アインを本当の意味で救ってやるためにも。たとえ、その結果が殺すことになっても……私は知らない誰かを救っていたいんだ。

君を救えるだろうか？ サブレ・グリフォン。

私を憎みながら、私に道を示してくれた。

きつと殺したいほどに憎んでいたはずだ。

私も進むべき時だ。あの頃から止まった時間を動かそう。

「ガフェイン・マークII！ モンターク！ 行くぞ！」

進むべき場所はまだ見えない。

## 鉄の華はいまだ散らず

クッキー達がアルンにやってきてからまだ一か月も経っていないころ、このころサブレは忙しそうにせわしなく動き回っていた。話を聞いても「なんでもない」といいメイデンと一緒に探し物や情報閲覧に忙しくしている。

肝心の俺は部隊編成が終わるまでの間、データ整理などの小さな仕事をこなしつつ、暇をつぶしていた。そんなおりだった、中央公園でフードフェスと呼ばれるお祭りがおこなわれるという事で、クッキーたちと食事に出っていた。

暁が両手に食べ物を抱えたままこちらに走ってくる姿を視線に移すと、暁はそのまま手の食べ物をこちらに渡してくる。

「はい。パパ」

「あ、ありがとう」

笑顔を作りつつ返事をする。

いまだ「パパ」という呼び名になれずにいる俺、ビスケット・グリフォンは休暇を家族サービスで過ごしていた。

俺の隣に座り食べ物で口周りを汚している暁の口を、持っていたハンカチで拭いてあげる。

「ゆっくり食べて」

暁は笑顔で頷いて見せると、向こうからアトラが走ってくる。

「ごめんね、ビスケット。暁、お礼言っただ？」

「うん」

アトラ「もう」といいつつ暁の隣、ビスケットの反対側に座るとまるで……

「まるで新婚さんですか」

「サ、サ、サブレ!?!」

声のした方に振り返る、そこには鼻眼鏡を付け、俺が暁と食べ物を食べている写真を持ったサブレがいた。

「いつからいたんだよ！変な小道具まで用意して！それに勝手に写真を撮るなんて犯罪だよ！」

肩で息をしつつ、サブレの方に怒涛のツツコミを浴びせると、サブレは鼻眼鏡を取り俺の方に手渡す。

「……兄さん」

「?何?」

「ツツコミが長い」

「ボケが多いんだよ!!それ以外にあるわけないでしょ!まるで俺が悪いみたいに」

俺とサブレが言い争いをしているとアトラはクスクスと笑い始めた。俺は慌ててアトラの方を向き、言い訳にならないような言葉を並べる。

「ち、違うんだよ!?普段はもつとひどい?」

「それは言い訳じゃないし、何が言いたいんだ?」

「うるさいな!いつもいつも!」

さらにひどい言い争いをしていると、明楽がサブレと同じ鼻眼鏡を付けてドヤ顔をしながら現れた。その姿に俺とサブレは全く同じ言葉を告げる。

「さつき見た」

「うわあ〜!!」

涙を流して走り去っていく、サブレは明楽にブーイングをしながら見送った。

ブーイングって。サブレそれは……

「そもそも鼻眼鏡なんてどこで見つけてきたの?」

素朴な疑問をサブレに尋ねると、サブレは黙って指をさす。指がさす方向を見ると、そこにはシノを含めたEDMの職員が遊び半分で配っているお面やお菓子などの中に鼻眼鏡が混じっている。

いくらお祭りだからって。

クラツカがたくさんの食べ物を持ちながらこちらに歩いてくる。その後ろではクッキーが文句を言っているように見える。サブレはメイデンと一緒にどこかへと姿を消した。

今のこの光景をオルガ達が見たらどう思うのだろう。

散っていった鉄の華たちは、どう思うのだろう。



ユージン・セブンスタークは暇だった。

することが無いといえばまるで二トに聞こえるが、彼はほんの数か月前までは火星連合で働いていたSPだった。

しかし、月面都市アルンについていこう、火星にも帰れない、連絡も取れないという日々を送っていた。あれから15日が経つてもいまだ連絡がこない。

ほぼ、日課になっていているアルン議会に顔を出し、受付嬢に火星からの連絡が来ていないかどうかを尋ねる。

「来ていませんね」

「そうっすか」

分かって入ること。ここ数日は期待もしなくなった。

すると、二階から知った声が聞えてきた。

「副団長？何しているんですか？」

上へと視線を動かすと、そこにはタカキ・ウノがいた。

いつもの返しである。

「副団長って呼ぶんじゃないよ」

タカキと二人で外の自販機の前でコーヒーを飲んでいると、タカキから会話が始まった。

「そうですね……火星からは連絡なしですか。こつちも仕事が多くて忙しいんですよ。秘書だった頃が楽に見えてきますよ」

「そうみたいだな。バスケットやシノも訓練や事務仕事が忙しいって言ってるしよ……」

アルンの空を見上げるユージン、アルンの空は青く、まるで地球の空のようである。鳥が二羽一緒に飛んでいる。少しだけ寂しさを覚えてしまう。

「もう、鉄華団ではいられねえのかな？」

タカキは何も言うことはできなかつた。

それぞれの道を歩くこと、それは鉄華団ではなくなりそうな気がしてしまう。このままでは自分が鉄華団だったことすら忘れてしまいうさだつた。

タカキに何も告げず、フラフラとその場から立ち去っていく。

その後中央公園で黄昏ていると、後ろから声がかかる。

「暇人一人確保」

「うわあ!？」

驚きつつ後ろを振り向くと、そこにはビスケットの弟であるサブレが声をかけてきた。

「驚かすんじゃないよ！ビスケットから聞いちゃいたが、お前本当に心配を消して忍び寄ってくるんだな」

「消しているっていうけど、単純に油断しているだけだろ？」

「お前みたいに関一日中神経を研ぎ澄ませていられないんだよ。で？なんの用事だよ」

「これから南側の港にある倉庫の中からある物を取りに行くんだ。ちよつと探さなくちゃいけないからな。人は多い方がいいんだよ」

「んなもん、ビスケットに頼ればいいだろ？別に俺じゃなくてもさ」

「あそこはな……兄さんは嫌がるんだよな」

ユージンは嫌がりながらも明確に拒否することも無い。サブレはそれを「やる」という意味に受け取り、無理矢理連れていく。

車で二時間もかかる港に辿り着くと、その倉庫はユージン達が降りた場所からさらに西に歩いて三十分もかかる場所にある。十個近くある大きなシャッターの出入り口の一つ、三番と書かれたその場所まで連れてこられたユージンは「やれやれ」つと言いながらサブレが明けたシャッターの中に入った瞬間、サブレが言っていた言葉の意味を嫌というほど思い知らされた。

「何なんだよ……これは？」

倉庫の中には嫌というほどの荷物が置かれており、そのすべてが適当に、かつ雑に積み上げられている。サブレが答えてくれた。

「この辺の倉庫はなアルンが造られた当初から使用されていた場所なんだけど、町から遠いうえに誰も取りに来ない、だからこういう状況になってしまっているんだ。それ以外にも急ぎではない荷物も大体はここに収納される決まりになっている」

サブレが近くの段ボールの中を開けて中身を確認している姿をユージンは呆けながら見ている。すると、隣でついてきていたメイデ

ンも同じように探し物を探し始める。

「で？手伝うからよ。何を探せばいいのか教えてくれよ」

「ああ、人の頭ほどの大きさの金属の箱で、送り主がアークブラウになっているはずだけど……。それで頼む」

ユージンは渋々ながら探し物を探し始め、その中身を見て漁り分かりやすく外へと出していく。

「誰か管理する奴はいないのかよ？」

ユージンの素朴の疑問にメイデンが代わりに答えた。

「最初はいたんだけどな。ヒューマンデブリ廃止に伴って会社を維持できなくなつて、結果として倒産したんだ」

ユージンの中で気になるワードが出てきた。「ヒューマンデブリ廃止に伴って会社を維持できなくなつた」という言葉、それではまるでヒューマンデブリを廃止したせいで会社がつぶれたみたいだと思つてしまう。

そんな疑問にサブレが答えた。

「世界中に居るヒューマンデブリがヒューマンデブリではなくなるという事は今まで格安で仕事をさせていた会社が一般社員と同じ待遇で金を支払わなければならぬという事だ。その辺の会社なら首を切ればいいからいいんだが、問題はここの管理をしていた会社みたいにも金もない会社は不用意に人を斬り捨てれば人手不足になるし、かといって全部雇った場合は金がなくなるというわけだ。この会社はある意味クーデリア・藍那・バーンスタインによってつぶされたみたいなものだ。そういつたつぶれた元社員や元ヒューマンデブリの事を一般的に『職無し』って呼ぶことある。ここに来る間に路上で倒れていた人を多く見ただろ？あれが職無しだ」

確かに路上に倒れていた人を多く見た。中には仕事を探してあちらこちらを歩き回っている人もいる。

「俺たちの所為か？」

「別にそういうわけじゃないがな。EDMも誰でもって訳にはいかなからな。仕方がないという言葉では済まされない。だけど、結果として救われた人がいることも事実だ。それだけは誇つてもいい部分

だと思うぞ。それにいちいちすることに一喜一憂するな。したって仕方のないとき。すべての人間を救う事は難しい」

できないとは言わないサブレ。そこにサブレとそれ以外の人間との違いだとユージンは微かに感じ取った。

弱い所も、強い所も、敵も、味方も全部背負う事の出来る人間。ピスケツトはそうサブレを評価し、それをユージンに告げた。それを今思い知った。

そんな言葉をさりげなく言うことのできるこの強さ。

「お前は強いんだな」

こぼれる言葉、とてもではないが、自分では言うどころか思うこともできない。

しかし、サブレは予想もつかない言葉を告げる。

「そう思うんなら、きつとあんたも強くなるうと思ってる証拠だろ？」

「俺が？なんでそう思うんだよ？」

むしろ逆なんだ。そう思ってしまうユージン。

昔を思い出しては、懐かしく思い、今でも鉄華団の事を思い出す。

そんな自分を強いとは思えなかった。

「だって、過去を見つめなおして、死んだ人の分まで強く生きようとしているだろ？それだけで十分だと思うが？それ以外の何を望むんだ？高望みつてものだ」

「だってよ！俺は……何もできなかったんだよ。三日月たちと一緒に死んでやることも、オルガが悩んでいた時に一緒に背負ってやることも、助けることもできなかった。なのに今になって過去を思い出しては後悔してる。そんな俺のどこが!？」

サブレは仕方なさそうにしながら立ち上がりまっすぐにユージンの方を見る。

その瞳は強く、そして誰にも負けない闘志を燃やしていた。

「だから……そういう風に過去と向き合っているだろ？それだけで十分だ。兄さん達とは違い、アンタはいまだに鉄華団であろうとしているじゃないか。それだけで十分。確かに、それから離れていくことも大事だ。しかし、大事な場所を取り戻したいと願うことは難しい。大切

な場所なら忘れたいと願うものだからな。それでも取り戻したいと願い、過去を振り返って悩むお前を弱いなんて言うやつがいるのなら俺の前に連れて来い。調教してやるよ」

そんなサブレの言葉に今度はメイデンが突っ込んだ。

「それを言うなら説教だろ？」

二人が笑いながら作業に戻っていく。

目の前にいる彼らの姿を見ながら悩んでしまうユージンがいた。

三時間後、ようやくの思いで取り出した荷物をサブレ達は倉庫から一旦出し、倉庫から出してしまった荷物を再び中へと入れていく。

「めんどくさいよな。誰か倉庫の管理をしてくれないかね」

そんなサブレのつぶやきをどこか聞き流しながらユージンはどこか悩んでいた。

そして、思い切ったように尋ねる。

「お前は、俺にできると思うのか？あんな居場所をもう一度」

サブレは振り返り、まるで当たり前のように答えた。

「ああ、そう思ってるけど？」

「なんで？どうしてだ？」

そして、心に突き刺さる言葉を放つ。

「だって決して散らない鉄の華なんだろう？」

それはオルガが告げた鉄華団の名の由来。

決して散らない鉄の華。だから鉄華団。

サブレ達とはそこで別れてしまい、ユージンは一人港の中を歩いていく。悩み、別に行く当てもないユージンの足は職無しと呼ばれる人たちの前で止まってしまう。

きつとオルガが何かしなかった場合の自分たちなのだろう。

自分がこうしていられるのはあの日、命を懸けてくれた仲間たちのお陰である。そう分かっているからこそ、何かをしたい。

「うじうじ悩んでいるぐらいなら行動……だな。でも、会社を始めるにしてもどんな仕事するべきか……？」

悩んでいると、ビスケットから渡された緊急用の携帯が鳴り響く。画面には『ビスケット・グリフォン』と書かれたいた。

「はい？ユージンですけど？」

「ユージン？サブレはそつちに居ない？」

「ああ？今別れたところだが？」

ビスケットは「そつか……」と何かを期待している風である。そんな中ユージンはある無茶を尋ねた。

「なあ、ビスケット。頼みがあるんだ。無茶を承知で頼む。会社を作りたいから資金主になってくんねえか？」

「……いいけど」

「だめだよ……はあ!?!いいのかよ？」

ビスケットは「うん」と言う。なんとなく電話の向こう側の表情までが読めてしまう。きつと今とぼけているような表情をしていることだろう。それぐらい間の抜けた声が聞えてきた。

「駄目って言わないよ。それにここ数日のユージンは見てられなかったからね。やる気を出してくれたのはうれしいよ。金を出すのはいけど……何人かに声をかけてみるけど。問題は仕事内容だよ。仕事内容の説明はユージンが自分でしなよ」

「ああ、考えておくよ」

「じゃあ、日時が決まったら言うね」

そういつて切る電話を眺めたままこれからを考えなくては行かなかった。

「じゃあ、明日よろしくね」

そんな風に告げる言葉は次の日の事であった。まるで話す言葉を考えていなかったユージンは頼る様にサブレの元を訪れた。

そして四苦八苦して完成させた資料や調べる内容の書かれた紙を持参して中央区の会議室が集まったビルの中に入っていく。

指定された会議室の中に入ると、そこは鉄華団では考えられないような部屋の規模だった。そして、これは会議室ではない。むしろ、説明会のような長めの部屋。横に長い椅子と机がびっしり並んでおり、一番端には少し高めに設定された台に机が置かれている。

今からあそこで説明しなくては行けないという気持ちと部屋の中にいる見たことも無いほどの偉そうな人の前での説明。そんなプ

レッシュヤーと戦いながら部屋に入る。

サブレに言われた事。

『いいか？オドオドしたり、挙動不審な態度を取れば一発でアウトだ。胸を張って行動しろ。それぐらいで十分だ』

言われた通りに行動し、資料にのっとった説明をする。一通りの説明が終わると場が静まり返る。

どこかミスを知ったのではないか？説明不足では？そんな疑問が頭をよぎりつつ真面目な表情を作る中、人込みの中から手が上がる。

「どうぞ」

手をあげた人物がゆっくりと立ち上がり、その風貌が見えてくる。その姿はこの資料を一緒に作ったサブレ自身であった。

「この資料では多くの人材が必要になると思います。その人材はどこから確保してくるつもりですか？」

そういわれたところでここまでのすべてがサブレの流れであったことに気が付く。ここまです計算したうえで彼は資料作りを手伝ったのだ。

決めていた事。考えたことをまっすぐ告げる。

「元ヒューマンデブリや『職無し』と呼ばれている者達を教育していきながら雇おうと思っています」

すると、会議室中に居る人達にざわつきを与えたようで、あちらこちらから話声が聞こえてきた。

サブレが告げたこと。

『元ヒューマンデブリは金で動く傾向にある。仕事の善悪が分からないから、簡単に犯罪に手を染める。多分、火星連合を乗っ取った背景には元ヒューマンデブリが絡んでいるはずだ。軽はずみな行動で雇えば、内部情報を漏らすだけだ。それを頭に入れておいてくれ』

わかってはいた。理解を得られるのは難しい。しかし、それでも決めたことをここで捻じ曲げるわけにはいかない。

これが自分にできる精一杯なのだ。

「彼らもちゃんとした教育をしていけば必ずちゃんと働けるはずですよ！元ヒューマンデブリだとか、職無しなんて言って彼らを差別するこ

とが一番間違っている!!だからこそ、私達は鉄の華の名を関するんです!彼らのように、しかし、彼等とは違うやり方と道を進んで行く。社員を大切に育てていける会社を作りたい!」

静まりかえる会場に拍手が響く。サブレが拍手をすると、釣られるようにまた一人、また一人と拍手が増えていく。

気が付けば多くの人が拍手をしていて、ユージンを祝福しているようでもあった。

この日、『鉄華宅急便』が創設されることとなった。

今回のエピソード

会社が創設されてから一か月がたった。気が付けば忙しくしていたサブレも一通りの落ち着きを見せ、EDM内も気持ち的に落ち着いてきたころ、ビスケット、シノ、タカキはユージンが造った会社の本社へと足を運んだ。

東区画に作られた三階建ての建物がそれであり、白と緑色で塗られた外壁と大きく書かれた名前の看板が印象的。

中に入れば大きなロビーでは受付嬢が6人と書く場所が八か所、待合用のソファが16個用意されていた。

「結構おつきいな」

シノが感心したように声を出し、その間にビスケットが受付の女性に「ユージン社長の知り合いの者です」と尋ねて連絡を入れてくれる女性。

シノがからかうように声を出す。

「しっかし、ユージンが社長とはね。タカキももう副団長って呼ぶなよ?」

「気を付けてはいるんですが、中々抜けなくて。しかし、あのユージンさんが社長をするなんて考えられないですよ」

ビスケットが受付の人とやってくると、三階へと案内される。受付嬢はそのまま社長室の前で別れ、ビスケットはドアを叩き中に入っていく。

部屋は三十畳以上はあろうかというほど大ききで、一番奥でユージンが真面目な表情で机の上のパソコンと向き合っている。



部屋に入ってきた三人の姿にあきれた様子を見せながら席から立ち上がり三人の前に立ち尽くす。

他愛のない話に身を投じる四人。そして、ビスケットの視線がふと壁についている旗へと向けられる。

真っ白に緑色の花のマーク。それは鉄華団のマークの色違いであった。

「これってユージンが考えたの?」

「いいや。サブレに聞いたら色違いにしろって」

シノやビスケットがオドオドした態度で尋ねた。

「その理由は?」

「赤は血を連想させて物騒だからだってよ。緑は安全とかそういうイメージがあるからいいんじゃないかって」

ホッと安心していると、さらに話は弾んでいく。

そんな時、サブレは中央公園でメイデンからの問い詰めを受けていた。

「で?どこまで読んでたんだけ?」

「だからさく俺が全部読んで決めたみたいに言うなよ。」

サブレは数日前にモニターの出立を見送ったところである。暇になったサブレはベンチでコーヒーでも飲みながら落ち着いていた。

「どうなんだよ」

「だから、知らないよ。偶然だ、偶然」

そういつて立ち上がり立ち去ろうとする。メイデンはやれやれとあきらめて立ち去っていく。

立ち去るとき、隣に緑色のワゴン車が止まる。側面には華のマークと名前で『鉄華宅急便』と書かれていた。

鉄の華はいまだ散らず、咲き誇る。

## 傷だらけの王様

《傷だらけの王様

昔々あるところに一人のお姫様がおり、お姫様は常に泣いていました。

すると、お姫様の所に一人の少年が現れて尋ねました。

「あなたはどのようにして泣いているのですか？」

お姫様は答えました。

「国の人々が戦って傷ついている。だから私は泣くのです」

すると少年はこういいました。

「だったら僕が戦いを終わらせる」

そういつて少年は戦いに身を投じていきました。戦う少年の元に少しづつ仲間が集まっていく中、少年は青年に変わっていきました。そして、そんな青年の元に訃報が届きます。

お姫様が亡くなったのです。

青年は悲しみに打ちひしがれ、仲間と共に彼女が望んだ平和を手に入れるため戦いました。

しかし、結果は青年が本当に求めていた物ではありませんでした。

戦いは終わり……青年は新しい国の王になりました。

青年は自分の手を見たとき、傷だらけであることに気が付きました。

後の世に彼は傷だらけの王様と呼ばれるようになりました。

おしまい》

絵本をサブレとビスケットが見ている理由は単純至極である。マハラジャ・ダースリンの家の掃除をする際に出てきた絵本などの書籍データが入ったタブレットを見付けたことがきっかけだった。

掃除をしているきっかけは三時間前に中央公園でサブレとビスケット、サブレチルドレンが集まっていた。

怪しむサブレチルドレンの前にビスケットが大々的に発表する

「メイデンは別として他のサブレチルドレンは全員フロントムブラッド隊所属のパイロットとし、別命『Gチーム』として行動するよ」

全員は『Gチーム』という言葉に微かに反応し、それを口に出すのはたった一人だけであった。

「Gチームって言ったらまるでゴキブリみた……ほげ!？」

ほげっという緊要な叫び声と共にサブレからの見事なアツパークットが入った。顎先を捉え、明楽の体を一瞬だけだが宙に浮かせる。

「よく口に出す気になるわよね。私だったらいやよ」

サラが身震いを止められずにいると、レオがへらへら笑っている。

「へへ、そっぴやあサラは苦手だったかゴキブリ」

サラはその言葉を聞いた途端表情を一変させレオに詰め寄る。

「言わないで! あんな黒い奴がカサカサ動くと思ったら……」

二人がそんな周囲から見たらしようもないやり取りをしている間、マークが質問をするために手を上げる。

「質問。なんでこのメンバーを一か所に集めたんすか? 今までは別にしてましたよね?」

ビスケットの視線が隣のサブレへと移動していく。サブレは全員に向けて怒りの波長を向けてきた。全員は背筋をピンっと伸ばし、表情を引き締める。低く重い声をサブレは放つ。

「お前たちが各部隊でやりたい放題やった結果だろうが!! 最終責任者としてこっちにまわって来たんだよ!! お前たちは少しぐらい真面目にしようとは思わんのか!？」

メイデン以外が口をそろえて全く同じ言葉を放つ。

「二俺（私・僕）以外の弱い人の意見を聞いてもね〜」

「お前たちは……!!」

サブレをなだめるビスケットだった。

その後もそれぞれの報告を済ませる間にサブレだけが何かかひかかっていた。表情の機微が分かるビスケットはそれとなく尋ねる。

「さっきからどうしたの?」

「いや、なんか忘れてるような……」

サブレが思い出している間に反対側で明楽が空き缶を捨てている姿を見ると「つあ」と思い出し、恐ろしい言葉を口にする。

「くそおやじの家の掃除……」

「「いや〜!!」」

全員が悲鳴である。

サブレを含めたサブレチルドレンのメンバーとビスケットは四か月に一回のペースでマハラジャの家の掃除をするのが通常行事である。

「忘れてたよ!!なんで今思い出すのさ!!」

ビスケットですら悲鳴を上げてサブレの方に鋭い視線を向ける。他のメンバーも批判的な視線をサブレに向けると、サブレの中の反骨精神が般若のような睨みに変え全員に向ける。

「俺の所為にすんなや!あのクソおやじが一切連絡しないのが悪いんだろうが!!こつちだつて戦争で忙しかったんだぞ!!」

ビスケットはおどろおどろと聞き始めた。

「いつ掃除したっけ?」

「前掃除したのが11月、現在は戦争が終わって二か月で9月だから……十か月は掃除をしていない計算だな」

全員が打ち震え、恐怖に表情を曇らせる。マークが逃げようと体を180度反転させたところでレオと渉は必死になってそれを阻止しようとしがみつく。

「逃げるな!!」

「ずるいですよマーク先輩!」

サブレは腕時計で時間を確認すると余裕があると判断した。

「今から掃除だな、誘える人間がいれば誘っていいぞ」

全員の視線がビスケットの方へと向けられる。ビスケットは早速電話を掛ける。

「もしもし?クツキー?暇だったらクラツカとフウカちゃんを誘ってきてくれない?」

ビスケットのだましのテクニックを駆使して知り合い全員を呼ぼうとするせせこましい人たちがそこにはいた。

そして現在、先ほどのメンバーとクツキーとクラツカ、フウカ、タカキ兄弟とアトラと暁が掃除に来ていた。

サブレとビスケットが絵本を読んでいる所にクラツカが飛び込んでくる。その目は実に批判的な目があった。

「二人共サボってるく、何見ているの?」

ぞろぞろと各部屋を掃除していたメンバーがなんだなんだと現れ、みんなでその絵本を見始める。すると、ものの数分で全員は微妙そうな表情を浮かべる。

代表してシノが話しかけてきた。

「なあ、この話ってよ、これが結末なのか?」

「うん。だから面白くないでしょ?」

全員から「面白くない」という意見が飛ぶ中、マハラジャどこからもなく姿を現した。全員が見ている絵本を見ていると「懐かしいな」っと声を漏らす。

「俺の父が買ってきた絵本だ。最も出てすぐに廃版になってしまったがな」

サブレがすぐさまに尋ねる。

「なんで?」

「お前、分かっていて尋ねているだろ?」

「何のことだか?」

「まったく。絵本としてこの結末はどうだって問題になってな。今では知る人ぞ知る幻の作品だな。一応、この少年とお姫様には名前があるんだぞ?知っているか?」

サブレとビスケットは首を横に振る。

「確か少年が『マイク』でお姫様が『アイス』だったか?」

「マイクって普通の名前だな」

サブレが鼻で笑いながら軽く馬鹿に知った表情を浮かべると、マハラジャは鬱陶しそうな表情で答えた。

「いいんだよ。この話は普通の少年が傷つきながら王になりましたっていう話なんだからな」

完全に手が止まっていると後ろからサラが手を叩く。その音を切り替えにそれぞれの持ち場へと戻っていく。

この時は、気が付かなかった。この絵本が後に大きな意味を持つて

くることに。

サブレはこの絵本の作者の名前に目を向ける。

『作者：エヴリー・ロン』

シノが掃除をしながら掃除に対する不満を口にする。

「なんで俺達が掃除をしなくちゃいけないんだよ」

「いうなよ。誰もが分かっていることだろ？」

サブレがここぞとばかりにツツコミを入れる。しかし、納得ができないシノはサブレに尋ねる。

「大体なんであの人は掃除しないんだよ？」

「めんどくさがりなんだよ、あの人。一度やるつと決めたらちゃんと、真面目に、きちんと、最後までやるんだけどな。そこまで行くのに時間がかかるんだ。エンジンがかかるまでに時間がかかる上に、自分のことになるめんどくさがりを最大限発揮するんだ。あれが」

そういつて冷ややかな視線は向こうでめんどくさそうにソファでくつろいでいるマハラジャにむけられる。すっかり飽きてしまったらしく、既に掃除してはいない。

全員から冷ややかな視線を涼しそうにしながら聞き流す。

あの凶太さはある意味尊敬に値するかもしれないって考えてしまうサブレ。

「あの人の性格だな。俺はすっかりあきらめたけど。まあ、俺からすれば俺の教育権を引き取ってくれたんだからそれぐらいはするべきだって考えたけどな。兄さんだって、何年も前に拒絶しているのに、結局は受け入れた。だからこそ兄さんも感謝はしているだろ？クッキーとクラツカの大学費用もあの人が出すって言うてくれたわけだし」

シノの視線は自然とビスケットの方にむけられる。せつせとゴミ袋を外へと持っていくビスケット。恩があるからこそそれを返そうと必死になっているのだ。

そして、あの人はそのを使って働かせているのだ。

そう思うサブレであった。

シノも渋々ながら仕事に戻ると、今度はサラがやってきてはつきり

と尋ねる。

「先輩、いつか聞こうと思っていたのですが、前にクレアさんが言っていた木星帝国幹部のテラの右目。あれって……？」

サブレが掃除をしている手を止めて少しだけ俯くと顔を上げサラの方に真面目な表情を向ける。

「ああ、多分俺だろうな」

全員が驚きの表情を浮かべサブレの方を見る。

「もう……13年前になあるのか」

13年前

一般輸送船を襲撃した海賊を逆に襲撃するという事で作戦が立案された。

しかし、作戦は海賊側からの予想外の抵抗で逆に危機的状況に陥った。その際に仲間たちを守る為に海賊達に生身で白兵戦を仕掛けて皆殺しにしたのがサブレだった。

問題が起きたのは、海賊船内で侵入組が反撃にあった際、サラも研修生として参加していた。このころから優秀な生徒がこういう作戦に参加することはよくあった。

問題はブリッジ制圧に向かう過程で起きた。20人ほどから奇襲を受けた部隊は撤退を余儀なくされた。

海賊たちはすぐに追撃を仕掛けきた。そして、その途中でサブレが立ちふさがった。

サラは「一緒に残ります」っと告げたが、サブレは「邪魔だから撤退しろ」っと一人20人と戦うことを決めた。

心配になり戻ってきた部屋でサラはトラウマになりかねないような光景を目のあたりにした。

二十人ほどの男女の死体が積み重なり、死体から流れる大量の血が床一面を真っ赤に染め上げる。その死体の山の上に立ち、両手にハンドガン、口にナイフを銜えたサブレがサラの方を見る。サブレの顔も返り血で所々赤くさせていた。

悲鳴を上げそうになり、そのまま腰を抜かしてストーンと驚きと共に床に尻を付ける。

「なんだ……戻って来たのか？」

「全員殺したんですか？」

「いや、一人逃げられた。右目を切ったからすぐわかるけど」

サラは怖かった。これだけの人数は三十分ほどで片づけてしまったのだから。

その後、作戦は無事成功した。その際に一機のモビルスーツが逃げ去っていく姿を見逃した。

その時の話を聞かされた周囲の人はその光景を想像し表情を青ざめる。

「その時の男がテラ？」

「その可能性がある」

ビスケットの疑問にサブレはなんとなくで答える。サブレも遠い記憶なので正直に言えば……うる覚えである。

「正直どうでもいいことだったからうる覚えなんだよな」

サラは表情を暗くさせながらつぶやく。

「20人の人間を殺しておいてうる覚えですからね。嫌にもなりますよ。あんな残虐な光景を見て三日三晩悪夢に悩まされたのに、当の本人は鼻歌交じりで仕事をして寝ているんですもん」

そんな姿をみんなが思い浮かび「ありえそう」っとつぶやく。するとレオ、明楽、シノの順に感想を口にする。

「先輩なら「そんなことあったけ？」って忘れてそう」

「先輩ならやりかねないって普通に思えるのが嫌っす」

「サブレなら笑顔で殺せそうだよな。っていうかお前がトラウマになることってあるのか？」

最後のシノの質問にサブレが心外なつとつぶやきながら俯く。もしかしたら……あの頃の戦いに決着をつける日が近づいているのかもしれない。

次の日、ほぼ全員が「掃除で疲れたから休む」という旨の報告をし、休みを入れるとそれぞれの休日を送ることになった。

テラと俺のとの間にある因縁。

それもすべてはもしかしたらというレベルではあるが、懸念として



頭に入れて置いた方がいいだろう。

「つとか考えている間に兄がとぼとぼと歩いてきた。」

「ねえ、サブレ。聞きたいことがあるんだけど。バルバトスって修理できないの?」

「なんで今更そんなことを聞くのだろう? まあ、隠すようなことではないが。」

「フレームが内部から壊れたかな? 新しく作った方が速いって言われたかな。しかし、今は新型大型戦艦建造などの建造で忙しくてコストの高いモビルスーツを作っている暇はないってさ。」

兄は「そっか……」と気落ちしてしまっている。このままではさすがに可哀そうである。

「俺が昔使っていたガンダム似のモビルスーツなら今でも使えるんじゃないのか?」

兄は顔を上げこちらをまっすぐ見る。希望が目の前をちらつかされている状態である。

「それってどんなフレーム? ガンダムと同じなの? ガンダムじゃないの?」

「質問が多い。ガンダムじゃない。ソニアは……『オリジン・フレーム』って言ってたかな? ガンダムを含めた全てのモビルスーツの原型になった最初のフレーム。原初の『オリジン』、ゆえにオリジン・フレームというわけだ」

兄は小声で「オリジン……フレーム……」とつぶやく。

ソニアは確かそういつていたはずだ。操作しやすかったし、戦いやすかった。ツインアイや全身を見てもガンダムに類似している点が多い。しいて言うなら角の部分であるアンテナが存在しない点だろうか?

最初のモビルスーツ。まだ阿頼耶識を搭載することを前提としていない造形をしており、今のネオ・ガンダム・フレームにある意味似ているといってもいいだろう。

しかし、今更あれを直してどうするのだろうか?」

まさか!?

「モビルスーツに乗ろうとするなら全勢力を使って阻止するが?」

「乗らないよ!?……その……クッキーが言ってたんだ、三日月似の人にあたって。どうせサブレは聞いても知らないっていうだけだもん」  
知らないしな、生きている理由なんて。ゲイナーに渡したって口が裂けても話すつもりは無いけれど。

しかし、三日月とかいう男が生きていたからどうしたのだろうか?

「何?昔の男?」

「昔!?今も昔も男なんて付き合っていないからね!?ってそうじゃなくて、もし生きているならバルバトスをわたしてあげたいなって思ってたね」

昔の男じゃない?ふむ、だったら……

「今の女がいるという事か?アトラか!」

「……!?な、な、何の話?!ち、違う!!」

「言いよどむ。これは言い逃れができないレベルだな。結婚はいつだ?式場、進行役は是非俺に!」

「し・な・い!!しつこい!!」

「大丈夫。この時代同性婚が許可されている!」

「しないって言ったよね!?あとさりげなく同性婚に変更されているし」

「っちー!」

舌打ちをすると兄は信じられない光景を見るような目で見てくる。しかし、実際睨に「パパ」と呼ばれている時点であと少しだと思うけどね。結婚まで秒読みかな?

こつちからけしかければ簡単なのだが、面白くもないのでその経過を楽しみたいものだ。

兄は立ち上がり走り去っていく。

仕方ない。あとを追行けるか!?

今回のエピソード

兄と共に追いかけてっこをしながら開発局へと入っていく。ファントムブラット隊が使用しているドッグへと走って入っていく。

ドッグの中に入ってきた兄と俺の足はそこでぴたりと止まる。

ドッグの中ではエデンを入れた十機のガンダム・フレームがほぼ完成状態で置かれていた。

ソニアが「いらつしやい」っと近づいてきた。その表情は「さあ説明させなさい」っと言っている。

「あそこの黒い機体が」

「俺達が止める前に説明を始めますか？あんたは」

兄に関してはあきらめている。

「黒いガンダムが『ガンダム・マクミラン』よ。名の由来は古い対物ライフルの名前からあ取ったわ。両肩のシールドはビーム屈曲させることができるの。それをはさむようにスナイパーライフルを使用するの。念のためにビームサーベルとビームハンドガンを装備しているわ」

ツツコミどころを用意しないでほしい。

なんで対物ライフルの名前からとったんだよ。

「赤い忍者のようなガンダムが『ガンダムN』よ。本当は忍者をもじった名前が良かったんだけどね。装備はビーム小太刀が二つ、ビームトンプアーが二つ、ビームヌンチャクが二つ、ビームブーメランが二つ装備されているわ。基本はトリツキナーな装備が多いわね」

なるほど、そういわれたら忍者のような外見をしている。

「この小型の二機はジャニーとノイン専用だというのは分かるわよね。名前は『ガンダム・スニー一号機』がジャニー専用機で色は青。もう一機が二号機で色はピンクでノイン専用機ね。この二機はね……合体するのよ（ドヤア）。装備は簡易的でビームライフルにビームサーベル。合体したら隠していた砲撃装備が多数現れるわ。さながら小型のモビルアーマーみたいなものね」

ドヤ顔がイラつく。

まあ、それぐらいしなないとあの二人はな……

「金色のガンダムは『ガンダム・システム』で名の由来は近接格闘術の一つね。装備は対艦刀、ビームサーベル、ビームクローと全部近接装備よ。まあ、シンプルイズベストをモットーとして作ったわ」

金色がまぶしい。

脳筋用の機体だな。

「こっちの黒と赤の可変機は『ガンダム・ウイングソード』よ。装備はミサイルと名の由来になったウイングソード。ビームライフルを装備しているわ。背中についている大きな翼が特徴なんだけど。これは本人の要望でね、「ジョシユアから逃げられるような機体を作ってほしい」って言われて」

大きなV字型に伸びた翼が特徴的だが、理由が……「ジョシユアから逃げられるような機体」ってお前。

これで全部か？しかし、ここまでちゃんと作られると結構壯観であるが。終始ドヤ顔がイラついたが。しかし、兄の興味は別に存在した。

「ソニアさん！オリジン・フレームって今でもここにありますか？」

「ええ、存在するわよ」

そういつて案内した先はモビルスーツが3機ほどしか格納できないほどの大きさのしか格納できていない。そこにはオリジン・フレーム事『オールインワン』が置かれていた。白い装甲に黒いフレームが各所からのぞかせ、ツインアイに騎士を彷彿させる頭部、金属製の小型シールド、小型メイス。あの頃と何も変わらない。

そして、その隣にガンダム・バルバトス・リファインとバルバトス・ルプスレプスの残骸が山積み状態になっている。

どうやらソニアは元々オリジンを使ってバルバトスの改造を使用と考えていたようだ。

兄は一度だけ目を瞑り、頼み込む。

「お願いします。三日月・オーガス専用のガンダム・バルバトスを改造してください！」

ソニアは微笑みながら答える。

「ええ、もちろん作らせてもらおうわ」

少しづつ歩き始める。そろそろ前を向く時だ。

《断章終わり 火星編開始》

## 火星編

### 設定資料集

あらすじ

《地球編あらすじ》

マクギリス・フアリド事件から七年、地球はかりそめの平和を送っていた。殺されたラスタル・エリオン、姿を消したテイワズ。そして変わる様に現れた木星帝国と軍事を強めるギヤラルホルン。様々な思惑と計画が交差する中、戦いが始まる。

《火星編あらすじ》

ギヤラルホルン解体から数か月、戦争が始まって一年が経った頃、EDMは本格的に火星進行を始めようとしていた。火星進行前の最後の休暇を新しくできたテーマパーク・コロニーで過ごしていた。そんなサブレの元にPN01が接触を持ってくる。彼が告げる言葉とは？P，D，最初の艦隊戦が始まろうとしていた。

《木星編あらすじ》

COMING SOON……

キャラクター設定

サブレ・グリフォン

身長・体重……185cm・76キロ

髪色・髪型……多少癖のある短めの茶髪

体格……細いががちりした筋肉を纏っている。細マッチョ。

所属……経済防衛機構(EDM)のファントムブラット隊の所属のパイロット。組織では幹部クラスの間人。

性格……落ち着いた物腰で冷静に対応できるほどに落ち着いている。兄に対しても周囲に対してもそうだが、信頼していても一方的に信用は決してしない。

ビスケット・グリフォン

身長・体重……180cm・83キロ

髪色・髪型……癖があるが首筋にあたるほどの茶髪

体格……恰幅の良い体格

所属……EDMのファントムブラット隊の所属でEDMでは幹部クラスの間で所属部隊の隊長

性格……肝の据わった所があり、人柄がよく仲間や家族に優しく周囲に対して信頼しており、多少何かがあっても慌てるような人間ではない。

エヴォ・エクス／アイン・ダルトン

身長・体重……190cm・80キロ

髪色・髪型……黒髪でかなり短めのストレート

体格……細身で筋肉質

所属……木星帝国、ギャラルホルン

概要……ギャラルホルンの准将。いつからギャラルホルンに所属しているのか不明で、MSのパイロットとしてはサブレと抗することが出来る唯一の存在である。その正体は木星帝国の幹部の1人であり、かつて鉄華団と戦ったギャラルホルンのパイロット「アイン・ダルトン」のオリジナルの存在。彼の正体の判明と同時にかつて鉄華団と戦ったアインがクローンであることが判明した。ギャラルホルンのスパイとして潜入しており、ロロ・デブリンを代表に祭り上げるなどの暗躍を繰り返す。両親はギャラルホルンにとつて都合の悪い存在であるためギャラルホルンと繋がりがあがるノブリス・ゴルドンの手によって暗殺された。自分の感情を押し殺して生きてきたがサブレの存在に刺激され激情を取り戻し、同時にギャラルホルンへの憎しみの感情も取り戻す。ギャラルホルンの壊滅後は木星帝国に帰還している。ククナを大事にしており、その為ならどんな敵も殺すことを決めている。サブレと同様、覚醒者より上位の存在である「選別者」の1人であり、彼とサブレの戦いが人類の命運を左右する。

クレア・フォン・フレイア

身長・体重……ヒ・ミ・ツ♪

髪色・髪型……透き通ような眺めの金髪

体格……ヒ・ミ・ツ♪

所属……ファントムブラッド隊の給仕係

性格……穏やかだが大胆な行動をとるときもある。サブレには時折異常ともとれるほどの行動力を見せる。

レレ・キャン

髪色・髪型……金色のカール

体格……身長は低めで童顔

所属……ファントムブラッド隊

性格……キャリアには優しく、ほかには厳しい。真面目な性格をしており、ある意味では融通が利かないところがある。

アトラ・ミクスタ

髪色・髪型……薄目の茶色の癖のある長い髪

所属……ファントムブラッド隊の給仕係

性格……優しく厳しい性格をしており、みんなを信じて行動する。かなり大胆。

明楽・アルトランド

身長・体重……170cm・62キロ

髪色・髪型……癖のない短い黒髪

体格……細くがっちりした筋肉を持っている。

所属……EDMのファントムブラッド隊の所属のパイロット。

性格……楽観的な性格であり、常に楽しそうにしている。天然でサブレを困らせることができる。ただし戦闘中は戦うことに集中するため冷静に対応する。

ノルバ・シノ

身長・体重……不明

髪色・髪型……短く刈り上げられた茶髪

体格……ガツチリとした筋肉を持っていて、肩幅もそこそこ大きい

所属……EDMのファントムブラッド隊の所属のパイロット

概要……元鉄華団の実働一番隊隊長。仲間思いで人当たりが良く陽気な振る舞いを見せる。鉄華団、EDMのファントムブラッド隊においてムードメーカー的存在。7年前のアリアンロッド艦隊との決

戦において、作戦に失敗し撃墜されたことにより元鉄華団のメンバー達からは死亡していたと思われていたがEDMに機体ごと回収され治療を施されていた。EDMに回収された直後は仲間を失った喪失感や作戦に失敗した自責の念から戦意が衰えるが、サブレとの対話を経て何らかの心境の変化がありEDMに残留する。後にサブレ・チルドレンの1人に名を連ねるが、元鉄華団のMSパイロットであり基礎能力は高いとはいえ天才揃いのサブレ・チルドレンの他のメンバーと比べると実力は大きく劣るため、サポート端末であるハロのサポートを経て何とか他のメンバーに追隨出来ている状態である。

アルミリア・フアリド

身長・体重……170cm・50キロ前後

髪色・髪型……癖のある紫色のショートカット

体格……細身で少々幼さが残るくらいの体格

所属……木星帝国所属のパイロットでアインの部下

性格……少々思い込みの激しい所があるが、基本はまっすぐ。マクギリスを殺した兄や見殺しにしたものに対して激しい憎悪を向けている

ジャック

身長・体重……180cm・75キロ

髪色・髪型……青いストレート

体格……細身の筋肉質

所属……木星帝国

概要……木星帝国のMSパイロットでアインの直属の部下。戦闘狂で強者との戦いを生きがいとしている。その技量は明楽に匹敵する程高く、自分と互角に戦った明楽との戦いを切望している。

メアリー・シュシュ

身長・体重……背は低く、やせ型

髪色・髪型……左側に寄せたサイドポニーテール

体格……胸が小さく、全体的に肉付きがよくない

所属……EDMのファントムブラット隊のCIC担当

性格……双子の妹に対して過剰なほどの過保護な一面を持ち気が



強い。その反面、一人で泣いたりすることが多く、一人で悩むことが多い。

イオリ・シユシユ

身長・体重……背は低く、やせ型

髪色・髪型……右側に寄せたサイドポニーテール

体格……胸が大きく、全体的に肉付きがいい

所属……EDMのファントムブラット隊のCIC担当

性格……優しく穏やかな性格。姉や仲間に対して過剰と言ってもいいほどの信頼を寄せている。

ゼム・ロツク

身長・体重……200cm・95キロ

髪色・髪型……黒い短めの手入れされていないぼさぼさ頭

体格……肩幅が大きく、ゴツゴツした体格

所属……EDMのファントムブラット隊の整備長であり、幹部クラス

性格……優しくも厳しい性格で、子供に対して過保護な面を持つ。ファントムブラット隊に所属するメンバーの一部は彼が拾ってきた孤児たち

ノノメ・レイデン

身長・体重……170cm・80キロ

髪色・髪型……オールバックの金髪

体格……レスラーを彷彿させるほどの盛り上がった筋肉

所属……EDMのファントムブラット隊の操舵兼砲撃手。

性格……あまりしゃべろうとしない上にコミュニケーションをあまりとらない。基本忠実で上司の命令には刃向かわない。

マハラジャ・ダースリン

身長・体重……180cm・80キロ

髪色・髪型……短めに切り揃えられた灰色の髪

体格……多少腹の出た中年太りした体格だが、その反面他は鍛えられた筋肉を纏っている

所属……EDM

性格……EDMの代表。かつてはギャラルホルンで並ぶ者がいない天才と称された人物でラスタルを凌ぐ戦略眼を持つ。ラスタルとは同期で親友同士だったが、ある出来事を期にギャラルホルンから離れEDMを立ち上げた。代表というだけあり基本忙しくしており、どこか豪快でありながら適当な一面がある。代表の座に就いてから前線から離れていたうえ、不摂生な生活がたたり中年太りしてきている。その頭脳もさることながら、EDMには才能溢れる人材が豊富であり、そういった人材を集める巡り合わせの良さも大きな武器の一つである。ギャラルホルンのジュリエッタ・ジュリスは生き別れた実の娘である。

アルベルト・シユキュナー

身長・体重……190cm・79キロ

髪色・髪型……明るい茶色のストレート

体格……陸上選手を彷彿させる体格

所属……EDMの総司令官

性格……生真面目で時間にうるさい

サラ・ベールン

髪色・髪型……短めの黒上

体格……良くも悪くもスレンダー

所属……ファントムブラッド隊の小隊長の一人

性格……厳しく、性的ないたずらを好む問題児

レオ・クリスハイト

髪色・髪型……短めの癖の無い金髪

体格……細身の鍛えられた体格

所属……ファントムブラッド隊所属の小隊長の一人

性格……さわやかな性格をしているが、良くも悪くも親しく接する。

マーク・イツキ

髪色・髪型……毛先に癖のついている緑色の髪

体格……しいて言えば普通。目つきが悪い

所属……フアントムブラッド隊所属のパイロット

性格……めんどくさがりであり、常にゲームの事を考えている

ジャニー・モルデン

髪色・髪型……短めの癖の強い茶髪

体格……とても背が低く凛々しい表情をしている

所属……フアントムブラッド隊所属のパイロット

性格……他人に対して厳しくからかうような態度をとる

ノイン・モルデン

髪色・髪型……長めの茶髪を後ろで縛っている

体格……低い身長に生意気そうな表情をしている

所属……フアントムブラッド隊所属のパイロット

性格……生意気で上から目線で常に接してくる

ジョシユア・レッドハイ

髪色・髪型……派手な赤い髪

体格……豊満な胸、くびれた腰などかなりいいスタイルをしている

所属……EDMフアントムブラッド隊「Gチーム」所属。

概要……サブレからMS操縦の薫陶を受けた10人のMSパイロット「サブレ・チルドレン」の1人。露出度の高い服装を好んで着用している。また、戦闘中は寄声をあげながら戦うとゆう戦闘狂な一面がある。辺境コロニーのスラム街出身の孤児であり、幼少時から強盗、殺人といったことを行うとゆう荒んだ生活を送っていた。そのため、人の命を奪うことのためらいを持たず、むしろ追いかけて戦いを挑むような歪んだ精神性が形成された。そんな生活を続ける中、サブレと出会うことで「守る」とゆう言葉の重みを教えられたことでEDMに所属することになった。戦場では同期の渉と高確率でコンビを組み、正反対の性格ながらも戦場では最大の戦果を挙げるコンビとして有名である。渉のことを非常に気に入っており、戦場にもかかわらず、彼のことを追いかけている。ギャラルホルンとの決戦後、フアントムブラッド隊のMS部隊別名「Gチーム」に配属され、ネオ・ガンダム・フレームの1機であるガンダム・Nを授与された。

渉・アスカ

髪色・髪型……毛先が跳ねている黒髪

体格……中肉中背

所属……ファントムブラッド隊所属のパイロット

性格……穏やかで面倒ごとを嫌がる

マツク・フエンサー

髪色・髪型……短めの黒髪

体格……スレンダー

所属……アルン議会の議長

性格……優しく大人らしくどんな時も落ち着いている

サイガ・フリーゲル

髪色・髪型……黒髪で方につくぐらいの長さ、癖は無い

体格……サブレと非常に近い体格をしている

所属……革命派のリーダー

性格……仲間を常に大切に思い、それなら死すらいとわなない

ファン・テム

髪色・髪型……短めの金髪

体格……かなり鍛えており筋肉質

所属……革命派

性格……こわもてな表情とは裏腹で友人や仲間に対してかなり

優しい

イズナリオ・ファリド

体格……中肉中背の叔父さん

所属……闇商人

概要……元セブンスターズの一家門ファリド家の当主。常に他人を見下している。エドモントンの戦いにおいて、養子であるマクギリスの手回しにより失脚した。また、7年前のマクギリス・ファリド事件と称された一連の戦いにおいてはマクギリスの出生の秘密を暴露したことにより、彼の失脚の原因をつくり復讐を果たした。野心家であり強い権力欲を持ち、更なる地位を求めて木星帝国と繋がりを持った。しかし、木星帝国から用済みになったこととマクギリスにした仕打ちをアルミリアから憎悪され、始末された。稚児趣味がありマクギ

リスに幼少期から性的虐待を行っていたことがマクギリスの精神を歪ませていた原因の一端であり、ある意味7年前のマクギリス・フアリド事件が起きた元凶とも言える人物である。

ラストラル・エリオン

所属……元ギャラルホルン代表。現故人

概要……民主化したギャラルホルンの初代代表にして、セブンスターズの一家門エリオン家の当主。7年前の「マクギリス・フアリド事件」と称された一連の戦いにおいて、その豊富な戦力と多彩な策謀を駆使して革命軍や鉄華団を巧みに撃滅し、セブンスターズ内での権勢を強めたことにより、民主化が進んだギャラルホルンの初代代表の座に収まった。目的のためなら犠牲や手段をいとわないが、合理性に重きを置くばかりに他者に対して配慮が薄い点があり、結果的にマハラジャの離反を招いている。テイワズにより暗殺されたとみなされているがその件については多くの謎が残る。EDMと木星帝国により、過去の非合法の工作や禁止兵器の使用などが暴露され、その名声は地に落ちた。前述のマハラジャの離反を招いたことといい、ある意味ギャラルホルンの壊滅を招いた元凶とも言える。

ロロ・デブリン

所属……ギャラルホルン最後の代表。故人

概要……非常に傲慢で騙されやすい人物。ラストラルの死後、ギャラルホルンの代表となった。元々ギャラルホルンの貴族ではなかったが、エヴォ・エクススの工作によりギャラルホルンの代表に祭り上げられた。能力面では前代表のラストラル・エリオンに大きく劣り、段々と劣勢に追い込まれてゆくEDMや木星帝国との戦況に何一つ手を打つことが出来ず、最期は散々エクススの手の平の上で踊らされた末謀殺された。

ガエリオ・ボードウィン／モンターク

髪色・髪型……紫色の多少長めの髪

体格……細身だが鍛えられた体格

所属……ギャラルホルン↓フリーの傭兵

性格……ギャラルホルン時代は自己中心的な正義を振りかざし

ていたが、サブレとの出会いをきっかけに自分を変えようと立ち上がる。現在は他人の為に自分を犠牲にする性格に変わった。

ジュリエッタ・ジュリス

髪色・髪型……濁ったような金髪のショートボブ

体格……スレンダー

所属……ギヤラルホルン

概要……ギヤラルホルンのMSパイロットで、かつてはラスタルが司令を務める月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドに所属するエースパイロットだった。元々身寄りがなく家柄・階級がなかったが、そのMSの操縦技術をラスタルと彼の指令の元非合法工作を行っていた傭兵のガラン・モツサに見出され、アリアンロッドにスカウトされた過去を持つ。そのため、ラスタルとガランを盲目的なまでに崇拜、尊敬しており、彼らへの恩義のためにスティックなまでに自身を鍛え、強くなるうとしていた。7年前の「マクギリス・フアリド事件」と称された戦いにおいて、鉄華団の悪魔と称された三日月・オーガスが操るガンダム・バルバトスを討ち取ったため、ラスタルの後継者と称されていたが、ラスタルが暗殺されアイン・ダルトンの工作によりロロ・デブリンがギヤラルホルンの次期代表に選出されたため全ては有耶無耶となった。非常に視野が狭く、自分の尊敬する人物達の正義を絶対視するあまり立場や境遇の違う者の事情に配慮や理解をすることが出来ないという独善的な面がある。この欠点は最期まで改善されず、明楽との戦いにおいて自身の心の醜さを突きつけられた結果、アインティティを失い精神が崩壊寸前となる。ギヤラルホルンの最後の戦いによって精神が回復しない状態でガエリオを守るために木星帝国と戦うが、圧倒的な技量の差に一矢報いることすらかなわず、最期はアルミリアに討たれ戦死する。実はEDMの代表マハラジャ・ダースリンの実の娘であるが、最期までその事実を知ることとはなかった。その独善的な正義は罪なき者まで巻き込んで多くの犠牲を出したが、最終的に自身や自身の信じる全ての人間の行いが、全世界から悪魔の所業として否定され歴史に語り継がれるとゆう報いをうけることになった。

クッキー・グリフォン

所属……民間人

概要……ビスケットとサブレの妹でクラツカとは双子の姉妹。気の強いクラツカとは対照的に優しく穏やかな性格。兄であるビスケットのことを「お兄ちゃん」と呼んで慕っている。幼少時から祖母の桜の農場を手伝っていたため、時々手伝いに来ていた鉄華団の前身となったCGS参番組の面々とも面識があり、特に三日月やアトラによく懐いていた。また、CGSに依頼に来たクーデリアともすぐに仲良くなった。クーデリアの護送任務の完了後、鉄華団の支援により寄宿学校に通うが兄のビスケットが戦死したと思われていたため、心に傷を抱えることになる。それから穏やかに日々を過ごすのが、ギャラルホルンの印象操作により鉄華団を犯罪組織に仕立て上げられたため、学校内で風評被害にさらされる。また、親しくしていた鉄華団の面々が次々と戦死していき、再び大切な人を失う悲哀を味わう。「マクギリス・ファリド事件」後は、アトラ、クーデリア、クラツカ、桜と共に三日月の忘れ形見である暁と一緒に育てながら生活している。EDMとギャラルホルン、木星帝国の三つ巴の戦況が激化する中、ビスケットの生存を知ることになる。アトラ、暁、ユージン、クラツカ、桜を伴ってEDMの本拠地である月面都市アルンに向かいビスケット、サブレとの再会を果たす。物心つく前に生き別れたため、サブレのことはほとんど覚えていない。

クラツカ・グリフォン

所属……民間人

性格……活発的な性格

桜・プレツツエル

所属……民間人

性格……孫たちの事を常に心配している

ユージン・セブンスターク

所属……民間郵便会社『鉄華郵便局』の社長

性格……責任感が強くそのための努力をいとわない

ライド・マツス

所属……ゲイナー一派

性格……人一倍責任感が強く思い込みが少々激しい

三日月・オーガス

髪色・髪型……不明

体格……小柄で細身

所属……ゲイナー一派

性格……現在は何を考えているのか分からないが、ゲイナーを守ることを第一に考えている

ゲイナー

髪色・髪型……白髪

所属……ゲイナー一派のリーダー

性格……研究や実験を重要視している。その為なら自分の犠牲もいとわない

コットン・アドモス

髪色・髪型……黒髪ストレート

体格……出るところは出ており、引き締まるところは引き締まっている

所属……ゲイナー一派

性格……ゲイナー以外の事はどうでもいいと考えている

F

髪色・髪型……青と白のまだら模様の髪

体格……細身

所属……木星帝国の幹部

性格……残虐を好み、優しそうな表情とは裏腹に人を殺すことを最も好む

ペペロ

髪色・髪型……ピエロの帽子を被っているため不明

体格……太っている

所属……木星帝国の幹部

性格……人をだますことを最も好み、逆に騙したり陥れられた場合は恐ろしいほど怒りを見せる。



テラ

髪色・髪型……濃いめの赤い髪に白髪が混じっている

体格……ガツチリした筋肉質

所属……木星帝国のナンバー2

性格……厳格で真面目。皇帝の為を第一としており、その為の犠牲を何とも思わない

テトラ・ギョウジャン

髪色・髪型……明るい茶色のショートボブ

体格……スレンダー

所属……木星帝国の幹部で火星連動の議長

概要……木星帝国の幹部の1人。人を見下すような目をしており、自分の目的の為ならどんな手段を使おうともかまわない。父親のアリウム・ギョウジャンは火星の活動家団体「テラ・リベリオネス」の代表を務めていたが、落ち目の組織の再興のためクーデリアに協力を要請し断られたため、クーデリアを逆恨みし海賊「夜明けの地平線団」をけしかける。結果、「夜明けの地平線団」は鉄華団に壊滅され、自身も報復に鉄華団に射殺された。そのため、クーデリアと鉄華団を逆恨みしており、火星連合の議長に就いたクーデリアと「マクギリス・フアリド事件」を生き残った鉄華団の残党に復讐するために木星帝国に所属することになった。謀略によりクーデリアを火星連合の議長の座から引きずり下ろし、自らが火星連合議長の座に就いた。

ククナ・フォン・フレイア

髪色・髪型……透き通るような金髪のアストレート

所属……木星帝国の幹部で皇帝の娘

性格……研究肌で多少人を見下している節があるが、基本は謎に包まれている。

皇帝

髪色・髪型……剥けている

体格……やせ細っている。

所属……木星帝国の皇帝

性格……目的の為なら手段を選ばない。

黒衣の騎士

髪色・髪型……謎に包まれている。

体格……いかなければ普通の体格をしている。

所属……木星帝国

性格……ある目的に準じて行動しており、仮初の命をくれたククナには忠誠を誓っている。

設定

経済防衛機構……通称EDMと呼ばれる地球圏に存在するギヤラルホルンと対をなす傭兵企業。一度はギヤラルホルンに襲われたが、逆に追い返したことでギヤラルホルンからある程度の危険度の認識を持たれている。複数の部隊を所有しており、特に一番と二番隊とファントムブラット隊は有名。鉄華団壊滅後、極秘裏にバルバトス、グシオン、フラウロスの回収を行ったのちに、ラスタルと取引し、地球から手を引く代わりに付きを含めた各コロニーなどの宇宙における施設防衛権を手に入れた。現在の本部は月面都市アルンにある。

ギヤラルホルン……地球圏に古くから存在する地球を支配し続けてきた組織。本編開始の一年前に代表だったラスタルが殺されてから暴走し始めた。しかし、そんな中でもガエリオのように変えようと努力している者もいる。

木星帝国……木星圏に古くから存在する帝国主義を第一とする国家。厄祭戦の後に木星革命軍として地下に潜み、ひそかに軍事力を整えていた。ラスタルを殺しテイワズを乗っ取ることで表舞台に現れることができるようになった。

ファントムブラット隊……EDMが所有する部隊の一つで小規模部隊。戦艦一隻にモビルスーツは全てで十機。しかし、その一部はガンダムフレームであり、パイロットも選りすぐりパイロットばかりで構成されており、ほかの部隊には無い、幹部クラスが三人も配属されているなど優遇されている反面、その機動力を生かされ様々なところで戦う。現在は全てのモビルスーツがネオ・ガンダム・フレームである。

ネオ・ガンダム・フレーム計画……EDMと木星帝国がそれぞれの立場から新規のガンダムフレームを開発しており、『ガンダムエンジン』と『エンペラーガンダム』ができた。偶然にも開発された両機の基本フレームは共通点が多かった。その後EDMは合計で十機、木星帝国は四機以上開発した。

マクギリス・ファリド事件……マクギリス・ファリドと鉄華団が引き起こした一連の事件であり、最終的にギャラルホルンとEDMによる密会を得て最終的に落ち着いた。

ラスタル・エリオン暗殺事件……アープラウのエドモントンにある議事堂を出たところで暗殺された、のちにテイワズが犯人としてでっち上げられたが、本当の犯人は木星帝国だった。ラスタルは薄々こうなるのではないかと予想していた。

プロジェクト『E』……木星帝国が極秘裏に進めていた。『evolution』と『existence』のEであり、『進化する存在』という意味。人間の限界とその先を目指して進められた数千年の野望であり、『覚醒者』と呼ばれる存在を作ることを目指している。その結果が『エヴォ・エクス』である。

覚醒者……人間が進化した存在と呼ばれており、人工的な存在と天然的な存在がいる。テレパシーや未来予知や死の予兆などがある。

選別者……アカシックレコードが予言したいずれ人類の未来を決める者。覚醒者の中でも特に優れた力を持っている者。アカシックレコードは特にサブレに目をかけていた。

アカシックレコード……人類が宇宙に上がってからすべての歴史を調べてきた存在。アカシックレコード自身には善悪の概念は存在しない。現在はイオリア・シユヘンベルグ最終計画を遂行するために行動している。

PN01……アカシックレコードが作り出した外部記憶領域の事であり、各銀河に必ず一つは存在する。これはそのうちの一つであり、最初の記憶領域。多くの人格プログラムが存在するが、これは生きていた人間の脳をスキャンすることで完成する。

イオリア・シユヘンベルグ最終計画……かつてイオリア・シユヘン

ベルグが計画したといわれている計画。人類に関する最後の計画で、見届け人としてアカシツクレコードに全てを任せている。

#### 機体設定

ガンダムバルバトスリファイン……大破したガンダムバルバトスをEDMが大幅改修した機体で、ジム・フレイム開発時にできた360度全方位モニターを搭載した最新技術で改修された機体。『洗練』や『精錬』という意味が込められた機体。サブレの強い要望で機体性能限界のスピードと回避性能とバックパックを入れ替えることで様々な形態に変化する。

マルチスタイル……大気圏内でも飛ぶことができるぐらいの出力を出せることが特徴。

ソードスタイル……対艦刀とビームダガーとシザーアンカーをメインとしている。

ガンナースタイル……高出力ビーム砲を二挺と全身に小型ナパーム弾を多数つけている。他二つのバックパックと違い全身に追加装甲を付けるスタイル。

ガンダム・グシオンリベイクリファイン……大破したガンダム・グシオンリベイクフルシティをEDMが大幅改修した機体とされているが、実際はガンダム・グシオンをベースに新規開発されたガンダム・シムカスを偽装した機体。その装甲は機体の出力の調整が完了していないガンダム・シムカスの出力を抑え安定させる役割を持つ。バルバトスと同じく最新技術で改修された機体。バランスよく調整されており、隠し腕はそのままに背中に高出力ビーム砲やビームバルバトを装備している。

ガンダムフラウロスリファイン……大破したガンダムフラウロスを大幅改修された機体とされているが、実際は新規製造機。砲撃形態はそのままに背中に搭載されたダインスレイブを高出力ビーム砲を二丁搭載されており、砲撃形態に変化することで出力をさらに上げることができ。モビルスーツ形態では連射性を高めることができる。他の武器はそれ以外にビームダガーを二つとビームライフルを二丁装備している。基本運用は遠距離からの援護であり、戦艦の防衛が目

的。

ジム……EDMが独自に開発した量産機。ゴグル上のカバーに覆われた頭部センサーカメラが特徴であり、機体のカタチは角ばっており、どこかガンダムフレームを思わせる姿をしている。装備はビームライフルにビームサーベルを一つづつしか装備されていない。追加装甲や追加装備することで様々な力を発揮する。

ガフェイン・マークII……ヴァルキュリア・フレームを回収したのちに改修、改造を施した。惑星間航行を短時間で行えるようにと改造された。実験は半分成功。その後、小さな調整を繰り返したのちにモントークとなったガエリオに渡された。

霊電……木星帝国がテイワズから奪い取ることで完成させた試作型機。地球進行の際に使用された。最低限の装備を持っている。基本カラーは黄色。

キツシュ……ギャラルホルンが開発した量産型機。キマリスを模範としており、デザインも非情に似ている。ギャラルホルン解体後はそのままEDMに渡った。

レギンレイズオーレス……ギャラルホルンが開発されたレギンレイズを一から見直された機体。武装をビーム兵器に切り替えた機体。デザインなどは基本的に変わっていない。

グレイズオーレス……グレイズを一から見直された機体。

ガンダム・キマリズドミネーション……厄祭戦時に製造された72機のガンダムフレームの1機にして、初代ボードウィン家当主によって運用された機体。紫と白でカラーリングされている。動力機関をエイハブリアクターからパーティクルドライブに変えられ、武装もそれに伴ったものに変更されている。耐熱シールドにビームライフル機能を取り入れた大型ランス。ガエリオの能力に合わせてカスタマイズされた機体だが厄祭戦時代の旧式の機体を改修した機体であるため、ギャラルホルンを遙かに上回る技術力を持つEDMと木星帝国の最新技術を用いて新規製造されたネオ・ガンダム・フレームと比較するとその性能は大きく劣り、EDMと木星帝国のネオ・ガンダム・フレームと幾度となく交戦するがパイロットの技量差も合わさり終

始劣勢だった。ギャラルホルンの最期の戦いにおいて、アルミリアが操るガンダム・レッドクイーンと交戦するが圧倒的な力の差で敗北し大破した。

ガンダム・バエル……二本のバエルソードと空中戦ができるようにと改造されたスラスターを装備している。最終的にガンダム・ブルーレイに追い詰められ、ガエリオを守る為に自爆した。

ガンダム・フェニックス……エヴォ・エクスように改造されたガンダムである。ウイングブレードなどの装備をしている。変形することで機動力を上げることができる。最終的にバルバトスと相打ちになったのち、乗り捨てられた。

ガンダム・エデン……EDMが開発した『ネオ・ガンダム・フレーム』の一機。背中についている『リング・ファンネル』が最大の特徴で、それぞれのカタチに変形させることで様々な使用方法がある。『砲撃モード』で前方にリングを展開し、薄い膜を作り出し、その膜を貫通させることでビームライフルの出力、放出方法が変わる。そのほかに『防御モード』『加速モード』など様々。

エンペラー・ガンダム……木星帝国が開発した『ネオ・ガンダム・フレーム』の一機。背中から発生するビームマントはビームを弾く効果がある。腕と背中にファンネルがあり、オールレンジ攻撃を得意とする。

ガンダム・シムカス……ガンダム・グシオンリベイク・リファインを改修した機体。隠し腕を廃止し、その代わりに様々な武器を装備できるようにと改造された。エンジンへとつけられていた拘束もなくなり、今まで以上の性能を引き出せるようになった。別命『歩く武器庫』。

ガンダム・メテオ……ガンダム・フラウロス・リファインを改修して作られた機体。四つ足状態での砲撃モードを廃止し、機動力と近接戦闘を強化した。操縦性能が高い分シノの腕では扱いきれないためサポート端末『ハロ』によるサポートが必須。

ガンダム・カノン……緑色のごつつい装甲を持つ重砲機。六個の重砲を装備し、腰にはサーベルを扱うための隠し腕を装備している。防

御力と攻撃力に特化させてしまった分、速度が極端に落ち込んだ。操縦者は『マーク・イツキ』。

ガンダム・マクミラン……対物ライフルからとった名前のガンダム。名前から想像できる通りライフルによる遠距離攻撃を得意とする。大型ライフルを常に装備しており、その貫通力はモビルアーマーのIフィールドすら貫通するほど。両肩から伸びている二枚の大型シールドはビームを屈曲することができる。最低限のビームハンドガンを二丁とビームサーベルを二本装備している。操縦者は『サラ・ベールン』。

ガンダム・N……忍者のような見かけをしており、装備も忍者をほうふつとさせる装備になっている。ビーム小太刀が二つ、ビームトンファーを二つ、ビームヌンチャクを二つ、ビームブーメランを二つ装備しており、基本は近接から中距離を得意とする。操縦者は『ジョシユア・レッドハイ』。

ガンダム・スニー……一号機と二号機で成り立っており、二機を合体させることで本来の性能を発揮でき、合体していない場合はジムと同じ装備しか使用できない。合体した場合は四つのエンジンを使って腹の拡散ビーム砲、ビーム砲を両腕に、Iフィールドを張ることもでき、両手にはビームナツクルを装備していて、大型ビームサーベルを一つ装備している。操縦者は『ジョニー・モルデン』が一号機の青、『ノイン・モルデン』が二号機のピンクである。

ガンダム・システム……近接戦闘術を名の由来とするガンダムで装甲が輝くほどの金色の装甲を持つ。全てにおいて近接専用装備であり、対艦刀とビームサーベル二本、ビームクローなどがある。スラスターなども改造をされている。操縦者は『レオ・クリスハイト』である。

ガンダム・ウイングソード……カラーリングは黒と赤からなっており、最大の特徴は背中に装備されている大きな二本のV字型の翼であり、翼そのものにビームサーベルが取り付けられており、変形した際にも使用できる。操縦者は『渉・アスカ』。

## マーズ・アタックI 《君を待っていた》

1

アカシックレコードなる存在を簡単に説明すれば、宇宙が誕生してからのすべての事象、想念、感情が記録されているという世界記録の概念の事であり、過去に起きた全ての出来事を記録しているとされている。

そんな存在が実際にあるとは思わなかったし、あるとしても俺とは一切関係の無い事だと思っていた。しかし、そんな存在が外部端末を介して俺に接触をもってきた。

アカシックレコードと名乗る存在の外部端末として自身を紹介したPN01、彼はいわゆるアンドロイドであり、機械であり、ロボットである。

その存在理由はある計画を遂行し、その経過をなるべく自身の手を銜えない形で行うことが理由であるらしい。

しかし、それはあくまで「なるべく」であり、「絶対」ではないのだ。実際彼は地球での戦いに介入したらしいし。

そんな存在が俺に何の用があり、何を目的に存在しているのかわからなかった。そもそも、俺自身はそんな存在に興味はなかったし。

しかし、彼が放つ一言は俺を……嫌、俺達を否応なしに渦中まで導こうとしていた。

あらゆる戦いが犠牲と間違いを誘う戦い。

誰も目を背けることは許されず、誰もが運命という名の残酷な存在に挑まなければならない。

火星戦役が始まろうとした。

話は火星戦役が始まる少し前から始まる。

俺がPN01と接触するところから始まる。

2

俺、ビスケット・グリフォンはみんなと娯楽施設を詰め込んだコロニーに遊びに来ていた。

先日完成したばかりのこのコロニーはあらゆる娯楽施設がそろっ



ており、今日はその初日にして、プレオープンという事もあり、関係者などを含めた限られた人間が呼ばれている。

本来であれば、出資者である『マハラジャ・ダースリン』が来るはずであったのだが、火星侵攻の部隊編成の最終チェックがあるという理由から参加できず、ちょうど火星侵攻前の休暇が取れた俺達兄弟とユージンや明楽達サブレ・チルドレンのメンバーが代わりに行くことになった。勿論、クレアさんやレレさん、アトラや暁たちなんかも参加することになった。

しかし、そんな俺の表情はいまいち晴れない。

別に火星進行が不満だとか、不安だという理由ではない。単純にマハラジャさんがもっていたチケットにしては数が多すぎる気がするのだ。それもきつちり人数分を持っているのだ。不安という言葉以外に言える言葉を持たない。

何かを隠しているという確信に似た感情を覚え、俺は受付を超えたところで提案した。

「おのおの自分で行動しない？三つもフロアがあるし、全員で一か所を同時に移動していたら邪魔になっちゃうし。俺も用事があるから別行動するし」

そう言うとかツッキーだけが怪しんでいたが、ほかはおおむね了承を得られた。というのももほぼ全員の意見が全く違うものだから不満が残る残る。

そう言う言い訳をしたのち、サブレも「俺も用事がある」といつて別行動をし始めたのをきっかけにみんながそれぞれの所に移動したところで俺は別の場所に移動するふりをしてサブレを追いかけることにした。

サブレは遊園地フロアに移動すると、そのまま人込みをかき分けながら人の入らないような狭い通路に入る。その後、関係者以外立ち入り禁止と書かれた看板を超えてさらに奥へと移動する。

無論俺も看板を超え、あとからついていくと、サブレは一番奥の通路に辿り着いた。

一番近い角から覗き込むようにしていると、サブレの他にもう一人

いることに気づく。

スーツを来た銀仮面のように見える男(?)とサブレが互いに向かい合う形で立ち尽くしている。

銀仮面の男を俺は知っている。コロニーですれ違った人に違いはない。あの時と服装がかすかに違うが、それでも特徴的な仮面はよく覚えてる。

「私は一人で来てほしいと告げたはずだが？」  
ばれてる!?

銀仮面の男はそうサブレに告げるとサブレもサブレで表情を一切変えずに帰す。

「勝手についてきただけだ」

こつちにもばれてる!?

出てしまうか、それでも隠れているか悩んでいると向こうから声がかかってきた。

「いい加減出てきたらどうだ？兄さん」

サブレからそういう誘いがかけられ、あきらめたように出ていく。「で？どうするんだ？邪魔だつていうならひとしきりお仕置きした後どこかに閉じ込めるが？」

閉じ込められるの!?

どこに？どんな風に？

そんな嫌な予想に相手はすっかり黙ってしまった。

これだとまるで俺が怒らせてしまったみたいだ。しかし、相手はそんな俺の予想を無視するように意外な答えを出した。

「別に構わないと上から許可が出た。ただし、ここでの話は他の人間には他言無用だ」

上から許可が出た？特に連絡を取り合っていた風には見えないけど？

そんな俺の疑問にサブレが「互いに自己紹介が必要だと思うが？」っと提案した後、律儀にもサブレから名乗り始めた。

「サブレ・グリフォン」

サブレが名乗ったのなら俺がしないわけにもいかない。

「ビスケット・グリフォン……です」

「PX01……アカシツクレコードの外部端末だ」

外部端末？まるで機械みたいな言葉を選んだな。つと思ってしまった。うとサブレが「なるほど」つと何かに納得したような声を出す。

「それでさつきから違和感のある波長を出していたのか。あんた……機械なんだな？」

サブレの素っ頓狂な問いに空いては声のパターンを一切変えることなく答えた。

「その通り。私は機械。アンドロイドだ」

3

そもそもどうしてこんなことになったのかというと、そもそもサブレチルドレンのメンバーやメアリー姉妹達と一緒に最後の休暇をどうするかと悩んでいるときだった。

明楽が一人で「テーマパーク・コロニーで遊びたい!!」つと駄々をこねていたところからが事の発端である。

メアリーが「鬱陶しいわね」つと本気で嫌気がさしていたのを俺が一人聞いている、俺はそのとたんがいい事を思いつき、それをメアリーに耳打ちするとメアリーもいい感じの悪い笑顔を浮かべる。

メアリーはおなかを触りながら明楽の方をちらりを見る。

明楽は一旦首をかしげてこう告げた。

「おなか減ったの？」

メアリーの額に血管が浮かんだ気がするが、ここは我慢とばかりにグツと感情を抑える。

「違うわよ……アンタとの子が私のおなかの中にいることが分かって」

俺以外の全員の空気が一旦凍り付き、イオリと明楽以外が冗談だと理解するのに5秒ほどかかると、イオリは驚きを、明楽はドン引きしていた。

いや、お前……ドン引きって。

「俺はお前の事好みじゃないのに!？」

そういう問題なのだろうか？

つというか、子供ができたという話を聞いて真っ先に言うべき言葉がそれなのか？ふつうは「いつの間に!？」つとか、「俺記憶にないのか!？」つとかいう反応をするべきじゃないのか？

すると明楽は余計な一言を放つ。

「大体貧乳はそこまで好きじゃなぐへ!？」

「どういう意味よ!？私が予想した反応とは別の反応をするんじゃないわよー!」

明楽の首を絞め持ち上げるメアリー、明楽の体が地面から微かに浮かんでいる。

少しづつ明楽の顔が青くなっていく、酸欠になりかかっているようにも見えるが、そんな隣でイオリは涙を流しながら悲しいのか嬉しいのか分からないような複雑な表情をしている。

「おね、お姉ちゃん……そんなあ」

「ちよつとー!あんたまで本気にしないでよ!！」

と勝手に明楽が解放され、全く状況が飲み込めずにいた。そんな明楽にシノから一言。

「嘘に決まってるだろ?お前が鬱陶しいから騙しただけだったの!」

明楽はそれを聞くと心からホツとしたのか、最後にして最大の地雷を踏んだ。

「よかった。貧乳と結婚して娘まで貧乳なんて嫌だなんて思ってたんだ」

性欲に忠実に生きているなお前は。

メアリーはイオリを説得し終わると、最後にして最大の怒りを明楽の顔面目掛けて拳に乗せておくる。

「誰があんたなんかと!！」

拳がめり込む様子が見えていて。そんな光景に笑いが込み上げてくると、俺のスマフォオに見たことも無いアドレスからのメールが届いた。

迷惑メールか？

明楽やシノが良くアダルトサイトで引つかかるため、時折被害がここにいる全員にまわることがある。そのたぐいかと思ったが、明楽や

シノは大概引つかかったら何か言ってくるはずだ。それが無かったという事は迷惑メールではない可能性が高い。

恐る恐るメールを開くとそこにはこう書かれていた。

『君だけと話がしたい。テーマパーク・コロニーで待つ。チケットはそちらに添付させてもらった』

つと書かれており、確かにメールに大量のプレオープンチケットが添付されていた。

怪しいと思う手前、無視する理由が見当たらない上に、うるさい明樂を黙らせる道具を手に入れたのだからむしろ相手には感謝しなければならぬだろう。

そう思い俺は全員に提案することにした。

「テーマパーク・コロニーに行くか？」

それがきつかけだった。

4

目の前にいる人は自らを機械だと言い切り、俺はそれを啞然としながら聞いていた。肝心のサブレの方は特に動揺することも無く、むしろ「だろうな」ぐらいしか思っていないように思える。

先ほどからの話し方を見ていると機械だとは思えない。いくら人を模しているとはいっても、限界があるように思える。

「私の人格は死んだ人間の脳をコピーすることで完成する。この体の人格は『オルガ・イツカ』と呼ばれる者を使用している」

オルガの人格？通りで誰かに似ていると思ったが、オルガを模していたとは。

サブレは特に動揺することも無く、普通に聞いていた。「で？俺を呼び出した理由を聞きたいんだけど」

「私は君にある伝言を伝えるために来た。その前にアカシックレコードが何なのか、何をしているのかを君に語らねばなるまい。それできれば伝言の意味がない」

そういつて一旦間を置き、語りだす。

「アカシックレコードとはある二人の男女が作り出した宇宙の歴史を記録させる記録媒体であり、人類が宇宙に上がってから作られた存在

だ。その製造年は軽く二千万年を超える」

二千万年!?!途方もなさ過ぎて全く予想もつかない。

「今から九百万年前にアカシツクレコードが地球の歴史の観測をしていた外部端末である私の元を訪れた。アカシツクレコード本体は長年の間、永久に記録を取り続けることができる記録媒体を探していた。そんな旅も終わりを告げ、地球の歴史を回収するために現れたアカシツクレコードに一人の人間が通信をしてきた。それが『イオリア・シユヘンベルグ』だった」

イオリア・シユヘンベルグという人物に聞き覚えは無いが、九百万年前という途方もない年数を考える気にもならない。

「彼は人類が外宇宙に進出するためには人類の意思を一つにする必要がある。つと語り掛け、その方法を我々が知っているのではないかと尋ねてきた。しかし、アカシツクレコードが告げた言葉は残酷なものだった。進化の手前で呪いに掛けられている今の人類が外宇宙に進出しても失敗するだけだ。実際、何度も外宇宙に出ている人類は失敗を続けている」

話が多少壮大になっているような気がする。それに呪いなんていわれてもいまいちしっくりこない。

「人類は宇宙に進出した際、やってはならない過ちを犯してしまった。結果、開発者の男は人類を憎み、人類が進化できないようにと呪いをかけた。それを解くことができ、そして人類を進化の糸口を見つけることができる存在。我々はそれを『選別者』と呼んでいる。私達の計画はその選別者を見つけ出すこと。その為に我々は何度も人類のシユミレーションを地球を使って行ってきた」

……へ?今、なんて言ったの?地球を使った人類シユミレーション?もし、そんなことを九百万年前からずっとしているのだとすれば、今俺の前に居る機械は恐ろしいことをしていることになる。

サブレの表情が無表情から怒りをにじませるものに変化する。怒りをにじませる声を放つのはサブレだった。

「今、自分が何を言っているのか分かっていないのか?あんな人類を使ってシユミレーションをしたって言ったんだぞ?人類が繁栄して

滅びるさまをお前はずっと見ていたってことだ。それに、『選別者』っていう存在を見付けるのが目的なら、お前たちが全く介入しなかったわけがないだろ?」

PNO1はまるで悪びれることも無く告げた。

「最初の一回が失敗することは最初から分かっていた。やはり、人工的なやり方で進化させた人類では呪いを解くことはできなかった。地球外生命体との接触で逆に人類の間に格差を作る結果になるとわかった。そこまで分かれば十分だった。私は地球外生命体を回収後、人類の一割を残して滅ぼすことにした」

滅ぼした? せっかく人類が地球外生命体と分かり合ったというのに? そのうえで滅ぼしたの?

「君たちはせっかくと思っただかもしれないが、外宇宙に出るうえで必要なことをいまだ満たせていない人類では、無理なのだ。だから滅ぼした。そんな経過を何度も繰り返した」

何度も繰り返したつという言葉を反復し考えているとそれを今日まで何回繰り返し返したのだろうか? と考えてしまう。そんな俺の気持ちを読み取ったのか、PNO1は端的に答えた。

「大体人類が栄えて滅びるまでケースが約一万年毎に起きていると考えれば、約九百回」

九百回。その過程の中でどれだけの人類が犠牲になったのだろうか? そう考えてしまう。

それに呪いって何のことだろう。

その答えはPNO1がすぐに答えてくれた。

5

「先ほど私はアカシックレコードを作った男女がいたといったな? 彼らは他の人類よりはるかに優れていた。いわゆる人類初の覚醒者だった。だからだろうな、彼らは他の人類よりはるかに優れていた。それは、ほかの人類から見れば脅威にしかならなかった。男の目の前で彼女は殺されてしまった。それは男を絶望させるには十分だった。男は死に際に叫んだ『呪ってやる! お前達人類が繁栄することは無い。俺の魂はお前たちを滅ぼし続ける!』そうやって彼も死んでいっ

た。その言葉は真実だった。ただ、男自身に問題があったとしたら、それでも彼女の信じ続けた人類を信じたいという願いが男にも残っていた事だった。その二つの心は分かれ、人類に繁栄を願う心と滅びを願う心に分かれ、まるで幽霊のように憑りつき続けた」

そこまで話したところでサブレが「恐ろしいな」っとつぶやいた。まさか……今回憑りついた相手ってサブレじゃないよね？

しかし、俺の考えは恐ろしい勢いで誤解していることになる。

「しかし、男の魂も二千万年という年月の間にすり減らし、結果として限界になろうとしていた。それが君があつたばかりのアインだ。分かれていた魂もバラバラになり、その欠片がアインに宿っていた」

そういわれたらサブレが言っていた最初のアインの薄さみたいな理由が分かった気がした。あれは乗り移っている魂が薄かったためにその影響をアイン自身が受けてしまっていたのか。でも、どうしてサブレと戦う事でそれが急に覚醒してしまったのだろうか？

「アインが覚醒した理由、男の魂が覚醒した理由は……サブレ・グリフォン、君が女の魂が生まれ変わった姿だからだ」

乗り移ったではなく、生まれ変わった。それがサブレと言われてもいまいちピンとこない。

「女の魂は二千万年の月日をかけて生まれ変わった。彼女はいささか変わっていてな。普通人間は生まれたばかりの状態では基本的な差異はあまりない。脳波というのは個性が出来始めると使えるようになる。今までの覚醒者たちも基本的にはそのパターンだ。最もそれとは違うパターンを持つていたのが彼女であり、君なんだ。君と彼女は生まれてすぐに太陽系全域に脳波を響かせた。そんな人間は君達だけだ。だから分かったんだよ、君が『選別者』であると。それが分かったから男も目覚めたのだ。君が許せなくなったから」

サブレはさらに小さな声で「という事はアインと俺は前世で付き合っていたという事か？」と青ざめていた。そう考えてしまったら俺も嫌だ。

「彼女は優しく強い女性だった。自分が死ぬとわかっていても、死んでもなお人間を信じ続けていた。それが男は許せないのだろう。自



分が二千万年もかけても答えが出ない答えに、迷わず進むことができない彼女が。私も聞きたい、どうして君たちは人類を信じることができない？アカシックレコードですら、人間を一方的に信じるなどできない。人間は常に争い、殺し合う。なまじ個性がある分お互いを誤解して殺し合う。その上、他人を蹴落とすことにまるで躊躇しない。何故信じることができる？」

俺でも人を信じることは難しい。サブレは味方を信じ、敵も信じ、その上で全てを大切にしようとする。しかし、サブレは全てを信じているわけではないだろう。それでもサブレが、人類を信じていようとする理由、疑いながら信じる理由を俺も知りたい。

サブレはさも当たり前のように答えた。

きっとそれはサブレにとって当たり前で、彼女にとっても当たり前だったのだろう。

二千万年かけても言い続けることができる『当たり前』で、変わらない信念。

「俺が信じないで誰が信じるんだよ」「私が信じないで誰が信じるの？」

俺にはサブレと見たことも無い彼女が重なって見えた気がする。

きつとPNO1にも見えたはずだ。

「誰も信じないからこそ、信じあえるように信じるだけさ」「誰も信じないからこそ、信じあえるように信じるだけよ」

変わらぬ正義、変わらぬ気持ち、貫く信念、信じる可能性を貫き続ける。

「俺はそれしかできないから」「私はそれしかできないから」

PNO1は告げる今回の本題を。

「……アカシックレコードは全ての真実を知っている。すべての歴史を知り、その上でサブレ・グリフォンとアイン・ダルトンを待っている。先に付いた者の答えを聞き、その答えを人類の総意として受け入れる。そのうえでアカシックレコードの居場所を知る人物の名前を君に教えておく。ゲイナー。彼がアカシックレコードの居場所を知る唯一の人類だ」

言い終えた途端後ろから物音がし、そのとたん一瞬だけ後ろを向いたのち何もいないことを確認し、そのままもう一度PN01の方を向くが、そこには既にPN01はおらず、人がいた面影すらない。

俺は周囲を見回して探したが、サブレは彼が立っていた場所の下にあるマンホールを見ていた。

「液体になることができるのか？あのPN01とかいう存在は。なるほど、地球外生命体……ね」

不穏な気持ちだけが俺の心に残っていた。

## マーズ・アタックⅡ 《戦いの幕開け》

6

ライドがどんな思いで数年を過ごしていたのかは想像しかできない。三日月に、昭弘に、シノに、オルガに守られた彼がどんな思い……悔しさをその身に宿していたのかなんてのは、シノから話を聞いていた俺にはわかっていたはずなのだ。

俺だって色んな人に守られ、支えられて生きている。しかし、サブレはきつとこう言うだろう。

「人ってというのは様々な人に支えられて生きているんだ。誰かから助けられることを負い目に、誰かに支えられることに後悔してはいけない」

俺達人間は誰かから支えられる事を忘れてはならないし、支えることができることを忘れてはならない。

俺達がそれをライドに教えておけばよかったと、のちに俺は後悔した。

しかし、そんな後悔もきつとなんの役にも立たないのだから。後悔すらも飲み込んで進んで行くしかない。

これはきつとそういう話なのだろう。

7

これから出立する俺、ビスケット・グリフォンを見送ろうとクッキーたちがそろって見送ってくれた。軍港には多くの戦艦が出立しており、乗組員が家族との別れの時を迎えていた。

泣き出す子供、覚悟を決めた表情で涙を瞳にため込む妻や夫、「がんばってこい」と見送る両親など、多くの人でにぎわっていた。

俺達の元にも多くの家族が見送りに来ている。絵里さんも明楽への見送りをしており、俺の元にもクッキーたちが見送りに来てくれた。いた。

クッキーは泣きながら俺の腰にくっついており、クラツカは泣くことを我慢しているが、それでも瞳に涙をため込みその表情は逆に面白さをかもしだしている。

「二人と暁は任せておきな。ちゃんと面倒を見てあげてから」

そういうおばあちゃんはいつものしかめっ面をしながら俺とアトラの方を見ている。

「暁も、おばあちゃんのいう事をちゃんと聞いてるのよ」

アトラは心配そうな表情を浮かべながら俺の足元にくつついている暁にそう言い聞かせる。いい加減おばあちゃんが暁を離す。

みんなが集まって出発の準備の確認をしていると、ユージンが後ろから俺の襟をつかんで引っ張ってしまう。

「ライドの事をよろしくな」

「分かってるよ」

ライドの事を頼むといわれたのは数日前の事だった。火星に行くという事をユージンに報告すると、ユージンはこっちの仕事が完全に落ち着いたら絶対追いつく。そういつて話を切り替え、ユージンはライドが心配だといった。

ライドはノブリス・ゴルドンを暗殺して以降、行方をくらませていた。ユージンはクーデリアさんの人脈を駆使して探していたが、見つかることは無かった。

その後もユージン達が探し出してはいたが、結果として見つかることは無かった。

俺の方でも別に探してはいたが結果として見つかることは無かった。

火星に行く際は俺が代わりに捜しておくという事をユージンに伝えていた。

「でも、あまり期待しないでよ？」

「分かってる。でも……あいつが一番つらい思いをしていたんだろうなって今なら分かるんだけどな。あいつが今どんな思いでいるのか知ってみたいんだけどな」

気にしても仕方がないとユージンと一緒に心に刻んでおく。

気が付いたら探すぐらいの気持ちでいこう。

「ビスケット！そろそろ行こうぜ」

そういつてヴァルハラへと足を進ませると、最後にみんなの方を向

くと、ようやく明楽がおかしさに気が付いたらしく大きな声でそれを指摘する。

「なんでサブレ先輩がそっちに居るんすか!？」

するとシノや周囲の人間もサブレが見送り側に立っていることに気が付いたみたいだ。周囲からサブレへのブーイングが降りかかるが、サブレは一度睨んだあとに理由を口に出した。

「エデンの追加ユニットがまだ調整中らしくてな。お前たちとは遅れて戦場に現れるから気にするな。俺が行かなくてもお前達なら生き残れるだろ」

すると、明楽が黙ってればいいのに、口を出してくる。

「俺達が死んでいた場合は？」

「地獄まで追い回して説教する」

「「怖い」」

「そして俺はお前たちを忘れて生きる」

「「ひどい!」」

「そう思うんなら生きてみるんだな」

そういつてサブレは行けつとジェスチャーで送り出す。みんなでヴァルハラに乗り込むと、それぞれの持ち場に付く。

俺は艦長席に座り、格納庫にある新型バルバトスの様子を確認する。

それ以外の場所をそれぞれ確認した後、俺は改めてメイデンに指示を出す。

「ヴァルハラ上昇」

ヴァルハラが上へと上昇していくと、目の前に多くの艦隊が並ぶように待っていた。次々と艦隊へと合流していく。

俺たちのヴァルハラが艦隊に合流して三十分後に火星進行総司令官から全員にむけてメツセージが届いた。

「火星進行総司令官の三番隊総隊長《オータム・ダン》である。先ほど全戦力がそろったと報告が上がった。先に向かっている先遣部隊が苦戦しているという事だ。我々の仕事は先遣部隊の撤退援護と降下部隊の掩護になる。今回の作戦には皆の命を懸けてもらう。今回の

作戦の合否で木星帝国との戦いの有利不利が決まる。皆！行くぞ！」  
一番後方に控えていた超大型空母級『テムシン』が十隻ほど見える。  
テムシン最大の特徴は何を言ってもその大きさである。スキップ  
ジャック級のざつと倍以上で、格納できるモビルスーツ数は30機ほ  
ど。

そんなテムシンが十隻も控えている姿は壮観という言葉が一番  
合っているだろう。それ以外にもヴァルハラと同じくユグドラシル  
級が二十隻ほど、残りはハーフビーク級クラスが四十隻も配置されて  
いる。

「すごい……どこからこんだけの戦力を」

イオリは圧倒され、メアリーですら声を失っているほどだ。レレも  
驚きを隠せていない。

「では、全艦隊！惑星間航行システムを起動後最大出力で火星を目指  
す！」

旗艦からの指示のもとハーフビーク級がはじめに消えていき、次に  
ヴァルハラを含めたユグドラシル級が飛んでいく。

流れていく景色はまるで流れ星のようにも見えた。

8

見送りを済ませた者が一人一人と解散するように散開していく。  
そんな中俺、サブレ・グリフォンはユージン・セブンスタークと共に  
開発局へと足を運んでいた。

そんな中、ユージン・セブンスタークはゆっくりと口を開き始める。  
「全ての作戦が失敗して、三日月達のお陰で俺達は生きることが  
できる。オルガの最後の命令を聞くことができた。アジーさん達が  
地球まで送ってくれたおかげで今を生きていける。それに、お前たち  
がアリアンロッドと戦ってくれたから生活が保障されている。あの  
時、アジーさん達に助けられた時、マクマードさんにイサリビを渡し  
た。今後の俺達ももっていても必要のないものだしな。下手に戦力  
を持っていたら何されるかわからなかったし。聞きてえんだが、どこ  
で『イサリビ』を見付けたんだ？」

どこでと尋ねられるとその辺でというしかないが。本当にその辺

だったんだけどな。

「どこって……その辺だけど。マクマードという名前で一方的にメツセージが送られてきたのが失踪する直前だった」

テイワズが失踪する直前、もつと言えらばラスタルが暗殺される直前だった。

「場所の指定と、その場所に『イサリビ』などの元鉄華団が使用していたであろう道具が一式揃って置かれていた。勿論近くに歳星はいなかった」

時と場合を考えればおそらく木星帝国がラスタルを暗殺するとわかった為、姿を隠すところだったのだろう。

「マクマードさんはラスタルが暗殺されるかもというのは分かったたのか？」

「おそらくはな、暗殺しようとしている奴らの中に元ジャスレイの部下が絡んでいるとわかったんだうな。まあ、止めることには失敗したわけだが」

だから姿を消す際になるべく鉄華団のメンバーに迷惑が掛からないよう、EDMに証拠になるようなものを引き取ってもらったのだろう。

ユージンは小声でぶつぶつと呟き始める。

そもそも、俺達が急に開発局に行くことになったのかというと、開発局ではユージンがひっそりと頼んでいたのが『イサリビ』を改良してほしいという事だった。

元々は鉄華郵便局が各地への移動の際に使用する予定であった。

しかし、ユージンはいぎとなったらクーデリア達だけでも助け出したいといい、その他の改良にも手を出した。

二人で黙って開発局に入ると、指示された格納庫まで移動している。

開発局内は閑散としており、ごく一部の人間はエデンの追加ユニットの最終調整を行っていた。

そして、目的地へとたどり着くと、ソニアはいつもの笑顔で俺達を出迎える。

「いらっしやい。さあ、見て言ってちょうだい。これが『イサリビ改』よ」

そういつて目の前に現れたのはイサリビと呼ばれた戦艦であった。大まかな形こそ変わっていないが、細部の形状や大きさが変わっている。

まず頭部がとがった帽子のようなデザインに変わっており、ついていた鉄華団のマークも鉄華郵便局のマークに変更されている。

モビルスーツを格納する場所にはより多くの荷物も入れられるように広く作られており、対ビームコーティングも表面につけられており、左右に惑星間航行を前提とした追加ユニットがつけられている。

元々地味な色であったが、今回は薄緑に変更されている。まあ、どっちもどっちな感じであるが。

「おおー、頭部が変わっているだけに結構変わったように見えるな」「でしょ？結構内部も変わっているのよ。まあ、実際は中を見てもらってからにしておうかしら」

そういつて中の方に案内していく。中は薄暗いイメージが多少あったが、現在は白で塗装されなおされていて、中身の設備もできる限り最新式に変更されている。

歩く靴音がコツコツと心地いい。

壁を触ってみると、ヴァルハラにも通じる滑らかな触り心地。

まずブリッジに辿り着くと、ブリッジの内装すらがらりと変わっており、椅子もふわふわのものに変わっており、ここだけで寝られそうだ。

ブリッジの画面も昔とまるで違うものである。

一体誰が金を出したんだか。

「もちろん私のポケットマネーよ」

いい笑顔で返してくるソニア。あんたの何がそこまでさせるんだ？

「私って基本的に金の使い道なんて大してないのよね。それに、鉄華郵便局にはこれからもごひいきにしてもらいたいしね」

使いまわすつむりの目をユージンに向け、ユージンは深く頭を下げ



つつお礼の言葉の口にする。

そんなもつたいたいことに金を使いたいとは思わない俺としては素直に感心してしまう。

あちらこちらを回った後に、イサリビ改を降りる。すると、やせ細ったような男がよろよろとした足つきで近づいてきた。

その辺の路上で近づいてきたのだったら速攻で捕まえて尋問するけど。目的を吐くまで。

そんな勝手な妄想を端に置いておくとして、やせ細った男はソニアに報告をする。

「ソニア開発局長……完成しました」

「そう……今にも死にそうな顔ね」

そう思うなら手伝ってやればいいのに。あんたが手伝うか手伝わないかで仕事が終わる時間や負担が変わってくるだろうに。

そんなつもりなど全く無いソニアは男を端に追いやってそのまま例の追加ユニットの元へと急ぐ。

さすがにここからはユージンを案内させるわけにはいかないのだから、男に外まで案内させるところを見送ってそのままエレベーターでエデンの元へと移動していく。

広い部屋にガンダムエデンが寂しそうにぽつりと立っていた。

寂しい部屋だな。

そう思っていると、エデンの周りの床が急に開き地面から大きな追加ユニットと呼ばれている兵器が姿を現した。

追加ユニットは二つの大型ブースター一体式の戦艦の主砲級のバスター砲。さらに小型化された上方には拡散ビーム砲が二丁装備され、下にはつかアーム付きの大型ビームサーベルと大気圏突破できるようにと付けられた大型シールドが付いている。

「追加ユニットの名前は……!?!」

思い切って宣言しようとしているという事は今決めようとしているのだろうか。だったら……!!

「名前は『バハムート』だな」

「……シクシク」

名前を付けられる権利を奪われたのか、涙を流しその場で崩れ落ちてしまうソニア。勝ち誇る俺。そして、それを微妙な表情で見守る開発局員達。

実にカオスな環境が出来上がっていた。

しかし、完成したのなら俺はさっさと前線に向かうだけだ。そう思いエデンに乗り込もうとしたところで開発局員が総出で俺を拘束しようとして腰回りにまとわりついてくる。

「鬱陶しい!!」

「駄目なんです!!まだドッキングした後、システムの接続、エネルギーがちやんと送られているかどうかの確認があるんです」

「分かったから離れる!!」

蹴つ飛ばそうかとしてしていると開発局員達はすぐにドッキングと最後のチエックに入っていく。

俺は通り道で邪魔になっているソニアに一言浴びせてパイロットスーツへと着替えていく。

エデンの元へと戻るとすっかり元気になったソニアが立ち尽くしていた。

回復するのが速いな。

「気を付けて行ってね。まあ、私もついていくかもしれないけどね」

「まさか!ハハハ!」

「そうよね!ウフフ!」

嫌な笑いが周囲に寒気を誘う。

まさかソニアがこいつの中に入っについてくるわけじゃあるまいに。

そう思いエデンが置かれている格納庫へと移動し、コックピットに入ると、外から開発局員達が「もう少しだけお待ちください」と連絡を入れてくる。

俺は各部へのエネルギー供給率の確認とシステムの最終チエックを済ませていると、十分ほどで開発局員達が解散して部屋から出ていく。

最後に準備が整いましたという連絡を入れると足場が上へと上

がっていく。

時間を確認すると兄さん達が出てから五時間も経過していた。結構時間が経ったな。これ以上時間がかかるわけにはいかならな。真つ黒な宇宙と星々が見えてくると、そのまま俺は進行方向へと向く。

「ガンダムエネン！バハムート！サブレ・グリフォン！出るぞ！」

9

火星から最も遠い資源衛星を中心に艦隊戦が行われていた。EDMは半壊仕掛けていた先遣部隊を撤退させ、本体を広範囲に展開させた。それに対して木星帝国は囲むように陣形を広げていた。

前方に展開していた両方の戦艦であるハーフビーク級と木星帝国開発のハーフビーク級と類似する帝王級と呼ばれる戦艦がぶつかり合っていた。

もうじき激突してから五時間が経過しようとしていた。

EDMの旗艦内で怒号が飛び交う。

「ハーフビーク級が三隻撃沈！左翼が押され始めています！」

「左翼には耐えるよう伝えファントムブラッド隊にガンダムを一機援護に向かわせるように伝えろ！その際に右翼は一気に押せ！中央の艦隊は弾幕が薄くなっているぞ！」

するとヴァルハラ内でも同じように怒号が飛び交い始める。

まず、レレが旗艦からの情報をビスケットに伝える。

「旗艦から連絡！ガンダムを一機左翼援護に向かわせしとのこと」

「イオリ！マークに援護に向かうように伝えて。あと、明楽にブルーレイが撤退したらこちらにいったん戻る様にと伝えて！」

「了解！」

「メアリーはさらに前方の艦隊の援護射撃に入る様に伝えて！このまま中央が押される可能性がある！全員持ちこたえて！ここが正念場だ!!」

同じとき、木星帝国旗艦であるEDMのテムシンと同じ大きさの大型空母級クラスの戦艦である『天照』の一番艦で司令官である若い眼鏡をかけた男が怒号を上げていた。

「左翼には押し返させるなど伝えろ！ガンダムは何をしているんだ！？」

「ガンダム両機は同じガンダム・フレイム相手に抑えられています！」  
司令官は忌々しそうな表情を浮かべ、下唇をかむ。

「忌々しい部隊だな！アインが参加してくればいいものを！」

しかし、アインはククナの命令で降下の準備をしていた。そんなクナはさらに後方で待機していた専用巡洋艦『素戔嗚』のブリッジで戦局を見ていた。

腕を組み視線は戦場の光をしっかりとらえ、壁に背を預けているとブリッジにククナが入ってきた。

「戦局の方はどう？面白い何かは起きてる？」

「別に、基本的には我々の予想通りの結果だ。我々は降下することでいいのか？このままではこちらの予想通り彼らに降下されてしまうが？」

「いいのよ。テラの予想通りに動くんなんて面白くないでしょ？それにテラを出し抜かなくちゃいけないのだから」

そういつてブリッジから出ていくククナを見送ると、アインはブリッジの通信士に連絡事項を伝えて去る。

「アルミリアとジャックにガンダムエデンが現れたら撤退するようにと伝えろ」

ククナに追いつき、エレベーターへの通路に入ると、壁に背を預けている黒い中世の騎士をイメージさせる人物がいた。

「あら黒衣の騎士さんじゃない。あなたも降りる？」

「あなたの指示に従う。それがあなたにもらった仮初の命に対する対価だ」

アインは一睨みしていると黒衣の騎士はそれを涼しそうにしている。

「じゃあ、一緒に降りましょう」

そういつてエレベーターに乗り込むころ、戦場ではある変化が訪れようとしていた。

EDMの全戦艦が後方からの存在に反応した。

サブレチルドレンのメンバーも、ビスケットも、みんなも同じように後方から来たその存在の名を知っている。

シノが叫び、明樂が反応する。

「遅いんだよー！サブレ!!」

ガンダムエデンのバスター砲が中央の敵モビルスーツ隊の部隊を蹴散らしてそのまま突っ込んでいく。

## マーズ・アタックⅢ 《赤い大地》

10

俺達鉄華団にとって仲間とは家族であり、共に暮らす尊い親類でもある。しかし、それは結果的にオルガ・イツカ——鉄華団の団長を止める者が居なかったという事である。

だから、鉄華団に必要なだったのは中立的な立場から常に意見が言える人間だったのかもしれない。例えば、サブレのようなバランスーが必要だったのかもしれない。

サブレはある意味そういう意味では非常に適任な人間かもしれない。

サブレからすれば敵は敵、味方は味方、人は人である。

差別をしない、区別をしない、人を見下さないし見上げない。まあ、冗談ではよくするけど。

常にバランスーとしての機能がサブレにはある。だから……そういう存在を常にそばに置いておくことは鉄華団にとってプラスになるはずなのだ。

だとしたら、俺達鉄華団にとって一体どこでミスをしてしまったのだろう。

俺がサブレを紹介していれば解決したのだろうか？

それだけでは終わらないだろう。

きつとサブレはこう言う。

「俺がいたから鉄華団を救えなかつたというのは過大評価のしすぎだな。結局は見本となる大人がいるかどうかだろ」

そうだろう。過大評価のしすぎというものだ。サブレにそれ以上の何かを求めるのは酷と言う者だろう。

しかし、それでも俺は考えてしまうサブレならと……もしかしたら、出会ったすべての存在は彼に期待するのかもしれない。

サブレにはそんな期待を乗り越えてくれる何かがある。

そう考えたとき、俺はライドと言う名前の若者を思い出す。俺ではなくきつとサブレと先に出会っていればあんな結末にはならないの

かもしれない。

そんな考えを抱いていても今更なことなのだろう。

サブレもこの時はかなりの激戦の途中だったのだから。

結局俺はあの頃からちっとも成長していないという事なのかもしれない。

11

ゲイナーが腰を落ち着ける施設はいくつか存在するが、現在はクリュセ郊外に存在する溪谷の中に作られた施設から動く気配がない。

元鉄華団のメンバーも少しづつではあるが集まりつつあった。

くすんだ赤に近い茶髪のダンテと呼ばれた若者がほかの同じ孤児院で過ごしていた子供たちと一緒に避難していた。

そんなダンテは未だベットから動けずにいた。お互いに言葉はいらず拳をぶつけ合う事であたえ合う。

子供達が部屋の中に入っていく中、何気なく広げた一言が周囲に不安を広げた。

「そういうえばクーデリアさんがいるって聞いたんだけど、どこにいますか？」

チャドは「さあ？そういうえば最近見てないな」そんなことを言いながら周囲を見回す。

そもそもチャドがいる小さい部屋にはダンテや子供たち以外に他に居ない。だからこそだろうが廊下を偶然歩いていたライドへと話が移る。

「ライド。クーデリアさんいなかったか？ダンテが来たって報告したんですけど？」

ライドは「そういうえば見てないっすね」と言いつつ別の部屋へと探しに行く、少しづつ物騒な空気が漂い始める。

最終的にチャドの部屋の前でライド、三日月、コットン、ゲイナーがしゃべり始めた。

まずコットンが「やはりどこにもいませんね」と冷静に状況分析結果を口にした。

多少焦り気味でまくしたてるのはライドだった。

「やばいですよ！あの人は木星帝国から狙われているんだから。このままだとテラが動きかねないっすよ。今いる場所だつてばれてしま

う」  
そんな状況でも落ち着いているのはゲイナーだった。

「落ち着けライド。彼女が行きそうな場所はクリユセと元鉄華団本部か。コットンお前はモンタークに連絡を取って捜索に協力してもらえ。三日月、お前はクリユセに向かい捜索しろ。ライド、お前は念のために鉄華団本部へと足を向ける。あそこにいる可能性もあるからな」

全員がうなずき、閑散していくなかダンテがゲイナーにおどおどと話しかける。

「あのく俺達もなんかできませんか？子供たちを預かってもらうにあたってなんかしたいんですけど」

「そうじゃの……」

ゲイナーは嫌な微笑みを浮かべながらダンテに近づいていった。

コトンはバイクを走らせながら乾いた大地を疾走していた。

メイド服にフルフェイスのヘルメットをかぶり、手袋を被っているどこのカリスマメイドなのかと誤解してしまうだろう。

少しづつ周囲にモバイルスーツの残骸が増えていくと、その中心にガフエイン・マークIIが立ち尽くしていた。

その辺のモバイルスーツではモンタークの相手にはならないのだろう。しかし、モンターク自身の実力もだろうが、モバイルスーツ自体の性能の良さがにじみ出ている。

汎用性が高く、装備も扱いやすいように調整している点も評価できる。

「なるほど、ゲイナー様がおっしゃってた通りですか。ソニア……ゲイナー様が「いずれは業界に名を残せるほどの人物」でしたか？」

足元にバイクを止め、モンタークはようやくコットンの存在に気が付きモバイルスーツから降りる。

モバイルスーツの足に背を預け腕を組みコットンの話を聞いていた。ある程度話を聞いたところでコトンは「どうですか？」と聞き始め



た。

「あなたはクーデリア嬢がどこに行つたか分かりますか？」

そう尋ねられたモンタークは腕組みをしたまま多少悩み自身の考えを口にする。

「この場合クーデリア嬢がどこに向かいたいかという事だが、おそらく原因はこの前にクリュセー帯で行われた摘発だろう。あれはクーデリア嬢関連の人間を捕まえると言う物だったからな。かなりの人間が捕まって收容されたと聞いた」

そうなのだ、クリュセに居たクーデリア関連の人間がほぼ全員が捕まってしまったのだ。

ナデイ・雪之丞・カサツパ、メリビット・ステープルトン、デクスター・キュラスター、ククビータ・ウーグなどが既に捕まっており、クリュセ郊外にある收容所と砂漠地帯に作られた高重力作業施設へと分けて捕まってしまった。

メリビットなどの女性は收容所に雪之丞などの男性は高重力作業施設で強制労働に使われているだろう。

モンタークが言っているのはそれが理由なのだろうという事はコットンにも把握できた。

「あれを開放してもらおう。彼女からすれば彼らは自分の行動の犠牲者なのだからな。心を痛めていてもおかしいことはあるまい。むしろ、彼女の性格を考えれば今すぐにでも助けに行きたいと思うだろうな」  
その通りではあるのだろう。そんな中モンタークは気になってしまったことがあった。

「そういえば、彼等には子供がいるのではなかったか？まさかではあるが子供達も收容されたのか？」

モンタークは内心穏やかではいらなかった。

もしそうであれば自分だけでも助けに行くべきだと考えたからだ。  
「いいえ、彼らの子供はダンテという男の人が引き取って私達の施設に連れてきましたよ」

モンタークは「ならいい」と落ち着き、話の軸を戻すことにした。  
「さて……そもそも、どうして木星帝国が彼らを捕まえたのかという

事だが、理由を探れば『クーデリア・藍那・バーンスタイン』その者を捕まえてでも何かをしたいんだろう。と、考えれば理由は私達にはわかってはいるはずだ」

コットンにもその理由は把握していた。だからこそ、ゲイナー一派はクリュセ攻略を進めていた。

クーデリア・藍那・バーンスタインがクリュセにある議会に隠したとされる二枚存在するカードキー。マクマードが失踪前にクーデリアに託したカードキーは二枚。そのうちの一枚はヤマギという若者に託しそのまま彼と共に行方不明になってしまった。おそらくは今頃マクマードの手に渡ったころだろう。

しかし、もう一つはいまだにクーデリアがもっているはずだった。しかし、クーデリアをゲイナー一派が保護した際には彼女はもっていなかった。

なら木星帝国が先に見つける可能性が高いだろう。その為にクリュセを真つ先に抑えたのだから。しかし、この段階でクーデリアを呼び寄せるような作戦を立てるわけがないだろう。

だとするなら木星帝国はいまだにカードキーを見付けていないのでは？という結論になる。

「しかし、木星帝国がカードキーを求めているとは限りませんよ」

「そうだろうな。しかし、君だって分かっているのだろう。木星帝国がコロニーレーザーを完成させたにもかかわらず使用しない理由。そこにクーデリアの元に届けられたカードキーを合わせれば理屈としては十分だろう。だから求めているのだろう」

「なら、カードキーの内の一枚はコロニーレーザー起動もしくは使用するための者なのでしょう。という事は……」

「もう一枚は自爆か破壊するためのカードキーという事だろうか」

二人の間に沈黙が続き、モニターはモビルスーツの方に歩き出す。

「なら私もクリュセに向かおう。君はどうするんだ？」

「私は二つの収容施設を見て回ります。では」

そういつて先にコットンはバイクに乗り込んでそのまま姿を消し

てしまった。

モンタークもモビルスーツに乗り込んでそのまま溪谷の隙間を通りながらクリュセに近づいていく。

「しかし、彼女が捕まる前にこちらも行動するべきなのだろうな」

そう思っていると空でまばゆい明かりが光った気がした。本格的にEDMと木星帝国の戦いが激化していることに誰もが気づきつつある。

モンタークはクリュセまでさらに近づいていく。

12

エデンの追加ユニットのバハムートの拡散ビーム砲の一撃が正面に展開していたモビルスーツ隊を襲った。空いてしまった敵陣形に強引な形で入り込んでいき、大型ビームサーベルでさらに艦隊を薙ぎ払う。

そこからUターンしていったん戻り、左右にバスター砲を放つ。

陣形に縦の穴が開き、それを見た司令官はユグドラシル級に指示を飛ばす。

「ユグドラシル級は敵陣の穴を突破し火星に降下しろ！」

指示通りにユグドラシル級が動き始め、同時にビスケットもモビルスーツ隊に指示を出す。

「明楽とシノはサブレと一緒に突破口を開いて。他のモビルスーツは敵モビルスーツ隊をユグドラシル級に近づかないように撃退して！」

するとサブレはビームサーベルで切り刻みつつ、拡散ビーム砲で敵を蹴散らしていく。明楽やシノもサブレと共に敵モビルスーツ隊を蹴散らしていく。

そんな姿を下唇を噛み締めながら木星帝国の司令は悔しそうに地団駄を踏みそうになっている。

EDMのモビルスーツ隊の一部が強引に味方のモビルスーツ隊を蹴散らしながら突き進んでいく姿を見ていくしかできない。

そんな戦いの最中に一機のシャトルが大気圏を突破していく姿を誰もが見失っていた。

大気圏を突破していくシャトルの中では戦いがかすかに確認でき、

エデンが大きな追加ユニットが恐ろしい勢いで進撃していく姿をアインやククナは目撃していた。

無事シャトルは大気圏を突破したらしい彼らの視界は赤い大地が広がっていて、そんな中クリュセの様子が少しづつ拡大していくようだった。

黒い騎士は彼らの後ろでそのクリュセの様子を眺めながら後ろに格納してきた自分用のガンダムが気になっていた。

シャトルの格納庫は大きくモビルスーツが四機も入れられており、左上からエンペラーガンダム、右上にガンダム・レッドクイーン、右下にガンダム・ブルーレイが置かれており、左下に新型の黒いガンダムが置かれていた。

全身が黒と所々に金色で配色されており、全身はドラゴンと騎士をイメージした装飾がされており、シールドにライフルなどの基本装備を押さえっており、背中にはドラゴンの翼のような装備が付いている。

その名を『ガンダム・ブラックレーベン』であり、黒い騎士が乗り込む機体である。

そんな機体と共に赤い大地に降り立とうとしていた。

様々な思惑が交わり、様々な結末を彩ろうとしていた。

13

一人の女性はクリュセの路地裏から別の路地裏へと移動していく。そして、たどり着いたところはかつて鉄華団の元メンバーたちが仕事をしていた工場だった。活気だっていたころとは違い、会社の社長が捕まった今工場は閑散としている。

彼女はその奥で隠れていた自分達の兄弟に買ってきた食べ物を与える。

彼女はこのところの強制摘発に心を痛めていた。

たとえ自分が知らない人たちが捕まって連れていくところを目撃していた。ここでの出来事も彼女からすれば他人事ではなかった。

だからと言って彼女にはどうすることもできなかった。力の無い自分を疎ましく思い、行動もしてくれない周囲に絶望すらした。

そんな彼女が後に『革命の乙女』と呼ばれる人になるとはだれも思わない。彼女ですら思っていないかった。

そんな彼女の名前は『アスナ・エール』。明るいブロンズヘアが似合う大人しい女性だった。

テトラの元に大量のデータが集まっており、その一部は収容した人物のリストであった。

「で？この雪之丞という男はついたのね？」

スーツ姿の秘書は手元に持っているタブレットをいじりながら報告を上げる。

「はい。先ほど高重力労働施設の方に移しました。テトラ様の予想通りで体力的にも問題なさそうですので。しかし、いいのですか？最悪の場合は一か月ほどで過労死してしまいかねない場所ですよ？」

テトラは悪そうな微笑みを浮かべながら答えた。

「いいですよ。あそこはパーティクルドライブのパーツを製造しているのだから必然でしょ？元テイワズが使っていた労働者もそちらに送っても足りないという話だったからね。ちょうどいいでしょ？それに雪之丞という男は元鉄華団のメンバーなのでしょ？」

「はい。中でも団長や周辺のメンバーとも仲がとてもよかったようですね」

テトラなりの復讐の一つである。

テラは「やれやれ」と小声でつぶやきつつベランダに出ていき、空を見上げる。

「あの少年が近くまで来ようとしているか……もうじきクーデリア・藍那・バースタインも近くまで来るだろう。知り合いを取り戻すには自分がここに来る必要があるのだから。特にあんな情報を流されたのでは彼女はたまったものではあるまい」

テラが彼女にひそかに流した情報とは、雪之丞の施設移送である。この辺に存在する最も過酷な労働施設へ移送したという報告は彼女の気持ちを揺らがせるには十分だった。

その際に彼女へとひそかに送ったメールにすぐにクリュセ議会まで来るようにと書かれていた。

簡単に殺しては意味がない、だから耐えうるだろうギリギリの人選が彼であった。

簡単には殺したくないというテトラの願いとクーデリアとサブレを誘う出すうえで必要な人選。

テトラの「苦しめて殺してやりたい」という鉄華団への憎しみがとどまるところを知らない。

ふとテラの視界に多くの流れ星のような降下線が見えた気がした。多くのEDMの主力級であるユグドラシル級が流れ星のような勢いで降りていく。木星帝国の艦隊を突破して彼らは火星に辿り着いたのだろう。

テラは切られたはずの目をゆっくり開いた。その目はまるでコンピュータの光回線のように輝いていた。

そんな中雪之丞は護送車で高重力労働施設へとたどり着いた。

つい数時間前に分かれたデクスターとは違う、木星帝国の士官が言うところの「最も過酷な作業施設」と呼ばれているその場所へ行くことへの不安は雪之丞は無かった。

別に罰だとか罪だとか考えているわけでは無い。

雪之丞の体の自由を奪っている拘束衣に足には足枷、首に爆弾付きの首輪がつけられている姿はまるで罪人のようである。

しかし、自分が苦しむ分だけメリビット達を楽にしてあげられるのならそれに越したことは無いと考えていた。

というよりは、それが彼がテトラという女性に出した条件だった。捕まっている自分の知人の中で自分が一番この労働フロアに耐えられる可能性があるという選抜だった。せめて、EDMの主力隊がメリビット達を助けてくれるまで耐えると決めていた。

護送車が止まり雪之丞は外へと出される中、目の前に存在感を放つ大きなコンクリートのような質感の重苦しい建物を見た途端、全身に嫌な汗が流れ始める。

何かをこの施設から感じ取り始めているのかもしれない。

一か月前に工場前で出会ったのアインという名の若者が言っていたことは真実なのかもしれない。

「あなたは一か月後にある選択肢を突きつけられる。そのうちあなたが選べるには自分が助かる簡単な道と、みんなが助かる代わりに死に等しい苦しみをあなたが受ける道。あなたはどっちを選ぶのかな？」  
その言葉通りに雪之丞には過酷な選択肢が目の前に現れた。

まるで雪之丞には自分の身に降りかかる災いを予言しているように見えた。

死ぬかもしれない。二度と愛する人に会えないかもしれない。それでも、大切な人たちを守れるのならっと考えて彼は前に歩き出そうとする。

しかし、彼の視界の上には複数の流れ星が流れていくのが見えた。  
「後は頼んだぞ。ビスケット」

彼は施設へと足を踏み込んでいく。

そして……彼が生きてこの施設を出る日は無かった。

14

木星帝国の艦隊を無事突破しそのままユグドラシル級が一斉にある場所目掛けて降下し始める。

しかし、そんなユグドラシル級を襲ったのはトルネード級の砂嵐である。艦隊ならともかく、モビルスーツは少しでも油断すればあつという間に吹っ飛んでいきそうだった。

バハムートのまま降りていくサブレもまた視界が最悪になってしまった状況でもデータを頼りに降りていく。大気圏を突破した艦からブリッジの視界を開いていく。

ビスケット達の視界の正面にはマークのカノンがヴァルハラを使つてうまく降下している姿が有った。

「ちやつかりしてるな〜」

そんな風に感心していると、急に通信回線がつながると、渉、明楽、レオの順に悲鳴が聞こえてきた。

「ぎゃあああー！」

「うわああー！」

「なにする!?!」

そして、マーク「はあ?」という疑問声と一緒に彼の機体は何か

ぶつかって一緒に吹っ飛んでいった。

「え!?何々!?今の何!?」

イオリやメアリーが必死になって何なのかを探していると、レレが小さな声で「あつ!」とつぶやきまるでやってしまったかのように声を出す。

「エデン、カノン、シムカス、システム、ウイングソードの反応が範囲外へと消えていきました」

そんな中サラがジョシユアへと通信回線を開き、正面の画面では気まずそうに顔を背けるジョシユアと怒りをにじませるサラが映されていた。

「まさか!?ジョシユア!君なの!?今の!」

ビスケットが驚きを隠せないとばかりに前のめりになり、サラが怒りを抑えながら声を震わせる。

「その通りです。本当に!」

砂嵐の向こう側へと消えていった彼らと出会うのはそれなりに経過してからだった。



## マーズ・アタックⅣ 《憧れる若者》

15

後悔先に立たず。既に終わったことを、いくら後で悔やんでも取り返しがつかないという事の意である。

後悔と聞いて思い至ることが多すぎて俺——、ビスケツト・グリフオンには過ぎた行為だ。

オルガの事、家族の事、鉄華団の事……そして、ライドの事。

もし……なんて言い方は彼らに対して大変失礼だと思う。しかし、そう考えずにはいられない。

俺には多くを求めることなど無理なことだし、選べるほど偉い人間ではない。しかし、もし、あの日の俺に何かを選べる権利があるのだとすれば、俺はオルガを仲間たちを救いたかった。

鉄華団が減んでいなければ、俺はどこに所属していてもどうでもよかった。

たとえ……鉄華団と永遠に会えなくなっても、それでも俺はよかった。

彼らが生きて、夢に生き、未来に生き、仲間と生きてほしい。欲しかった……。

そんな後悔もむしろ彼等には失礼になるのかもしれない。オルガに、三日月に、昭弘に、シノに、ユージンに、タカキに、ヤマギに、雪之丞さんに、アトラに……そして、ライドに失礼なのだろう。

サブレならきつと——、「後悔するぐらいならするなって話だろ？ やって後悔するか、やらずに後悔するかだつと言われているけれど、本当にいいのはやって後悔しないことだ。兄さんはやって後悔して、やらずに後悔しているな。なら今度はやって後悔しないのか？」と笑いながらいいそうだ。

だけど、そんな話すら俺には後の祭りである。

「無理だよ。俺はきつと後悔しながら生きている。これからも後悔していくし、仕方がない事なんだよ」

俺はそう言う。言い訳のように、ぶつぶつと文句のように言い続け

る。しかし、サブレはきつとそんな俺の言葉を聞くと爆笑しながら言うのだろう。

「それこそ言い訳だろ？面白い言い訳だと思うよ。だって、後悔して生きていくんだって決めていけば後悔しないもんな。それも後悔しない方法だよ」

つと俺に言ってくれる。しかし、そんな言葉の後にサブレはこう言う。

「でも、それでも兄さんは後悔すると思うよ。絶対に」

その通りだ。そんな風に後悔しないのなら俺はここにはいない。

サブレの話を断ったことへの後悔、オルガを責めてしまったことへの後悔、鉄華団を守れなかった事への後悔……言い出したらきりがない。

結局は口だけの男という事だろう。

だけど……そんな行動も後悔に変わってしまうかもしれない。

16

十年以上前の話。

まだ、鉄華団ができる前のCGSと略称していた『クリュセ・ガード・セキュリティー』がまだ存在していたころの話。

ビスケット達は新人の挨拶に赴く時、彼らに出会った。

薄暗い部屋の中に入っていくのは、参番隊長オルガ・イツカ、他メンバーである三日月・オーガス、ビスケット・グリフォン、ユージン・セブンスターク、ノルバ・シノである。

この頃は、まだ昭弘・アルトランドとはあまり交流が無く、大概行動するのはこのメンバーであった。

薄暗い部屋の扉をゆっくり開き、オルガは許可を得る前にづかづかと入っていく、すると案の定であるが一軍の男たちは睨むような目でオルガを見ていた。

「参番隊長オルガ・イツカ！新人を回収しにまいりました」

しらを切る様にそっくり続けるオルガの態度に一軍の男たちは苛立つを隠しきれずにいた。内心ビスケットはハラハラしながら事の成り行きを見守っていたが、一軍の男たちは舌打ちをしながら立ち

去っていった。

「もう……ハラハラするじゃないか！」

ビスケットの言葉に肩をすくめながらニヒルな表情を決めつつ口を開くオルガ。

「いいんだよ。しらを切るぐらいの気持ちで十分だ。あんな奴らに文句を言うだけ無駄だろ？」

「そういう問題じゃないんだよ！もう少し頭を下げるという行動を出来ないの？」

ビスケットの言葉に反応したのは反抗期真っ盛りのユージンであった。嫌そうな表情を浮かべながらビスケットにまさしく反抗的なことを言う。

「俺はごめんだね……あんなおっさん共に頭を下げるぐらいなら死んだほうがましだね。大体ビスケット！おまえはあ！？痛い痛い！三日月い！！」

ビスケットにとっては死角になっていてよく見えていないが、三日月がユージンの左耳を思いつきりつかんで引つ張っていた。

「ユージン？俺喧嘩はいやだな？」

すると、シノが三日月の肩を軽く叩きながらなだめる。

「こんなのいつもの事じゃねえか？それにビスケットの奴だつて気にしてねえだろ？なあ？」

「う、うん。だからいいよ」

三日月は「そっか……」と言いながら中々手を離さない。ユージンは「痛い痛い！耳が取れちまう！」と叫んでいる。すると、オルガが苦笑いを浮かべながら三日月に指摘する。

「いい加減手を離してやらないと、ユージンの左耳が取れちまうぞ。

ミカ」

三日月は「あ？ごめん」つと一言謝るが、ユージンは左耳を押さえたままうずくまってしまう。

オルガは目の前に気を失っている何人かに目を付ける。その中に、タカキ、ヤマギ……ライドがいた。

それが、彼等との出会いであった。

ライド達にとって三日月は憧れる存在だった。

モビルワーカーの訓練はいつも激しく、左右に激しく動き回りペイント弾をあちらこちらに撃ちまくる。一軍の奴らよりよっぽど憧れる存在である。

特に三日月・オーガスは彼らの中で飛びぬけて強い憧れの的になっていた。しかし、そんな彼らの中で異彩を放っていたのが、ビスケット・グリフォンであった。

直接戦う術を持たない彼らからすれば、計算や文字の読み書きができるビスケットはどう接すればいいのか分からなかった。

タブレットを使って作業しているビスケットに初めて憧れの目を向けた者は誰もいなかった。しかし、三日月やオルガ、シノやユージが良く話しかける姿を見ると自然と彼等どのように憧れの存在に見られるようになった。

そんな彼等へのあこがれを強くする少年がいた。

ライド・マツス。タカキ達と同じ時期に入ってきた新人だった。

ビスケットは三日月や昭弘に人一倍強い憧れを抱く少年は彼らを追いかけるようになる。しかし、彼からすれば遙か高みに存在する三日月に追いつける気がまるでなかった。

それは鉄華団が存在しなくなっただけから決して変わることは無かった。

死んだと思っていた三日月に会えた時の喜びは今まで経験したことが無かった。だって……彼はライドにとって最も強く、優しい存在だったからだ。

しかし、三日月は変わってしまった。

戦いの後遺症で喋ることすらできない体になっていた。

彼は悪魔に体の機能のほぼすべてを捧げてしまっていて、結果からすれば体の機能のほとんどを機械の力で補っていた。

憧れの行きつく先、機械で体の機能のすべてを補い、命を繋いだのはもう一人の仲間のお陰でもあった。

三日月の脳は深刻なダメージを受けていた。

そんな時ゲイナーはある手法を取ることで三日月と昭弘を救うこ

とにした。

左側の脳を三日月、右側の脳を昭弘のモノを使う事で二人を三日月の体を使って生き返らせた。

だから、ある意味二人は一つの体を使って生きています。

しかし、その真実はライドには到底受け止めきれなかった。

憧れた者達の末路、憧れる若者の心情はあまりにも辛くめを背けたくなってしまう。しゃべることも無く、何を思っているのかもわからない。

「三日月さん……昭弘さん……二人は今何を思っているんすか？」

しかし、彼らはその答えには答えない。

それでもライドは追いかけるいつの日か追いつける日が来ると信じて。

そして、ライドは鉄華団本部の近くまで近づいていた。

その時、鉄華団本部の周辺は強力な砂嵐と磁気嵐に襲われていた。

17

「反省しているの？ジョシユア」

「はい。しています。ビスケツト隊長」

絶対していなかった。しているはずがなかった。

立って反省させても一向に変化が無かったので、今度は正座させて反省させてみたが、もじもじするだけでまるで変化が無い。

どうすれば反省させられるのだろうか？

腕を組んで悩んでいるとジョシユアは俺達の予想の斜め上の事を口にし始めた。

「靴底がお尻に当って……いけない気分になります」

「?!?今そんな場合じゃないだろ!?(でしょ?)」

サラとシノと共にそんな言葉を吐き怒鳴り散らす。

どうやればジョシユアを反省させることができるだろうか？

そもそも事の成り行きはジョシユアが涉にぶつかってしまったことだった。本人曰く、「いつもの悪ふざけだった」とのことだが、そんな悪ふざけが結果からしてサブレ、明楽、マーク、レオと涉がどこか

へと吹っ飛んでいった。

砂嵐と磁気嵐を組み合わせたようなこの天候はサブレ達との通信を切断しただけでなく、本来の降下ポイントを大きくずらしてしまった。

本来であれば鉄華団本部よりさらにクリユセの方に近づいている予定であったが、むしろ俺達の今の居場所は鉄華団本部よりさらに遠ざかってしまった。

今もあの特殊な砂嵐は鉄華団本部を巻き込みながら今も渦巻いている。

そんなことは今はどうでもいいのだ。そっちは仮設テントをたてて対策をしているメンバーとサブレ達を確認しに行ったイオリ、メアリー、クレアがやってくれている。

問題はこちら側だった。

まず、一部のモビルスーツや戦艦の中に砂が入り込み、身動きが出来なくなってしまった。無茶な大気圏突破の弊害がこんなところに現れていた。

ゼム・ロツクを中心に各艦の整備班が全力で取り組んでいる。それ自体もそこまで問題視するようなことでもなかった。

一番の問題は、サブレ達をすっ飛ばした張本人がまるで反省していなかったという事である。

一通り悩んだ結果俺は思いついたアイデアを使ってみた。

「反省しないなら……今後ジョシユアと渉は組ませないからね。サブレと合流次第編成を変える」

「そ、そんな……シクシク」

両腕を地につけ正座を崩し涙を流し始める。どうやら予想以上に効果てきめんだっただけらしい。そんなに涉と無理矢理離されるのが嫌なようだ。

「今後は反省したことを生かして、作戦中ぐらいはまじめにすること!! いいね?」

「はい……深く反省しております」

サラとシノが「おおー」と呟いている。

ジョシユアが本気で反省してしているようだった、これをきつかけに少しでも真面目に取り組んでくれれば――、

「今度からは作戦外でいじめめることにします」

全く反省していなかった。

「どうやって育つたらこんな性格になるのだろうか？」

まあ、作戦外でしてくれるならつと譲歩しつつジョシユアにゼム・ロックさんの手伝いをしているようにと言いつけて、サラに監視をお願いし、俺とシノはいったん外に出居ていく。

「しつかし、予想外だよな。こんな砂嵐見たことねえよ」

「うん。CGS時代だってこんな強力な嵐は見たことなかったよね？それに磁気嵐まで一緒になっているのは聞いたことないよ」

もし、これが人為的な作業の結果だとすれば俺達には予想できない。

円状のビル二十階相当の砂山のような峡谷の名残が残っていて、その周辺を仮設テントが本部代わりになっている。

仮設テントの中へと突き進み、峡谷の上へと上がる為に外付けのエレベーターへと乗り込み、上のボタンを押す。

大きく左右に揺れながら上へと上がっていく。

「しかし、こんなものを一日で完成させるとはEDMの底力を見た気がするぜ？」

シノはエレベーターから見える景色を見ながらそうつぶやいている。

「でも、外見はともかく中は張りぼてだよ」

苦笑いを浮かべ上へとたどり着く。

峡谷の上は中心に大きなテントがあり、その周辺に落ちないように柵を設けられている。

俺達は柵の方に近づき、双眼鏡で目的のモノを探し始める。目的のモノはものの数分で見つかり、俺はそちらの方に指をさしてシノに教えてやる。

「あつちにあつたよ！ユージンの言っていた通りだ。結構ひどい」

壊れた鉄華団本部の様子を確認した。監視塔は完全に崩れており、

壁に描かれた鉄華団のマークが半分ぐらいになっている。

ユージンから話を聞いてはいたが、まさかこんなにひどいとは。

『鉄華団本部から離脱する際に本部は壊したんだ。大量の爆弾を使って念入りに壊したしな。多分使いねえとは思うけど、近くに寄るような用事があれば中を見ておいてくれよ』

そう伝言を伝え聞いていた身としては一度鉄華団本部に足を運んでおきたい。べ、別に久しぶりだから中を見てみたいなんて考えてはいない。決して。

なんか言い訳じみてしまったが、実際のところあそこに行く手段が俺達には存在しない。

あの砂嵐を何とかしなくては。

そう心に決める中、クリユセに行く方法を思いつく。

「そうだ」

そういつて口にした先の言葉もまたユージンが言っていた事だった。

ユージンに再会できて心底よかつたと思った。

「そういえば、鉄華団本部の地下にクリユセにつながる道があるんだ」

18

クリユセへとつながる道が鉄華団本部の地下に存在するという事を俺はユージンから聞かされていた。

それはそもそもユージンがどこか自慢げに語り掛けてきた撤退戦の話に登場していた。

いや、特に撤退戦を自慢話として話してほしくはなかったのだが、本人はそれなりに努力したところなので自慢したかったのだろう。最も、俺はどこか聞き流しながら聞いていた。

カフェでの出来事だ。

カフェでキャラメルクリームマキアートを呑みながら、濃厚クリームプリンを頬張りながらの事であった。

そんなときに聞かされた話、というより俺が居なかった頃の話聞いていた時の最後に聞いた話がそれだった。

鉄華団の本部から撤退する際に昔地下に造られていた通路から脱



出したそうさ。いや、実際は埋まっていた地下通路を掘り起こしたという話だったはずだ。

鉄華団本部が崩壊した今通路が残っているとは思えないが、探してみる価値はあるはずだ。

しかし、砂嵐が止むまで四日がかかった。

シノはガンダム・メテオに乗って、俺は車に乗って鉄華団本部へとたどり着いた。

他の調査員たちも同じように車に乗って本部へと足を急ぐ、一時間ほどでたどり着いたその場所は出入り口からしてひどいものだった。

俺が知っているその場所も床が抜けていないだけで、地面は荒れ果ててしまい、建物は半壊している。

広場に車とモビルスーツを止めて、歩いて、出入り口を探し始める。

本来の出入り口とロビーは完全につぶれてしまっており、さすがに入ることはできない。そう思って周囲をぐるぐるまわると、調査員の一人が東側に大きな穴が開いていることに気が付いたそうさ。

俺も急いでその場に辿り着くと、そこはモビルワーカー用の出入り口近くだった。

「そんな出入り口があったな」

シノが感心しながら地下へとつながる出入り口へとずけずけと進んで行く。

もとより中は広く、少し歩けば迷子になってしまう。なのでシノに「一緒に行動しよう」と言おうと中に入ってからシノがいたはずの方へと顔を向けると、そこには既にシノはいなかった。

「もう……どこかへ行ってしまったの？」

どうやらすぐそばの通路の奥へと消えてしまったようだ。

追いかけてようとそちらに行こうとするが、反対側から何かを蹴るような音が聞こえてそちらを向いてしまう。

今……絶対何かを蹴った音が聞えた。

周囲を確認するが、調査員が各通路へと消えていく中、俺の視線は再び音の方へと向いてしまう。

「誰もいないよね？」

そういつつその通路を進んで行き、階段を昇って上へと進んで行く。一階に辿り着き、そのまま歩いて曲がり角を曲がったところでそれに出会った。

ライド・マツスと俺は久しぶりに出会った。

19

「ライド！今までどうしていたの？」

「ビ、ビスケットさん!」

俺は力強く両肩を握りしめ、距離を詰める。きつと表情は怖くなっていただろう。しかし、俺はそんなことを気にしている場合ではなかった。

「今まで何をしていたの!? ユージンがすごく心配していたんだよ!」

どこかから「お前が言うな」というツツコミが聞えた気がした。きつと気のせいだろう。

ライドはどこか申し訳なきそうにしながら俯く姿を見ると俺は言い過ぎてしまったことに気が付いた。

「ごめんね。少しだけ言い過ぎたよ」

「いいえ。すいませんでした。俺も……みんなに迷惑をかけて」

改めて頭を下げ謝ってくるライドに俺は多少慌ててしまう。そんな俺の姿を見るとライドはクスクスと笑い始めてしまう。

「すいません。ビスケットさん何も変わっていないから。ビスケットさんが生きていた話はゲイナーから聞いていたんです。EDMで幹部として頑張っているっつと」

俯いたままどこか暗くなっていくライド、ライドは表情を俺に見せないように体を預けて一回叩く。

「団長が俺を庇ってくれたんです」

「うん。聞いてるよ。ユージンはそれが心配だつて。ライドが必要以上で背負ってしまうんじゃないかって」

「俺の所為なんです。俺が団長を庇えばよかったです!!俺が死ねばよかったです。シノさんにも庇われて!俺が足手まといだったから……!!」

ユージンが危機感を抱いた通りだった。

ユージンはシノやオルガに守られたライドは必要以上に自分を責めているのではないかと考えていた。オルガが俺が死んだときに自分を責めていたようだし。多分、ライドも同じように自分を必要以上に攻めたのだろうという事は把握できた。

「俺の所為で鉄華団が減んで……みんなは他人として生きていて。誰も俺を責めないんです！」

「当たり前だよ……誰もライドを責めないよ。みんなで決めた結論だったろ？」

俺を含めてみんなで決めた結論だった。だからこそ、誰も責めない。俺達みんなで責任を背負いあう。そう決めたんだ。

「俺がつらいんですよ！誰かが攻めてくれたらいつそ楽になるのに！！」

「みんなで背負う。みんなで責任を取り合う。それでいいじゃない」  
それまで俯いていた顔が俺の目をまっすぐとらえる。その両目には涙をいっぱいためていた。

「でも！ビスケットさんは違うじゃないですか！いつだってみんなを大切に思っていて！」

「ラ、ライド？」

「団長を止めようとしたり」

「そ、それは……兄さんの事があったからで」

「でも！止めようとした！俺は止められなかったんです！どうして……」

もう一度俯いて俺に背を向けるように体を反転させる。

「どうして……俺は皆さんと同じ時代に居なかったんですか？」

「？いたじゃない。俺達は一緒に仕事をし、一緒にご飯を食べて」  
言葉の意味をよく理解できない。ライドは何を言いたのだろうか？

「俺は三日月さんや昭弘さん達と同じ時間を生きてみたかった。そうすれば……誰かの為に戦えたかもしれないのに」

ライドにどう声を掛ければいいのか悩んでいると通信機からけたたましい警報音が聞えてきた。

通信先は仮設本部の通信オペレーターだった。

「現在二方向から敵モビルアーマーが接近中、フロントムブラッド隊を中心にこちら側は交戦していますが、鉄華団本部の方からも同じように近づいています」

窓の方に走っていくと、遠くにだがモビルアーマーが近づいていることが把握できた。

「逃げるしかない」

そうつぶやいたが、しかし、ライドはそれが気に入らなかったようでこちらをまつすぐ見ながら口を開く。

「戦わないんですか!？」

「戦力が足りないよ。戻って体勢を整えた方がいい」

「でも……………ここは俺達の」

俯き、モビルアーマーの方を見て怒りをにじませる。そして、身をひるがえしどこかへと走り出し始める。

「ここは……………ここは……………俺たちの居場所なんだ!!!」

「ライドー!」

ライドを止めようと右手を伸ばすが空を切りそのままライドを見送るしかできなかつた。

でも、俺はこの時止めておけばよかったと後悔することになった。

結局俺は何も成長できていないという事なのだろう。

## マーズ・アタックV 《命の還る場所》

20

ライド・マツス。

俺は彼を決して忘れない。三日月や昭弘に人一倍強い憧れを抱き、まっすぐ強くなろうとしたあの少年を……、若者を忘れない。

鉄華団の毎日を過ごしてきた中で、ライドが三日月や昭弘の後ろを必死に追いかけていたことをシノはよく知っている。

しかし、結果からすれば追いつくこともできず、見送ることもできなかった。

一言でも話してくれていれば、一言相談してくれれば、誰かが俺に行ってくれば何か手を打てたかもしれないのに。

「それこそ意味の無い後悔だな」

サブレがそういうことを俺は忘れない。

真つ白な空間に俺は後悔と共にしやがみ込んでいる。目の前に立っているサブレはニコニコ笑いながら俺に問いかける。

俺はこれが夢、幻なのだと確信した。

俺の後悔が作り出した幻のサブレ、俺が俺を罵倒し後悔させ続ける為のサブレ。

「ライドを救えなかったって？オルガを救えなかったって？みんなを救えなかったって？」

その通りだった。そうとしか言えない。

「後悔するぐらいならしなければいいのに……行動しなければいいのに」

誰も救えない俺なんか……、そう思っているとそんな幻のサブレが塵になったように消え去り、別のサブレが姿を現した。

「心を閉ざすなよ。見つけるのに時間がかかったら？それじゃなくても今忙しいというのに……」

心底うんざりするようにその場に姿を現した。

「忙しい？」

サブレは確かにそういった。心底うんざりするように、やれやれと

言わんばかりの表情でそう告げた。

「今、クレアを追いかけて飛行機に乗り込んでいるところなんだ」

「!?何の話!?クレアさんがどうして飛行機に?」

「誘拐されて」

「誘拐?」

何それ?物騒な響きは?サブレはいつたいたいという数日を過ごしたのだろう。

俺は勢いよく立ち上がりサブレの前に立つ。

「一体何があつたの?」

「それより……話してくれよ。兄さんの話。話はそれからだよ」

俺は語ることにした。すつきりさせるために、話そう。

21

俺は急いで鉄華団本部から出ていくと仮設本部の方にも別のギヤラルホルン本部に姿を現したモバイルアーマー『エルヴォル地上仕様』と複数のモバイルスーツ『霊電』が襲い掛かってきていた。

急いで戻らなければ。

そう思う一方でライドへの嫌な予感が背中に汗を流させる。

バカなことをしなければいいけど……、そう思いもう一度鉄華団本部の方を見ると、みるみる内に近づいてくるもう一機のモバイルアーマー『エルヴォル強襲型』が近づいている。

事前に資料を読んでいたのでその辺の区別がつく。地上仕様と違い四つのクローアームが体を支え、まるで蜘蛛のように素早く近づいてくる。

背中に四つの砲台が付いており、体も丸っこい形をしている。

機動力が高く、拠点やモバイルスーツ隊を翻弄出来るようにできている。

すると、鉄華団本部の地下施設から爆音を上げてモバイルスーツのようなシルエットが姿を現した。

獅電を改良してあるようで、背中に多少大きなバックパックを背負っており、腕にも耐熱シールドを持っている。ビームライフルにバックパックにビームサーベルが一本だけつけている。全身が黄色

で塗装されている『獅電改』と言うべき機体がまっすぐエルヴォル強襲型へと走っていく。

「ライド!？」

なんとなくライドだという確信に似た感覚を得た。

ダメだ!!勝てるわけが無い!!

そう思っただけでライドの方に走ろうとしたところで俺の腕をつかむ存在を知る。

「誰!？」

そういながら振り返るとそこには覆面の男が立ち尽くし、腕をつかんでいた。

俺にはそれも確信に似た感情が芽生えた。

「三日月!?!やっぱり生きていたんだね?」

『久しぶりだね。今昭弘が寝ているから俺だけだ』

寝ている。サブレの予想はある意味あたっていたわけだ。

サブレは——、「もし三日月が生きているのなら体を機械で補強しているという可能性と、昭弘という男の体と半々使う事と、その両方という可能性がある」つと言っていた。

今三日月は昭弘と体の所有権を半々にしているのかもしれない。

問題は三日月の声が俺の脳内に響いていただけで、声を出していたわけでは無い。

『今の俺はしゃべることができないから。脳波を通じてなら声を伝えることができる。ビスケットは脳波を使えるんだね。俺の声を聞き取ることができるのはゲイナーを除けば他に居ないから』

「昭弘は寝ているって言ったよね?」

『うん。というより起きていることはあんまりないよ。基本は寝ているから。それより今、ビスケットが出て行っても役には立たないよ』  
「だったら三日月は!?!モビルスーツは無いの?」

『持っていない。ライドだってどうやって隠していたんだろう?』

そこまで話したところで俺はバルバトスを隠していた事に気が付いた。

「ついてきて!バルバトスがあるんだ!」

俺は三日月を連れて車の中に入る。通信機をONにしてシノへと緊急通信を入れる。

「シノ！ライドがモビルスーツに乗ってモビルアーマーへと突っ込んでいったんだ！俺は今から三日月にバルバトスを渡すために一旦ヴァルハラへと向かうから、ライドへの援護を頼む！」

「へ!?!はあ!?!何の話だよ?」

「いいから!!早く!」

シノは多少慌てた様子で「わ、分かったよ。おつかねえな」と言いながら多少遠くからメテオがエルヴォル強襲型へと向かっていった。

俺は一目散に車に三日月を載せてそのまま走り出した。三日月は露骨に不愉快な声を脳内に届けた。

『痛いよ、ビスケット』

「いいから!!」

俺はあつという間にヴァルハラ辿り着いて格納庫へと入っていく。ゼム・ロックさんが驚きながらこちらを見ている。

「ゼムさん！バルバトスの出撃準備を！」

「だけど……パイロットはどうするんだ?」

「ここにいます！」

俺は三日月に指さし確認をすると、ゼムさんは何かを言いたそうにしているが、それを飲み込んで周囲に怒号を上げる。

「バルバトスを出すぞ！」

三日月はふとバルバトスを見上げる。

右腕が左腕より多少長く爪がビームクローのようになっている。左腕には内蔵式の電子レンズを応用した電磁波を使って敵を蒸発させる兵器『デビルレフト』通称・悪魔の左腕である。武器はバルバトスルプスレクスが使用していた大型メイスにビーム機能を搭載した大型ビームメイスであり、先端にはビームライフルを装着されている。

背中についているバックパックはオリジンと呼ばれている機体の物が使用されている。しかし、この場合は機動力と瞬発力に富んだも



のだった。その為に空中戦には適応されていない。

しかし、俺は三日月にはあえて必要ないと感じていた。そもそも阿頼耶識システムに完璧に近い形で適応できていた三日月だ。瞬発力による長大なジャンプ力があれば十分だと判断した。というより、追加で届いたサイコフレームによる新たな阿頼耶識システムは、元の阿頼耶識システムに追従できる。本来の人間には無い飛行能力を再現することは逆に三日月にとっては邪魔になるとソニアさんとの話し合いで合意したことだった。

全身のフレームはオリジンの物を使用し、細部のパーツはバルバトスの物を使用している。

ゼムさんに促されるように三日月はバルバトスに乗り込んでいく。

「三日月。俺もすぐに見に行くから！ライドをよろしく！」

『分かってる』

三日月はゆっくりとカタパルトデッキに移動していく。三日月の目の前に現れた小さな画面には『ガンダム・バルバトス・ルプスオリジン』と書かれており、全身の様子が書かれている。

赤い大地と青空が正面に見えてくると、三日月は新しいバルバトスと共にライドとシノの元へと急ぐ。

22

ライドはエルヴオルのクローアームの攻撃をギリギリで回避して真下へと滑り込むように移動する。背中のビームサーベルを抜きながら切りつけようとするが、クローアームがライドの体を突き飛ばす。

シノがライドへと向けられたクローアームの先に出現したビームクローを使った攻撃をメテオのジャマダハルを使ってギリギリのところまで受け止める。

メテオからの拡散ビーム砲をエルヴオルは高くジャンプすることで回避する。体を使ったのしかかりの攻撃をメテオはライドの獅電改毎飛んで回避する。

「ライドー！一旦引くぞ！」

「嫌です！シノさんだけ引けばいいでしょ！俺はあそこを守る！」

「俺の言うことが聞けねえのか!？」

ライドは言うことを聞かず、ビームライフルを使った牽制をエルヴォルへと向けるが、エルヴォルは上部からテールビームブレードが四つも出現する。今までのエルヴォルとは違い、テールビームブレードの数は四つに増えていた。

四つのテールビームブレードが同時に攻撃を仕掛けてきた。

しかし、そのさらに上からバルバトスが大型メイスを使って上部へと攻撃を仕掛ける。エルヴォルはテールビームブレードを使って受け止め、クローアームでバルバトスを吹き飛ばす。

ライドはテールビームブレードの出現と同時に死すら覚悟した。しかし、三日月の攻撃や、テールビームブレードの攻撃を捌いたシノの姿に見惚れていた。

『結局、俺は何も変わっていないじゃないか！見惚れる為に生きてきたわけじゃないんだ!』

獅電改のビームサーベルを抜いて切りかかろうとするが、それをエルヴォルは鬱陶しそうにクローアームのビームクローを使って攻撃毎吹き飛ばす。そんなライドを受け止めながらジャマダハルで反撃を試みる。

エルヴォルはシノからの攻撃をビームクローの攻撃を受け止めながら、テールビームブレードの攻撃を今度は三日月が大型メイスで受け止める。

『また…また庇われた……………!』

ライドは、「嫌だ、嫌だ」と呟きながら次第に追い詰められている。すると、遠くからビスケツトが車でこちらに向かつていく姿を見かけてしまう。ビスケツトはこれ以上近づくつもりは無く、岩陰に隠れるように車を止めようとしたところでエルヴォルの視線にちようど良くビスケツトの姿が映った。

エルヴォルは三日月とシノを吹き飛ばし、ビスケツトの方へと一直線に突き進んでいく。

シノと三日月は内心「しまった」っと自分の不覚を呪う。走り出す瞬間にライドの脳内には、かつてシノがダインスレイヴの攻撃から

庇った姿が、銃撃から庇った団長『オルガ・イツカ』の姿が重なって見えた。

『あの日、ビスケットさんは団長を庇った。なのに……俺は団長を守れなかった。だったら……今度こそ!!』

そんな思いと共にライドは獅電改を走らせた。

エルヴォルはビスケットの乗っている車目掛けてクローアームを右から左に向けて薙ぎ払おうとクローアームを振り上げる。

その瞬間、三日月やシノにとってはスローに見えた気がする。しかし、ライドだけはその瞬間に今までの事を走馬燈のように思い出した。

死ぬかもしれない。でも……それでもいいと思った。

返せるものがある。

ビスケットの車を庇うように抱える、すると獅電の後ろからコックピットを貫くようにクローアームが突き刺さった。

ビスケットの視界に、シノの視界に、三日月の視界にそれが写った。三人が唾然と一秒に満たない時間静止してしまった。止まってしまった。考えを放置してしまった。

ビスケットだけが大きな声と共に反応する。

「ラ、ライドお!!」

コックピットに突き刺さったそれはあまりにも残酷で、無残な姿に見え、クローの先は血で濡れているように所々が赤く塗れている。

エルヴォルは獅電改ごと遠くへと吹き飛ばす。まるでライドは最後までビスケットを守る様に機体を半回転させ、衝突場所を背中に変えた。

ビスケットは車から這い出てライドのコックピットへとまっすぐとよじ登る。

「俺の所為だ……、俺がこんなところに来なければ」

小さな声で呟きながら裂け目からコックピットの中へとのぞき込む。そこには斜めに半分になったライドが虫の息で「ヒュ……ヒュ……」つという音が聞えてきた。

エルヴォルはもう一度近くまで近づきとどめを刺そうと腕を振り

下ろす。そこまで来て我に返った二人が機体を走らせるが、ぎりぎりで間に合いそうにない。

ビスケットは攻撃が来るにもかかわらず、ライドへと手を伸ばす。「ライドー！ライド！！ダメだよ………こんなのって無いよ」

あまりにも衝撃で、あまりにも辛い結末。

クローアームを振り下ろすが、その攻撃はいつの間にか近くまで近づいていたガンダム・シムカスのビームアックスが受け止めた。

「明樂………？どうしてここに？」

「すみません！手伝いに来たんです！」

サブレがよこしたのかもしれないとビスケットは考えるしかなかったが、テールビームブレードの攻撃をシノと三日月がそれぞれ受け止める。

ライドの視線にはバルバトス、グシオン、フラウロスがいるように見えた。

「ビ、ビスケ………ト………さん。三………に………んが………」

何を言いたいのか、ビスケットにはなんとなくわかっていた。

「そうだね………戦っているんだよ………三人が」

ライドの前には三日月、昭弘、シノが戦っているように見えたのかもしれない。ライドは右腕をまっすぐ伸ばし、ビスケットはそれを受け取る。

「や………つと………おい………つ………いた」

その言葉を最後にライドは力なくその場にうなだれてしまう。ビスケットは涙を流して決してライドの手を離そうとしない。

三人がエルヴォル相手に奮戦しながら戦っている姿を見ることができない。

23

「なるほどね。そんなことになっていたなんてな」

サブレは俺の話を一通り聞いてからそんな曖昧な反応をしている。というより、サブレの姿が時折ノイズが走っているように見える。

これってどういう状況なのだろう？

「俺と兄さんは一卵性双生児だ。脳波が非常に似ている。だからだろ

うな、俺が選別者として覚醒した今、兄さんも覚醒者として目覚めている。よっぽど遠くに離れない限りこういう会話が出来るといっわけだ。まあ、今まで理論だけだったんだけど、こうして証明できたわけだ」

なんか嫌だな。

俺の脳内の考えを見透かされそうで嫌だ。それでなくてもプライバシーの侵害を積極的に行われているのに。

ライドの事を考えれば、ここで俺が立ち止まる事が一番ライドの為にならないだろう。

あの時、決めたことだ。死んだ者の分まで笑って歩くと。

「最後に伝言だ」

サブレの姿が本格的にノイズが走っているように見える。

「シノと明楽をクリユセに向かわせてくれ。細かい事情はメアリーから聞いてほしい。クリユセに付いたらアスナ・エールという女性を助けてやってほしい。彼女はクリユセ一帯における争いを収束出来る存在だ。今クリユセはレジスタンスと元ギャラルホルンと木星帝国が三つ巴で銃撃戦をしている。彼女はレジスタンスが連れている。俺はクレアを救出した後にクーデリア・藍那・バーンスタインを救出しに行く」

「クーデリアさんにあつたの!?!」

「ああ、アスナが連れていたんだが、どうもアスナと一緒にレジスタンスにつかまってしまったようだ。別行動をしているという情報を手に入れたが、クーデリアよりアスナの方が重要だろう。彼女をクリユセ議会に連れて行ってやってくれ。俺は彼女が火星連合の行く末を決める存在だと思う」

サブレの真剣なまなざしにあえて問わない。

俺は黙ってうなずく。

すると、サブレ側から銃撃音が聞こえてきたような気がする。

「済まない。どうやら見つかったようだ。そろそろクレアの場所に行く」

そう言うと視界がクリアに元の景色へと広がっていく。

俺は涙を拭き、戦いを終えている三人の方に向く。どうやら三日月は俺とサブレの話で脳波を通じて聞いていたようで、ビスケットの方を見ながらうなづく。

「シノと明楽はクリュセに向かって、アスナ・エールという人をレジスタンスの人達から奪い返してほしい。そのままクリュセ議会へと連れて行ってほしい。こっちは三日月がいてくれる」

シノと明楽は首をかしげて先程のビスケットの言葉に疑問を抱いていた。サブレが今どこにいるのか分からないが、どうも銃撃戦をしているようだし、ほかのメンバーも心配だ。

「頼む！俺はここに残る！」

シノと明楽はお互いに視線を合わせながら「分かった」と言いクリュセの方へと進んで行く。

俺はライドの方にもう一度向き、頭を小さく下げる。

立ち止まらないよ。ライド。

だから……お休み。

「行こう三日月。ライドの分まで立ち止まらない」

『うん。俺が今度こそ守るから』

24

ライド・マツスは鉄華団本部で目を覚ます。

直前の記憶が無い。いや、鉄華団以降の記憶が存在しない。どうして自分がここにいいのかよく分からない。

格納庫で目を覚まし、廊下に出ていき左右を見回す。小さな子供達が遊んでいる。

彼は気が付いていない。ライド自身の背丈が鉄華団の頃まで縮んでい事に気が付いていない。

廊下を歩き、いろいろと見てまわると団長室のドアをゆっくり開けていく。

団長室にはオルガ・イツカが団長椅子に座りながらゆっくりしていた。

「ライドか？全く……」

そういいながら片手で手招きするオルガにライドは内心喜びながら

ら駆け寄っていく。

言いたいことがたくさんあった。

聞いてもらおう。いっぱい話をしよう。辛い事、楽しかった事、悲しかった事、嫌な事。そして、知らないことを教えてもらおう。

「団長………」

喜びながら飛び込んでいく。

そこは多分命が還る場所なのかもしれない。ライドもまた命の還る場所へと還っていく。廻る命はビスケット達には分からない。

辿り着く場所は無かったのかもしれない。でも………還る場所があったのかもしれない。

ライドの命も還っていった。

《マーズ・アタック編終わり ラブ・イズ・フォーエバー編開始》

## ラブ・イズ・フォーエバーI《運命》

1

アスナ・エールという女性といつ頃であったのかというと、実は兄と別れてしまったその日のうちに出会うことになった。

クリュセ内がある程度治安が良い陰で、レジスタンスと呼ばれる反政府運動が今にも暴れだしそうになっているという話を俺はアスナから聞くことになった。

しかも、元ギャラルホルンがいまだに抵抗をしているとは思わなかった。

面倒な事態に巻き込まれたものだなと後になって後悔したものだ。だが、後悔して動かないぐらいなら、後悔しながらでも動くのが俺の性分であり、性格なのだ。俺はこの一年で嫌というほど思い知らされた。

兄は後悔するたびに考える性格をしているため恐ろしく世話がかる。

さて……どこから話すべきなのだろうか？

やはり兄とはぐれたところから話すべきだろう。

これは一人の女性がある男に恋をした悲恋の物語。

そして、別の女性が悲しみと向き合い革命の乙女になる覚悟を決める話である。

覚悟を決めるまでもなく、向き合うべき恋も無かったのかもしれない。でも、語るべきだろう。

俺が誰も救えず、悲しみを癒す事もできず、一人の乙女をつ手助けすることもできない物語。

誰もが自分と向き合わなければならぬ物語、結局のところ自分を救えるのは時分だけだという話なのだから。

さあ、悲恋と覚悟の話を語ることにしよう。

2

砂嵐の中を降下するという今まで経験したことが無い経験をした、のちすぐにこれまた経験したことが無いタツクルを経験した。



何せ四人分のタツクルである。避けるとか耐えるとかの思考をす  
る前に目の前にいた。

恐ろしいことに360。モニター全域の半分を占めるほどのモビ  
ルスーツがくんずほぐれつのような姿勢で突っこんでくるとは思わ  
なかった。

そして、くるくる回っている間に別の音声モニターからどこかの開  
発局長の悲鳴が聞こえた気がした。

一瞬のうちにツツコミどころが増えていくこの状況に俺は怒鳴り  
声しか上げられなかった。

「どういう状況なんだ!？」

そのまま溪谷の谷間に突っ込んでいく姿を俺は恐怖を覚えながら  
激突を回避するために操縦桿を必死に動かす。

衝突してたまるかよ!!

リングファンネルをうまく展開させつつ加速モードを使った衝突  
コースの逆方向へと加速を掛ける。

衝突する瞬間に一瞬だけの間浮遊し、そのまま全員が地面に落ちて  
バラバラになって崩れてしまう。

一旦落ち着くと周囲への怒号を忘れない。

「お前達!!全員出てこいや!!ソニアも!!」

コックピットから出ながら叫び声を上げながら俺は周囲を睨みつ  
ける。そして、最後に真後ろを睨みつけ、バハムートの本体の上部を  
ジツと見つめる。すると、まるで航空機のドアのようにゆっくりと開  
き中から白髪の女がノーマルスーツと共に現れた。

「ふう。まさかくるくる回ると思わなかったのよね」

「それどころか!お前が乗り込んでいるという事をまるで聞いていな  
いんだが?」

「そうだったかしら?でも言わなかったっけ?」

「本気にするわけないだろう!!追加ユニットがやけに大きいと思っ  
たが……………まさか貴様……………中に居住区画を使ったわけじゃないだろう  
な?」

「ピューピュー」

「口笛を吹けば許されると思うなよ」

あと可愛くないからな。おばさんが口笛を吹いて誤魔化そうとしている光景は。

「おばさんじゃないわ。まだ四十歳よ」

「俺の心の内を読むんじゃない」

お前は覚醒者じゃないだろ。

そして、気が付くと外に明楽達が正座する形で落ち着いていた。

俺は明楽、渉、レオ、マークの順ににらみつける。

マークがまず「レオ達が突っ込んできて」つと言いつつ訳を言い始め、レオは「明楽達が突っ込んできたんですよ」つと口ごもりながら話始める、明楽は「渉が突っ込んできた」と言った。

最後に渉が涙目でおろおろとしながら答えた。

「ジョ、ジョシユアが……ジョシユアがあ……ぶつかってきてえ」

「間拔けな声を出すな。涙目になるな。分かったから」

どうやら俺の顔が予想以上に怖かったようだ。

反省反省。

さすがに疲れたので閑話休題。一旦休憩。

それからどうするかという話をする前に一旦バハムートとエデンのドッキングを解除して、バハムートは戦闘機のような状態に変化してしまう。

渉と明楽がバハムートの中を探検するようにはいつていく姿を見送ると、俺はソニアが中で作ったコーヒーを飲みながらレオとマークと共に今後の話し合いをすることになった。

まず、クリュセ内の状況を知ることが優先にすべきだろうというのが結論でもあった。

「しかし、どうやって中に入っていくつもり？」

ソニアの疑問も最もである。実際マークとレオも同じような感想を抱いたらしく俺の方をじっと見つめてくる。

俺もそれは考えたが、そんなことは簡単な事であった。

「私服に着替えよう。EDMの服さえ着なければさほど問題ではないだろう。どうしても気になるなら眼鏡なり帽子なりつけばいいだ

ろう」

その一声で終息した。

ゆえに俺はバイクに乗ってたった一人でクリュセに向かって進んで行った。

ちなみに眼鏡を掛けながらである。

3

クリュセにはあっさり入ることができた。検問とかそういう存在をどこかで多少は気にしていたのだが、そんなモノすら存在しなかった。その理由はクリュセ議会の近くに寄った所であろうやくそれに気が付いた。議会周辺は憲兵がガツチリ守っており、まるで紛争が起きるのではないかという警戒の仕方である。

怖い怖い。近づかないほうがよさそうである。

なので右折してスラム街の方へとバイクを進めていく。綺麗な街並みが少しずつ落書きと浮浪者がその辺を跋扈している風景へと変わっていく。

人込みを避けながらバイクの速度を落としながら進んで行き、多少開けたところでバイクを端に寄せるように止めつつスマフォで居場所を確認する。

ふむ。どうやら雪之丞とかゆう兄さんの知り合いがやっている仕事は逆だったか。

とか思ったところでホームレスのような男たちが群がってきた。

治安悪いな………相も変わらさず。

俺はバイクのエンジンを止め、鍵をポケットの中に入れておきどうするか少しだけ悩む。

ここで問題を起こすわけにはいかないしなく、どうするかなく。

そんな風に考えていると汚いやせ細った男が俺のバイクに手を伸ばす。俺はそれは胸に仕込んだナイフを取り出して軽く頬に傷をつける。

男は驚きと共に小さな悲鳴を上げる。油断も隙も無い奴らだな。

ナイフを持ってどうするべきかと悩んでいると、周囲がまるで意に介さないように普通の生活を送っているところを見ると、こんな騒

ぎは日常茶飯事なのかもしれない。

ふと後ろの若めの男を見ると胸元に手を伸ばしているのが見えた。はあく、あまり使いたくないんだが。

最近訓練して使えるようになった力、覚醒者としての一般能力である脳内透視を使ってみる。

意識を若い男の方をじっと見つめると男の脳内情報がそのまま千里眼のように服の下の得物を透視させる。

男のジャケットの下にはリボルバー型のハンドガンが隠されており、俺は彼が取り出そうとしている右手に向かってナイフを投げた。

ハンドガンを手にしようとした手のひらを押さえてうずくまりハンドガンはその拍子に地面に落ちる。男の掌にはナイフが見事に突き刺さっている。

すると左隣に立っていた若い女がハンドガンを拾おうとするが、俺はそれすら読み切り腰に隠していたハンドガンを取り出して地面に落ちているハンドガンへと容赦ない引き金を引く。

地面に落ちていたハンドガンは大きな音を立てて遠くへと吹き飛んでいく。

ほかの奴らも俺の方を見て顔を青ざめていく。

最も彼らが俺の顔を見えないだろう。フルフェイスのヘルメットをかぶっているのだから当たり前だが。

しかし、どうするべきかと悩んでいると、彼等が怯えた様子で逃げていく。

まあ、逃げるのなら追いかけないさ。そう思ってスマフォをいじろうと視線を移したところで後ろから木星帝国の憲兵っぽい奴らが見えた気がした。

俺はフルスロットルでその場から逃げていった。

危うく木星帝国とトラブルになるところだったと肝を冷やしていると、見知らぬところまで移動してしまったと気が付いた。

スマフォのマップを確認しているといつの間にかいつの間にか反対側に居たと気が付いた。

先ほどまでいたところより多少はマシというレベルの街並みだが、

それでも浮浪者がいないだけで落書きなんかはやはり見えてくる。

どこに移動するべきかどうかという悩んでいる。中心に行けば行くほど木星帝国の監視が厳しくなる。

だというならとりあえず兄さんの知り合いの足取りを追う必要があると考えに至った。

だからだろう雪之丞と呼ばれている中年の男が社長を務めている会社へと言ってみようという考えに至った。

バイクを走らせること一時間、信号に引っかけたり、木星帝国の兵士を避けて移動すると自然と遠回りする羽目になってしまった。

しかし、たどり着いた場所に人はおらず、閑散としていた。

人がいたという痕跡は微かに残っていたが、人という人はまるでいない。しかし、生活をしてきた痕跡は残っている。いや……誰かが今でも生活をしている？

ふと不思議な感覚にとらわれてしまう。

バイクを降りてあえてヘルメットを取らないようにしてハンドガンをポケットから取り出す。

ゆつくりとした足取りで進んで行き、大きなシャツタウの下がかすかに空いていることに気が付き、その下を潜って奥に潜り込む。

ヘルメットが暗視ゴーグルの役目を果たし、倉庫のようになっている場所には多くのモビルワーカーが鎮座しており、周囲に気をはらいながらゆつくりとした足取りで進んで行く。

すると、歩いて十歩目の所で床にワイヤーが仕掛けられていることに気が付く。あえてそれをよけたりせず、そのままワイヤーを追って仕掛けの元へと足を運ぶ。

仕掛けはいたってシンプルでワイヤーを踏んだり引つ張ったりすると仕掛け先の装置がオンになりそのままサイレンを鳴らすようになっていた。

なので俺は慎重に仕掛けを外していく。それ以外にも同じような仕掛けを外していき、最後に事務所へとつながる仕掛けを外すと、今度は赤外線センサーが事務所へのまっすぐの廊下に人の隙間があるのかどうか分からないほど仕掛けられている。

なんなんだ!?! どういう施設なんだよ!! あちらこちらにしかけやがって!!

怒りのままに赤外線センサーを回避しながら進んで行くと、センサーの一つが唐突に変わっていき、かすかに俺の脚部へと当たってしまった。

けたたましい警報音と共に奥の方から中途半端な長さの黄色と茶色の中間のような色合いの髪と釣り目と睨みつけるような目が一緒くたになったような青年が奥から姿を現した。

左腕が義手になっている青年はハンドガンを右手に握ってこちらに走ってくる。俺はそれを弾道を予想し、左側へと跳躍しそのまま壁を蹴って一気に距離を詰める。

青年は驚いたような表情でハンドガンの銃先を俺の方へと向ける。しかし、それを俺は自分のハンドガンでハンドガンを打ち落とす。

「クソ」

青年は悔しそうにしながら左手でナイフを取り出し俺の喉元へと手を伸ばす。しかし、俺はそれより早く相手のこめかみに銃を当て、ナイフを左手で地面に抑える。

「ナイフを離せ」

「侵入したのはそっちだ!」

「お前はここの住人か?」

離す気が無いようなので質問の内容を変えてみる。すると、青年は観念したように小さな声で話し始める。

「違う」

「じゃあ、どうしてここにいて? ここは雪之丞とかいう男性の会社だったはずだ」

そういう風に兄経由でユージンの情報がこちらに入っている。

どういう理由で青年がここにいてのか分からない。

「あんたに話す理由はない!」

「だったら君を使って奥へ脅しをかけるだけだ。気が付いていないとも思うのか? 奥に人がいるな?」

「!?!」

俺は奥の方へと視線を移す。先ほどから奥の方から視線を感じていたんだ。

すると、奥から大人しそうな声と凜然とした声が聞えてくる。言い争いをしているように見える。

しかし、どう決着を迎えたのか分からないが奥からスーツを着たような女性が事務所の陰から現れようとした。すると青年は大きな声を上げる。

「駄目です！」

「いいのです！ここでデルマ君を見殺しにするわけにはいきません。私が狙いなのでしょう？」

そういつて姿を現したのはクーデリア・藍那・バーンスタインが廊下に出てきた。

「あなたはレジスタンスなのでしょう？私を連れていきたいのならそうしなさい。その代り彼には一切手を出さないでください」

どうやら俺の本来の所属を誤解されているようだ。俺はデルマと呼ばれている青年を離し、ヘルメットを脱いで、EDMの印付きのケースを見せる。

「どうやら所属を誤解されているようだ。俺はEDM……『経済防衛機構』の幹部サブレ・グリフォンだ。ちなみにレジスタンスという組織を教えてもらってもいいかな？」

4

事務所の壁は鉄の板で塞いでおり、明かりが外へと逃げないようにしている。小さな子供たちが端の方で遊んでいる。

俺は近くの椅子に座り込み、改めてクーデリア、デルマ、そしてアスナと呼ばれている明るいブロンズヘアをしている女性の四人で話をする事になった。

とりあえずデルマという青年は俺に向かって頭を下げてくる。

「すいませんでした！まさか、EDMの人だったとは」

「気にするな。こちらも怪しい恰好をしていたんだしな」

すると、クーデリアは暗い表情を浮かべながら手元に持っているコーヒーをのぞき込んでいる。デルマはレジスタンスという組織の

説明をしてくれる。

「元々はギャラルホルンのやり方に抵抗していた組織だったんですが、現在は木星帝国に反抗している組織になってしまったんです」

「なるほど……その為にクーデリアを求めているというわけか」

すると、クーデリアは俺の方を見ながら声を荒げる。

「やはり私は議会へと行きます。このままではククビータさん達が！」

立ち上がったクーデリアにデマルが強く手を握る。

「駄目ですよ！今行けばむしろ相手の思うがままです。今話したでしょう？今の議長はテトラ・ギユウジャンであなたに恨みを抱えているんですよ？」

「分かっていきます！でも、私の所為で多くの人に迷惑をかけている。そのせいで人が死ぬなんて見ていられないのです」

「だったら行けばいいだろ？あんたが行くことで誰かが救われると思うなら」

俺は冷たい態度を取りながらコーヒーを飲み込む。クーデリアは俺の方に鋭い視線を向ける。

「むしろあんたが行けば多くの人が余計に苦しむだけだと思うが？周囲が苦しむのを耐えていればいいだろ。今更だろ？昔多くの人が死んでいく姿を耐えてきたんだ。今更一人二人増えたところで……」

そこまで行ったところでクーデリアは俺の右頬を強く叩いた。叩いた本人は涙目になっている。

「あなたに何が分かるのですか？」

「知らないさ。知ろうとも思わないが。誰が死のうとあんたがクーデリアであることは変わらないだろう？それとも誰かが死ぬとあんたはクーデリアでなくなるのか？あんたはドルトの一件の時に覚悟を決めたんだろ？今更あちらこちらをフラフラするな。あんたの為に命を懸けている人間がいるんだ。そんな人間を不用意に助ければそれ以外の多くの人が犠牲になるんだ。あんたは知り合いを助ける為に多くの人見捨てるのか？だったら、どうしてあの時鉄華団を助けなかった？今更後悔するな！」



俺はクーデリアを睨みつける。怒りもあるのだろう。オルガや彼の仲間を助けようとしなかった彼女への怒り。受け止め進むことが今できない彼女が今更立ち止まって後悔していることへの怒りかもしれない。

彼女はおとなしく座り込み、俺はコーヒーを机に置いて腕時計を確認する。

これが出会いという名の運命だったのかもしれない。

俺は後に彼女『アスナ・エール』が革命の乙女と呼ばれる運命がこの時始まったのかもしれない。

5

イオリは姉であるメアリー、そしてクレアと共にサブレ達搜索の為にクリュセに訪れていた際、彼女は運命の出会いを果たす。

一人で公園の辺りを調べているとその人は猫に手をさし伸ばしていた。

猫はそんな男性の差し出した手をひつかいてその場から逃げていく。男の右手から血が出てきて、イオリは驚いたままハンカチをもつて血を止めようと右手を取る。

「君は……誰？どうして助けるの？」

まるで心底不思議そうにしている男性にイオリは当たり前のように放つ。

「あなたが傷を負ったからです」

イオリはポケットの中から包帯を取り出しそのまま止血を行う。

彼は手当てを受けた手を見つめてぎこちない笑顔を見せる。まるで笑顔を知らない風である。

「僕は……エガーだよ。君は？」

「私はイオリ。よろしくね」

これは悲恋の出会い。悲劇でしか幕を下ろせない物語。出会った時から悲劇が約束されている。

6

アスナ・エールという女性の第一印象は普通という一言でかたづけられる。綺麗だとは思いますが、それでもクレアには勝てないだろうし、レレほどの意思の強さを持っているとは思わない。

この話は彼女の意思が無ければ語れないだろう。決して強いわけでは無く、折れそうになりながら、時に流されそうになりながら、それでも進み続ける意思を俺は彼女らしいと思うのだ。

他人を気遣い、家族を愛し、命に優しくできる。

それがアスナ・エールなのだ俺は知る。

どんな悲劇が待ち受けていようとも、どんな人々が命を落とそうとも、彼女は悲しみを受け止め、人の悪意を飲み込み、それを善意に変えることだろう。

俺を『勇者』と彼女は言ったが、俺からすればアスナ・エールは『聖女』だと思う。

心折れそうで、悲劇に足を止め、人を想い続ける。そんな聖女に彼女はなれる。

これはそれを知るお話だという事を『愛』という言葉と共に話そう。これはイオリとアスナの恋物語なのだから。

『恋』と『愛』の物語を語り、『悲恋』と『覚悟』へと変わっていく物語へと――、突き進む道を見据える物語。でも、この物語は

前半戦でしかないという事をここで語っておこう。

7

イオリは近くの治療用品販売店で包帯と消毒液を購入すると、すぐに近くのベンチで座っているエガールの元へと急ぐ。怪我をした手に消毒液を塗り、包帯で止血する。

包帯の感覚を確かめるエガーにイオリは笑顔を見せながら尋ねる。

「どうかな？痛かったり動かしにくかったら言ってみてね」

エガーも笑顔でイオリに返す。

「うん。大丈夫。痛くも無いし動かしやすい。ありがとう………えっ

と、イオリさん」

「呼び捨てでいいよ」

ニコニコの裏表のない笑顔を見ているとエガーもつい微笑んでしまふ。

「ありがとうイオリ」

「どういたしましてエガー」

イオリはベンチから立ち上がり、エガーの方へと歩いていく。エガーは右手に巻かれている包帯をいとおしそうに見ながら触る。

二人は近くのベンチに座る前にジュースを自販機で購入してからにすることにした二人は自販機へと急ぐ。エガーがお金を持っていないことに素早く気が付いたイオリは「私が払うから」と微笑んだ。エガーは嬉しそうにしながらどれを購入しようかと悩んでいる。イオリもすぐに購入できるようにと視線で選び取る。

すると、右端に桃のジュースが見えたイオリは購入するジュースを決めた。

エガーはイオリが購入しようとしていた桃のジュースに手を伸ばす。ピツつという音共にジュースが自販機から出てくる。

エガーはイオリに桃のジュースをわたす。

「え? どうして?」

「これを飲みたそうに見てたから」

素晴らしいながら微笑みを向けるエガーにイオリは満面の笑みを浮かべて大切そうにジュースを抱える。エガーも同じように桃のジュースを買ってベンチに座る。

ジュースを半分ほど飲んでからイオリはエガーへと声をかける。

「危ないよいきなり猫に手を差し出したら。猫って気性が荒い時もあるから」

「うん、気を付けるよ。でも、ありがとう。僕………人にやさしくされたのって初めてで。会う人みんなひどかった」

辛そうな表情を浮かべながら語るエガーに同情するわけでは無かったが、それでも彼がづらい目にあって来たのは真実のようであった。

「私はそんなことをしないよ」

「うん。ありがとう。僕はそこから逃げてきたんだ」

そういうエガールの瞳はどこか遠くへと見つめている。

8

コットンとは木星帝国が火星圏に作った研究施設の中へと侵入するため、周辺を確認していた。

四階建ての火星圏では見たことが無いガラス張りの建物。しかし、そのガラスもマジックミラーのようになっており中の様子を見ることはできない。

研究施設の周りは乾いた大地を平らにならし、車やモバイルスーツが多数配置されていた。

幸い壁のような物は作られておらず、研究施設に入ること自体は決して不可能ではない。

コットンは車の陰に入りながら、研究施設の裏口へと入っていく。中から外が丸見えであり、それゆえだろうか研究員たちの危険度は低い。セキュリティの低さが漏呈している。

コットンは聞き耳を立て、研究員たちの会話に意識を集中する。

「どうやら被検体『E-27』が脱走したそうだ」

「本当か？まずくないか？あれは……」

「あいつは今のところEタイプ完成形の一つだろ？ククナ様はどうするつもりなんだ？」

コットンは聞きなれない単語を聞いた。

『被検体？E-27？脱走した？』

研究員たちはまさか立ち聞きされているとは思わず機密情報を漏らしてしまう。

「あれは……コードネーム『エガー』はクレア様の力をそのまま複製した複製品だろう。クレア様は触れた対象者の記憶を覗くことができる。ククナ様はどうなさるつもりなんだろうな？」

「まあ、どうせクレア様が捕獲できなかった時のためのプランB难道？しよせん。クーデリア・藍那・バースタインの記憶を覗きコロニーレーザーのカードキーの隠し場所を覗くための。テラ様はどう

やらクーデリアがクリュセに潜伏しているまで読んでいるようだし、あとはクレア様がクーデリアを拉致すればいいという話だったろ？」  
計画の一部とはいえその話を聞いてしまったコットンに衝撃が走った。

『何てこと。やはりクーデリア様はコロニーレーザーのカードキーを持っていたのですね。そのカードキーが何に使われるかはわかりませんが、これはここを調べている場合ではありませんね』

そう思って振り返ると殺気のような感覚を感じ取ることができた。彼女は殺気の方角を無理向きつつ家具で盾を取る。

すると、そこには黒衣の服を来た中世のような騎士が立ち尽くしていた。

「侵入者にぺらぺらと機密事項を離してしまうとは……情けない」

ハンドガンのコットンの方へと向けるが、銃撃はどこか遠くへと飛んでいく。彼女はまるで避けた方が当たるその銃撃方法に聞いた覚えがある。

黒衣の騎士はハンドガンをじっと見つめる。

「この体に馴染んでいないようだ」

「あなたは……まさか……」

黒衣の騎士のその名を尋ねる。しかし、騎士はそれを聞くと『彼』を連想させないような高笑いを浮かべる。

「ハハハ！ハハハハハ！『彼』では無いよ。この体は彼……『イオク・クジャン』の物ではあるが、私の心は別のものだよ」

コットンは撤退する必要があると踏み、手榴弾とスモッグ弾を同時に投げて視界を完全にふさぐ。

黒衣の騎士はとっさに柱の陰に入って身を隠し、コットンが逃げた方向へと見つめる。

そこには大きな穴が開いており、そこから逃げたことは明白であったが、黒衣の騎士はそれ以上追う事はしなかった。

「まだこの体に馴染んでいないようだな。前の体の主に引っ張られてしまう。まあ、少しづつ馴染んでいくか」

自身の手を見つめ、そのまま視線を再びコットンが逃げた穴へと向

ける。

黒衣の騎士は不敵な微笑みを浮かべるだけだった。

9

俺は結局雪之丞という男の会社で一晩を過ごす、アスナという女性の買い物に付き合っただけでやることにした。

俺自身も仲間と連絡を取る必要があると判断したためである。

綺麗なブロンズヘアをなびかせて、彼女の歩く姿はクレアほどではないが、優雅さがある様に思う。しかし、そんな姿を同じようにどこか警戒心が高くも思えるのだから不思議だ。

彼女は昨日自身が孤児であるという事を自らの口から話した。

無論それ以上の事を話すことは無かったが、俺はそれ以上の事を尋ねるつもりもなかった。

しかし、買い物に付き合っただけでほしいと言いだしたのはアスナ自身であった。

「よければ今日の買い物に付き合っただけでほしい」

おそらくは俺とクーデリアの間にある微妙なピリピリ感を敏感に感じ取った上での発言だと俺は推測している。

仕方ない、昨日ある意味微妙な雰囲気を作ったのは俺である。言い過ぎとは思いますが、反省するつもりもない。あの一件について俺から謝罪することは無いと思う。

彼女のわがままとここに居る全員の命を天秤にかけるつもりは無いからだ。

仲間を守りたいという想いの為に、多くの人を犠牲にすることは許さない。

だって、それは彼女の仲間がしてほしくないことだからだ。だから、彼女の仲間はおとなく捕まり、ある者は関係者を連れて逃げていくのだから。それでも、彼等は戦う事だけは避けてきた。

きっと元鉄華団のメンバーにとってあの戦いが最後だったのだから、この戦いは守るためであって、傷つけあうためのモノではない。

互いに守り、一つでも多くの命を救う。それが鉄華団の最後のメン

バーが出した答えだったのだろうか。

「止まるんじゃねえぞ……！」

オルガのその言葉を胸に、これ以上の仲間の犠牲を増やさないための戦い。それはきつと兄であるビスケットや仲間であるシノの思いとはやはり違うのだろうか。

あの二人はその場にいなかったからこそ、まっすぐに歩くことを決めたのだ。

歩き続け、戦い続ける。

そんな過酷な道をひたすら突き進むために、それは過酷で厳しい道のりだろう。

まあ、そんな個人の道と今の戦いを同列に語ればいつまでだってかかってしまうので、ここまでにするとして、どうして俺がこんな風にまるで現実逃避をしているのかというところ——、アスナがホームレスから襲われていた女の子を助けようと啖呵を切っていたためであつた。

困るなく、ああ言うことをしてほしくない。思いついたら即行動みたいに突っ込んでいってほしくない。

「あなたは小さな女の子に手を出して恥ずかしくないのですか？」

君は家を出る時に「問題を起こさない」と約束しなかったかな？約束を破ることを恥ずかしいとは思わないのか？

「あなたのような人間がいるから争いが起きるのです」

いや、彼のような人間が居なくても争いは起きると思うけど。

「大体、こんなところでフラフラと……、ちゃんと働きなさい！」

おお！相手が明らかにイライラしている。すごい！相手の神経を逆なでしている。

「かかってきなさい！こちらの男性が相手をいたします！」

俺を巻き込まないでほしい。君と違って争いに突っ込んでいくつもりは無いのだが。

と言っても無駄なようなので、ホームレスの男は両手で握り拳を作りながらこちらに歩いてくる。

俺は喧嘩をする体力すら無駄な感じがするので腰のホルスターか

らハンドガンを取り出し、ホームレスの男へと向ける。

ホームレスの男はとっさに両腕を上にあげて降参の合図を出す。アスナも驚きを隠せないでおり、女の子は怯え切っている。

「で？ケンカ？」

「す、すいませんでした!!」

そう叫びながらどこかへと走り去っていった。俺はハンドガンをホルスターに入れ直し、アスナの方を見る。

アスナは女の子を慰め、気持ちを落ち着かせてそのまま安全な所まで案内させた。しかし、そこまで案内し女の子と別れたところで今度は俺とアスナの口喧嘩であった。

「ちよつと！女の子の前で拳銃ってどういう思考をしているのですか!?!」

「だったら誰かさんが「喧嘩をしない」という約束を真っ先に破ったのはそっちだろ!?!」

「あんな女の子がひどい目を合わされてもいいと？《ピー》な目にあったり！《ピー》を奪われたりしてもいいと!?!」

「思っても口に出すんじゃない!!そんなピー音にして伏せなくてはいけないような放送禁止用語!」

そんなやり取りを約一時間ほど繰り返し、お互いにぐったりした態度で店前の段差で腰を掛け、両手にジューズを持ちながら一旦休憩である。

家を出てから既に二時間ほどが経っているにも関わらず目的の買い物を買わせていないコンビがここにいた。

「まあ、一旦休戦するとして……だ。取り敢えず買い物を済ませてしまおう」

「そうですね。こんなところで喧嘩をしても意味はないでしょう」

ひとまず落ち着きながら買い物を買わせる為にスーパーへと足を延ばす。

そこまでは喧嘩をすることも無く、スーパーへと入っていきアスナは買い物かごを持った状態でメモを確認しながら時計回りで移動し



ていく。野菜、魚、肉の順に見て回るが、残念ながらアスナたちはそんなにお金を持ってしているわけでは無く安い最低限の食材だけを籠に入れていく。

しかし、問題なのはそこそこ人数がいるのに、その量で大丈夫なのかという事である。

いや、ぎりぎりの生活をしているのだろう。クーデリアを連れていく分余計に金がかかっているだろう。

しかし、金を出そうとするとアスナは俺を強く拒絶されてしまう。おそらく他人に借りを作ることを嫌なのだろう。

そういう事なら俺はせめて自分の分の食事代ぐらいは自分で出すべきだろう。

そう思い適当で片手間な飲食一式セットを購入して、俺はアスナと共にベンチで簡単な昼食にすることにした。

「早く帰りたいですけど」

「いいだろう？こうしてご飯を食べても。ちようどお昼時だしな」

そういつてトマトとレタスのサンドイッチを一口食べてしまうと、俺はアスナに「一口どうぞ」っと差し出す。アスナは「いいです」っと強情になってしまいが、途端におなかが「ぐぐ」鳴ってしまう。

アスナは両頬を真っ赤にしながらサンドイッチに手を伸ばす。

彼女が手に取ったサンドイッチはタマゴのサラダにハムをはさんだものだった。

「トマトは苦手か？」

「苦手ではないけれど……あまり好きでは……」

「それを苦手というのでは？」

横目でアスナを見ると、アスナは視線を逸らす。同時に俺は牛乳を飲み込み最後の一口を口の中に入れていく。

もう一度トマトとレタスのサンドイッチに手を伸ばして食べ始めると、正面に子供達が鬼ごっこをしているように見える。

しかし、一瞬だけがイオリが細い裏路地をはさんで向こう側の方に居たような気がしたが、誰か知らない男性と歩いているように見えただけ。メアリーはどうしているのだろうか？いや、そもそもイオリ

であるかどうかが疑わしい。

ここにいるとは思えないしな。

そう思いながら最後にサンドイッチを口の中に放り込んで最後の牛乳ごと飲み込む。その後ごみをゴミ箱の中に入れる。

アスナは表情を元通りに変わってしまった。

惜しい、写真に収めて永久保存しておけばよかった。それぐらい可愛いと思ったのだが、クレアやレレですらそういう風に頬を赤く染めることが無いからなく。

太陽が傾き始め夕日に変わりつつある風景の中でアスナの横顔はどこか凛々しく見える。

凛々しく、髪はサラサラのブロンズヘアーストレートに伸ばしている。体つきもよく胸はほどよく出ており腰や腹回りは引き締まっている。

こうしてみると全体的に美しいと思う。

「どうしたの？」

喋り方も変わっていく。おそらく知らない人達や兄弟たちへの気を使っていく過程でそういうしゃべり方になっていったのだろう。

「疲れないか？常に他人に気を使い続けるのは」

俺は本題に入る。思ったことをそのまま口に出す。彼女は決して驚くことは無く、ゆつくりと立ち上がり子供たちに近寄って「もうすぐ暗くなるから帰りなさい」と語り掛ける。

そして再び立ち上がり一回転してこちらを向く。ストレートのブロンズヘアーストレートが付いているロングスカートがふわっと浮かぶ。その光景に俺は不覚にも見惚れてしまった。

「別に疲れません。誰かの為になっっていると思うと私は頑張れるんです」

彼女は両手を後ろで握り太陽を背に微笑む。

「たとえ見知らぬ人だとしても私は手をさし伸ばして歩きたいんです」

アスナは太陽の方を見て、クリュセの中心地へと視界を向ける。

「だって……、私はクリュセが……この街が好きだから」

その美しさとひたむきさを前にして俺は………微笑んでしまった。

10

ククナの手の者がクリュセ内を徘徊し始めたのはエガーが失踪した翌日の事である。もつと言えばアスナとサブレがイチヤイチャしていたその日からである。

目的は大きく分けて二つだった。エガーの回収とクーデリアの捜索である。

ククナはクーデリアがコロニーレーザーのカードキーを握っていると把握していた。

そもそもテイワズ所属の人間が行ったコロニーレーザー開発は彼等自身で恐怖を覚えた。

「もしこの兵器が地球や火星にむけられたら」

そう考えた彼らはこの兵器を使用させないために最後の壁を作ることにした。それがカードキーである。彼らは二つのカードキーを作ることにした。一つはメインコントロールルームであり、宇宙要塞《テクサス》の中に作られたコロニーレーザーを操作するための部屋である。

木星帝国が問題視しているのはもう一つの部屋であった。もう一つが自爆専用の部屋である。

しかし、この二つの部屋には明確な違いが無い。如果说言うなら対極の場所に作られたというだけで、外見どころか見かけすら同じである。しかし、カードキーだけは別だった。

一つ目は赤いカードキー。

二つ目は青いカードキー。

赤いカードキーの名前はアイスで、青いカードキーがマイクと書かれている。

それ以外にはこれといった特徴が無いカードキーはマクマードの手に渡り、その後テイワズ失踪前にクーデリアの手に渡った。

そこまでは木星帝国も把握していた。だから火星侵攻の際に彼女はクーデリアと彼女の関係者の確保を優先し、彼女が拠点としていた場所全部を捜索することになった。

しかし、半年以上が経ってもいまだに見つからない状況が続いていた。

そして、テラが手を打つことになった。

それがクーデリア関係者の摘発であった。捕まえた人物の中で頑丈そうな人間を選び取り、その人間を命の危機が大きい場所へと叩き込む。そうすれば自然とクーデリアは姿を現すはずだと考えた。実際彼女は姿を現した。

ここまではククナも同じように考え、この作戦に便乗するように自分の手をクリュセ内に徘徊させた。

クーデリアの捜索が目的だったが、問題がその時起きた。

彼女の大切な実験体である飛検体『E-27』が脱走してしまった。これは彼女にはある程度想定していた事ではあった。

小さいころからクレアを見てきたククナはクレアの不思議な力を知っていた。

『他人の記憶を覗くことができる』

ククナは当初それを覚醒者としての能力であると判断していたが、最近の研究結果からそれは覚醒者とは関係のない母親から受け継いだ能力であると判断できた。

最近までそんな力に興味はなかった。

だって、そんな力は所詮は母親に似ているということ以外にククナには興味を引くことが無かったからだ。

しかし、クーデリアの話聞いたのは火星に来てからの事だった。

だからクレアの力に適応できるような覚醒者を作ることになった。それが『エガー』である。

だからだろうか、彼女のDNAを用いてくるられた『男性』は心優しく戦力としては不完全に見えた。しかし、そこに強制力を持たせることによって戦闘に特化させることができるようになった。

木星帝国は火星で完全新作のモビルアーマー『フォルテッシモ』を開発・製作した。

フォルテッシモ……モビルアーマーの中でも超大型として開発され、特徴的なのはその形である。地上でのみ運用することを前提と

した形はまるで地面を這って動く鳥のようにも見える。左右に大きく伸びた羽のようにも見える。アーマーからはプロペラが付いた小型ドローンが仕込まれており、ビーム兵器を屈曲することができる。その兵器と拡散ビーム砲を併用することで広範囲を同時に殲滅することができるとができる。

そんな兵器を使用するためにエガーにつけられた機能……それが『強制命令』である。この機体に操縦する必要はない。なぜなら全てにおいて脳波によるコントロールができるからだ。

それ故に複雑な操作をしないようになっていた。

この恐ろしい兵器を使う上で『強制命令』を実行できるのはインただ一人である。

## ラブ・イズ・フォーエバーⅢ 《覚悟の聖女》

11

テラは窓の外をのぞき込み、議会の周辺に設置している柵の向こう側で多くの人だかりができているのが確認できた。

この状況を作ったのがククナであることをテラはなんとなく把握していた。

ククナがテラの身動きを封じるための作戦だろうという事は把握できていて、これがクーデリアを奪取する作戦だと想像していた。

それをまずいという事は思っていない。

彼からすればクーデリアをこの地に呼べた時点で作戦は半分ぐらいは成功したと思っっている。

問題は誰かがクーデリアを匿っっているせいで正確な居場所をつかめていないというコツトだった。

しかし、それがもしかしたらEDMがかかわっているかもしれないと思っっていた。

この期に及んでこの地へと姿を現さないという理由、大切な人たちが脅しの理由に使われたにもかかわらず、それでもこの場所に近づかない理由。

それが誰かがクーデリアを押さえているという事だろう。

彼女が町中に一旦は言ったことまで木星帝国は把握できていた。

そして、ここ数日内にククナが捜索隊らしい人物をスラム街に居るところを目撃している。

「はてはて……どうしたものか……」

この場所まで連れてくる必要があると思っ、レジスタンスと呼ばれている反政府運動家たちへの接点を今日まで続けてきた。

そして、今日は彼らを分断する算段をたて、同時にこの地までクーデリアを連れてくる計画を立てることとした。

それでも、ククナはそれを最低限で理解されていると把握したうえで作戦を動かすことが重要であった。

そんな中、サブレ・グリフォンがスラム街に姿を現したというホー

ムレスの男からの証言で判明した。

テラはレジスタンスのメンバーに連絡を飛ばした。

『クーデリア・藍那・バーンスタイン発見。スラム街に居ると思われる』

「これでレジスタンスはクーデリアを連れてこの地まで来てくれるだろう。あとはサブレ・グリフォンが付いてきてくれればそれでいい。ついてこない場合の手を打っておく必要があるだろう」

そう思い、ある情報をネット回線に流す。

『クーデリアが大量虐殺兵器を使う為のカギを持っているらしい』

「さあ、どう動くサブレ・グリフォン」

ククナは四日前の段階で舌打ちをしてしまった。

天候兵器をフォルテツシモに搭載しクリュセの地下に潜ませることでクリュセを周囲から孤立させることに成功した。

同時に電波妨害波をクリュセを中心に起こさせることで完全孤立状態にすることに成功した。

しかし、エガーが脱走した結果でフォルテツシモの機能も停止してしまった。

それにテラがなんとなく関与していることは把握していた。テラからすれば周辺の部隊の情報が入らないこの孤立状態は面白くないことだろう。

そんな状況に際し、アインはすぐにクリュセ市内に入り込んだ。

しかし、そんなアインはすぐにエガーを見つけ出したが、同時にもう二人を発見することにした。

クレアとサブレである。

それ故にすぐには手を出さず、状況を静観することになった。しかし、この時のアインにミスがあるとすれば、クーデリアを発見できなかったという事である。

ククナはクレアがいることを把握したとき、エガーを利用するとう案でた。

問題があるとすれば、ククナが動いた場合、テラが手を打つことがあるという事である。

その為にククナはククナで元ギャラルホルンのメンバーに連絡を入れた。同時にレジスタンスの反クーデリアメンバーの方に連絡を討ち、クーデリアが議会内に姿を現す可能性があるかと連絡した。

こうすることでテラへと手を打つことにした。

この策がどういう結果になるのか誰にもわからない。

12

クーデリアが焦っている理由をなんとなく俺には理解できていた。出来たうえで俺は無視することにしていった。

て言うか、彼女の性格と性質上俺とかかわることが化学反応の結果空中分解を起こしかねない。

「まるで薬品のように言うね」

「ツツコミが平凡」

「だったらもつと分かりやすいボケをしたらどう？」

ブロンズヘアアの美人であるところのアスナにきつめのツツコミを入れられてしまう。ふむ、分かりにくかったかな？

仕方ない、別のボケを考えてみよう。

「布団が吹っ飛んだ（棒）」

「もつと心を込めてよく（棒）」

「アイ ラブ ミー」

「よく聞いたら自分が大切という究極の自己主張ね」

そんな面白いのか面白くないのか分からないやり取りをここ数日続けていたりする。

しかし、アスナはもつと面白いことを要求されているような目をしているような気がする（単純に批判的な目にも見えなくはない）。

「心を込めてアスナに言いたいことがある」

アスナは俺のマジトーンに驚きを隠せずにおり、なぜか頬をほのかに赤く染めてしまう。俺はアスナの右手をさしく握りまるで手の甲にキスをするのではないかというほどに上にあげる。

「な、何？へ？ちよつと待って……！私……」

俺はやめてほしいという彼女の願いを断る様に近づいていく。ついに俺と彼女の間の距離を最大限まで詰めたところでアスナは目を



強く瞑る、まるでキスをするかのように唇を尖らせる。俺は彼女の耳もとまで移動して一言発する。

「さっきからスカートノ端がめくれてるよ」

素早いハリテが飛んできた。

俺の左頬に赤い紅葉の模様が浮かんでいるが、これは自分自身の所為なので気にしないことにする。

さすがにやり過ぎたと反省。

#### 閑話休題

しかし、そんな楽しいやり取りをしている最中でアスナはまるで真面目そうな表情を浮かべている。

「真面目そうなんて言わないで」

「心を読まないでくれよ」

「顔に書いてある」

「地の文を読まないでくれよ」

「この世界は小説だったの!？」

面白いやり取りをしているほうがよさそうな気がする。なんていうか、真面目なレレと若干感性がずれているクレアではこんなに面白いやり取りができないからな。

まあ、レレをからかっていると面白いんだけど。

しかし、今回の場合はしつこすぎてアスナに怒られてしまった。というか土下座させられた。見下しながら怒られた。

「真面目に話すつもりは無いという事?」

「まさか……」

そんなつもりは無い、ていうか真面目に付き合ってくれる方がいけないと思うけど。

「……それより、どうしてクーデリア様とあんな感じの距離の取り方をしているのですか?」

それをいつか聞かれるとこの四日間覚悟していたつもりだった。仕方ない、こう真正面から聞かれた以上は返すしかない。

「バーンスタインの魅力というか長所は何だと思う?」

本来なら質問に質問で返すなんてことをしたら突っ込まれるかも

しれないが、流石に真面目な表情の人間にツツコミを入れるほどアスナも無料ではない。

「……カリスマ性みたいなものでしょうか？なんというか綺麗というか……人を導く指導力があるというか……あ、後運がいいと思う」  
まあ、一般的な視点から見たらそういう反応になるよな。

「それはあくまでも上辺のだけのものだ。俺やEDMの代表であるマハラジャみたいな人間からすれば彼女の最大の魅力であり長所は……『騙しやすさ』や『利用しやすさ』なんだよ」

「利用しやすさ……」

同じ言葉を復唱する彼女がそれを受け入れたくないという気持ちは分からないでもない。しかし、きっと俺の意見は『ラストル』や『マクマード』だって理解しているだろう。だって、彼らも彼女を『利用した』側の人間なのだから。

「そもそも、バーンスタインが世間に出てきたノアキスの七月会議の成功だってアリウムの後押しがあったからだ。アープラウやドルトの一件も蒔苗やマクマードやノブリスの後押しがあったからだ。勿論『運』のようなものがあつたというのは否定できない。しかし、問題なのは彼女の内にあるカリスマ性は他人が利用してくれないと発揮できないという事だ」

それが彼女の失脚劇にそのままつながつたといえる。少なくともマハラジャはそう呼んだ。マクマードがいなくなり、ラストルが亡くなって以降彼女の支持率は落ち込んでいた。これは周囲から利用される環境が木星帝国が揺るがしたためでもある。いや……木星帝国の狙いはそこにあつたのかもしれない。

「だからだろう、木星帝国の火星侵攻の素早さの裏にはそういう理屈がある。そう思えば逆になんとなく納得できる部分はあるだろう？逆に俺が彼女に必要以上に仲良くしたくないのは、俺の持つ影響力が彼女にどういふ悪影響を与えるのか分からないからだ。最悪この街が滅びる級の影響だった場合逃げるしなくなるしか」

「そういう問題？」

白々しい目で見られてしまうが、決して冗談だけで話をしているわ

けでは無い。俺とバーンスタインはそれだけ相性が悪い。仲が悪いというわけでは無く――

「仲良くなれば逆に経済的な影響が大きいという事だ。バーンスタインは経済的な影響力を既に持っている。そういう意味で化学反応という言い方をした」

まあ、最悪という考え方ではある。

そんなことにはならないだろうという考え方が俺の思考内にはある。

そう考えたところで俺はふと後ろからの視線に気が付いた。振り返り見回しても既に視線の主はいない。

ここ数日外で過ごしている理由の大半はこの視線が理由だったりする。この視界に嫌な予感がしていた。なるべくクーデリアの居場所を教えるわけにはいかなかった。

なんとなく……この視線がアインのモノのように感じたからだ。

13

エガーはスラム街と中心街の境にある商店街のような場所におり、イオリと共に火星ヤシで作られたジュースを飲んでいた。

しかし、飲んだ矢先にエガーはまずさに吐き出しそうになる。すると、販売していたおばあちゃんが笑いながら説明してくれた。

「おお、はずれを引いちまったね。火星ヤシは不味い外れあるのさ。このジュースは何回か飲んでいると時折不味い時がある。まあ、ちよつとしたギャンブル感覚だと思いな」

ケタケタと笑うおばあちゃんをしり目にエガーはオドオドした動作でもう一度口にジュースを運ぶ。その間にイオリは心配そうな表情で見守っていた。

しかし、今回はまずくなかったようでも飲んだ瞬間に笑顔になるエガーを見てイオリも得外になつてしまう。

「おいしい。最初呑んだ時はまずくて吐き出しそうになつたよ」

「ふふふ」

イオリはつい微笑みながらジュースを飲み込む。すると、イオリもはずれを引いてしまったようで今度は吐き出してしまう。

エガーは笑いながらティッシュを取り出してイオリの口周りを丁寧に拭き取る。

「あはは。はずれを引いちゃったね」

「笑い事じゃ……」

恥ずかしそうにしているイオりにエガーは笑顔で返す。

ここ最近はいおりはメアリーに内緒でエガーと会っていた。しかし、メアリーは心配になっていた。イオリが自分に何も告げずに勝手に出ていくことに不安を覚えた。

双子として一緒に育ってきたメアリーからすればイオリが自分に何も告げないことは今まで存在しなかった。

いつだって自分に相談していたイオりに秘密ができたことをうれしく思う反面不安にも思う。

だから今回はこっそりについていこうと考えクレアの反対を押し切ってついてきていた。

クレアはエガーを見ようとせずどこか気持ち悪そうにしている。

そんなクレアに不安に思ったメアリーは心配そうにしながら話しかける。

「大丈夫？なんかさつきから気持ち悪そうだけど」

「いえ……何かあの男の人……気持ちが悪い」

なんとなく、あれが自分に近い存在だとクレアにはわかっていたのかもしれない。同時にエガーもまた近くに何かがいるとわかっていた。

そんな風景をアインはずっと見ていた。

「ちようどいい。作戦を実行に移すか」

そう思い彼は物陰から出ていき、エガーの元へと歩いていく。エガーに近づく人影をメアリーははつきりとみており、それがサブレから報告にあつたアインだとすぐに判断できた。しかし、先にそれを把握し言葉にしたのはクレアだった。

「アイン!？」

「やっぱり。クレアさんはここに居て！」

そう言つてクレアを物陰に隠したままで出ていく。同時にエガー

はアインの姿を見た瞬間青ざめていく。

「探したぞエガー」

これは嘘である。とつづくに見つけていたにもかかわらず、今日まで放置していたのは利用価値が最大まで高まるのを待っていたからである。

イオリもまたサブレから聞いていて為にアインの正体に気が付いた。

「あなたは……アイン・ダルトン」

「ほう……そうか、サブレ・グリフォンから聞いていたのか、だったら自己紹介をする必要性が無いな」

「大丈夫!? イオリ」

「お姉ちゃん!?!」

メアリーは一人でアインとイオリの前に立ち尽くし、アインに警戒心を丸出しにする。

アインは残酷な表情を浮かべながら言葉に力を載せる。

『強制命令：滅ぼせ。すべてを』

エガーは頭を抱え苦しみ始める。イオリは心配そうな表情を浮かべながら抱きしめ声をかける。メアリーはアインを睨みつけ怒鳴りつける。

「何をしたの!?!」

「この男はクレア様のDNAで作った人工人間だ。最も、人工人間の中でも成功作であり失敗作でもある。言う事を聞かないからこそ、強制的に言うことを利かせる力が必要だという事だ」

「じゃあ……こいつは」

「そう……敵だよ」

アインは残酷そうな表情を浮かべていると、アインは少しづつ下がっていく。

「最後に一言だけ言っておくよ。そいつを殺すことを進める。そうではないと……みんな死んでしまうぞ」

そう言って建物の陰に入ってしまう。

メアリーはアインを追うか、それともイオリを助けるかで悩み、結

果としてイオリを助ける道を選んだ。

エガーに銃を向け引き金を引こうとする。しかし、それをイオリが身を盾にするように邪魔をする。

「どういてイオリ！そいつを生かしていたらこの街が滅びるのよ！」

「駄目………何か………何か方法があるはず」

エガーはイオリをメアリーの方へと押し出し、イオリに向けて無理矢理笑顔を向ける。

「エガー!？」

「き………君は………僕の」

メアリーはイオリを押しさえながら片手で銃を向ける。

「はや………く、僕………をー」

苦しみながら銃の引き金を引こうとしたその瞬間に地震の揺れで銃の照準がずれ弾丸は遙か右端へとずれてしまう。

メアリーはまずいを気配を感じ取り、そのままクレアの元へと撤退する。その間もイオリはエガーの名前を叫んでいた。

「エガー!!エガー!!!」

しかし、探していた場所にクレアは既にいなかった。

14

サブレは地震の揺れで体勢を崩しそうになる。同時にアスナも体勢を崩しそうになっているのをサブレは支えてやり、同時に雪之丞の会社まで引き返していた。

しかし、中の様子がおかしいとアスナは真っ先に部屋の中に入っていく、事務所までの出入り口で倒れているエンビを発見した。

アスナはエンビを抱きかかえ、彼に問いかける。

「どうしたのですか？」

エンビは申し訳なさそうな表情で謝りながら一筋の涙を流す。

「すいません。クーデリアアさんをみすみすレジスタンスの連中に………！」

サブレはハッと意識を切り替え、会社の出入り口から走って出ていく。通りの前を念入りに調べていると、車が止まっていた跡を見付けた。

「子供達や俺を守る為にクーデリアさんはわざと奴らに……」  
「してやられた」

サブレはつぶやき、そのままエンビに近づいていく。  
「エンビと言ったな。前に俺が言ったソニアという女が待機している  
拠点の場所を覚えているか？あそこまで子供達を連れて行け」

エンビは悔しそうにしながら「分かりました」と言っただけで子供達を連れ  
ながら移動していく。サブレはアスナにもついていくようにと促  
すが、アスナは力強い表情と瞳をしながらサブレに問いかける。

「私もついていきます。何もできないままの自分ではいられないで  
す」

俺はアスナを説得する言葉をあきらめ、道路側へと視線を向けたと  
き同時にアインが隠れていることに気が付いた。

「アイン!!ここそそしていないで出てきたらどうだ?」

「そう怒鳴りつけるな」

素晴らしいながら物陰から姿を現しアインはヘラヘラと笑いながら  
姿を現す。

「いいのか?仲間を助けに行かなくて」

何を言っているのか全く分からなかったが、きつとクーデリア・藍  
那・バースタインの事だと理解しはつきり言ってやることにした。

「バースタインは別に仲間じゃない」

「バースタイン?そうか……ここにいたのか。しかし、ここにいな  
いという事は……テラが連れて行ったのか」

小声で何かをぶつぶつ呟き、確信したような表情を浮かべる。しか  
し、その後が続いて口にした言葉は予想外の言葉であった。

「そっちではない。イオリ……って言ったかな?助けに行かないと危  
険だぞ。もうじき彼女はこの街と一緒にモビルアーマーの餌食だ」

なんて言った?イオリ?危険?何の話だ!?

俺はとっさに駆け出そうとしたが、アインは面白がるように新しい  
事実を述べた。

「ああ、イオリとかいう女をあきらめてクレア様を助けに行くという  
手もあるな」

クレアを助けに行く？

「クレア様は今頃ククナ様の手の者が回収しているところだからな」

「なんで!? イオリやクレアがこの街に居るんだ!?」

そつちの事実には驚きを隠せない。

俺が動揺していると、さらに事実をさらけ出す。

「それともレレとかいう女を助けに行くか?」

「お前!! レレにも何かを言ったのか!」

「ああ、EDMの地上部隊に『クーデリア・藍那・バーンスタインはこちらが確保した』と告げておいた。今頃ククナ様の手の者が襲撃している頃だしな、おそらくレレという女が単身この地に近づいているとも思うまい」

クソ! こいつ。完全に楽しんでる。この状況を!!

「その表情だ! その表情が見たかった。お前のスタンス、強欲とも見れる誰でも大切にするその姿勢は逆に言うと、全てを大切にする半面一人を決めることができないという事だ。お前は一人を選べば、ほかの誰かを傷つけてしまう事を理解しているからだ」

アインの前に一台の軍用車が彼を庇うような形で停止する。

「お前の選択肢は全部で四つだ。一つ目『イオリとかいう女を助ける』、二つ目『クレア様を助ける』、三つ目『レレとかいう女を助ける』、四つ目『クーデリア・藍那・バーンスタインを助ける』だ。悩み、苦しみ、くじけてしまえ」

まるでその言葉は呪いの言葉のように聞こえた。

足元がふらつきそうになってしまう。

「では……さっらばだ」

そう告げてアインはその場から立ち去ってしまう。

どうする? どうすればいい!? 俺は誰を助けに行けばいい!?!?!?

そんな、悩む俺にアスナは覚悟を決めた瞳で言葉を放つ。

「私はクーデリア様を追いかけます。あなたはイオリという方を助けに行ってください。クレアさんという方はイオリさんの後でいいと思います。あの人は連れ去ったという言い方をしました。という事はクレアさんに利用価値があるからだと思います。すぐにどうこう



するとは思えません。だったら、助けに行くべきは命の危機に瀕しているイオリという方だと思います」

はつきりそう告げる瞳は覚悟をはらんでいた。しかし、そんな言葉を鵜呑みにすることはできない。

「お前がバーンスタインを追いかけてどうする？お前が議会の前にいるころには彼女は中だぞ!？」

「でも、この場所でおとなしくなんてできない!もう、我慢しないことにした。自分にできることをただ貫くだけだから」

そして……アスナは俺に思いを告げる。

「私は……あなたが大好きです!愛しています。そういえます。でも、その気持ちを言わなかったのはあなたが一人を決めることを恐れていると分かったからです。きつと、クレアさんもレレさんも同じ気持ちだと思う。だから、あえて自分の気持ちを告げなかったんです。でも……私はそうしません。私はずるいと思う」

アスナは「それでも」つと言い、俺に一気に近づきキスをする。そして、驚きを隠せずにいるとアスナは笑顔を見せる。

「私はあなたが大好きだから。他の人達に負けないぐらいに。だから、聞かせてください。みんなを助けた後で、私達に聞かせてください。あなたが悩んで出した答えを私は馬鹿にはしません」

俺は卑怯だ。女にこんなに勇気を振り絞って告白して、そのうえで俺の答えを待つと言ってくれる。

なのに、そんなに俺は臆病な俺にいまだに愛想尽かそうとせず、それでもはつきり待つといわれる。俺もいい加減覚悟を決める時が来たのだろう。

逃げ続けてきた思いに、決着をつける。

イオリを助ける。クレアも助ける。レレも助けて、アスナも助ける。そして、答えを出す。

「分かった。みんなを助けてお前とレレの元に行く。そして、答えを告げる。約束する」

そう言うとアスナはそのまま駆け出していく。遠く離れていく彼女に俺は大きな声で告げる。

「レオをそっちに向かわせる!!まずはレオをそっちに向かわせる!!いいな!」

アスナは笑顔で答えてくれた。

俺は安心して駆け出していく。

ラブ・イズ・フォーエバーⅣ 《永遠の愛を君に》

15

揺るがない意思と迷いのない決断力。いつだって俺が周囲に言い続けてきたこと——、「自分の道と意思は自分で決めろ」それは俺自身の正義でもある。

迷う事はそれだけ時間の無駄になってしまふ。そんな時間があるのなら俺は『トライ&エラー』を繰り返すだけだ。

何度だって挑戦し、失敗するたびに反省を繰り返すだけ。

何度だって挑戦する。その大切さを教えてくれたのは……：オルガ、お前だった。

お前のその姿勢が俺のすべてを変えたといつても決して過言ではない、今までの俺は完璧であろうとしている分、どこか人間らしさを見失いかけていた。

そんな完璧さとは真逆のオルガは俺にとって憧れの人物と言つてもいいのかもしれない。

お前の濁っている生き方、みんなと汚れて、みんなと一緒に生きていきたい——、そんなオルガを羨ましいと思うようになった。

サイガの事も——、オルガの事も——、羨ましいと思うようになった。

俺の持つていないモノを持つている二人を羨ましいと思うようになった。いや——、憧れるようになったの間違いだろう。

まあ、そんな事を言えばオルガやサイガはきつとこういう——、「俺の方こそお前に憧れているんだぞ」つと。

結局俺達は互いに憧れ合っているのかもしれない。

人間というのはお互いに似た人間に好意を持ちがちだが、逆にお互いに違うところを持つている人間に憧れを抱くものなのかもしれない。

でも——、オルガと出会い、サイガと出会う事で己の中に存在する『闇』を知ってしまった。

その『闇』の正体と誕生の経過を俺はこの悲恋の先に知ること

なった。

嫌、俺は知っているべきだったんだ。

おかしいと気づくべきだったんだ。

この『クリユセ事変』と呼ばれる一連の騒動がたった一人が起こしていた事だったなんて、だって——、そいつを俺や兄さんは知っていたはずなんだから。

『黒』という名前の『どす黒い闇』は——、グリフォン家の家庭環境が生み出した『闇』だからだ。

だから俺は許せないんだ。その『闇』がオルガやサイガを殺したという事実を俺は否定できず、逃げることはできない。

そして、その『闇』が今度はクリユセに生きるすべての人を利用する形で俺を追い詰めようとしていることを俺は否定できない。

だって——、その『闇』の存在理由は俺と兄さんを追い詰めることなのだから。追い詰めて、問いかける。

逃げていないか？ 誤魔化しているんじゃないのか？ なあなあで済ませていないか？ それでいいのか？ お前は……お前達は最低で悪の人間じゃないのか？

そういう風に問いかけている存在でもある。

そいつが、エガーとイオリの悲恋を引き起こしたのだから、俺はイオりに合わせる顔が無い。

16

街中を駆けていく中、クレアの事を、レレの事を、アスナの事を思う。思い出す。

俺は最低の男だと思う。誰か一人を選ぶことが、他の大勢を傷つける行為だと理解し、その結果逃げる事を選んでしまった。

しかし、またその行為も彼女たちを傷つける行為だと知ってしまった。

知ったのなら見て見ぬふりはできない。決めなくてはいけない時が来たのだ。

だが、その前に俺は救わなくてはいけない。仲間を、イオリを——、たとえばイオリに嫌われることになったのだとしても、イオリ

に憎まれる結果になっても、それぐらいは背負う。

それに、俺を嫌う事で、俺を憎むことでイオリが前を向くことができるのなら。俺はその憎しみを背負う。

走り去り、大通りに出たところでクリユセの端の方で大きな地響きと揺れと共に地面から赤い大きなモビルアーマーが姿を現した。

「俺が……!?イオリ、無事でいてくれ!!」

ダメだ!このまま走っていたんじゃ間に合わない。

そう思った時、俺は大きな声を上げた。

「来い!!エデン!!」

周囲の人間たちはモビルアーマーから、議会の方から逃げていく。そんな中、エデンはまるで俺の声が聞えていたように姿を現した。上空から飛来し、俺を右手で回収する。

俺はそのままエデンのコックピットの中に飛び入るが、中には誰もいない。

どうやってここまで来たのかは考える暇がなかった。

俺の意識を組み、自動で動いたようであり、俺は操縦桿を強く握りしめそのままモビルアーマーの元へと向かう。

モビルアーマーの様子を上空から確認しつつ、イオリ達の姿を探す。

モビルアーマーは全身を赤で統一されており、背中にはプロペラが付いているドローンが収納されているのが上空からはよく分かる。左右に伸びている大きな羽のようなアーマーには片方に三個もの拡散ビーム砲が付いており、合計で六個存在する。前と後ろに大きな実体のクローが二個ずつ付いている。

そして、そのモビルアーマーの目の前でイオリとメアリーを発見した。

イオリと連れて逃げようとしているメアリーと、抵抗しているイオリの姿を見える。

そんな時、イオリがどうしてそこまでしてあそこにとどまるのかよく分からなかった。だが、ここで見捨ててはおけない。俺は急いでイオリとメアリーの前に降り立った。

「ここから離脱するぞ！」

俺の怒鳴り声に近い声を聴いてメアリーは「お願い！」と返すのに対し、イオリだけは「エガー！」と誰かの声を叫び続けている。しかし、その『エガー』がおそらくモビルアーマーのパイロットだろうということぐらいは俺にも分かった。

逃げようとしたとき、モビルアーマーはコンテナからドローンを広範囲に展開させる。

嫌な予感を感じさせつつ、拡散ビーム砲が六個全部攻撃態勢を作る。しかし、その攻撃は予想もつかない形で周囲から襲い掛かってきた。

放たれた拡散ビーム砲の攻撃はドローンに向かい、ドローンはその攻撃を屈曲させて地面にあられのように降り注ぐ。

咄嗟にリングファンネルを防御モードで展開させ、両手でイオリとメアリーを守る様に包み込む。

一旦攻撃が止んだ瞬間に俺は二人を落とさないように、急いでモビルアーマーから距離を取る。モビルアーマーは移動速度がほとんど存在しないのだろう。実際、エデンが移動していても追いかけてようとはしない。俺はある程度距離を開けたところで二人を下ろしてそのままモビルアーマーの元へと向かった。

17

初めて出会った時、私——、イオリはエガーに怪しいと思ったことは無い。純粹で優しそうな表情をしたエガーに心を惹かれた。

二日目、同じ場所で私を待っていたエガーと一緒に商店街を見て回り、猫と戯れながら遊んでいた。

三日目、先に行つて待つていようと朝日が上がる前に待ち合わせの公園に向かった。しかし、エガーはそんな私より早く待つていた。

彼曰く——、「僕には帰る場所が無いんだ。帰りたい場所もない。君と同じ場所に居たい」と言ってくれたことがとてもうれしかった。

四日目、私はエガーの秘密を知ってしまった。

彼が知られたくない秘密だった。なのに、私は彼を救ってあげるこ

とすらできなかつた。

彼が苦しみ、殺してほしいと懇願したところで私はようやく彼に恋をしていたのだと思い知った。

もっと早くに彼の苦しみを知っていたら、もっと早くに私が誰かに相談していればよかったのかもしれない。

何が正解で、何が良かったのかすら分からない。

いつそのこと出会わなければこんなに苦しい思いをしなくても済んだのかもしれない。

でも、私は――、エガーに出会えてよかった。それだけは言える。

僕は試験管の中で生まれた。知らない人間のDNAで作られた人間。生まれたときから自分が何の為に生きているのかが分からなかつた。

自分は生きている意味があるのか分からない。

でも、イオリと出会い、その意味を知りかけた。

楽しかったんだ。待っている間ですら楽しかった。

次の日の事を想うだけで心がポカポカと温かくなる。あそこに行きたい、知らない所に行ってみたい、これからも……でも、それもこれで最後だよ。

君を傷つけるくらいなら僕は死んだほうがましなんだ。

君を愛しているとわかつた。

僕は君への永遠の愛を誓う。だから……泣かないでほしい。

18

モビルアーマーの右肩に『フォルテツシモ』と英語で描かれており、そこでようやくモビルアーマーの名前を知ることになる。

拡散ビーム砲はドローンを経由してエデンの下の方から襲い掛かってくる。右へと大きく移動していき、俺がいたところをビームが通り過ぎていく。

よく考えればビームのメリットを最大限生かした戦法だと思う。常に拡散ビーム砲が襲い掛かってきて、俺はビームサーベルを二本抜きビーム砲の連続攻撃を回避しつつフォルテツシモに近づいていく。

しかし、近くなればなるほど三百六十度全方位から常に攻撃を浴びせるといふ不本意な状況になる。

再び距離を取る。

しかし、今度はフォルテツシモは周囲に逃げまどっている人々へと攻撃の矛先を向け始める。地面にミミズ腫のような痕跡が刻まれている。

やばいという気持ち先行しフォルテツシモに近づいていく。まるでそれを待っていたように後ろから屈曲したビームが五本襲い掛かってきた。俺はとっさに防御モードへとリングファンネルを展開して攻撃を受け止める。

一点に収束された五本のビームはエデンを近くのビルにぶち蹴るほどの衝撃を与えた。

「ぐううー！」

コックピット内にも衝撃が伝わってきて大きく揺れる。すると、正面のモニターにビームのままばゆい光が見えた。正面に防御モードで展開したリングファンネルが少しづつ限界に近づいていく。

『防御モード限界まであと30秒』

そんな無慈悲な言葉に俺は舌打ちをするしかない。

ダメか？そんな風に覚悟を決めていると、イオリの声が聞えた気がした。そんな瞬間にフォルテツシモの攻撃が一旦止み、俺の視界が開けた途端、視界の端にイオリが見えた。

「逃げる!!」

そんな俺の声など届くはずもなく、イオリは声を上げながら走っていく。

「エガー！出てきて！私を一人にしないで！」

機体をビルの中から起こし、フォルテツシモは攻撃態勢をイオリへと向ける。そんな時、ある男の声が聞えた。サイコフレームが届けてくれた言葉は俺に躊躇を取り払った。

『僕を……僕を殺してくれ。彼女を殺したくないんだ!!』

エデンのビームサーベルが二本を引き抜き、そのままフォルテツシモのほうへと走っていく、拡散ビーム砲にビームサーベルを差し込



み、そのままイオリの方へと駆け付けていく。大きな爆音と地響き、空気が振動するような感覚を周囲に与えていく。そんな中、イオリの悲鳴が俺の心に傷を与える。

「エ、エガー!!嫌ああ!!!」

涙を流してただ手を伸ばすイオリを守ってやることしか出来なかった。

俺は……………無力だ。

19

イオリは「エガー」つとつぶやきながら、涙を流しながら必死になつて探していた。フォルテツシモの残骸の中からコックピットを、エガーと呼ばれている人間を探そうとする。

何度も、何度でもつぶやき続けながら。

俺はコックピットの中からそれを見守ることしかできなかった。

メアリーもようやく追いつき、イオリの元へと行こうとする。しかし、俺はメアリーの前にエデンの手を置いていく道を遮る。

一人にするべきだ。

そして、ようやく見つけたコックピットからは機械の破片を体中に突き刺さっているエガーと呼ばれている若者の姿だった。

まだ、体の形が残っているだけましというものだろう。

イオリはゆっくりと抱き上げ、何度も彼の名前を叫び、何度も涙を流す。

エガーはゆっくりと目を開き、イオリの涙を右手で痛々しい腕をさらしながら拭き取った。

「な、なか……………ないで。君が……………生きてい……………るだけで……………うれ……………しい」

「どうして……………?私を置いていかないでよお」

強く抱きしめ、エガーは嬉しそうに微笑んだ。

「君は……………僕の……………太陽……………だから」

「私も……………あなたは太陽だった。だから……………!」

生きていてほしかった。それがイオリの本心なのだろう。

しかし、エガーは彼女に自分の思いを告げる。

「忘れ…しないで…いて…、きつと…僕な…んかより…いい人…が…見つかるよ。新…しい…恋…をして…幸せ…になつて」最後の力を振り絞り、自分の思いを告げる。

「そして…その…人…としあ…わせになつて。僕…は、君…が幸せ…に…」

そこで力尽き腕は地面へと落ちていき、エガーがその先を言うことは無かった。

イオリの悲鳴のような声が周囲に響かせ、議会から聞こえてくる銃撃音が俺の怒りを増幅させるには十分だった。

20

今回のエピローグ

イオリとメアリーを連れてサブレはソニアの元へと連れていき、そのまま去っていった。

イオリは終始エガーの遺体を抱きしめていたが、ソニアは「そろそろ埋めてやりな」という言葉に最終的には納得してソニアと共に埋めてあげた。

その後はイオリは座り込み涙を流し続けていた。

そんな時、シムカスとメテオが合流した。

シノはメテオから降りてきて、サブレからの伝言をソニアから聞くことになる。

「レオとマークが既に先行しているってさ。どうもレレちゃんが独断で議会の中に入り込もうとしているらしくて、レオ、マークとアスナとかいう女性と共に議会の中に入ってクーデリア・藍那・バーンスタインを救助してほしい」

それがサブレからの伝言だった。

それを聞くとシノはイオリの方へと近づいていき、「大丈夫か？」と訪ねる。勿論、何があつたのかはまるで分らなかつたが、明楽と共にイオリのみに何か起きたという事は姿を見れば明らかだった。

イオリは涙目になりながらシノと明楽の方へとみると、シノの姿とエガーの姿が重なった気がした。一瞬だけ期待したのかもしいれない。しかし、一瞬で現実に引き戻され、俯いてしまう。

シノは片膝をつき、両手をイオリの肩に置く。

シノは何も言えず、イオリは衝動的にシノに抱き着いて大きな声を上げながら涙を流す。シノは驚きを隠せず、どうしたらいいのか全く分からない。しかし、慌てふためくわけでも無く、ただ……抱きしめることしかできない。

明楽はシノが抱きしめている間、黙っているメアリーの元へと行き尋ねることにした。

「止めなくていいの?」

「いいわよ。私にはあの子を助けることができなかつた」

『あの子』がイオリではない位は明楽にだつてわかつた。

明楽は珍しく真面目な表情をしながらメアリーに背中を向ける。

「らしくないの……いつもだつたら「何しているのよ!?!」って蹴るところなのに」

明楽は叩かれるぐらいは覚悟したが、メアリーは覇気の無い声で「そうかもね」つつぶやいたのち、明楽の背中におでこを押し付ける。

明楽は多少驚いたのち後ろを見ようとするが、そんな行為はメアリーの一言が制止する。

「今は……後ろを向かないで。少しでいいから」

メアリーの鳴き声が聞こえてきた。

メアリーが珍しく後悔している。イオリを助けられなかつたことを、イオリが好きになった男を見殺しにしたせいでイオリが苦しむ羽目になったことを、誰よりも後悔しているのは彼女だつた。

いつだつて妹を守るのは姉の役目であると自負してきたメアリーは、自分の選択肢がイオリを苦しめたことを激しく後悔していた。

明楽は困った風に頭をかくことしかできなかった。

ビスケットは先ほど来たソニアからの情報とコットン・アドモスからの情報をみんなと共有したところだつた。

ソニアから聞いたイオリとサブレ、クーデリアとレジスタンス、議会周辺で起きた戦闘もきつちりと耳に入っている。

コットンからは木星帝国の研究施設の話聞いた。その際に『黒衣

の騎士』なる人物と接触したこと、その人物像がイオク・クジヤンではないかと疑った話をした。

しかし、ビスケットからすればイオクという人物にあったことが無いので、いまいちピンとこない。

そんな中、ビスケットの前にポニーテイルのアトラが洗濯室から姿を現した。エプロンの端で手を拭きながらビスケットと視線が合う。

「あっビスケット。ちょうど話があったの」

そういいながらポニーテイルをほどき、髪を左右に振る。

ビスケットはアトラに三日月の事を離すべきかどうかで悩んでいた。しかし、三日月はアトラには話さないでほしいと言われている。

しかし、アトラはビスケットが悩んでいる間に切り込んでくる。

「あのね、さっきの二人からの報告を聞いて思ったんだけど」

「あ、え？何の話？」

「いや、だから。さっきソニアさんとコットンさんの話を聞いて思ったの。なんか……偶然にしてはおかしくなって。だって、議会周辺で戦闘が始まったこと、同時刻にモビルアーマーが姿を現したこと、クーデリアさんが連れて行かれた事、こちらにもモビルアーマーが姿を現し……ライド君が命を落としたこと」

ライドの所で一瞬言葉を詰まってしまう。アトラなりに覚悟を決めて聞いた話である。

しかし、真剣な面持ちでビスケットの方を向く。

「これが……これが全部この数時間の間に起きたことだよ？不思議だと思わない？それに、コットンさんが忍び込むときにはエガーっていう人はいなかったんだよね？多分時間的に直前だったんじゃないかな？そのほとんどがサブレさんとビスケットを中心に行っているんだよ。おかしいと思わない？」

そういわれてしまうとビスケットはおかしいと思い、ふと考え込んでしまう。

クリュセ一帯で起きたこと、そのすべてがサブレを中心で起きている。今回の分断とその間に起きた出来事。

「砂嵐を使った分断、クリュセ内で起きた戦闘、木星帝国内のごたご

た、それを引き起こした人物がいる？どんな目的で？クレアさんが、レレさんが、アスナという人が……サブレに好意を持っているかもしれない人を意図的に集めて何をしたいの？」

そんな時、黒衣の騎士の存在を思い出し、サブレとオルガとサイガの関係性。ビスケットは疑っていた。オルガとサブレの関係性。

『何かを手に入れる代わりに何かを失う』

そんな呪いみたいな体質をサブレは長らく苦しめられてきたとビスケットは知っている。

しかし、その体質もアフリカ戦の後からは見られなくなった。

そう考えたところで、ビスケットは全てを繋げてしまえた。

火星で起きた事件、サブレの体質の話や、オルガとの関係性、そのすべてが一本の答えへとつながっているのが分かった。

そんな時、ビスケットは涙を流した。

『俺は見逃してきた。サヴァラン兄さんの事も、サブレの事も見逃し続けてきた。小さいころの二人はもう薄くなっている』

ビスケットは気づいてしまった正体に、見逃していた真実に涙を流した。

同じ過ちをビスケットは繰り返してしまったと後悔した。

『サヴァラン兄さんと同じ過ちを俺はまた繰り返そうとしているんだ……おれは……！』

そう思った時、ビスケットの両頬にジンジンという痛みと共に意識がアトラの方に向く。アトラは真剣な面持ちと共に徹かに感じる怒りの感情をにじませる。

「そうやって……うじうじすることがビスケットにできることなの？また、同じ過ちを繰り返すの？ビスケットはサヴァランさんの時の事を後悔していたよね？あの時と同じ後悔を繰り返すの？違うよね？何？今、ビスケットしなくちゃいけないこと」

ビスケットは涙を拭いて……まっすぐアトラの方を向く。

「サブレを助けに行くこと」

「だね。行ってきなよ」

アトラに一言お礼を言って駆け出していくビスケット。

『サブレの正義。それがサブレの道になっているのは確かだ。だからこそ、真の敵はその正義を利用したんだ。即決即断のような正義、それは裏を返せば解決する速度の速さは連続で問題が起きた際に連続で解決できるといふ事だ。だから連続では起こさず、同時に全く同じ時間帯に事件を起こしたんだ。サブレの正義を逆手に取り、全員を人質にしたんだ。まるで……まるで試しているように。選べつと言っているように。いや、言っているのだろう。いや、違う……サブレに文句を言っているのだ、斬り捨てると、お前に必要無いだろうと……完璧である為にお前は斬り捨てるべきなんだつと。それがお前の目的なんだろう？つと今更自分を斬り捨てるなよつと言っているんだ……』『闇』は』

《ラブ・イズ・フォーエバー編終わり ウィー・ラブ・ユー編に続く》

## ウィー・ラブ・ユー I 《償いと闇》

1

では、これから始まる戦いを語ることで最終章への前哨戦にしようと思う。前哨戦でプロローグへ至るための話にしようと思う。

弟であるサブレが最終章に向かうために必要なお話を語ること、みんながサブレの闇と対峙しなければならぬ時が来た。

ある意味みんながサブレと向き合ってこなかったという事なんだろうと思う。頼りになるが故にみんなが頼りにする。それ故にサブレの隣にいる人間が誰もいなかったのだろう。

誰もサブレに追いつける人間がいなかった。

だから、後ろから追いかける事しかしなかった。

いや、居たのかもしれない。それ以上にサブレにストレスを与えていたのだろうという事ははっきりと分かる。

言ってくれれば――、助けを求めてくれれば――、そんな事を言っても今更だろう。

サブレの中で生まれ落ちた『闇』はクリユセや火星中の人々の中にある『嫉妬』や『妬み』、『誤魔化し』と『逃避』を取り込んで大きくなった。

それはサブレが特殊過ぎたという事なんだろう。

だって、サブレは人類の未来を決めることのできる『選別者』なのだから。その上決してあきらめようとしない頑固なところ、何度でもチャレンジするところを含めて考えても、サブレには出来ない事を探す方が難しい問題なのかもしれない。

これから語る話はサブレがどうしてこうなってしまったのかという事を知る話なのだと思ってもらいたい。

俺の弟が何でできていて、どういう人間なのかをまずは知ってもらいたい。

最終章へは主人公であるサブレの話を知ることではしか始められないのだから。

でも、これだけは言える。俺達は――、サブレの事を大切に

思っているという事だけはたった一つの真実なのだから。

だから決めなくちゃいけないのかもしれない。

「私達はあなたが大好きです」——、という言葉にサブレは答えなくってはならない時が来た。

「俺は——の事が大好きだ」——、という答えを。

俺達はそれを見届けなくてはならない。

サブレが誰を好きになり、誰に思いを告げるのかを知るといふ物語なのだから。

そして、サブレの『闇』である『黒衣の騎士』との決着の物語でもある。

2

クリュセの中心に作られた火星連合の議会は四階建ての建物になっており、ロビーから左右に廊下と共に各部屋が設けられており、ロビーから入っており一番奥が議会議堂になっている。

左右にまっすぐ伸びている各フロアはオフィスなどや議員たちの休憩室になっている。

そして、その周りを囲むように道路が整備されており、本来であれば多くの車が行き詰っているのだが、現在はレジスタンスと元ギャラルホルンと木星帝国による銃撃戦が繰り広げられていた。

元々はレジスタンスと元ギャラルホルンが協力しながら木星帝国から議会を取り戻そうと戦っていたが、木星帝国の策略で三つ巴に発展していた。

戦場は大きく分けて三つ、ロビー前の広場、東から入ることができ地下駐車場前T字交差点、最後に、ロビー前広場に行くための唯一のメインストリートである。

どうやら、木星帝国は予想以上の戦力に苦戦を強いられていたらしい。メインストリートでの防衛戦だけで充分だと判断したのだろうが、旧式のモビルワーカーを持ち出してメインストリートを強引に突き抜けていった。

それと同時に地下駐車場へと強引にモビルワーカーと軍用車が強引に入ってしまったところで木星帝国の別同部隊が地下駐車場への出



入り口へと攻撃を開始した。

そんな経過を少し遠くから見ていたのはレオとマーク、それにアスナであった。

人々は戦場になってしまったメインストリートから逃げ出し、彼らは物陰から戦場の様子をうかがっていた。

あとで合流する予定になっているシノと明楽を待っていた。

後ろから駆け寄ってくる二人の影を見付けたマークは嫌そうな表情を浮かべ、シノに向けて小さな舌打ちを聞こえるようにする。

シノはその舌打ちを聞いたのちにもものすごく嫌悪感を露にする。

そんなやり取りをめんどくさそうな表情を浮かべながら明楽はレオの元へと急ぐ。すると、レオの隣に綺麗な女性であるアスナがいるという事に気が付くと明楽の興味は一気にそちらへと移動する。

フラフラと移動しながらアスナの両手を握りしめ真剣な面持ちを維持しながら告白する。

「付き合ってくださいませんか？」

「ごめんなさい」

素早く降られてしまう明楽はアスナの両手を離しフラフラと二歩後ろに下がる。アスナは「今好きな人からの告白待ちなんです。振られたら考えてもいいですよ」とその後でも振られそうな表情を浮かべる。明楽はその言葉を受け、告白待ちの相手を言い当てる。

「もしかして……………それってサブレ先輩？」

アスナは微笑みながらうなずく、明楽は両腕で顔を覆い地面に付しながら大泣きする。

「いつだって先輩は俺の先を十歩行くんだもん!!」

それについては他の三人も同意する。すると、シノは気になったことを不意に尋ねる。

「そういえば、サブレの奴って仲のいい奴がないよな？それってやっぱあいつと気の合うやつがないのか？友達って聞いたことないけどな」

レオとマークはいまいち思い至らなかつたらしく答えられなかったが、明楽だけが思い至つたらしく涙目で答えた。

「え？テム・フォースさんが先輩の唯一の友人なんじゃないんですか？そう聞きましたよ」

『テム・フォース』という聞きなれない名前に首をかしげるレオとマークとシノに対し、話がよく分からないアスナは議会の方を気にしていた。

レオが代表して尋ねる。

「誰？テムとかいう人」

「あれ？知らない？先輩と同期の人で、先輩と互角の実力者だよ！めっちゃ強いよ！サブレ先輩と互角ってぐらいの実力者だよ！本人が言ってたもん「俺はサブレの親友なんだ」って！先輩は嫌そうな表情を浮かべてたけど」

「それって本人が一方的に思っているだけなんじゃないのか？」

「？そうなの？よく知らないけど。でも、強い人なのは確かだよ。俺勝ったことないもん！」

明楽は胸を張り、自慢するように答えた。負けたことを自慢する明楽を哀れな目で見るレオ達。

しかし、明楽でも勝てないという言葉にレオやマークやシノは興味を持ったのは確かだった。

言っただけだが、明楽はこんな性格でもサブレ・チルドレンのメンバーの中でも一番強い。そんな明楽でも勝てない相手に興味を持った。

そして、それを離そうとしないサブレに興味が出た。

そんな時、シノはふと気になったことを尋ねた。

「なあ、なんでサブレはあんなに一人でなんでもしようとするんだ？」

そんな疑問にいの一番に口を挟んだのはマークだった。

「そりゃあ、先輩が基本は一人で何とかなってしまうからだろう？一人で解決できてしまうだけで、基本は俺達が居なくても何とかなる問題が多い。俺達が居れば早く解決できるだけで、多分俺達が居なくても時間を掛ければ先輩は解決できるんだよ。結局はアルン近辺で起きたモバイルアーマー戦だって先輩一人で何とかしたようなもんだっただろう？多分、強すぎるが故なんだろうが、昔からそういう傾向はあった

んじやないか？一人で悩んで一人で解決する傾向」

それは幼いころからの傾向だったのだろうとマークは考察する。

幼い頃より一人で解決する傾向が強くと、それ故に友人なんかの繋がりを求めていかなかったのではないかとマークを想う。

「強く、強すぎる。誰も追いつけないぐらいに強すぎた。一人で居る事を嫌がっていないんじゃないかな？」

マークの一人語りを聞きながら、レオは戦場の方を向き、明楽は物思いにふけっている。しかし、シノだけはその言葉に納得できなかった。

(そうなのか？でも………だったらどうしてサブレは友達を求めているんだ？それはあいつが繋がりを求めているという証明じゃないのか？)

レオは「そろそろ作戦を開始した方がいいと思う」と全員に声をかけ、そのままもう少しだけ近づこうと試みる。

(ビスケット。お前は知っているのか？あいつの事を………)

シノも他のメンバーについていきながら疑問が頭から離れなかった。

### 3

ビスケットと一緒に車に乗ってクリュセに向かっていたところだ。俺、三日月・オーガスは助手席に乗りながら凸凹道を何度も揺れながら進んで行く。

俺はバルバトスで行ったほうが楽でいいと提案したが、モバイルスーツを不用意にクリュセに近づけないほうがいいという理由で却下されてしまった。

ビスケットはそう言うところで頭が固くて困る。

そう思っているとまるで俺の心の中を読んだように嫌な目で見てくる。

「なんか、失礼なことを考えてない？」

『別に………考えてない』

勘が鋭い時が多いので会話するのも一苦労。オルガの気持ちの変化にも過敏に気が付いていたみたいだし、まあ、そういう風に周囲に

気づかうからこそあの頃の俺達はあそこまで行けたのだと今更ながら思う。

きつと本人は否定するだろうけれど、鉄華団を陰で支えていたのは確かにビスケットだった。ビスケットを失った後のオルガの忙しさはやはり異常という状況だった。

忙しく、目を回しながら、それでもみんなを想い続けるオルガの追い詰められているさまに俺達は気づけなかった。支えられなかった。「まあ、多分だけど。オルガを支えようとはしなかっただろうけど、それでも心のよりどころになろうとしたのがサブレじゃないかな？多分サブレとオルガは友人だったんだと思う」

『なんでそう思うの？やけに確信的な言い方をするけど』

ビスケットの言い方はどこか確信めいたものを感じた。

「うくん。サブレの行動を考えていたらなんとなくね」つと苦笑いを浮かべながらそれでもどこか嬉しそうにしている———ように見える。

しかし、サブレという人を知らないから何とも言えない。

又聞きした限りだとすごく強く頼りになりすぎる気がするのは俺の気のせいだろうか？「まあ、強すぎるというのは……あっているよ。だから何だろうね。多分サヴァラン兄さんにも、周囲の人達にも孤高に見えたんじゃないかな？でも、それでもサブレは別に誰かとのつながりを求めようとしたんじゃないかな？自分の事を理解してくれる人を、そんな人間をどこかで求めていた。でも、その反対にそれを拒否していたのもサブレだったんだ」

？よく分からない。どうしてその二つが同列になるのだろうか？誰かを求める心と誰かを拒否する心が並列に語れるのだろうか？

「そうなんだよ。一見見て相反する心はたった一つの目的の元で生まれたんだ。今ならそれがよく分かるよ。道や方法は全く違ったけど、サヴァラン兄さんも同じだったはずだから……：家族の為、親の為それが二人がずっと向き合ってきた思いなんだもん」

そこまで言うともまるでビスケットは向き合わなかった風に聞こえるから訂正してほしい所である。まあ、言わないけど。

「サヴァラン兄さんは家族の為に努力をして、上を目指そうとした。上を見ながら食らいつきながら、アピールしながらね。でも、サブレは親の期待に応えようとするあまり自分を追い込んでいった。それはサヴァラン兄さんも同じかもしれないけど、追い込み具合はサブレの方がひどかったかもしれない。実際父さんや母さんはサヴァラン兄さんよりもサブレの方に期待していたと思うから、それだけサブレの才能の高さはサヴァラン兄さんに嫉妬させたと思うし」

サブレという優秀な弟とサヴァランという努力家の兄。どっちがいいのだろうと考えるが、よく考えるとそれに挟まれるビスケットという立場が一番嫌だと思う。

優秀な弟と努力家の兄……か。

逆の言い方をすれば努力をしないと上に行けなかった兄を見ながら成長したといえると思う。

「だからかな、サブレとサヴァラン兄さんの関係はグリフォン家の中でも冷め切っていたと思う。だけど、それはサブレの所為でもサヴァラン兄さんの所為でもないと思う。でも、そんな家庭環境だからこそ、努力しないと生活が厳しかった。貧乏だったしね」

貧乏だった。という言葉はかつて俺はドルトの時に聞いた気がする。

家が貧乏でドルト3に來たかつたつとビスケットは口に出していた。

貧乏だからこそ、そこから脱しようとする気持ち、そこから生じた家庭環境の悪化、そして両親の死をきっかけに兄弟仲が本格的に割れてしまったという話だろうか？

「そうだね。両親の死をきっかけにサヴァラン兄さんは俺達を養おうとし、サブレは親代わりの人を探そうとした。でも、サブレの行動はサヴァラン兄さんから見たら冷めたものに見えたんじゃないかな？多分だけだね。でも……」

ビスケットは口を重たく閉ざしてしまい、その先が言いにくそうにしており、さらに車の速度を上げながら口を開く。

「それも絆を切りたくなかったが故だったんじゃないかな？親の絆を

切れてしまったからこそ、兄妹の絆を切りたくはなかった。サヴァラン兄さんのやり方では限界が来るとすぐに分かった。だから、探したんだと思う。でも、サヴァラン兄さんには分からなかった。同時に、サヴァラン兄さんのサブレを切ろうとした行為が逆の結果を生んだと思う。親からの期待に応えようとするストレス、二人の兄より優れていたという負い目、そんな負担がサブレの親への思いとつながって『闇』を作り出した」

両親へのストレス、兄妹への負い目……か。正直家族を知らない俺からすれば無縁な感情なんだけど。もつと分かりやすいたえは無  
いかな？

「う〜んそうだね。三日月で分かりやすい……か。三日月には無縁かもね。確かに、オルガとかからの期待を重たいっと思つたことないよね？」

うん。無い。

オルガからの期待を重たいなんて思う事も、思つたことさえもない。オルガが言えば何でもする。

「そういうのをやめてほしかったんだけど」

冷たい目で見られてしまった。

「まあ、いいや。そうだね……ハツシユ君だっけ？後輩が入つてすぐに三日月を追い抜いてオルガの期待を奪つたらいやだろ？」

うん。嫌だ。そういうことを想いたくもない。

「まあ、こういうのは突飛かもしれないけど。要するに、期待されれば、逆に期待されなかった……：されなくなった人間の気持ち。そして、出し抜いてしまった人も気まずいよね」

まあ、そういう言われ方をすれば気まずいと思う。

その辺にサブレという弟の事情があるのだろう。

「親からの期待は次第にサブレにある一つの目的へと突き進ませた。完璧になりたい。親の期待に常に応え続けたいという気持ち。それは反対に周囲から完璧さ完全さ以外の『何か』を排除するように動いた。それが『闇』とつながったんだと思う。サヴァラン兄さんから斬られたことで完璧になるためには他人とのつながりを切つた方がい

いという暴論に迫り着いたのが『闇』で、それでも他人とのつながりを重要視したのが『サブレ』自身だった。ぶつかり合った『心』は歪で不安定なモノへと変わっていった。多分、切り離したのはサイガさんの死がきつかけだったんだろうな」

サイガ・フリーデン。アフリカ戦線の際にビスケツト達と出会った男性というぐらいしか知らないが。どうも友人だったらしい。

しかし、友人になった人間の死がきつかけに自分の『闇』を知ったという事だろうか？「そう、知った。だから、切り離したんだと思う。同時期にサブレは覚醒者に目覚めたって言ってたし、切り離すタイミングとしてはちょうどよかったんじゃないかな？」

だったら、その『闇』の体はどうなるのだろうか？コツトンの話を聞く限りだと、イオク・クジャンの者を使用されているという話だったけど。

「多分、同時期に何か利用できる死体やDNAをアインはククナに引き渡していたんじゃないかな？そのうちのイオクっていう人の死体から作ったクローンを何に使おうとしたのかは分からないけど。丁度ギヤラルホルンを乗っ取ったタイミングだっただろうし、空の器っていうのかな？魂の宿っていない量産型Eの初期型の別タイプの研究用の体に入ったのが『闇』だったんじゃないかな？」

非科学的だなくつと思う反面、覚醒者という別の意味での非科学的な存在である自分やビスケツトを知っていると一定の説得力を持つ。

ゲイナーは言った。人には魂があると、覚醒者は知識の進化系であり、中には魂を覗くこともできるという。記憶や知識というのは一種の魂と言ってもいいだろうと。

『闇』という魂は空の肉体に宿り、まるで自分は作られた存在であるかのようにふるまい、テラやククナを利用することで、間を動き回ることでもクリユセ中をひっかきまわったのだろう。

「サブレやグリフォン家が造ってしまった『闇』はクリユセの人々の『不安』や『向上心』、『嫌悪感』などを喰らいながら成長していき、それを増長していたんだと思う。だから黒衣の騎士なんだよ。『黒衣』……『黒い』騎士なんだ。黒くて暗黒で真っ黒。人を守る騎士が人を

追い詰める。反対だから黒。人を守るや平和を白という色でイメージした場合、黒は何？」

絶望。不安。死。拒絶。……そして『闇』。

「そうだね。だから『黒』なんだよ。『黒い騎士』から『黒衣の騎士』。黒衣の呼び方を黒いに変えて。黒は闇という意味。闇の騎士。戦いや戦争、紛争の中で培ってきた不安や絶望がサブレの『闇』と共に一つになって成長したのが『黒衣の騎士』なんだよ」

それを又聞きでたどり着いたビスケット。まあ、家庭の事情や、サブレ・グリフォンが『選別者』であることを知っていたからこそ辿り着いた結論何だと思う。

選別者であるが故の試練なのかもしれない。

最終戦争に辿り着く前に自分と決着を付けろつと。

「そうだね。そう思えば、アカシックレコードがこのタイミングでサブレに真実を告げた意味が分かるね。『お前は特別なんだよ』つと『真実に向き合え』つて。知っていたんだ。『闇』が巣くっていることも、試練にちようどいいと思ったんだと思う。選別者としての試練」

俺達はクリュセに向かう。まだ、完全真実には辿り着いていない。



## ウィー・ラブ・ユーⅡ 《その闇はどす黒い》

4

まだ、クリュセ内でモビルアーマーが暴れている時、一台の車はクリュセはずれの空港内に停泊していた大型輸送飛行機に入っていく。大型飛行機は荷物やモビルスーツが大量に入る様にモビルスーツより高い格納庫は直接乗り入れができるようにと後ろに作られている。

格納庫フロアは四階構造になっており、それぞれ左右に通路が作られている。

車が入った段階で飛行機は忙しそうに激しく動き回っている。

その車に乗り込んでいた人物がまず右足を出し、そのまま目の前にいる軍服の男が彼女の右手を握って立ち上がるために手伝う。

その人物がゆっくりと立ち上がり長い金髪が風になびいて揺れる。光が金髪に反射し、なびく髪の毛の一本一本に男は見とれてしまう。

クレアは真剣な面持ちで飛行機の中へと進んで行く。

廊下を歩く靴の響く音が部屋の中にも聞こえてくる。金属の床や質素な壁は寂しさを覚えるが、室内の備品はどこか中にいる人を気づかうように木のテーブルに木の椅子、木の箆笥の上には一輪のピンク色の花が透明な花瓶に入っている。

窓の外の景色は自分がこの飛行機の中に入って来た時とまるで同じで、寂しい滑走路に人が何人かが行きかっているだけである。

私がこの部屋に入ってから三十分ほどが経ち飛行機のエンジンの駆動音が金属の壁の振動越しに聞こえてくる。

今更お姉様が何の目的で私を攫うのか分からないが、それが私が幼いころから持っていた触れた人物の記憶や心を覗くことができる力を悪用することであることは想像できる。

しかし、お姉様は私の前に近付くのも嫌いのか、それとも様子をうかがっているのかは分からないが、この部屋の前廊下を通る靴音は軍服の音しかない。

特に警備体制が高いというわけでも無く、このタイプに飛行機をよ

く知らないが、むしろ低いように見える。

モビルスーツも特に搭載しているわけでも無く、警備体制も普通。お姉様の目的がいまいちわからない。

そう思っていると、金属製のドアをノックする音が聞えてきた。私が「どうぞ」と大人しめの声を出すとドアの向こう側から私の声より高い「入るわ」と言う声が聞こえてきた。

その声の主を私は予想していたが、その人物はドアをゆっくりと開け中へと入ってくる。私より多少高い背、スタイルはともよく、短めの金髪にはカールがかかっている。私と似ているのにどこか高圧的な視線と相まってどこか偉そうに見える。

両手を両肘に当てて部屋の中へと入って来る其の人物は私の姉である『ククナ・フォン・フレイヤ』が何を考えているのか分からない様子で入ってきた。その隣には金属の手錠で両手の拘束されたスーツ姿の男が現れた。

「久しぶりねクレア。会えてうれしいわ」

姉は微笑みながら部屋の中に持ち込んだ木の椅子に座ってスーツ姿の男を床に放つ。

「何ですか？」

警戒心を最大限まで上げて会話をすることは難しく、あまりしたくないのではない。しかし、お姉様と会話をすること自体は警戒心を高めないと出来ることではない。

お姉様は足を組み、右手でまっすぐ男を指さすその姿はまるで女王様と言ってもよさそうな面持ちである。

「この男。実はクーデリアの側近の一人だね。実はある『モノ』を見た可能性があるかもしれないの。薬で思考をある程度奪っているからあなたは自由に覗けるはずよ」

そういうお姉様の顔はいつもの微笑み顔である。  
いつだって変わらない。

「…………お姉様は変わりませんね」

「そうは言っても私とあなたでは生活が違うけどね。私は幼い頃から研究所や学校で過ごすことが多かったし、あなたは箱入り娘みたいに

部屋から出してもらえなかったもんね」

「それでも、昔のお姉様はそこまでじゃありませんでしたよ。小さい頃はまだ優しい人だった」

視線を背けもう一度薬で意識が濁っているであろう男性の姿を見る。小さな呻き声を出し、苦しんでいるさまが見ていて苦しくなってくる。早めに見てあげる事がこの男性の為になるかもしれない。

私は床に膝をつき男性の左手を出来る限り優しく持ち上げ、祈る様に握りしめる。

「あ、そうだ。見るのはクーデリアがテイワズのマクマードからもらったであろうカードキーを二つの名前と色。時期は木星帝国がラスタル暗殺前後だと思うわ。それとそのカードキーの行方」

その辺の知識を元に記憶を探っていると、濁った記憶の中からある光景が見えてきた。

クーデリアが赤いカードキーと青いカードキーをマクマード受け取っている姿を横から見ている風景である。

『クーデリア嬢よ。このカードキーをあなたに託す、出来る事ならこれを隠してほしい。その方法は任せる』

マクマードは神妙な面持ちで語り掛け、クーデリアは嫌な予感を表情に出している。

『何があったのですか？』

『今は言えん、いずれ知る日が来るだろう。そして……最後の願いだ。我々を探さないでくれ』

そこで記憶は切れており、次に探る記憶はカードキーの行方だったが、ヤマギという男性？に青いカードキーをわたしている記憶しか見えてこない。少なくとも赤いカードキーについては分からなかった。「で？どうだった？」

お姉様は先ほどから全く変わらない一件優しそうな表情を浮かべながらこちらを見ている。

「青いカードキーはヤマギという人が持っているようです。赤いカードキーまでは分かりませんでした。少なくともこの男性は知らないようです」

「そう、じゃあカードキーの名前は？」

「……青いカードキーは『マイク』で赤いカードキーが『アイス』でした」

お姉様は微笑みの種類を含みのものに変え、小声で「なるほどね……」つと一人思考し始めてしまう。

マイクとアイスという名前に私自身どこか聞き覚えがあるように思えた。どこかで聞いたことのある名前だっと思わしていると、ある家の掃除をしていた時の名前だという事に気が付いた。

「確か……『傷だらけの王様』ってタイトルの絵本の主人公とヒロインがそんな名前だったような気が……」

そういう話だったような気がする。

お姉様は少しだけ驚いたような表情をしつつ一瞬で元の微笑みに戻ってしまう。

『傷だらけの王様』著者：エブリー・ロン。エブリー・ロンは木星出身者だと言われているけれど、木星にはそんな人間はいないという事は分かっているわ。じゃあ、このエブリーという人は誰なのかしらね」

「分かっているような声ですよ」

楽しそうに微笑みながらからかっている事だけは私には分かる。

昔からたまに会えばこんな風にかからかっただけで楽しんでいる人だった。

今も多少楽しんでいる最中なのかもしれない。

「エブリー・ロンは厄祭戦時代の人間で地球出身者よ。厄祭末期に開発者として多少は名をはせた人間よ。いつ死んだのかすら分からない人間なだけだね。まあ、アカシック・レコードが回収したんじゃないかしらね。死んだ人間の脳をデータ化して利用していたみたいだし、多分現在のPNO1の前任データがエブリー・ロンなんでしょ」  
「だったら……傷だらけの王様は……」

「そこまでは分からないわ」

そう言っていると、飛行機が少しづつ移動していき飛び立とうとしているのが見えてわかる。すると、空港の中に入り込んでくる一台の車が見えてくる。誰かが乗り込んでいるように見え、後ろ左側の窓

から身を乗り出しサブレがアサルトライフルを護衛隊に向けて引き金を容赦なく引く。

「クレア!!」

自分の名を叫ぶ彼を見る為に身を乗り出して窓にピツタリと引っ付ける。懐かしく思える彼の姿を見て私も叫ぶ。

「サブレ!!」

サブレの反対側の窓からは仮面を着けた男『モンターク』が同じように身を乗り出してアサルトライフルを撃ち続けている。

しかし、車がたどり着く前に飛行機は滑走路に乗っかり、速度を大きく上げていく。少しづつ巨体を浮かび上がっていき、車を引き離してしまう。

「安心しなさい。彼がここまで来たら返してあげるわよ」

微笑みを絶やささないでこちらを見ながら足を組みなおす。

私はサブレが来てくれたことに嬉しさを覚えながらお姉様の言葉を考え直す。

「それに、私は彼に会ってみたいのよね。あなたの心を射止めた人をこの目で見てみたいわ」

「彼をどうするつもりですか」

似合わないにらみをお姉様に向けるが、お姉様はまるで気にしないようにニコニコするだけだった。

「サブレ・グリフォンが特殊だったのは確かよ。でも、生まれ持った覚醒者だったけれど、それ以降サイガ・フリーデンの死まで力を使わなかったのは事実よ。でも、そのきっかけがあるはずよ。力を封じるときっかけが幼いころにね」

私はそれを知っている。初めて彼の手を触れたとき覗けてしまった。記憶の中にあるサヴァランという兄の絶望と失望の表情が彼を貶めたという事、心に完全になりたいという兄の気持ちは生まれたと同時に他人と違う事、他人より優れている事が他人と分かり合えないことだという勘違いを生み、そんな勘違いが余計に周囲から浮く原因になった。幼いころ、ビスケット君と一緒に学校に通っている間が一番荒んでいた時代だったはずだ。兄の為に、家族の為に『敵』を潰して

いた時代が一番苦しく、荒んでいった。

心に常に影を抱え、闇を抱きしめながら、それでも他人の為を想いながら表では『自分の為に』と言いつづけていた。

その為に『覚醒者』としての能力を封じ込め、自分が普通の人間だと言いつづけてきた。

苦しみ、自分にむけられる期待という名のストレス、他人と違い過ぎるというズレ、優れているが故の不安、そう言う『負』の感情がサブレの気持ちを追い込んでいった。

友達もおらず、誰か好きな人を決めれば他の誰かを傷つけると遠ざけ、家族自分から離れていった。

そんな彼を救い上げたのは、オルガでも、サイガでも、私でもなかった。

前向きに考えよう。少しでもいいから他人に手を差し出してみよう。落ち込んだ時、苦しい時にいつだって彼が声をかけてきた。

初めて地球の学校に通った時、『テム・フォース』は真っ先に声をかけてきた。

「グットモーニング!!エブリワン!!ハウワーカー!!」

「はあ?」

サブレの『闇』ですら手に負えず、それとなく遠ざける作戦しか取れなかったはずだ。それぐらい強く、个性的で、周囲の人間がかすむくらいに明るい。

「ほんとこおしいー」

正拳突きのような構えで右こぶしを前に突き出しつつそう言い放つ記憶は見ていて微笑ましく思う。

自称友人つとサブレは言っているが、彼がいたからこそサブレはここまでこれたと言ってもきつと過言ではないと思う。

「なるほどね。『テム・フォース』……か。東南アジア戦線に入られて一日で崩壊したのよね。それとすれ違いでサブレ・グリフォンが本部防衛に戻ったのよね。まあ、その辺は私が予想してたけどね。どちらかが防衛に回しつつ、反対側が攻めを担当する。まさしく『双壁』よね」

お姉様は鬱陶しそうにしているように見えてどこか嬉しそうに見える。

彼らが戦っている間も常に思い、こうして会っていると常々思う。「お姉様。勝つ気あります?」

お姉様は微笑みを絶やさないでいるだけで答えようとはしない。「いつも思っていたんです。というか火星での戦いも思ったことですが、EDMに勝つにはテラと共闘した方がいいに決まっています。なのに、お姉様はテラといがみ合い、EDMが来るまでテラをクリュセに閉じ込めた。何が目的だったんですか?」

お姉様は答えようとはせず勝手な言い分を口にする。

「まあ、黒衣の騎士の独断専行は別にいいんだけど……結果は私にとって都合が良かったしね。もう、私達の手から離れているけれど、多分クリュセでの戦いで決着をつけるつもりなんじゃないかしら?彼の正体は……人々の不安を浮き彫りにさせる存在だと睨んでいるんだけどね。サブレ・グリフォンと……クリュセに居る人々との関係に決着をつけるつもりでしょ」

そういいながらお姉様は楽しそうにしている。そんな中室内に警報音が響き、お姉様は室内の通信機を手にとってブリッジと連絡を取る。

「何事?」

「ガンダムエデンが接近中です。同時に左側から黒衣の騎士の機体も接近中です」

「あらあら。ここで決着を向けるつもりかしら」

私は窓に手を掛け彼が近づいている事を感じ取っていた。

5

エデンを一旦ソニアの元へと戻しており、イオリとメアリーを預けて、涉に車の準備をさせる。

イオリに対する罪悪が強すぎてどう会えばいいのかが分からない。だから、今は目の前の救出作戦に集中することにする。しかし、そんな中、渓谷の奥から突き進んでいるガフエインの姿をはつきりと確認できた。

ガフエインの中からやはりというか、モンタークが姿を現した。

「クレアという女性が誘拐されたと聞いたが？」

「ソニア？」

すぐさまにソニアの方へと意識を向ける。ソニアはすぐさまに視線を外し明後日の方を見る。この女……どこまで話を広げただ。

モンタークは降りてきてこちらに近づいてくる。

「私も協力させてくれ、もしかしたらアルミリアと接触するチャンスかもしれない」

そういう事情か。

彼からすれば妹の事情や経過を知りたいと言った所だろう。ならば、俺が断る理由にはならない。

「だけど、あくまでもクレア救出が優先だ、そのついでになるけどそれでいいのか？」

「ああ、それで構わない」

渉が車を俺達の近くに寄せてくる。中から「準備できました」っと止めてくる。俺はモンタークと共に車の後部座席に乗り込み、共に走り出す。

クレアが空港に入ったという情報を提供したのはモンタークだった。

「ちようどクリュセの北側でレジスタンスの動向を探っている際にそんな話を聞いたんだ。西の外れへの道を進んだ先にクーデリア・藍那・バーンスタインが火星連合を作ってから開発した空港があると。様々な物資を運ぶために作ったと聞いた。そこを木星帝国は再利用したとな。それを封じる為にククナは砂嵐を起こしていたという目的もあったのだろう。砂嵐が吹き荒れている状況では空港が使えないからな」

仮面を直視すると時折笑いそうになるので、見ないようにしながら思案顔と腕を組みながら考える。

「確かに、通信妨害するという目的以外にもそんな理由があったんだな。外との連絡手段を一切断つ。テラが議会に封じられている間に自分はクレアを連れて離脱……しかし、理由が」



理由が分からない。

そう考えているとその辺も事前に調べていたモンタークが説明してくれた。

「どうもクレアという女性の『能力』に関係しているらしいぞ。どんな力なのかは分からんが、ククナという女性はクーデリア・藍那・バーンスタインが持っているコロニーレーザーのカードキーの所在を知りたいんじゃないかと私は睨んでいる」

まさか……という時は何度かあった。まるで心や記憶を覗かれているような感覚があったのは事実だ。最も、俺が覚醒者として目覚めてからはどうもうまく作用していなかったようだが。

しかし、ククナはクレアには興味がないみたいなきことを言っていないかったか？

あの言葉が嘘だったとはあまり思えないのだが……まあ、直接聞けばいいだろう。

今は目の前に見えてきた空港を前にして選び取ったアサルトライフルをいつでも撃てるようにと準備を整える。

柵を壊しながら突き進み、身を乗り出してアサルトライフルの照準を容赦なく飛行機の周辺に居た護衛部隊に向ける。すると、飛行機は急遽動き始める。

すると、飛行機の窓にクレアが見えた気がした。

「クレア!!」

中からはクレアが叫んでいるようにも見えるが、飛行機は滑走路へと移動しそのまま走り出す。

「このままじゃー!」

モンタークも護衛部隊相手に容赦ない攻撃を加えるが、飛行機はそのまま飛び立っていく。

護衛部隊は全滅したものの、逃げられたのでは意味がない。

「どうしますか?」

外に出た俺に渉が近づいていく。

「仕方ない。エデンを今よこしたから俺とモンタークがエデンを使つて乗り込み、渉は高高度からウイングソードで待機、撤退時に渉はモ

ンタークを回収してくれ、俺はクレアを連れて撤退する」

「分かりました」「了解だ」

すると、エデンは俺の側に降りてきて左手を差し出す。俺とモンタークはそのまま左手に乗り、渉は車で来た道に戻っていく。

俺はコックピットに入っていく、そのまま高高度へと進んで行く。

その時、どす黒い闇が近づきつつあることに気が付いた。

黒い騎士のような機体が突っこんで来ようとしていた。俺は飛行機の上で一旦止まり、モンタークを先におろす。

「あの機体を先に何とかする。あんたは先に救出作戦を開始してくれ」

「分かった。先に救出している」

そう言っただけで飛行機は速度で吹っ飛びそうになりながらモンタークは天井から入れる場所を探し出し、そのまま入っていく。しかし、俺の方は黒い騎士のような機体と取っ組み合いの態勢に移ってしまう。両機は足裏からかぎづめのような装備を出し、足を床に固定する。

両機のサイコフレームが反応したのか、周囲に衝撃波を放つていく。

俺は何とかしようとするが、機体がまるで金縛りにあったように身動きが取れない。すると、敵の機体からどす黒い感覚が迫ってくる。次第に暗くなっていく視界の中、クリュセ中の、いや火星中の『負』の感情が迫ってくる。

その中心にあるのは俺の幼い頃の兄サヴァランの表情である。

親のよくやったなという誉め言葉と兄ができないことをしたという結果が兄からの失望を生んでしまったのかもしれない。

あんなことになるなんて思わなかったんだよ。

闇の底へと進んで行く。

ウィー・ラブ・ユーⅢ 《たった一人の為に》

6

意識がどす黒い闇の奥へと落とされていくのが体中にまわりつく見えない重圧からよく分かる。体中にまわりつく見えない『何か』が体の中に入ってくる。

『お前がいるから！』『あんたなんか生まなければよかった』『火星連合なんてあるから……』『EDMのせいでギャラルホルンに所属している夫は……！』『木星帝国に従うなんて考えられない』

恋人に、自分の子供に、どこかに住む普通の人が、火星に住む妻、火星連合に所属する男性が心の奥に住む相手に対する気持ち。しかし、誰にも言えない気持ち。

心の奥にある憎しみや悪意が襲い掛かってくる。

今のクリュセの争いの中心にはこの悪意が存在する。

俺の心が作った『闇』に火星中の人の心の『闇』を飲み込んで、喰らって育っていく存在が惑わせて、狂わせる。

『お前が弟でなければよかった』というサヴァラン兄さんが言っているような気がする。

『お前なら絶対にできる』『頑張るんだよ。あなたならもつと上を目指せるはずだ』という両親からの期待。

それ以外にも『どうして見捨てたんだ』という恨みめがしい声、『誰にでも優しいのって無責任だ』という指摘の声まで様々な声が聞えてくる。

他人と違う事が怖くて、誰か一人を決めることで他の誰かを傷つけると恐れ、家族を巻き込むことを恐怖した。

自分が普通ではなく異常なんだと知っていた。

そんな普通ではない部分がいずれ何もかもを突き放してどこまでも突き進むのではないかという恐怖、普通の人はもっていない才能を閉じ込め封印し、自分が普通の人間なのだと言いつけさせる。

そうしないと自分人間ではないような気がした。

そんな罪悪感と悲壮感が心を襲い周囲に『闇』を広げていく。

クリュセ議会から多少離れた古い建物の中を入っていき、地下に進んで行くとそこには議会地下へとつながる唯一の道になる。

そこに道があると明楽達が気が付いたのは周辺の聞き込みをしている途中でレレらしき人物が建物の奥へと進んで行くのが見えたかららしい。

レオが調べた結果をまとめたタブレットを読みながら説明してくれた。

「なんでも、クリュセの地下には開発当時から残っている地下施設が多く残っているらしくて、その名残や道がクリュセ再開発計画の名残で埋め立てられたり、そのままにされていたりするらしく、この建物は再開発計画の名残で残ったもの」

マークはゲームをする手を止め、明楽がドアのカギを何とか開けようと努力している方へと視線を向けつつ、アスナは顎に手を当ててレオの言葉に納得していた。

「なるほど、確かにそういう計画がクリュセでありましたね。その名残ですか。ここはその唯一の道というわけですか？」

「唯一というわけではありませんが、議会への道はここが唯一です。それ以外の道は埋め立てられていて、直接進めば地下駐車場に出ると思っています」

明楽がドアの鍵を開けることができたと喜んでいると、ずっと考え込んでいたシノがふいに思いついたことをそのまま口にした。

「なあ明楽、俺ずっと考えてたんだけどよ。テム・フォースとかいう人の話」

「?テムさんがどうかした?」

「いや、それって話して大丈夫だったのか?」

明楽の表情が真っ青に変わっていく。喋ってはいけないことを口にしてしまい、真っ青に変わっていた表情にガクガクと震え始める。そんな姿を見ていたレオが驚きと共に小声で声を荒げる。

「そんなに恐怖を抱くようなことなのか!? だったら口にするなよ」

「どうしよう……誰かに言ったら両手を切り落としたうえで拷問す

るって」

明樂の口から出てきたサブレの言葉にマークが「両手を切り落とす行為は拷問に入れないんだな」と訳の分からないツツコミをして、シノは数歩後ろに下がって明樂から遠ざかる。

みんなから哀れな者を見るような目で見られているとは思わないようで、明樂は今まで感じた事の無い恐怖を感じていた。

明樂とテム・フォースの出会いには唐突であった。

鉄華団壊滅後、いきなり自分の前に現れたその人物は「特訓に付き合ってほしいんだヨ！」とラップ調で話し始めた。しかし、その強さは異常と言ってもいいほどに強く、明樂では全くかなわなかった。「勝てるかも」

そう思った自分が間抜けに見えるほどに強かった。

五十回戦って、五十回負けた。

五十回戦えば一回ぐらい勝てるかもしれないと思ったのだが、結果は惨敗で終わった。すると、その人はこう言ったのだ——、「俺はサブレ・グリフォンぐらい強いぞ」っと。

明樂は急いで確認にしそぐと、サブレは恐ろしい表情をしてテムに襲い掛かったのはサブレだった。

喧嘩する二人を眺めながら明樂は思った。

『まるで友人みたいだな』

怒鳴るサブレに聞き流すテム。その姿は数年来の友人のように思え、そんな油断は明樂への災いという形で帰ってきてサブレから——

——、「テムの事を喋ったら両手を切り落として拷問する」などと言われた。

その時の表情は慈愛に満ちた仏のようであったが、しかし、その裏に見えない殺意のオーラが明樂には見えた。一周回って明樂の方まで殺意が向いているのがよく分かった。

明樂には怯えて「はい」とうなずくしかなかった。

それ以外の返答をすれば殺される心配すらあった。

それを思い出し、震える体を明樂は何とか忘れることで押さえようとした。

レオは明樂の代わりにゆつくりとドアを開くと中には多少壊れた軍用車が乗り捨てられており、中を調べた結果重火器が多数が乗っていた痕跡を見つけた。

「中に人が乗っていた痕跡もあるぞ」

さすがにゲームをやめたマークは車の中に落ちていた金髪をレオ達に見せる。それにアスナが反応した。

「クーデリア様？それにクーデリア様が乗っていたんですね？」

「ええ。という事は……………」

シノが明かりをゆつくりと右から左へと移動していき、最後に強引に開いた痕跡の残った扉を発見した。

「こつちだ。銃で鍵を壊した痕跡がある」

「私が案内します」

そう言つてアスナは勇敢にも道案内を買つて出た。レオとシノは「危険だ」と言い聞かせようとしたが、「私は一回だけ案内してもらつたことがあります。ロビーまでだったら案内出来ます」と行つて聞かなかつた。

マークは明樂の背中を強く叩き「しゃべらなければいいんだよ」と落ち着かせてアスナの後を追いかける。

レオはもう一度後ろを向く。

「俺とシノさんが前、明樂が後ろでマークが真ん中だ。マークはいぎとなつたらアスナさんを守ってくれ。よし！目標はクーデリア・藍那・バーンスタインとレレの確保だ」

そう言つてレオとシノが先に前を移動し始め、マークが何とか立ち直れそうになっている明樂を促しながら進んで行く。

不雑に入り組んでいる廊下にシノが疑問を挟んだ。

「どうしてこんなに入り組んでんだ？」

「確か、地下では火星中の情報を紙媒体で集めていました」

「なんで紙で？今時珍しいよな？本冊子ならともかく」

シノの疑問にアスナは曲がり角を迷うことなく曲がったところで答えた。

「当時各地区ごとに分断されて管理されていた火星を一つにまとめる

には相当の情報をいっぺんに処理する必要があったそうです。しかし、それをタブレットなどで処理するには限界があったと聞いています。ここはそれを紙の用紙で処理するために緊急で作られた場所だったんです。地上の施設は他の使用目的が既にあつたそうですから」

複雑に曲がった先の階段を昇っていき、一回の西区画に出ると、一本のまっすぐな廊下に出る。左右に広がる一個一個の部屋の窓を確認するようにのぞき込み、部屋の中にはパソコンが並んで設置されており、机の上には最近まで使用されていた痕跡のコーヒーが残っている。

上の部屋から銃撃音が聞こえてきたことをきっかけに五人は上の部屋へと急いだ。

レオ達が上の部屋へと急ぐ前、クーデリアは既にテラの待つていた西区画の二階へと乗り込んでいた。

レジスタンスのメンバーは全部で四人だった。

全員が覆面を付けており、とある一室へと足を運んだ時、中には一人の歳を食ったような隻眼の男が立ちふさがる様に部屋の中心に待っていた。

「彼女は置いて君たちは一旦反対側の部屋へと行きたまえ。そこで議長を待たせている。報酬はそこでもらうといい」

そう言って隻眼の男はレジスタンスのメンバーを外へと追い出した。彼女は死すらも覚悟し、隻眼の男の残った目をまっすぐに直視する。

「強い良い目だ。死を覚悟したような目でもあるな。安心したまえ、用事を終わらせるまでは殺しはしない。さあ、教えてくれ。君がマクマードからもらったであろうカードキーはどこに隠したのかな？」

クーデリアは口を開こうとしたその瞬間反対側の部屋から銃撃音が八発聞こえてきた。クーデリアは急いでそちらの方を見る。そちらの部屋では一人の女性が容赦なくレジスタンスのメンバーを殺害する様が見えてしまった。

「なぜ殺すのですか!? 殺す必要はないはずです」

「いいえ。彼らはここまで来た時点で充分秘密を知ることができからですよ。その時点で殺すだけの意味を持つ。さあ、それより教えてもらいましょうか」

教えてもいいのだろうかという疑問がそこでようやくクーデリアの脳裏をよぎった。もしかしたら、彼らがそこまでして手に入れた物とはとんでもない者なのではないか？そんな疑問が彼女に躊躇する気持ちを与えた。

しかし、テラはそんなことであきらめるような男ではなく、テラは薬品を持ち出すと彼女へと近づいていく。

クーデリアも近づいてくるたびに一歩一歩後ろに下がっていく。テラの後ろから隣の部屋で殺害していたテトラが入ってきてクーデリアに強い憎しみを向ける。

クーデリアが背中を壁にぶつけると、クーデリアとテラの間には缶ジュースのような物が廊下から投げ込まれる。

缶ジュースのような物はスモッグのようなものを発して一気に視界を奪っていく。

「催涙弾だな。テトラ一旦隣の部屋に移るぞ」

テラの声が聞えてきたクーデリアの右腕をつかむようにレレが姿を現し、そのまま彼女を廊下へと案内する。

「大丈夫ですか？助けに来ました。ここから逃げましょう」

そう言ってレレはクーデリアを廊下へと連れていき、そのまま階段へと向かっていくが、一つ目の部屋を通り過ぎた所で後ろからの銃撃で足を痛めてしまう。

廊下にはテトラがハンドガンを容赦なくこちらに構えている姿が見えた。

「止めてあげてください。私が目的のはずです」

テトラはやめる気配がなく、レレもあくまでも抵抗しようとしていた。

「やれやれ。元気なお嬢さんだあくまでも殺されに来るとはな」

テラも後ろから姿を現し、テトラはハンドガンの銃口をレレにまっすぐに向けた。そこでようやくシノとレオが姿を現し、アサルトライフルで



テトラを撃とうとするが、さらに後方からFが見えないような速度でレオの顔面を横から蹴っ飛ばして隣の部屋へと叩き込む。シノが反射的にFを撃とうと引き金に手を掛けるが、そんなシノの鳩尾に拳を叩き込み、そのまま首を絞めるように持ち上げる。

マークがそのままFを襲おうとするが、そこにペテロが階段下から明樂とマークを同時に襲い掛かる。

テラは彼らにこう語りかけた。

「ようこそ、化け物の巣窟へ」

8

ビスケットが車を走らせてから何分が経ったのかは分からないが目の前にクリユセが確かに見えてきた。そんな時、目の前に一人の女性が見えた気がした。悲鳴を上げながら急いでブレーキで車を止め、目の前にいる女性に怒鳴り声をあげる。

「何をしているのか分かってるんですか!?ソニアさん」

ソニアは「テヘ」と言いながらまるで悪びれないような表情でビスケットの前に近づいてきた。

「ごめんなさいね。これをこれをわたしとおこうと思ってね。変装に使いなさい。今あなたは制服でしょう?クリユセに入ったら一発で殺されるわよ」

そう言っただけで差し出した服はビスケットには身に覚えがあるように思えた。

上下の灰色のツナギに濃い緑のジャケット、ジャケットの背中は何も書かれていないが、ビスケットはこれが何なのかがよく分かっていた。

だって、これはビスケットが約十年前に着ていた鉄華団での格好に似ているからだ。

「これってどうやって?」

「サブレから預かっていたのよ。誰が直したのかは知らないわ。でもいつの間にか直っていた。返しておくわ。これを着てクリユセに行くかどうかはあなたに任せる」

ビスケットは一瞬だけ悩みそのまま服を車の陰で着替え始める。

五分かからずに着替えることができた。車の陰から再び出てきたその姿はまるで昔に戻ったかのようでもあった。しかし、あの時と違って今は帽子を被っていないのとタオルを首に巻いていない。

そんなわがままを言っている場合ではないことぐらいいは分かっていた。しかし、まるで見透かしたようなタイミングでソニアはビスケットの帽子を取り出した。

「どうして？」

「フフ。想像にお任せするわ」

ビスケットは帽子を被り直し、車の方を向くと運転席には三日月が据わっていた。ビスケットは反対側に座ると、そのまま助手席に座る。

三日月はビスケットが乗ったのを確認するとそのまま車を出す。ソニアはビスケット達に手を振り遠ざかっていく。

運転している三日月はビスケットにタオルを手渡した。

「準備がいいね」

そういいながらタオルを受け取って首に巻き付けるとまるで昔に戻ったように見える。

『うん。似合ってる。ビスケットはそっちの方がいいね。背丈が少し伸びているけど』

「うん、でもこの服も大きくしてくれたみたい」

縫い目が多少荒い所をビスケットは触っていると不器用な人が直したように見える。

最後にライドが持っていたハンドガンを三日月に返そうとするが、三日月は片手でそれを拒否してしまう。

『いい。ビスケットが護身用に持っていて。いざとなったら守ってくれるかもしれないし』

ビスケットは「分かった」っと答えつつそのまま左胸のホルスターにしまう。すると、上空からどす黒い感覚がクリュセを巻き込もうとしているのがよく分かる。

雨雲がまるで渦を巻くように降りてきているように見え、その姿はトルネードにも見える。

それがクリユセの人々の心の闇が集まってできていると分かるのはきつと今現在はこれを直接見ているビスケットと三日月だけだろう。

『どうやらクリユセの方で戦いが始まろうとしているのかもね』

まだ現段階ではシノたちは戦いを始める前であるが、あの渦が戦いを加速させるのは分かり切っていた。

ビスケットも焦りを隠せなくなり、ふと上を向く。雨雲の上でサブレが闇に飲まれそうになっているのに感覚で気が付いた。

『やばいね。サブレって人。すごく強い闇だ。離れているはずなのにこつちまで引き寄せられそうになる』

三日月がそう言うという事にビスケットは恐怖した。

脳波をうまく使えている三日月が遠く離れているはずの『闇』の悪意に引き寄せられそうになっている。

きつと覆面の奥に表情があるならきつとその表情は多少歪んでいただろう。

ビスケットには心の奥でサブレの名を叫ぶことしかできなかった。

クレアやアインも表情を歪ませてしまう。航空機の下での雷雲すら巻き込んで大きくなる『闇』の力に頭痛を激しくさせる。

飛行機の上で組み合った状態で止まってしまった両機がサイコフレームの共振と同時に悪意がクリユセ中に生きている人の心の奥にある他人に対する悪意を浮き彫りにさせる。

スラム街の人々が争い、議会周辺の戦闘は一般人を巻き込んで激しさを増す。

悲鳴と苦しみの声、激しさを増す戦闘音に人々の不安が増大していく。それに従ってサブレにまとわりつく『闇』の力も増していく。

もはや人にどうこうでできるレベルの力ではなく。もはや『化け物』と言つても差し支えない力を周囲に見せつけようとする。

そう、もはやこれは『化け物』だと誰もが判断できた。

サブレが生んだ『闇』は小さかったはずだ。アフリカ戦線の不安や恐怖を飲み込み、地球での戦いで生じた人々の悪意を飲み込んだ大きくなった時点で既にサブレに管理できるレベルではなかった。

その時点で既に戦うべき人物はサブレ個人から世界中の人間に移っていた。

黒衣の騎士にとって木星帝国という組織も自分の目的を果たすだけの場所であった。

ククナとテラの間を行き来しながらテトラの心の闇を浮き彫りにすることでうまくクリュセ中を巻き込むことができた。

サブレ・グリフォンを単身この場所まで導くことで彼を取り巻く環境全てを巻き込む準備は整った。同時にビスケット・グリフォンと三日月・オーガスにライド・マツスの死を当てることでうまく封じつつ彼らにショックを与えることにも成功した。

そうして、最後のカギとなるレレをクリュセ議会に呼んだことで黒衣の騎士はほぼすべての役目を終えたと言っても過言ではなかった。

クリュセ議会周辺の攻防をもって人の悪意を浮き彫りにする準備を整え、クリュセ議会での戦いで生じた不安や恐怖を力にサブレ・グリフォンの乗っ取りを開始したのだ。

全ては今日この日を迎えるための準備。

全てサブレ・グリフォンの肉体を乗っ取るためでもあった。

そのための準備をひそかに整え、誰にも邪魔されないこの状況を作り上げた。

しかし、黒衣の騎士にはたった一つだけ考えていない事態が起きていることによく気が付いた。

そう、この状況をたった一人だけ読み切った人物がいた。そのうえで準備を地球側から整えた人物が、今テム・フォースを使う事でサブレ・グリフォンへと二人の人物を繋げる作業に入っていた。

昔からサブレ・グリフォンの危うさに気が付き、クレアとビスケットが揃っているこの状況ならサブレと同じ脳波の力を持つテムを遠距離で介すことなら二人の意識をサブレの深層心理に送ることができるのではないかと考えた。たった一人の人物——、マハラジャ・ダースリンの策がここで動くことになった。

月面都市アルンでひそかに建造されていた脳波をマイクロウェーブに乗せて火星に送り込み、クリュセ一帯の異常ともみられる電磁波

の乱れが一人の『化け物』だという事に確信をもって。

サブレ・グリフォンが人類を救う人間だとマハラジャが信じているわけでは無い。しかし、サブレ無くして勝利は無いという事だけは分かっていた。

ここで失うべき人間ではない。

地球に居る少なくともは無い彼を思う人の思いも知らないうちにサブレ・グリフォンへと届けられる。

悪意の底、どす黒い闇の底へと届けられる小さな光の粒がやがて二人の意識をようやくの思いで届かせた。

「サブレお兄ちゃん立ち上がった」というクツキーの声、「サブレお兄。一人じゃないよ」というクラツカの声、「あんたならうまくできるはずだよ」という桜・プレッツェルの声、「俺を立ち上がらせた人間がこんなところで終わるわけじゃないよな?」というユージン・セブンスタークの声、「フフフ。あなたならこんな闇も倒して見せるでしょ?」というマックの声、「サイガの分まで戦ってくれ」というファンの声、様々な声が彼に呼びかけてくる。

「俺からは何もないな」

マハラジャはそんなそっけない態度を取るだけだった。しかし、マハラジャにはそれ以上の何かなんていらなかったと判断したからだ。「たとえば、あなたが別の誰かを選んだとしても私はあなたを責めたりしません。だってそういうあなたを好きになったのですから」——  
——とレレはサブレに声をかける。

「たった数日の付き合いであなたがどうしてクーデリア様を嫌いになったのか分かってしまっただんです。あなたはクーデリア様に似ているようでどこか違う。あなたはそんな違うところが嫌いなんですよね。自分ができなかつたことでできるクーデリア様が、そんな人間らしさを私は好きになつたんです。だからそんなあなたでいてください」——  
——つとアスナは言ってくれる。

「ごめんね。サブレをいつもひとりではしらせてしまつて。でも今度は俺も一緒だよ。一緒に歩くから」——  
——つとビスケットもサブレに声をかける。

「あなたと出会い、あなたと触れたことで『闇』が浮き彫りになったんだと思います。でも、そんな闇の奥にある優しさに私は気が付きませんでした。誰よりも優しく、決してそれを武器にしようとはせず、実は他の誰よりも繊細で優しい。そんなあなたを好きになっていったんです。どんな決断になってもあなたを恨んだりしないです」———そう言ってくれるクレア。

最後にみんなからたった一つの言葉が送られる。

「私達はあなたが好きです」

それだけで十分だった。

その言葉だけでサブレ・グリフォンは立ち上がることができた。自分の周囲にいる思いを力に変えて立ち上がる。

みんなの思いを光に変えて闇を押しつけていく。

「俺の……俺の中から……出ていけ!!!」

サブレの目はまるで虹色の火が揺らいでいるようにも見え、黒衣の騎士はその姿を見た途端サブレ・グリフオンのみに何が起きたのかを完全に把握した。

サブレ・グリフォンは次の人類へと進化を遂げた。

## ウィー・ラブ・ユーⅣ 《君の名を叫ぶ》

9

コックピット内に満ちている光が俺の意識を肉体に戻し、空気を銘一杯肺の中に入れると心臓を素早く動かし、血液の流れは俺の両目と脳に力を与える。進化したなどと言っても俺個人の肉体は普通の強度でしかなく、ガンダムを強化することで俺は人間を超えることができる。

ガンダムは今の俺にとって別の肉体であり、外宇宙生物とコンタクトを取るために必要な存在でもある。

それが俺が選んだ進化の道とはいえ、元々の肉体を進化させているわけでは無い、なので肉体自体は空気を欲している。

先ほどみたいに酸欠状態になれば余計に力は振るえないだろう。

もう一度肺に空気を送り酸素と血液を体中に巡らせる。

もう一度虹色の炎が輝く目をもう一度開き、目の前に存在する黒い騎士のようなガンダムをよく見る。

黒を基本カラーにしているが、所々に金色の装飾が施されている。しかし、問題にすべきではないだろう。こいつには目立った武器が無い。

しいて言うならビームサーベルぐらいだが、いや、シールドも持っているな。しかし、取っ組み合った状態ではうまくいかないだろう。相手のパイロットはいかなれば俺の闇が自我を持った存在。

こうして取っ組み合っていると違う何かを感じる。進化したからこそ分かる自我や力は俺の本質を写しているが、それを操っているのは全くの別の存在だ。

「お前は俺の闇が形作った存在ではあるが、それを操っているのは別の存在だ。聞こう……『お前』は誰だ？」

「……………君は本質を見ることができののかな？ 私にはそんな力が無いが」

「別にそういうわけじゃない。こんなのは処世術だよ。人の顔色ばかりを気にして、親から気に居られようとした愚かな男の得意技だ。お

前の本質は別だ。他人の心を覗くことができても他人の心を浮き彫りにすることなんてできない。俺にはそんな力はない。勿論クレアにも不可能だ。しかし、お前の力は本当に心の本質を浮き彫りにするものなのかな？」

「そこまで言えばもう賢い君なら分かるだろ？」

取っ組み合いをするお互いの機体。しかし、同時に黒い騎士のガンダムの装甲が動き始めた。

いや、正確には騎士の装甲がと言ったほうがいいかもしれない。どうやら下には別の装甲が用意されていたようだ。

騎士の装甲は次第に背中に移動していき、その装甲はつき足されているように重なり伸びていく。まるで天使の翼を黒くしたようにも見え、悪魔の翼を再現しているように見える。

「ダークエデンモード on、仕方ない。この方法で手に入らないなら別の手段を使うまでだ」

黒い翼から放出している黒い炎のような光りは周囲をどす黒く染め上げようとしているように見える。

反射的にエデンの背中から虹色の炎みたいな光が黒い炎の光を押しとどめようと試みる。飛行機から振り落とそうと試みる。

あえてガンダムエデンの出力を落とし、押し切られそうになるが、その瞬間にお互いに体勢を崩したために、両手が離れてしまい俺はその隙に両手で飛行機につかまりながら黒いガンダムを蹴り飛ばす。

飛行機から離れていき視界から消えていったのを確認すると、俺は飛行機の天井をガンダムの指先で破壊して一人が入れる隙間を作り、コックピットから慎重になって入っていく。

このままだとエデンは捕まってしまうかもしれない。しかし、ここから俺がエデンと共に出来るようになったことでもある。

俺はエデンを光の粒子に変えてしまうと、光の粒子は俺の体の中に入って隠れてしまう。

よし、クレアを搜索するか。

先に乗り込んだモニターは四階のフロアを探し回っていた。しかし、肝心のクレアももう一つの目的である妹であるアルミリアの姿



すら発見できない。

最後の扉を手に掛けたとき、同時に衝撃音が部屋の奥から聞こえてきた。迂闊に開けないほうがいい気もするが、誰がそれをしているのかもおおよそで検討を付けていたからだ。という事は少なくともこの部屋は違うという事だろう。

しかし、ダメもとで部屋を訪ねてみることにし、部屋のドアをゆっくりと開けようとするが途端に空気と気圧の流れからか重く感じる。

モニターは体重と力を最大まで使ってドアを開こうと押すが、反対側からドアが開かれる。

そこには天井に開いた大穴へと流れる風で髪の毛が大きく乱れているサブレ・グリフオンの姿だった。

しかし、モニターは同時に疑問を抱いてしまった。

「エデンはどうしたんだ？」

「便利な収納術を習得したんでね」

そう言っただけで部屋の中から出ていき、左右を一回筒確認するように首を振り、敵がいらないことを確認し、そのまま腰につけたハンドガンの弾を確認する。

「このフロアは確認したらしいな」

「ああ、両方ともこのフロアにはいなかった。さすがに格納庫に居るとは思えないが、どこに居るのかを探する必要はあるな」

そこまで言った所でサブレは瞳を閉じ、周辺に脳波を発してソナーの要領で人の数や居場所を探る。

「三階に十五人、二階に二十人、一階に三十人だ。アインは二階にいるようだな。多分可能性が高いとしたらアルミリアという女性も二階の可能性が高いだろうな。どうする？個人としてはアインと接触しておきたいというのがある。今のお前ではアインは難しいかもしれないな」

モニターは一旦考え出した結論は意外なものだった。

「三階に行こう。アルミリアが二階にいると決まったわけじゃない。それに、俺がアインと真正面から戦って勝てる可能性は低いだろう。君の方が勝てるんじゃないのか？」

「まあな。あんたがそれでいいなら俺もそれでいい。俺は二階の搜索に入る。クレアを見付けたらそのまま格納庫のドアを開けて外に飛び出して逃げろ」

そう言つて二人で階段を目指し、降りようとしているところでモンタークは疑問に思つたことを聞いた。

「私が君を助けようとする理由は聞かないんだな」

サブレはゆっくりとモンタークの方を見る。モンタークを見る目は虹色の炎が輝いているように見える。その姿に驚きを隠せずにいるモンタークに対してまるで心を覗けたかのように微笑むサブレ。

「人を助ける理由にそいつが嫌いだからじゃダメなのか？」

そう言つて階段を下りていき、下の階を警戒しながら降りていく姿を見るとモンタークは誤魔化されたつと判断した。

サブレは階段を下りた瞬間に周囲に展開していた部隊を素早く鎮圧し三階をモンタークに任せてそのまま二階に降りていく。

モンタークは周囲を警戒しながら部屋を一つ一つ確認しながら開いていくと、左端の通路の階段から数えて三番目の部屋のドアを開けるとそこには窓を眺めるクレアの姿を見つけ出した。

「あなたは？」

そう言つて立ち上がりモンタークの方を見つめるクレアは金髪を一瞬だけふわりとなびかせ、窓から入ってくる光が金髪に反射し一瞬だけ目を薄めてしまう。

「私はモンタークという。サブレ・グリフォンと共に君を助けに来た。まずは格納庫に出よう」

クレアはモンタークの手をゆっくりと手に取り、その瞬間にモンタークの心を覗いてしまう。

「あなたは妹さんを大切にしているのですね」

「!?どうしてそれを知っているんだ？」

「私には触れた対象の心を覗いてしまうんです。サブレが近くにいると力を発揮できないのですが」

クレアは寂しそうな表情と辛そうな表情を足して二で割つたような表情をしつつ無理矢理笑顔を作る。

「だとしたら醜いものを見せてしまったな。自分でも黒歴史というやつでな。特に鉄華団と出会った時はひどかったよ。あの時は偏見でモノを言ったことを後悔している」

「でも、今は違うんでしょ？」

モニターは唇をかみしめながらマクギリスを撃った時を思い出す。

「だが……俺は自分の手で親友を撃ってしまった。その時、気が付いたんだ。俺は親友から目を背けて殺したことを無理矢理忘れようとしたよ。だけど無理だった。自己中な正義は己に帰ってくるという事なのかもしれないな。今なら別の何かが見えてくる気がする」

クレアもモニターの後ろをついていきながら階段前の曲がり角に辿り着いたところでモニターにとつてよく知った人間が現れた。

紫色の短めにカットした髪を多少なびかせ、ミニスカートに肩先を露出した一見タンクトップに見えなくもない緑色の服を身にまとっているアルミリアを目撃したモニターは一旦動きを止めてしまう。

モニターもよく知る妹の姿に一旦立ち止まってしまいが、心を切り替え説得する為に口を開こうとしたとき、アルミリアが取り出したハンドガンに反応できなかった。

撃たれることしかできないように思えた瞬間、クレアはいち早く反応しモニターと共に廊下の角へと隠れることに成功した。

モニターはハンドガンを取り出し弾を別の物に切り替える。実弾から麻酔弾へと切り替えて戦う覚悟を決めるが、クレアが不安そうな表情を浮かべながらモニターの裾をつかみ、いったんモニターの意識を引き戻す。

「彼女があなたの妹なのですか？」

「ああ、間違いない」

「……ですが……あれではまるで」

クレアは何かに気づいているような、それでいて言い出しずらそうにしているとまるでその辺を組んだかのようにジャツクの声が聞こえてきた。

「クレアさんが言いたいことを教えてやるよ」

モンタークはもう一度アルミリアの方を見るとアルミリアの右隣にジャックが立ち尽くしており、ジャックはニヤニヤ顔をしながら面白そうな顔をモンタークたちの方へと向ける。

「アルミリアはあんたなんて覚えていないってことさ。あるのは幸せな奴への憎しみぐらいかな」

その言葉にショックを覚えクレアの方を見るモンタークに対し、クレアは苦しそうな表情を浮かべるだけだった。

「どうしてそんなことになったのかを知りたいならクレアさんにも聞きなよ。そんな人でも元々木星帝国の関係者なんだから、最低限の事は知っているはずだし。安心していいよ。ククナ様からはあんた達を逃がすように言われているし、今は一階で暴れているサブレット人にも言つてよ」

二階で搜索しているはずのサブレットはこの数分で一階まで降りている理由が分からなかったが、モンタークは唇をかみしめ何とかアルミリアも助けられないかどうかで葛藤することになる。しかし、その辺を予想していたのか、ジャックもハンドガンとナイフを取り出して交戦の構えをとる。

「ちなみにアルミリアに手を出すなら俺は許さないよ。彼女は俺と同じでククナ様の計画の賛同者であるという点は偽りはないからさ。アルミリアの事は忘れる事を進めるよ」

「計画の賛同者？アルミリアをどんな計画に巻き込むつもりなんだ？」

「さあ、アンタたちがそれを知ることには無いよ。帰るときは格納庫からお帰り下さいね。アルミリアを押さえておくのにも限界があるんだからさ」

クレアの救出を優先するという約束である以上はそうするべきなのかもしれないが、妹を助けたいという気持ちも存在し余計な葛藤を生んでいた。まるでそんな思いを知ったのか、クレアが「私の事を気にせずに」つとやられてしまうが、モンタークは今は助けることが不可能だと自分の気持ちを切り替えクレアの手を取ってそのまま格納庫の方へと走り去っていく。

そんな中、モンタークはクレアに尋ねる。

「アルミリアの記憶を奪った奴は誰だ？ククナというやつか？」

「確かにお姉様は研究職ですが、能力開発や人体開発をしているのがお姉様です。しかし、お姉様が一切手を出さないのが薬品関係です。薬品関係の研究職には別の人間がいるからが理由だったような気がします」

言い出しづらそうにしているのを見てモンタークが代わりに尋ねた。

「木星帝国の事はゲイナーからあらかた聞いた。皇帝の直轄にテラ。幹部は数が少なく、火星侵攻に乗り出しているメンバーを除けばあと一人しかない、その一人なのか？」

「いいえ。多分話だけなら聞いたことがあるのではないのでしょうか。火星侵攻に際し、やってきた一人だと先ほどから聞いていますし」

そこまで言われてモンタークは脳を回転させながら記憶を探り名前を四人ほど口にする。

「確か……テラ、テトラ、Fと……ペペロだったか？」

「はい。テラは皇帝直轄の幹部で皇帝に直訴できるのはテラを覗けばお姉様ぐらいでしょう。テトラとFがテラ派の人間だと聞いたことがあります。元々テラはサイボーグ関連の研究を主にしていると聞いたことがありますから、Fはその時の実験体でその手伝いをしていたのがテトラだったかと」

「まるで研究メンバーだな、もしかしたら全員が研究員なんて言わないよな？」

「それはありませんが、Fとアインは戦闘要員です。しかし、テラがサイボーグ関係の研究で、ペペロは薬品研究、お姉様は能力開発と人体開発で、テトラが神経開発だった気がします。最後の一人が『オズボーン』という名前で皇帝の代理で政治関係を扱っていると聞いた気がします……私はあつたことが無いのです」

「では……アルミリアをああしたのは……？」

「おそらくですが……ペペロだと思います。Fとテトラがテラ派だと昔聞いたことがありますし、お姉様の下にアインがいると聞いたこ

とがありますが、ペテロとオズボーンに関しては聞いたことがありませんでした。最近の行動を知った際にてつきりテラ派なのかと思いましたが、どうやら話を伺う限りお姉様の派閥のなのかもしれない。記憶を消したりすることができるのは薬品関係だとソニアさんに聞いたことがありますから」

モニターの中で怒りが心の奥から湧いてくるのをクレアは感じ取っていた。

サブレがどうして二階から一階に戦いの場を移したのかを語るにはアインと接触する直前までさかのぼる必要がある。実は、クレアが三階にいるという事に気が付いていた。しかし、その目前にアルミリアもうろついているという事にも気が付き、あえてモニタークを行かせることで説得できるチャンスを与えたかったからだ。しかし、それを口に出せばモニタークの性格上遠慮する可能性があった、だから騙す形でクレア救出とアインの引き留めを自らかって出た。

二階に降りて、アインの元へ向かうのに今のサブレには三十秒もかからなかった。

ガンダムの粒子を体に入れている段階では人を超えた動きができる事が要因である。しかし、そんな状態でも出来ないことがあるという点では決して便利とは言えない。

今回に限って言えばその優れた身体能力が功を奏したのは言うまでもない。

アインの隣にククナがいたという事を除けばおおよそ予想通りだった。

「覚醒者は無意識で脳波を発しているから個人の識別ができるという私の予想はおおよそ当たっていたようね。久しぶりね。ふくん、それが人類の先の姿というのかしらね。本当の意味での『エヴォ・エクス』っていう事なのかしらね」

楽しそうにしているククナに対して不愛想を貫くアイン。

「なるほど。偽名としてのエヴォ・エクスは元々進化した人類の意を込めていたのか。それより、お前たちは黒衣の騎士の正体に気が付いていたのか？」

ククナが一瞬だけアインの方を見るが、アインは答えようとしな  
い。

「私は少し前にアインから聞いたんだけどね。そう聞くという事はあ  
なたは多分真実にたどり着いているんでしょ？まあ、あえて言うな  
ら、あれは呪いそのものというべきでしょうね。私は信じていないけ  
ど」

「呪い……二千万年前に男が口にした『呪ってやる』つという言葉。あ  
れが現実だったのか？」

小さな言葉でそうつぶやき、アインをもう一度見る。呪いを撒いた  
本人というべき存在を見るが、アインにサブレは問う。

「お前は どうするつもりなんだ？アイン」

「今はまだ動くべきじゃないから……もう少し様子を見るさ」

そこから先を問おうとするが、後ろから妙な駆動音と壁を叩く衝撃  
音がサブレの耳に届き、ふと後ろを向くとククナ達は物陰に隠れるて  
しまう。

「ガンダムを取り込んだあなたの身体能力を見せてね」

あくまでも楽しそうにしているククナの言葉を最後まで耳にする  
ことは無く、サブレの体は壁の奥から現れたモビルスーツをワーカー  
サイズまで縮小したような存在に押し切られてしまい、そのまま格納  
庫の柵を破壊し、一階まで落としてしまった。

サブレは落ちる最中拘束を振りほどき、背中にまわって大きく距離  
をとる為にジャンプする。

改めてその巨体を眺める。

足はモビルワーカーが使用しているものを改良されており、多少小  
型化しているが、機動力や小回りはこちらが上だろう。胴体はモビル  
スーツに酷似しており、右腕はハサミ状のクローになっており、左腕  
はガトリングを装着されている。背中に様々な武装を持っているが、  
サブレはそんな興味よりわらわらと集まってきた兵隊の方に向いて  
いた。

何故なら目の前の兵器はサブレより周囲の兵隊たちに攻撃の矛先  
を向けようとしていたからだ。

「あら……システムに不具合があつたみたいね。オズボーンがタダでくれたから使ってみたけど、自立制御式に不具合があつたみたいね……結局はゴミを押し付けられたという事かしらね……」

そう言つてククナはジャックに連絡を入れ始める。

サブレは兵器を止めようと奮闘し、一階は阿鼻叫喚の装いを挺してきた。積みあがっていく死体の山々にサブレはそれらをうまく活用しつつ、周囲に転がっている武器を拾つては活用していた。

バズーカを放つては放り投げて逃げ、落ちているアサルトライフルを拾つては関節部に容赦なく撃ちまくつては放り投げて逃げる。そんな戦いを繰り返している間にサブレは上から下がっている荷物を固定するために一番上から下がっている固定用のアームをつかみ、それを兵器の上から胴体の隙間に無理矢理ねじ込む。

すると、三階からクレアの手を取つて格納庫に入ってきたモニターがそのまま端まで駆け寄っている姿を見付けたサブレは、格納庫後方にある荷物を出し入れす際に使われる搬入口からの撤退を図っていると判断し兵器から飛び降りて三階と一階のドアを開けようとするが、兵器はもがき鎖をほごうと暴れ始め、サブレは「しまった」と後ろを向いた瞬間に背中に隠し持っていたミサイルが周囲へと放たれる。そのうちの一個が搬入口の操作盤へと直撃し、ドアが強制開放状態になってしまう。

ミサイルはクレアとモニタークの近くにあたつてしまい、搬入口のドアからモニタークをたたき出す。同時に外で待機していたウイングソードがモニタークを回収しようと飛行機に近づき、モニタークを回収するが、ミサイルの迎撃と搬入口からの空気の流れから一旦距離をとる。

肝心のクレアは柵にしがみついたままで耐えており、サブレも近くの手すりにつかまつたままクレアの状態を確認する。

「クレア!!飛び降りろ!!」

その声をかすかに聞こえたクレアは下の方を一旦見て懐かしく思えるサブレを見て微笑み、そのまま身を外へと任せた。

サブレも駆け出していきクレアから数秒遅れる形で飛び降りた。



サブレはそのまま手を伸ばし先に落ちているクレアの手を握りしめ叫ぶ。

「クレア！」

「サブレ！」

二人は抱きしめ合い、その瞬間に二人を助けるようにサブレの体からエデンが実体化する。両手で二人を支え、サブレはまるでクレアを押し倒すような体勢になる。

「クレア……好きだ。でも……俺はその気持ちから逃げてきた。お前を選ぶことが多くの人を傷つける事なんだと思い、結果としてもっと多くの人を傷つける結果になった」

「私もそれは分かっていた。だから……あえて何も言えなかった。一緒に謝ります。そして……」

サブレはクレアの唇に自分の唇を重ねて黙らせる。まるでその先は自分で言うと言わんばかりに。

「一緒に……俺と生きてくれないか？」

クレアは嬉しそうな表情をしながら涙を流してうなずき答えた。

「……はい！」

まだ戦いが終わったわけでは無いが、それでも自然と気持ちは落ち着いていた。

## ウィー・ラブ・ユーV 《集結の刻》

10

「これによりアルン議会の全日程を終了いたします。皆さん最後までお付き合いありがとうございます」

マックが深く頭を下げると温かい拍手と共に多くの人の小さな声ではあるが声援がマックの身に染みる。十分後に解散された議会から去っていくマックをタカキは待っていた。

「お疲れ様です。四つの経済圏の解散要求と太陽系議会の設立お疲れさまでした」

「ううん。タカキ君もよくついてきてくれましたね。あなたなら新設される地球議会においてもいずれ議長に選ばれるでしょうね。楽しみにしているわ。最も、太陽系議長に選ばれる予定の人物が無事ならという前提ではあるけれど」

「大丈夫です。ビスケットさんや鉄華団のメンバーなら絶対に守ってくれますよ」

胸を張って答えるタカキの発言は自身に満ち溢れており、それだけでマックは安心させてくれた。

正直な話、この半年間の間マックは彼の呑み込みの早さと柔軟性には驚いていた。前にアープブラウの議長が次期議長にもなれる人材だと太鼓判を押した意味を知ることになった。

太陽系議会の設立はEDMが元々考えていた惑星間の政治体制を一つにまとめつつ、惑星ごとの政治を試みるという新しい試験的な運動でもあった。戦後の状況を考えて惑星間ごとにちゃんとした政治体制を作りつつ人間として一人一人が政治に参加することができる環境を作る。

その中でも細かい惑星間の法律作りにごく数日議会は荒れており、タカキの協力が無ければきつとこんなに早く解決はしなかっただろうとマックは想像していた。

そんなタカキの自信の満ち溢れた言論を聞くと自然とマックもそうなのではないかという気がしてくる。

「そうね。彼らを信じてみましようか」

そう微笑みつつ議会のロビーを通り過ぎ、大通りに出ると夕方の帰宅ラッシュで車が右に左に移動しているさまを見ながら二人は近づいてくる三人の人影を見付けた。

それはタカキの妹であるフウカとビスケットの双子の姉妹であるクツキーとクラツカであった。

「ちようどクラツカちゃんとクツキーちゃんと大学を終えた後でね、お兄ちゃんを迎えに来たんだ」

そういいながらフウカは上下ともに白色を基本色とした服を着こんでおり、クツキーとクラツカは緑を基本色とした厚手の服を着こんでいた。

タカキとマツクも三人に近づいていくと、クラツカはポケットの中からある密封された試験管のような物に閉じ込められている緑色の結晶が入っていた。

タカキは緑色の結晶をまじまじと見つめ、マツクは心当たりがあるのか顎を右手で触れつつ記憶の引き出しを探り出す。

「これどうしたの？」そんなタカキの言葉を聞きながらクラツカがどこか得意げに答えようとしたところでマツクが人呟いた。

「それってエイハブ粒子を結晶化したものかしら？」

するとクラツカは一瞬で面白くなさそうな表情をしまい、代わりにクツキーが結晶の正体を口にする。

「これはパーテイクルドライブによって濃度を増したエイハブ粒子を高温と共に圧縮したエネルギー結晶体なんですよ。実は今、開発局と共同で不毛の大地と呼ばれている火星の復興計画の為にこのエネルギー結晶体が注目されているんです」

フウカが結晶を指さしながら説明をクツキーから引き継いだ。

「このエネルギーは氷を溶かして水に変え、大地に活力を与えることで植物をすごい速度で成長させることができるんです。けどこれも半年かけて完成したらしくて、半年かけてこれだけなんです」

結晶のサイズをはつきり言ってしまうえば小指程度しかなく、とてもではないがこんな大きさでは火星の復興など夢のまた夢のように思

える。

「これってモバイルスーツの搭載サイズでやればもっと大きな結晶が作れないの?」

タカキのふとした疑問にクラツカが首を横に振りながら答える。

「無理なんだって、この結晶を作るのに特別性の小型エイハブ粒子を試験管の中に貯蓄して、それをパーティクルドライブの力で少しずつ高濃度化させながら高温で結晶化していくんだから。でも、これがモバイルスーツクラスの大きさになると最悪周囲の物体や生命すら飲み込んで全部を結晶に変えることもあるらしいから。それに、エネルギー結晶というだけあって最悪爆弾になる可能性もあるの。モバイルスーツクラスのエイハブリアクターなんてアルンの都市を丸々吹っ飛ばせるんだよ。機材だったただじゃないんだし」

「でもね。クラツカはこういつているけど、これを作り続けていけばいずれはって考えているの、でも……この基礎理論を考え付いたのは二人いるらしいんだよね」

クツキーの小さな声にタカキは「誰の事?」と尋ねるだけだったが、それに答えたのはフウカだった。

「二人は開発局長のソニアさん。で、もう一人が……クレアさんのお母さんのフレアさんという人らしいの。フレアさんが亡くなる直前まで開発していたのがこの結晶化現象だった。そして、それをクレアさんを通してソニアさんが改良したというのが実態。でも、ソニアさんも元々結晶化自体は知っていたらしいけど、フレアさんほど進んだ所までは知らなかったらしいんだよね」

「フレア……ね」

小さなタカキ達に聞こえないような小声でつぶやいたのはマツクだった。

11

ガタガタ道を突き進み、正面には既にクリュセが見えてきた。飛ばしてやって来たとは言っても、戦闘が始まってそれなりに経っているのでビスケットは心配で仕方なかった。

それでも、やっておくべきことは事前にやっておきたいという気持

ちを胸に右腰についているホルスターの中に納まっているハンドガンの残弾数がマックスであると把握しよう一度ホルスターに収める。

ふと三日月は気になったことを尋ねてみた。

『ビスケットって戦えるの？鉄華団時代だってまともに訓練はしてなかったよね？CGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）でも訓練は最低限であまりしてない印象だったけど』

「EDMに入っただけにシノに教えてもらおうとしたんだけど、シノは嫌そうな顔して……」

『まあ、分かるけどね。ビスケットって戦いに向いているとは思わないし、イメージ的に良くないし。じゃあ、結局どうしたの？』

「サブレに教えてもらったよ。色々試してみたけど、俺はこれだったかな」

ビスケットが胸ポケットやポーチの中から取り出したのは試験管のような筒の中に小さな円盤が多数入っているのと、拳銃に見える『何か』である。三日月にはその正体がよく分からなかったが、あえて尋ねずにいると、ビスケットはライドが持っていた元々は三日月の拳銃を左胸に隠すように入れてしまう。

サブレもまたクリュセに近づいていた。

空からだとなりに近づいて見え、サブレは内心「あと十分ぐらいか？」っと考えつつ、自動操縦モードに切り替える。

ハンドガンとマガジンの数を確認し、ナイフ、小型爆弾など多数の武装を確認しつつ、後ろからついてきていたウイングソードを目視で確認していると、モニターも武装の確認を念入りにしている最中だった。

「先輩、ウイングソードでクリュセにある議会には近づきますけど、それ以上は無理ですよ。俺はこの人を下ろしたら一旦ソニアさんの元へと戻ります」

「ああ、それでいい。ソニアの元でいざとなった時の警戒に当たってくれ」

モニターが武装確認を終えたタイミングでサブレに対して切り出した。

「君は確かテラという男とはやりあったことがあると聞いたことがあるが？」

その言葉に詰まってしまいが、サブレからすればあれを殺し合ったとは言い難いモノがあった。

「あれを殺し合うとは言えないと思うがな、正直な話あいつと戦ったとはいえない。あいつが突っ込んできて俺が返り討ちにしたただけだったし、それに……」

そういいながら思い出す。

あれはまだサブレがビスケットと再会する、オルガ達鉄華団と出会う前の話である。

サブレ達は海賊が奪ったとある極秘データを抹消するという目的を持って行動しており、そのデータの中身を簡潔に話してしまえば『アーブラウとSAUの水面下の機密兵器輸出入の記録』であり、一部の議員が違法兵器を議長に相談せず行っていたとし、このデータをアフリカンユニオンに売り渡そうとしていたと言う者だった。

当時アフリカンユニオンはドルトの問題を抱えており、このデータを使ってギャラルホルンの士官を買収しようとしており、その結果ドルトの貧民層に居る反乱分子の一掃を合法的に行おうとしていた。

元々アーブラウは全ての経済圏と接点を持っている分問題をいくつか抱えており、特にアフリカンユニオンとオセアニア連邦とアーブラウの三つの経済圏の経済ラインは特にピリピリしており、アフリカユニオンは中東の地下資源を求めてアーブラウを貶めようとしていた。

それを知った亡命前の蒔苗はEDMにデータの消去を依頼し、EDMはそれを了承することで作戦が始まろうとしていた。

数回に及ぶ奇襲を仕掛け、海賊の進路を変えていきながら特定の作戦ポイントまで誘導することまでは成功したが、EDMは侵入した敵大型戦艦内にて予想外の反撃にあうことになった。

当時訓練生を含めたメンバーであったが、数ではEDMが勝っていたにも関わらず、負けてしまった。

格納庫と荷物の出入り口の二か所からの侵入、居住区まで進撃した

ところで、敵からの逆奇襲を受けることになった。撤退は即座に決まり、正規部隊が殿を務めている間に訓練生が先に撤退することになる。しかし、食堂を経由したところで敵に追いつかれてしまい、訓練生たちが死を覚悟した瞬間にサブレが追いついたという話だった。

たった一人からの逆襲に敵は困惑し、連絡を入れたのがテラだった。

テラが追いついたときには敵部隊は全滅、サブレがたった一人で立ちふさがるという状況だったが、テラは足元の遺体を見て冷静を失ったのか、彼はナイフを振りかざして襲い掛かって来たが、その時サブレの背中から微かに電流が走ったように見えたはずだ。

サブレは当時反則技をしようしていた。

背中についているオプシオンを使って電流を使った肉体と神経の一時的な強化を使用していた。

これにはデメリットが強く、体の動かし方を間違えると神経の断裂しかねないからこそサブレはテストの為にやってきていた。

だからこそだろう、サブレはテラがナイフを振り下ろしハンドガンの引き金を引く前にテラの右目を斬りつけた。

その動きがまるで把握できず、テラからすればサブレがいつの間にか消えて自分の目が斬られたぐらいの結果でしかなかった。

テラはそれでも戦おうとしたとき、死体の山の中から一人の若い男が立ち上がり、テラに向かって「逃げてください」と言い出した。サブレは男に向かって走っていき、傷だらけの男の体を左下から右上にかけて斜めに斬り上げた。

しかし、男も負けじとサブレに抱き着いて時間を稼ごうとしていた。

テラは複雑な表情を浮かべながら逃げ出していた。

サブレが一通り話してしまう。

「まあ、今考えれば最後に立ち上がってきた男とテラが木星帝国からの刺客だったんだらうな。年齢を考えるとテラの部下としてやってきたと考えるべきか？」

そう考察を述べるとモニターが口を開いた。

「そんな簡単な関係かな？」

モンタークはクレアに「どうなんだ？」と訪ねるが、クレアが脳内の引き出しを探り出してもテラに親しい人間や親族がいたという話を聞いたことは無かった。

「そもそもテラってどういう人間なんだ？」

「テラは……いえ、木星帝国の幹部のメンバーのほとんどはそもそも木星出身者ではありません。アインやテトラは火星出身者ですし、ペロやFは出身地不明のようです。本当の意味で木星出身者はオズボーンとお姉様だけのはずです」

「？じゃあテラはどうなるんだ？」というサブレの些細な疑問はモンタークや渉にとっても同じことだった。クレアはふと考え込んでしまい、言葉の最初に「確か……」とつけて語り始めた。

「テラは地球出身者だったはずですよ。コロニー圏のどこかのスラム街だと聞いたことがありますね……いえ、地球じゃなかったでしょうか？」

「？地球以外にコロニーってあるんですか？」という渉の疑問はモンタークにとっても同じことであったが、サブレだけはこの情報を知っていた。

「ああ、地球以外にもコロニーは存在する。そもそもテイワズの拠点である歳星自体が移動型のコロニーだしな。アステロイドベルトや色んなデブリ帯などでひっそりと暮らしているコロニーはある」

「ええ、小さな辺境のコロニー出身者だったと思います。あくまでもそういう話を聞いたというだけですが……正直テラの話はその辺しか知らないんです」

あまり知らないという言葉がテラの謎を加速的に増やしていき、不気味さを増やしていく、するといよいよクリュセまであと五分という段階でクリュセの中央メインストリートに一台の車が蹂躪していく姿が見えた。その車の助手席にはビスケットが乗っており、車が議会の方に向けてモビルワーカーの動きを回避しながらまっすぐに進んで行く。

「私はペペロをやりたい」



モニターは戦場に突入する前にそうつぶやいた、サブレは「分かった」と答えまつすぐに議会へと突き進み議会に向けて拳を振り上げた。

ビスケット達は視界の端で二つのガンダムフレームが議会へと進んでいる姿を確認できた。

「サブレ達だ……という事はクレアさんを救出できたんだね」

三日月は同時に思念をビスケットに飛ばす。

『うん、そして俺達と同じことを考えているんだと思うよ。だったら、ビスケットが捕まって彼等より遅れるわけにはいかない。多分俺達が速すぎてもだめだと思うけど、遅すぎてもだめだ。今計算してみたけど……多分俺達の方が遅い』

「うん……でもどうするつもりなの？議会の周りは戦闘で出入り口は両方とも……ってまさか!?!」

ビスケットは表情を青くし嫌な予想を駆り立てながら速度を増していく車の進路を不安に思う。

首を小さく横に振り三日月がやろうとしていることに対する確信に変わっていく状況を否定しようとする。

「駄目だよ……失敗する方が可能性としては高いって、やめようよお……」

情けない表情をしながら迫りくるモバイルワーカーの壁とその後ろに控える議会のロビーの出入り口へと走らせていく。

ビスケットは両腕を左右の椅子にガツチリつかんで衝撃に備える。嫌な予想は現実になり、車はモバイルワーカーの攻撃をかくぐり、壊れたモバイルワーカーは地面にくっついており、三日月はモバイルワーカーの銃口から登っていき、そのまま一気に空を飛ぶように吹っ飛ばす。

モバイルワーカーの頭上を越えてそのままロビーの中へと突っこんでいき、そのままスピニングして柱にぶつかってようやく止まった。

ビスケットはなかなか開かないドアを蹴飛ばすことで外に出ている、三日月は最初つからまともに出るつもりが無く、ドアを蹴って開けると同時にドアが吹き飛んでしまう。三日月の方を睨みつけなが

らビスケットは怒鳴りつける。

「なんで昔つからそんな風に強引なんだよ!!そういうところを少しは反省しなさい!!」

『反省しないよ。一生の病気だから』

そう言つて三日月は一階の中央廊下の方に出ると、ビスケットも後に続く、二人は耳を澄まして集中すると、二階のちょうど真ん中で戦闘をしているのが分かる。

二人は一番近い階段から二階に上がり、そのまま真ん中の部屋の近くまでやつてくる。ビスケットが单身隣の部屋に入つていき、窓ガラスに向けてスモーク弾を投げる準備に入る。視線で合図を送り合い、上からの衝撃と同時にビスケット達も中に入つていく。

シノがテラに向かって足元に転がっていた瓦礫を投げつけ、テラは瓦礫を片手で弾きつつシノを蹴つ飛ばす、しかし後ろを完全に取った明楽が死角からハンドガンで攻撃するが、テラはそれを自然な動作で回避しつつまるで後ろを見ないで明楽を棒で殴りつける。

ペペロを何度も撃つてもペペロは立ち上がり、そのたびにヘラヘラをと笑つて蹴りつけにかかってくる。

Fは人間にはできないような高速の動きでほぼ同時に封じにかかつてきて、テトラはレレを撃ちながらクーデリアを追い詰めていく。

いよいよ逃げ場を失った全員が中心に集められる。そんな中テラは残酷なことを告げる。

「クーデリア以外は殺せ。クーデリア殺さない程度に痛めつけてやれ」

シノたちはクーデリアだけでも逃がせないかどうか悩んでいると、ペペロはふと上の方を見上げて呟いた。

「何かが落ちてきてるかな?」

テラも上を見た瞬間に天井をぶち壊し壊れた天井からワイヤーが落ちてきて、ペペロに向けてハンドガンを頭に一発心臓に一発腹に二発叩き込むが、まるで気にしないよにペペロは立ち上がる。しかし、足元に転がった爆弾に目をギョッとさせて慌てて後ろに飛ぶ。

「撃たれても平気なのに、爆弾はだめなんだな？その辺が君の正体を暴くことになるのかな？」

そういう言葉の端々に怒りをにじませており、初めてペペロも怒りをにじませるように笑顔が歪んでいた。

と、同時にテラは先にクーデリアを確保しようとするが、テトラとFの間にもスモーク弾が窓ガラスを割って入ってきて、テトラとFの姿を消してしまう。

クーデリアを確保する為に手を伸ばすが、その手をサブレがつかんでしまう。

「久しぶりだな」

「そうだね……君に会いたかった」

「俺は会いたくなかったよ」

テラはサブレの手を振りほどきナイフをサブレの腹目掛けて突き刺そうとするが、サブレはそれを素早い動きでよけてつつテラを蹴り飛ばす。テラもうまく受け身をとりつつお互いに距離をとる。

その時、三日月は勢いよく部屋の中へと入っていきFに向かって分銅鎖を思いつき叩きつけ、Fはそれを回避しこねてしまい、額に微かに当たってしまふ。三日月はそのままFに空中に蹴りかかり、Fは今度こそ受け止めるが、三日月は空中で体をひねってFの背中に移動する。

ビスケットもスモークが部屋中に満ちた瞬間にテトラに向けてハンドガン为数発撃つと偶然そのうちの一発がテトラのハンドガンを飛ばしてしまう。

ビスケットはその隙にテトラに組み付き殴りかかろうとするが、テトラはビスケットの持っているハンドガンを片手間で弾きつつ自分のハンドガンを取りに行く、ビスケットも自分のハンドガンを取り片膝をつきながら取ってお互いに構える。

同時にスモークと砂煙が晴れていき、クーデリアやシノたちを守る形でサブレ達は立ちふさがった。

サブレ対テラ

モンターク対ペペロ

三日月対F

ビスケット対テトラ

八人による議会戦が始まろうとしていた。

## ウィー・ラブ・ユーVI 《愛ゆえの憎しみ》

12

戦ってきたシノたちの眼前に現れた四人の人影はまるで漫画やテレビに映っている正義のヒーローのようにも見えた。

サブレと同時に降りてきたクレアは傷ついたレレの元へと急ぎどこか申し訳なきそうにしている。それだけでレレにはサブレの覚悟が身にしみてわかつていた。

レレには分かり切っていた事だった。

サブレが一人を決めることをしなかったのは、自分やここにいるアスナが原因だと思っていた。自分達を傷つけまいと、返事を遠回しに、しかし、誰かに手を差し伸べることをやめたくないがためにいっただって曖昧に、適当にはぐらかす。しかし、クレアの表情はサブレの覚悟が示した証でもある。

キャリーに告げた「自分が自分であるため、サブレとの関係をはっきりしたうえで自分の将来を決めたい」と覚悟の上で突き進んできた道だ。

クレアが言いにくそうにしているとレレは額をクレアの額にくっつけ息がかかりそうなほどに近い距離を維持する。

「誇つてよ。あなたは私達がいくら言っても届かなかった思いをあなたは届けたんだから」

「……………うん」

涙を流すクレアを抱きしめるレレに後ろで複雑な表情をサブレに向けるアスナ。

サブレはテラの方を見ながらレレとアスナに一言だけ告げた。

「後で話がある。だから……………待っていてくれ」

そう言つてサブレはテラの体を強引に議会場の方まで連れて行って姿を消してしまった。

ペペロはヘラヘラ笑いながら東区画の方まで姿を消し、モニタークもそれを追いかけるように走り去っていった。

テトラも西区画の方へと走り去っていき、ビスケットも追いかけて

うとする。

「待つてくれ……！俺達も」

「大丈夫だよ」

ビスケットは笑顔を向けてそのままテトラを追いかけていく。たくましく見えたその大きな背中が少しづつ消えていった。

最後に残されたFと三日月はほぼ同時にロビー方面に駆け出していった。

寂しさが残る冷たい空気だけが場を満たしていた。

ビスケットが自ら引き受けたテトラの相手こそEDMと新しくできた太陽系議会にとつて最初の障害になりかねない存在だった。

いずれ火星の政治体制を素早く取り込みたい太陽系議会からすれば、火星連合の事実上のトップであるテトラの支配は木星帝国による隷属と同じことでもあった。

他の経済圏同様に火星連合を解体するためにはテトラを引きずり落とす必要がある。

その大事な一戦を引き受けたのはビスケットだった。

もちろんこの一戦がそんな大事な一戦になっているとはまるで思わないビスケットは西区画の二階の廊下の上で悲鳴を上げながら走り出していた。北から南へと駆け出しどこまでも走るのではないかと思うほどに、今まで出したことが無い速度で走っていく。

その後ろでテトラは笑いながら手榴弾を投げつける。ビスケットは焦りながら右隣の部屋へと飛び込んでいく。

すると、先ほどもまで自分が立っていた場所で手榴弾の爆発音が鳴り、ビスケットはそれから身を守るためパソコンが乗っている作業用デスクの下に隠れる。

爆発による破片がパソコンを吹き飛ばし、廊下の窓ガラスをまき散らす。ビスケットはデスクの下で両手を頭の上に置き、衝撃に耐える為に歯を食いしばる。

爆発が止んだところでビスケットはデスクから頭をかすかに出し、ポケットの手のひらサイズの小型爆弾を廊下目掛けて投げつける。

爆弾はテトラの足元まで転がっていき、テトラは左側の作業フロア

へと飛び込み、同じように作業用デスクへと隠れ、衝撃をしのぐ、爆発が終えたタイミングでテトラはビスケット目掛けてハンドガンの引き金を容赦なく引く。

「出てきなさいよ。男のくせに!!かつての鉄華団のように戦いなさい!!ビスケット・グリフォン!!」

憎しみを込めた言葉にひるんでしまうビスケットはテトラから送られてくるある意味呪詛の言葉の反論を口にする。

「あなたはお父さんを殺された恨みを鉄華団に向けるのは分かる。でも、クーデリアさんを恨むのは筋違いじゃないですか?だって、そもそもギャラルホルンがクーデリアさんを殺そうとしたのが原因だったんですから」

そんなビスケットの言葉を真に受けたテトラは怒りと憎しみを増してしまい、ハンドガンを乱射して弾を入れ替えている。そのタイミングでビスケットは小型爆弾を二つ連続で投げつける。

テトラはそのまま北側の部屋へと移動し、会議室のテーブルを倒して防弾壁にしながら体制を整え、テトラはマシンガンで窓ガラスを割りながら別の爆弾をビスケットの隠れている作業フロアへと投げつける。

ビスケットは自分の足元へと飛んできた爆弾を廊下へと投げ返し、そのまま走って北側の部屋へと移動する。

「クーデリアさんはあくまでも防衛の為に鉄華団を雇っただけであって、殺したのも鉄華団だし、それなのにクーデリアさんを殺そうとするのは別の理由があるんじゃないですか?あなたの怒りはまるで……」

そこまで言った所でテトラの怒りで発狂しながらマシンガンを乱射しながら叫ぶ。

「うるさい!!うるさい!!うるさい!!あんたに何が分かるのよ!!家に帰ればテーブルの上にお金が置いてあるだけで、お父さんは帰ってこなかった。あの日だって……!!」

怒りと同時に感じ取れる憎しみの中には明らかに父親に対する気持ちもあった。

「帰ってこなかった」つという言葉に寂しさと共にその恨みをクーデリアへの殺意に変えている気がしてしまうビスケット。

「あなたは……もしかして、父親が自分を振り向いてくれなかったからですか？」

マシンガンの弾が切れてしまったタイミングでマガジンを切り替えながら少しの沈黙の後に怒鳴り声がビスケットの鼓膜を刺激した。「そんなんじゃないわよ!!!」あの日……あの日あんなものさえ見つけなければ……こんな気持ちになることだってなかったのに!!!」

涙を流しながら再びマシンガンを乱射し、弾丸は窓ガラスを破壊してデスクや部品を破壊していく。

幼いころのテトラは決して裕福とは言えなかったが、当時の火星の一般家庭の収入を考えれば、少なくとも貧困という事は決してなく、言ってしまうば裕福の方だっただろう。

しかし、それは幸せだったという事ではなく、娘を学校へと通わせるために仕事一筋だった、父親が自分の事を見ていなかったという寂しい家庭環境だった。

物心つく頃には母親を失ってしまったテトラには父親しか親とよべる者はいなかった。

しかし、父親は仕事に没頭していて、テトラが家に帰ればその日の夕食代がテーブルの上に置いてあるだけで、そんな夕食代で近くのスーパーで買い物をして帰る毎日。

友達とよべる人もまるでできなかった彼女には家で寂しく食べる食事以外には勉強することしかできなかった。

寝るまでの間にただ勉強するだけの毎日はいきなり崩れ去った。

一本の電話が彼女の悲劇を加速させた。

「あなたのお父さんが殺されました」

彼女は孤独になった。

そんな事情など知る由もないビスケットには彼女の怒りの本当の理由が分からずに戦うしかできなかった。

両者が爆弾を使用した戦闘は圧倒的なほど見た目が派手で、二人がいた部屋が廃墟になりかねないほどであった。



ビスケットはチャンスを探し出し、テトラは弾切れしたマシンガンを放り出し、腰からナイフを取り出して議会西隣にある一番大きな会議室へとたどり着いた。

部屋の出入り口は一つだけ、左と一番端が一面窓ガラスでできているこの部屋に入っていたのが数分前だという事をビスケットは確認を取っていた。

ビスケットはスモッグと催涙弾に足をとられていしまい、気が付いたときは一番奥の部屋へと隠れていた。

しかし、一番奥の部屋に隠れたという確信を得るまでに五分はかかってしまい。最後のドアに手を掛け、ゆっくりと開けると、部屋中に赤外線センサーが部屋中に隙間なくついており、その赤外線の枠から大きく距離をとる形でテトラは大きなデスクをいくつも壁にしていた。

その時点でビスケットは彼女が弾切れ状態だという事に気が付いた。

しかし、逆に言えば背水の陣を敷いてでも戦おうとするこの状況はむしろ彼女を冷静にしているのだという事に気が付いた。

先ほどまで怒っていたからこそその激情に駆られていた戦闘方法はしてこないだろうという事だけは確かな事実で、逆にこの境地を乗り越えれば……思う一方でどうすればこの境地を乗り越えることができるのかをひたすら考えていた。

むやみやたらに突っ込めば呆気なく爆死してしまう事は明らかであった。

一旦距離をとつてもいいが、戦ってからそれなりに経っているこの状況、ほかの戦闘が終わっていてもおかしくはなく、状況によってはこつちに敵の援軍が賭け付けかねない。

その前に終わらせてしまいたいビスケットは部屋の中に入ろうとしたところでふと気づく、こんなに爆弾を仕掛ける必要があるだろうか。

(まるで……俺に爆弾を爆発させたがっているみたい。いや……違  
う、この人はナイフでの近接戦闘だって出来るはずなんだ。俺はこん

な体型だし……もちろん最悪の可能性だつてあるけど、弾が無いならこんな危険性を侵す必要はないはずだ。爆弾だつて最悪設置中に誤爆する可能性だつてあるわけだし……そんな可能性を無視してでもこの作戦に掛けたという事は……それに、本来なら爆弾は隠すものだ。こんなに爆弾を大量に設置して、赤外線を露骨に見せているという事はまるで爆発させてくれつて言っているようなものだ……もしかして)

そう思った時、ビスケットは最悪の可能性が脳裏をよぎった。

テトラは電話越しにきいた父の訃報に最初は信じられなかった。

走り出した現場の人達を押し通して奥へと進んで行き、父親の遺体を見つけたとき衝撃のあまりその場で膝を折り泣き崩れた。

大量に流れたと思う血が真っ黒に変色し固くなつてしまつており、廊下の奥から聞こえた声に無意識に耳を傾ける。

「鉄華団の奴ら無茶苦茶だな……後始末するこつちの身にもなつてほしいもんだぜ」

「だな……まあこんな事務所誰も使わないだろうけどさ……。しかし、ギユウジャンの奴も馬鹿だよな……クーデリア・藍那・バーンスタインを狙うなんてさ。彼女、実はあのテイワズと繋がっているらしいぜ」

「あのマフィアの？じゃあ、鉄華団も……」

「じゃねえのか？いつそ壊してしまつたほうが……」

「いや……それはだめだつてさ。なんでも木星の資産家の支社が買い取つたらしいぜ」

「事故物件じゃねえかよ。いや、事件物権か？」

二人の作業員の話聞くうちに聞こえてきた『鉄華団』『クーデリア・藍那・バーンスタイン』『テイワズ』という言葉だけが脳内に残つていった。

その後、父親が亡くなったこともあつて家も没収されてしまい、親戚もいない彼女は行く当てもなくさまよつていた時、彼女は結局父親の事務所の前まで戻っていた。

夜遅くに立ち入り禁止の黄色いテープを掻い潜り、事件現場に入る

と、パソコンが起動していることに気が付いた。

そこには複数の預金口座が移っており、その口座内が空になっていることに気が付いた。しかし、問題はその口座の名前が『テトラ学費』になっていることに気が付き、その学費を稼ぐために最近になって仕事に極端に減る状況で危ない仕事に手を出し始めたことに気が付いた。

それ以外にも日記には彼が追い詰められていく描写が描かれており、次第に覚えていったのは憎しみだった。

しかし、その憎しみが鉄華団、クーデリア・藍那・バーンスタイン、ティワズに向けられたものなのか……それこそ父親へと向けたのかは分からなかった。

そんな時……テラに出会った。

ビスケットは悩んだ結果爆弾を先に誤爆させることにした。一旦戦闘跡の部屋まで戻り、瓦礫をいくつか持って戻っていき、部屋の外の物陰から爆弾を誤爆させた。大きな爆発音で周囲の建物が崩壊するのではないかと思うほどの衝撃がビスケットの足元を揺らす。

テトラが瓦礫に隠れる中、ビスケットは爆発で生じた煙や砂埃が視界を埋めてしまい、それでも突き進もうとしたところでいきなり視界が晴れる。

テトラは物陰から何かを爆発の中心に投げ込み、それが割れた窓ガラスから外へと煙などを追い出してしまい、ふさがっていた視界を晴らしていた。それはまるで小さな蜘蛛のように見える道具で、風を巻き起こしていた。

ビスケットは驚きと共にたじろいでしまい、その隙にテトラはハンドガンを手に取りビスケットの帽子越しに頭へと向けて引き金を引いた。

ビスケットの帽子に当たった弾丸は弾かれてしまい、帽子が後ろに吹き飛んでしまうが、何とか片膝をつきながらハンドガンを彼女の左胸に向けて引き金を引く。

テトラは咄嗟に出した左腕を貫通した弾丸をよけることもできず、左胸にあたってしまう。ビスケットはもう一度帽子を被り直し、物陰

に倒れてしまったテトラを確認する為に左側から回り込んで姿を見るとテトラは目を開いてビスケットの左胸にハンドガンに向けた。

「しまっ………!?!」

テトラがハンドガンの弾を温存しているのではという事は想定していた。だからこそ、帽子の中に金属の当てモノを入れておいたまでは良い、しかし、金属の当てモノは帽子につけてしまつて当てが無く、これ以上時間をとられるわけにも行かなつてビスケットはこの作戦に賭けていた。しかし、テトラはここからもう一つ先を読みきり、怪我を負いながらもハンドガンを向けていた。

こう見ると、左腕を怪我したのも弾丸が当たったのかを隠すためだと判断できた。

ビスケットは全てがスローモーションに見え、走馬燈さえ見えたところでテトラの放ったハンドガンの弾はビスケットの左胸にあたつてしまう。

感じたことも無い衝撃と、十年前を思い出す痛みがビスケットの体中を突き抜けた。

あっ………死んだ。

そんな言葉が脳裏を宿りそのまま倒れてしまったビスケットは、苦しみながら悶えてしまう。

テトラは勝利を確信し、そのまま立ち上がつて左腕を庇いながら状態を確認すると、ビスケットは痛みはあるが死ぬほどでもない、その時、ビスケットには自分の左胸をふとのぞき込む。

その正体に気が付き、勢いよく立ち上がるとハンドガンを弾いてテトラの後方に吹き飛ばす。テトラは生きていることに驚き抵抗することもできず、ハンドガンが後方に飛んでしまったところでナイフを取り出して、斬りかかってくるが、ビスケットは左腕でナイフを受け止めつつ、至近距離で殴りつける。

テトラは悲鳴を上げながら後方に吹き飛び、ナイフもはるか後方に吹き飛んでしまい、テトラとビスケットはほぼ同時にハンドガンへと手を伸ばすが、テトラが先にハンドガンに向けたところでビスケットのどこを撃てばいいのか悩んでしまう。その隙にビスケットのハン

ドガンの弾が頭に直撃してしまう。

テトラは最後の瞬間に父親の姿を思い出していた。

倒れたテトラの右胸から落ちてきたスマホを手に取るビスケットはその中に記載されていた父親への愛を知ってしまったテトラがそれ故に父親へと憎しみを覚えてしまった経緯が描かれていた。

愛していたのならどうして自分を見てくれなかったのかつという記載が描かれており、ビスケットはそれを見る度にどこか心苦しくなってしまう。

愛ゆえに憎しみを覚えてしまったテトラはその当てのない憎しみに父親を殺した人たちやその関係者たちへの憎しみへと変わっていった。

そんな場に自分がいても仕方ないつと分かっているても、それでも考えてしまうビスケットは一筋の涙を流してしまう。

決して勝利を喜んでみられず、そんな気分にもなれない中、自分の左ポケットに入れたままにしていた三日月のハンドガンを取り出す。

ちょうど真ん中に弾が当たって壊れてしまったハンドガンを両手に抱きしめる。

オルガやライドが守ってくれたようにも見えた。

しかし、同時に感じる寂しさとテトラという敵の女性の気持ちを知ってしまったという気持ちたちが複雑な悲しさを感じ取っていた。

涙を流しながら勝利を噛み締めていた。

## ウィー・ラブ・ユーⅦ 《微笑と怒りの狭間で》

13

ペペロはクリュセ議会の東区画を真つ暗闇に変えてしまった。一寸先すら見えない闇が周囲を覆い、モニターは警戒心を高めながら一歩一歩音をたてないように進んで行き、壁に左肩を当てながら場所の確認を怠らない。

『一寸先は闇とはよく言ったものだな』

長い廊下は逃げ場が存在しない廊下をモニターが歩いているのは、物音を立てやすい室内より自分の居場所を敵に把握しにくいだろうという考えからである。

実際東区画に入ってから三十分が経つがまるで攻撃を仕掛ける気配がない。いい加減北の一番端の部屋に辿り着こうとしていたが、物音も聞こえてこず、自分の左肩が壁に当たるすり音がかすかに聞こえてくるだけである。

しかし、そんなとき一番端の部屋から微かにだが机が動く小さな音が聞えてきた。

入るべきか入らないべきかで悩んでしまうモニター。単純に罠の可能性が高い反面、小さな可能性で単純にミスをした可能性もある。

ペペロは言い方を悪くすれば太っている。

それは歩くときにぶつけやすいという意味でもある。それでもなぐてもテンションの高そうなペペロが物音をたてないようにするのは難しいのではないかと考えた。

部屋に入るのに三十秒だけかかってしまうと、そのままゆっくりと物音をたてないようにしながらドアを開けて室内に入る。ガラんと寒気すら覚える室内の嫌な静けさがモニタークの背筋に冷汗を流し、全身に緊張を誘う。

全身から警戒心を放ち、見えない闇が恐怖をモニタークに与える。

すると少しだけ離れたところで椅子がかすかに動く音が聞こえてきて、そちらの方へとハンドガンを向ける。

すると、後ろのドアが閉まる音が聞こえてきて、振り返ると先ほどまで開いていたはずのドアが閉まっているのがうつすらと見えた。しまったドアをもう一度開いて廊下まで出ていくと、廊下にピエロの落書きが光って見えた。

「へへへ〜!!よくできていますでしょ? 大急ぎで書いたんだけどいい出来だよね」

あちらこちらから声が聞こえてきて、居場所が分からない。

モンタークは左右の部屋の部屋を確認しようとすると、奥の部屋から聞こえてくるような気がしてきた。

「知ってる? 僕も地球出身者何だよお〜」

出身地は不明だとクレアはモンタークに告げていたが、予想外にも自ら出身地を告げてたことに驚きしかなかった。

「知らなかった? お父さんから聞かなかったのおお? ラスタルにもお〜?」

ラスタル、父親の名前が出た事に驚きしかなかったが、そこまで出たところでモンタークはペペロがギャラルホルン関係者に近い人物だという事を確信した。

ペペロはギャラルホルン関係者である。

その真実を知る者はいないだろう。なぜなら、ペペロという名前自体偽名であり、真名はすでに失われているからだ。

ラスタルでさえ名前自体は知らなかった。しかし、かつてのペペロが研究部署の名前さえ出せばすぐにでもわかりやすい場所だった。

『薬品兵器開発部署』

そこがペペロが開発した薬品兵器を開発するためのギャラルホルンのセブンスターズの一角の直属組織であり、同時に最も忌み嫌われる組織に変わってしまった。

それをモンタークは知ることになる。

「僕の事を教えてあげるよお〜」

モンタークはあえてしゃべらない。ただ探すように一つ一つの部屋へと入っていき、気配を探る作業の中でペペロは一方的にしやべる。

「もしかしてえ〜疑っているのぉ〜？それについては僕にとっては君は決して他人事じゃないからなんだけどねえ〜。だって……僕の開発部署を担当していたのが……君のお父さんなんだからねえ〜」  
これ以上ない衝撃を得た。

父が持つていた担当部署の研究所の男が妹であるアルミリアの記憶をいじったという真実。まるで巡る輪廻のような因縁に見えた。

「君は知るべきだよお〜君のお父さんが好意で作った部署がどんな悲劇の事件を作り出し、それをイズナリオがどのように利用し、君がそこにどうかかわっているのかをね」

ペペロは語るお話はペペロに微笑を、モンタークには怒りを与えるお話だった。

僕がガルス・ボードウインの研究部署に付いたのは君が生まれる五年前の事さ、君のお父さんはバイオテロ対策の小さな研究部署だったんだけどねえ〜、そんな時、当時の研究部長が人体に影響のある薬品の実験の為にヒューマンデブリを拾ってきては薬品を試していたんだけどねえ〜、そんなときだったよ……イズナリオ・ファリドが訪ねてきたのは、彼は『ヒューマンデブリを購入するための場所を紹介してほしい』という話だったよ。

うちの研究部長はある場所を紹介したよ……しかし、その二か月後……紹介した場所は大規模なバイオテロで崩壊してしまっただよねえ〜。

そうだよお〜、イズナリオがバイオテロをおこしたのさあ〜。理由かい？簡単だよ……ラスタルがかぎつけたからねえ〜証拠隠滅で街ごと滅ぼしたんじゃないかなあ？

ただそれで危機的状態になったのはうちの部署だった。

バイオテロの疑いで嫌疑がかけられてしまい、イズナリオの手でほろぼされてしまったのさあ〜、まあ、街を滅ぼすウイルスを開発したのはぼくなんだけどねえ〜。

怒るなよお、イズナリオに頼まれて開発しただけだし、それに謝礼金ももらったしねえ、ははあ！もしかして……そこうちの父親がかかわっているんじゃないかって？そこは安心しなよ……彼はそ



れによってセブンスターズの立場を危うくしてしまっただけき。だからこそ、研究部署はガルスの手で滅ぼされてしまった。

僕はそのころにはテラの紹介で後の皇帝に出会ったけれどねえ。そうだよ。その紹介した場所であつたのがマクギリスさあ、僕は知っていたけれどね……。あそこは子供を本当に性処理の道具ぐらいにしか思っていないからねえ、イズナリオの性格上正面切つて探せなかつたんじゃないかな？ 紹介という形でしか探せなかつたんだよ……。まあ、ラストルは分かっていたみたいだけれどねえ……。

あ……。そうだね、ラストルで思い出したけど……。アイン・ダルトンのクローン生成に協力したのが僕なんだよねえ……。戦闘能力を覚えさせ、記憶の操作にはどうしても薬品の力を借りないとできないからねえ……。まあ、僕は面白かつたけれど。

ガルスが作ったバイオテロ対策部署がバイオテロの為の兵器開発をしていて、それをしそれを原因としてマクギリスを中に入れてしまったという話だった。

「それ以外にもいろいろな所から子供を引き入れては部署を潰し、を繰り返していたみたいだし、それによってセブンスターズの権威を脅かしていたみたいだねえ。それで自然とファリド家が上に立つチャンスを得たんじゃないかな？ それでエドモントンのあの事件につながるわけだ。権威を落としたセブンスターズの上に立つ機会だと考え、下手をするとラストルを蹴落とす権利を見出したんじゃないかなあ？ それを知ったマクギリスはイズナリオをひきずりおとしたというわけだあ」

そこまで聞くとモンターク小さな怒りが芽生えた。

「偶然だっただろうけどねえ。最初は……。ガルスが権威を落としたところを見て思いついて、マクギリスを自分の妾の子として紹介したのも、子孫のいない自分では上に立てないと考えた上の苦肉の策だったんじゃないかなあ？ まあ、妾自身いないわけだけれどねえ」

どこか面白おかしそうに語る友人の話にモンタークは限界だった。

マクギリスの事はラストルからおおよそ聞いていたが、しかし、心のどこかで信じたくないという気持ちがあつたのは真実だった。

イズナリオが金髪の少年を好む特殊な性癖であり、マクギリスはその犠牲の上であるような歪んだ性格になってしまったのは知っている。だからこそ、本当にマクギリスはアルミリアを好きだったのではないかと悩みもした。

だからこそ、イズナリオと久々の再開を果たしたときは殺意さえ覚えもした。しかし、耐え続ける毎日でもアルミリアの殺害で予想外の終わりを迎え。アインの暗躍とEDMの攻撃でギャラルホルンは長い歴史に幕を下ろし、愛していたかもしれない人は死んでしまい、立場も家族も終わりを迎えた。

決してそのすべてがペペロに原因があるわけでも無いが、マクギリスも結果からすればセブンスターズの立場を味わったわけだ。そのすべてを否定するわけにはいかない。きつとカルタ・イシューはそんな立場に関わらずきつと好意を抱いたと思っていた。

しかし、問題はなぜペペロはイズナリオに協力したのかということだった。

「僕がイズナリオに協力した理由を知りたいんだろお？教えてあげるよお」

モンタークの入った七つ目の部屋の中心にピエロの人形が口をパクパクしてモンタークを招こうとしており、次第に動きが速くなっていく。

モンタークは嫌な予想が頭の中に浮かび上がり、すぐに部屋から出ていき、柱の陰に隠れる。同時に大きな爆発が左右の部屋ごと破壊し、モンタークの近くにまでガラスの破片を飛ばした。

「ハハハア!!面白そうだからだよお!!多くの人が苦しんで死んでいく光景を遠くから見ていてすぐ面白かったあ!ある女性は子供だけでも守ろうと助けを求め這いずり回り、男性は愛する人の名前を叫んで死んでいく。阿鼻叫喚でみんなが必死なんだよお……楽しいわけが無いよお!!ねえ!」

モンタークの怒りはその言葉に限界を迎え、大きな怒鳴り声を張り上げた。

「ふざけるなあ!!そんな理由でバイオテロを引き起こし、父親をはめ



話も半分近くは嘘なんだろう？元ギャラルホルン関係者ならバイオテロを起こした時点でラスタルの肅清対象だろう。父が止める前にラスタルが潰している。それなら貴様が生きているはずがない。しかし、バイオテロを使った薬品を作ってテロを起こしたのは貴様なんだ。イズナリオから依頼を受ける形でな。それが真実だ」

要するに全部が嘘だったわけでは無いが、モンタークを誘い出し冷静さを失わさせる罠だ。

落書きはあらかじめ書いており、視線や考えを落書きに向かわせつつ『今書かれた』と思わせることが目的で、本人はその隙に爆弾を設置した。そうすれば、モンタークが確認の為に部屋一つ一つを調べると思ったからだ。

実際にモンタークは部屋を一つ一つ確認した。

そのうえで、爆弾を回避したモンタークを殺すため暗視ゴーグルを使ってモンタークの姿を確認していた。しかし、モンタークは閃光手榴弾を使って視界を潰しにかかってきた。それが逆に暗視ゴーグルをつけていたペペロには強烈なダメージになってしまった。

だからこそ、手榴弾が投げられたことも、消火栓が破裂したことも反応しきれなかった。

「てめえなんて所詮はギャラルホルン崩壊の為のおもちやだあ!!おもちやならおもちやらしくさっさと壊れればいいのによお」

ハンドガンを乱射させながらモンタークの方へと撃つと、モンタークは足をかすめながら弾丸を回避するため隣の建物に入っていく。

「死ねえ！貴様なんて所詮はあ!!」

そういいながらハンドガンのマガジンを交換する間にモンタークは部屋の中を物色すると、すぐ隣に消火器があることに気が付いた。モンタークは消火器を思いっきり持ち上げ、投げつける。ペペロは恐ろしい表情で消火器を撃った所でミスに気が付き、目の前で破裂すると破片がペペロの顔面にあたって鋭い痛みがペペロを襲い、苦しみながらハンドガンを落とし両手で顔を覆う。

モンタークは一気に部屋から出ていきハンドガンの引き金を引く。

「貴様だけは絶対に許さない！」

ハンドガンの弾はペペロの右胸にあたり、ペペロは後ろに倒れるだけだったが、モントークはそれで死なないことはよく分かっていた。最後にとどめとばかりに手榴弾を二つほど投げつけると、手榴弾の爆発は弱っていた床を破壊して大きな穴をあけてしまう。

モントークは大きな穴まで近づき下をそつと覗くとペペロの声が聞えてきた。

「いつかぶつ殺すう！」

そう言っつて足音は遠くへと消えていくのが分かった。

モントークはゆつくりと壁に体を預けていると、ふと頭の中に飛行機の話が思いついた。

「まさか……ペペロの目的はテラのきつ……」

そこまで口にしたところでモントークも一階を目指すために階段へと歩みを進めた。

モントーク対ペペロ戦

ペペロ逃走 引き分け

## ウィー・ラブ・ユーⅧ 《無を有する者達》

14

三日月は決して目の前を走っているFという男を見失うわけにはいかない。逆に言えば、ここで振り切ることができれば木星帝国側からすれば戦局のバランスを崩すことができることになる。

ある意味左右で始まっているビスケットとモンタークの一戦を占うことになる。

走っていくたびに顔につけている布がなびき、かすかに金属の顔がチラチラと見えてくる。Fは後ろを走っている三日月を一度だけチラ見すると、Fは両サイドにあった柱にワイヤーをとりつけ力任せに柱を崩し三日月の進路上に倒すことに成功した。

右側の柱が先に倒れ始め三日月はそれをスライディングの要領で柱が倒れるスレスレの隙間を縫うようにつけぬけていき、左側の柱は三日月ではなく、目の前の通路をふさぐように倒れようとしていた。さすがにこれを回避することは距離的にできそうに無い。

だったらと三日月は腕に隠しつけた鎖分銅を使って天井に叩き込み、めり込んだところで力いっぱい自分の体を浮かせて上側の隙間へと体を滑り込ませる。

さすがにFも三日月の行動力は計算外だったらしく、驚きを隠せないでいると、そのままロビーまで辿り着く。

Fは二階の手すりに足をかけ、大きく跳躍するとワイヤーを使ってシャンデリアに乗り移ると、三日月に向けて叩き落す。三日月は鎖分銅を使ってシャンデリアを横側から叩きつけ、軌道をギリギリで逸らし、Fはその間に西区画へと移動しようとするが、三日月は三階へと跳躍する為に、二階の天井に鎖分銅を叩きつけ、そのまま体をうまく使って三階の方まで移動し、そのまま天井に再び鎖分銅を叩きつけて場所を移動する。三階に降りると西区画へと移動するFに向けてハンドガン向け容赦なく引き金を引く。

さすがにFも後ろを向いてすかさずハンドガンの弾を弾くが、その隙に一気に距離を埋め、三日月は右側頭部目掛けて蹴りつける。

Fは弾丸を弾くのに神経を使い過ぎてしまい、回避することも受け止めることもできなかつた。

頭部への激しい痛みを受け、Fは苦痛の表情を浮かべながら体を壁へと叩きつけられた。

三日月はすかさず追撃を仕掛けるが、Fは腕に隠したボウガンで矢を射出すると、三日月はそれを左手で受け止めつつ鎖分銅をFの顔面目掛けて飛ばすと、Fは鎖分銅を回避しつつ鎖分銅をつかんで三日月を強引に近づけ腹目掛けて蹴りを入れる。

三日月の体は反対側の壁に激突し、ほぼ同時に駆け出していきナイフとナイフがぶつかり合って刃と刃がぶつかった瞬間に火花を散らし、にらみ合いお互いに跳躍して距離をとると、喋れない三日月と怒りによりテンションを上げ過ぎてしゃべることすらしなくなったFによる沈黙の戦いが始まっていた。

Fは裕福な家の生まれだったが物心がついたころには彼は地球圏と火星、木星間の微妙な関係に疑問を抱いているような賢さの欠片を見せているような子供だった。しかし、この子の家庭が裕福でギャラルホルンとも綿密なつながりのある家であることがこの子の考え方が家族からすれば危険な思考であることは既に分かり切ったことであつた。

選り取つた家庭教師とギャラルホルンの思想を反映している学校へと通わせる毎日はある意味拷問等しい意味を持っていた。

ある意味での洗脳行為であり、ある意味でFを追い詰めていった。

学校で勉強し、家に帰ると家庭教師による洗脳行為に付き合う毎日  
はFに過剰なストレスを与えていった。

そんな毎日は結果からしてFに殺人を決意させるに至つた。

父親と母親の目を盗んでキッチンまで忍び込み、隠してあつたナイフを取り出すと、そのまま寝室まで忍び込みとまず両親の両手両足を自分の部屋のシートと倉庫にあつたロープを使い、口をガムテープで塞いでまず父親の心臓の近くに力いっぱいナイフを押し付ける。

さすがに父親はすかさず目を覚まし痛みで苦しみ悲鳴を上げようとするが、ガムテープが悲鳴を邪魔してしまう。

しかし、そこは子供の力である。どんなに力を込めても少しづつしかナイフを押し込めない。それが逆に父親に長い苦痛を与え、少しづつ死を実感させる。

痛みがマヒしてくると、父親は内心息子に命乞いをするようになった。

今更そんなことで助かるような状況ではない。しかし、くしくもこの時暴れたときに隣で寝ていた母親が目を覚まし、驚きのアクションをとる瞬間にベットから落ちてしまう。逆にその行為が母親の両手を自由にする。

息子を父親から剥がしベットから叩き落す。父親はその時には既に死に絶えており、息子への恐怖と怒りが複雑にまじりあい、息子が落としてしまったナイフを拾って殺そうと試みる。

馬乗りになってナイフを振り上げたところでようやく異変に気が付いた執事をやっていた四十代前半の男がやってきた。

その人物こそ後のテラである。

ロビー一階まで落ちていき二人の戦いは周囲の部品を破壊しながら戦っていた。

かれこれ戦闘が始まって三十分以上が経過しており、機械の体であるがゆえに疲れを知らない二人の戦いは常に全力で周囲を考慮しない戦い方は既に人の領域を超えていた。

テラが改造したFとゲイナーが改造した三日月。人として、機械としてある意味人が改造できる究極と言ってもいい存在の戦いは自然とある人物が興味を抱いていた。

白髪をなびかせ二人の戦いをドローン越しにずっと関している人物は、後ろで遊んでいる子供達や落ち込んでいる二人の女性には目もくれずひたすら二人の戦いを見ていた。

ソニアはドローンから得られる状況を解析機に回し、二人の速度や戦闘経過をコマ送りで記憶しており、解析機は二人の改造率をたたき出している。

二人の戦いと並行してエイハブ粒子の結晶化を起こしている小さな実験を起こしており、小さな筒の中でエイハブ粒子を結晶化する為



に様々な試行錯誤をしており、小さな結晶ができています。

しかし、ここまでが限界であった。

これ以上大きくはならず、下手に大きくしようとする逆と逆に爆弾に早変わりする。

地球圏では許してくれない実験なので火星に来たかったという理由が一つと、サブレ・グリフォンが何か違う何かを感じたというのがもう一つの理由だった。

しかし、サブレ・グリフォンは戦闘の邪魔をされることを嫌がり、ドローンによる撮影なんかすれば後でドローンをすべて破壊してくるくらいである。

破壊したドローンの数は二桁を軽く超える。

そんな二人の戦いを傍に見ながらソニアはふと思う。

人という概念を機械という形で超えた二人、その対象でサブレは人という形をどのように超えたのかを比べるためでもある。

サブレという次世代の可能性と旧世代の可能性を追求したFと三日月。

ある意味人という有をほとんど持たない無の存在。体のほとんどを機械で補い、人間としての機能を機械で補うのではなく、機械が人の形を成しているという点ではサイボーグというよりアンドロイドと言ってもいいだろう。

元の人間をモチーフとしているといったほうがきつと正しい体を三日月とFは持っている。

しかし、三日月・オーガスは元々死んでいる肉体を蘇生するという目的の元で使えなくなつた臓器や脳の一部、人工筋肉や皮膚ですら機械やナノマシンで補う。それは鉄華団崩壊時の戦闘での肉体へのダメージが原因だった。

では、Fは何なのだろうとソニアはふと考えてしまった。

クレアの意見によりテラがサイボーグ開発に関わっていたことは分かっていた。

ではどこでFはサイボーグになったのだろうかかと、そう思った時、テラがサイボーグを施したかもしれない推測を考えたとき、テラ

とサブレが戦った事件を思い出し、その際にテラと組んでいたと思われる人物を探り当てた。

地球のアーブラウ出身者であることが分かり、名前は『ミラー・フェンサー』で機械の製造業で有名な会社であったことも把握できている。

しかし、彼は8歳の時に両親を殺している罪で追われている身であることも分かっている。問題があるとするれば母親の死に方だったからだ。

「確か……父親はナイフによる攻撃により生じた出血死で、母親が拳銃による自殺だったわね」

当初ギャラルホルンは子供が犯人だと疑わなかった。しかし、のちに母親の死因になった拳銃からは母親の指紋しか検出されなかった。のちに息子への疑いは母親の方へと移動したが、EDMは一貫して息子による殺人と第三者による介入を主張した。

しかし、ギャラルホルンは一貫してその主張を拒否して母親の無理心中と判断した。

「あの時の男の子が？でも……年齢が」

そう判断したとき、手元の資料をめくっていると一つのページに辿り着いた。

『肉体増強剤』と書かれたページには副作用で肉体の急速な成長と老化と書かれており、それを開発したのはフレアというクレアのお母さんであることも。しかし、この薬は彼女の手で封印された禁薬である。

もし、それをテラが開封したのなら何のためにと考えつつ、サイボーグ技術と一つにつながると嫌な予想が浮かび上がった。

その執事はその様子をまるで疑問に思わないような表情で一貫しており、母親はナイフで息子へと迫っており、息子の両手は血でたっぷり、ベットの上には父親が心臓一帯から大量の血を出して絶命している。

そんな状況を見れば十分であり、執事はどうしたらいいかとふと頭を働かせた。ここで息子を捕まえることは簡単である。しかし、かと

いつて母親をを殺すのも何か違う気がする。

かといって血走った母親を助けるのも違う気がして気が引けた。

母親の方は数年前に雇った執事などまるで興味など無く、息子を殺すことだけに集中しきっており、血走った眼が思考を妨げていると普通に判断できた。

執事には息子が殺人に走った動機はおおよそで予測ができ、それを売らず蹴ることも簡単であった。

こうした場合、執事が助けると決めた人間は息子の方であった。近くの譚の中に隠している護身用の小さな拳銃を取り出すと、左腕で体を後ろから羽交い絞めにして、素早くこめかみに拳銃を当てて一切のためらいの余地なく引き金を引いた。

母親は力なく倒れ、その場に崩れ落ちた。

息子の前に立つ執事はまるで自分を助けてくれた英雄にも、真の父親にも見えなかった。

「来るか？私の為に戦う覚悟があるのなら、私の為にすべてを投げ出せる覚悟があるのなら私がすべてを与えてやろう」

その言葉は啓示のように聞こえ、少年は……幼いFは全てを投げ出す覚悟を固めた。

三日月の渾身のストレートパンチをFは受け止めつつハンドガンを頭めがけて打ち付けた。しかし、金属の体には致命的な攻撃にはならず、Fは一旦大きく距離をとり、そのまま側頭部目掛けて蹴りつけようとする。

三日月は右腕でうけとめつつ鎖分銅をFに向けて叩きつける。しかし、それを覚悟の上でFは反射的に小型爆弾を三日月目掛けて投げつける。

鎖分銅で攻撃している手前回避に思考を割くことができず、爆弾が目の前にやってきているのに体が動かない。

『何をやってるんだ？三日月』

三日月の思考にもう一人の人物である『昭弘』が動き始めた。昭弘はとっさに体の半分を動かして爆弾を蹴り上げた。

Fは悔しそうに爆発を回避しつつ鎖分銅を三日月から奪い取る。

『起きたんだ昭弘』

『久しぶりに起きてみれば……俺もやるぞ』

二人で一つの体をうごかす。だからこそ、本来ならできないような咄嗟の動きが出来る。視界と聴力を使った認識能力は三日月が、脳波を使ったリーダー型索敵能力で死角を潰すように反応する。

体の基本的な動きは三日月が担当し、反射的で危機的状況において昭弘は体をうごかすことができる。

ワイヤーを無理矢理外しハンドガンを奪い取り、一方的に追い詰められてしまうFは怒り上にテンションを一方的に上げていくと大きな怒鳴り声を上げた。

「化け物があ!!私……俺は負けるわけにはいかないんだあ!」

テラへの穢れなき忠誠心からくるこの行動の原点にはサブレがいた。

Fは数年前までは人間だった。

肉体を強化する特注の強化によって一気に成人までの成長を遂げ、かつ肉体の老化を止めると共に肉体強化用の実験を行うために海賊を利用した実践データの収集を目的としたテラとの共同の任務に志願して、テラを驚かせる。それが目的だった。

強くなった自分を見てもらう。そして、褒めてもらおう。

そう思った任務の途中に予想外の戦力がやってきた。

Fは自らの見せ場だと喜び、敵を倒した。しかし、真実はあまりにも残酷で、自分の目指していた力は幻だと見せつけられた。

たった一人の少年の手によって叩き潰され、テラまで追い詰められてしまった。

助けなければいけない。そう衝動的に動いた結果Fは命を落とした。

のちにペペロの手によって助け出され、テラによって蘇生処置されたFはサイボーグとしてよみがえった。

今度こそテラの力になる為に。

それもまた一人の若者の手によって幻想になった。

二人の戦いは拮抗し、ロビーは人が戦ったにしては荒れ果ててい

た。しかし、そんな現場にペペロが傷だらけで姿を現し、煙幕で場を覆う。

「F、撤退だつてさ。テラ様……亡くなったらしいよ」

Fは衝撃のあまりその場で崩れそうになってしまった。

膝が急に笑い始め、怒りによって目の前にいる男への怒りへと変わっていった。それが外的れの相手であったとしても。

「お前は……お前たちは俺が必ず」

『そして……テラ様の目指す力の為に!!』

その間にペペロはまるで悪魔のような微笑みだった。

三日月はゆっくりと体を揺らしながら二階の西区画の奥へと歩き始めた。

一番奥の部屋にはビスケットが膝について死んだテトラの方を見て呆然としていた。

「あ……三日月」

真実に呆然とし、倒せたという真実がいまだに幻想なのではないかと思ってしまう。三日月はゆっくりとビスケットの元までたどり着くと、昭弘が反応した。

『久しぶりだな。ビスケット』

「!?……そうだね昭弘」

三日月はビスケットの治療を始めた。

## ウィー・ラブ・ユーIX 《最悪の結末》

15

壁という壁を破壊していき、サブレとテラは数秒程度で一気に議会までたどり着いた。

高さはモビルスーツほどで一階と二階で構成されており、一階は滑らかなスロープのようになっており、登りやすいように階段と段差毎に用意された長テールブルが半円状に広がっている議会一面にびつちりと広がっている。二階は記者などが立ち入ることが出来るように余計なものを取り払っている。

これだけ見ると普通の議会議堂にしか見えないが、ここにサブレとテラが壁を粉砕しながら姿を現すと違和感しか残らない。

一階一番上の中央の壁とドアを粉砕しながらまずテラが砂煙から姿を現し、その後を追うようにサブレが姿を現した。

テラは腰から取り出したハンドガンをサブレの上に設置されている鉄でできた長細いパイプのような物を撃ちつける。パイプは破壊され、サブレの頭上から落ちてくるが、本人はまるで意に返さず、そのままパイプを回避しつつハンドガンでテラへと向けるが、テラはその間に一気に中央テールブルに辿り着いて身を隠していた。

サブレはこのままでは身を隠すことすらできないと踏み、近くの長テールブルへと身を隠す。

サブレにはテラが中央フロアでの出来事をおおよそで把握していた。だからこそ迂闊に踏み込めない。

テラは死角からの攻撃を完全に回避して見せた。

それだけではないはずだと考えていた。サブレは自身は傷つけたあの目に秘密があるのではないかと考えてもいた。

サブレは物陰から飛び出していき、一気に近づいてみる。

人体が出せる速度には限界がある。それを超える為には二つのアプローチがあるとソニアは提唱した。

ひとつが体の中に機械を埋め込み薬と共に強化する方法。古来から人はこの方法を使って人体強化を行ってきた。しかし、ギャラルホ

ルンがトップに上がったからは厄祭戦の影響を考えて表での研究は控えてきた。

もう一つが外部デバイスを装備に搭載し電気信号による疑似的な強化を得る方法。この方法は最近になってソニアが中心になって開発したもので、初の実戦はサブレ・グリフォンが海賊相手に行った。後にこのシステムはネオ・ガンダムに搭載した次世代型OSに搭載され、サイコ・フレームによる脳波送受信システムの効率化と電気信号による反射速度の向上が目的だった。これはパイロットの学習能力を外部デバイスの力で無理矢理向上させるのが目的だった。

実際最近になってEDMのパイロットたちの技術向上の裏にある事情はそこにあった。

サブレは現在もこのシステムを使用して高速戦闘を可能にしている。しかし、サブレにはこの戦闘方法がテラにも通用するとは思えなかった。

もし、テラの戦闘方法が未来を予知する類のものであれば、高速戦闘など意味をなさないだろう。それでも、サブレが前に出ていった理由はたった一つだった。

テラの力の秘密を知る。そして、この戦いに勝つ。

前へと走り出し、まっすぐに敵の隠れている場所へと突き進む。しかし、攻撃は右側から見たことも感じたことも無い衝撃が襲った。

爆発でもなく、衝撃波のような感じたことも無い鈍い痛みがサブレの全身を襲い掛かった。咄嗟に横に飛んだお陰で骨が折れる事態だけは回避したが、体を起こして立ち上がるのに数秒かかってしまい、立ち上がってすぐに衝撃が来た方向へと視線を向けるとそこにはテラが身を隠しており、片手に何かを持っている。

「君と戦う事をどれだけ考えてきたか分かるかね？君がどんな力を持っているのかはある程度分かっているつもりだ。ならこちらは広範囲攻撃で対抗するしかない。人を超える速度で突っこんでくる場合、攻撃を受けてからでも回避できる性能があるとしても、広範囲に迫ってくる攻撃まで対抗できまい」

おおよそでその攻撃の選択は間違っていない。

速度を上げたという事は攻撃を紙一重で回避するしかないという事である。なので、ハンドガンやナイフのように攻撃範囲が狭まっている攻撃や爆発など事前に把握していれば対抗できる攻撃はともかく、先ほどのように発射された当初より広範囲へと向けられれば回避しようがなく威力を減らすことしかできない。

そんな攻撃を続けられたらサブレにも勝ちはまるでない。

しかし、サブレもまたマハラジャから攻撃のイロハを学んでいる。瞬時に思考を切り替え、敵の攻撃パターンを脳内で算出して、攻撃方法を考え出していた。

「広範囲攻撃がどんな形で行っているのかまでは分からないが、あれだけの衝撃だ。連発はできない」

そう踏み、再び走り出す。しかし、音は立てないようにかつ素早く物陰をあちらこちらと移動しながらひたすら前に進んで行き、サブレはハンドガンを左側へと投げ込み自身は右側へと反応した。しかし、テラはサブレの方へと容赦ない攻撃を仕掛けてきた。

サブレはとっさに再び距離をとる形で跳躍し再び衝撃を受け流す。

(音より俺の方に反応した……?もしかしたら……)

脳裏によぎった考えがサブレに次の行動を起こした。

腰につけた爆弾を一つだけを起動させ、それを左へと投げ飛ばした。サブレ自身は動かさずジツとしていると爆弾へとテラは反射的に攻撃を仕掛ける。

(やっぱり………そういう事か!でも、これで奴は……!)

そう思い、サブレは走り出し、ナイフを投げつけた。テラはそれに反応してナイフを叩き落したがそのせいで視界をふさいでしまい、その瞬間でサブレはテラの眼前へと迫って顔面に一発拳を叩きつけた。「お前の力……おかしいと思ったのは先ほどの攻撃だ。お前はハンドガンより俺の方へと反応した。その時はお前の力が単純な予知なのかと疑った。でも、そんな演算処理能力がお前にあるのならそれはサイボーグと同じレベルの改造を施しているという事になる。しかし、ならお前のスピードや力が変化しているようにも見えない。なら改造していたとしてもそれは微々たるものだろう」



サブレは武器を蹴り飛ばし距離を潰して見下すように睨みつける。「フェーズドアレイレーザーだっけ？旧式用語は、現代の技術のベースになったレーザー索敵システムで、これをベースに各戦艦クラスにはこれの発達させたものが使われている。ようするにあんたはこれの簡易ベースを搭載していて、三次元の測定と熱を発生している物質を見分けているわけだ。だから最初のハンドガンには反応しなくて、爆弾には反応したわけだ。あの爆弾には爆発する五秒前から発熱する仕組みになっている。あんたはとっさに動いた方を爆弾だと誤解してしまっただけだ」

「たった少しの戦いでそこまで見抜かれたのか」

サブレとテラの戦いは銃火器を使った戦いではなく殴り合いに発展していった。

テラは皇帝が資産家だった頃よりの付き合いであり、Fやオズボーンを見出し、今まで戦略を練ってきた。

そのすべては皇帝の為であってそれ以外はどうでもよかった。しかし、そんなテラでも戦争の事態は反対の立場をとっていた。

そもそも失敗する可能性が高い戦い、それに木星帝国はEDM以上に複雑な事情を抱えている。そんな状態で戦いを挑めば負ける可能性があるとばかり切っていた。しかし、それでもテラが戦いに踏み切ってしまったのはククナとペロの後押しがあったからだ。この時点でテラはペロとククナには戦争を使った目的があるのだと考えた。

「ならペペロは近くで監視していた方がいい」

それがテラの考えでククナは遠ざけることで危険から離していた。ククナは最低限の所で木星帝国そのものに反抗しようとはしていなかったからだ。むしろ、テラにとって一番危険なのはペペロだったからだ。

テラはペペロには木星帝国をないがしろにしかねない何かを感じ取った。

そもそも、イズナリオを木星帝国に紹介したのはペペロだったからだ。

地球圏で活動する上でイズナリオの活動は都合がよかった。しかし、テラとククナはペペロに対する疑いは半端なものではなかった。だから戦争が始まった際にオズボーンと話をした際にテラは忠告をすることにした。

テラは木星帝国の首都コロニーの元老院議会議場で後処理をしていたオズボーンを呼び出す。

二十台の好青年で髪は多少暗めの灰色をしており、全身細くスーツ越しには分からないがそれなりに鍛えられている。

多少釣り目でテラを呆れたように見ているオズボーンはテラへと近づいていく。

「何なんですか？木星帝国宣戦布告派を押しやるのに忙しいんですよ。そもそも、私は反対はだったんですから……」

愚痴を聞かせるように多少大きめの声でテラに近づいていくと、テラはオズボーンの方へと表情を向け、オズボーンはテラほ表情を見るなり多少は表情を引き締める。

「もし、私にもしものことがあつたらオズボーン……分かっているだろうな」

「嫌な言い方ですね。まあ、分かっていますよ。そもそもそれが私が元老院議長を引き受けた条件でしたからね」

オズボーンはそもそも戦争には反対はであつた。しかし、テラはオズボーンが持っている政治関連の力強さを見出し、元老院の議長を任せることにした。

同時にペペロの不気味さにテラは表情を一段と引き締め、改めるように泳がせていた視線を再びオズボーンの方へと向ける。

「いいか、ペペロに気を付けておけ。あれには嫌な予感がする。あれは木星帝国を食い物にしようとしているかのようだ。今戦争には興味が無いが、木星国民を我々のわがままに巻き込むことはできない」「何をそんなに警戒しているのかはわかりませんが、いいでしょう。いざとなればペペロへの監視は私が引き受けるという事ですね」

「嫌、いざとなった時は監視ではなく……殺せ」

オズボーンは目を多少細め口元を引き締める。

「そこまでなのですか？」

「EDMが勝とうが木星帝国が勝とうが構わんが、ペペロが勝つという状況だけは避ける必要がある。あれが勝てば最悪の結末を引き起こす可能性がある」

「最…悪…ですか」

「ああ、それだけ危険という事だ。世界を滅ぼす結果になるかもしれない」

最悪の結果を招きかねない。

その言葉の意味をなんとなく理解しながらオズボーンは内心「やれやれ…」とつぶやいていた。

殴り合いと回避し合いを続ける事三十分が経過した。テラは勝てないと判断して早めのギブアップを決め込んだ。

体を大の字に広げ肩で息をする姿はとてもではないが年老いた人間には見えない。勝てなかった事への悔しさなど微塵も見せず、どこか晴れ晴れとした表情を浮かべ議会の天井を眺めた。

サブレにはどうしても聞きたいことがあった。

「どうして…どうして…勝とうと思わなかった」

最初からおかしいとは思ってはいた。勝とうと思えばいくらでも戦術がを用意することは簡単であっただろう。実際、彼はサブレの登場をある程度予想していた。

しかし、結果はテラの負けである。

だからこそ気になっていた。

「私には…この戦争に対する興味などありはしない。君の事を恨んでいてもだからと言って私が悪くないのかと言えばそれは無い。そもそも、君の逆鱗に触れてしまったのが原因だ。それに…この戦争を私は望んでいなかった。国民を犠牲にする方法を」

「だったらどうして止めなかったんだ」

「私に止められるのなら皇帝はいらない。あの人の憎しみを私には癒すことが出来なかった」

「憎しみ？」

「そうだ…あの人は地球を…各経済圏やギャラルホルンを恨

んでいる」

遠い空を眺めるように独り言のようにつぶやいた。

「クレア様のお母様の事を君はどのくらいまで知っている？」

サブレは正直に「あまり知らない」と答えた。サブレはクレアからその辺の事情を聴くことをタブーだと考えてきた。それはクレアの父親の事を考えればの結果であった。その母親の事をテラが語ろうとしていた。

「クレア様のお母様であるフレア様は科学者だった。優しくそれでいて思いやつていて。いつだつて微笑んでいる人で、研究内容も火星や木星のコロニーや大地で緑を増やしての環境改善だった。しかし、彼女自身は体が非常に弱く何時だつて咳込んでいた。問題はクレア様を生んでから起きた。出産で体力を使い、その上病弱だったことも重なって彼女は倒れてしまった」

その姿をサブレはすぐに思い浮かべることが出来た。同時にクレアが話さなかったのはあまり知らなかったからだろう。

「皇帝は当時各経済圏とギャラルホルンに対してある申請を出した。フレア様を地球の病院に移すことを願った。しかし、地球の人達は所詮木星や火星の人々の事を同じ人という括りでは扱ってくれず、病気の不明も重なって彼女を受け入れてくれなかった。結局彼女は助かることなく亡くなってしまった。分かるかな君に……皇帝の悲しみの重さを」

しかし、サブレは皇帝の戦う理由を知ることになったが、同時に皇帝が娘を遠ざける理由にはなつても、殺す理由にはならない。

「ならどうして皇帝はクレアを殺そうとしたんだ？」

「それは……皇帝にとってクレア様はフレア様を蘇生させる際の体の受け入れ先でしかなかったからな」

蘇生という不気味な言葉に背筋をゾツとさせながらその先の言葉に耳を傾けた。

「蘇生……元々ペロとククナと私の研究は蘇生させるためのものだ。脳のデータをクレア様の体に移すという強引な方法だったがな。クレア様を箱入り娘のように大事に育てていたのも全ては余計な知

識を入れないうちでもあり、勝手に動かれたら困るからでもある。あの人に託っては娘など愛する人を取り戻すための手段でしかない」

それはきつと人を人とも思わない外道とある意味同じことだろう。

サブレは握り拳を作るが、同時に遠くからやってくる自分と似た存在に体中の神経が逆立っていくのが分かる。

「来る……黒衣の騎士が」

そう思い立ち上がり上を眺めると同時に部屋中に爆発が起きて視界を一気に塞ぎにかかってくる。咄嗟に物陰に隠れる。

「来たか……」

テラがそうつぶやいたのを聞いたサブレは咄嗟に聞き返した。

「誰なんだ？」

「ペペロだろう。私を殺しに来たのさ。あれが今回の作戦についてきた理由も戦闘のどさくさで私を殺すためだったんだ。勿論君も同時にと思ったのかもしれない。あくまでも君はついでだ。本命は私の命だろう」

上から襲い掛かってくる黒衣の騎士と正面に現れるペペロ、どちらに対応するかを決めているとテラは予想外の提案を始めた。

「君は黒衣の騎士を討ちたまえ。あれが死ねばこの戦いも終わる。この街に憎しみを撒いているのはあれなのだからな。君は君の決着をつけるべきだ」

「だったらペペロはどうなるんだ？」

「あれの目的はあくまでも私だ。それに最悪の状況を何とかする術はオズボーンに託した。サブレ・グリフォン、ペペロの本名を君に告げておく。本質を見抜くことのできるマハラジャ・ダースリンならきつとそれだけである程度の真実までたどり着けるかもしれない。彼の本名は……マカロフ・ルイエールだ」

「分かった……きちんと告げておく」

そう言ってサブレは飛び立っていった。

テラは微笑みながら立ち上がりペペロの方を向く。

（後悔はない。打つべき手は十分打った。幼い頃、クレア様の教育係を引き受けたときから、あなたはフレア様に似て優しい人に育つてく

れた。あなたが愛した人を見定めた今、後悔はない。憎しみが無いといえば嘘になるが、そんなことは既に些細な事だ。フレア様……もうじきそちらに参ります。さらばだ……F)

ペペロは爆炎の中からハンドガンの引き金を引き、発砲音と共にテラは倒れてしまった。

エデンと共に崩れてしまった天井から逃げるように去っていった。

少しだけ遅れてモニターが現れたが、頭を打たれて絶命しているテラを見た後に悔しさゆえに唇をかみしめる。

「間に合わなかった……のか」

クリュセ事変最後の戦いが上空で始まった。

ウィー・ラブ・ユーX 《赤い大地は緑の大地へ、憎しみは癒しに》

16

白をメインカラーにしているエデンと黒をメインカラーにしているエデンがぶつかり合う姿をビスケット・グリフォンは見上げる事しかできなかった。この状況下においてサブレに全てを委ねなければならぬ状況に歯痒さを感じていた。

クリュセで起きている戦いや事件のすべてはサブレにしか解決できず、背負ってあげる事すらできない。

苦しみより、怒りより、自身への力の無さへの無力さが襲っていた。「いや……違う！そんなことを考えているから俺はサブレに背負わせてしまったんじゃないか！あんな後悔だけはしてはいけないんだ！」そう思った時、ビスケットは自分のスマフォが振動で小さく揺れているのが感覚で分かった。ポケットを探り出し、スマフォをスリープ状態から起動するとそこには上層部からの端的なメッセージが書かれていた。

『上層部より指令。クーデリア・藍那・バーンスタインの保護と太陽系議会の議長への推薦を報告せよ。そして、火星連合の即時解体に同意せよ』

それは指令というよりどちらかと言えばクーデリアへの命令に見えた。クーデリアの性格を考えれば火星連合の解体に賛成するわけが無い。そんなことは誰だつて分かっている事である。

それでも、ビスケットはクーデリアの元へと急ぐことにした。三日月は黙ってビスケットと共にクーデリアがいたであろう二階中央フロアに辿り着くが、そこには既に誰もおらず、クーデリア達の道のりを探すため。ロビーを目指した。すると、三階ロビーから外へ出れるドアをシノとマークが警戒しているのが見えた。

「外へ呼びかけているのかな？」

『多分、戦いをやめるようにと呼び掛けているんじゃないかな。クー

デリアならやりかねないし……でも』

三日月が言いたいことはビスケットにはよく分かる。この戦いは覚醒者にはよく分かるが、上で戦っている黒いエデンが憎しみを増幅させ、増幅された憎しみは疑心が変わって、新しい憎しみに変わっていく。終わる事の無いエンドレスな状況の中、サブレは憎しみをほかの『何か』に変えるための戦いをしている。

憎しみを癒しに変えることが出来るだろうか？

戦いを終わらせるのはきつとクーデリアの役目なのかもしれない。でも、そんなクーデリアに告げることが出来なかった。火星連合を解体してほしいと。

『いべきだよ。この戦いの中心は火星連合の支配権という面が存在しているから。ようするに、今まで火星は誰が支配者なのか分からない状況が続いていた。ある意味、地球が支配者だったのかもしれない。だけど、それもクーデリアのお陰で終わりを迎えた。それは唐突過ぎたんだと思う。突貫工事感は否めない。それは新しい格差につながっていった。勿論、クーデリアはそれをどうにかしようとはしていた。でも、敵は……木星帝国はそこを突いた』

突貫工事で作り上げられた火星連合は隙だらけだった。今まではそれでもよかった。だが、この戦争においてはそれは通用しなかった。

『誰かが言うべきなんだと思う。一度壊して作り変える。それにそもそもここまでこじれてしまったら壊すしかないよ』

こじれすぎてしまった。修復が不可能なレベルまで。この状況を続ければ、もしかしたらいつか修復できる日があるのかもしれないが、それまでに一体どれだけの人間が苦しみ、どれだけの人が死んでいくのだろうか。

選択肢はたった二つ。『壊れるか、修復できるまで続けていく』道と、『一度全部リセットして一からやり直す』道の二つである。

クーデリアがどちらを選ぶのかは分からない。それでも、多くの人々が紡ぎ、繋いできた思いは決して無くなったりはしない。簡単には無くならないし、作り替えることだってできるはずなのだ。



「行ってみよう」

クーデリアの元へと急ぎ、三階に上ってシノとマークがボロボロのビスケットに気が付き声を掛けようとするが、覚悟を決めたような表情をするビスケットは黙ってしまった二人の間を通り抜け、外へと出ていく。三階は下へと降りることはできないようになっていたが、その代わりに多くの人が休憩したり、記者などが利用する為に広めになっている。

「皆さん！戦いをやめてください」

そんなクーデリアの言葉はまるで心に響かず、多くの人が戦いを継続させていた。後ろからビスケットが声を掛けようとするが、あと一歩の勇気が出てこない。そんな時、三日月はビスケットの背中を強めに叩く。

『しつかり。あの頃とは違うんでしょ？』

昔とは違う。オルガ・イツカのいう事に『はい』としか得なかった。止めることが出来なかった。間違っているんじゃないのか？違う道がきつとあると言えなかった。それは今でも後悔だ。そんな気持ちの積み重ねと兄であるサヴァランの死がビスケットにとってオルガへの最後の反発へとつながった。他人まかせにはいけない。そんな思いが最後の一步へと踏み出した。

「クーデリアさん」つという言葉にクーデリア自身は振り返り反応し、無事でいてくれたという安堵と同時に戦いが終わらないという不安が表情に現れており、ビスケットは真剣な面持ちで語り掛ける。

「EDMは先ほど地球圏の経済圏が解体され太陽系共和国として再編成されました。それに伴い各議会も地球議会として再編成、各惑星代表者を募った太陽系議会の設立へと移行するとのこと。それに伴い火星連合も解体し太陽系議会に参加せよとのこと。そして、クーデリアさんに太陽系議会の議長を務めてほしいとのこと。そして、シノは何か言いたげにしていると三日月の手がそれを遮る。

「そ……それは。そんなことはできません。きつと何とかなる手段があるはずです」

「それはいつなら可能なんですか？今の戦いが終わったら何とか出来

るんですか？それに火星連合が太陽系共和国を相手にできますか？」  
その言葉を言うたびにビスケットの心に痛みが走る。同時にこんな言葉でいいのかという想いが心を動かした。そして、それはクレアに届く。

「そんな言葉ではいけません。だってそれはあなたの本心ではないのですから。口に出してください。後悔と本心を」

あの日、オルガに言えなかった事、居場所とは組織ではないのだと。別々の道を歩いてもきつと生きている限り何度だって……家族とだっていずれば離れていくものだ。分かれていても思いは一緒なのだから。

「オルガに言いたかった。家族って離れていても思いが一緒なら大丈夫なんだよって。俺は言うべきだったのかもしれない。ううん。言いたかった、「鉄華団を解散させよう」って。離れていても俺達は鉄華団なんだって言えなかった。俺がオルガを止めていればって今でも思うんです。クーデリアさん……居場所が大切なんじゃないんです。一番大切な者は心なんだと思います。ユージンは違う道を歩き始めました。俺達は離れていてもクーデリアさんの味方ですから」

「そ……それでも」

踏ん切りがつかないクーデリアに対してアスナが反応した。

「私……は、解散させるべきだと思います。それが一番いい解決法だというわけじゃありません。ただ、居場所を大切にするあまり、一番大切にしなければならぬモノを見失ってはいませんか？彼が言っていることはそこにあると思うんです。誰かに利用されるとかそういう意味ではありません。彼がいたことは……きつと大切なモノを見失ってはいけないことではありませんか？今のクーデリア様は大切なモノを見失ってはいませんか？ここにいる人たちの事を、あなたを大切に思っている人たちが見えていますか？」

そして、ビスケットも言う。それを知る人の一人として。

「あなたはフミタンさんの事をちゃんと見えていますか？」

クーデリアは表情を凍り付かせ俯いてしまう。

フミタン・アドモス。かつてクーデリアに仕えていたメイドであ

り、ノブリス・ゴルドンの命令で入り込んでいたスパイであった。彼女はクーデリアを庇って命を落とし、彼女の死はクーデリアの革命に大きな力になった。

「今のあなたは居場所を守ろうとするあまり、フミタンさんの事が見えていないんじゃないですか？居場所に固執すれば人を失うんです。オルガがかつてそうなってしまったように。オルガは鉄華団に固執した。それを失敗だったとは言えない。でも、あなたはオルガの死やフミタンの死を受け止めていますか？あの二人が守ろうとした『何か』をちゃんと見ていますか？」

ビスケットはふと上を見上げ、サブレの戦いを見上げる。エデンとエデンはぶつかり合いながら戦いを終局へと導いていく。

エデンは黒いエデンにぶつかり合いビームサーベルとビームサーベルが火花を散らしていく、黒いエデンは憎しみを呪いという形で増幅しており、それはエデンに搭載されているサイコ・フレームを通じて共振状態へとたどり着こうとしていたが、それをサブレは必死になつて押さえていた。

「押さえろエデン。お前がただの兵器じゃないのなら……お前が人と人を繋ぐ存在なのならそれを証明して見せろ!!」

エデンはギギイという不気味な音をたてながら首を左右に振る。サイコ・フレームは共振させようとさせ、サブレはそれを押さえつける。

コックピット内はサイコ・フレームから漏れ出した虹色の粒子で満たされており、サブレの目も虹色に輝きながらそれを食い止めようと悪戦苦闘していた。

同時に黒衣の騎士もまた呪いを吸収していきながら覚醒者としての能力を疑似的に再現し、サブレと同じステージまで引き出していた。黒衣の騎士は能力を増幅させサブレの体に乗っ取ろうとしていた。

「所詮は兵器、所詮人は動物なんだよ。憎しみを与えてやれば簡単に飲まれて力を増幅させてやれば簡単に力を増やしてくれた。お前も同じなんだよ!!所詮お前たち人間はここまでしか行けないのさ。」

「ここがお前達人間のゴールなんだよあ」

「違う……人間は人間のままで進化していくことが出来るはずなんだよ」

「そんな道があるのならお前達はとっくに進化しているはずだ。憎しみに突き動かされるただの人形なんだよ！所詮人間は地球という重力の井戸の底で小さな世界しか知ろうとしないカエルなんだよ」

「戦いって……ただ憎しみをばら撒くだけではない。お互いの気持ちを伝え合うことだってできる。殺し合うだけが手段じゃない……はずだ」

「笑わせるんじゃない!!憎しみこそが人間の本質で！怒りこそが人間の行動原理だ！お子様みたいな考え方で世界の闇をどうにかできると思っているのかあ!?!」

「それでも……それでもお!!」

ビームサーベルのつば競り合いが一旦終わり、サブレはエデンのリングファンネルが黒いエデンの周りを飛び始める。

「エデンに搭載されているリングファンネルには周囲の物体の動きを阻害する機能がある。どうやら、お前のエデンはあくまでも複製品という事だ。切り札は隠しているものだな。お前は大したものだな、でも……所詮は俺の……俺達の複製品だ。その複製品が……人間を語るのか?」

「貴様なんて……呪いと人間という業の方向をコントロールするだけの存在だ。呪いそのものをどうにかする術なんてないんだよ」

「お前は……何を知っているんだ?」

「教えてやらねえよ！俺を殺しても……呪いが消えることは無い。一生かけて呪いに苛まれながら苦しんで……死ね!」

「なら……聞かない。自分で知って……自分で呪いを消してみせるさ」

サブレはビームサーベルを黒いエデンに向け、黒いエデンに突き刺そうとするが、最後に黒いエデンは微かに右に動いて回避しようとする。エデン左のリアクターにあたるが、それ以上に衝撃だったのは、黒いエデンの反対側から右側のリアクターを貫いているビームサーベルが存在したからだ。背中から突き刺している人物がいる。

(どうして……っと考えなかった。そうだ、呪いそのものと言ってもいい存在が黒衣の騎士だ。だったらどうして……どうして……アインが黒衣の騎士の存在を無視していたのか。そうだ。アインは呪いを振りまいた存在そのものだ。そんなアインが気が付かないはずがない)

コックピット内にアインの声が響く。

「何、どっちに転んでも利用する価値があると思ったのさ。黒衣の騎士がお前の体に乗っ取ろうと、失敗しのとどっちにしても利用する価値がある。こいつがお前の体に乗っ取るつもりならお前と同じステージに上る必要がある。その時点で進化の過程をいくつか登ることになる。成功してもお前の力毎奪い取り、失敗した場合もその時点での力を奪い取る。問題はどっちに転ぶのかという事だった。まあ、失敗したわけだが、問題ない。その時点での力を奪うだけだ。要するにこいつは用済みってわけだな。俺が進化する上でこいつの存在は実に都合がよかった。おかげで、問題なく俺も進化できる」

アインの瞳は黒と赤が混じったような色に炎をイメージした何か映っていた。それはサブレの瞳のイメージとは反対のようにも思える。サブレとアインはモビルスーツを挟んで睨み合う状態が数秒だけ続くと二人のコックピット内が聞いたことも無いアラートが鳴り響き、正面の画面に映る黒いエデンを多数のマークが『警戒：結晶化』と書かれた文面が赤い文字で書かれており、サブレとアインはその文字の意味を凶りかねた。すると、サブレにはソニアが、アインはククナが語り掛けてきた。その表情が二人を真剣にさせた。

「そこから離れなさい」

エデンとエンペラーは急いでビームサーベルを抜こうとするがビームサーベルから発している熱線が結晶化し始めた。急いでビームサーベルを離して一気に距離をとる。

「エイハブ粒子は結晶化することが何年も前の研究ではつきりしていた。この結晶を『エイハブ結晶』と名付けるならこの結晶は死んだ大地を復活させることもできる。でも、同時にこの結晶は爆弾でもあるの……モビルスーツの大きさなら最悪クリュセを巻き込んだ大き

な爆発になるかもしれない。いや…………クリュセなんて簡単に破壊することになるわ」

サブレは下を、アインは飛行機を見る。この距離ならクリュセはもちろんの事、飛行機すら巻き込まれる可能性すらある。そう考えた二人はビームライフルとファンネルを使ったフルバスターモードへと切り替えた。

「だったらここであいつ事破壊してやる！」

二人は互いに引き金を引く。

「アイン!!」「サブレ!!」

お互いの最大攻撃が結晶化している黒いエデンへと向けられ、ぶつかり合った瞬間結晶は大きく光っていくのが分かった。

(破壊する!あいつを守る為に!!)

結晶は大きくひび割れ、まるで……………まるで戦いは終わったんだよって言っているように四方にバラバラに散らばっていった。

その瞬間だった。人々は大きな衝撃と共に砕け散る結晶から響く高い音が呪いに突き動かされていた人々の動きを完全に止め、憎しみを癒していく。エデンから発せられている波長が人々の心を癒していく、アインは呪いを自分の元へと集めていく。奇しくも二人はこのクリュセに落ち着きを与えた。

不安を感じるクーデリアの手を取り、アスナは一緒に立ち上がり声をそろえて呼びかける。

「戦いをやめてください!!」

人々の視線が三階にいるクーデリアとアスナも元へと向けられ、落ち着きつつある人々に終わりを告げる。

「現時刻をもって火星連合はEDMに全面降伏し、火星連合を解体します。また……………一から始めましょう。手を取り合って」

「みんなで助け合いながら」

「一歩ずつ歩いていきましょう」

「だから……………だからもう……………戦いをやめてください。これ以上血で血を洗うような戦いはやめてください」

一人が銃を落とす。まるで、それに影響を受けたようにまた一人、

また一人と銃を落としていく。木星帝国のメンバーは次第に撤退していき、それ以外のメンバーは自分達がしていた戦い愕然としながら呆然としている。すると、クリュセの中にEDMのモビルアーマーなどが大量に侵入して、武装勢力に投降を呼びかける。

戦いは終わった。

多くの血を流してきた……復讐劇を静かに幕を下ろすことになった。

17

今回のエピローグ

クリュセで戦っていた人々はあっさりするほどEDMに投降することになった。木星帝国はテトラとテラの死によって撤退を選び。最寄りの大きな拠点へと引いていった。捕まったレジスタンスのメンバーと元ギャラルホルンによって彼らの拠点が明らかになり、説得を受けて全員がEDMに捕まることになった。クーデリアはアスナを火星議会の初代議長へと推薦し、レレがそのサポートをすることによってEDMも納得した。クーデリアは太陽系議会の議長になることに同意し、その条件として火星に地球と同じ権利を求めることにし、地球議会もその条件に同意、火星連合とある意味調停に合意することになった。この戦いは後に『クリュセ事変』と呼ばれることになった。

あれから四日経ち、クリュセはアスナとレレの指導の下最初の火星議会の仕事は片付けになりそうだった。いや、なったというのが実に正しく、アスナがスラム街出身というのと、元々外で活動することに抵抗が無いという事も理由に意外と周囲から親しまれている。

黒いエデンがある意味変質した結晶は火星の大地に新しい可能性を生むことになった。大地から緑が生まれてきて、水があふれ出てくる。地下で固まっていた氷が結晶のお陰で水が変わっていき、化石になつていた植物の種が新しい緑を育てていく。いつの日か……火星と言われたこの大地にも緑であふれかえる日が来るのだろうか？いや、きつとくるのだろうか。

今日、この日はクーデリア・藍那・バースタインが地球に行く日である。わざわざユージンが迎えに来るといふ事で兄・ビスケットも

上へと会いに行っていた。俺・サブレは鉄華団本部近くの慰霊碑の前に花束を添えながら桜農場の変わり果てた状況を眺めていた。

桜農場は結晶の影響で砂嵐で死にかけていたトウモロコシ畑をトウモロコシの林へと変えてしまっていた。一面がすでに木のように成長し、その姿は新種のように見えた。っていうか、本気で新種じゃないのか？

すると、俺の隣にクーデリアが片膝をついて花束を添える。おそらくは火星を離れるにあたって最後の挨拶と言った所だろう。彼女は最後にこちらの方にも小さく頭を下げるとそのまま去っていった。

その後、クレアが花束を持ってくると俺の隣に立つ。

「鉄華団に？」

「いいえ、テラへと……」

花束を添え彼女はまるで祈る様に両手を合わせる。一体どんな思いを言葉にしてテラに送っているのだろう。

「テラは……私に地球の文化や生活を教えてくださいました。それだけじゃなく、テラは私にお母様の事を教えてくださいました。きつと、禁止していたのにも関わらず。なのに……なんのお返しもできなかった。私は……」

俺はクレアの頭を撫でてやることしかできなかった。

クーデリアさんを待つこと二時間ほどユージンと歓談をしていると、イサリビ改とは反対方向からクーデリアさんが現れた。

「お待ちせしました。ユージンさん地球までよろしくお願いします」

「ま、任せてくださいよ」

緊張で体中に変な汗の掻き方をしており、体がどこかクカクしているように見える。緊張のあまり焦点が合っていない。どうやらEDMから依頼されたクーデリアさんの移動任務と会社立ち上げ依頼初めての重要な任務で思考がフリーズしている。俺は後ろからそつと耳打ちした。

「緊張のあまり失礼な行動をとらないようにね」

「いらねえ心配だよ!!」

ユージンが肘を俺の鳩尾に充ててくると、襲い来る吐き気を我慢し



て俺はユージン背中に張りてを勢いよく決める。お互いに苦しみながら距離をとるとなぜかクーデリアさんがクスクスと笑い始める。

「仲が良いんですね」

「良くありません!!」

二人そろってハモる姿を見てみると良いように見えてくるから不思議だ。まあ、昔からあまりいい方じゃないのは事実なんだけど。

俺はユージンの方へと近づいて耳打ちで「ライドの事をタカキにうまく伝えてね。それと……」つと言いながら血で濡れた写真をわたす。ユージンも「分かっている」と言いながら写真を受け取ると、後ろからクーデリアさんがのぞき込んできた。俺とユージンは慌てたように写真を隠すが、運命のいたずらは時に神からの啓示を運んでくる。「その写真を見せるのです」つと言っているような気がする。ユージンはさつきとは違う種類の汗をかき始める。俺の顔面にも汗がにじみ出はじめ、内心どうしよう。

「そういう……ことですか」

「あ……つと、その……」

クーデリアさんは表情を暗くさせながら顔を上げて俺達に向けてゆっくりと口を開いた。

「タカキ君へのメッセージは私に任せてくれませんか？」

「え?でも……」

「お願いします」

俺とユージンはお互いに視線で会話をした結果クーデリアさんに任せようという結果になった。

クーデリアさんに改めて「ライドが亡くなったことを伝えてほしい。そして、墓を作ってあげてくれないか」と伝え、俺は二人を見送った。

クーデリアは見た事もない光景に圧倒されながら胸元に掛けられているペンダントを握りしめる。旧アルン議会、太陽系議会へと足を踏み入れるとロビーにはタカキが待っており、クーデリアを招き入れる。

「クーデリアさん。奥でマツクさんがお待ちです。マツクさんとの引

継ぎが終わり次第、仕事をしていただきます。俺は案内できませんが、こちらの男性が案内いたしますので」

とタカキが案内した男性は中年の中肉中背の普通の男であった。男は小さくお辞儀すると奥に案内しようとする。しかし、その前にクーデリアはどうしてもしなければならぬことがあった。血の付いた写真をタカキに手渡し、タカキに残酷な真実を告げる。

「タカキ君。ライド君が亡くなったとビスケットさんから伝言が」

タカキをふるえる手で写真を受け取る。その写真は鉄華団結成時にヤマギとライドとタカキの三人で取った写真で、血はライドとヤマギに重なっており、乾ききって黒くなり始めていた。

「あ、ありがとうございます」

「ビスケットさんからお墓を作ってあげてほしいと……」

「分かりました」

クーデリアは男性の案内で奥へと消えていくと、タカキは下唇噛み一筋の涙を流しながら震えるような声で一人の名前をこぼす。

「……………ライド」

## 暁の空の向こう側へⅠ 《二拠点攻略作戦》

1

火星の本格的な攻略がはじまったのは一か月前のクリュセ事変の数日後からだった。クーデリア・藍那・バースタインからの指名という形でアスナ・エールが火星議会の初代議長に就任すると、彼女は数日でテトラの後始末を終えてしまった。その陰にはレレの協力があつたとは言え、元々あつた才能が開花した形だろう。しかし、その際に上がった問題がメリビット達と雪之丞達が二つに分けられていくという収容所の場所であつた。その場所こそが今後の火星攻略の最前線になると予想された。その理由は火星の半分を侵攻するのにどうしてもその拠点を通らねばならなかつたからだ。そして、ゲイナーが居る場所まで行くためには拠点を攻略する必要がある。そして、一週間前にいよいよ本格的な攻略が行われた際問題に上がったのが、戦力であつた。

現在の戦力で今の二拠点を攻略することは可能であつた。しかし、無理に戦力を二拠点のみに割くわけにはいかない。他にも攻略すべき拠点など多数存在する。それで上層部から降りてきた命令は『ファントムブラッド隊単独で二拠点を攻略せよ』という命令だつた。その際に起きたもう一つの問題が戦力をどう分けるかである。

ファントムブラッド隊はモビルスーツを十機しか持つておらず、そのすべてがガンダムフレームである。本来であればサブレが指揮をるところであるが、二つに分ける以上それができない。その上、個人個人が癖が強く、戦力配分をどう分けるのかが問題視されていた。結果から見てもメリビット達の救出部隊であるビスケット隊はサラとレオを中心にマーク、渉、ジョシユア、ジャニー、ノインで、サブレを中心に明楽とシノが雪之丞達救出に部隊を割くこととなつた。それに異議を申し立てたのがサブレであつた。

サブレとビスケットの壮絶な兄弟喧嘩の末、外部から三日月とモンタークが協力するという条件で渉々了承することになった。

ビスケットは迷宮のカタチをした複雑な戦場攻略、サブレは一本道

に配置されたモバイルアーマー・フォルティシモ攻略が開始された。そして……一週間後いまだに二拠点は攻略しきれていなかった。

しかし、この状況へのミスが存在するのならばそれは彼らが雪之丞の輸送を『知らない』の一点のみであった。

2

歩くという行動が苦痛に変わったのは二週間前の事であった。最初この施設に送られた時は、歩くのが多少辛い程度であった感覚が二週間ほどで苦しみに変わった。寝れる時間なんて一日に三時間あればましな方であり、一人、また一人といつて死んでいつてはどこからか連れてくる新しい要員はみなかつての彼と同じ表情を浮かべる。

『まるで地獄だ』

やせ細った体、ある者は汗すら出てこなくなり、食事は最低限の水とパン、ベットは簡易で最低限の寝泊りができる環境があるだけましという状況、高重力で高温度に湿度は最悪、劣悪ではなく最悪の環境下での仕事は既に死ぬことが前提の仕事の毎日、重たい荷物を最低でも一キロ先へと持つていくだけでかなりの時間がかかる。

雪之丞は二週間が経った後、ひよんなことから鏡のように映った自分の姿を見たとき雪之丞は立ち止まってしまった。

肩幅が広く鍛え上げられた体はやせ細っており、骨と皮だけになっていた。さらに一週間が経った頃には汗すら出なくなっていた。最初の頃に支給された囚人服はボロボロになっており、上半身に限って言えば既に服とは言えない状況であった。ズボンもボロボロでとてもではないが、ズボンとは言えない。こんな状況でも歩き出し、生きていかなくでは行かない。

『今自分がここで死ねば他の誰かがここに送られる可能性がある』

それが雪之丞に最後の抵抗を続けさせる動機になっていた。ある意味生きる理由で戦っている理由である。死ぬわけにはいかない。

最後の一本と言ってもいい細い一筋の生命線はまだ大丈夫だと自分に言い聞かせていた。

簡易ベットに腰掛けて息を吐き出すと、乾ききった唇が小さく割れてしまう。しかし、血がほとんど出てこない。上の服を脱ぎ捨て自分

の体を眺める。骨と皮だけの体にミミズ腫がいまだに残る。そのまま全体を簡易ベットへと預けて眠りについた。

最初の頃は三時間なんて寝れるわけが無く、寝過ぎなんて普通の事であった。しかし、少しでも寝過ぎすと拷問室に連れていき様々な拷問を受けたうえで食事抜きにされてしまう。その時の恐怖は今でも雪之丞に残っており、今では三時間できつちり目を覚ましてしまう。

三時間が経ち目を覚ました雪之丞はボロボロの服へと手を伸ばすとその服は半分に破れてしまった。

これを着ることはできない。そう思い雪之丞は上はあきらめボロボロのズボンだけで外へと足を踏み出した。外では同じような状況の囚人たちから来たばかりの囚人たちでひしめきあっており、みんなが食堂へと向かい最低限の水とパンをもらいに行く。しかし、雪之丞を含め一部の人達の足元がふらついて膝をついてしまう。後ろから見ていた監視員が鞭を持って複数の背中に向けてむち打ちを容赦なく背中に浴びせた。

雪之丞を含めた男女の背中にミミズ腫の跡が残ると彼らは食堂へと歩き出す。

今日も地獄が始まった。

3

その日もそれは始まった。開幕一番の罵り合いの罵倒し合いである。始まった当初こそ譲り合いであったが、今では罵倒を繰り返すだけの無意味な会話になっていた。

「だ・か・ら……マークを譲ってくれって言ってるんだよ!!あいつが居ればまだ楽に攻略できるのに!!」

「ム・リなんだってば……こっちも戦力がギリギリなのに!!」

サブレとビスケットの無意味な繰り返しは一日一回は確実に起きており、周囲はすっかりうんざりしていた。

三日月はバルバトスの上で暇そうに座っており、明楽は空を見上げながら呆けており、シノはサブレの後ろで呆れていて、モニターは自身のモバイルスーツの上で準備を淡々と続けている。

「俺の奪い合いをしないでくださいよ」

ゲームをしながらうんざりしているマークはぼそりとつぶやく、サラとレオは他のメンバーに準備を急がせる。攻略が始まって一週間が経つものにもかかわらずいまだに片方の拠点すら攻略しきれていない。

その状況がサブレとビスケットのイライラを募らせていき、最後にはお互いに「知るか!」つと言いつつ壁を破壊するのではないかと思うほどの蹴りを壁へと放って通信を切ってしまう。

周囲はどうするのかと三日月達は指示を待っていると、サブレの視線はまっすぐ明楽の方へと向いた。すると、明楽は視線に気づき首をかしげて対応する明楽に対して悪そうな微笑みを浮かべ、シノは嫌な予感を募らせ巻き込まれまいとそこから移動してメテオの元へと移動する。しかし、明楽はいまいち危機感が足りないのか、その場でキョトンとしている。すると、ソニアが別の場所から姿を現してサブレにある装備の用意ができたと報告していた。

「この作戦を攻略する手っ取り早い方法は敵のフィールドを突き破るほどの一撃を与えてやればいい、守ろうとすれば敵はドローンを全機前方に展開するしかないだろ。そうすれば攻略は簡単になる。しかし、この方法は使えないのなら正攻法で攻略するしかない」

腕を組みながら深刻そうな表情を浮かべるサブレに対し、モニターが口を出す。

「それが出来ればここまで苦戦しないのではないか?」

三日月やシノも何度もうなずき対応するが、サブレは「ふふん」つとあえて声に出しながら自身満々ソニアに用意させた所謂『ある物』を全員の目に届くように用意させる。

彼らの目の前には縦長の楕円状のシールドが姿を現しており、中心一帯に妙な細工が施されており、それを覗けばどこにでもあるようなモビルスーツがもつシールドに見えないことも無い。実際明楽達はそうとしか受け取れず唖然としてみると、サブレの悪そうな笑顔は上限を知らず、その視線はまっすぐに明楽の方へと向けられる。そこまで来てようやく明楽も危機感を抱くが時すでに遅く、立ち上がったこ

ろにはサブレは明楽の肩に手を置いて行動を制限する。

「このシールドには疑似的に再現されたIフィールドが組み込まれている。ようするにこのシールドは対ビーム装備でもあるわけだ。しかし、一つのシールドで守れる範囲などたかが知れている。だからこそ、三つ用意し、それを三方向に装備することでほぼ全域を守ることが出来る。そして、対ビームコーティングをモビルスーツの表面に塗ることでビーム攻撃への対策にする。三つのシールドを持つことが出来るのは一機だけだ。もう……分かるだろ？」

しかし、分かりたくなどなかった。分かったといえはその時点で逆転の見込みが完全に失ってしまう。最後の抵抗とばかりに左右に首を振って押し付ける相手を探し出す。最初にモンタークへと向けられるが「三つもシールドを装備できない」で却下。

次に三日月へと向けられるが、「やろうとすればシールドを持てるが、シムカスと違って重さで機体の速度が落ちてしまう」という理由で却下。

最後にメテオに向けるが、「シノの実力でそれは無理」という残酷の一言で終了となった。

最後の抵抗に涙目でサブレの体に抱き着き「無理無理」と小声で訴えかけてみる作戦に出るが、サブレからは鬱陶しいとウザイが混じったような表情を浮かべ見下すような視線を向ける。そんなことは明楽には関係なかった。死にたくなければここで抵抗するしかないと思っていた。

「見捨てないで！テムさんの事をしゃべった事怒っているならそう言ってくださいよお」

結局テムの事をしゃべったことはその日のうちにばれてしまったが、サブレはあきらめてそのまま許していた。しかし、明楽はサブレが許してくれるわけじゃなく、この作戦に組み込むことで怒りを解消しようと考えているのではないかと不安に思っていた。

「そのことを怒ってはいない。お前の性格でむしろここまで黙っていられたことを感心したぐらいだ」

予想以上に明楽への信頼の無さに驚く周囲に反しサブレは冷酷に

「単にお前しか任せられないだけだ」つと返した。

「でも……でも」

「見捨てられそうな子犬みたいな視線はやめろ。むしろ見捨てたくない」

取り付く島もない状況で最後の作戦もむなしく崩れ落ちる。しかし、ここで自分の命を見捨てるわけにはいかない。サブレはため息交じりに「俺がお前を見捨てると思うのか？」つと言うと明楽は間髪入れず答えた。

「はい」

「じゃあ、作戦会議終了」

明楽の一言をもつて作戦会議は終了し各自モビルスーツで作戦行動ポイントへと移動する。明楽だけが一人呆けているとソニアはとつても慈愛に満ちた表情で装備を搭載終えていたシムカスの方へと指先を向ける。三つのシールドを装備した姿はもはや重装甲兵と言つても違いは無い。元々ごつつい姿をしているシムカスはさらに大きくなつていった。

そんな中、三日月だけが明楽に対してまつすぐに視線を向けていた。

外へとモビルスーツが出ていくと空はすっかり雲が青空を隠していた。若干雨が降りそうな空模様であったが、シノは四つ足モードに移行しながら「火星で雨が降ってきたことは無いから大丈夫だろ」つと云つてのけた。

確かに今まで火星では雨が降ったことが無い。それは単純に雨が降るだけの環境状態が無かったただけの話である。しかし、今はそれがある。地中から沸き上がった水はちよつとした海になろうとしている。それがどういふ状況なのかはサブレはよく分かつていた。

「もしかするともしかするかもな」

雨が降るといふ状況はむしろサブレからすればちよつどいい状況であった。雨はビーム攻撃を低減させる効果がある。通常ビームならあまり意味は無いが、拡散ビーム砲なら話は別になる。

外で待機してあつたエデンに乗り込み、機体を持ち上げて直立体勢



に移行すると、エデンの肩に何か当たった気がした。モニター越しに肩を確認するが、肩に何か当たった気配がまるでない。サブレは不意に空を見つめると雨雲から一滴の雨が今度はエデンの額にあたった。

「ソニア。大急ぎで再調整を頼む。雨が降り始めてきた」

全員が空を眺めると空からは大粒の雨が降ってきていた。

迷路のように張り巡らせた戦場を一週間かけて攻略を進めていった結果あと一歩というところまで来ていた。

目の前の迷路は洞窟のようにこそなっていないものの、下手に壁などをぶち壊すように突き進むと周囲の壁が崩壊しモビルスーツを押しつぶしてしまうだろう。中の迷路を攻略していきながら地図をまとめていく。幸い中の迷路の構造が変わるような構造ではない。地図を確かめながら罫を確認していきながらの作業に予想以上の時間と労力を費やしていた。マークの一撃も迷路攻略まで取っておきたい。

外で待機してあるヴァルハラ格納庫内では作戦の最終確認をしている最中であった。

「——で、最後の扉までは分かっているんだよね？」

「はい。罫は変えてあるかもしれませんが、問題は無いと思います」

ビスケットの問いにサラが自然な形で答え、レオも同意するようにうなずいた。ビスケットは手元の資料に視線を落として内容を確認する。

「じゃあ最終確認。二手に分かれて罫を解除しつつ最後の扉まで接近、二か所から侵入の後施設の周辺防衛施設への攻撃。防衛施設攻撃をしている間に別動隊が施設内部への襲撃犯に分かれることになる。サラと涉とジョシユアとマークは防衛施設攻撃班。レオ、ジャーとノインは侵入班。で、OK？」

「了解です」

「サラ班は防衛施設前の最終扉をマークの一撃で破壊後そのまま施設前に戦闘開始、三十分後にレオ班が侵入する別同部隊と共に施設前の扉を解除して内部に侵入、別動隊が中の制圧を完了させるまで粘って

くれればいいから。以上、質問は？」

サラとレオは頷いて見せると全員はそのまま持ち場へと移動していく。

ビスケツトは後方から指揮を執るためブリッジに上がろうとしていたが、ふと外が見える場所まで移動すると雨が降りそうになっているのに気が付いた。しかし、一滴の雨が窓ガラスにあたるとビスケツトは驚きと共に声を出した。

「雨なんて降ったことないのに……念のために雨対策をしておいた方がいいかな？」

そう思い連絡機械のところまで移動すると、ビスケツトはそのままゼム・ロツクまで連絡を入れる。

メアリーの一言をもって作戦開始することになった。

「では……現時刻13：00をもって全部隊作戦開始とします  
……5、4、3、2、1……0！作戦開始！！」

## 暁の空の向こう側へⅡ 《誇り高き子供達へ》

4

メリビット達が收容されている施設は大きく分けて三つの区画に分けられている。まずは迷宮区画。天然の入り組んだ岸壁と重火器の罠を配置してある。二つ目は防衛区画で広い整備されており、多数のモビルスーツが配備されている。それ以外にも防衛装備を多数そろえている。最後に收容区画である。

この施設を突破するためには迷宮区画を超えなければならない。先日それが無事終わり、いよいよ防衛区画への攻略へ移ろうとしたが、ビスケット達は木星帝国の新しい罠の存在に気が付かなかった。

「こちらA班。配置につきました」「同じくB班。配置につきました」  
「では、各種防衛装置を起動させファントムブラッド隊を迎撃する！  
ここは我々にとつて火星の本拠地への防衛戦になっているんだ。何としてもここを防衛するぞ」

木星帝国のモビルスーツ隊は各配置場所のボタンを押すと、金属製のドアが下から道を塞ぐように姿を現した。勿論すべての道を塞いだ訳では無い。しかし、進むことが出来る道がある程度絞らせること、そのうえで最新のモビルスーツの実戦テストを行う。防衛区画から通路ギリギリの巨体が壁を削るのではないかと心配になるレベルのモビルスーツが通路を通っていく。

「あれって……モビルスーツなのか？」

落ち着いた木星帝国の整備士は通っていった大型モビルスーツを心配になりながら見送っていた。すると、後ろから年季の入ったツナギをきた上司が髭を触りながら現れた。

「そうだ。最も通常のモビルスーツが一人で運用できるのに対し、あいつは三人で運用するんだよ」

「三人つすか!? え……っつとあれって確か……『シュピーゲル』でしたっけ?」

「バカ野郎! そりゃあ開発中の機体だ! あれは『グレート・ウォール』

だ」

コックピットがでかすぎる所為か前に大きく出ており、それを支えるように体が全体的に前と横にのびている。右腕がビームガトリングとワイヤーで伸ばしたりできるクローアームで、両肩にバスターライフルを装備している。

ガリガリと壁を破壊していく光景を見ながら二人の整備士は本気で心配になっていた。

「大丈夫なんつすよね？」

「多分な……最悪ここから逃げる準備をしておくか」

「え？」

「アレはエンジン部が人一倍大きいからな妙な衝撃を受けると……最悪大爆発しちまう。それだけならいいが、防衛施設まで届くような爆発はしないだろうが……あれを配置するからって本拠地にモビルスーツをいくつか返却しているからな。あれが虎の子の兵器ってやつだ……」

心底不安になる若い整備士は内心「荷物をまとめとこうかな……」つと本気で考え始めていた。

迷宮区画の突入口は一つしか存在せず、そこからいくつかの道に分かれていて、最短ルートで突破する。それが作戦だった。しかし、侵入して直後行く手を遮っていたのは金属製の壁であった。サラは警戒しながら壁を探っていく。

「駄目ですね。マークの一撃なら破壊できそうですが……その際に敵が何もしていないとは思えませんが……」

ビスケットは首を横に振って作戦の変更を指示した。

「作戦変更だ。これだけ大掛かりの仕掛けならさすがに侵入するとう事はばれているはずだ。きつとこの前まで存在していた罠が敵がどこまで侵入しているかを見分けていたんだな。してやられたよ」

二つに分けられた部隊の内サラの部隊は右に伸びている道を進み始めた。渉とジョシユアが前方に後方にマークとサラの配置で突き進むと渉は一步後ろから歩いてるジョシユアに恐怖を抱き時折「ひいいい」つと言いながら走り出そうとしている。そのたびにサラは

ジヨシユアを諫めながら釘をさす。サラは頭が痛くなる思いを抱えながらほぼ一本道になっていいる岸壁を突き進む。雨が降っていて濡れているせいか時折ジヨシユアと渉が滑りそうになっている。

「あなた達。いくら雨対策をしているからってはいやいでいると滑るわよ」

「だったら……助けてくださいい」

渉の情けない声とジヨシユアの奇声が入り混じったような音がサラの苛立ちを最大限上昇させようとしていた。何かを言うべきかと思っているとマークが一番先に気が付いた。壁にガリガリと当たっている音と同時に何かの駆動音。相当負担になるような重たい者でも背負っているかのような響く音と共にこちらに近づいてくる。「ストップ！何か近づいてくる」

そこまで言われてようやくジヨシユアと渉が気が付いてストップ。サラは先に気が付いて周囲の索敵を開始した。しかし、敵は予想外の所から姿を現した。

若干駆け足で進んでいた渉とジヨシユア、後方から追いかけるように進むサラとマークでは間に距離があったのは確かだが、その間には金属の壁が右側に存在し、金属の壁がゆっくり下へと降りていくとサラ達の目の前にそれは現れた。

壁ギリギリの幅に高さはモビルスーツのざつと二倍。薄目の茶色で装飾しており、武装の厚さとは別に両肩や両腕、腹回りなどにも様々な武装がてんこ盛りの明らかに周囲の環境を想えばあまりにも場違いにも見える。本来であれば何もなただっぴろ空間に配置するような兵器であるはずだが、しかし、こいつがサラ達の前の前に配置することは無いだろうというのがサラの読みであった。

サラとマークが武器を構えて攻撃するのにかかる時間はざつと一分だったはずだが、敵の肩にあったランチャーはそれよりさらに早い速度で攻撃を繰り出して見せた。両肩についていたバスターライフルは壁を粉々にぶち壊しながら周囲を壊しながら壁という壁を破壊して迷宮を一瞬で平らに変えていく。

サラ達はしやがみ込んで攻撃を回避するが、起き上がった瞬間に周

囲の光景に驚いた。ある程度自分達が進んでいたとはいえ、ほぼ真ん中から中心にほぼ端の方まで完全に破壊されていた。周囲が壁に囲まれた広いコロシアムのような環境が出来ていた。

どうやら迷宮もすべてを破壊できたわけでは無いが、サラは内心レオ達がやられていないことを祈るしかなかった。本来のルートでいけばレオ部隊は中心から突き進んでいたはずだが、おそらく外周を回り込むルートで進んでいるだろうと予想されるが、実際どこまで進んでいるのかここで確認をする前に目の前に立ちふさがる敵を撃つ必要があるだろう。そう思い、気を引き締めて渉とジョシユア、サラとマークは目の前の敵に集中することにした。

大きな破壊音と共に衝撃が確かにレオの元へと届いた。何かが始まった。幸いというべきか、本体の方であるレオの方には被害は無かった。レオ部隊の少し後方からついてきている侵入部隊に集中する必要があるだろう。

サラ部隊を信用し、そのまま進むべきだろうと考えていた矢先、目の前から敵モビルスーツ隊とぶつかってしまった。ジャニーが真っ先に反応しビームライフルで敵モビルスーツの足を吹き飛ばしつつ後方に控えている侵入部隊に物陰に隠れるようにと指示を出す。レオは対艦刀を構えながらブースターを使って速度を最大まで加速させる。敵から襲い掛かってくるライフル攻撃を紙一重で回避しつつ横なぎに切りかかり、敵モビルスーツを真っ二つにしてしまう。ノインはレオが敵モビルスーツをひきつけている間にジャニーとモビルスーツを一体化させる。大型になったガンダム・スニーは両手の指一本一本に搭載されているビーム砲が合計十本になって木星帝国モビルスーツを襲い掛かっていく。

レオはその隙に前へと突き進み、対艦刀で後方に控えていた敵モビルスーツ隊の待機組である二機のモビルスーツを真っ二つに切り裂く。スニーが最後のモビルスーツを撃破するとレオは作戦変更を告げた。

「作戦変更だ！このまま素早く駆け抜けるぞ！」

そう言ってレオの乗るシステムは最大出力で迷宮を駆け抜けて

いった。

サラはシールドを正面に展開ししやがみ込んでシールドの間から大型スナイパービームライフルをはさむ形で設置して照準を大型モビルスーツへと向ける。その後方でマークのカノンが四つの砲台を向けつつ、前方ではジョシユアと渉が大型モビルスーツをかく乱する。しかし、大型モビルスーツはサラ達に牽制しながらジョシユアたちを捕まえようと粘っている。しかし、彼らは全員があることを懸念していた。ビスケット達と連絡が取れなくなっていると。

そのことに一番早く気が付いたのはビスケットであった。異変にいち早く気が付き、行動を始めた。

「戦場一帯で通信妨害がされているんだよね？」

ビスケットの確認にメアリーが反応し「はい」つとだけ答えモニターで周辺の地図を展開させる。地図の中に描かれた迷宮区画と防衛施設区画、收容施設区画が描かれているが、收容施設を除くそれ以外の区画が赤く塗られている。どうやら赤く塗られている区画が通信妨害されているという事である。

「迷宮区画を中心に通信妨害されているってこと？ならサラ達はその原因と対峙しているってことだね」

「はい。おそろくですが……敵モビルスーツが妨害装置を搭載しているものと推測できます。サラ部隊かレオ部隊かはわかりませんが」

「だったらこっちはプランDで行こう」

ヴァルハラは急激に動き始める。少しづつ機体を浮かせ始め方向を少しづつ変更し始めるね。ビスケットは艦内通信に切り替えつつ全員に指示を飛ばす。

「これよりヴァルハラは敵施設へと直接攻撃を開始します。プランD発動。プランDに参加するメンバーは所定の位置で作戦準備に入ってください」

ヴァルハラは作戦宙域を回り込む形で突き進む收容施設へと急ぐ。

收容施設では迷宮区画一帯での戦闘に向けてモビルスーツを大量に送り込んでいた。実際レオ達が順調に突き進んでいた。

「早く送り込め！敵モビルスーツがすぐそこまで来ているんだぞ！」

敵士官が最後のモビルスーツ隊を送り込んだところから約十分が経つとさらに戦闘音が激化した。そんな時、収容施設の方から盛大な警報音が鳴り響いた。通信妨害をしていることが今回は完全に裏目に出てしまい、防衛施設から連絡を入れることが出来ない。この警報は通信が使えない間の最後の連絡手段であることが分かった。

「迷宮区画への防衛部隊を収容施設防衛にむけろ！……なぜだ？ どうやって収容施設に攻撃を仕掛けたんだ？」

そこまで言った所でようやく気が付いた。現在周辺ではEDMと木星帝国間で戦闘が行われている。それはすなわち戦力を各戦場が必要としているという事である。もちろん、この施設から戦力を送るわけにはいかない。この場合、一番近い後方基地から送られてくる。だからだろう、回り込むことさえできれば収容施設へと直接攻撃できるというわけだ。勿論これは防衛施設や迷宮区画への攻撃が行われることで施設の戦力が低下していることが前提の作戦である。しかし、現在迷宮区画への攻撃で戦力は低下、しかも周辺の戦闘で戦力を回す余裕はない。その上自分達で通信を外部への通信を妨害している。この通信妨害は妨害範囲内であれば可能であるが、その外への通信は妨害されてしまう。

自分達の策で自分達が苦しめられている。施設の方からどんどん職員がこちらの方へと逃げ込んでくる。同時にモビルワーカーがあつという間に防衛施設に辿り着いた。同じころ迷宮施設を突破したレオの部隊が無事モビルワーカー隊を送り込んでいたところでヴァルハラがやってきているとわかった。

「どうゆう事だ？ 作戦変更なんて……っあ！ 通信妨害されている？ でもモビルスーツ同士は通信できるし……外との連絡ができないという事か？ 作戦プランがDに変更されたという事か……よし！ モビルワーカー隊はそのまま防衛施設占拠！ 俺達はサラの援護に向かう！」  
クローアームは渉を豪快につかんで壁に拘束するがそれをサラの一撃をもって解放されるが、両肩のバスターライフルが同時にサラ方へと向けられる。二つのシールドでは受け止めきれないと踏み、立ち上がってそのまま距離をとろうとするが、腰につけたミサイルポット



から放たれたミサイルが行く道を塞ぐ。腰につけられたビーム砲が腰の素早い動きと連動してマークの動きを封じにかかっていると、サラへと容赦ない攻撃はレオの対艦等の一撃で封じられてしまった。バスターライフルは真つ二つに切れてしまう。

「応援に来たぜ」

「作戦はどうしたのですか!？」

サラは恐ろしい形相で睨みつけるようにレオの方を向くとレオも多少は気後れしてしまう。

「大丈夫だって。ビスケットさんがプランDにシフトさせたんだよ。あと、ちなみに通信はできないぜ。外部への通信だけ妨害されているんだよ」

サラは今更になって気が付き舌打ちをしながらレオの方へと睨みつけるような視線を向ける。レオは居心地が悪くなり顔を敵大型モビルスーツの方にむけていると、大型モビルスーツにスニーが突撃し、大型モビルスーツが対抗しようとするが大型モビルスーツの腰辺りから大きな火花を散らし、腰辺りがまるで折れてしまったように前のめりに倒れてしまう。

マークはあきれながらつぶやいた。

「まさか……試作品?」

「みたいだな」

レオも同意しながらモビルスーツのコクピットを対艦刀で突き刺してとどめを刺すと戦いは終了の合図が施設の方から上がった。

5

雪之丞が収容されている施設では焦りが確実に襲い掛かっていた。防衛の要だった施設がEDMの主力部隊によって壊滅しそうだという話だった。そんな話を囚人たちの前でしているのだから囚人たちからすれば自分達が助かる可能性が上がったのだからうれしくないわけがない。

「どうするんですか?テトラ様は亡くなって……テラ様までいない。ここは……」

「大変です所長!もう一つも攻略されてしまったそうで……そこか

ら……情報が漏れてしまったかもしれません」

「くそ……ここは撤退する！」

そう言つて囚人たちを逃がさないようにとドアを嚴重にロックを掛けると、囚人たちは罵詈雑言で何とかここから出ようとするが、その傍らで雪之丞は彼らの言葉の意味を考えていた。

ここを逃げる。という事は少なくともこの場所まで敵が攻め込もうとしているという事だつと考え、そして理解した。メリビット達が助かったのかもしれない。それは雪之丞の最後の生命線を切る思考に限りなく近かつた。

だからだろう雪之丞はまるで壊れた人形のように倒れ込んでしまう。雪之丞は少しづつ意識が遠のいていくのが体の感覚で分かってしまう。目を閉じれば愛する人の顔が……自分の子供が……鉄華団の子供たちの姿までハッキリと分かつた。

(メリビット……子供たちを頼む……お前……ち……頼んだぞ……ほ……こり……高き……『子供達』……)

その瞬間に雪之丞の命の灯は静かに消えてしまった。

最後はまだ『鉄華団の子供達』を誇りに思い、自分の子供たちを託して命を落とした。

雪之丞はいつの間にか鉄華団の格納庫で座りこんでいることに気が付き左右にいつかいつか小さく首を振つて確認すると隣にオルガが表情を暗くさせながら立ち尽くしていると判断でき、同時に前後の記憶がはつきりしてくると自分が死んでしまったとはつきり分かつた。すると、オルガは苦しそうな表情で雪之丞へ向けて言葉を投げかける。

「済まない……おやっさん」

「なんでお前が謝んだよ……」

「だって……俺達の責任でおやっさんが」

雪之丞は煙草を口にくわえて少しだけ微笑んで見せた。

「あっちはあいつらだけで大丈夫だろ。メリビットの奴も、子供達も俺の誇りである『あいつら』なら何とかするさ。お前だって……だから頼んだんじゃねえのか？」

「どこまで……」

「おおよそだけだ。あの爺さんからある程度聞かされた程度だな」

オルガは苦みを噛み締め、同じように死んでしまった雪之丞の方を見る事すらできない。

「お前があの時誰に何を頼んだのか知ってるつもりだ」

「あいつならって思ったんだ。あいつは他の誰にもない力があるって。それ以上に……あいつにはいろんなものを背負ってくれる強さがある……だから甘えちまったのかもしれない。あいつなら俺達の状況すら分かかってしまうのかもしれない」

雪之丞は内心安心してしまった。

立ち上がってそのまま背中を強く。

「お前達を見捨てておけねえからな」

笑って死ねる。

(あとは……任せるぞ。誇り高き子供達よ)

そう言って笑って見せる。笑って……死ねることへの喜びしかなかった。

高重力作業施設への道のりは単純で高い壁のような渓谷をまつすぐに突き進めばそれは存在する。赤い壁のような渓谷はごつごつした道のりで、上を通っても下を通っても立ちふさがるのはモビルアーマーの『フォルティシモ』がビーム屈曲ドローンを広範囲に展開し、近づけば近づくほどに周囲から襲い掛かってくるフォルティシモにサブレ達は攻略出来ずにいた。これに対してサブレが取ろうとしている作戦は明樂に対してビームシールドを三つ装備させ、強引に真正面から攻め立てるギリギリ作戦ととれる作戦だった。

「君は本気であれで突破できると?」

モンタークはカツパを羽織った状態でサブレに語り掛けてきた。雨がカツパを濡らし、地面を湿らせていく。赤い大地は初めての雨に乾ききった大地を染み渡らせたいらしく、少しずつ粘土のような感触を靴裏を通して嫌なふみ心地を与えてくる。

「無理だと思うけど」

「だとしたら……」

サブレの言葉にモンタークは疑問の言葉を投げかける。サブレにはこの作戦が成功するとは思っていなかった。

「あいつが目を引き付けてくれるならその隙にこちらは別の手を打つことが出来ると考えたただけだ。その隙に誰かがフォルティシモを攻撃できればいい」

「俺は囷だど?」

「あいつならそれぐらいはできる。俺は出来ると信じている奴にしかそれは任せない。俺があいつを殺させない。俺の前前で俺の仲間は見殺しにはさせない」

すると後ろから死にそうな表情でフラフラしながら雨に濡れる明樂が現れた。おぼつかない足取りでサブレに近づいてき抱き着こうとするがサブレはそれを紙一重でよける。

濡れる地面に両手をつけて盛大なため息を吐き出して死にかけの

ような目でサブレの方を見るが、サブレから明楽の方に視線を向ける。

「俺がお前を見殺しにする作戦をとると思うか？」

心底不思議そうな表情を明楽の方へと向けつつ尋ねると明楽は真剣そのものの表情で黙ってうなずいた。サブレの怒りメーターを少しだけ上がってしまったとサブレは菩薩のような微笑みを浮かべる。その姿を見た途端慣れたシノは自然とメテオの方へと逃げていき、慣れていない三日月とモンタークは首をかしげながら成り行きを見守った。

「お前には俺がお前を見殺しにする奴に見えるってわけだ」

「はい！先輩ならそうすると思います」

「最後に……訂正するチャンスを与えてやってもいいか？」

「………すいませんでした。冗談ですので許してもらえませんか？しょうか？」

明楽はふざけ過ぎたと自覚したのか、菩薩のような笑顔の奥にある般若のような表情とメーターを振り切れそうなほどの怒りを知ったのかもしれない。最後の抵抗とばかりにからかって見せたことを完全に見抜き、黙ってみていれば調子に乗った明楽。しかし、謝るのはワンテンポ遅く、サブレの右こぶしは黙って握りしめられ、明楽はこれから自分に起こるであろう出来事を予想して目を瞑った。

「どうか………一思いにー！」

「いい覚悟だ。歯を食いしばれ!!」

「はい………?!目があ!?!歯を食いしばれてフェイク!?!」

明楽は唐突に襲い掛かってきた両目の刺激に両目を押さええながら地面をゴロゴロと転がってのたうち回る。しかし、それだけでは終わらなかった。マウントポジションをとると明楽の両頬に数発ほど拳を叩き込む。

「ちよ………せんぱ………勘べ………!!」

その光景に三日月とモンタークがドン引きしていると後方では準備を終えたメテオが起動させながら立ち上がった。いた。

「調整終わったってさ。そろそろ動こうぜ！」

サブレは立ち上がってそのまま新装備のエデンの元へと歩いていく。

エデンは新たな装備を身にまとっており、背中につけた羽は小さくなっていて、リングフアンネルは小型したうえで両腕に装着されている。そして、今回からお披露目になる新装備は今までリングフアンネルが付いていた背中に装着されていた。二枚一対になっている高出力ビーム砲になっていて、二枚の板の間でビームを発生させそれを前方に射出するシステムだが、この装備は高出力は実現する為に装備が大型になってしまい、フアンネルとしての機能が地上では運用できないという点だった。それを改善する為にバルバトスルプスレプスが装備していたテイルブレードに着目、地上での運用時では特殊ワイヤーを使った有線兵器に、宇宙で運用するためには無線兵器に変更可能という点である。子の装備は元々新装備として初期のころから構想があり、偶然にも黒いエデンが造ってしまったエイハブ結晶が高出力砲台の開発めどを立て、同時に旧鉄華団本部地下に隠してあったバルバトスの改造した際の設計書が最後の一押しになった。

こうやってエデン新装備通称『ネオ・フアンネル』であった。

ソニアはこの装備にかかりつきりで整備の仕事をほぼ投げ出していた。しかし、それだけに今回の作戦にギリギリの形で間に合い二つを装備している。

エデンが後方でネオ・フアンネルの調整をしている間にシノたちはポジションに付こうとしていた。上空ではモニタークが、明楽が渓谷の一番下の一本道、渓谷の上にそれぞれ左側がシノ、右側が三日月が待機に入っていた。その彼らの視界の先に多数のドローンと一本道の後ろで居座っているフォルティシモが良く見える。

作戦開始の合図と同時に四機が動き始め、サブレはフアンネルの動きを脳波で捉えつつ明楽達の方を見た。

まっすぐに突き進む明楽達がドローンの行動範囲に入ると同時にフォルティシモからの拡散ビーム砲が多く、屈曲ドローンを経由して全方位から襲い掛かってくる、同時に中央からの一番大きな攻撃が屈曲ドローンを経由しながら広範囲に攻撃を仕掛けつつ猛威を振る

う。三日月とシノは左右に大きく動きながら辛うじて回避していくが、モニター自体は特に苦勞することも無く、下からやってくる攻撃をよけながら確実に前へと進んで行く。すると明樂がある程度進んだところでフォルティシモはサブレとの戦いでは見せなかった新装備を背中から射出する。拡散ビーム砲よりよっぽど脅威度の高い攻撃が降りかかる。先ほどまでは辛うじて避けていた明樂もシールドが発生させるイーフィールドが少しづつ削られていく。

ここまでは今まで通りだった。今までだったらここで撤退するところであるが、今回は秘策が存在する。エデンのネオ・ファンネルをワイヤーで動かしながら両肩の少し上で両方共を待機させるる両腕についている六枚のリングファンネルが三つで一つになって前方に展開する。

明樂が近づいていくたびに明樂への攻撃が過激を増していき、なるべくシノや三日月やモニターが自分達の方へと標的を移そうとするが、無理ができない三人ではこれ以上近づくと出来ずにいた。そして、フォルティシモは明樂を全力で迎撃する為にイーフィールドを解いてしまった。その瞬間を待っていたかのようにサブレはネオ・ファンネルの須臾力を最大まで上げてリングファンネルを通過することです。今までは出せなかった出力がフォルティシモを襲い掛かる。フォルティシモの体の半分以上を吹き飛ばしてその場で大きな爆発と共に道が開いた。幸い、施設には攻撃が届いておらず一本道は確保された。そして、明樂は吹き飛んでいったフォルティシモと吹き飛ばしたエデンを交互に見ながら叫んだ。

「何するんすか!?俺まで吹き飛んだらどうするつもりなんですか?」「ちやんと当たらないようにしただろ?」

さも当たり前前かのようにその場でやり取りを進めるサブレと明樂をしり目にシノは先に施設の方へと急ぐ、施設からは車が何台も逃げているのが分かり、施設を放棄するつもりだと判断できる。シノはそのまま施設前までやってくると、後ろから三日月やモニターも追いつく、サブレと明樂も遅れながら追いつき、さらにその後ろからEDMの制圧用のモバイルワーカーが施設を囲み、中に入っていく。

サブレが何かを感じ取り始める。

(何なんだ?この背中がチリチリする嫌な気配)

サブレは施設の中に入っていった兵士達を待っていると、兵士の一人が駆け足でサブレに近づいていく。

「サブレ様!保護対象を確保しました……が、雪之丞と呼ばれている男性は別の施設に移送されたようでした」

「どこだ!?どこに移された」

(嫌な気配の正体はそれだったか。テトラ・ギユウジャンめ!そこまでして鉄華団への復讐が大事なのか?)

手元のタブレットで調べていると早口で言い出し始めた。

「確か……高重力労働施設と呼ばれている場所です!詳細はこちらに」

と手渡されたサブレは駆け足でエデンの元へと急ぐ、エデンの足元でデータの所得を急いでいたソニアに大きな声で指示を飛ばす。

「ソニア!ビームシールドと新ライフル!今すぐ出る!」

「いいけど……時間がかかるわよ」

「今すぐしてくれ!データの調べるのも後!」

そう言っただけで急いでエデンに乗り込むサブレはシールドと新型のライフルを強引に受け取ってそのまま勢いよくスラスターをふかしながら高く舞い上がり、そのまま高度を上げていきながら高重力労働施設の方を確認する。

速度を上げていきながらまっすぐに進んで行く。

7

目の前に展開しているモビルスーツの数は三十を超えており、空中に浮かんでいるところをサブレ自身が確認すると、今まで確認できていなかった飛行ユニットを搭載した新型量産機を展開しており、砂漠地帯に部隊を配置していった。地面に展開しているモビルワーカーの装備もモビルスーツが搭載しているような簡易型ビーム兵器を搭載しているようで各方面からの防衛機能を最大にして待っていた。

目の前に展開するモビルスーツ隊を前にしてサブレは下唇を噛み締めながらひたすら大きく叫んだ。



「邪魔をするな!!」

背中についているネオ・ファンネルを動かし始める。ファンネルからの攻撃でモビルスーツを落としつつ、ライフルでモビルワーカー部隊を確実に落としていく。しかし、数が多く攻撃をよけながらシールドで攻撃を受け止めつつ三十を超えるモビルスーツを前にして一進一退の攻防を繰り返す。

一旦地面に降りてホバーで素早い動きを見せながらもまずはモビルワーカー隊を駆逐し始める。半分ほど減ったところでリングファンネルを展開させ、再び上空への攻撃に切り替える。体を空中に戻しつつリングファンネルを通してライフルの強力な一撃をモビルスーツを引き裂くように放つ。

「しつこい！死ぬ覚悟のあるやつだけかかってこい！死ぬ覚悟の無い奴は引っ込んでいろ！俺の邪魔をする奴は何人たりとも許しはしない」

サブレの瞳が虹色の炎の輝きを放って怒りの表情を浮かべる。

(あの日のオルガとの約束を破るわけにはいかないんだよ！)

ファンネルをまるでブレードのように振り回してモビルスーツ隊を吹き飛ばす。空いた隙間を縫うようにまっすぐにモビルスーツ隊を突き抜けていく。前へと進んで行きながら後ろに展開している敵モビルスーツ隊に向けてファンネルによる攻撃を与えていく。ただひたすら前へ進んで行くために。

モビルスーツ隊を引き離して目の前に高重力労働施設が見えてくると、サブレは周辺の防衛施設をまずは破壊し始め、安全を確保した段階でエデンから降りて正面玄関を破壊して、中へと入っていった。

中はシンプルな構造になっており、管理フロアに入って各フロアのロックスを解除しつつマスターキーを手に入れると、それを持った状態で一階の嚴重な両開きの自動ドア横の機械にマスターキーを使用すると、ドアがゆっくりと開いていく。中では職員が逃げて興奮している者もいれば疲れ果てて座っているものまでがいた。そのほぼすべてがサブレの方に視線を向けて、サブレはそのすべてを無視しながら奥へと進んで行く。中に居た囚人たちは喜び余り外へと駆け出して

いく。

「どこだ？どこに居る!？」

サブレは逃げようとしている囚人の男性を捕まえて早口で尋ねた。

「この場所に褐色肌の大柄の男性がいたはずだ」

「知らねえよ……そんな人物いっぱいいるぞ」

サブレはポケットの中から一枚の写真を取り出しそれを男性に見せると男性は一旦思考した後 ゆっくり奥を指さした。

「でも……あの男は」

そこまで深刻そうな表情を浮かべたことにサブレは嫌な予感を最大限まで高めて表情を曇らせ走り出す。最後の扉を開けると誰もいない閑散とした空間に、太いパイプや機械があちらこちらに配置されていて、高重力状態が解かれているとはいえ、重苦しい空気すら感じ取れる。しかし、そんな空気の中ですらサブレはまっすぐにそれを見つけて出した。

うつ伏せに倒れている褐色肌の男。やせ細っていてミミズ腫が行き過ぎて切り傷にすら見える体は写真とはまるで別人に見える。サブレはゆっくりと歩き出し、体を仰向けに変えて手首の脈を図るとまるで動いていないのが確認できた。

サブレは何度も何度も心臓を強引に動かそうとするがまるで動く気配がしない。

「頼む……頼む! オルガとの約束を……これ以上破るわけにはいかないんだ!」

力いっぱい左胸を叩くがそれでも動かない雪之丞の体を通じてサブレは確かな声を聴いた。

(あいつらによろしくな。あとは……任せたぞ)

サブレは地面を強く叩きつけながら小さくつぶやいた。

「また……救えなかった。俺は……何も変わっていないじゃないか」

また……一つ思いを背負い進んで行く。それが苦しい道だと理解しながらそれでも進む覚悟を固める。

ゆっくり立ち上がって彼の体を両手で抱き上げて外へと連れだし

ていく。外から差し込む光に向かって歩き出していった。

## 暁の空の向こう側へⅣ 《真実を追い求めて》

8

雨雲はある高重力労働施設一帯に太陽を隠してしまっており、昼間なのにまるで夜のように暗く落としていく。それはまるでその場に  
いる一部の人達の気持ちを代弁しているようでもあった。元鉄華団  
メンバーである『チャド』『ダンテ』は赤いテントの中に入っていくと  
テントの中に冷凍保存されている死体を前に涙を流したり、悔しそ  
うな表情を浮かべたりしている。反対の白いテントでは赤いテントの  
方を見ながらビスケットは暗い室内で明かりもつけずある人物と通  
信での連絡を取っていた。

通信先の人物は悲しそうでどこかそれを耐えようとしており、ビス  
ケットは悲しみを噛み締めながら懺悔するようにつぶやいた。

「間に合わなかったよ。ユージン」

「お前はよくやった方だろ。それよりメリビットさんはどうなんだ  
？」

「落ち込んでるよ。おやっさんの遺体をどうするか決めなくちゃいけ  
ないんだけど……あの様子じゃまだ話が出来そうにないな」

「シノはどうしてるんだ？」

「……うん。やっぱりショックみたいで。ライドの時はまだ我慢して  
いたみたいだけど……耐えられなかったみたいだね」

するとユージンは気になったことを尋ねる。

「サブレの奴が見つけたんだろ？あいつはどうしたんだ？」

「？サブレなら……どこ行ったんだろ？」

「おいおい……お前が把握してないでどうするんだ？」

ビスケットは顎下を触れながら思案顔で視界を動かす。すると視  
界の端に雨に濡れているガンダムエデンが見えたので少なくともこ  
こから長距離を移動はしてないだろうという事は分かる。

ユージンに別れを告げてビスケットはカッパを纏いながら雨の中  
をテントとテントの間のでこぼこ道を歩きながら湿った赤い硬い粘  
土のような道をふと見ていると赤い大地から緑の草や木の芽が生え

始めようとしていた。ビスケットはそれをよけながら歩いていると一番端でカップを着て左右の確認をしながら外へと歩き出していく姿を確認しながらビスケットは早足で追いつこうとする。すると、エデンの両目が光り始めビスケットの姿を確認する様に視線を向けるが、肝心のビスケットはまるで気が付かない。エデンが目を光らせたことも、首を動かしていることも気が付かなかった

ビスケットがふとサブレが立っている場所に立ってみて同じように左右を確認すると、特に何もなさそうに見える。ビスケットはサブレを探そうとその場に立って体をうごかして見つけようとしていると、エデンの陰からサブレが出てくるのを確認してから近づいていく。

近づいていくとサブレはこっちの方を見て小さくため息を吐き出した。

「まったく、俺の後を追いかけていると思えば、明日からどうなるのか分からないというのに……こんなところで油を売っていいのいいのか？」

「サブレの方こそこんなところで整備の手伝いをしていいの？早めに休んだ方がいいと思うんだけど」

ホッペを膨らませながら目を細めて怒ったような表情を浮かべる。サブレはエデンの背中にまわって蓋のような場所を開き、コードをいじっていると、口にペンチを銜えながら両手でコードを抜いては別につながてみたりと作業を続けて、タブレットを通じて動作をデジタル内でテストしてみる。

「サブレって整備もできるんだね(整備もできるし、事務作業もできるし、パイロットもできるし、部隊指揮もできるし……隙が無い)」

コードを繋ぎなおしていると最後にタブレットで確認すると、別の場所へと移動していく。しかし、あまり意味のある行動には見えな。結局整備なんて整備班がしてくれる上に実力も上であることは真実である。ふと、ビスケットは周囲を見ると、普段整備をしていないような人など一部の人々が整備を手伝ったり、コンテナを運んだり普段しない仕事に手を付けている。それをしない人間は明楽がサボ

ろうとコンテナの後ろでこそそこそしているのをメアリーが怒って連れて行こうとしていた。最終的に一つのコンテナの周りで狩人のようなメアリーと逃げるウサギのような構図で追いかけてっこをした。た。

「仕事をしなさいー」というメアリーの叫び声と共に明樂の「絶対嫌だ！」という奇声のような声を上げながら逃げ回っている間にサブレはイライラしたように震え始める。きつとアニメならこの時のサブレの目は力強く光っていた事だろう。明樂の方まで走っていき、ラリアットを明樂に決めながらそのままコンボでマウントをとると素早く目を潰して顔面を何度も殴り始める。

「ちよっ……………!?せんぱ……………!?!」

「お前は……………少しぐらいはシリアスにできんのかあ!?!」

ビスケットはいつもの風景に少しだけ安心してしまう。先ほどまで周囲に漂っていたシリアスな雰囲気が一瞬で拭き飛んでいき、ビスケットは急いでサブレの後ろにまわって諫めようとする。

この時、ビスケットは気が付くべきだったのだろう。シノが多少無理をしていることを。

ビスケットは改めて雪之丞とライドの遺体が入ったボックスの上に改めて真新しい花束を置くと黙祷を捧げて赤いテントから出ていく。するとEDMの若い士官の男性が近づいていくと真顔で尋ねてきた。

「ビスケットさん。そろそろテントをかたずけて撤退したいのですが……………」

「あ……………二人の遺体だけは別に取っておいてください。その後撤退を」

士官の男性は頭を小さく下げた後、周囲に撤退を指示し始める。ビスケットはそのままヴァルハラまで撤退していく。夕方にはヴァルハラをはじめ多くの部隊が撤退し始めたとき、夜になるとヴァルハラはEDMの空域まで撤退しているとき、サブレは不思議な夢の中まで導かれていた。

重苦しい空気がながれており、息苦しさや圧迫感が襲い掛かってき

て、瞼をゆつくりと上げるとそこま真つ暗な空間でどこまでが果てで自分がどこに居るのか、それどころかそもそもどっちが上でどっちが下なのかすらまるで分からず、サブレ・グリフォンはここが夢なのだと判断できた。しかし、不思議な夢でこの場所が夢なんだと認識した今でも信じられないようなほどリアルな感覚が襲い掛かってくる。どこに歩けばいいのか、なんでこんな夢を見ているかすら分からない状況で誰かの手が暗闇の中からサブレの方へと伸ばされる。サブレの右手をつかむと細く綺麗と言ってもいい腕がサブレの体をどこかへと案内させようとしていた。すると小さな光が広がっていき周囲に何があるのか分かってくる。すると、そこにはまるで……綺麗な青空が上と下に広がっているように見え、次第にサブレを引っ張っていた姿が現実のものになっていく。気が付けば周囲は青い空と真つ白な雲が広がる青空とそれを反射するような鏡のような水が地平線の先まで続いている世界だった。

「君は……誰だ？」

次第に相手の姿が見えてくる。細い腕と同じように全体的に細くやわらかな物腰をしており、長く伸ばされた髪は無造作に伸ばしていることを感じ取らせないような透き通る美しさを見せている。顔はタマゴ顔でどこかのモデルのような整った顔立ちは真つ白の肌に青い目、長い金髪と相まって一般的な外国人と言った成り立ちに見える。するとサブレには彼女を良く知っているような……行ってしまうばデジャブのような感覚が襲い掛かってくる。そのデジャブはまるで毎朝洗面台で自分の顔を見ているような感覚と似ていて、そんなことがあり得ないとわかっていながらサブレにそう聞くしかなかった。

「私は###よ。？もしかして……私の名前が聞えない？」

サブレには名前の部分だけがノイズがかかったようにまるで聞き取れなかった。彼女はまるで嬉しそうな表情を一瞬だけ浮かべた後サブレに一步近づいてサブレの顔を覗き込む。

「ここは世界の中心。どこまでが限界なのか分からず、どこでも行けそうな狭く広い世界。何もなく、命すら到達できない世界。虹の彼方すら遠く過ぎ去っていく世界。人は昔この世界に名前を与えた

……『アカシックレコード』世界のすべての知識がここにある。でも……今は何もない。アカシックレコードは二千万年前にある一人の男の手によって無に帰してしまった。未来がまるで意味をなさない世界。それは輪廻転生が否定されてしまった世界。原因は……」

「男が虹の彼方を造ってしまった？死んだ者達を受け入れる受け皿であり、世界を一本にまとめてしまった」

「そう。世界は無限に広げるのではなく、世界は有限にしか伸ばせない世界。いつか限界を迎える世界。それが彼が造ってしまった世界だった。それこそが呪いの正体でもあるの、言ってしまうえば『限界を作る』というのが呪いの正体。何をしても、どんな抵抗を続けても世界は変わらず、命は全て虹の彼方へと向かってしまう。彼は生まれ変わる世界を否定したいの。それは自分を否定し、自分達という進化した存在を否定した人間への復讐心から来ている。彼は自分が何回生まれ変わっても同じ経験をするのではないかという恐怖心から来ている」

「だったら……俺はどうなるんだ!?俺は……」

「あなたは特別、あなたは私の生まれ変わりだから。正確には私のオリジナルの生まれ変わり、私は生まれ変わる前にここに辿り着き、未来を見た。絶望しかない未来を。どんな道を選んでも世界は不幸になる。でも、たった一つだけ見えない針の穴のような小さい希望が残っていた。それがあなたの世界。その為には彼が死ぬ前に輪廻転生に入らなければならぬ。その為にはうまくこの時間にあなただを送る必要がある。だからこそ私は分けられ、半分はこの世界に残った。だからあなたは性別が反転してしまったの。私がいるからこそあなたは男としての一生を受けることになった。その為に必要な道具は全部用意した。機械で似通った存在である『アカシックレコード』とそれを導けるように『人工知能』、『ニュータイプ』をはじめとする進化した人類の理論。そして……その力を使いこなすための受け皿である『モビルスーツ』」

「だったら君は……どうしたいんだ？どうしてほしい？」

「私は流れを作るだけ、決めるのはあなた。でも……これだけは言わ



せて虹の彼方には限界がある。いずれは破綻して終わりを迎える。そんなことをすれば世界は『完全な無』の世界が始まる。新しい何かを作ることでもできず、先に進むこともできない。その代りに誰も苦しまず、誰も失う恐怖を覚えない世界」

「俺は……………」

「今は結論を出さなくていい。でも、近い未来にあなたは結論を出す日が来る。私はその流れを作りたかったから。もう……………分岐点が目の前に来ているの。あなたが『ゲイナー』という人物に会えるかどうか分岐点なの。このままあなたが見つけられなかったら『アイン』は必ず自分の力で『私が作ったアカシックレコード』を見つけ出す。そうなれば終わり、だから私はあなたに道を示すだけ。高重力作業施設の地下への隠し通路がある。そこから移動すればゲイナーという人に会うことが出来る」

「君は……………あなたは」

「最後に……………ごめんなさい。あなたを巻き込んで」

彼女は悲しみに表情を曇らせサブレの体を抱きしめる。

「こうするしかなかった。多くの人の命を使うこの手段しか存在しないの。呪いを解くための手段は同時に虹の彼方を利用する手段でもある」

そこまで言われた時点でサブレにはなんとなくそれを理解した。

『奇跡』を起こすこと…………『死者の奇跡』を起こすことが…………呪いを紐解く唯一で最後の手段」

「そう。ガンダムは…………人間の希望であり、時に時代を象徴するような存在だった。あなたのガンダムは既に奇跡を起こして見せた」

彼女はサブレの唇に自分の唇を重ね合わせ一瞬という永遠のような時間が流れ離れてしまった。彼女は瞼を開いてもう一度サブレの方を見た。

「最後の奇跡にもう一度会いましょう。その時に聞かせて欲しい。あなたの答えを…………最後の時はもう…………すぐそこまで来ている」

そういわれた時サブレの時間は一気に現実世界に戻されてしまった。

遠くなる景色、光りの速度で遠くなる彼女の姿、そして……宇宙に投げ出されたような感覚と同じく虹が周囲を満たしていくそこには多くの意思と信念がまじりあったまま複雑で今にも壊れそうなほどの不安定さを感じ取れた。そこが虹の彼方なのだと実感でき、手を伸ばしてみると、一人一人の記憶を覗くことが出来る。本来であれば別の世界で生まれ変わるはずだった命。その場所すら奪われ、苦しみも悲しみも思い出せないほど閉ざされた『無』の一步手前の世界。意識はあるのに、妙な力が感覚を阻害しているのが分かる。

「ここは……人間が来て良い世界じゃない……こんな場所……苦しみも、悲しみも、喜びも、楽しさも、怒りすら存在しないじゃないか。思い出す事が出来ても、何も変わらず、どこにもたどり着けない寂しい世界じゃないか。こんなの……嫌だ!!ガンダムウ!!!」

すると、エデンがまるで待ち構えていたかのように飛来してサブレをコックピットの中へと入れるとそのままこの世界から逃げようとする。しかし、どこに行けばいいのか分からない時、『白い一角獣を模したモビルスーツ』と『金色の不死鳥を模したモビルスーツ』がまるで「こつちだよ」つと言っているようにエデンの両手をつかんで現実へと連れていく。最後の力強さと共にエデンは現実という『真実』へと向かていく。

ふと目を覚ますと嫌な汗でTシャツを濡らしており、重い息を吐き出した後で自分が見ていた場所を思い出す。最後に自分を助けてくれた彼らは何を訴えたいのだろうか。もしかしたら……まだ、存在するのだろうか?つと考えてしまい。二つの機体の名前を呟いた。

『ユニコーンガンダム』……『フェネクス』か」

太陽が火星の大地から登ってくると、ようやく雨雲は晴れていくのが分かった。サブレは制服を手に持ちながらエデンの方へと歩いていく。真実へ向けて歩き出していく。

## 暁の空の向こう側へV 《終わりへ向けて》

9

空が青と白で塗り固められており、ヴァルハラから降りたサブレとビスケットとクレア、そしてなぜかついてきた明楽の四人で作業施設最下層まで降りてくると、一番下にあった倉庫の床を四人で調べた結果、クレアが一番端に隠しドアがある事を気が付きビスケットはパスワードを入力する為の装置を見つけ出し明楽が三日月に連絡を取ると、三日月は

いくつかのパスワードを教えてくれた。三つ目のパスワードを入力した所でようやくドアが上の方へスライドしていき、重苦しい空気が少しづつ姿を現した地下への階段を覗くように前に出ていくと、サブレがその横で下へと降りていく。続いてビスケットとクレア、明楽の順に入っていくランタンのような小さな明かりが上の方に申し訳なさそうについているだけで、それ以外は寂しさを感じる造りになっている。まっすぐに進み今度は階段で下っていくと重苦しい空気を感ぜさせる鉄製のドアがあり、サブレ達が目の前に立つとドアが自動で開き騒がしい部屋が見えてくる。

部屋の中は実験道具や実験用ベットなど、様々な薬品などが点在しており入ることを躊躇われる。サブレが意を決して中に入っているとサブレは背中をチクチクするような嫌な気配を感じ取り、クレアも気持ちが悪そうにしている。ビスケットは不思議な空間に表情を曇らせる。明楽も何か変な感じを感じ取ってしまう。

部屋を中心にパソコンに囲まれるように椅子に座っている老人こそがゲイナーであった。空気がチリチリする感覚が気になりながらもサブレ達はゲイナーに向き合う。ゲイナーは厳しい目つきでまるで品定めするようにサブレから順に見ていくと、小さく息を吐き出し立ち上がるようにしたが何故かやめてそのまま椅子に座ったままでいると明楽は内心「偉そう」っと思いを口に出そうとするがビスケットが明楽の横つ腹を強く叩いて諫める。

ゲイナーはコーヒーカップに入っているであろうコーヒーに紫色

の怪しげな液体を入れていき、サブレは若干青ざめていく。一口だけ飲むとゲイナーはもう一度サブレの方を品定めをするような目で見ると乾ききった唇を重く開いた。

「ようやく再開できたな。最後にあつたのは……鉄華団壊滅時じゃから……もう八年ほどになるか。しかし、あの時の子供がここまで成長するとはな」

サブレはゲイナーの言葉を聞きながら夢か幻か分からないあの不思議な世界を思い出していた。『彼女』が言った最後の奇跡という言葉の意味をもし知る存在ならそれは彼女が作ったと言われている『アカシックレコード』しかないだろう。そして、それを唯一知っているのはここに居るゲイナーしかない。それがサブレの考えている事であつた。

背中のチリチリとした感覚が増していくことへのストレスから早く聞き出したいという気持ちしかない。

「教えてくれ。あんたは知っているはずだ。アカシックレコードが今どこにいるかを」

ゲイナーは乾いた唇を開くことを一瞬だけ止めて、まるで唇の皮を切ってしまうないようにゆっくりと口を開いた。

「アカシックレコード本体は本来太陽系の外におる。しかし、地球での戦いの際に太陽系に帰ってきていることは木星帝国も確認ができておるようじゃ。そして、現在は――」

そこまで行ったところでクレアが弱い力でサブレの右腕をつかんでくるのを感じ取り、サブレは振り返ると顔を真っ青に変えたクレアの姿であつた。そして、ゲイナーの言葉をかぶせるかのように弱い言葉をつき出す。

「サブレ……見られてる。誰かが……聞いている」

その瞬間にサブレの脳裏にアインの顔が浮かび上がった。その瞬間にサブレは明楽の腹を思いつきり蹴り飛ばした。悲鳴を上げる暇もないぐらい吹き飛んでいき壁に強く激突したところでクレアの表情の青さが嘘のように無くなり、その代わりにゲイナーは口を閉じた。

「さっきの言葉をちゃんと聞いていたのか？」

「言ったのか？アカシックレコードの居場所……」

「ああ、言ったぞ。木星と火星の間にあるアステロイドベルトにあるポイントEと呼ばれている場所だとな」

サブレは唇を噛み締めそうになり小さく震える。そして、そのまま部屋から出ていくためにドアに手を掛けた瞬間にビスケットが振り返り声をかけた。

「どうしたのさ。いきなり」

「聞かれていたんだよ。アインに！」

そう言って駆け出していくサブレを追いかけるようにビスケットとクレアが駆け足で追いかけて復活した明樂は何が起きたのかまるで分からないまま呆けているとゲイナーは立ち上がり腰を何度も叩いていると明樂に「さっきと行くがいい」つと無理矢理どける。明樂は納得ができないという風に駆け足で進んで行く。

ゲイナーは明樂がぶつかつた壁にしゃがみ込み静かに『何か』を拾い上げると、それは小型の機械であった。おそらくは足のような物が付いていて移動しながら脳波で聞くことが出来るのだろう。それゆえの小型化というわけだ。

「やれやれ。わしの事はあきらめたと思っておつたが、彼らが見つけ出すのを待つておつたのか」

小型の盗聴器を回収しながらサブレ達が消えていった方向へと眺めながら小さく呟いた。

「これも運命かもしれんな。なあ……」

ゲイナーはコットンへと連絡を飛ばした。

10

サブレはヴァルハラを出撃させようとビスケットはブリッジに上がると各員は持ち場に付こうと移動をひっきりなしにせわしなく忙しそうにしているとサブレは遠くの視界に映る溪谷を眺めているとブリッジから警報音と共にメアリーの声が響き渡る。

「木星帝国のモビルスーツ隊が多数接近中！各員準備に入ってください」

サブレは明楽達に指示を飛ばした。

「お前たちは先にヴァルハラの中に入っていてくれ。急いでここから出る必要がある」

サブレの意見にサラが前に出ていき真剣な面持ちをサブレに押し付けながら前に一歩だけ進み出る。

「待つてください！一人で戦うつもりですか？」

「エデンだけが宇宙に一人で出ることが出来る機体だ。準備ができ次第すぐにでも宇宙に出ると思ってくれ。最初に言っておくがアイン達が先に目的地に辿り着いている可能性がある。あくまでも地上にいる部隊でも対処できそうだと判断できたところで離脱するつもりだ。上に上がってすぐにも加速をかけて一日かけてアステロイドベルトのEポイントへと向かう。言っておくが遊んでいる場合じゃない」

サラは何かを言いかけようとしてあきらめた。サブレがこういった以上絶対に引かないことは明らかだった。諦めながらサブレの指示に従うことにした。他の全員も同じあきらめ顔で指示に従うとサブレは単身エデンに乗り込んでそのまま戦場へと向かう姿を全員が見送っていた。

サブレがEDMのモビルスーツ隊の前に出て空中に浮かんだ状態でネオ・ファンネルを開放し、エデンの両肩で待機状態になると渓谷を超えたモビルスーツ群が見えてくる。エデンが攻撃状態になると、警告を超えたモビルスーツの数が軽く100は超える。後方に待機している『ジム・キャノン』に乗っている若いパイロットの声がサブレにも届いた。

「こんなに残っていたのか？敵は何を考えているんだ？」

少なくとも地上に展開している戦力のほぼすべてを使っているのではないかと予想される数がそこにいた。肩にキャノンやシールドを背負っていたり、近接武器だけ構えている機体すら存在する。幸いなのはモビルアーマーがないことだけだろう。

ヴァルハラが空中に浮かんでいくのを確認するとサブレはエデンを空中に浮かせてモビルスーツ群に突っ込んでいく。エデンはフア

ンネルを使った攻撃とライフルの攻撃の並行で一気に十機のモビルスーツを倒していく。敵モビルスーツ群も一斉にエデンに向けてビームライフルの引き金を引いた。しかし、エデンはまるでサブレの意思を確認する前に動くみたいだにサブレ認識する前にリングファンネルを周囲に飛ばしてビームを屈曲させてしまう。

「今……勝手に」

勝手に動いた。それだけは確かに分かった。

少なくともサブレは特に操作も意識もしていなかった。それなのにエデンはまるで意識がある様にリングファンネルを操作して見せた。

「エデンにはAIで搭載しているのか？」

そう思った時、目の前に存在している小さな画面に文字が書かれているのが分かった。

『私の名前はサポートプログラム・アーティフィシャル・インテリジェンスと申します。昨日よりエデンのサポートをすることになりました』

サブレは内心「余計なことをしたなソニア」と呟きながら大きなため息を吐きシニカルに微笑みながら語り掛けた。

「ああ、よろしく頼む。このまま敵の数を数えていてくれ。あとは未確認のモビルスーツの数もな」

『了解しました』

ファンネルを操作しながら二十五機のモビルスーツまで落としたところでサポート・AIがバルバトスとガフェイン・マークIIが戦場に辿り着いて攻撃を開始したときメツセージを受け取ったと連絡を出した。

『メツセージ：今のうちに離脱してください。戦力はこちらで用意した戦力で十分だと判断します。追記：宇宙にも戦力が展開しているようです。急いで離脱してください。Byコットン・アドモス』

サブレはバルバトスとガフェインの方を一瞬だけ見るとサブレは宇宙が上がっていくヴァルハラを見上げるとサブレはサポートAIに指示を出そうとするが、とつさに名前が出てこない。

「あつ……えつと」

言いよどみ宇宙へと出るための準備をしながら脳内で『サイガ』と『オルガ』の事を思い出す。

(いや……それだけは無いだろ)

そう思いながらも名付けたくなる名前なんだと自ら認めなずけることにした。二人の名前を色濃く受け継ぐような名前を――。

『サルガ』それがお前の名前だ」

『？分かりました。それがご主人様の要望であれば従うまでです。それでは、ご要望をおしやつてください』

「サルガ。宇宙に出るぞ！エデン加速モード！」

『了解。『ガンダム・エデン』加速モードに入ります。カウントは？』

「いらない！準備が出来次第一気にいけ！」

『加速モードON。宇宙に出ます』

そう言つてエデンは加速していく中流れる景色の端で薄つすらとクリュセが見えた。脳裏によぎるレレとアスナの姿を思い出し。脳裏で二人に再会の言葉を告げて去っていく。

(すべてが終わつたら必ず会いに行く！行つてくるよオルガ)

暁の空の向こう側へと強く進んで行く。赤く染まっていく視界と流れる雲が重なつて見えていく中、サブレは宇宙へと進んで行く。

ヴァルハラが宇宙へと出るとサブレが追いかけてくると信じそのまま待機モードへと入った。すると、左側から距離こそあれど木星帝国の軍勢が襲い掛かろうとやつてきた。今度こそモビルスーツを出撃させようとしたが、まばゆい光が木星帝国のモビルスーツである霊電と元ギヤラルホルンから奪取したキツシユの混成部隊を襲い掛かった。すると、ヴァルハラを追いかけるように宇宙へと昇つて来たエデンの姿だった。

エデンの砲撃モードを持つても怯むことなくやつてくる霊電とキツシユの混成部隊を前にエデンはネオ・ファンネルをケーブルに繋げない形で射出する形で放ちそのまま敵モビルスーツ隊へと送り込む。ビームの強烈の光が何度もモビルスーツを落としていく。すると、敵は何とか近づこうとエデンの方へと向かていき。エデンはあえ



てその場から動かず、ライフルで攻撃しながら後退していくと、後方の方からEDMの主力隊が回り込む形で姿を現した。すると、モビルスーツ隊の中に見慣れないモビルスーツがある事に気が付いた。

「済まないな、ファントムブラッド隊！新型モビルスーツである『ガンジユ』を受領するのに時間が掛かってしまった。こちらは我々が引き受ける。君たちは行くといい！何か理由があるのだろうか？」

第三艦隊の総隊長からの力強い言葉を背にヴァルハラは加速をかける準備をしながらエデンをヴァルハラの中へと入れていく。エデンが固定されたのを確認した後、加速をかけながら突き進んで行く。星々が流れ星のようになっていく中、みんなの心には不安がよぎっていた。

ヴァルハラが最終加速をかけてアステロイドベルトのEポイントへ向かったのは既に十二時間が経っており三日月と元鉄華団のメンバーであるチャドとダンテ、デルマを含んだ現在確認できている者達が集まっており、すると彼等にとって懐かしくも真新しく見えるイサリビ改の姿が入港しようとしていた。

イサリビ改の中からユージンが姿を現してチャド達へとあいさつがてらハイタッチを決めていく。三日月頭を一回だけ叩くと一旦距離を置いた。

「でっ…結局どうするんだ？お前の言う通りここまで来たぜ」

三日月は手元の端末を使って自分の意思を伝えた。

『いざとなったらきつと俺達の力もいると思う。だから俺だけでも向かわせてほしい』

すると、チャド達もアイコンタクトで言葉を交わすと代表してチャドが前へと出た。

「だったら俺達も連れて行ってくれ。これも俺達がしたことなんだ。それにここでジツとしているなんて耐えられないしな。これを俺達元鉄華団の最後の仕事にしよう」

三日月があっけにとられているとダンテやデルマも笑いながら覚悟を決めた顔をしていて、説得するのが無理だと判断できた。ユージンは「やっぱりな」と笑いながらイサリビ改の方へと親指を向けつ

つ驚く言葉を向ける。

「そう思つてEDMから最新機を三機ほど手に入れてるぜ。あと二機入れられるけどどうする？一機はバルバトスを入れるとして。これだけか？」

そこまで行つたところで三日月たちの後ろから話しかけてくる人影があり、驚いて後ろを振り向くとそこにはモニターがゆっくりと近づいてきていた。

「私も仲間に入れてくれないか？戦力ぐらいにはなろう」

チャド達は不安そうな顔をしているがユージンと三日月はアイコンタクトで会話をするとユージンが代表して声を出す。

「いいぜ。確かに戦力は大いに越したことは無いしな」

そう言つて中に全員を入れると中にはバルバトスやガフエインが中に入れられているところで元々存在するモビルスーツは『ガンジユ』と呼ばれているモビルスーツが鎮座していた。

濃いめの青と肩や膝の部分は薄い水色のようなカラーリング。左肩についている耐熱シールドに右側にはビームサブマシンガンを装備されており、ビームサーベルも一本だけ右肩に装備されている。耐熱シールドにはミサイルが三つだけ装備されており、ブースターも特殊仕様で木星の高重力にも余裕で動けるようになっている。

「EDMの主力である一番艦隊から五番艦隊も木星へと向かうことになっていろいろらしい。俺達も邪魔をしないという理由で連れて行ってくれるらしい。行こうぜ！」

そういう彼らも最終決戦の地へと突き進んでいく。

《暁の空の向こう側へ編 火星編終わり 断章Ⅱ開始》

## 断章Ⅱ

### ピエロの怒りの理由

白い壁に白い床と白い天井という殺風景な部屋は十人ほどの子供が詰めればギリギリ入れないことも無いような狭さで三段ベットを強引に詰め込んでいて、それ以外は何もないような寂しい部屋であった。

アフリカユニオンの南東に位置するそこは砂漠地帯から少しだけ外れた場所に存在した。人が登れないような高い壁はおおよそでモビルスーツの1.5倍の大きさを誇り、モビルスーツでも簡単に破壊できない造りになっている。

施設は大きく分けていくつかの部屋に分けられており実験体用の就寝部屋。その就寝部屋から唯一のまっすぐな道に実験部屋が並んでおり、その奥に警備用区画と研究区画に分けられており、一番入り口一帯が表面上だけのビジネス区画になっている。

その研究所で行われている研究こそ『人類の進化』についてであった。かつてギャラルホルンも人類の進化という定義で実験を何度となく行ってきた。ここはその最果ての施設で会った。

しかし、造られたこの施設もほとんど存在理由を保てずにいた。いくつも連れてくるヒューマンデブリに対して生きて成功体は0というのが現状でもあった。

そんな寂しい場所しかペペロにとっての故郷というべき場所は存在しなかった。物心がついたのは三歳の頃で自分の一個上の兄のような人は彼が四歳の頃に実験の最中に亡くなってしまった。

実験中の薬品投与が過剰だったためが原因だったらしく、白衣の男たちは大して問題視もしておらず、そのまま焼却炉へと送られていった。それがペペロにとつて一つの切っ掛けになったのは確かであり、あの人のようになりたくないという気持ちは自然と大人たちへの復讐心を募らせていった。

実行に移したのは彼が五歳の頃であった。

実験部屋へと向かう道中は常に警備員が連れていくのがいつもの事だった。その後ろからついていくのがいつもの事で、ペペロは後ろから警備員の右首筋を思いつきり噛み付いた。

離してなるものかという必死な思いで食らいついていき、警備員の男は苦しみながら彼を振り落とそうとするが、ペペロは殺されまいと必死になっている。ようやく異変に気が付いた他の警備員がやってきた頃にはペペロに噛み付かれていた警備員は既に息を引き取っており、ペペロは容赦なく警備員のホルスターからハンドガンを抜き取り、ほかの警備員の額に容赦なく銃弾を浴びせていく。

気が付けば警備員は全滅しているが、それで気を緩める状況ではないことぐらい五歳のペペロにでも良く分かっていった。

部屋をすぐにも出ていくとそのまま警備員室へと向かう。幸い警備員が持っていた端末から居場所は分かっており、迷うことなく警備員室にたどり着くと警備室のシステムをすべて破壊して、そのままモビルスーツ格納庫に辿り着いたペペロは近くにあったグレイズに乗り込みそのまま出ていこうとしたとき、彼の中に存在した復讐心が再びくすぶり始めた。

モビルスーツに乗って施設の一部目掛けて片手斧を容赦なく振り下ろした。ペペロは内心笑いながら復讐心を満たしていく。しかし、そんな心は簡単に満たされるものではなかった。壊せば壊すほどに復讐心は満たされるどころは増していく一方だった。

ペペロは壊していく過程で一筋の涙を流していた。どうして自分がそんな涙を流しているのかが不思議でならなかったが、その理由を考える以上に破壊衝動が襲い続けていたのだった。

ペペロは故郷としての最低限の心が存在していたのだ。生まれた場所も知らず、育てられたのはこんな最悪の環境と言っても過言ではなかった。それでも、ここはペペロにとっては故郷と言ってもいい場所で、兄同然のように過ごしてきた思い出の地でもある。

涙をどんどん流していき、そして苦しみを覚えながらその全てが復讐心という一つの心へと集まっていた。

気が付けば周囲が焼け野原になっており、全てを壊してもなお収ま

らない破壊衝動にペペロは次の何かを求めた。

しかし、それは同時にペペロに新しい手段を思いつかせる至ってしまった。

——生き残る事。そして、破壊すること。

それだけがペペロを行動させる唯一の行動原理であった。

ペペロはその後地球圏でも有名な研究員になるための努力を始めた。それに際し彼は住民IDを手に入れる必要があったが、その為に彼が取った行動は時分とよく似た人間を見つけ出そうと考えた。そして、髪の色こそ違ったが自分そっくりの人間を見つけ出すと物陰に連れ出して首を絞めて殺した。遺体は見つからないように重りを付けて海へと捨てた。

こうして堂々と行動できるようになったのは彼が十歳になる前の事であった。

まず入るための学力を鍛えなければならなかったが、それこそ一朝一夕で身につくことではなかった。その為にもまずは入学すること出会った。入学さえしてしまえば専用の研究室を持つことが出来る。そんな際、彼は体の不調を訴えるようになった。

入学すること自体はカンニングすることで何とかしのぐことができたが、問題の体の不調は簡単には解決できなかつた。

彼の体の不調の原因はテロメアと呼ばれる細胞が通常の間人以上に少ない事であった。その理由も簡単に分かつた。ペペロは『ある人物』のクローンとして開発をうけたことが理由であった。

ペペロはあの研究所で作られた実験体であったこともこの時なんとなく理解してしまった。どうすればテロメア問題を解決できるかと考えている間に彼はその場しのぎの解決方法を編み出した。それが肉体から新しい肉体への移動だった。自分の肉体に対する執着心を早々に捨て、新しい肉体を同じ方法で作りつつ、テロメア問題を解決できる肉体を作り続けた。

もちろんその間に研究員としての別の研究も続けている間に彼はある薬品開発も同時に進めることになった。それはギャラルホルン

からの要請であった。

きつかけはラスタル・エリオンが調べていたとある場所での出来事だった。そこはイズナリオ・ファリドが調べられたら困る場所だった。それに際しイズナリオが使用した手段がバイオテロでありその手段の提供者こそペペロ。

ペペロは殺人ウイルスを使う方法を思いつきそれを実行に移す機会をずっと探していた時イズナリオを見つけ出した。証拠になる人間たちを殺しつつ周辺を無期限で封鎖する方法を思いつき提供する手段を探し出すことになる。

しかし、ペペロはそこまで考慮することも無く短絡的な手段を思いついた。それこそが最悪のシナリオとも言うべき手段であり、同時にペペロにとつて予想だにしない結末を生み出すことになった。

ペペロはイズナリオに接触することも無く、自らの意思でバイオテロを引き起こし結果から見れば成功した。

しかし、ペペロにとつて想定外の事態が起きたのだとすれば、それはラスタルが予想以上の速度で犯人に目星をつけたことだろう。それによつてペペロの所属していた研究所は封鎖を余儀なくされた。その時動いたのがイズナリオだった。

イズナリオとの水面下との取引を行ったのが所長だったのだが、一連の話を聞いていたペペロは所長をイズナリオに売り飛ばすことにし、結果から見れば作戦は成功しペペロは所長に責任をなすりつける。しかし、ラスタルは一連の行動にセブンスターズがかかわったとわかれば世間体にも傷がつく、ラスタルは研究所を火事を装って全滅させることにした。

ペペロにとつてその行動は予想外だったが、そこにさらに意外な結果を生み出した。

ペペロは撃たれその場で倒れたとき、肉体からまるで魂が抜けるような感覚を覚え、別の肉体へと憑依することに成功する。

この瞬間からペペロは『独自精神生命体』と言うべき存在にまで昇華してしまった。そして、その瞬間からペペロも『呪い』に気が付いてしまった。

『進化』を知る実験の中で生み出されたペペロ、ある意味実験は成功したのかもしれない。しかし、同時にそれは失敗だったといえるだろう。だからこそ、幼い頃に言われた言葉をペペロは屈辱と共に覚えて  
いる。

「結局この実験体も『失敗作』という事か？」

「じゃないのか？別にいいじゃないか、また作ればいいわけだし」

その言葉は例えでも無ければ嘘というわけでも無いという証明にもなった。

おそらく兄同然として育った『あの人』もペペロ同じ『作られたクローン』だという事も、ギャラルホルンの闇の深さにも気が付いた。自分の正体を知り、進化したと確信したときに彼の胸の内に宿ったのは復讐心ではなく向上心だった。

彼は自らをギャラルホルンを作り替える者だと信じ前にすすみ続けることにした。

その為ならどんな人間たちを敵に回しても構わない。

——私は、『アグニカ・カイエル』なのだから。つと……………

「それが『ペペロ』という男の正体か？」

マハラジャはアルベルトにそう尋ねながら手元の書類を机に叩きつけ視線をアルベルトに向けると、生真面目なアルベルトはまっすぐと視線で返す。

「ええ、サブレ達の報告を受けたうえで捜査した結果です。間違いありません。彼はアグニカ・カイエルのクローンでしょう。最も、それを知ったのは彼が研究員時代『ルーク・ファム』と名乗っていた時代でしょうけれど」

ルーク・ファム——この名前こそペペロの最初の名前になった。

「ルークの前の名前は存在しないのか？」

「ないでしょうね。あるとすれば被検体が彼の名前だったのではない  
でしょうか？」

マハラジャは小さく「フム」つと息を吐き出し、もう一度手元の資料へと目を通す。情報局と元ギャラルホルンの情報ベースを探り出

し、一か月かけて追いかけた結果でもある。

実際に研究所にも足を運び何もなくなつた研究所後念入りに搜索した結果でもあつた。

「しかし、まさかアグニカ・アグニカのDNAマップが存在していたとは。全く……これだからセブンスターズは嫌なんだ」

セブンスターズへの不満を口に出し始めるマハラジャに対したため息で返すアルベルト。

「セブンスターズが問題ではないでしょう。そもその問題はギャラルホルンというより社会情勢にあるのだと思いますよ。結局人間一人の考え方そのものに問題があるのか、それとも集団における考え方に問題があるのかで別れるのだと思いますよ」

マハラジャは一瞬だけ思考すると思いついたことを口にした。

「独裁政治と独裁者の違いという話か？分かんなくても……結局のところそれは人間の考え方の限界の問題だろうか？」

「まあ、そうでしょうけれどね」

「どうしようもないだろう。誰しものが仮面を着けて生活している。みんなが一つになるなんて誰も納得しないだろうしな」

憂鬱な気持ちを抱きどうしようもない問題を前に投げ出すしかない人間の限界にあきれ果てる。しかし、それを解決しようとすれば『人間』という存在の枠を完全に破壊しなくてはならなくなる。それは『化け物』に成るといふ事だ。

——『人間』から『化け物』になるか。『人間』として永遠の『闘争』に身をゆだねるか。果たして選択肢とはそれしかないのだろうか？

マハラジャはそれ以外にあると信じサブレに全てを任せることにした。彼だけがマハラジャが見える戦いなどを移す盤面の中で予想もつかない行動をとる。一見すると計画に入れずらいかもしれないが、しかし、そのデメリットを覆すほどのメリットをサブレは持っていた。

「あの時、俺はサブレに何かを感じ取つた。『未来』かそれとも『可能性』なのか。分からないが、確かに感じ取つた強い何かがあつたのは



事実だ」

小さい頃、ドルトで仕事をしに来ていたマハラジャの腰辺りに手を回してまるで助けを求めるような目でこちらを見ていたのは間違いない少年のサブレ・グリフォンだった。小さい少年なのに力強い目でこちらを見ていたのは印象深い。

「助けてください」とも「手を貸してください」とすら言いはず力強い瞳でこちらを見るだけ。

その後マハラジャはサブレの家庭事情を自ら調べ、自分とサブレ達との間にある血縁関係に気が付き、息子として引き取る覚悟を決めた。

（あの日から何が変わったのだろうか？あいつを引き取ったあの日から何かが変わったのだろうか？きつと変わったのだ。しかし、同時にあの怒りを抱えるピエロを止める役目はサブレではない。サブレにはサブレの役目が存在しているはずだ。だとしたら、ペペロを止める役目は……………）

そこまで思考したところでマハラジャは盤面を動かし始める。盤面の上にある駒をあれこれと動かし、ある意味可能性の高い未来と選択するだろう可能性を導き出す。そのうえで全く予想もつかない動きをするだろう駒を配置していく。

（おそらくそろそろマクマードが動くだろう。目的は『アレ』の破壊だろう。サブレもあちらに行くだろうし、主力艦隊をサブレ達の援護と木星帝国への侵攻部隊に回すとして、問題はペペロだ。まあ、手は打った。こちらはこちらの問題だ。策は全て打った。あとは敵がどう引つかかるかだ）

最後の戦いは静かに始まろうとしていた。

## 悪は背負う

酷い母親の元で育ったククナは父親を知らなかった。父親の事を知ったのは母親が亡くなってからの事である。

母親は夜の仕事をこなしており、木星圏ではそういう風俗業は珍しくなくむしろメインになりつつある仕事であった。

だからだろうククナの母親はそんな風俗業でも有名な方であり、そんな仕事の最中に作ったのがククナであった。

夜遅くに出て行って明け方に帰ってくる。仕事先で問題が起きればそのストレスのはけさは娘のククナを殴る蹴るの暴行するのが母親の日課だった。そんな日常に異変が起きたのだとすればそれはククナの母親が亡くなったことだろう。

病死だった。

風俗業の汚れた仕事とコロニー内の汚れた空気での環境が母親の命を奪った。一人になってしまったククナを救い上げ助けてくれたのがクレアの母親である『フレア・フォン・フレイア』であった。

「大丈夫？あなたは一人？」

ボロボロの服、肌は乾燥しきっていて荒れている髪の毛。そんなククナからすれば目の前に居る綺麗な女性は考えられないような存在だった。

フレアの手にはひかれて連れていかれたのはコロニーの中でも有名なホテルの一室だった。ホテルの窓からはコロニーの街並みが一望でき、お風呂は彼女では考えた事の無い大きさに様々な機能が付いていた。

フレアはまず彼女をお風呂に入れてやり、その後に事情を聴くことにした。

ククナは混乱しながら一生懸命説明し、フレアは決断していい加減には聞くことなく彼女の言葉に丁寧に傾聴してた。

泣きつかれたククナはそのままフカフカのベットの所で眠りについた。

フレアがククナと初めて出会った時、フレアは後の皇帝になる人物

から求婚を求められており、実際にクレアを身ごもっていた。その際に聞いたことがあった。昔、愛人との間に子供をもうけたことがあったが、目の前で眠っているククナであることはフレアには確信に似たものを感じていた。

実際眠っているククナの髪の毛を一本だけ拝借することは簡単だった。

「ごめんね」

そう謝罪の言葉をこつそりと告げ、DNAをその場で調べるのに時間がかからなかった。

結果は予想通りでククナはフレアは彼の娘であった。

この時のフレアには一つの確信と一つの迷いがあった。

「この子を放り出すことはできるけれどそれをしたくない。でも、きつと連れて行ってもあの人はこの子を顧みないだろう。今更自分の子供なんて言い方をしても」

故の迷いだった。

この子の幸せを考えたとき、いったいどちらの未来が彼女にとっての良き未来になるだろうか？それが彼女の迷いだった。

しかし、それを言い出したらそもそも自分の子の未来だってそうなのだと気が付く。

「あの人には危うさがある。いずれ世界を滅ぼすような危うさ。いえ、滅ぼすのではなく貶めるような危うさが……ある。出来る事ならこの子達には幸せな世界で暮らしてほしい」

そう思う一方でどうすればいいのかが分からないというのが彼女の本音でもあった。どの道がこの子たちにとっての幸せの道なのかが分からない。

しかし、実際のところで彼女を実の父親に合わせてあげる事しか今の自分にはできないのだとわかっていた。分かっていたからこそ迷ってしまう。

今自分が選んだ選択肢が本当に正しい選択肢だったのだろうか？と。

ククナが翌日に尋ねた場所は今まで見たことも無いような場所

あつた。通常のコロニーとは多少違い長さが四分の一程度に短い。しかし、そんな長さは必要ないのかもしれない。何せこのコロニーにある建物は一つしかなくそれ以外はただ広い庭が広がっており、芝生の手入れ具合を見ると定期的にされているのがよく分かる。

コロニーの中に入り案内された道を進んで唯一の建物の中に入ると大きなロビーが広がっており、一階だけでも六個のドアが付いている。正面には二階に上がるための階段を用意されており、階段を昇って二階まで進んで行くとそこからさらに登って三階まで進む。三階では一本道になっており、左右共に二つの部屋が用意されており、さらに奥には四階への階段が用意されており、そこでフレアとは別れてしまう。

不安な心を押し殺し、四階の階段を昇っていくと一番広い部屋へと出た。

いくつかの間隔で真っ白な柱があり、周囲の壁はほぼすべてガラス張りになっている。人口の光がガラスの奥から部屋全体をまぶしく差し込み、ククナは一瞬だけ目を細めてしまった。

階段とは反対側に横長の机が設置されており、簡素な造りをしているようで所々に金で装飾されているのがよく分かる。そして、その机で一人書類作業をしていて部屋に入ってきたククナのことなど知ったことではない、という風に一瞬だけ見てそのまま書類仕事へと戻っていく。

ククナはこの人が好きにはなれなかった。

実の娘かもしれない人をまるで気にも留めない姿、ぱつと見の年齢はおそらく4、50歳だろうという事はよく分かる。そんな高齢の男が自分の父親なのかもしれないと思うと正直嫌気がさしてくるのは事実で、しかし、ここで逆らえばまた当てのない生活をする羽目になるだろうという事はよく分かる。

お行儀よく首を垂れ両手でスカートの端を持ち上げる。しかし、そんな行動すら目には映らなかった。

「毎日勉強をきなさい。十六で研究所を継いでもらう」

それしか言わずまるであととは自由にしなと言わんばかりに興味を

途端になくし、大柄の男を呼び出した。

「テラ。この子を部屋まで連れていけ。そして、お前にはこの子の教育係を命ずる」

テラは頭を下げてそのままククナと共に四階から出ていった。

ククナは大柄の男の後ろについていくな男をじつと見ていた。大きな背を見ると何か格闘技でもしているのではないかと思うほどに肩幅も大きい。スーツ越しにでも分かるほどに盛り上がった筋肉。背丈は自分の倍以上はあろうかというほどの大きさがある。

「すまないな。あの人はああいう性格なものでな。これからはこの部屋で過ごしてもらう」

そう言っただけでテラは三階にある右側の真ん中の部屋へと案内する。そのまま部屋の中に入るとその大きな部屋だけでかつての彼女の家以上あるのではないかと思うほどであった。

そのままテラは部屋の出入り口で反対側の部屋を指さす。

「こちらはフレア様の部屋になっております。フレア様の右側の部屋は父君の部屋になっております。」

おそらく父親の部屋へと入ることは絶対でないだろう。それに引き換えフレアの部屋には今すぐにも行きたいという想いをかなえることは無い。

テラはどこから出したのか分からないがタブレットを机の上に置く、タブレットの中にはこれからククナがするのであろう勉強の数々がアプリとして入っており、今まで見た事の無い内容にククナは目を点にしてしまう。

「毎日このタブレットで勉強してもらいます。毎日……これだけの内容をしてもらいます。基本は私が教えながらの内容ですので問題なく」

内容自体に身に覚えが無いククナにはどうしたらいいのかが分からない。実際勉強をしてもまるで分かったことは無かった。

勉強を繰り返していると部屋の中に一人の女性が入ってきた。

「テラ。あなたの教え方がいけないのよ」

フレアはタブレットをのぞき込んでどこを勉強をしているのかと

ひとしきり確認していると数分後、フレアは少しだけ考えて解き方を教えてあげた。

ひとつひとつ丁寧に教えているとククナはすぐに理解できるようになり、みるみる内に勉強は進んでいった。

フレアの教え方はとても良くククナはみるみる覚えていく。ククナは勉強を好きになっていく。

「ククナ。勉強は面白い?」

「はい!」

力強い答えにフレアは微笑みながら答え楽しい勉強は一生続くと思っていた。しかし、フレアは四か月が経った頃には出産を目前に控えていた。

出産から五か月が経った頃からククナは毎日フレアに会いに行っていた。フレアのベットの隣には赤子が眠っておりククナは赤子の頬を指先つつんつつく、赤子は少しだけすぐったそうにしているとフレアは嬉しそうに微笑んでいる。

「ククナはクレアが大好き?」

「うん!」

ククナの笑顔を見ているとフレアまで嬉しそうに微笑んでいる。テラが部屋の中に入ってくるとククナを別の部屋に移動していく。ククナはその理由をすぐに理解した。

部屋の中に父親が入ってくるとクレアには目もむけずフレアに語り掛けながら近づいていく。

ククナは父親が嫌いだった。自分を見てはくれない、見るのは愛しているフレアのみ。

ククナは表情を暗くさせている。

(私はあの人が……嫌いだ)

一年後にフレアは出産後の体力低下が原因で命を落とすことになった。元々体力が高い人ではなかったのが原因の一つだったのだろう。

ククナはフレアの跡を継ぐ形で研究部署を継ぐことになった。ククナは悲しみに打ちひしがれながらある研究をしている最中にある

事に気が付いた。

「この研究何の役に立つの？遺伝子開発？このペペロという男は何のために呼んだの？薬品関連とか……何をしているの？」

ククナは疑問を払しょくする為にテラの仕事部屋へと急いだ。ある書類を捜し出す計画を立てることになった。

テラの仕事部屋へは一本道になっており警備要員が四人で警備している。ここを見られないように行くのは絶対に無理だ。だからこそクレアはあえて堂々と道を進んで行くと決めた。

警備員の男性はお辞儀をしながら警備へと戻っていく。ドアが無い廊下をひたすら進んで行くと一番端にその部屋は存在する。金属製のスライド式のドアの前に立つと自動でドアがゆっくりと開いていく。

ククナは特に緊張を表に見せないようにと真剣な表情で部屋へと入っていくと室内には誰もおらずククナはふと室内を軽く見回してからパソコンのデータを物色し始める。様々な研究データが入っていたが、その中で人一倍目を引いた項目が存在した。

「何……『人の魂の研究』？……本計画のかなめはフレア様をよみがえらせることであり、その為の人柱はクレア様を使用するものとする………何よこれ……お母様をよみがえらせる？そんなことの為に……妹を利用しようというの？」

フレアにもう一度会えるのならそれは確かにうれしい、しかし、その為に妹を犠牲にしたいわけでは無い。フレアが亡くなって以降父親はクレアに会わせてくれなくなつた。それでも、妹を大事にしていく気持ちは変わらない。あの人の言いなりにするつもりは無い。

それを決めたのはテイワズが行方をくまらず少し前の事だった。妹を逃がす算段を発てたわけじゃなく、必然とそのチャンスはやってきた。

アインと行動を共にしていると必然的にある事に気が付いてしまった。

アカシックレコード。覚醒者。選別者。それらを利用した計画の内容をアインから聞いたときからそれがろくな結果を生まないだら

うことは気が付いていた。

同時期、クレアが家から出ていきゲイナー一派の協力を得る形で逃げていった。ククナにはクレアが逃げていくことが目に見えて分かっていた。実際三日月が連れていくところを見ている。そんな中、ククナは微笑んで見送ることになった。

「元気でねクレア。あなたは私の事を嫌っているだろうけれど。私はあなたの事を愛しているわ」

窓の外からクレアがシャトルに乗っていく姿を見送りながらククナは自らの計画書に目を通す。それはアインを騙す計画に等しい。それでもかまわない。この世界が守る価値が無い者なら私は完全に破壊してやる。

それがククナの覚悟であった。

クレアの為に世界すら敵に回して見せる。クレアを守れない世界なんて存在する意味すらない。それがクレアを姉妹として愛し、アインを異性として愛したククナの覚悟でもある。今更引き返すことすら許されない。

(義母さん、どうか罪深い義娘を許してください)

祈る相手は既にここに居ない。

今からすべてが敵で誰も味方がいない。そんな中、アインの話聞いたとき背筋が凍る思いをすることになる。地球に居るクレアがアカシックレコードの計画の中心人物かもしれない人物と行動をしているという話であった。

居ても立っても居られない思いにかられ焦ってモビルアーマーを持ち出してしまったが、結果から見ればクレアを預かっている彼を知っているいい機会でもあった。

実際に地球に降りて彼を目の前で確認することが出来た。

危うさこそまだあったが、もしかしたら彼ならばという想いもあった。

ゲイナーを探すという嘘をはらんですらここまで来たかがある。

(彼ならもしかしたらアカシックレコードの計画すら超える何かを見付けられるかもしれない。それが二千万年に及んでの『何か』なのか



もしれない。彼ならば……)

ククナは内心不安こそあれど、それ以上の安心感が生まれた。

(これで後悔は無くなった……私は……悪は……この身で背負う)

ククナは突き進む。

闇を抱えて、悪は背負う為にあるのだから。

彼と出会ったみんなが思う事を彼女も思う。

(彼なら……彼ならきつと)

俺達はあの日から変わらない

俺達はきつとあの日から変わっていない。

初めて俺達が出会ったのはEDMの教習学校初日の事である。初日と言っても入学式や堅苦しい説明があるわけでは無い。ただ縦に広い視聴覚室という名前の部屋に四月に入学した全生徒が集められている。

とは言っても俺が入学したときの全生徒数は百人程度しかおらず、生徒はまばらに散っている。当時の俺は兄である『ビスケット・グリフォン』と別れた直後というだけあって誰かと一緒にいる事が無かった。

この時はメイデンがいるとは思わなかったし、メアリーやイオリとも知り合っていなかった。しかし、俺が初日から知り合うことになったのが、『テム・フォース』であった。

先生が部屋に入ってくる三十分ほど前になると本年度の生徒の半分が集まっていた。

その時、正面のドアを勢いよく開ける音と一緒にテムの明るくどこまでも響き渡る音が聞えてきた。

「グットモーニング！エブリワン！！ハウワーユー」

聞きかじったよな言葉が聞こえてくると俺はふとそちらの方を見してしまう。正面のドアには明るい茶髪の若者が立っていた。

一瞬だけそちらを見て確認すると俺は窓の外へと視線を移す。すると声は少しづつ近づいてくるのが分かった。

「ハロー！ハロー！ボンジョルノ！！」

最後のはイタリア語だろ。というツツコミが脳裏をよぎり顔を一瞬だけ正面を向こうとすると俺の目の前、鼻先にテムはいた。

いたというより今にもキスしそうな距離を維持しつつっこり笑っていて俺は驚きのあまり後ろにこけそうになる。

「何なんだお前はー」

苛立った気持ちをそのまま正面に居るテムにぶつけるが、テムはまるで気にもしないようにニコニコしているだけだ。

「やっと思ってくれた！俺の勝ち！」

「何の勝負をしているんだ！だいたい初日から大暴れしているのはお前だけだぞー！」

「ありがとう！」

「言葉のキャッチボールを受け取れよ！お前の行動の問題点を指摘しているところだぞー！なぜお礼を言う?!」

「ありがとう!!」

「お前は何がしたいんだ!!」

周囲の目はあつという間に俺とテムの方へと向きガヤガヤとぎわめき始める。すると、どうやら新入生はあつという間に集まっていたらしく、教師が部屋に入るや否や大きな怒鳴り声で「静まらんか!!」つと叫んできた。

周囲は委縮する様に静かになっていき、テムだけが元気よく「はい!!」つと言いながら俺の隣に座る。

俺はテムから距離を取ろうとするが、テムはくつつき虫のように近づいてくる。イライラする時間を過ごしていくと最初の挨拶が終わったのちそれぞれのカテゴリーに分けられる。

どうやら俺とテムは同じ場所で学んでいるらしく、全く同じモバイルスーツの訓練施設へと分けられた。シュミレーションマシンに乗り込んで初期型のシュミレーションをクリアすることが最初の課題になった。

シュミレーションの内容自体は簡単な一本道に配置されたモバイルスーツを撃破もしくは撃退させながら一番奥へと進んで行くことだ。

最速でクリアしたのが俺で数コンマ遅れてクリアしたのがテムだった。

それからすべてのシュミレーションが終わるまでの間テムは興味津々の様子で俺の方をじつと見ており、俺はそんなテムから視線を全力で逸らす。

全てを終えた後、教師は「内容をフィードバックしてくるまで大人しく待って居ろ」と言って室内から出ていった。すると、テムは俺の服の裾をつかむと勢いよく立ち上がりシュミレーションマシンの前

まで連れていく。

「二戦だけ!!」

要するに戦えという意味だと解釈するのに時間がかかってしまう。笑いを偽ることすらできず、露骨に嫌そうな表情を作るがテムの表情が「あきらめない」と告げている気がした。

「二戦だけだぞ」

そう言っつてシュミレーションマシンに入り込んで起動画面に映る。隣のシュミレーションマシンの番号を記入しつなげるとマシンのほうで対戦モードへと自動で切り替える。

周辺は荒れた荒野で所々が高くなっている。テムのモバイルスーツは見えていない。

開始の合図と共に俺はモバイルスーツをまっすぐ荒野の中を移動していく、移動して数分で正面からエイハブリアクターの固有周波数が見えてくるとやや西の方から近づいてくるのが分かる。

「真後ろじゃないだけましか……」

俺はモバイルスーツの進路をやや西の方へと傾けるが、同時に敵もこちらの動きが読めたのか鋭く俺から見て東の方へと移動し始める。俺は西に移動しかけていた機体を強引に東の方へと変える。

スラスタを吹かせようとペダルを踏んだところでテムの機体が物陰から現れた。テムのグレイズは既にライフルを構えており、照準を俺のグレイズの右膝目掛けて銃口が火を噴く。今更方向転換が出来るわけでは無い、しかし、この状況を回避する手段は一つしかない。

本来正面から銃口を向けられた時の対処法は横に飛んで回避するか受け身をとるかとの二つであるが、正面にスラスタをふかしている状態ではどちらも使用できない。

俺が選んだ選択肢はまっすぐ前に突き進むことだった。

敵がコックピットを狙ったのでなければ正面に走れば照準を狂わせられる可能性がある上、たとえ当たっても最悪タックルを決めることが出来ればそのまま決着をつけることが出来る。

しかし、実際に正面に突き進むことは勇気のいる行為で、正面から攻撃を受けようとしている際に人間はどうしても回避しようとする

うごかしてしまう。それに逆らうように俺は正面に機体を走らせた。テムの銃口は右膝に当たらずそのまま俺は斧を取り出して右肩に叩き込もうとするも、テムは銃撃が無理だと瞬間に判断し素早く斧に切り替えて叩きつけようとする。斧と斧がぶつかり合うとシュミレーションマシンとは思えないほどのリアルな衝突音が周囲に響いた。

ぶつかった斧はお互いに反発し合い後ろにのけぞってしまふ。俺はグレイズの足に力を籠めて踏ん張る。テムも同じように踏ん張っている。テムは先に仕掛けてきた。

テムは俺のグレイズを横なぎに斬りつけてくるが、俺はスライディングの要領で攻撃の下へと潜り込みそのまま上へと殴りつけるかのように左の拳を叩き込む。テムのグレイズは一瞬だけ空中に浮くと踏ん張れず後ろに倒れてしまふ。

俺はそのまま斧を振り下ろすがテムはギリギリのところまで左腕を犠牲にする形で斧を受け止める。斧は左腕に突き刺さる形挟まってしまい、テムはそのまま右腕で構えている斧を横なぎの要領で斬りつけようとする。このままでは俺は負けてしまふだろう。

逃げる何て選択肢はない。一度逃げれば俺の武器はライフルしかなくなる。しかし、ライフルで勝てるとも思えない。そんな中俺の視界には左腕に突き刺さった斧が見えた。

イチかバチかの賭けではあるが……。

俺はグレイズの両腕を突き刺さった斧へと向け、斧はそのままの要領で左腕を切断しそのままコックピットへと突き刺さった。

その瞬間正面の画面に『WIN』という文字と共に少しづつ暗くなっていく。シュミレーションマシンから出ていくと正面には教師が恐ろしく怖い表情をしながら俺とテムを見ており、俺とテムは満面の笑みと共にその場から離脱しようとした。しかし、ガツチリと俺とテムの肩に太くごっつい手のひらがまるで万力のごとく締め付けてくる。

「初日早々に問題を起こすとはいい度胸だな」

教師の怒りの一言は俺に恐怖を刻みつけるには十分だったのだら

う。しかし、テムはそれでもなお楽しそうにしながら教師の方へと向いた。

「先生あそこで美女が先生を見えていますよ」

お前は何をバカなことと思いなながらそんなことに先生が引つかかるとは思えず、いるはずが無いだろうと思っていると、実際にチャイナ服のような露出度の高い薄着を着た女性が目の前のゴリラのような教師を誘惑していた。

目くばせを飛ばし、明らかに露出度を上げていきながらどこかへと姿を消そうとしており、教師も実際にそちらを見ながら啞然としている。そして、その隙に俺とテムは姿を消した。

あれから一週間が経つと周囲は一つのグループを作るものであふれるようになっていた。

肝心の俺はいつの間にかテムと一緒に行動するようになっており、俺は鬱陶しいと思いつつもテムと行動していた。

テムは自分のペースでしか話をせず、俺は適当に聞き流しているだけだった。そんな中俺はこのころにはメイデンと再会し彼とも一緒に行動することになった。

そんな中テム話を聞き流しながら俺は二人と一緒に廊下を歩いているときだった。俺は手元の教科書を見ていて正面を見ておらず、同時に空いても話に夢中になっていたのだろう。俺は曲がり角でメアリーとぶつかってしまった。その際にメアリーが持っていた数種類のパンと牛乳が地面に落ちてしまい周囲にぶちまけてしまう。

俺は倒れてしまったメアリーに手を伸ばそうと腕を動かそうとしたところでメアリーからの罵倒の言葉が襲い掛かった。

「ちよつとーちゃんと前を見なさいよね!!」

その言葉に俺の反骨精神を刺激してしまい、とっさに怒鳴り返してしまう。

「そつちころ話をしていて見ていなかったんじゃないのか!」

「何よ!?私が悪いつていうの!?こういうことは男子から謝ってくるものじゃない!」

「男子だから先に謝ると思ったら大間違いだ!大体お前を女子として

扱ったら他の女子がかわいそうだしな！」

「何ですって！」

二人で睨み合い怒鳴り散らし合う中、後ろから見知って声が聞えてきた。

「何をしているか!!その五人！」

メイデンは小声で「五人？」と数え周囲を確認する。喧嘩をしている俺とメアリー、楽しんでいるテムとメアリーの後ろで慌てているイオリがいる。最後の一人が自分だと気が付いた途端メイデンは駆け出していき、俺とテムも同時に走り出しイオリを引き連れる形で逃げ出した。

今思えばこの時から俺達は一緒に行動するようになった。

翌年になると俺とテムは上層部からの指示で実践に出るようになっていたらしく名前は分からないが凄腕のパイロットがいつも一緒に行動しているらしいと。

それを知ったのはサラ達と知り合ってからだった。

サラとレオとマークは別々にだが俺に接触してきて、ほぼ同じような事を訪ねてきた。この時の俺はテムとは別にメイデンと行動しているため、彼らはメイデンが噂の強い人物なのだと思解していたらしく、俺はテムの事を知られることを嫌がったため彼らの誤解を解こうとは思わなかった。

彼ら三人と会った後、俺はメイデンと別行動をしていると後ろから見知った声が聞えてきた。

「ハロー！ボンジヨルノ！グーテンターク！」

「いろいろな言葉混じっているぞ」

「サンキュー！」

「会話をするつもりがないのか？」

「どう思う？どう思う？どう思っちゃう!？」

イライラしながら話をしていくと俺は引き離そうとその場から駆け出していく。テムは後ろからぴったしくっついてくると、いつの間にか競争が変わっていき、俺達は校舎内をマラソンしていた。

「ついてくんな変態！」

「変体？何を変体」

「変態！分かりづらい言葉で遊ぶんじゃない！」

「編隊？部隊を編隊するの？ついに一緒に行動してくれると!？」

「お前はもう死んでしまえ！」

「絶対嫌だ！死ぬときは一緒にいい！」

「気持ち悪いことを言うんじゃない！お前と一緒に死ぬなんて死んでも御免だ！」

「やったー！」

「喜ぶな！」

そのまま学校から出ていくと俺達は裏山の登って逃げていく。しかし、結局のところで決着がつくことも無く、今回も引き分けという結果だった。

この勝負に限ったことではなく、最近ではモビルスーツの対戦から実際の競争に至るまで俺とテムが勝負して決着が付いたことは無い。

「お前マジで死ぬ」

「一緒に？」

「一人で」

「自殺すんの？」

「言葉のキャッチボールってこういう事じゃないぞ！お前はこっちがキャッチボールを望んだ時にノックを始めて！こっちがノックを望んだ時に限ってキャッチボールを始めるんだ!？」

「俺ですから！」

「納得！すごく納得する話！でも、こっちはごめんだ！」

「嬉しそう！」

「嫌がっているんだって気が付いてくれよ！」

もはや懇願しなければ届かないのではないっと思えるほどであったが、こいつと行動するようになって既に一年以上。ずっとこんなやり取りを繰り返している。

この直後に俺はテムに「今後俺が面倒を見ている奴に勝手に話しかけるな」と忠告を聞き入れたことだけがテムが守った約束だった。



しかし、のちにこの約束は破かれてしまうことになる。

そうして過ぎていくといつだっただろうか。テムは俺の確信をつく一言を放っていった。

オルガが亡くなって兄さんやシノのフォローをしている間に俺は忙しくしていた。いや、実際は分かっていたのだ。俺は忙しくすることで無理矢理辛さを忘れようとしていただけなんだと。

しかし、テムはその辺を見抜き俺の後ろから襲い掛かってくると俺を拉致していた。

アルンにできたばかりのレストランで昼食をとることでテムは俺に対して手を打ってきて、俺は仕方なしにそれを承諾したときだろう。なんでこんなことをするのか気になって尋ねたときの返答はあっさりしたものだった。

「だってサブレは寂しがり屋だもんね。きつと誰かを守れないと知ったら落ち込むんじゃないかって思って」

笑顔で返された言葉に俺は絶句したまま言い返せずにいた。

小さな声で「そんな……ことはないさ」つと強がることしかできなかった。

「二人でいるくせに、ほんととは一人が嫌なんだよね」

俺の心をえぐるような言葉の刃を黙って耐えるしかなかった。

それがもう何年前の事だろうかつとブリッジへの足取りの中でそう思ってしまった。しかし、どうして俺は右に明楽を左にアトラという女性と歩いており、同じようにブリッジへと目指している。

目的地へと向かう航路の中、地球からの定期更新に是非アトラも誘おうと言い出したのは誰だろうか？

実際アトラは最初こそ邪魔なのではないかつと遠慮しようとしていたが、最終的には参加することを快諾した。

ブリッジに入るとクリアをはじめ基本的なメンバーがブリッジに揃っており、ブリッジが狭く感じてしまう。俺はメアリーの隣で時間を確認していると正面の画面が起動しどこかへとル投げていることが明らかだった。しかし、画面に映った人物はハイテンションで語り

掛けてきた。

「ボンジョルノ！グーテンターク！ドブリジェン！」

見知ったその声はテムの者であったが、俺は勢いよくメアリーが操作している画面を叩きつけることで通信を切断した。メアリーは驚きと共に怒りをにじませた表情で俺に怒鳴りつけた。

「ちよつと！壊れたらどうするつもりなのよ！」

兄さんが「そつちに怒るの？」っと驚きと共に俺とメアリーは喧嘩を始めた。周囲は突然の事で驚いていると再び通信画面が開いてテムが能天気な表情をさらす。

「ボンジョルノ！グーテンターク！ドブリジェン！」

「どれか一つに絞ったらどうなんだ！」

「ちよつと人の話を聞いてるわけ!？」

怒涛の勢いと共に変わりゆく状況は周囲の人間が唾然とさせてしまふ。

「ねえねえ！聞いて聞いて！さつきロビーのおばさんが……！」

「お前はこつちの説教を聞く気が無いのか!？」

「ない！」

「断言するな！聞き流す努力ぐらいしたらどうなんだ！」

「絶対嫌！」

「ぶつ殺す！」

俺は画面目掛けて殴りかかろうとしたときメアリーとメイデンが急いで止めに入る。前と後ろから羽交い絞めになると俺は暴れながら怒鳴り散らす。

「離せ！こいつは一回殺さないと気が済まない!!」

イオリがそんな状況でクスクスと笑い始めた。どうやら一連のやり取りが面白かったらしく久しぶりにイオリの笑う顔を俺達は見ることになった。

ほかにも笑いそうになっていたり、周囲の空気が明らか変わっていた。火星での長い戦いなどで雰囲気柔らかくなってきているのに気が付いた。

テムなりの励まし方なのだとわかってはいても咄嗟に反応してし

まう。

ようやく落ち着いてから俺は改めてテムの方を見るとテムは笑っているだけ。

きつと「勝てよ」も「負けるなよ」つという言葉も、「死ぬなよ」と「生きろよ」という言葉すら不要なのだろう。

「またな。親友」

俺はその言葉を最後に通信を切り気持ちを切り替えて全員に指示を出す。

「後三十分で目標ポイントに到着する！最後の準備を整えるぞ」

俺の言葉と共に全員が声を上げてブリッジから出ていく。最終決戦が少しづつではあるが近づきつつあった。

《断章Ⅱ終わり 木星編開始》

## 木星編

### アカシツクレコードI 《テイワズの意地》

1

「アカシツク・レコードの居場所を教えてほしいのだけけれど」

そうやってククナはアジーの乗るハンマーヘッドへと圧力をかけていた。

木星複合企業である『テイワズ』に所属していたアジー・グルミンはこんなことが起きるのではないかと想像していた。

二代目ハンマーヘッドは現在、アステロイドベルトのポイントEで『ある場所』への案内する役目を受けた。その案内するべき相手ではなく、敵対するべき相手である木星帝国所属のアイン・ダルトンであった。十機のモビルスーツに囲まれ、そのうちの三機はガンダム・フレームであった。

赤いドレスのような射撃兵器を身に纏い、両腕にビームランスを持ち、背中からシールドを装備している。女王と騎士を足して二で割ればこんな形になるだろうという姿をしている。アジーはこれが報告にあったレッドクイーンであることは間違いない。アジーが知らない装備を搭載しているところを見れば、ガンダム・レッドクイーンの改修機であることは間違いない。

もう一つ青いガンダム・フレームもアジーが報告から聞いていた機体情報と少しだけ違っていた。

細いシルエツトに両手には両刃剣をイメージして造られた剣、背中には移動速度や俊敏性を高めるための翼が付いており、それ以外の武器は見られない。シンプルである分、純粹な強さがにじみ出る機体であると判断できる。ガンダム・ブルーレイの改修機であることは確認できる。

しかし、肝心のエンペラーは特に変化があるようには見えない。それでも脅威であることにはまるで変わりない。

アジー達の目の前にある脅威を前にして、戦うなんて選択肢は愚か

でしかないと分かっているとしても、それでもここで逃げたり頭を下げて軍門に下って情報を提供するなんて言うことはティワズの意地に関わると本能が悟っている。

逃げるなんて選択肢はありえない。しかし、戦って勝てるとも思えない。それでも、戦うしかない。

「断る。ここで引いたらティワズの名折れだよ。何より姐さんや名瀬やラフタ達に申し訳断たないからね。あんた達に情報を渡すぐらいなら最後まで戦うさ」

彼女たちはアジールの言葉を受け一段と気を引き締める。

ククナは微笑みながらアインにまっすぐに指示を出す。

「アイン。母艦は落とすしちや駄目よ。それ以外は殲滅しなさい」

ハンマーヘッド周辺に展開していた旧ティワズモビルスーツである獅電が前へと出居ていく。

この獅電はパーティクルドライブを強引に搭載したせいで技術こそ追いつきつつあるものの、性能ではまるで追いつかない。あくまでも付け焼刃に過ぎない。

モビルスーツの数も、性能も、実力も追いつかない状態では勝ち目など無い。しかし、ガンダムフレームに一矢報いたいという気持ちが大きい。辟邪が格納庫にあるにはあるがアジールは既にパイロットをやめて八年である。

「エコー。私が行くからここは任せたよ」

「でも、アジール」

「最悪の場合があんた達だけでも逃げな」

そう言つてアジールはブリッジから出ていこうとする。しかし、エコー達は真剣な面持ちでアジールの方をじっと見つめる。

「逃げるってどこに？逃げ場なんてないでしょ？アジールが戦う事を決めたんならあたしたちも戦うだけだよ」

アジールは啞然とする気持ちを抱きながら自分がバカなことを言つたとすぐに反省する。

「ここは任せるよ」

そう言つて部屋から出ていった。

「勝てるとは思わないよ」

そう言つてハンマーヘッドから出ていくと既に開戦から五分でモビルスーツ隊の半数が落ちており、アジールは舌打ちしたくなる気持ちを押しさえながら辟邪を小惑星の後ろに隠れている霊電の背中目掛けてビームサーベルを突き刺した。

せめてという想いでエンペラーへと突き進む。エンペラーは走ってくる辟邪など視界にも入れようとしない。

「バカにしてー」

そう言つてビームサーベルを振り上げるが、辟邪とエンペラーの間にレッドクイーンが入ってきた。左のランスで攻撃を受け止めつつ、右のランスでコックピット目掛けて突き刺そうとするが、それをアイロンが制止する。

「さてアルミリア。そいつ……アジール・グルミンだな。彼女はアカシック・レコードの居場所を知っている可能性がある。生かしておけ」

アルミリアは言われた通りとどめの一撃をやめ、右腕を狙つて攻撃を仕掛ける。アジールも負けじと攻撃を捌こうとビームサーベルをふるうが、ビームサーベルとランスの総重量ではランスの方が勝っている。

ランスとの衝突で大きく弾かれてしまい、ランスからの攻撃を回避しようとして大きく飛ぶが、避けきれない攻撃が右足に直撃する。

「くっー」

「落とすたくないんだから……大人しくしなさい」

右足を落とされたせいでバランスを失った辟邪は次の攻撃を回避しきれずに左腕を吹き飛ばされてしまう。

「逃げるなら……いいよ。このまま四肢を全部奪つてあげる」

両手にそれぞれ握つたランスの連続突きで左足を奪われ、胸の装甲の一部がはげ落ちる。次々と装甲が剥げていき、ついには右腕が吹き飛ばされてしまい、最後にはレッドクイーンに捕縛されてしまう。

「さて……アジール・グルミンを捕縛したし、一旦引くしかないだろう。船も全部潰せ」

エンペラーが踵を返し、冷酷な指示を飛ばす。

「ジャック！全員殺せ。アルミリア。そのまま彼女に仲間たちの最後ぐらい見せてあげると言い」

モビルスーツが一機ずつ落ちていき、最後の機がアジーに手を伸ばしてまるで助けを求めようなしぐさを見せる。ブルーレイが残忍な一面を見せる。剣でモビルスーツを一刀両断にしてしまう。アジーはコックピットの中で片手を伸ばし獅電の手に答えようとする。

アジーは見ていられなくなり目をつぶってしまう。そして、ブルーレイはその後方でナパーム弾で応戦しているハンマーヘッドへと向けて走り出していく。

「も、もう……」

心が折れそうだった。

それ以上攻撃を仕掛けられたらアジーには耐えられる自信がなかった。ハンマーヘッドの右側面の装甲が切り裂かれたことで内部がむき出しになってしまう。

「もう……やめ……て（ごめん。名瀬。姐さん。ラフタ）」

一筋の涙が流れたとき、ブルーレイが剣をブリッジ目掛けて振り上げた時間は全く一緒であった。

（役目も果たせず。報いることすらできない）

心の底からの絶望が襲う中、ブルーレイの前をビームの熱線が襲い掛かってくる。ブルーレイは驚きと共に後ろに飛び退り、すぐに攻撃が来た右側面を確認する。

そこには大きなブースターを付けたシムカスの姿があった。

「キタキタキター！」

ジャックは内心喜びを隠しきれず、むき出しの敵意をシムカスに向けた。シムカスはブースターを外してそのまま二次加速を掛けながらブルーレイへと向けて突き進む。

シムカスはビームアックスを二本に分けて持ちつつ、サブアームではブームライフルを二丁構えている。

シムカスが二丁のライフルでブルーレイをハンマーヘッドから引き離す。

「早いじゃん！いいね！いいね！殺し合おうか」

「いいよ。ただし、ここじゃない場所だね」

二本の斧でブルーレイへ攻撃を仕掛け、ライフルで退路を絞る。ブルーレイは左側によけながら細かく回避し続け着実に近づいていく。明楽は舌打ちをしながら近づいてくるブルーレイに向けて斧を振り下ろす。しかし、ブルーレイは攻撃を紙一重で回避してカウンターの一撃を加えようとするが、五本目のアームが伸びてビームサーベルを掴み攻撃を受け止める。

「へえ……………いいね。いい感じに強化してあるじゃん。じゃあ、俺も……………」

明楽はジャックからの強力な脳波を受けると、嫌な予感を最大まで高める。ブルーレイの装甲の一部がスライド式に動き始める。肩と腰の装甲が動き、中から濃い青と電子機器のにあるような回路が刻まれているようにも見える。

「ガンダム・ブルーレイ・アクセル。ジャック！本気で行くよ」

「その前に聞いてもいい？君の苗字は無いの？」

「無いよ……………だって俺…………『元ヒューマンデブリ』だからさ」

「だと……………思ってたよ」

「そろそろ無駄話はやめようか。俺の目的は……………戦って死ぬことなんだからさあ!!」

明楽はそれも予想していた。

いや、その説明は正確ではないだろう。その予想をしていたのはシノだったんだから。

『鉄華団の頃に昭弘って奴がいたんだが、あいつの弟の話なんだけだな。ヒューマンデブリの一部には苗字が無い奴が多い。俺の知り合いでいえばアストン……………とかな。そういうやつらは普通の生活を知らないからな。戦いだけが自分の居場所だって感じている奴も少なくなかった。俺も大変だったぜ。でよ……………あのジャックってやつなんだけど。もしかしたら……………ヒューマンデブリなんじゃねーかなって思ってな。サブレの奴から聞いたんだけどな。ヒューマンデブリの一部には普通の生活が分からなくて、海賊にまで落ちる奴もいる



し、自殺した奴もいるってな。要するに幸せな生活に慣れないってな。あいつの戦いへの異常な執着はそこに原因があるんじゃないかなってな』

そこが明楽にジャックの事を知るきっかけになった。しかし、知ろうとしても火星や地球などの現在地球の政府が管理している全て惑星や都市を調べ、住民IDを全部調べ、テイワズが行方が分からなくなる寸前まで手に入れていた木星の住民IDも調べたがそれでも存在しなかった。

その結果。一つの結論に至る。

ジャックは元ヒューマンデブリである。

「ねえ知ってる?」

ジャックと戦い始めてすぐ、斧と剣がぶつかった瞬間にジャックはそう尋ねてきた。明楽には知っているかと言われても何のことなのか分からない。

「君の上司であるサブレ・グリフォンと親友だつて言われているテム・フォースはヒューマンデブリ廃止条約締結が終わつてすぐにヒューマンデブリの殲滅したことがあるんだよ」

明楽は『殲滅』という言葉を口にした。そして、その言葉が嘘やデマかせで言っている事ではないとは口調で理解できた。だとしたら、あの二人がそんなことをするだろうか。

二人を知っているからこそ明楽は無駄にそんなことをするとは思えない。テムは軽そうに見えてサブレ同様に一つの戦いに真剣になる人だと知っている。

「お前の言葉を嘘だとは思えない。でも、意味のない殺戮をする人だとは思えない。それを政府や上層部がひた隠しにするとは思えない。それは隠すだけの理由があるんだろ?多分、締結したばかりの条約が破棄されそうな内容が……」

ジャックは正直内心感心してしまった。

騙されるとは言わないまでも、多少は動揺すると思ったからだ。しかし、明楽はまるで動揺することなく、この話に対して自らの意見で反論した。

「いいよ。本当の事を戦いながら教えてあげるよ」

ヒューマンデブリを廃止する条約の締結はすぐさまに各方面へと連絡が付いた。しかし、それに対し意外なほど反対を示したのは一部のコロニー商社だった。

その中でも、ニューマンデブリを積極的に雇っていた小惑星と一体化しているコロニー、その商社は猛烈な反発を見せた。

しかし、反発やデモ行動に反して条約は素早く締結されてしまい。そこに居るヒューマンデブリが一斉に自由な雇用権利を獲得することになる。しかし、その商社は元ヒューマンデブリを一斉に解雇にすることで対応した。

その結果、ヒューマンデブリは路上にあふれるようになる。結果からすればヒューマンデブリは生きていく術を失ったことになり………そして、会社へと反逆を起こすことになる。

反逆は素早く終え、社長を射殺してコロニーごと乗っ取ることになった。その事態はすぐさまに政府へと通達された。担当政府である『AEU』は当時周辺の経済圏からの孤立を恐れていた。

すぐにでも交渉をするために役人をよこしたが、ヒューマンデブリ達が返答したのは役人を殺す行為であった。

AEUは『コロニーの運営権は君達には無い。すぐにコロニーの人々を開放すれば安全を保障しよう』という上から目線の言い方で、その言い方がヒューマンデブリ達の癪に障ってしまい、ヒューマンデブリは見せしめとして住民を虐殺することになった。

事態を重く見たAEUはギャラルホルンに依頼するが、当時のギャラルホルンは宇宙での行動権を持っておらず、話をEDMへと移すことになった。

EDMも交渉部隊を送り込む中、その部隊の中にサブレとテムが含まれていた。

交渉は案の定難航し、交渉は決裂することになった。最初はサブレとテムが向かうことは無いと判断、内部まで侵入した部隊は複雑になっている内装に惑わされ、あつという間に追い詰められた。

サブレとテムはこの事態を重く見た二人は自分達だけで解決する

ことを決めた。

その結果が……殲滅という結果だった。

それは戦いというにはあまりにも残酷な結果だったと言えるだろう。EDM上層部とAEUの判断によって殲滅戦の指示が出されたのが二人が出撃した数分後の事であった。

「その結果がヒューマンデブリの殲滅ってわけ」

聞かされた内容に明楽はサブレ達がこの一件を隠すことに決めた理由を知ることになる。そして、その時のサブレがどんな思いで殲滅へと乗り出したのかがよく分かる。

これ以上の犠牲やヒューマンデブリ達のイメージが悪くなる前に事件を素早く終わらせる必要がある。

きつと断腸の想いで殲滅したに違いない。

「何が言いたいんだ？まさか、その時を恨んでいるってわけじゃないよな？」

「そんなことは言わないさ。でも、分かるだろ？俺のようなヒューマンデブリには幸せな生活なんて不可能なんだよ。普通の暮らしが普通にできる何て一般人のエゴだよ」

かつてサブレは明楽にこう告げた。

『急激な改革は、急激な変化は周囲の人間たちを良くも悪くも変化させる。悪いことを良い事に変えることは確かに良い事だ。しかし、それが幸せなことが不幸な事かは個人が判断することさ。押し付けられた幸せはある意味悪意に近いものがある。幸せとは個人で見つける事しかできない』

今思えばその言葉の意味もよく分かる。

幸せは結局なところでその人が自ら決めるしかできない。しかし、個人に任せていたら解決できないのも事実だった。それを受け入れていくしかない。

「確かにそうかもしれない。でも……それで、世界や社会を恨むのは間違っているし、そんな社会の中で溶け込んでいる元ヒューマンデブリだっているんだ。そんな人たちに失礼だって考えないのか？」

「だからだろ？自分達が不幸になっているのに他人が幸せになってい

る姿を見て面白く思うわけないだろ。だから……俺はヒューマンデブリとして……戦いの中で生きてきた人間として死にたいんだよ。一人でも多くの人間を殺して死にたい」

明楽はそれを認めるわけにはいかなかった。

そんな中、ジャックはいつの間にか後方で戦いになっているアルミアのレッドクイーンとメテオの様子を確認すると、アジー・グルミンを回収する為に猛スピードで引き返していたアインをけん制する様にはるか上方から強力な攻撃がアインとアジーの間を切り裂くように現れた。

そこにはシムカス同様に大型ブースターを付けたエデンの姿がそこにはあった。

戦局が膠着状態に陥りながらも戦いが深刻な方向に向かおうとしていた。

## アカシツクレコードⅡ 《命の使い方》

2

アインが異変に気が付いたのは艦に帰還する直前の事だった。

いつの間にか接近していたメテオが鹵獲していた辟邪が、アルミリアのレッドクイーンの間立ちふさがり戦いを起こしている。急ターンするエンペラーは素早くメテオに近づいていく。

この時点でアインの脳裏には二つの考えがよぎっていた。

一つ目は、フロントムブラッド隊の旗艦である『ヴァルハラ』が近くまで接近しており、状況を静観している場合。この場合は、艦から離れることは敗北を意味する行為。

二つ目は、ヴァルハラが近くまで接近していない場合である。こちらの場合は戦場に向かえば状況の打開はあっさり終る。

しかし、一つ目の場合は他のモビルスーツの動きが気になる所。二つ目の場合はヴァルハラとの距離が気になるところである。実際、アインは一瞬の間に葛藤と悩み、最後にはヴァルハラが近くには来ていないという考えのもとで急接近を果たす。しかし、そんなエンペラーのコックピット内でククナの声が凜として響く。

「アイン。上方向より一機のモビルスーツが接近中よ」

アインはそれが誰なのか、思考する前にすでに理解できていた。「来たか!? サブレ・グリフォン!」

エンペラーの上をとる形でエデンが追加ブースターを切り離す所が見えた。背中中のネオ・ファンネルを切り離し、リングファンネルと共にアインを囲むように走らせる。アインは速度を殺し、旋回しつつエデンの方へと機体を走らせる。ファンネルとすれ違いエデンに向けてエンペラーはビームサーベルを抜き抜刀の要領で切り裂こうとする。しかし、エデンも負けじとビームサーベルでつば競り合いにもつれ込む。

アインはサブレ達がどのようにしてこの場所を特定できたのかをふと思考する。

サブレ達は三方向に散りながらヴァルハラから射出された広範囲

索敵用機雷を仲介しながら十分という速度で調べだしたのが結論だった。

アインは後ろから接近しているファンネルに常に警戒心を最大まで高めつつ、右方向に機体を移動させていく。サブレはあえて距離を置きながらライフルに切り替えつつエンペラーとの距離を置く。

「アカシック・レコードを探すだけならあそこまでする必要があったのか!？」

サブレの叫びはアインに届く、アインは不敵な微笑みを浮かべながらも接近するタイミングをうかがっていた。

「我々の意向に従わないモノを殺すことは当間だと思わないかな。君達もギャラルホルンだってそうやって生きてきたじゃないか。君はあのコロニーでその真実に触れたはずだ。一度『物』としての『生』を与えられると中々逃げられない」

「だとしても、俺はあきらめるなんてできない。俺があきらめ事は、信じて戦い死んでいった者達への……冒涇だ」

「死んでいった……者達か」

アインはサブレが吐き出した答えに対して不思議な苛立ちを抱えていた。その苛立ちが彼が両親を知らないことから来ているとは彼は知らない。生まれてすぐに亡くなった両親、ギャラルホルンから裏切られ、愛する人と愛する子供と幸せな毎日は訪れることは無かった。アインは知らない。自分がククナを愛する理由が知らない母親の代わりなのだという事が。

「生を知るから死に苦しみを覚えるんだよ。すべての人は生死の苦しみから解き放たれるべきなんだ!」

ビームサーベルを右手に、左手にビームライフルを構えながら左右にファンネルの攻撃を的確に避けながら、当たりそうな攻撃はサーベルで打ち落とししていく。そんなエンペラーに対してエデンは左足で蹴りながら攻撃を弾く。

「死だけしかない世界なんて『無の世界』と同じだ!人は命の使い方を知ることが生きるってことじゃないのか!?!人は死ぬ瞬間にこそ自分の生きた意味を知るんだ!鉄華団は『命の糧』を戦場の中に見つけて

生きてきた。お前も……！」

「俺にとって命の糧なんてものは無かった。あるのは復讐心と心の穴を埋める空白だけだ！お前に分かるか、失うからこそ辛いのだと。だから我々は決めたんだよ。生死を排除した世界を！」

（それはお前だけが望んでいる世界じゃないのか？）

疑問に思いながらもサブレが口に出せなかったのは、ククナはともかくアルミリアはそれを想っていそうだったからだ。

彼女は知っている。

失う恐怖を、苦しみゆえの憎しみを彼女は知っているのだから。その先を望んでもおかしくはない。彼女は命の使い方を彼女はそこに決めているのかもしれない。

「それでも！」

サブレはネオ・ファンネルを引き戻しつつアインを寄せ付けないように一定の距離を保つ。

地上で使用するにはネオ・ファンネルはケーブルをつなげる必要があるが、宇宙で使用するにはケーブルを使用する必要が無い分、思う存分動かすことが出来る。しかし、動かし続ければ無線で動かしている分、エネルギーの消費量を考える必要がある。

実際ファンネルのエネルギー残量は半分を切っており、心元無くなっている。

「死を見続けてきたお前なら分かるはずだ！目の前で死んでしまうからこそ苦しんだと！」

「それでも……俺は生きると決めたんだ！あいつらの分まで歩き、足掻き、あきらめないと決めた！」

「この覚悟は人類には重すぎるんだ！すべての人間がお前のように強く在れるわけじゃない！」

ファンネルの攻撃を掻い潜り、エデンとの距離が五十メートルに入ろうとしたところで、エンペラーはファンネルを周囲に展開させる。

サブレの周囲を殺意が囲む。

全身をチリチリするような感覚が襲い、サブレの脳神経から放たれる警告がダイレクトにリングファンネルとネオ・ファンネルを動か

し、ネオ・フアンネルが充電の為に一旦腰に戻ると、リングフアンネルは周囲から襲い掛かってくるビームの乱射からエデンを守る為に周囲にフィールドを張る。

視界が真っ白に染まっていく。

アルミリアはメテオから繰り出されるジャマハダルの連撃をしなぎ切ると、右側に構えているランスを突き出し、メテオはジャマハダルの攻撃を弾きながら右肩に乗せた拡散ビーム砲が光る。

アルミリアは拡散ビーム砲の一撃をシールドで受け止めると、視界が真っ白に染まってしまふ。アルミリアは苛立ちの理由を知らない。彼女は全てを忘れることを選んだ。

復讐の為に戦い、その理由を忘れることを選んだのはつらかったからだ。

戦い、忘れて、なおも戦う。

彼女が求めた物をアインは知っている。彼女は知りたかったのだ、かつて愛し、罪を共に背負うと決めた人がいた世界を。

モビルスーツの小さな空間に居ると、座席に座り、操縦桿に触れると感じ取ることが出来た。しかし、同時に感じる悲しみと怒りの矛先がギヤラルホルンへと向くのはそう難しくはなかった。

生きる理由なんてものはどんな所からでも見つかるものだ。

彼女は見つけたのだ。生きる理由と戦う理由、死ぬ理由を愛した人と同じ戦場の中で戦い、忘れて死ぬと。辛かったから、忘れても戦っていたかった。

『ここに居ればなにもかも忘れても辛くない気がしたから』

しかし、忘れても覚えていたのは憎しみだけだった。

戦いの中で憎しみを覚えることの方が多く、心の奥から沸き上がる衝動をいい加減彼女は抑えられなかった。

アルミリアは怒りに任せランスをふるう。

シノはレッドクイーンからの連撃に舌打ちをしながらもしのぎ切っていた。

「くそが……このままじゃヤマギに顔合わせができないんだよ！」

あの日、サブレが告げた言葉がシノのすべてを変えた。



『このまま火星に逃げ帰るのもありだと思っぞ、大切な人たちに慰めてもらうのもありだ。ただ、あんたに前にすすもうとする気持ちがある、大切な人と次会った時に胸を張れるようになりたい。そんな、気持ちがある、でもあるのなら、大切な仲間と向き合う際に胸を張れる自分でありたいのなら、俺の元で強くなってみないか?』

「強くなるって決めたんだよ!! ヤマギに会うまでに俺はもつと強くなる」

(俺の前を常に歩き続ける二人がいるんだ。サブレと明楽はこの一か月で劇的なほどの進化を遂げた。サブレと明楽、ビスケットは時折瞳を虹色の炎を輝かせる時がある。そんな二人の変化は進化の証なんだろう。でも、俺には何も無いんだよ……このままじゃ俺はヤマギに会えない! あいつに向き合えない)

ジャマハダルでレッドクイーンからの攻撃を凌ぐことを止めた。ランスを右足で蹴りつけつつ、ジャマハダルの一撃をレッドクイーンの右肩に叩き込む。右肩に突き刺さったジャマハダルが高速で回転し始めると、レッドクイーンの右肩を吹き飛ばした。

「嫌い……嫌い、嫌い、嫌い!」

気がおかしくなるのではないかというほどの思考がアルミリアの脳裏を鋭く襲い、吐き気と憎しみからくる頭痛がアルミリアの操縦技術を貶めていた。

そんな状況を戦いながら眺めていたジャックは内心「あちゃー」と叫びたい気持ちに駆られてしまった。

「あれはダメだね。まあ、元々ククナ様とペペロが調整していたから能力を使えていたわけだし、精神的に不安定だしな。最近」

最近になってアルミリアは精神的に不安定になりつつあった。その傾向はこの戦いで如実に表れつつある。

苛立ちと共に抱える頭痛。操縦技術の低下を招いている原因はそこにある。

アインはさらなる強化をククナに進言していたが、ククナはこれ以上強制的な強化はアルミリアの精神を崩壊させるだけだと考えていた。

(確かに、このままだと使い物にならないよな)

ジャックは内心そう考えながらも、アルミリアの事をほんの少しだけ心配していた。

彼女とはなんだかんだ言って木星帝国に入った時からの知り合いで、ダッグと組むことが多い間柄だった。

(まあ、アルミリアが決めたことだし、反対はしないけど)

どうしようもないことだってある。それが彼女が決めたことなら今更文句が言えない。

同時にアインは事態を打開する為に追加のモビルスーツ隊を呼び寄せようとしていたところで、ハンマーヘッドを守る様にヴァルハラが姿を現し、他のモビルスーツ隊も側面から攻めてきた。

しかし、事態はアインの予想を上回りながら進んで行く。

ククナは戦局が一定した頃よりエデンの戦闘データの収集に努めていた。もとより今のエンペラーではエデンの進化した装備より劣るだろうという事は分かっていた。それでも、ククナが進化させなかったのは、エデンに勝てる装備を作る為だった。

「やっぱりプランBで行くべきかしら？」

一人そう呟きながら脳裏に装備の明確な形を思い浮かべる。しかし、そんな時間を邪魔する様に通信士の冷静な声が耳に届いた。

「ククナ様。本部から入電。歳星が木星帝国最終防衛ラインに接近中とのこと。歳星は降伏勧告を告げながら交渉を呼びかけているようです。本部はマクマードが持っている『鍵』を手に入れる為に交渉に応じるようです。ククナ様にも戻ってくるように」と

ククナはマクマードの思惑が読めた。

(なるほど。ここで『あの人』からの要請を無視すれば帝国を乗っ取るチャンスが無くなる上、ペペロの独走を許すことになる。かといってこの地でこのまま戦い続けてもアカシック・レコードの道が手に入る確証が今はもうない。マクマードはヴァルハラが接近しているであろうタイミングを計っていたのね。教えたのはゲイナーかしら？フフ。逆に言えばここを譲れば状態はこちらの思惑通りにすすめるね)

ククナはアインに向けて通信を開いた。

「アイン。ここは引きましよう」

「アイン。ここは引きましよう」

そんな言葉と共にアインはククナの方に渋めの視線を送る。

「ここは譲りましよう。マクマードが木星帝国に接近しているの。こちらの思惑通りに進めるチャンスでしょ？」

アインはエデンの方をちらりと見た後で思考するところをククナが畳みかける。

「それに、アカシツク・レコードは後でも会いに行けばいいでしょ？彼を倒した後で……ね」

その言葉を聞くと諦めるしかない。

アインは機体をひるがえしながらジャックに撤退の合図を送る。すると、ジャックはアルミリアを回収しつつその場を後にした。

静寂が戦場跡に訪れると、ハンマーヘッドとヴァルハラは並行しながら随意飛行に移っていく。シノがアジーを回収しつつそれぞれの艦に戻るのに時間はかからなかった。

アジーがブリッジに辿り着いた所でようやく両方が話し合う準備を整えられた。

「ありがとう。バスケット君。助かったよ。みんなもね」

「いいえ。間に合ってよかったです」

アジーとバスケットが簡単な挨拶から入ると、すぐさまにアジーは真剣な表情でバスケット達と視線を合わせる。

「案内するよ。マクマードさんから聞いた『アカシツク・レコード』の正確な座標まで。アカシツク・レコードは一定の時間ごとに座標を移動しているんだ。今の座標は」

と言った所でハンマーヘッドが停止する。同時にヴァルハラも停止するとアジーはある場所を指さす。

「ここがそうだよ」

そういわれた瞬間に正面から恐ろしいほどの質量の反応を見せた。正面から宇宙の光景に灰色のシミのような物が浮かび上がり、それがどンドン広がっていく。

全員が咄然としつつそのシミは地球以上の大きさへと変貌を遂げる。

さすがのアジもこの大きさは予想外で会ったようで、最大全長はざっと木星と同等なのではないかっと言うほどの大きさになった。

「良く来ました。ようこそ、アカシック・レコードへ」

アカシック・レコードの案内に従って艦を進めていく両艦。その先に待つ真実と答えに向けて。

## アカシツクレコードⅢ 《真実の先へ》

3

生まれ持った力が彼女を迫害したのなら、誰が悪かったというのだろうか？

世界？社会？それとも人々なのだろうか？

世界で初めて覚醒した女性『アイス』は鏡のような水辺で一人佇みながら物思いにふけていた。

彼女にはここまでの流れが分かっていた。分かっていたこの道を歩くことを決めたのだ。

あの日、自分の——世界の未来が分かってしまった。

変わることを恐れ、進むことで立場を追われることを慄き、地球という星の重力が人々の魂を縛り付ける。そんな考え方が人々を滅ぼすだろうという事は分かってしまった。

一人の男の魂が人々を抗争に駆り立て、滅ぼす過程がいくつも見えてきて、億に及ぶ未来の中からたった一つだけが人々が生存できる未来だった。自分の生まれ変わりである『サブレ・グリフォン』を作る未来。

最も多くの人を殺し、最も犠牲を作り続ける未来。それしかアイスには選べなかった。

ここで彼に一時的に合う事も未来を選ぶうえでどうしても必要な事だった。

サブレがアカシツク・レコードに会う事が重要で、その先でサブレは自分に課せられた運命を知ることになる。

アイスは悲しみに表情を曇らせる。

「どうして……こんな事になったのかな」

昔は楽しかった。

誰もがそう言いながら、思考し、計画を練って、裏切るのだ。大人になればみんな気づく、あの頃に戻れたらつと。

純粋なままで、みんなの中で楽しくいられたら。

「私はみんなと一緒に居られたら……それでよかったのに」

アイスはもう一度サブレに会う事を願い、ただ祈ることしかできなかった。

4

目の前に存在する大型球体を果たして『アカシック・レコード』と呼んでもいいのだろうか、ここに居る誰もが思うかもしれない。たった一人を除いては。

サブレ・グリフォンだけがこれこそが『アカシック・レコード』なのだと言っている。白銀でできていると言っても過言ではない、と思うぐらいに白く輝いている。

ハンマーヘッドとヴァルハラが入る為の大きな穴が出来ており、サブレ用にもう一つ小さな穴が開き、エデンは小さな穴の奥へと進んで行く。

金属だという事しか分からないような壁には、奇妙な模様が浮かび上がっていく。エデンがそつと壁に触れると、壁を通じて何か奇妙な感覚を伝えてくれる。

「生きてる。この金属は生きてる」

ドクンという生命の鼓動ともゆべき何かを脳波と皮膚感覚が伝え、とっさの事でサブレはエデンの手を金属から離す。

この金属は生きているが、思考は感じない。

感じるのは……知識だった。この金属が保存しているのは知識であり記憶なんだと分かる。その瞬間にはこの金属一つ一つがアカシック・レコードと言うべき存在なのだ、そして、そのコアというべきものは中心にある。サブレはゆつくりと確実に進む中、最後の扉を見付けた。

今まで扉らしい扉などありはしなかった。という事はここはそれだけ特別な空間なんだという事を意味している。

サブレが扉の前に辿り着くと、無音のまま扉が開いていき、サブレの空間の中に二機のモビルスーツが鎮座していた。

ユニコーンガンダム一号機。ユニコーンガンダム三号機『フェネクス』の二機が鎮座しており、まるで意思を垣間見れるような威圧感を感じ取った。

「このガンダムは生きているのか？」

『サイコフレームが微弱な反応を示しています。しかし、これを意識と呼ぶかは不明。心の残心のような存在かもしれませんが』

サルガがそういう風に告げることをサブレはそれとなく聞いていた。

『先ほどの金属同様微弱な反応を示しているだけです。強くない。意識と呼ぶには小さすぎます。おそらくアカシック・レコードの本体が通信で操るためのシステムが金属の一部に仕込まれているだけでしょう』

「要するに魂のような物は存在しないという事か？」

『ええ。あくまでも、知識のような何かがあるだけです。それをアカシック・レコードが操っているでしょう』

エデンを一番奥に鎮座させると、奥に穴が歪みと共に姿を現した。ここまで来ると驚きはない。コックピットから出ていき、最低限の事をサルガに任せてしまうと、サブレはそのまま一本道を進んで行く。

大きな空間に辿り着くのに時間はかからなかった。

空間の上部に大きな球体が光り輝いており、それがアカシック・レコードのコアとでも呼ぶべき存在だと認識できた。すると、サブレと遅れてビスケット達が姿を現した。

「サブレーよかった別に入ってきたからどうしているかと」

そういいながらビスケットが近づいてくると、後ろからアジーが近づいてくる。ビスケットがアジーとサブレの間に立って双方の挨拶の仲立ちになってくれた。

「こちらがアジー・グルミンさん。そして、こっちは弟のサブレ・グリフォンです」

サブレとアジーは握手を交わしながら朗らかな雰囲気が続く。

「サブレ・グリフォンです。昔、兄がお世話になりました」

後ろの方からサブレの丁寧な言葉を後ろで冷やかす明楽達、それに対してサブレが背中の方に向けて殺意を放つ。明楽達にはその殺意が鬼にすら見えた。

「アジー・グルミン。さつきはありがとう」

握手を終えるとコアがさらに強い光を放ち始める。すると、どこからとなくPN01が姿を現した。

「友好を温めるのも構わないが、本題に入らせてもらう」

その声を聴いたアジーとエコーとシノは驚きと共慄き、後ずさりしなくなる気持ちを押さえながらPN01の方を強めに見つめる。

「君たちが驚くのも無理はない。私の人格と音声データや記憶は『オルガ・イツカ』からきている」

サブレとビスケットは既に慣れてしまっていた。サブレの視線はコアの方から離さないでいると、コアから音声that響き渡る。

『その辺にしておきなさい。PN01彼らが驚きのあまり話を聞く体制になっていませんよ』

その声は女性とも男性の世にも聞こえ、少年のようであり、同時に老人のようにも聞こえる。そんな不思議な声が全員の意識を無理矢理にでも中心のコアは赤やら青やら様々な色を連続で放ちながら会話を続けてきた。

『では、初めまして。私がアカシック・レコードの本体コアの思考データです。皆さんにこれまでであったことをきちんと説明しましょう。それがここに居る人に私達の事を知ってもらった一つの手段でしょう』

アイスは目の前にある画面を不思議な表情で眺めていると、後ろから金髪の青年が話しかけてきた。

「どうかな？…こいつには思考データがコアユニットとして納められていて、後は記憶媒体さえあれば永遠に記録し続けることが出来るんだ」

「でも、マイク。こんな必要なのかな？」

マイクと呼ばれた青年は胸を強く張り、当然だと言わんばかりに答えた。

「当然だよ。だって、これから人類は広大な宇宙に進出していくだよ。記録だけじゃない、外宇宙をよく知っていくことが広大な宇宙で過ごすうえでは避けられないよ。何も知らないで進出するより絶対良いに決まっているよ！」



「それは分かるけど……今の人類にそれ以上の事を期待するのは」

アイスは不安だった。

彼の強い期待がいずれ絶望に変わってしまうのではないか、そんな不安がアイスの予想通りになるとはこの時は思わなかった。

そんなある日、テレビの前で起きた『ラプラス事件』の騒動を見たとき、アイスは多くの人の魂を感じ取ってしまった。同時に、強制的な進化はアイスに真のアカシック・レコードへとたどり着かせた。

その先に待つ絶望的な未来とたった一つしか存在しない希望の未来、希望の未来への最悪の道のりが見えた瞬間自分の隣に立つマイクの素顔が見えた。

マイクが世界を滅ぼす。どうしようもない不安に彼女はいてもたってもいられなくなった。

実際、アイスの予想はあたり、マイクとアイスは地球連邦軍によって追われる身になってしまう。原因は二人が造った『アカシック・レコード』だった。

マイクはアカシック・レコードを出立させることを選び、アイスは従うふりをしてひそかにアカシック・レコードにいくつかの命令を下した。

『今後アカシック・レコードは人類への過度な接触は避ける事。人類の進化の経過を見届ける事。アカシック・レコード本体はすぐに外宇宙へと旅立ち、記憶媒体などの強化を行う事、外宇宙の情報を集める事。通称『選別者』を探し出す事。人類の行く末を最後まで見届ける事』

しかし、出立する直前で問題が起きてしまう。出立するべき場所に地球連邦軍に見つかってしまう。ここまではアイスは分かっていた。「ここなんだ。ここで私が先に死ぬ必要がある。ここでの死は避けられない。彼と一緒に死ぬか後に死ぬ場合はマイクの暴拳を止める手だけ手が亡くなる。それは避けなくちゃ」

そうつぶやきながら逃げるアイスは予想した大広間で連邦軍に追いつかれてしまう。

アイスは足を止めて振り返る。

「マイクは先に行つて」

「何を言っているんだ！一緒に逃げよう」

「逃げきれないわ。あなただけでも逃げて」

そう言つて彼女はマイクとの間に壁を作つてしまう。マイクは壁の向こう側に残してしまつたアイスに叫び声をあげる。

「アイス！アイス——！」

多数の銃声が響き渡り、数秒後には静まり返つた。

マイクは憎悪の表情で駆け出していく、アカシック・レコードの出立の入力したところまでついに追いつかれてしまい、左足を撃ち抜かれた。しかし、彼は素早くアカシック・レコードの出立させたのを確認すると、彼は鬼のような形相で連邦軍の軍人に襲い掛かった。

迫りくる軍人たちを返り討ちにしていくうちに彼は軍人の血と自分の傷から流れる血で真っ赤に染まつていた。最後の力で銃撃で傷だらけのまま亡くなつていたアイスの元へとたどり着く。

アイスの右頬を撫でながらマイクはその場で力尽きた。

すると、増援がたどり着き銃口を死にかけのマイクの方へと向けた。憎悪の表情を向けながら呪詛の言葉を吐き出した。

「覚えていろ………何度だつてお前たちの前に復活して、必ずお前たちの繁栄の邪魔をしてやる。人間を完全な意味で滅ぼすまで。なんどでも、なんどでも………何度でも!!」

それが彼の最後の言葉だつた。

『それが私が記録している限りマイクの最後の言葉でした。彼はその言葉通り、何度でも体に移りながら争いを引き起こし、なんでも人類の前に立ちふさがりました』

アカシック・レコードの言葉に何人かが頭の片隅に引つかかる。それが何なのかがよく分からなかったが、それがマハラジャの家で見かけた絵本だつたことに気が付いた。

「そういうえば、マハラジャさんの家で見かけた絵本がそんな内容じゃないかつたですか?」

サラの言葉に何人かが同意したところでPNO1が口を挟んできた。

「それは私がサブレ・グリフォンとその関係者に密かに流していたメッセージだ。基本は二人のたどった道のりを絵本にしやすいようにアレンジしている」

「要するに、お前は始めっからここまでの道のりを決めていたのか？」  
『あくまでも、私はあなた達の出現を待つただけです。今思えば、アイスは私達が選別者を探すことがあなたの出現を促すことにつながるかとわかっていたのですね』

アカシック・レコードは神妙な声を放ちながらサブレの方に意識を向ける。アカシック・レコードは自らの役目の一つを果たすための問いを口にする。

『サブレ・グリフォン。あなたの答えを聞きましようか。あなたはこの人類の為に何を選びますか？あなたは人類全員を進化させるための『種』を持っています。しかし、今のままではその種は開くことは無いでしょう。すべてはあなたの選択にかかっているのです』

ビスケットは怒りと不安を交えたような表情で一步前に入る。  
「それは！それはあんまりです。サブレに人類の総意を背負わせて、全ての喜びと哀、怒りと楽しさを全部背負わせるなんて……」

アトラがふとビスケットの右腕をつかんで首を横に振る。アトラにも、みんなにもビスケットの気持ちよく分かる。一人の人間に背負わせるにはあまりにも重い選択肢、人の憎悪や喜びなどのすべてを背負ってもらう。たとえ、それが分からなくても、本人は一生罪悪感を抱えながら生きていかなくはいけない。

でも、それを止めることは誰にもできない。  
ここに辿り着いた時点で、全員が覚悟しなくてはいけないのだから。

サブレの目の前に二つに分かれた道が現れる。それが、何を意味しているのか誰にも分からない。

アカシック・レコードの語る真実の先でサブレ・グリフォンは選ぶことになる。

それは人類にとって『最悪』の選択肢か、『最良』の選択肢になるかは誰にも分からない。

## アカシツクレコードⅣ 《この暖かこそが命》

5

目の前には二つの選択肢が存在するらしい。らしいというのも俺サブレ・グリフォンはその二つの選択肢にまるで納得ができていないからだ。これは見れば誰だって分かるだろう。

一つは、人で在り続けながら滅亡と繁栄を続けていき、前へと進ま  
ず今日という日で固定する道。

もう一つは、人で在ることを捨てて進化することで未来へと進む道。  
人外へと落ちてしまう道。

一体どちらが正しいのかは誰にも分からない。そもそも、この問い  
に対する正しい答えなんてものは多分存在しないのだろう。

だって、人が一人一人が決めていくことなのだろうから。しかし、  
その個人に任せていたら、人間はいつまでたっても前にすすもうと  
しないだろう。

人は前へ進むことを恐れるようになった。

繁栄を極めたときから、人間は進むことへの不安感が生まれていっ  
た。

変わっていくことを、進むことでむしろ自分達の立場を貶められる  
のではないかという考えが、人の進化を、人の進むべき道を閉ざした。  
それもある意味たった一つの道なのだろう。認めたくはないが  
……………。

しかし、それは現状維持にすらならない道なのだろう。

この宇宙は広大で、この宇宙は無限なんだという事を人間は知らな  
い。

でも、俺は知ってしまったんだ。

始まりと終わりが交わるあの綺麗な場所で彼女に出会った。『真の  
アカシツク・レコード』が写すどこまでも寂しくきれいな世界。あれ  
は世界の中心であり、知性と生命を持つ人間が初めて到達した世界は  
人間に世界の破滅を教えてくれた。

優しくて、どこまでも幅広い世界はあまりにも……………無限だった。

無限という事は自由という事だ。

あの世界を知ってしまったら、今自分がいる場所は寂しく閉ざされた世界だと思えてしまう。

寂しいという気持ちがいっつも心のどこかに引っ掛かる。

でも、そこから帰るときに見てしまった世界、そこは多くの人の魂が蠢き苦しんでいく、どこまでも進むことが出来ず、どこまでも戻ることもできない世界。

あんな世界で閉じ込められるのなら、そう考えてしまう。

いや、きつとそんな言葉ですら俺の本心ではない。

俺は、オルガやサイガ、クレア、レレ、アスナ達と出会い、絆を深めてきたこの世界が閉ざされた、前にすすむこともできない世界なんて俺は認めたくないのだろう。

彼らだけじゃない。兄さんや明楽やテム達とすら出会ってきた。

不安や絶望すらきつといい思い出に変わっていくのだろう。

そうか、そこまで考えてようやく気付く。人と人とのつながりが絆であり、絆が集まって希望になっていくのだろう。

『その通りですよ』とエデンが目の前に現れたような気がした。真つ暗な空間で、目の前にエデンが鎮座しながら姿を現す。『私《サルガ》の人格はあなたの記憶とエデンの戦闘データを元に作られています。だからこそ言える事です。あなたは決して間違えていない』

そこまで言われてしまうと心痒いものを感じてしまう。少しだけ笑ってしまいながら頬を気まずそうに搔く、しかし、そんな俺の心を読んだような言葉が今度は後ろからかけられた。

「胸を張れよ。お前がやってきたことは今につながっていくんだよ。無駄何て一つも無いんだぞ」

オルガが急に声をかけてくるから驚きながら振り返る。すると、微笑みながらオルガは「お前が俺の魂を受け止めてくれたんだろ？お前の中からずっと見てたんだお前は無意識の中で多くの人の心を受け止め、今もため込んでいる」って言うてくれる。

すると、左隣からサイガが現れて声をかけてくる。

「そんなお前だからこそお前に託せるんだぜ。みんな同じさ」

今度は遠くから意思だけが俺の心に届く。

「私はそんなあなたがいたから前に進めたんですよ」つとレレが、今度はアスナが「だからこそ前を向くあなたであってください」つと言ってくれる。

生きている者、死んでいる者。みんな同じ意思を持っていて、自らの道がある。俺はそれを尊重したい。

『あなたは間違っていないかった。迷い、その度悩みながら進んで行く』  
そうか、それが生きるという事なのか？

痛みを受け止めながら進んで行く。その痛みは多くの人とかかわっていく中で癒されていくのだろう。

幼いころいっただって兄がいた。兄が遠くに行ってしまった後も俺には多くの人がいた。

一人でいるつもりで、いつの間にか俺の周りには多くの人が集まっていたんだ。

多くの人が集まってきた俺の名前を呼んでいく。

「「サブレ」」

失う恐怖を俺は知っている。

その分、手に入れる喜びも俺は知っているんだ。

「繋がっていくことが俺の力なんだ。人は一人では生きていけないから」

『その通りです。支え合い、時にお互いの意思をぶつけ合いながら前にすすむ。それが人の意思なのだと思えます』

「時に迷い」とオルガ、「時に足を止めそうになり」とサイガ、「人に厳しく」とレレ、「人にやさしく」とアスナ。

「この心の絆こそが人の強さであり、心の暖かこそが命という事なんだ」

間違っていないかった。俺が歩んできた道は何も間違っていないかった。時に道を間違えそうになっても多くの支えで俺はここまで来れたんだ。多くの人に支えられ、共に歩いてきたこの道が間違いであるはずがない。

俺が行きたい道が間違いなら誰かが何かを言うだろう。

俺の道は決まった。支えられながら前にすすむ選んだ道を進む。ゆっくりと目を開ける。

たとえば俺は迷ってもこの気持ちだけは忘れないようにしよう。この心の暖かこそが命という事で人間の力なのだろうから。

6

サブレが目を瞑ってから五分ほどが経過していた。悩みながら選ぶ選択肢をビスケツト達は待つことしかできなかった。どんな結論が待っていたとしても、きつとサブレならと思う一方でそれをサブレと共に支えたいと願う。

ゆっくり目を開くサブレの表情は人一倍力強い目をしていた。

二つある道、右は人として閉ざされた世界。左は人を捨て人外に落ちる世界。

すると、二つの道にそれぞれ見たことも無い人達が立っていた。

「君はどちらを選ぶ？」

死んだ人たちですら待っているのだろう。サブレの選ぶ選択肢を。

サブレは分かれ道まで歩き一旦止まると息を吸って吐き出す。そして、道なき真ん中を進んで行く。迷いなく進み行きつく先でサブレは振り返る。すると、そこには迷いを振り切り男前の表情をしているサブレ・グリフォンがいた。

「俺は人で在り続け、進化し続ける道を進む」

死んだ者達が揃えて口を開く。

『君は最も過酷な道を選ぶんだね。どっちでもない。一生人は争いからは逃げられず、かといって逃げることも知ら出来ない。前に進む分だけ苦しむ道を』

「ああ、決めた。確かに進む分だけ苦しいかもしれない。でも、多くの人と関わって絆を紡いでいくことが希望なんだって今なら分かるんだ。支え合い、時に迷いながら進んで行く。人々の繋がりのおかげこそが人間の力だと思うから」

ビスケツトはサブレの表情をジッと見つめながら、サブレが選んだ道がきつと多くの人と関わったからこそできた道なんだろうと確信する。

ビスケットだけではない。

多くの人との関わり、時に戦いながら歩いてきた道がサブレに力を貸したのだと確信できた。

（そうか、敵だった人ですらサブレにとっては大切な関わりなんだ）

サブレはふと上を眺めながら「これが俺の選んだ道だ」つと伝えると、アカシツク・レコードは「やはりこうなりましたか」つとまるでこうなることを予感させていたような声だった。

「彼女はこうなるかもしれないことを予感していたのかもしれないですね。いや、この道だけが人類が生き残る唯一の道なのかもしれない」

「彼女がどうしたいかは俺は分からないけれど、多分、苦しみながら選んだんだと思う。いや、この道しかない」と苦しみながら押し付けるしかできなかったんだと思う。だからこそ、俺は彼女の覚悟を無視することはできない」

サブレの力強い言葉に多くの人がその場で覚悟を固めようとしていた。すると、サブレはアジー達の方を見ると真剣なトーンで語り掛けてきた。

「もしかして、あなた達がここに居る理由とククナ達が撤退した理由はあなた達がかかわっているんじゃないですか？ 正確にはテイワズが」

その言葉にアジーは気まずそうに顔を背ける事しかできなかった。しかし、サブレは容赦なく続ける。

「あの場での撤退にはおかしさがあった。多少強引に突っ込んでいけばいいものを、アイン達はあそこで撤退した。それは、何か変化が起きたからだ。木星で。木星と言えばテイワズだ」

サブレのまっすぐな瞳がアジーの心に突き刺さる。騙しているわけでは無い。ただ、そうするしかできなかった。

「マクマードさんはあんた達をこの場所まで安全に送り届けつつ、テイワズとして責任を取るつもりなのさ」

「テイワズとしての責任？」

ビスケットには何の話なのかが分からなかった。まるで、サブレと



アジー達だけが理解しているような会話だけが場を満たす。

「マクマードさんは木星帝国を造ってしまった責任をこの数年抱えているようだった。そもそも、木星帝国は木星独立運動が根底にある。どの惑星にもある独立運動の気運が高まっていた。そもそも、ギャラルホルンの統治体制もその限界があつたからね。遠くの惑星には届かないのさ。そう言った環境下でも最低限の統治は行われてきた。しかし、その反面反対運動は過激さを増していく。そんな中でマクマードさんはテイワズを立ち上げた」

アジーの表情をどのように表現すればいいのだろうか。アジー自身はその頃を知らない。だが、懐かしさのような、それでいて遠い場所を見るような目が表情を複雑に変えていく。その表情を読むのは難しい。

「ジャスレイが木星帝国の皇帝に密かに繋がっていることはマクマードさんは知っていたようだし、まさかその結果ダーリンが死ぬなんて結果は予想してなかったようだけど。だからこそ、ジャスレイを見捨てるという行為は木星帝国への明確な反逆行為だと認識はしていた」

そこまで分かっているながらマクマードにはテイワズという組織を維持する最適な方法で、同時に鉄華団という組織の支援を出来る方法だった。

その結果がテイワズ滅亡という結果ではあまりにもむなしい。報われない。

「マクマードさんはあんた達を送り出し、そして、木星帝国本拠地にある要塞『グノーシス』とコロニーレーザーの破壊を目的に動いているところさ。最悪でもコロニーレーザーだけでも破壊するつもりみただね。それに元鉄華団のメンバーも加わる事になっている」

その元鉄華団のメンバーの中にヤマギがいる事だけは誰にでも分かることだったからだ。シノの目が強く開き、動揺が見えてくる。

「なんでだよ!?なんであいつが!?!」

「落ち着いてシノ」

ビスケットがシノをなだめようとするとアジーは視線をシノへと

向けた。

「ヤマギ君はあんたが生きているって知らないのさ。だからこそついてきたんだと思うけど」

アジーは確実なことは言えなかった。だって、自分でもどうして彼らを連れてこなければならぬのか分からなかった。

それに対してPN01が代わりに答えた。

「鉄華団は破壊工作などを実際にしたことがあるからな。そういう経験があるのと、少しでも戦力が多い方がいいという結果だろう。もちろん、最悪の結果は彼等だけでも逃がそうと考えるだろうが……成功確率は限りなく低いだろうな」

PN01の言葉に焦りを募らせるシノに変わってサブレが駆け出していった。

「どこに行くんだ？」とPN01が声をかけるとサブレはまるでそれが当たり前化のように答えた。

「救える命を見捨てたら俺じゃなくなる。目の前に救える命があるのなら俺は救いたい。それで罵倒されようが構わない。俺は目の前の命を救いたい」

PN01は声を失い止める間もなくサブレは進んで行く。シノも素早く反応する様に、ほかのみんなも急いで出ていく。ビスケットも最後についていこうとしたとき、PN01のまるでオルガみたいな声に足を完全に止めた。

「ビスケット・グリフォン。君へのオルガへの言葉がある。これを君が聞く意味はない。その言葉に既に意味は無いし、言ってしまうえばオルガ・イツカからのどうしてもあの日言いたかった一言だ。あの日、君と別れてしまった。島で言えなかった一言」

ビスケットはその一言を聞きたかったのかもしれない。足を止めPN01の方を見つめる。

「ビスケット……やめないでくれ。これからも俺の隣に居てほしい」

「っ！……あああ………！」

あの日、言いたかった言葉、伝えられなかった言葉を今聞いた。そ

れもまた、今更である。でも、だとしたらバスケットは自分も言うべきだと思った。

「オルガ。俺……やめないよ。ずっと………グス………一緒だ」

それだけ言ってバスケットは駆け出していった。

もう、自分達が交わることは無いのだから。

涙を拭き、選んだ道の先をひたすら進んで行く。

種は手に入れた。後は、それは蒔くだけだった。

ヴァルハラが出力を上げながらエデンを収納していく。目指すべき道は木星にある要塞『グノーシス』。

ヴァルハラが姿を消す数十分後にアステロイドベルトへと突入したEDMの主力隊とイサリビ改をアカシツク・レコードは確認した。

「しかし、この戦い。少々不利かもしれませんがね。仕方ありません。一回木星帝国に力を貸していますからね。いざとなったら彼らを救出するぐらいはするべきかもしれませんね」

アカシツク・レコードは不思議な光を全身から放ちながら準備に入っていた。

両勢力がぶつかる瞬間が直ぐそこまで迫ろうとしていた。

アカシツクレコードからグノーシス宙域までは最大速度で二時間ほど。そんな中、テイワズの本拠地である歳星はグノーシスへと接触していた。

《アカシツクレコード編終わり 君を想う編開始》

## 君を想うⅠ 《木星会談》

1

テイワズの本拠地と呼ばれた移動型コロニー『歳星』は木星圏の要塞『グノーシス』が存在する宙域、船のように見える全体にリングのような物がくっついて見える船体が特徴的、そんな歳星がグノーシス宙域に辿り着いた。

広い宙域に目立つ二つの人工建築物が存在する。

そのうちの一つは二つの小惑星要塞を強引にくっつけた結果歪な形になっている。下の小惑星と上の小惑星の間は人工的なコロニーのような物でつながられていて、要塞一帯の宙域にはとにかく様々な戦艦クラスが囲んでおり、否応なしに恐怖を駆り立てられる。

もう一つは単純なコロニーのようにも見えるが、コロニーではありえないような大きな穴が開いている。そちらも多くの戦艦が守る様に鎮座している所をマクマードはパソコンの映像越しに確認する。

「逃がすつもりは無いってわけか……まあ、こつちも逃げるつもりもあまりないがな」

マクマードの居室には多くの部下がスーツ姿で待機しており、その中に異彩の人物も混じっている。

ヤマギ・ギルマトンはキリつとした表情をしながら同じスーツを着込んでいる。マクマードが昔あった時はと言えば少々おかしいかもしれないが、マクマードはヤマギと何回か見たことがある。

初めて見たのは鉄華団がテイワズの直轄の組織に格上げによる式典の場であった。

正直最初の印象はその辺のガキと変わらないという点だった。だからだろう、戦力を求めていた際に会った時はまるで他人なのではないかと思わせたほどだった。

マクマードはその辺の理由は聞かなかったし、正直に言えば興味を持ちたくなかった。興味を持ってば同情してしまうかもしれない、興味を持ってば手助けしてやりたいくなるかもしれない、何よりそれができないことに絶望させるかもしれないことが嫌だった。

マクマードはもう一度目の前にあるスーツケースに目を向ける。スーツケースを開封し、中に確かにカードキーを入れる。

今回の会談はこのカードキーの取引である。しかし、マクマードの狙いは全く別である。

カードキーを入れたところを多くの幹部が同時に目撃しており、そのスーツケースをもう一度締めて鍵を掛けない。

同時にハンドガンを胸ポケットに入れていることを黙って確認するマクマードの狙いをもう一度確認する。

「オヤジ。あいつらがそろそろ会談の会場に来るようになって通告が……」

「ああ、分かってる」

そういいながらマクマードは居室から出ていくためにスーツケースを右手に持つ、そのまま居室を出ていくとまっすぐにシャトルへと向かった。

シャトルに入る前に歳星に残るメンバーに向けて小声で指示を出す。

「作戦が失敗したと判断したときは歳星は……」

「分かっています」

マクマードは他にも残るメンバーに会釈をし、そのまま複数のシャトルのうち一番大きなシャトルへと乗り込む。

シャトルの座席にはマクマードしか座っていない。

シャトルはゆっくりと歳星から出ていき、多くのモバイルスーツや多くの戦艦を横目に少しずつグノーシス要塞へと近づいていく。

マクマードは自分の目の前にあるスーツケースをじっと見つめる。

皇帝は謁見の間に誰もいないことを確認し、自分が普段座っている豪華な椅子の手すりの下を触れていると、手すりの下にあるボタンを押す。

椅子が横にずれていく。

そこには隠し通路が現れる、階段を下りていき薄暗い部屋には寂しいほどにコンクリートできており、部屋が一番奥には長方形の棺のような物が置かれており、太いパイプがいくつもつながっている。

その棺の一番上は透明なガラスケースになっており、棺の中にはフレアが腕を体の上で握りながらまるで眠っているようでもあった。

フレアはまるで眠っているような形になっているが、彼女は既にご世にはいない。生前の姿で冷凍されている彼女を皇帝は涙を流しながら抱きしめたい衝動に駆られていた。

棺の上から体を預けながら涙を流す。

「フレア……もう少しだ。もう少しで我々を追い詰めた地球を滅ぼすことが出来る」

地球という恵まれた環境が存在すると、木星や火星のような恵まれない環境に押し込まれて過ごす人間たちは苦しみを受けることになる。

実際火星は乾燥した大地に苦しみを受け、木星は汚れたコロニーの空気で病原菌の蔓延を体で受けていた。犯罪者を一つに押し込めて、見向きもしない地球という星に住む人々を多くの惑星の人々は妬み、恨み、嫉妬していた。

恵まれた環境。緑の多い大地、生き物の多く生息できる海、安定して住むことが出来る土地。それらを考えるだけで嫉妬に狂う人間は出てくる。

実際フレアは木星の環境の悪さが原因で命を落としたと言っても過言ではない。

いくら当時の皇帝が地球に環境改善を訴えても何も改善策も示さないどころか、無視をし続けるだけだった。

そもそも、皇帝の一家はバーンスタイン家と同じ木星では首相という存在であるが、逆に言えば厄祭戦の後で木星の地へと追いやられた。

立場で言えば、多少はましというだけで地球から支援を受けられないという点ではあまり変わらない。

皇帝は憎しみを原動力に、たとえ悪魔の所業と言われたとしても地球を滅ぼして見せると覚悟を決め突き進む。

「後少しだ……あと少しで地球を滅ぼす力を手に入れることが出来る」

皇帝は憎しみの目で地球を見る。

一丁の銃を胸にしまい、覚悟と憎しみを抱えていざ会談へと向かう。

ククナは改造を終えたエンペラーの前で腕を組みながら眺めていた。

エンペラーの背中には金属製の大型アームクロージャーがくっついており、全身のシルエットも不気味さを増したように見える。

エンペラーの改造プランBこそがこの姿だった。

背中に大きな手のひらがくっついていて、そのような姿はある意味悪魔のようにも見えるが、その手のひらが単純にマントに見える。

彼女は改造の最終調整を他の整備士に任せ、自らの部屋へと赴き服を着替え始める。白を基本色に金色の装飾が施されたスーツに身を纏い小さな手のひらサイズのハンドガンをスカートの中へと隠しながら彼女は部屋を出ていく。

最後にエンペラーの姿を確認しつつククナは船をそのまま降りて連絡通路に足を踏み出す。

グノーシス要塞の中へと足を踏み出すと、若い士官達がせわしなく動き回っている。足音を若干鬱陶しそうに聞きながらも、ククナは誰にも遭遇しないままに会談会場前までたどり着く。しかし、腕時計を確認すると時間はまだ一時間以上開いている。

「仕方ないわね」

そう思いながらククナは会場から五分ほどにあるジューススタンドへと足を運んだ。

時間を潰すだけならここで十分だろうと思い、ホットのブラックコーヒーを購入すると、彼女はコーヒーを飲みながら作戦を頭の中で思い出す。

今回の作戦次第では邪魔な人間をある程度始末出来るつもりであった。

「会談に参加するメンバーはテイワズからはマクマード。こちらからはあの人以外に私とオズボーンぐらいだったはず。あの人を考えは読めるからいいけど、問題はオズボーンよね。彼については私はあま

り知らないのよね。私が色々と外している間にテラが勝手に推奨したって聞いているし」

ククナとしては問題はオズボーン一人と言っても過言ではない。「オズボーンについてはある程度予測が出来るからいいんだけど。多分、コロニーレーザーの破壊、もしくは要塞の破壊でしょう。簡単にカードキーをわたすとは思えない。かといって自分以外の誰かに簡単に渡すとは思えない。しかし、こうなった以上自分で責任をとろうとはするはず」

マクマードの狙い。

今頃になってマクマードがコロニーレーザーのカードキーを引き渡すと言い始めた。その狙いが何なのかをククナなりに推測した結果でもある。

マクマードは敵の懐に入れるこのタイミングを待っていたのだろう。

しかし、ククナとしてはむしろ望む所といった感じであった。

何故なら、マクマードが問題を起こしてくれば木星帝国の掌握自体は難しくない。あのテイワズが全く問題を起こさないと終わらせはるはずがないと心の奥での確信があったからだ。

あのテイワズが全く問題を起こさずに事態を終わらせるはずがない。相手は義理と人情に強く行動を起こすマクマードである。名瀬・タービンの死に反応してジャスレイを斬り捨てたように、鉄華団のメンバーが一人でも多く生き残れるように手を打ったように、必ず義理と人情と基に行動する。

名瀬・タービンやオルガ・イツカだけではない。鉄華団やタービズなど、テイワズの名前で散っていった多くの人々の分まで戦うはずだ。

敵ながらそれが分かってしまう。

ククナはそれ自体は嫌いにはなれない。少なくとも皇帝より好きになれる性格だと思っていた。

しかし、好きになれるという理由は味方になるという理由にはならない。



マクマードをギリギリまで利用して自分が有利になる様に動くだけである。

「そろそろ会談会場に行こうかしら……」

腕時計で時間を確認すると、時刻は二十分前になっていた。再び会談会場前に辿り着くと大きな木製のドアを開いていく。

オズボーンは黒いスーツを身にまとい、胸には木星議会の象徴である円卓の黄金バッチが目立つ。

手元にあるスーツケースには大量の黄金が用意されており、彼は念入りに黄金のチェックに入っていた。

しかし、彼はスーツケースの底をひっきりなしにチェックしていた。

「ふむ。隠し底自体はうまく機能できている……か」

そういいながらスーツケースを閉めながら実質の椅子の背もたれに体を預ける。会談開始まで多少の時間がある為、自ら入れたコーヒーに角砂糖を一つまみとミルクをたっぷり入れたカフェオレを口に含む。

「ふう。うまくいくといいが……念のためにハンドガンを一丁隠しておこう。おそらくククナは問題を起こそうとするはず。問題は俺が先かククナが先かという問題だな」

カフェオレの入ったグラスを机の上に置き、机に置いておいた縦長の謎の端末を手取る。

「戦後の事を考えればここで手を打っておきたいところだ。しかし、問題は彼等がこの要塞宙域まで来てくれるかという事だ。こればかりは神頼みしかないだろうな」

グラスのふちを指でなぞりながらブツブツと呟く。

これからの会談の結果をどう持っていくかが今後の計画に響くと言っても過言ではない。ようは、ククナとの戦いでもあると言えるだろう。

木星帝国が一枚岩ではないどころか、何枚岩で例えてもきりがない。

ククナは皇帝を殺そうとしているような気がするが、それ自体を阻

止しようとは思わない。むしろ、オズボーンとしては都合のいいよう  
に行動できる気がする。

オズボーンの脳内では数百の戦略があり、ある程度のククナの行動  
は予測することが出来る。問題はアインであるとオズボーンは予想  
していた。

「あの男だけは予想しきれないところがある。だからこそ、こちらも  
秘策を用意する必要があるだろう。だからこそ、『彼ら』が来てくれる  
ことを祈ろう。それが多くの命を救う事にもなるのだから」

オズボーンはカフェオレを飲み干し、最後にハンドガンを胸ポケッ  
トの中に、スーツケースを片手に持ちながら部屋から出ていく。エレ  
ベーターで会談会場まで降りていくと、会談会場には既にマクマード  
を含めた全員が揃っていた。皇帝に会釈をすると、オズボーンは自分  
が指定されている席に座る。

いよいよ、泣いても、笑っても、後悔しても、悔しがっても、これ  
から起こる会談で戦いの行方が決まろうとしていた。

背筋を凍らせるような嫌な予感がにじませる『木星会談』が始まろ  
うとしていた。

## 君を想うⅡ 《思惑の交差》

2

ヤマギ・ギルマトンは胸に右手を握りしめて置き、右手の中には流星号のマークをかたどったペンダントが握りしめられていた。

「シノ……力を貸して」

彼は知らない。ノルバ・シノが生きているという事をいまだに。

しかし、ヤマギは決めてしまった。シノに胸を張って会うために戦おうと、その為というのもあったはずだ。それ以外にはマクマード達に対する恩があったというのも確かに存在する。

ヤマギ達がまともに仕事が出来るのもマクマードの後ろ盾があったからこそ雪之丞は会社を設立することが出来たのだろう。

しかし、それはマクマードが……テイワズが存在していればという前提条件でもあった。

テイワズが姿を消した以上、雪之丞の会社も存続の危機に落とされた。テイワズとの関係が会社経営を次第に悪くさせていった。そんな時にマクマードの密命を受けたアジーから連絡を受けた。

その内容は「手伝ってほしいことがある」という事、「テイワズが造ってしまった兵器を壊したい」と立て続けに言われ最後には「死ぬかもしれない戦いになるから覚悟できるものだけついてきてほしい」という言葉と共にヤマギは覚悟して参加した。

そうすればせめてシノと会った時に胸を張って会う事が出来るよ  
うな気がした。

もちろんすべてのメンバーが付いてきたわけではない。しかし、鉄華団の元メンバーの内古くからのメンバーは付いてきてくれた。

残った者達は各地に散っていった。

それ自体をヤマギは責めることは無い。むしろ堅実的な判断を下したと尊敬できるぐらいである。そんな堅実的な判断を下したメンバーの中には古くからのメンバーも多少は存在した。

そんな古くからのメンバーは会社経営の中で家庭を持ち、堅実的な生活を選び、戦いが起きる中で旧ギヤラルホルンが作った自治地区に

避難していった。その後は、EDMが自治地区の自治を引き受け、今も幸せに暮らしている。

もちろん、ヤマギはそんなことを知る由もないが、少なくとも生きて生きている事切実に祈っていた。

そんなヤマギ達の想いとは別に四人の思惑の交わる会談が行われようとしていた。

「君達鉄華団は要塞の連結部の内三番を破壊してくれ」「分かりました」

テイワズの幹部の一人からの連絡にヤマギが代表して話しかけていると周囲のメンバーたちの表情は一段と引き締まる。

交渉の終了と同時に攻撃を仕掛け、要塞の連結部を破壊して要塞を破壊する。最悪は歳星を使ってコロニーレーザーだけでも破壊する。それがマクマードが周囲に協力を要請した理由で会った。

しかし、同時にヤマギはこの話を今の今になって作戦を聞いたのだ。それまでは全く作戦内容を知りもしなかった。

まるで、内部に裏切り者を感じ取っているかのようだった。その直感が当たっているという事をヤマギ達は知る由もない。

ククナが送り付けた元ジャスレイの会社の生き残りこそが裏切り者だった。だからこそ、マクマードとククナの戦略は既に始まり、会談が始まる前にはオズボーンも自身の策の確認を行っていた。皇帝もまた、カードキーを手に入れようと必死になっていた。

各々の思惑の交差する会談が始まろうとしていた。

3

マクマードとオズボーンが長机の上にスーツケースを置いたのはほぼ同時だった。

ククナはマクマードを見つめながらその口を開いた。

「では、マクマードさん。そちらはコロニーレーザーのカードキーの引き渡し、こちらはそれを買う為の多額の金塊の引き渡し。それでよろしいですね」

「……………それで構わない」

こちらの意図を会話の中で知られぬようにと言葉数は少なく。そ

れに対してククナはある程度はこの展開を予想をしていた。逆に言えばこれで確定的になった。

間違いない。

アインも別部屋で待機しながら時を待っていた。

スーツケースをお互いの部下が交換する様に引き渡し、ククナの前にはマクマードが持っていたスーツケースが、マクマードの前にはオズボーンが持っていたスーツケースが置かれた。

これに対してオズボーンもまた確信を得た。

(間違いない。テイワズの中にククナの刺客がいる。そして、いま受け取った人物もククナが事前に用意した人間であろう。だからこそ、俺ではなくククナの方へと持っていた)

同時に皇帝もククナの元へと持っていたことへの不信感をあらわにしたが、しかし、皇帝はこの策はマクマードだと考えた。

そして、この場合正解は皇帝である。

ククナの前に持ってきたことに誰よりも驚いたのはククナであった。

一瞬、オズボーンを疑い実際目が合った時に嫌疑の目を見て考えを改めた。皇帝とマクマードの睨み合いに気が付いた。

その段階でオズボーンもこの考えに気が付いた。

オズボーンは逆にその策のその先に気が付き、ククナも気が付いた。

しかし、皇帝だけはその先の思惑に気が付いた。

「マクマード貴様との付き合いも長い。だからこそ、私には分かるぞ」とそんな低めの声にマクマードはスーツケースに伸びていた手をふと止め、視線を皇帝の方へと向けた。マクマードはスーツケースを開ける手間をあえてやめ、皇帝を無言の目で見つめた。

ククナが刺客を送り込んだように、マクマードもまた刺客を送り込んでいた。

「ククナ。中身を確認しろ」

その言葉を受けてククナはゆっくりと蓋を開くと、そこにはカードキーが入っていなかった。

マクマードの後ろで待機していたククナの送り込んだ刺客は驚きと共にマクマードを見た。その瞬間にマクマードは裏切り者が誰かを瞬時に把握、ククナは舌打ちをしたくなる気持ちでいっぱいになった。

ククナの思惑ではマクマードとの交渉の最中に後ろから皇帝を撃つことでマクマードに責任を押し付け、自身の手によってマクマードを撃つことで木星帝国掌握の建前を得ようとしていた。しかし、マクマードによってそれが未然に阻止されてしまった。

オズボーンはこの段階で自分が一番有利だと確信に至る。

この段階でククナの思惑は外れてしまうことになった。

「マクマード。カードキーをどこに隠した？」

ククナの明けたスーツケースの中にはカードキーが入っていないかった。

しかし、マクマードがカードキーをスーツケースに入れるところをテイワズのメンバーが見ていることは誰もが見ていた。だからこそ、驚きと共に全員が凝視していた。

しかし、同時にククナはカードキーのおおよその場所を推測した。(用心深いこの男の事だ。自分の手の内から手放すとは思えない。だとするならカードキーはあの男の手の打ちという事になる。どこかに隠しているんでしょね。少なくとも一度はスーツケースの中に入れてあるんだから。シャトルで移動する際に彼は一人になった。間違いなくあの時に隠したんでしょね)

その瞬間に皇帝がマクマードにハンドガン向け、マクマードも瞬時に反応しハンドガンを向ける。

「そちらのお嬢さんが仕掛けたことではありませんか？」

マクマードのそんな声はククナにハンドガンをとらせるには十分だった。

「あら、私が盗んだとおっしゃる？盗んだのはそちらではないかしら？」

しかし、この状況下で同じようにハンドガンを取り出したオズボーンだけが状況を冷静に考察していた。

（おかしい。この状況で問題を起こす。という事は、マクマードはこの状況にしたいという事だ。やはり、マクマードの目的自体は問題を起こす先という事か。この会談に持ち込んだ時点でマクマードにとっては勝ちという事だろう。やはり、目的はこの要塞とコロニーレーザーの破壊だろう。しかし、カードキーを手放さないという事は、カードキーの中身までは知らないという事だ。それを確かめないことには手放す気にならないという事でもある。偽物を仕込まない時点である程度の策は予測できる。問題を起こすことが目的という事だ。なら……）

マクマードがハンドガンの引き金に指を懸けた瞬間。他の四人も同時に指を懸けた。しかし、オズボーンだけがポケットの中に入れておいた小さな機械のボタンを押し、その瞬間に二つのスーツケースからスモッグが立ち込めて視界を生める。

皇帝はこれをマクマードからの宣戦布告と受け取り、マクマードも同時に混乱を起こしながらもチャンスと受け取りハンドガンの引き金を引こうと力を籠める。ククナはこれがオズボーンの策だと考えながらもオズボーンが皇帝を守るためだと判断する。しかし、同時に別の思案が思い浮かぶ。

（オズボーンの狙いは皇帝の守護でしょう。という事は……マクマードからカードキーを奪い取ることが先ね）

そう思いながらもククナはハンドガンをマクマードの方へと向けた。しかし、オズボーンがやはり一番確信に近い所に居た。

（この状況ならククナが皇帝を殺すことはしないだろう。何せこの場でマクマードを殺さないとカードキーが手に入る可能性が格段に減るからな。それならククナの狙いは間違いなくマクマードのはずだ。皇帝の腕ではマクマードを殺すことはできないだろう。いや、むしろマクマードが皇帝を殺す事をククナ自身が望んでいるかもしれない。それぐらいなら勝手にしてくれて構わない。こちらはマクマードを生かしておくことが先決だ。少しでも長く生きればそれだけ彼らがここに来る可能性が生まれるだろう。問題があるとすればそこから彼らがどうやって逃げるかに尽きる）

そう思いながらハンドガンの引き金に指を載せハンドガンの銃口をマクマードとは別の方向へと向けた。

スモッグが視界を潰し、誰がどこにいるかが分からないこの状況でなった銃声は三つだった。

思惑の交差する会話は終わりをづけ、予想外の行動へと至る戦いへと向かおうとしていた。

4

ノルバ・シノは焦りと共にパイロットルームの椅子に座りリラックヌ出来ずにいた。

両手を握りしめながら出撃のタイミングを今か今かと待ちわびながら貧乏ゆすりを起こしていた。そんなシノに対してサラが苦言を呈す。

「止めませんか貧乏ゆすり」

シノは無言のまま貧乏ゆすりを一旦止め、数秒後には再び行い始める。苛立ちは全員に伝染する様に苛立ちが募っていく。

マークが怒鳴り散らそうと声を出そうとした段階でサブレが口を開いた。

「止めるというのが聞えないのか？シノ」

「……………」

「別にお前だけが焦っているわけでも無い。今お前が焦ってすぐに到着するならそれでもいい。だが、お前が焦ったところで何も変わらないうという事は分かっているはずだ」

「……………」

「それとも、俺に対して返事ができないくらいに追い詰められているってことか？」

「……………」

全員が分かっている事、サブレだって分かっている事である。ここ数日のシノは明らかにおかしかった。無意味に明るく振舞おうとする傾向がみられたのは一か月くらい前のクリュセ攻防戦での時である。

そう、シノはライドの死に対しそれなりにショックを受けはした。



しかし、涙を流すビスケットに対し、自分がすっかりしななければという想いから踏みとどまって明るく接した。しかし、それは同時にシノに自分を追い詰めるきっかけになる。

それが分からないサブレではない。しかし、サブレとて苛立ちを抱えながらそれを発散させようとため込んでいる時期である。みな同じ、ストレスの吐け先に敵のモビルスーツを求めている。しかし、シノだけは今までの分を含めてそれ以上のストレスを爆発させようとしていた。

実際、サブレの言葉でストレスは爆発する。

サブレの胸倉に食らいつき壁に叩きつけながら睨みつける。

「分かってるよ!!俺が焦ったも仕方がないということぐらい!」

「……………だつたらイライラするようなことぐらいきっぱりやめたらどうだ!?!」

サブレも同時に叫び苛立ちシノの胸倉に食らいつく。その瞬間にパイロットルームの中にイオリとビスケットがジューズの差し入れをもって現れた。イオリがシノを前から抑え、ビスケットはサブレを後ろから抑えた。

「みんなも頼むから押さえて!」

皆が一斉に二人を押さえる。イオリはシノを連れて部屋から出ていき、小さな小部屋に落ち着かせる。ソファに座らせて落ち着いたところでジューズを手渡す。

「すまねえ。情けない所を見せちゃった」

イオリは隣に座りシノの方へと視線を向ける。そんな沈黙の時間が三十分だけ続くとシノが昔を思い出しながら語り出す。

「鉄華団の時代はさ、ユージンってやつと一緒に風俗に行ってたんだよ。鉄華団には女との出会い何てあまりなかったしな。メリビツトさんはおやつさんと付き合ってたし、アトラやクーデリアのお嬢さんは三日月に好意を抱いていたしな。まあ、俺はそういう意味じゃあ縁がなかったしな。鉄華団にはヤマギって奴がいるんだけどよ。そいつ、女みたいなやつでさ、俺に好意を向けてい事に俺は最後の戦いまで気が付かなかった。結局ヤマギとはそれつきり話をしていなかった。

気づいたってことも話せなかったよ」

「シノさんは……そのヤマギっていう方とはどう……なりたいですか?」

「何っていうかな……そういうのも家族っぽくていいかもなって。俺、家族って知らないしき。みんなに言うことだけだよ。俺達はみんな家族を知らないからな。知りたかったんだよ。家族を……だけ……!」

そんなシノの想いは自らの行動でファイになってしまふ。

「もちろんさ。このファントムブラッド隊だって感謝しているし、楽しいと思うぜ。でもさ……俺、あいつにあつてやらなくちやいけなんだよ。そうでないと俺は……前を向けない」

イオリは強く、強く抱きしめながらシノの耳元でささやきかける。「会えますよ。会えるように私も祈ります。私の想いはあなたの想いですから」

君を想う。

この戦いはどう向かうかは誰にも分からず、シノとイオリは祈り、想う事しかできなかつた。

「想いは通じるかな?」

「通じますよ。シノさんが忘れなければ……伝えてください」

それぐらいしかイオリにはできなかつた。

## 君を想うⅢ 《誇りの向かう先》

5

後に鉄華団になるCGCに入ったばかりの頃、右を見ても左を見ても怖い男ばかりだった。ヤマギには怖かったし、誰も信じられないという状況で始めて自分に声をかけてきたのがシノだった。

「どうしたんだよ？ ついて来いよ」

そういつて手を引っ張ってくれたシノをヤマギは心を開き始めた。

そうやってオルガ・イツカ、三日月・オーガス達と出会いいろんな人達と出会えていく。しかし、そんなみんなはかつての最後と信じた戦いで死んでいった。

ヤマギはこの戦いを最後と決め死中に突き進むことを決めた。いつの日か、ヤマギの前を歩いていった人たちと同じく、その道を自分も進みたい。せめて、それだけがシノに会う方法だと信じていた。

しかし、彼は知らない。シノやビスケットや三日月が生きていて、ヤマギの事を心配しているとは知らない。

集中するあまり過去を思い出していると、隣から鉄華団のメンバーがヤマギの右肩を揺らす。ヤマギの意識が一気に現実へと引き戻される。

テイワズの中心メンバーの一部が負傷したマクマードと共に戻ってくる、いよいよ作戦を実行に移す時が来たと判断し近くまで近寄ると、ヤマギの近くにいたテイワズのメンバーがマクマードのそばまで近づいていく。

心配そうな表情を浮かべるメンバーに対し、マクマードはあくまでも大丈夫だと周囲に言い聞かせ左腕を押さえていた右手を離し、隣に立っていた幹部がマクマードの治療に入った。

「お前達はそれぞれの連結部へと急げ」

「親父はどうするんだ？」

「俺は一番連結部へと行く。それと——」

そこまで言うのとマクマードは胸元に隠しておいたカードキーを取り出してヤマギへと渡す。ヤマギはそれをおっかなびっくり受け取

ると、マクマードの方へと視線を向ける。

「これは……マクマードさんに返したはずですが？」

「それはお前さんがクーデリアの譲さんから託された物だ。お前が持っているべきだ」

「しかし、これは敵の狙いの一つでは？ だったら壊した方が——」

「いや、このカードキーの内一つはコロニーレーザーを自爆させることが出来るらしい。それを確かめるまでは壊すわけにはいかない。だから、お前さん達はカードキーの使い道を探り、自爆できそうならコロニーレーザーを自爆させてくれ。出来そうに無いならそのカードキーを破壊してくれ」

ヤマギはカードキーを握りしめ黙ってうなずく。

マクマードは部下が持ってきたノーマルスーツに着替え始める。ヤマギを含めた多くのメンバーがハンドガンやアサルトライフルの準備を始める。

マクマードがノーマルスーツを着ると、準備を終えたメンバーが行動を始める為四つに分かれて行動し始める。

外ではモビルスーツ隊が木星帝国のモビルスーツを強奪しながら戦闘に入っており、木星帝国は混乱状態もあり行動が大きく遅れている。

この状況を利用しない手はない。それがマクマードが決めた作戦でもあった。

ヤマギは鉄華団のメンバーと共に下へと向かうためエレベーターへと向かうが、さすがにエレベーターの前には木星帝国の部隊が張り込んでおり簡単には乗り込めさせてはくれない。

「ヤマギ。通気口からなら下に降りれるんじゃないか？」

ヤマギは来た道を途中まで引き返し、小さな個室の中へと入って通気口の出入り口を見つけ出す。一人一人が入っていく中、遠くから嫌な声が聞えてきた。

「こつちにテイワズの残党がいるぞ！」

「ほかのメンバーも早く！」

中に入ったヤマギが最後に残った二人に声をかけるが、しかし、二人はアサルトライフルを構えてドアのところで戦い始める。

「俺達はその小さな通気口には入れない。ここで敵を食い止める！」

そんな声と共にアサルトライフルの銃撃音が響き渡り、前に進むたびに小さくなるが、唐突に音が鳴らなくなる。ヤマギが下への道に入った時、奥の方から木星帝国の声が聞えてきた。

「奴らは通気口の奥へと進んで行ったぞ！回り込め」

ヤマギは急ぎ足で進んでいく。降りた先の部屋は小汚い倉庫のような部屋であった。小部屋から反対側の部屋を通じて再び通気口へと入っていく。

一人、また一人と倒れていく中ヤマギはようやく第一コントロールルームの前へとたどり着いた。

第一コントロールルームの自動ドアの隣の装置にカードキーを通すと、ドアが無音で素早く開き始める。ヤマギが中に入って確かめようとするが、それをたった一人の人物が反対側から声をかけてきた。「やはり、そちらが我々の求めるカードキーだったか……そのカードキーは我々が貰い受けよう」

右手を伸ばすその人物はアイン・ダルトンだった。

アインから向けられる真っ黒な無の瞳の前にヤマギは恐怖を覚えてしまった。後ずさりしてしまう。アインはまた一步前に踏み出す。

後ろに居た鉄華団のメンバーが一步前に出るとアサルトライフルをアインの方へと向けて、容赦のない引き金を引こうとするが、さらにその後方からFがすさまじいまでの速度で近づいてくる。鉄華団のメンバーが銃口をFの方へと向けるが、引き金を引く前にナイフが斜めに体を切り裂き、ハンドガンで顎下から頭を狙撃した。

ヤマギは恐怖のあまりカードキーを手から零してしまう。慌てて拾おうとするが、Fが襲い掛かろうとするため、ヤマギは慌てて数歩後ずさりする。

鉄華団のメンバーがヤマギの盾になる様に姿を現し、ヤマギを連れられた状態で撤退していく。その姿を最後まで見届けると、アインはカードキーを回収する。

Fの方を一旦見ると、Fはアインに一睨みするとそのまま鉄華団を追いかけていく。

「どうせペペロ辺りから余計なことを聞いたのだろうか……」

そういつてコントロールルームの電源を入れると部屋中の仮想デスクトップが部屋中を明るく照らししていく。気が付けば部屋中が仮想デスクトップだらけになっていく。

アインはククナへと連絡を飛ばした。

「ククナ。コロニーレーザーの操作施設を抑えた。？このままここで待機していいのかな？」

ククナの奥からは銃撃戦の音だけが聞えてきた。不安になりながらもこの場所を死守することだけを考えていた。

時間は少しだけ巻き戻る。

階段が終わってすぐククナはアインの元へと急いだ。手首を負傷しているようで、手首をおさえながら歩いてくる。

「やられたわ。オズボーンの狙いがマクマードを生かしていくことなんて……しかも、自分が撃つたという明確な証拠を隠されてしまったわ。やられたわね。何を狙っているのかしら？」

アインが冷却材を用意しククナの手首に当てる。会談の部屋からテイワズのメンバーがやってくる。

「申し訳ありません。ククナ様。まさか、マクマードがカードキーを隠していたとは」

「もういいわよ。今更だし、それにカードキーを手に入れる事は確実にしておきたいしね」

そこまで行ったところでアインが自ら名乗りだす。

「なら俺が行こう。ククナは手首を負傷しているし、コントロールルームのどちらかに張っていれば必ず来るはずだ。うまく戦力を減らしながらコントロールルームまで導けばいい」

そういつて姿を消し、アインとすれ違う形で皇帝がマクマードを追いかけたという連絡を受けた。

「マクマードはどちらに向かっているの？」

「それが第一連結部へと向かったらしく……」

「この要塞を破壊するのが目的かしらね？なら他の連結部にも部下を向かわせているかもしれないわ。あなた達は他の連結部に向かいなさい。私は皇帝の援護に向かうわ」

この言葉を全員が真に受ける中、ククナの本心は別の所にある。このゴタゴタを利用して皇帝を暗殺しようとしていた。

ククナはとりあえずハンドガンを別に用意しそれを隠しながら人の居ない道を選んで先にすすもうとする。

その頃、オズボーンはある連絡用デバイスを片手に格納庫へとたどり着く、格納庫三階から窓越しに格納庫の様子を見ており、いくつかのシャトルが出立の準備に明け暮れていた。

「あれ〜？そこに居るのは〜オズボーン君かなあ〜」

そんなオズボーンにとって不愉快な声が聞えてくる。オズボーンは不愉快そうな表情を浮かべながら振り返るとピエロ姿のペペロが逆立ちしながら歩いてくる。

「貴様はなぜここに居る？お前の管轄は本土防衛だったはず。まさか、Fを連れてきたのは貴様か？」

「いいじゃないかあ〜、それより……皇帝陛下はどうしたのお〜僕はあ〜てつきり君が連れて帰つてくるとお〜思ったのになあ〜」

オズボーンは白々しいことを言うと思いつつ腕を組んでペペロの方を視線で確認する様に見る。ペペロの体には怪我したような跡は見えてこない。

「貴様は皇帝陛下を心配していたのか？」

ペペロは一瞬だけ思考したような表情を浮かべると、再び不気味な微笑みを浮かべながら部屋から出ていこうとする。

「もちろんだよお〜僕は皇帝陛下に忠誠を誓っているんだよお〜」

そんな白々しいことを言いながら部屋から出ていく。

「どういふつもりで嘘をついているのかいまいちわからん男だな」

思案顔になるオズボーンはいまいち理解してなさそうな表情を浮かべる。実際ペペロの研究所は誰にも開けられたことは無い。そもそも、研究所というのはいくらも研究員を複数名を雇い入れるはずである。しかし、ペペロの研究所ではペペロ以外に雇い入れているとこ

ろをオズボーンは見たことが無い。

オズボーンは議長として様々な書類や施設に関する情報に目を通す事が多い。そんなオズボーンですら把握しきれないペペロに対する油断は命に直結しかねない。

警戒心を高めながらペペロに対する考察を続ける。

しかし、そんな時、大きな爆発が第一連結部方面から響き渡るころ、オズボーンはファントムブラッド隊が近づいてきていることに対する確信を得る。

6

マクマードは弾切れしたハンドガンを空中に投げ捨てる。彼は第一連結部への最後のドアへと辿り着いた。手のひらサイズの端末で鍵を開けるとそのまま大きな部屋へとたどり着く。

長い廊下を歩いて奥へと進んで行くと、マクマードは連結している支柱に辿り着く。支柱の周りに爆弾をくっつけていく、最後に支柱の所のキーボードにつながるとキーボードを操作しながら爆弾と起爆装置を繋げてしまう。最後に起爆の為の操作へと移る途中に大きな発砲音と共にマクマードの右側腹部に鋭い痛みと共に赤い染みが広がっていく。左手で右側腹部を強く抑えながら振り返る。

そこには恐ろしいほどの形相でマクマードを睨みつける皇帝の姿があつた。

「貴様……マクマード!! 貴様さえ大人しく従っていれば」

ハンドガンを握りしめる右腕が震えているのは会談会場でマクマードが皇帝の右腕を撃ち抜いたからだろう。マクマードは痛みで表情を暗くさせる。

マクマードは体でキーボードを隠しながら右手でキーボードを入力している。皇帝は気が付いていないようで怒りの形相で近づいていく。

憎しみ、怒りに突き動かされる皇帝に対する対抗策などマクマードには既に存在しない。そもそも、マクマードは皇帝がここまで追いかけてくるとは予想していなかった。

片手ではうまくキーボードを打ち込めず、苦しんでいると皇帝はマ



クマードの右足、左足と連続で撃ち抜いていく。

赤い染みがどんどん広がっていく中、マクマードはずるずると体を地面に近づけていく。痛みと同時に体中から力が抜けていくのが分かる。

自分の体が死へと向かう中、マクマードのすぐそばまで皇帝が近づいてきながらマクマードの首に手を掛けて心臓に銃口を向ける。

「マクマード！大人しくカードキーをわたせ。そうすれば楽に殺してやろう。貴様とて苦しみながら死にたくは無かろう」

キーボードを打つこむのは無理そう、マクマードは正直諦めながらまつすぐと視線を皇帝の方へと向ける。

「……………断る」

心臓に一発発砲すると、マクマードの口から大量の血がバイザーの内側から真っ赤に染め上げる。虫の息に早変わりするマクマードとは別に皇帝の後ろの方から若い男の声が聞えてくる。

「皇帝陛下！アイン・ダルトンがカードキーを手に入れたという情報を！」

「本当に持っていないかったか……なら生かしておく理由はないな」

そう言うのと真っ赤になったバイザーへと銃口を当て額めがけて銃の引き金を引いた。

バイザーが粉々に砕けちり、マクマードの額に風穴があいてしまう。大きく目を開き体が支柱にぶつかってしまふ。

皇帝は振り返り若い士官の元へと急ぎ出入り口に足を掛けたところでマクマードの右腕が動き始める。

頭と心臓は撃ち抜かれ体は動くはずがなく、動けるわけが無い。それでも、マクマードの意識ははつきりしていた。不思議と右腕が動いていき、キーボードに指を伸ばしていく。

その腕にはまるで他の誰かの存在が突き動かしていくようであった。

完全にドアを潜ったところでようやく皇帝はマクマードが動いていることに気が付いた。

「バカな!? 貴様、どうして動ける!?!」

マクマードは自爆の為に最後のキーボードを叩いた。

皇帝が何かを言っていたような気がするが、爆発音と隔壁を兼ねるドアが安全の為に閉まってしまっただけで何も聞こえなかった。

皇帝は大きな爆発音とは全く別の支柱が壊されたことによる突風に吹き飛ばされ、再び傷が開いてしまう。

憎しみと怒りが留まるところを知らず、表情は歪み切っている。

しかし、そんな皇帝の体を謎の新しい痛みが左胸から生じる。驚いて顔を上げながら発砲音のした方へと向けると、そこにはハンドガンを構えたククナが立ち尽くしていた。

「その様子ですと、どうやらマクマードは自分の目的を達することが出来たようですね」

周囲には皇帝以外にも誰もいない所を確認しての犯行だった。

「ククナ!? 貴様まで裏切るのか!?!」

「裏切る? 何を仰っているのですか? 私達を娘のようにも思わず、私達を都合のいい存在として扱うのがいけないのでしょうか。これは私達家族からの復讐です」

「ククナアア!!」

それが皇帝の最後の言葉になった。

マクマードは崩壊しつつある第一連結部の中で、支柱に体を預けながら瓦礫に埋もれそうになりながら体の感覚を失いつつあった。

大量の血が周囲を漂っており、マクマードのノーマルスーツは真っ赤に染まり切っている。

人間の体にはこれだけの血液が入っているのだと呑気な事を考えているが、それは完全に諦めているからだだった。

「ようやく……あいつらの元へと逝けるな……」

これで死んでいった息子達という名の部下の元へと逝くことができる。

長かった。

『オヤジがいたから俺達はあそこまで行けたんだぜ』

『逝こう。オヤジ』

マクマードは黙って視線をあげるとそこにはいないはずの名瀬や

オルガ達が自分へと手を伸ばしていた。

マクマードは一筋の涙を流しながらその手を握る。それだけで………幸せだった。

マクマードの体が瓦礫に埋もれていくなか、第一連結部が崩壊していく。

ああ、生きていた意味があつた。

お前たちにあえて本当に良かった。

## 君を想うⅣ 《遅すぎた覚醒》

7

シノはヤマギに会い、ヤマギの気持ちを確かめる為にひたすら進み続けた。その為には、自分が強くならなくてはならない。弱く誰かに頼らなければ生きていくこともできない自分ではいられなかった。

「もう………いいんだよ」

マクギリス・フリード事件が終った直後のノルバ・シノは自殺しなだけでましというような評価が下されるような状況だった。

仕方がない。

誰もシノを責めてはくれず、いつそ死んでしまえた方が気持的に楽になれたほどだ。

シノはどうしようもない苦しみの中で生きていたが、彼に声をかけたのがサブレだった。

「アンタが望むなら火星までの護衛が俺が受けよう。でも、アンタの中に前に進むとうとする意思が残っているのなら、自分がどうしたいのかをきちんと決めることだ。後悔しないようにな」

その時はシノには何を言っているのかは分からなかった。

しかし、夜になって一人で考えていると、ビスケットが前を向いて生きていく姿を、自分の今の姿を見たときヤマギはどう思うだろうかと。

嬉しそうに駆け寄っては来るだろう。しかし、傷ついた自分に気を使うように生きることになる。シノはそれを嫌だと思った。

もし、会うのなら胸を張って会いに行きたい。

シノは次の日には病院の反対を押し切ってEDMの本社へと向かい、サブレに会いに行つてEDMに就職する手続きを踏んでいった。

シノは自分で決めた道を進んで行くことに決めた。その先にヤマギと交わると信じ続けて——、今はそれしかできない。

焦りながら進む道確かめて彼らは戦場まであと十分というところまで来ていた。

ヤマギはシノとの思い出を頭の中で思い出していると、大きな爆発

音と衝撃がヤマギの意識を現実まで引き戻す。シャトルの内蔵されている歳星の格納庫の中で脱出の準備を待っていた。

しかし、その爆発のした方向は要塞の第一連結部の方向だった。

「おい！オヤジから連絡はあったのか!?親父は……………」

何人かが動揺していると、一人が大きな怒鳴り声で周囲の動揺を鎮める。

「分かっているだろ！オヤジは役目を全うしたってことだ！なら俺達は俺達のもう一つの役目を達成するしかない！この歳星をコロニーレーザーにぶつけて破壊する」

数人が「そうだな……」と呟きながら奥へと消えていく中、歳星の整備長がやってきてヤマギ達に話しかけてくる。

「ヤマギ君。君たちは逃げなさい。歳星がコロニーレーザーにまつすぐ向かっていけば、敵の注意はこの歳星の方を向くだろう。君たちはその隙にこの宙域から離れなさい。今我々が持っているモビルスーツをすべて君たちの援護に向けよう」

「でも、僕たちだってまだ戦えます」

「いや、ダメだ。君達は生きてほしい。勝手な言い分かもしれないが、巻き込んで済まない。オヤジもいざとなったら君達を逃がすつもりだった」

ヤマギは食い下がろうとする、ここで果てるつもりでもあったからだ。そうでなければシノに会えそうになかった。

しかし、どうしようもない。整備長達は引くつもりがないぐらいは分かっている。

下唇を噛みながら受け入れるしかない。

ヤマギ達がシャトルに乗り、多数のシャトルが歳星から多くのモビルスーツと共に出ていくのを確認すると、歳星はそのままコロニーレーザーへと突き進む。

ヤマギはシャトルが歳星から遠ざかっていく姿を遠目で確認しながらティワズ製のモビルスーツ多数がシャトルを護衛する形で、宙域からの脱出する為に進んで行く。

歳星がコロニーレーザーへと突き進んでいく中、多くの木星帝国製

のモバイルスーツが歳星を取り囲み、その攻撃で歳星のあちらこちらから火の手が上がり、それでも止まることなく突き進む。

格納庫の中にすら火が昇っていき、マクマードの邸宅も瓦礫の中へと沈んでいく。

歳星がコロニーレーザーにぶつかる前に戦闘宙域に一隻の戦艦が姿を現した。

ヴァルハラの世界の中で歳星はコロニーレーザーと衝突した。

ククナは第一コントロールルームの中へと入っていき、いつの間にかこの部屋を任されていたアインが姿を消している。そこを見ると、どうやらファントムブラッド隊が近づいているようだ。

コントロールルームの操作盤越しにコロニーレーザーの照射準備に入る。射出する場所を選択し、太陽系の地図上に照射しやすい火星を選ぶ。火星のクリュセを選び取り、チャージタイムに入る。

同じとき、ジャックは第二格納庫で出撃の時を今か今かと待ちわびていた。

しかし、ジャックの世界の端でアルミリアが木星本国へ帰る前のペロと話し込んでいた姿を目撃していた。

「……………でよお。いいかい？」

「何をやっているんだろ」

のぞき込むとそのままペロが薬品の入った注射器をアルミリアの細い右腕に注入する瞬間であった。

「止めた方がいいのかな？でも、あとで目を付けられたくないしな。まあ、関係なさそうだし良いかな」

そんなことをしているとアインがパイロットスーツを着て格納庫の中へと姿を現すと、ちょうどアルミリアに薬品を撃ち終わったペロと鉢合わせる。

「ペペロもどきの研究員がこんなところで何をしている？」

「いえいえ。研究を快く思わない現場主義者殿にはまるで理解できないことですよ」

お互いがお互いを不気味に思っており、ペペロもアインもお互いに信頼できずにいる。むしろ、お互いの計画の障害になるのではない

か、と警戒心を高めていた。

それは決して間違えてはいない。

同じ組織に所属はしてはいても、幹部のほとんどは何を考えているのかは誰にもわからない。それはククナとアインにとつても同じことである。

しかし、アインには確信に似た思いを抱えていた。

ククナはいざとなったら自分の計画に賛同するだろうという確信。それは、決して間違えておらず、ククナは自分の計画が失敗したときはアインの計画を進めるつもりであった。

「だからこそ、勝たなければならない」

勝つことではしか計画を進められない。

ペペロのシャトルが出立する所を見届けるとアインはエンペラーに乗り込む。

アインが乗り込むところを確認したオズボーンは自らの端末へと視線を向け、端末に表示されているアイコンをタッチする、するとある人物へと向けて自分の連絡先を飛ばす。

そんな中、ククナの元に集まってきた多くの幹部の前でククナは宣言する。

「皇帝陛下はEDMの策略によって遣わされたマクマードの手で殺された！このまま彼らの侵略を受けてもいいのか？いずれは私達の家族にさえ手を出すだろう。愛する者を守る為、何より我らの故郷を守る為に立ち上がろう！」

宣言が終わり、多くの将兵たちが戦う準備を始めた頃に歳星がコロニーレーザーへと向けて動き出す。

現在コロニーレーザーはチャージ中であり、チャージ中に本体がダメージを受けた場合は内部から崩壊する可能性がある。

「今すぐチャージを停止、本体防衛の為にモビルスーツを派遣しなさい」

「しかし、現在歳星から出立したシャトルとモビルスーツが宙域からの脱出を図っておりますが？」

「そちらは一旦無視よ。コロニーレーザーを防衛することに集中しな

さい」

部下たちは一旦チャージを停止して、全てのモビルスーツに防衛に集中する様に指示を出し始める。

アインはククナの指示が出される前に歳星を落とすためにジャックとアルミリアと共に出撃していた。

アインはエンペラーの背中についている新しいハンドファンネルを開放すると、ハンドファンネルは手のひらの砲台からチャージされた圧縮ビームを歳星の側面へと放つ。

ジャックはブルーレイの連撃で後方のエンジンを狙う。しかし、歳星も最後の最後まで武装を使って反撃を試みる。

アルミリアはランスで前方から攻撃するが、これといった打撃を与えられないまま時間だけが無情にも過ぎ去り、接触する直前には危ないという判断の元多くのモビルスーツが歳星から離れる。その瞬間にアインはサブレの接近を感じ取る。

「来たか!? サブレ・グリフォン」

アインがヴァルハラ出現場所を向く瞬間と歳星がぶつかった瞬間はほとんど同時であった。

8

歳星がぶつかる瞬間をその目で目撃したビスケットは啞然とした表情でその最後を目撃した。

「ま、間に合わなかった?」

食堂で口を両手で押さえながらアトラも目頭を熱くさせる。クレアがアトラの背中から抱きしめる。

「大丈夫」

元鉄華団のメンバーにとっては思い出深い場所。

そんな場所が無残にも破壊された瞬間は見えていてつらい。しかし、この状況で一機のモビルスーツが無断で出撃する。

それに気が付いたのはイオリだった。

「メテオが!? シノさんが無断で出撃しました!」

ビスケットが驚きと共に視線をメテオの方へと向け、同時に明楽とサブレが連続で出撃していく。



「俺と明楽でシノの援護をしながらシャトルを回収する！兄さん達はサラ達と一緒に艦の防衛に集中！」

「わかった！そっちも気を付けて！」

サブレが遠ざかっていく様を見届けながらサラ達が接近してくるモビルスーツ隊の多さに目移りをしそうになる。

「流石にこれだけの数を相手するのは無理だぞ」

レオの愚痴をサラが「全部を相手する必要性はないでしょ？あくまでも先輩たちが戻ってくるまで耐えるしかない」と言つて全員が気持ち切り替える。

同じ時、ククナは全モビルスーツ隊にシャトルの確保を命じた。

「シャトルには多くの技術者がいるわ。コロニーレーザーや第一連結部がダメージを負っている。修理要員を確保しておくべきだわ。他のモビルスーツ隊にも徹底させなさい」

既に確保に動いていたサブレの妨害にと機体を走らせていた

「サブレ・グリフォン！少し君を預らせてもらおう」

「邪魔をするな！アイン！」

エデンを囲む形でハンドファンネルが周囲を漂う。同時にサブレは嫌な気配をファンネルから感じ取った。

周囲を漂わせていたリングファンネルの動きが一部で悪くなつていく、そしてリングファンネルがハンドファンネルに捕まってしまう。そのままリングファンネルが握りつぶされてしまう。

その瞬間にサブレはハンドファンネルに搭載されている機能に気が付いた。

「そのファンネル……サイコジャマーが搭載されているな」

ハンドファンネルに近づけば近づくほどにファンネルの動きが悪くなつていく。ハンドファンネルの掌にジャマー効果が付与されており、手のひらが開いている間は前方方向に向けてジャマー効果が表れる。実際、ハンドファンネルの後方と前方では動きが倍近く違う。

二個目のリングファンネルが捕まつて破壊されてしまう。

「まだまだ。まだ戦える！」

同じ時、明楽はシノの後ろにくつついていたが、それを左側面からジャックのブルーレイが妨害に入ってきた。

「悪いけど戦ってもらおうよ。あのシャトルはこっちで確保したいんでね」

「俺だって負けられない理由がある」

ブルーレイとシムカスがぶつかり合い、お互いに距離を測るような戦いを始めるが、ジャックの後方より木星帝国のモビルスーツが援護に入ろうとする。

「ジャック様。援護いたします」

「いらない」

ジャックの端的な拒否に驚きながらも食い下がるが、ジャックが恐ろしいまでの視線をパイロットに向ける。

「それよりもシャトルの確保をしろよ。ククナ様からシャトルの確保を優先せよって命令だろ？それに俺の楽しみを邪魔したら殺すよ？」

冷血な視線を前にパイロットは怯みながらシャトル確保に動く。

「これで邪魔は入らないよ」

明楽とジャックがぶつかって戦いが開幕する頃、シノはシャトルへと一気に近づいていた。

そんな光景をアルミリアは呆けてみていた。

ペペロが打った薬品のお陰なのかもしれない、思考が静けさを覚えている。だからこそだろう。アルミリアは自分の中にある苛立ちの理由が何なのかはまるで分らない。

しかし、苛立ちの遠回りな理由を目の前のメテオに感じ取った。

(なんなのだろう。この気持ちの原因は……)

アルミリアはメテオを狙撃しようとして右側のランスのビームライフル機能で狙撃しようとする。しかし、瞬間的に視線がシャトルの方を向いたのが問題であった。

シャトルの方からする異様なほどの苛立ち。

彼女は忘れていた。愛する人を失ったことからの苛立ちであると、自分以外の人間が幸せになることを許せない自分が居るとは気が付かない。

シャトルの方へと射線を移動させる。

「駄目ですよアルミリア様。シャトルは生け捕りにしろという指示の  
はずです」

近くにいたパイロットが慌てて制止に入るが、アルミリアは撃つ体制を変えようとはしない。

「一機ぐらい落とした方が彼らも投降する気になる」

「駄目ですよ。ククナ様はなるべく生かして捕らえろって命令です」  
「なるべくでしょ？事故よ事故」

右側のランスからビームが射出されるがギリギリのところ  
でシノが間に合う。シャトルとメテオの距離が肉薄し、ヤマギの目の前にピ  
ンク色に装飾されたメテオが現れた。

「まさか……シノ？」

「やつと………会えた」

シノの視界にも前方に座っているヤマギがきつちりと映っていた。  
ヤマギとシノの再開はアルミリアの苛立ちを高めていく。アルミ  
リアは右側のランスを先端がシャトルに向けて射出される。シノは  
辛うじて攻撃を退けるが、無理と咄嗟の行動が仇となり機体が数秒だ  
け動けなくなる。

アルミリアは左側のランスの先端をシャトルに向けて飛ばす。シ  
ノは内心叫びたくなる思いを抱いたが、エデンのリングファンネルが  
身を挺して守って見せる。

アインとジャックがアルミリアに文句を言おうと通信を開くがア  
ルミリアの精神状態はすでにまともではなかった。

「ペペロー！何をした!？」

アインは忌々しい表情をペペロの消えた方向を向く。しかし、他の  
誰よりも早くアルミリアが動いた。

左側のランスから放たれたビームがまっすぐにシャトルへと向け  
られる。

リングファンネルが間に合うはずもなく、シノはすぐには動けな  
い。他の誰もが悲鳴を上げそうな一秒間が流れる。

その瞬間シノの目の前にいたヤマギの口が動きシノへ何かをメツ

セージを向ける。

それが何なのか分からないままビームがシャトルの上から下へと貫き、ヤマギの体を包むように炎が舞う。一瞬の出来事にシノは呆ける事しかできず、大きな衝撃と共にメテオが後方にぶつかる。

シノは口をパクパクさせながら目の前で起きてしまった出来事に思考が追いつかない。

シノの苦しみが分かってしまう分イオリは苦しそうに眼を瞑ることにしかできない。

全員が啞然とする状況の中、覚醒者たちの脳を揺さぶるような脳波がシノからは迸る。

悲しみは人に進化を与える。それはシノもまた例外ではない。

遅すぎた覚醒が戦場に何を齎すのかは誰にもわからない。

## 君を想うV 《終わりを願う》

9

メテオの右側のメインカメラに最後の瞬間まで握りしめていた流星号のマークが張り付く。シノは呆然としながら、両手をひたすら先ほどまでシャトルが存在した空間に伸ばす。

涙を流し、視界を少しずつ狙撃したモビルスーツの方へとみる。

赤を基調とした女王をモチーフにした機体だった。

レッドクイーン相手に憎しみと怒りが沸々と湧き上がり、メテオはレッドクイーンに切りかかっていく。

「よくも……よくも！ ヤマギをお！」

アルミリアは内心すつきりする思いを抱え、突っかかってくるメテオをランスで捌ききる。ゼロ距離で殺し合う二人の脳波は共鳴し合い周囲の覚醒者たちへと異変を告げる。

明楽とジャックもほぼ同時にシノとアルミリアが殺し合う波長、憎しみと怒りが混ざり合った吐き気を誘うような気配であった。

「アルミリア！ また余計なことを！ ペペロだな」

「シノさん！ なんてこんなことに」

二人はシノとアルミリアの元へと急ごう思考を切り替えようとするが、後方で戦っているサブレとアインの死闘が激しさを増していく。

どちらに加勢に行くかで悩み、お互いに邪魔だと判断すると、そのまま二人は戦闘を続行するという結果に終わってしまう。

サブレはシャトルがヴァルハラ周囲までたどり着くが、状況はまるでよくならないと感じた。シノは先ほどから同じ場所で戦っている。明楽も平行線をたどるだけで、しかし、この戦闘宙域に入ってから感覚が敏感になっっているのか、ある戦力がこの宙域に近づいていると感じている。

「後一分だけ持ちこたえてくれ！」

サブレの大きな怒鳴り声がファントムブラッド隊の気持を切り替えさせ、サブレは戦闘に集中しようとする。しかし、エデンの右足が

吹き飛ばされ、機体姿勢を整えるが、エデンを捕まえようとハンドファンネルがさまざまいい速度で近づいてきて、エデンを捕まえようとする。

エデンはシールドを犠牲にする形で逃げ出すが、後方から襲い掛かってくる攻撃に背面に装備しているウイングの片翼が吹き飛ぶ。

サイコジャマーの影響下、ただのファンネルや機体に作られたサイコフレームにノイズが走っている。

サイコジャマーの対策は比較的簡単ではある。

同じサイコジャマーを搭載すればいいのだが、エデンにはまだ搭載されていない。左腕がビーム攻撃で吹き飛び、ライフルでハンドファンネルを落とそうとするが、先にライフルを落とされてしまう。すぐさまにビームサーベルに切り替えるが、機体のバランスがとりづらくなる。

サルガの計算であと三十秒ほどかかるという結果がはじき出される。

「サルガ！あと三十秒だけ持たせる。協力しろ！」

『了解』

「ガンダム!!俺に力を貸せ!!」

サブレの瞳が虹色の輝きに変わると、アインはここで因縁を終わらせるため黒い瞳を鈍く輝かせる。

後何秒だろうという気持ちが一秒一秒を数えそうになる。

イオリは必死にシノへと心を繋げて落ち着かせようとするが、イオリの声はシノには届かない。

深い悲しみは怒りと苦しみを周囲に与え、シノとアルミリアの戦いは複雑な物になろうとしていた。

しかし、そんな静寂を破る様に数えきれない艦隊が戦場に姿を現す。

ククナは戦場の様子を確認していたが、さすがに現れた数に対してこちらの戦力で潰し合えば戦争の長期化は免れない。出来る事なら引いてほしいとも思う。

ビスケットは同じように戦場に辿り着いたイサリビ改へと通信を

繋げた。

「ユージン?」

「ビスケットか? なんなんだよこの状況は!」

「それが……ヤマギが死んじやって……それでシノが!」

ユージンが視界を戦場の奥へと向けると、もはや冷静さを完全に失ったシノが半狂乱の状態で戦い続けていた。

状況はすぐさまに理解して動いたのは三日月とモンタークだった。

二人に続くようにチャド達も機体を動かしてシノの元へと向かう。モンタークがアルミリアを遮る。

「止めるんだアルミリア!」

「アハハハハハハハハハ!!」

アルミリアは楽しそうにただ笑うだけ、この状況にジャックが動きチャドやダンテが二人係でシノの機体を押さえる。ジャックがアルミリアを押さえながら後退していき、三日月が暴れるシノを押さええる為コックピット目掛けて拳を叩き込んでシノを気絶させる。

明楽が後退しやすいように周囲の敵に攻撃している、その間にシノを連れて後退していく。明楽とモンタークがサブレ救出の為に間に割って入り、全戦力がヴァルハラを中心に終結するが、このままでは戦局は長期化した挙句、共倒れになりかねない。

サブレが再び大きな声上げながらある存在に語り掛ける。

「アカシツクレコード! そばまで来ているんだろ!」

『そこまで叫ばずとも全員が揃った段階で救出するつもりでしたよ』

誰もが声の主を探す中、EDMの主力隊の真後ろに現れて、主力隊を不思議な光で包み込み、そのままEDMの主力隊を引き連れて撤退していく。

10

アカシツクレコードの中心地でEDMの将官達とユージン達は驚き、アカシツクレコードが現状の説明をしている時、サブレは半壊したエデンを前に立ち尽くしていた。

エデンはユニコーンとフェネクスに挟まれる形で鎮座しており、改造の時を待ちわびていた。

サイコジヤマーの影響下で戦うならサイコジヤマーを手に入れるしかない。

しかし、現状装備ではエデンにはサイコジヤマーを装備出来ない。これから装備できるようにと最後の改造を行おうとしていた。

サブレがその場から歩き出していたころ、ある場所ではシノが三日月ともめていた。

「なんで止めたんだよ!!」

三日月は何も答えないし、何も言おうとしない。

シノの気持ちを理解できるからこそ、同時にあのような方法でしか救出できなかったからこそ、たとえ殴られても文句は言わないと決めていた三日月。

チャドやダンテ達も後ろからシノを宥めようと試みる。

サブレとビスケットが部屋の中に入ってきたのはこのタイミングだった。

あと少しで殴ると言ったタイミングで部屋の中に入ってきた二人、焦るビスケットに対し、サブレは冷静にシノと三日月の間に入る。

シノは振り上げた拳をサブレの左頬にぶつけ、ビスケットがシノの襟を捕まえてそのまま壁に叩きつけてしまう。

「み、みんな辛い！シノだけじゃないんだ!!」

ビスケットの言葉にシノが意識を現実に戻す。しかし、同時にヤマギが死んでしまったという現実も襲い掛かってきた。

「でも……でもよ。あいつは何で死ななくちゃいけないんだよ……」

「分かっているよ。でも……どんなに嘆いても……還ってこないんだよ」

ビスケットはサヴァランの事を思い出し、苦しみで表情を曇らせる。

「みんな辛いことを抱えているんだよ？だからこそ……」

そこから先の言葉が出てこない。

シノは苦しみのあまり部屋から出て行ってしまい、部屋の中に静寂が訪れ、ビスケットは一筋の涙を流すだけだった。



シノは一人フラフラしながら個室の中へと入っていき、ベッドに腰を落としながら嘆きのあまり部屋の電気を付けない。

すると、部屋のドアをイオリが開ける。

シノはそちらの方を見ようともしないでいると、イオリの方から語り掛けてきた。

「シノ………さん。起きているんなら部屋の電気は付けた方が……」

「……………いい。もう……………どうでもいい」

どうでもいいという言葉がイオリの心に突き刺さり、イオリは部屋の中へと一歩だけ入っていく。

(きつとあの人を失ったばかりの私もこんな感じだったんだろうな)

何もかもをどうでもいいと思い、手元で失う気持ち、どうでもよくなってしまう。

だからこそ見過ごせない。同じ気持ちを味わっているからこそ、そう思い歩き出し、シノの目の前へと立ち尽くす。

「そんなことは言わないでください」

「……………どうでもいいんだよ」

イオリは黙ってシノを抱きしめ、シノの顔を自分の胸へと押し付ける。シノは驚きながらもイオリから感じるぬくもりに涙を流し始める。

「うつ……………うつ……………なんでなんだよ」

「……………」

イオリにはこれ以上何も言えなかった。いう資格も無かった。でも、こうして少しでもシノが癒されるならと思い、ただ黙って抱きしめるしかできなかった。

同じ時間、サブレは一人で改造を受けるエデンを高い所から見つめていた。エデンはすっかり装甲をはがされ、フレームがむき出しの状態になっていると後ろからクレアが声をかけてきた。

「大丈夫ですか?」

サブレの左頬を優しく触れながらクレアは心配そうな表情で見つめ、サブレは微笑みながら「大丈夫だ」と答える。クレアは少し前からシノのやり取りをイオリと共に見ており、心配していた。

「責任だからな」

サブレの言う責任という言葉をクレアは詳しくは聞かなかつた。というより、聞けなかつた。

サブレはかつて鉄華団のメンバーを助ける過程の中で、色々な人々に助けを求めることになった。

蒔苗に会いに行つて鉄華団メンバーの保護を頼み込み、兄であるビスケットやノルバ・シノのメンタル面での治療を手伝い、鉄華団が今後生活する上で不自由が無いようにギャラルホルンに圧力をかける。

それ自体は全く後悔はしていない。

しかし、その結果がノルバ・シノの不幸な結果の一つになったのなら、サブレはそれを猛省するべきだと感じ、だからこそシノの拳を黙つて受けた。

「誰かを助けたかつたからなのではありませんか？」

「違うよ……俺はただ……」

（俺はただ……オルガとの約束を果たしたかつただけだ。それすら破つてしまつたら俺は……オルガの事を忘れてしまうような冷たい男なのだと証明しているような気がしたから）

だから彼らを助けた。

自分勝手な理由で助け、自分勝手な理由で放り出しているのだから、自分はそんな事で感謝される筋合いは全くない。

「でも……誰かを助けて感謝された以上はそれを受けるのが優しさではありませんか？」

「そうかもしれないな」

結局の所でサブレは素直になれないでいる。

目の前に居る困っている人がいれば手を差し伸べたくなり、助けると声を出している人がいれば声を掛けたくなる。

それをお人よしだと認識したくなく、自分の自分勝手な理由で人の運命を変えているのだと勝手に解釈する。しかし、それでもサブレが助けたという事実は変わらない。

感謝する人もいれば、避難する者もいるだろう。それでも、感謝する者が居る以上彼は誇るべきなのだ。クレアは思う。

誇ってもいい所なのだ。

「それに、あなたに託して亡くなってしまった者達も、あなたがそんな風に自分達の事でいつまでも引きずって生きてほしいとは思わないでしょ？あなたは多くの人を助け、助けられなかった分だけ後悔している。そして、助けた分だけ後悔している。でも、私はそんなあなたが大好きなんです。レレやアスナさんだってそんなあなただからこそ好きになり、振られても前を向けるんです。それは後悔ではなく喜びに変わっていてほしい」

「喜び？」

「はい。「よかった」つと。皆に「助けてよかった」つと思える戦いなのでしょう？後悔を終わりにする戦い」

「そう………かもしれないな」

後悔をここまでにする戦い。後悔の終わり。

前に進む為の戦いであり、後悔の終わりの為の戦い。

亡くなった彼らと彼女たちの分まで前にすすむために、みんなが後悔の先にあるハッピーエンドを目指すための一歩。

後悔は夢となる。夢は未来を変えることが出来る。

多数の未来の中からそういう未来を見付けてみたい。

死んでしまった人が死ななくてもよかった未来。助けられなかった人が生きている世界。後悔の先にある果ての無い道。サブレが見つけようとしている将来である。

「笑ってくれてもいい。「あの時ああしておけばいい」とか「助けておけば違ったかもしれない」とかそういう未来を探したいだけなんだ。オルガやサイガが生きている世界を見付けたいだけなんだ。後悔なんだ。俺は後悔で戦っている」

「笑いません。前に向く為なんですよ？」

バスケットは三日月と共に星々を眺めながら説得を試みている。

「どうしても会わないつもり？アトラだってもう三日月が生きているってなんとなく気が付いているんだよ？なのに……」

『バスケットが居れば大丈夫だよ』

「そういう問題じゃないんだよ。アトラを幸せにできるのは……」

『それは分かっている。でも、暁を幸せにできるのはビスケットやアトラ達だ。俺にはできない。今の俺は普通じゃないし、暁は俺を知らない。それならそれでいい。俺とアトラの子供だって分かってもらえるならそれでいい』

「三日月」

三日月の言い分はビスケットにだって分かる。アトラはともかく暁は今更三日月を親だとは思わないし、こんな親ではひねくれる可能性がある。

別にアトラと一生を共にしたくないわけでは無い。アトラ達家族を想えば想うほど一緒にはいられない。

「ビスケット」

アトラの声がしてそちらの方を見る、そこにはアトラがエプロン姿でサンドイッチを抱えて現れた。

しかし、一瞬の事で三日月はすぐに姿を消し、ビスケットはため息を吐き出す。

「ご飯まだでしょ？一緒に食べない？」

「うん」

サンドイッチに手を伸ばしているとアトラは別の通路を見つめる。アトラにはなんとなく誰が居たのかは分かっていた。

「三日月がいたんだね？」

「うん。説得したかったんだけど……」

「分かっているよ。暁の事を想えばってところ？『家族』を想うからなんだよね。家族に亀裂を入れたくないし、今の自分には『家族』を幸せにはできない」

「そんな事、俺にだってできないよ。重たい期待だよ」

アトラはビスケットの肩に頭を預け、ビスケットは驚きと共にそちらの方を見てしまう。

「ビスケットはどこに行かないでね？三日月みたいに私達の中から消えていかないでね？」

「うん、約束する」

ビスケットもそつとアトラを抱きしめる。二人は星々を眺めなが

ら温め合った。

明樂はシムカスのコックピットの中に落としてしまった菓子を探して体をコックピットの中へと突っ込む。

座席の下の隙間に落ちていくのが確かに分かり、その隙間に手を突っ込んでいると、足を滑らせたのか体が逆さまになってコックピットの中へと落ちていく。

両足をばたつかせながら起き上がろうと試みる、それでも体の体勢は変化せず、頭に血が上っていく。三十秒ほど抵抗を試みたとき、明樂の足を掴んで引つ張る人間がいた。

「全く、見ていたらだらしないわね」

明樂の右手にはしっかりとお菓子が握られており、明樂はホツとしながら助けた人間を見つめる、そこにはメアリーが腕組みしながら見下ろしていた。

「何していたのよ」

「お菓子が落ちたから拾ってただけ」

メアリーは呆れながらため息を吐き、明樂はお菓子袋をそつと開きながらチョコレートを口の中に一口入れて弄ぶ。

「一口もらうわよ」

メアリーは明樂の隣に座りながらチョコレートを一口放り込む。

「何? なんか用?」

「用が無かったら話しかけちゃいけないわけ」

そこまで言われると明樂には文句のつけようは無い。黙ってチョコレートを再び口の中に入れる。

「シノさんとイオリの事を止めなくていいの?」

「いいわよ。あの子だっていつまでだって子供じゃないでしょ? 私は結局の所であの子を子供として見たのかも。いつまでも大人にならない子供」

「かもね」

「あの子がどうしたいかはあの子が決める事よ」

「メアリーは?」

メアリーは唐突に告げられる言葉に言葉を詰まらせ、返答に困って

いると明楽が好奇の目で見てみると気が付き、怒りの表情で怒鳴りつける。

「どうでもいいでしょ！なんであんたにそんな事を言わなきゃいけないのよ!!」

「いいじゃん気になる。教えてよ!」

「絶対に教えないわ!あんたの事だからからかうだけだもの」

「からかわない!約束するよ」

メアリーは明楽を黙らせようとふと頭の中によぎったことを実行に移すことにした。

うるさい明楽に対し、メアリーはキスをして黙らせる。

「こういう事よ」

メアリーは明楽の方に一步近づくと明楽は顔を真っ赤にしながらか腰を引く。メアリーは明楽が驚きと羞恥心で混乱していると気が付き微笑む。

「あんたでもそんな顔をするのね」

きつと終わりは簡単に訪れる。

誰も終わりを祈る。

だから彼らは最後の戦いへと向かう。

誰も知らない未来を見付ける為に。

最終章は地球の戦いから始まる。

ある人物達が話し合う所から語りだす。

さあ、終わりの祈りは終わり、想う物語を終え、白紙の未来が始まる。

《君をもう編終わり 選び取った未来編開始》

## 選り取った未来Ⅰ 《三者会談》

1

木星帝国がいたから、鉄華団がいたから、テイワズがいたから、ギヤラルホルンがいたから俺達はここまでこれたのだろう。

彼らが敵であり、味方であってくれたから俺達は未来を選ぶことが出来た。

様々な人々の生き様があつて、色々な人々の死に様がこのまでの道になつていったのだろう。

生き様と死に様を俺は忘れない。

辛いとも言わない。苦しいとも言わない。聞かれて、言い訳をしたいわけでも無い。ただ、胸にしまつて前に進むだけ。

味方も、敵も、全てが俺の道になつていく。

誤解なくそう言える。

「多くの人と関わり、多くの人と戦つて、多くの人の死に様を見てきたからこそ俺、サブレ・グリフォンはここまで来れた」

そう言えて、そう思えてしまう。

救えなかつた人があまりにも多く、それゆえの後悔が今の俺を突き動かす。彼等の生前の後悔が未来を創ることが出来る未来を。作りたい。

そして、俺達生き残つた人間はまだ見ぬ進化の先に辿り着く。

誰のせいでもない。みんなの責任で、人類の責任なのだ。

選り取った未来に責任を取り、俺達は向かうべき未来に進むだけ。

これから語り、思い出す為の物語。

2

EDM総司令本部では多くのEDM士官たちによる最終防衛作戦への最終準備のチェックに追われており、アルベルトはふと上を見ながらため息をはきだしてしまう。

現在マハラジャ・ダースリンは自室にこもつてある人物を仲介し、木星帝国の代表者と今後の話し合いをしている。

正直に言えば、最終作戦を前にしてそういう事をしないしてほしいと

アルベルトは思う。

そういう事は最終作戦前にあらかじめ終わらせてほしかったと苦言を述べたが、アルベルトの前で準備と言って怠けていたマハラジャ、そんなマハラジャのケツを叩いて話し合いの場所を持ったのが先ほどだった。

まあ、あくまでもマハラジャはクーデリア議長への橋渡し役に過ぎないが、彼女は現在タカキ議員と共に太陽系法と呼ばれる法律作りで手が離せない状態になっていた。

だからこそ、ぎりぎりまでマハラジャはクーデリア議長に押し付けられないかどうか、そのラインをうかがっていた雰囲気がある。

押し付けられないと判断してようやく重い腰を上げたのだろう。

「全く……少しは自分が代表であると自覚してほしいんだがな。それは、高望みなのかな？」

アルベルトは内心「自分はあの人に理想を押し付けているのだろうか？」っと思ひ、同時にしっかりとほしいという気持ちもある。

無理難題を告げているようには見えない。代表として少しぐらいはしっかりとほしい。

何年も前、娘代わりにサブレ・グリフォンを血縁上の養子として引き取った時点で、サブレへの最低限の愛情はあっただろう。

あの人は才能がある。才能ある人を引き付けるだけのカリスマという才能が。しかし、同時にあの人は不幸を背負ってしまいかねない性質もある。

始めてアルベルトがマハラジャと出会ったのは、ギャラルホルンへと入隊して半年後の同期共同訓練での出来事であった。

しかし、訓練などと言っても結局は貴族が目立ち、貴族が上官によりいい場所を求めさせるための出来レース。八百長とも言つて間違いないだろう。

金の無い者は下っ端やまともな部隊には送られない。

アルベルトは優秀であるがゆえに、貴族達のはびこり、自分達の見栄の為の就職活動に興味など見せなかつた。

ここで無駄に優秀な所を見せれば、他の貴族はきつと鬱陶しく思う



だろ。

アルベルトは無駄に優秀な所は見せず、貴族達の引き立て役に徹した。

だからだろう、他の貴族が就職活動に精を出している時間、アルベルトは静かに訓練場から逃げて行く。

しかし、そんなアルベルトに話しかけてきた人物がいた。

「そこのお前。先ほどの訓練、明らかに手を抜いていただろう」

アルベルトが手を抜いて、手を抜いていることに不満を抱いているとその人物は見抜いた。

「お前さえよければ俺の元に来ないか？」

「あんたは……?」

「俺はマハラジャ・ダースリンという」

迫力のある表情や立ち振る舞いに気圧されそうになりながら、自分の才能をあの出来レースの訓練で見抜いた彼についていこうと思えた。

それがアルベルトとマハラジャとの出会いだった。

マハラジャによれば、ラスタルも密かに狙っていたらしいが、ラスタルにも貴族としてのかかわりがある。イオク・クジャンの面倒も見ていたラスタルにはイオクの部下探しも兼ねなければならなかった。

それが後々にも響いてくる。

この時、もしラスタルがマハラジャより先に話しかけることが出来たら……ラスタルの結末は違ったのかもしれない。

結局でマハラジャとラスタルの決別を決定的なものにしてしまったのは、アルベルトが二人の決別を決定的なものになってしまったと言っているだろう。

ギヤラルホルンという組織を維持することで、無理に変えず、今とこの時間を続けていくことを決めたラスタル。

今のギヤラルホルンを変え、変革の先にある別の社会を作り、未来という時間を切り開くことを決めたマハラジャ。

どっちが正しいとは言えない。

平和と秩序を維持することならラスタルが正しいだろう。しかし、

夢や自由を求めるのならマハラジャが正しくなってしまう。

しかし、人は結局の所で未来にしか進めない。

過去は覗くものであって、未来とは夢見るものであって、今とは過去から未来への通過点に過ぎないのだから。今や過去という時間人を固定することはできず、人は未来にしか進むことはできない。

アルベルトは偶然未来へと進む人を見出し、ラスタルは見いだせなかったというだけの話である。

ラスタルは今を重要視して、マハラジャは未来を重要視した。なら、アインはどこを重要視したのだろうかとアルベルトは思う。

サブレは後悔ゆえに未来を望み、アインは過去を見ながら未来を望む。同じ未来を望む者同士、違う未来を望んでいる。

アルベルトは顎下に右手を添えながら左手で右肘を持つように添える。考える。

サブレもアインも後ろめたい感情から未来に進もうとしているのに、どっちが正しかったのだろうか。

いや、正しいも間違いも無い。

今、アルベルトにできるのはサブレを信じて作戦を組むことしかできない。

「しかし、あの時の子供が世界の未来を左右する存在だとは思わなかったが……」

マハラジャがサブレを見出したのは決して偶然ではなかった。

マハラジャはアルベルトを見出して以降、様々な人間が様々な人間を勧誘していき、マハラジャの一派はラスタルが無視できないぐらいに大きくなっていく。

ゆえに、ラスタルはマハラジャを殺そうと考えるぐらいに思い詰めるようになった。

自分の信じる信念と友人の板挟みになるラスタル。

結果としてはラスタルは信念を選んだ。しかし、それは失敗することになる。

イオクの父親を殺してしまい、EDMの創設を促す結果になり、脅威を放り出すことが平和と秩序を維持することになると判断してし

まう。

マハラジャと共にEDMに移った人物の一人が故郷であるドルト2のスラム街に帰郷した際の事、両親の死に涙する双子の兄の後ろで力強い目を彼は見た。

サブレ・グリフォン。

その時の少年の名前で、のちにマハラジャが養子に居れた少年だった。

後に、サブレの事を知ったマハラジャはサブレを引き取ることになる。

3

マハラジャがサブレの仲介の元、木星帝国のある人物を呼び出した。そのある人物とは『オズボーン』である。

マハラジャの画面ではオズボーンとサブレが映し出されており、かれこれこの画面の状態が一時間も経っている。

「しかし、君の判断には理解しがたい。自らが所属する木星帝国を売り飛ばすような真似が良くできるものだ」

マハラジャは心底感心した。みたいな感情を表情に出すが、オズボーンは実際の所でマハラジャがこんな感情を抱いているのかは疑問だと思っている。

オズボーンは無関心や無表情をよそいながらあくまでも、自分達は対等なのだと表現しながら話し合いをする。

「売り飛ばしているわけで無い。私は木星の未来を考えて行動してるだけだ。それに木星帝国と一枚岩ではない。私は元々今回の戦争には反対の立場だった。ゆえにテラは私を議長に推薦していたところはある。この戦争は負ける可能性が高く、負けた場合は多くの木星国民が議長の采配にかかっていることも。だからこそ……私はこの戦争でククナを討つことさえできれば、木星帝国議長として太陽系議会への参加を表明してもいい」

それがオズボーンが出してきた条件だった。

「あんたは……オズボーンさんは木星を太陽系議会へ参加する事で、木星帝国を壊すことで世界を平和にしたいと?」

「そう言うことになるのだろうか。実際、平和になる為には話し合いだけでは足りないというのは分かるだろう？他の惑星も三つの惑星が加われば自然な流れで前へと進む。その為には平和の為の礎が必要だ。礎……………生贄と言ってもいい」

サブレは小さく「生贄」と呟く。

この生贄こそが『皇帝』や『ククナ』なのだろうとサブレは思い、マハラジャは当然だろうなという表情を浮かべる。

「というより、ククナという女の狙いが自らを憎しみの対象とすることで人類が生き残れるかどうかを試す事だろうな」

「試す？」

「ああ、あくまでも試す。これに我々が失敗すれば、アインの計画を遂行するだけだ。彼女は二つの計画を同時に進めているだけなのさ」

マハラジャの言葉によやくオズボーンはククナの計画の全貌を理解し、アインがそんな彼女と一緒に居る理由を把握した。

「なら、アインはそんな彼女の望みを否定しながら、自分の計画を進めても失敗さえしなければ同意していると理解しているんだな」

オズボーンは改めてマハラジャの方を見ながらも一つの本題に移った。

「あなたの口から改めて聞きたいペペロの正体」

「俺も聞きたいな。このペペロこそが今回の戦争の原因だと俺は直感しているんだが？」

マハラジャは数秒だけ目を瞑ると、重く、ゆっくりと口を開いた。

「ペペロの正体は……………アグニカ・カイエルのクローンだ」

オズボーンとサブレはこの答えにはおおよその検討は付けていた。問題はこの正体と今回の戦争に結びつくのかという事である。

「アグニカのクローン。簡単そうに言うが、人類のクローンは長年に及ぶ禁止事項でもある。しかし、当時の地球圏にルールを無視して、かついぎとなったら研究所をもみ消すことが出来るのはギャラルホルンだった」

オズボーンは「ならアグニカのクローン研究はセブンスターズが？」と尋ね、マハラジャは黙ってうなずく。

「その通り。もみ消すことが出来るのはセブンスターズぐらいのものだ。で、ここで問題がある。今更アグニカのクローンを作り何をしたのかという事である。そこで、セブンスターズの当時のメンバーを調べ、それをしかねない人物に検討を付けた」

もったいつけるような物言いにサブレは若干イライラしながら話を聞いていた。

「結局の所で、誰が犯人なんだ？」

「イズナリオ・ファリド」

マハラジャの答えにサブレはある程度の納得はしていた。いや、実際の所ではイズナリオぐらいしか犯人に心当たりが無かった。

サブレの苛立ちの理由は、ある程度周囲が理解していながら勿体ぶって意味ありげな表情を上げているマハラジャに対してだった。

「イズナリオには特殊な性癖があった。あいつは少年を妾として引き入れており、マクギリスもその経緯でファリド家に入った経緯がある。その性癖は偶然出会ったが、カルタ・イシューにも見られた。イズナリオはそんな妾を安く手に入れようと考え、法律違反であるクローン研究所を作った。そのクローンのプロトタイプDNAの内の一つにアグニカ・カイエルのDNAが混じっていたというわけだ」

「なら、ペペロはそれを偶然知った」

「いや、偶然ではない。DNAの操作をしなければ長生きできないクローン。その操作の段階で研究員が気が付いたのだろう。そのデータをペペロにしてしまったのが原因だ。ペペロがどうやって研究所を潰してから生きてきたのかは分からないが、彼に似ている人物が様々な場所で見つけられている。おそらくだが、クローン研究所は彼が生まれてすぐに閉鎖、彼はその後ギャラルホルンの別の研究所に預けられた。そこで、彼は自らがアグニカ・カイエルのクローンだと知ったのかもしれない」

サブレには問題の前後までは理解できなかったが、少なくともアグニカのクローンとしてペペロの歪みはどこまで進んだのだろうか。

「ペペロの肉体の秘密までは理解できないが、少なくともモンタークとの戦いで重傷を負ったペペロがまるで後遺症を見せずに今を生き

ているのなら、その辺が答えなのかもしれないな。不死身の肉体とクローンとしての肉体という二つの側面」

「そこにペペロの秘密がある………つとあなたは言いたいのだな？しかし、木星帝国議長である私でもペペロの研究所には入ったことが無い」

「なら、その辺が答えなのかもしれないな。ペペロの研究所の中に答えがある。奴が必要なまでに人に研究所に居れようとせず、入れていないのに研究として一定の成果を『たった一人』で出している」

マハラジャとオズボーンが同時に考え込んだところでサブレが口を開いた。

「ペペロに戦場に出てこられたら結構困るんだけどね」

「それには私に策がある。鉄華団のメンバーをこちらに送ってほしい。後は私が何とかしよう」

オズボーンの提案にマハラジャは乗ることにし、サブレ自身も否定はしない。

オズボーンは「それでは、戦争が終わったのちに」と告げて通信を切るが、サブレとマハラジャは真剣な面持ちで告げる。

「サブレ。この数年で答えは出たのか？この一か月間を戦い抜き、数年前の答えは出たのか？」

「ああ」

サブレは決断と共に告げる。

「ファントム・ブラッド隊は解散させる。最終作戦においてはパイロットは俺と明楽とシノで行く。元々はこのメンバーで進めてきた。このメンバーで終わらせる」

『『ファントム』、まさしく幻………か。本来は存在しない部隊。実験部隊であり、『フリー・ライセンス』の為の部隊。ふさわしい最後なのかもしれないな』

終わりの時が刻一刻、近づいている。

## 選り取った未来Ⅱ 《最後の戦いの始まり》

4

「サブレ先輩。今なんて言ったんですか？」

ファントムブラッド隊のほぼ全員がピリピリした空気を放ち、全体がプレッシャーで圧迫されたような感覚を与える。

まるでサブレはそんな空気がまるで分からないという風に、目を瞑り、聞き流す。そして、同じことを繰り返すだけ。

「ファントムブラッド隊を解散する」

ゼム・ロックやイオリやメアリーやメイデンは分かっていただけに黙っている。

「解散対象は明楽とシノを除いたパイロットだ。サラ達は今後「フリー・ライセンス」を行使し、自由に戦闘に参加しろ。これは俺からの卒業証書だと思ってくれ」

「卒業？」

サラや他のメンバーがぼそりと呟き、サブレはファントムブラッド隊結成秘話を語りだす。

EDMの幹部へと招集を受けたサブレは真っ先にEDMの代表室へと呼び出しを受けた。

代表室にはマハラジャとアルベルトが既に待機状態になっており、サブレは部屋の中に入ると、警戒心を一段階上げながら代表席へと近づく。

アルベルトが無表情半分と真剣な表情半分の顔をしながら重い口を開く。

「サブレ・グリフォン。君に実験部隊を任せたい」

そういつてサブレにタブレットを手渡し、サブレがそれを受け取るとタブレットの中にはサブレ・チルドレンのメンバーが映し出されていた。

サブレ・チルドレンと言っても、メイデンと当時まだメンバーに入っていなかったシノは映されておらず、怪しむような表情を二人に向けるサブレ。

マハラジャがアルベルトが口を開く前に声を出す。

「怪しむな。これでもお前の所属先に問題があるんだ。お前は優秀ゆえにどこでも入ることが出来るだろう。本来ならいくつか試したいことがある」

そういつてマハラジャはサブレのタブレット画面を机のパソコンから操作する。タブレットの画面内容が変更していき、画面内にはEDMが抱えるいくつかの計画が書かれている。

『フリー・ライセンス契約』『遊撃部隊』 e t c.

サブレは軽く十個は存在している。サブレは一つ一つの計画に目を通すが、サブレはため息を吐き出しながらマハラジャの方を見る。

「これ。どこまで本気？」

「全部ではないが、いくつかは採用してもいいと思っている。しかし、採用するにも実験する必要がある」

「なるほど。それで実験部隊ですか？」

アルベルトが口をはさんでくる。

「その通りだ。『フリー・ライセンス契約』『遊撃部隊』の実験を行う。まずは遊撃部隊だ。その後にはフリー・ライセンス契約の実験を行おうと思っている。それに伴い、サブレ・チルドレンの適性を調べてほしい」

サブレは「適正」という言葉に反応し、アルベルトは意にも返さない様子で続ける。

「サブレ・チルドレンのパイロットセンスの高さは注目に値する。しかし、サブレ・チルドレンには精神的な問題を抱えているようにも思える」

「年齢的な問題ではなく？」

「ああ、精神的な問題だ。特に……お前に依存しているという意味ではな」

サブレ・チルドレンはサブレに対して依存しきつている傾向にある。なんでもできるサブレ、そんなサブレについていこうとする気持ち。

サブレにもそれは分かっていたが、サブレはそれを否定したい気持ち。



ちも存在していた。

サブレ自身はそれを精神的ではなく、年齢的な原因だと信じていた。

マハラジャが二人がピリピリした空気に水を差す。

「まあ、実験部隊だ。何年かかってもいい。彼らが卒業できたと感じた際にこちらから声をかける。あくまでもお前が決めるんだ」

それがフアントムブラッド隊結成の秘密である。

「さて、問題は部隊名なんだが………独自部隊だからな、コードネームは必要だろう」

サブレは三十秒ほど悩む。

「………フアントムブラッド隊………」

フアントム——幻。

チルドレンゆえに血である。

幻の血。フアントムブラッド。

存在しないがゆえにフアントム、子供たちの卒業を待つがゆえにブラッド。卒業すれば存在は消滅することになる部隊である。

「それがゼム・ロックやここに居る一部のメンバーで話した結果の結成秘話だ。実際に実行に移したのは兄さんが幹部に昇進してからだな」

サラはどこか納得できないような表情でサブレを睨みつける。

「だったらシノさんはともかく。明楽が先輩の保護下に入れていてるんですか？」

「お前たちは明楽に『フリー・ライセンス』なんて与えてどうなると思っている」

返答に困る内容だけにサラを含めた全員が明楽を見ながら納得するしかできなかった。

「元々、明楽にはフリーはよくないというのが俺の判断だ。俺、もしくは誰かの監視下に置いておいた方がいい。だが、お前たちは違う。一人でも戦い、生き抜くことが出来ると信じている。」

サラが反論しようとするが、サブレの表情や気迫が反論を許さない。

決定事項で、今変更は聞かないのだろう。

「ヴァルハラは今回の任務の後に別部隊に託されることになる。最後の作戦はあくまでも俺達で実行する。お前たちはフリー・ライセンスとして自由に動け」

その言葉を反論できる者はいなかった。

5

月面都市アルンを含めた最終防衛ラインでは木星帝国侵攻主力部隊が集結しており、EDMの防衛部隊もまた最大戦力を集めていた。戦力比は五対三。しかし、木星帝国は戦力差をモビルアーマーで覆そうとしており、作戦行動の合図を今か今かと待ち構えていた。

EDMのコロニーレーザーも出力を上げていき、木星帝国の主力隊も準備を整えながら戦う時を待っていた。

アルンでは避難が行われており、クツキー達は地下シエルターへと誘導されていた。

閑散としたアルンの街並み、アルンのほぼすべてのエネルギーをコロニーレーザーへと向けているが、それでもコロニーレーザーの出力のチャージ具合は木星帝国製より低い。

アルベルトの目の前にあるモニターにはチャージ率が描かれており、未だに三十%しか溜まっていない。

ため息を吐き出しそうになり、艦隊の準備にせわしくなく動く部隊の方を見る。

本来であれば既に準備を終わらせておくべき状態である。

「いつまで準備に時間が掛かるんだ！本来であれば準備を終えているところだぞ!!」

同じ時間、火星の方でも地上と宇宙の双方で作戦の準備が行われようとしており、木星帝国は回り込む形で火星議会のあるクリュセを目標指していた。

EDMの主力隊もある程度行動を読み、溪谷に部隊を整えていた。

EDM地上部隊への牽制にと集められた木星帝国宇宙主力部隊も集まっており、EDMと交戦に入ろうとしていた。

クリュセでは避難誘導が行われており、火星議会ではアスナが避難

指示や市民を落ち着かせるための行動に打って出ていた。

アスナの元へとレレが近づいていき避難を推奨する。

「避難した方が良いと思いますが。あなたはそれでも……」

「残ります。市民の皆さんの避難を優先してください。私は最後までここに残ります。信じているから」

そういいながらアスナは窓の向こう側を見る。

空の向こう側で作戦へと向かおうとする愛する人を想う。レレも同時に思う。

「どうか……勝って」

ククナは完璧と言ってもいい布陣に納得しており、ククナは指令室から一旦出ていき休憩室でコーヒーを購入する。

コーヒーを一口飲み込み、部屋のドアが開いた音が聞えた。

「アイン？どうしたの？エンペラーの装備に不満が？」

ククナはエンペラーの装備や整備に関しては文句なく完璧に仕上げたつもりだった。強化装甲も用意した。

モビルスーツ二十機分の大きさを誇る強化装甲。バックパックにはブースター以外に、ミサイルポットやファンネル・ミサイル。両腕にはワイヤー装備型のガトリング・ファンネル。両足には大型ビームサーベル型のバスターライフル。胸や頭部にも拡散ビーム砲が装備されており、少なくともアインが負ける要素は無いと思えるほどである。

「あなたはあれでもまだ不満？」

アインはククナに抱き着き唇を奪う。

「約束は守ってもらう。俺がサブレ・グリフォンを殺せば俺の計画を遂行する」

「ええ、約束するわ。あなたが勝てば人類を滅ぼす計画に賛同する」

ククナは唇を奪われながらも冷静に返す。あくまでもそういう約束である。

「でも聞かせて。どうしてあなたはそこまでして人類を滅ぼしたいの？」

ククナが抱く疑問。

謎と言ってもいいこの疑問にアインは沈黙しながらも、濁ったような瞳をククナに向ける。

「呪い……過ちといった言葉を呪いという言葉で済ませようとする。確かに呪いは存在した。その呪いがサブレ・グリフォンという才能を借りて実体化もした。それ自体は認めるところだが、実際の所で呪いを作り、人類の進化を否定したのは人類そのものだ」

人類は進化を否定し、変わることを恐れた。

「変わることで、今が変わることで立場が貶められることを恐れた。それがニュータイプなどの進化した人類を戦争の道具にしかできない結果に変わった。そんな人類が今更進化したなどと都合の良い結果があつていいはずがない。俺は……認めない」

今更。

アインの心情は結局の所でそこに行きつく。

「今更なんだ。自分達の都合の良い事実しか受け入れず、進化した人類を否定して、今という時間しか受け入れない。そんな人類が今更進化したいなど……」

「言いたいことは分かるわ。確かに今更かもね。でも……進化したいと人類が思っているわけじゃないでしょ？それがサブレ・グリフォンの決断なのではなくて？彼は強制的に進化することで前に進むきつかけに与えようとしているんでしょ？」

「そうかもしれない。しかし、それはあいつの理由だ。俺は……人類を許せない。我々を裏切り、自分達の事しか考えない愚か者たちを粛清する」

粛清という言葉のチョイスにククナ恐れを抱く。

過ちを無理矢理でも正したいサブレ。

過ちを犯した人類を消してしまいたいアイン。

前進を選んだサブレと粛清を選んだアインに全てを託そうとしている人類がいる。いや、人類が選んだのではない、周囲の人間たちが無理矢理でも選ばせようとしているだけなのだ。

はるか昔から続くこの物語を終わらせる瞬間が追いついている。

アインとククナが視界を決して外そうとしない中、要塞内に警報と

共に声が響き渡る。

「防衛宙域に急速に近づくと多数の反応在り！」

「行きましょう。人類の行く末を見届ける為に」

「ああ。人類を滅ぼすために」

アカシックレコードがEDMの侵攻主力部隊をグノーシス要塞戦闘宙域へと送り届ける。

多数のモビルスーツが散開していき、同時に地球と火星でも同じ状態になっていく。

ククナとアルベルトが立ち上がり声を張り上げる。

「この戦いで全てが決する！EDMの勇士たち！戦争に勝利して地球の未来を守る為！もう一度力を貸してくれ！」

「地球という星が在り続ける限り私達は不遇な目にあつていく。なら、地球は破壊しなくてはならない。私達木星の民こそが世界を支配するにふさわしいことをここに証明する」

「全軍攻撃開始!!!」

アルベルトとククナ号令と共にすべての戦力が全身し始める。グノーシス要塞からエンペラーガンダム最終決戦装備パーフェクトが巨大な体をゆっくりと前に進めていく。

同時にサブレのエデンもまた大きな巨体を前進させていく。

エンペラーを人型に例えるなら、エデンは戦艦のようなデザインである。

四本の主力砲。ミサイル・ファンネルとレールガンを巨体中に隠しており、大型ビームサーベルを五本ほど隠している。縦長の胴体にブースターを装備している姿は戦艦に見えてしまう。

しかし、ククナはコロニーレーザーの出力を七十五%で放射することにしたらしく、コロニーレーザーが輝き始める。

サブレのエデンがコロニーレーザーの前に立ち塞がろうとする。

「貴様一人で何が出来る!!」

アインの叫びに反論する様にエデンの巨体から幻のガンダム達が現れる。

数えきれないほどの幻のガンダム達がエデンを囲み、コロニーレ

ザーの眩しさに匹敵するほどの輝きを増す。

「ガンダム達!!俺達に最後の奇跡を見せてくれ!!!」

二つの輝きが衝突する中アインとサブレは虹の向こう側へとたどり着く。

鏡のような水と青空が反射して見える。

アインの前にはサブレが、サブレの前にはアインが立っている。

ここにはアイスとマイクが対立していて、サブレとアインが代表して口を開く。

「これで最後だ」

「ああ。人間の未来を決める戦い」

サブレは大きく息を吐き出し、真剣な面持ちと睨むような視線と声を張り上げる。

アインも大きく息を吐き出し、真剣な面持ちと睨むような視線と声を張り上げる。

「人間の未来は消したりさせない!!!」

「人間の未来は消して見せる!!」

人類最後の戦いが幕を開けようとしていた。

## 選り取った未来Ⅲ 《フロントムブラッド》

6

ノルバ・シノは葛藤していた。

ヤマギの敵を討ちたいという気持ちに偽りは無い。しかし、同時にそれでいいのかという自分の中に居る良心が「それでいいの？」と語り掛けてくる。

ヤマギの死を切っ掛けに『覚醒者』として覚醒し、それによってサブレが背負っている『何か』にも気が付いてしまった。

憎しみ、悲しみ、怒りすらも抱え込んで、背負い込んで前に進もうとするサブレ。

そんなサブレと自分を見比べしよう。

サブレはサイガが死んでも、オルガが死んでも恨むことはしても、それで復讐しようとは思わなかった。

復讐をするのなら、ガエリオ・ボードウィンを殺したはずだ。それでも、サブレが何を想い、どうして前に進もうとするのか、それは分からなかった。

しかし、寂しくそれでも多くの命を背負って歩こうとするサブレの背中には……年下のはずなのに、大きすぎる。

人としてどこか葛藤をしていた時期もあっただろう。

人として、進化した『何か』を持つ者として、板挟みになるときもあった。しかし、それすら多くの支えで超えていった。そんな人間を前にして、自分がこの数年間で何ができたのか、ヤマギに何をしてやれたのかと考えてしまう。

立ち止まりそうになり、立ち止まるとヤマギの事だけを考えそうになる。嫌だから、思い出せば、後悔を思い出すとそのまま地獄まで落ちてしまいそうだった。

最終決戦へと向かう中、自分だけが前に進めない。

明楽も、サブレも既に進んでいるのに……シノだけが進めずにいる。

パイロットルームで、たった一人、寂しく、怖気づいて進めない。

そんな時、シノの背中に体を預ける存在を背中に感じ、振り返るとイオリが抱きしめていた。

「……………イオリ」

「帰ってきて」

イオリとシノの視線がぶつかり、シノを見上げながらつぶやく一言は儂くも力強い一言だった。

イオリを抱きしめながら暖かを体中で感じる。

「守りたい者の為に戦う……………か」

多くの人が思う当たり前の感情。今なら……………よく分かる。失ってしまったからこそ、これ以上失いたくないという気持ち、絶対に守り抜いて見せるという覚悟。

「君は……………俺が守る。絶対に……………」

お互いに温め合い、前に進む勇気をイオリからもらったシノはメテオへとまっすぐ向かう。

明楽もシムカスの中で待機状態になっており、既にエデンはこの格納庫にはおらず、外で強化外装と一緒に戦場へと移動している最中だろう。

しかし、寂しくはない。

先ほどから明楽が通信機を使ってちよっかいをかけているメアリーが面白いからなのか、それともようやくすべてが終わるとい気持ゆえなのか。

あと数分で戦場につくという時に、パイロットルームでイオリとシノが抱き合っているという状況前のめりになって頭の中でどうちよっかいを掛けようかと試行していると、目の前にメアリーが画面を開いて妨害に入ってきた。

「邪魔しないでよ」

頬を膨らませながら文句を述べると、メアリーはうんざりしたような表情を浮かべながら苦言を述べる。

「アンタがちよっかいを掛けようとするからでしょ?」

メアリーは「全く」つつぶやきながら、やれやれと首を左右に振る。



明樂はどうしても聞きたいことを聞くチャンスなのではつと考えるてしまい、そのまま言葉にする。

「俺でいいの?」

「はい?どういう意味?」

「……………」

無言の圧力、というべき無言がメアリーを襲い掛かる。メアリーは大きなため息を吐き出しながらも一度明樂を見る。

昔と違って少しは成長したのかもしれない。そう思えた。

昔はどこか危なっかしく、お調子者で、楽天的な所があった。しかし、今ではどこか成長したようにも思える。それがどこかと言われると困るが、それでもそう思えるぐらい少しは成長した。

「アンタと付き合うかどうかはこの際保留にするとして……………」

明樂が聞き捨てならないような言葉を聞いたような顔をしながら、そんな表情を楽しみながら微笑んで見せた。

「アンタがイオリと付き合う可能性を排除しただけかもよ」

「まあ……………その可能性もあるけど……………」

そこまで言われればそうかもしれないという気持ちになってしまふ。しかし、それも本心かどうか分からないというのが明樂の本心である。

「それも……………嘘」

「……………正解」

適当に言った言葉が当たるという事はそうそうある事ではない。しかし、またメアリーの本心がどこにあり、明樂に対してどういう気持ちなのかがよく分からない。

「帰ってきたら教えてあげる」

今はその言葉を信じるしかなく、明樂は戦いに対するモチベーションが多少上がっていくのが分かった。

明樂よりさらに早くパイロットルームから出ていき、格納庫ではなく、ヴァルハラ右側面につけられているエデンの元へと急ぐ。

通路を通り過ぎ、ドアを開ければエデンの元へと逝ける手前でクレアが話しかけてきた。

「サブレ」

振り返りクレアの方をまっすぐ見るめる。クレアは不安そうな表情を浮かべながらサブレに抱き着いた。

「どうしたんだ？」

「私……お姉様とちゃんと話をしようと思います」

「……………決めたんだな？」

サブレのその問いにクレアは黙ってうなずくという形で答える。

「つらい現実しかないかもしれないぞ。今更ククナの想いを知ったところで彼女の覚悟や気持ちへの返事なんかはできない。それでも……………君は会うんだな？向き合うんだな？姉と、自分の家族と、何より未来と」

クレアが今まで見ようとしてこなかったもの、逃げようと目をそらし続けてきたもの。

家族が怖かった。父親が嫌いだった。姉が不気味だった。

誰も教えてくれなかったから。

周囲に居る人々も、姉も、父親ですら何も教えてくれなかった。

クレアが人の心を覗くことが出来ると知ってからは、誰も彼女に触れようとすらしなかった。だからこそ、寂しくなり駆け出していった。

「もう……………逃げちゃだめだと思っんです。多分、これが最後のチャンスだと思っから」

これを逃せばチャンスが無くなるだろう。

取り返しのつかなくなる前にちゃんと話をする。

「俺は君を送り届ける事しかできない。でも、送り届けるだけのことばさせてくれ」

「ううん。あなたはあなたであなたにしかできないことをしてください。アイン・ダルトンを止めることが出来るのはあなたしかいない」  
クレアが無理をしていることは分かっているが、サブレはそんな無理をしているクレアの顔を無理矢理近づけ、口と口をそっと触れ合わせる。

長いようで短い三十秒が過ぎ去り、口づけをやめてお互いに再び視

線を合わせる。

「想いはいつだって君の側に居る」

「私の想いもあなたの側に居る」

二人はそつと離れ、クレアはドアの奥へと姿を消していくサブレを見届けた。

サブレは薄暗い空間を超え、エデンのコックピットの座席へと座り込む。座席が沈み込み、薄暗く狭い空間が少しずつ明るくなっていく。

リアクターがパルティクルドライブと連動する駆動音が聞こえてきて、サイコフレームがサブレの脳波を受信して、基本フレーム越しに全身の状態が脳内に映し出される。

『ガンダムエデン・フォーエバーの起動を確認。強化装備『アーマーズ』の連結も確認』

全方位モニターが起動し、周囲の状況が見えてくる。

流れるような星々、戦場が近づいているという感覚だけがサブレの体中から感じ取れる。

目を瞑ると先ほどの口づけを思い出し、鼓動が速くなる。だからだろう、感覚が研ぎ澄まされていき、コロニーレーザーが第一射撃を行おうとしていると理解して、ヴァルハラから離れていく。

戦場に到着と同時にコロニーレーザーの前へと立ちふさがる。

何が出来るのかではない。何を守りたいかでもない。今動かないと後悔するというだけだった。

しかし、その瞬間に声が脳裏を研ぎる。

『力を貸そうか？』

そう言うのとシンプルなガンダムから、翼を生やした目立つガンダム、不思議な粒子を周囲に飛ばしているガンダムまで様々なガンダムがエデンの周囲へと集まっていく。

多くの人々の想いと、死者の想いがサブレに集まっていく。

「みんな願っているんだ。人々を消し飛ばす行為を止めてほしい」と。だから……ガンダム達！俺達に力を貸してくれ!!」

不思議な光が周囲を包み、同時にアインの怒号が聞えてきたよう

だった。

「亡霊が今更立塞がるかあ!?!?」

7

戦闘が始まると同時にEDMの戦力はコロニーレーザー破壊部隊と要塞攻略戦の二手に分かれて行動しはじめる。

ヴァルハラは要塞攻略戦へと急ぎ、エデンも一旦はヴァルハラへの護衛へと急ぎ、エンペラーは補給を受けながらコロニーレーザーへと近づく部隊を叩き落す。

アインはサブレとの決戦を前に武装を消耗しすぎるわけにはいかない。

それはサブレも同じで防衛の為に前に出ていき、ある程度武装を減らしてしまったら開発部が持ってきた補給専用艦へと戻っていくをひたすら繰り返す。

エデンが前方へと走っていき、大型タンクから三百のミサイル・ファンネルを周囲へと飛ばし、ミサイルはサブレの脳波を受信すると敵の攻撃を回避してモビルスーツや戦艦へとまっすぐ突っこんでいく。

推力を失った戦艦を大型ビームサーベルで切り裂きながら、別の戦艦を主砲で打ち落とす。

周囲のモビルスーツはエデンの周囲を囲みながら、ビームライフルで交戦しようとするが、エデンはフィールドで攻撃を受け止めながら一旦ミサイルで撃退する。

「明楽！一旦下がる。補給まで戦局を維持！シノはそのまま艦の護衛を維持！」

エデンが一旦下がりがり補給を受ける中、サブレは一瞬だけサラ達の事を思い出してしまふ。

ここにいない者達を思い出しても仕方がないという想いと共に、背負っていった命の為に今は前に進むしかないという気持ちで切り替える。

倒しても、倒しても戦力が減る気がせず、ミサイルでダメージを受けた機体は素早く離脱して整備を受け、その間に別の機体がサポート

に姿を現す。

キリの無い戦いが続きそんな中、敵が後退する一瞬の隙を見つけたのはビスケットだった。

「シノ！次、敵のモビルスーツが後退する時に攻撃の手が一旦止む。その隙に両肩の圧縮ビーム砲で要塞の砲台方面に向けて撃つて。場所シノに任せる」

「分かったーやってみる」

シノがライフルで敵の牽制を始めながらサブレが一旦前に出ていく。

「俺が敵の数を減らす！そうしたら敵は後退するしかないはず。そうしたら」

「分かってる。準備をするから一分だけ待ってくれ」

シノのメテオが四つん這いの状態になり、両肩の砲台がほのかに光を放ち始める。チャージが始まり、シノは照準を要塞右側の砲台へと照準を合わせる。

「ハロー！狙いは要塞右側砲台周辺！」

「了解！了解！上手クシロヨ！」

一分を経った時、エデンによって敵が後退していき、エデンとシムカスが射線上から引いていき、目の前にモビルスーツや戦艦が居なくなる。

シノは容赦なく引き金を引き、大きなモビルスーツ三機分の大きな球体のエネルギー体が邪魔される存在が無く、そのまま突き進み砲台一帯へと着弾。大きな爆発音と閃光が広がっていき要塞からの弾幕が薄くなる。

それは要塞内部にいるククナも把握していた。

「EDMによる圧縮ビームだと思われませう。要塞Dブロックの砲台が全滅！」

「Dブロックから火災が発生！」

「Dブロックを封鎖。内部に展開中モビルスーツにDブロックを中心に展開を変更。EDMの上陸部隊が近づいてくるわよ」

その予想は正しく、ヴァルハラを先頭にユグドラシル級が次々と要

塞Dブロックへと上陸しようとして近づいてくる。

ククナは素早くモビルスーツと戦艦の編隊を組み換え、上陸部隊へと迎撃戦力を送り込み、同時にDブロックから多くのモビルスーツが上陸しようとしている戦艦へと攻撃を仕掛けようとする。

しかし、それはユグドラシル級も予想していた。

素早くナパーム弾を要塞表面へと撃ちつけ、上陸阻止を試みるモビルスーツ隊へと攻撃を行う。しかし、敵モビルスーツのうちに大きなバズーカのような装備を持っている事に遅まきながらサブレが気が付いた。

「兄さん！ビームバズーカが狙っている！」

しかし、今更何を言っても遅い。サブレが阻止しようとして前に出ていこうとするが、ここでサブレがダメージを受ければ後の戦いに支障が出るだろう。そう思い、ビスケツトは大きな声でその行動を阻止する。

「駄目だ！メイデン回避行動」

「無理だ！回避しきれない」

「ダメージを側面に集中！全員衝撃に備えよ！」

大きな衝撃と共に左エンジンを貫き、左エンジンから火災と一緒に推力が落ちていき大きく左主翼が要塞の壁にガリガリという音を立てて削られていく。

「ヴァルハラは損害率35%！」

「左エンジンから火災発生！隔壁を封鎖します！」

「推力低下！」

「ヴァルハラはこれより要塞内部に不時着する！総員衝撃に備えよ！」

ヴァルハラがゆっくりとした速度で要塞Dブロックの間隙になっている穴へとケツから突っ込んでいく。衝撃と共にヴァルハラが左エンジンから煙を立てながら不時着した。

所々傷が目立つようになり、三機のモビルスーツでヴァルハラ護衛するが、それでも隙はどうしてもできてしまう。

「先輩！このままじゃ作戦に移れませんよ！」

「どうする!?!」

明楽とシノの疑問にサブレは直感で答えてみせた。

「二人は作戦に移れ!第二連結と第三連結を破壊しろ!その間は俺がこの場を守る!」

「無理だよ!サブレ一人なんてこの場を守り切れない。それにこの後の戦いだってあるんだから!」

しかし、誰かがこの場を守る必要がある。そんな中、大型ビーム砲の射撃で木星帝国のモビルスーツが撤退を余儀なくされており、その隙を作形での確な射撃がさらにモビルスーツを落としていく。

それが誰なのか、そんなのは考えるまでもないことだった。

考えることなく叫ぶのはサブレだった。

「どうして戻って来たんだ!?!お前達!!」

「私達の判断で戻ってきたんです!」

涉とジョシユアが周囲の敵に牽制を仕掛けながら隙を作り、その隙にレオが突っ込んでいく。ジャーニーとノイン以外のメンバーが戻って来たらしく、周囲を散開しながら敵を落としていく。サラとマークが艦の上で護衛へと入っていく。

「どうして自由に動かない!お前達を期待している者達も戦場にはいるんだぞ!」

「その人達から助けに行ってくれて頼まれたからです。それに私達は自由にしてもいいと言ったから自由に考えて行動しました!」

「だったら!」

「だから戻ってきたんです!」

サブレの大きな声を超えるほどの怒号で答えて見せたサラ、サラから初めて見る気迫に圧倒されそうになる。それだけ、彼らが真剣に考えた結果なのだど理解できる。

サブレはビスケットと視線を合わせ行動に移る。

「明楽とシノは予定通り作戦を開始!サブレはコロニーレーザーの破壊に!俺はクレアさんと一緒に要塞内部へと入っていく!サラ達はヴァルハラを護衛を!」

そう指示を出すとシノと明楽は別々の通路から移動し始め、サブレ

も補給を受け始める。これが最後の補給だと心に決める。

「先輩。コロニーレーザーではスニーが攻撃しています。すぐに向かつて後退する様に言ってください」

「分かった」

そのままエデンはコロニーレーザーへと向かって姿を消していく。

この時、サブレ達は気が付かなかったが鉄華団の方は一足早く最後の戦いへと進んでいた。

ペペロの闇と立ち向かっていた。



## 選り取った未来Ⅳ 《角笛の闇》

8

イサリビは木星帝国の本拠点であるコロニーエータントへと航路を向かっていた。エータント周辺はデブリと小惑星が鬱陶しく浮かんでおり、視界が悪いのと時折反応する固有周波数が反応して警報が鳴り響く。

何度目になるか分からない固有周波数の警報、ユージンは鬱陶しいという表情で警報をその場で切ってしまう。

「本当にこの先で……なんだ？オズボーンだっけ？そいつに会えるのかね」

ユージン達はサブレからの仕事の依頼で木星帝国の本拠点、そこで待っているオズボーンと接触し、ペペロの正体と殺害を依頼されていた。

不安が無いと言えば嘘になるが、だからと言ってここで引けば鉄華団の名折れ、その上これ以上役に立たないと思っていた自分達の活躍のチャンス。

それに、鉄華団の最後の舞台と思えばなんということは無かった。

これで本当に終わりにしよう。後悔も、無念もこれで最後にするとみんなで決めた。

死んでいった仲間達、家族達への弔いをここで終わりにする。

そして、モニターは角笛の生き残りとして、ギャラルホルンの闇を覗き、闇を消すために戦う。

警報がしつこく鳴り響くことにもう違和感は無かったが、違和感を感じ取ったのはモニターと三日月だった。

「ユージン・セブンスターク！すぐに艦をデブリに寄せるんだ！」

モニターの声にとっさに反応して見せた。

「近くのデブリの隙間に隠れろ！」

イサリビ改は小惑星とデブリの隅に入り込み、側面が『ガリガリ』という削られる音が聞こえてくる。

それとほぼ同時かもしれない。ビームの着弾音とピンク色の強烈

な光が見えてくる。

小惑星とデブリ越しに響く衝撃にブリッジに居るほぼ全員が身構える。その後、格納庫より二機のモビルスーツが飛び出していくのが見えてくる。

バルバトスとガフエインがデブリと小惑星を掻い潜りながら、ビームが飛んできた方向へと突っ込んでいく。

ガフエインがビームを飛ばし、デブリを壊すとそこにはピエロのような風貌のモビルスーツが佇んでいた。

そんなモビルスーツをバルバトスが大型ビームメイスで叩きつけ一気に決着をつけてしまう。

「よしーなんだ！雑魚じゃねえかよ」

そう言いながら現れたのはダンテとチャドとエンビの三人である。EDMの最新モビルスーツである『ガンジユ』が援護の為に撃っている。しかし、そんな事とは別に、三日月とモンタークは嫌な沈黙を続けている。

「どうしたんですか？三日月さん」

エンビがそう尋ねると、長い付き合いであるダンテとチャドはなんとなく嫌な予感に周囲への索敵に入る。

しかし、周囲には多数の固有周波数が確認できるだけで、それ以上はまるで感じない。そんな状況に対する答えはあっさり出てきた。

周囲に展開している固有周波数が急に動き始める。

三日月達の元へと集まっていく。

「へえー僕たちの存在に気づけたんだ」

そう言いながら現れたモビルスーツの数はゆうに三十は超えるだろう。そのほぼ全てがピエロタイプのモビルスーツであった。

「名前は『クラウン・クラウン』なんだあ」

「貴様らしい名前だな」

しかし、この状況をおかしいと思ったのはほぼ全員だった。

「おかしいだろー！そもそも木星帝国の戦力は三つに分けてあるはずだ。なのに、どうしてこんなに残っているんだよ」

「別におかしなことは無いだろ？本拠地だって戦力を残しているだろ

うし」

ダンテとチャドの会話にペペロが入り込んでいく。

「いや、戦力は本拠地には残っていないよお。これは僕が個人で用意していた戦力だよ」

「だとすればどこかに本人が居るとみていいんでしょうね」

ペペロの言葉にエンビが反応するが、それに対してモンタークが尋ねる。

「本物はいるのか？」

「いるよお、全部本物だよお」

ダンテ、チャドやエンビが「はあ？」とあつげにとられたような声を出し、モンタークはやはりという表情を浮かべる。

「だと思った。おかしいと思ったのは先ほどの会話だ。今回の戦いは総力戦だ。両勢力が最大まで戦力を絞り切っている。そんな状況で本拠地に回す戦力があるのなら要塞方面に戦力を回すはず。だからこそEDMは我々で対処できると踏んだのだろうしな。しかし、この戦力はEDMやオズボーンの予想を超えている。という事は木星帝国の中に裏切り者がいるはず。それはお前しかいないだろう。それに、問題は全部が本物という意味だ。私が思い描く意味とは全く別物だと思うが？」

モンタークの言葉に頷くこともせず、否定もしないペペロに対し、三日月は感じたことを機械を通した脳波で周囲へと伝える。

『このほぼ全ての機体から全く同じ脳波を感じる。一機だけ違うみただけだ』

そういう三日月の視界の先には武者鎧が刀のような装備を握ってこちらを睨みつけていた。

「君たちはここで死ぬ。どうしてこの場所まで来たのかは謎だけど。これ以上通すわけにはいかない」

Fの冷静で冷血な声が三日月の警戒心を最大値まで上げるのには十分であった。

囲まれている状況でどこまで戦えるのかは誰にもわからず、勝ち目があるとは思わない。それでも……………。

「君たちを超えていかなければいけないのなら我々は戦うだけだ。そもそも君達の目的は……?」

モンタークの疑問にペペロはヘラヘラ笑いながら答えて見せる。それは全員がゾツとするような答えだった。

「復讐……なんてのはつまらない答えだよ。僕の目的はねえ。全部だよ!!ウイルスを使って滅ぶとかあるよね。それと同じだよ。このモバイルスーツは自爆することで周囲にウイルスを巻くことが出来るんだ。それをさあ、地球や火星や要塞で使えばどうなるかなあ?」

『人間? あんた』

「でもさあ! ぞくぞくしない!? ワクワクしない!? みんなが苦しんで死んでいくんだよお! いいよねえ!! 大切なモノを奪われる苦しみを僕に見せてよお!」

ペペロの狂気を体中で受け止める。

どこまでも、どす黒い狂気、それを止めることが出来るのかは誰にもわからない。しかし、この時、ペペロは一つだけ見抜けていないことがある事に気が付かなかった。

モンタークは出立する前にシノへと訪れていた。

妹である『アルミリア』がしてしまった事、それを知っているからこそ会いに行った。その結果で殺されるとわかっていても、そうされても仕方がないとわかっていても。

「話があるんだ」

シノに向けて話しかけると、シノは死にそうな目でモンタークを睨みつける。

こういう目をされてしまう事はモンタークには分かり切っていた。「許してほしいとは思わない。こんなことを頼める義理は無いとは分かっている」

シノの脳裏には「妹を助けてほしい」という言葉が来るのだと確信していた。だからこそシノはそれを断る算段を立てていたが、モンタークの頼みはそれを超えていた。

「妹を殺してあげてほしいんだ」

「はあ？なんであんたが」

「妹はもう引き返せないだろう。それに、妹はマクギリスを本気で愛していたのだろう。なのに、俺は妹を追い詰める事しかできなかった。それに、これ以上私には助ける術が見つけれない。きつと記憶をなくしていても心が覚えているんだろう。だからこそ、君の大切な人を殺したんだと思う」

モンタークは「許せなかったんだらう」と呟き、同時にシノはヤマギが死んでいく光景を思い出す。同時にレッドクイーンの時も思い出す。

「幸せになれなかったからこそ、目の前に幸せになろうとしている者が居ると、憎しみで行動してしまうのだと思う。そんな妹を私は救えない。救う術もない……だからこそ」

「アンタに言われるまでもない」

冷たく接するシノにモンタークは頭を下げる事しかできなかった。

オズボーンは港の個室でイサリビ改の到着を待っていた。

ペペロへの監視役が姿を消してからはオズボーンは多少の焦りを感じており、一刻の猶予もない。ペペロが完全に行動を起こす前に、こちらが先手を打ちたいと考えていたからだ。

しかし、先手を打ったのはペペロだった。

固有周波数がコロニーの周囲へと散開しており、それが動いていると範囲レーダーが示している。

オズボーンはペペロが犯人だと確信を得る。

「ペペロ！一体何をしている!?!」

周囲の動く物体へと通信を強引に開く。その動く物体がモバイルスーツだと確信したのはこの時である。

「何のこと……?」

「一体どうやってそれだけのモバイルスーツを用意した!?!全戦力は三つに分けられているはずだ!なのに……」

「僕が自前で用意しただけさあ。それに……君はもう少し自分の心配をした方がいいんじゃない?」

「!?!」

危機感を後方のドアの方から感じ取り、物陰に隠れるのと同時にドアが爆発させられる。

部屋に入ってきたのはピエロ姿のペペロ……が五人。数にも驚くが、それ以上に驚くのは一つ一つに命を感じる事である。

それぞれのペペロが全く別の動きをしており、機械じみた動きをしてくれた方がオズボーンはある程度納得のできる解釈があっただろう。

「驚くのも無理は無いよお。でも、全部僕で、全部違う命なんだあ」  
全員が同時に喋るので、違和感が半端ではない。

「貴様……何が目的なんだ。何がしたいんだ」

ペペロは少しの間だけ黙る、五人のペペロは不気味な微笑みを見せながら一斉にしゃべりだす。

「僕だけがいる世界だよお！僕たちだけがいる世界！みくんな殺すんだあ！ウイルスでみんな殺してえくみんな苦しめばいいい！」

サブレやアインはまだ人間らしさがあると思つたオズボーン。アインは人の浅はかさや愚かさに嫌気がさしたゆえの行動だとサブレはオズボーンに語り、サブレ自身は人を信じた上の行動だとオズボーンは知っている。

しかし、ペペロはどこまで言つても自分本位の行動であり、その極みだとオズボーンは思う。

サブレとアインは進化した人類の闇と共に戦っているが、ペペロは人間の闇と言つてもいい存在であり、それを倒すのもまた人間なのだと確信するオズボーン。

（確信した。ペペロは我々人間で殺すべきなんだ。この男は生きて居てはいけない）

そして、オズボーンはすさまじい速度で思考を回転させていく。

（いくらペペロが化け物じみた存在だとしても、無敵ということは無いだろう。という事はどこかに本隊が必ずいるはずだ。問題はどうかやってこれだけの数を動かしているという事だが）

ここまで思考したうえで、外に居るモビルスーツのパイロットもここに居るペペロの量産タイプだと判断できる。

(どうやら、これがあの男が言っていたペペロの正体につながるらしいな)

マハラジャが告げるペペロの正体へとつながる道、それが目の前に居る複数のペペロ。

(間違いない。今、答えの道の上に居る。答えはこのコロニーにある) まずはここを突破する必要があると確信するが、唯一の出入り口をペペロにふさがれている。下手に体を外に出せば殺される可能性がある。

手元にある武器で戦うしかない。

ハンドガン、手榴弾が数個とナイフ、これがオズボーンが持っている武器である。

「殺しちゃうよお」

ハンドガンをおズボーンに隠れている場所へと向けるが、オズボーンは引き金を引くより早く上へとスーツの上着を投げて見せる。

風になびくように浮く上着、とっさに五人は上着へと引き金を引く。

隙が生まれた。

確信と共に手榴弾をペペロ五体の足元へと向けて転がし、起爆の直後に駆け出す。生き残っているペペロから反撃を恐れず、ナイフを持ち出して、立ち上がる煙の中から起き上がろうとしているペペロの喉元、頸動脈目掛けて素早く切り裂きながら、ハンドガンで起き上がるようとしている最後の一体へと引き金を引く。

どうやら手榴弾で生きていたのは二体だけだったようで、他の三体は即死だった。

体の破片が至る所に散っている場面を目撃してもオズボーンの表情が崩れることは無い。

「戦って見せる。これは人間の愚かさや浅はかさが招いたことだ。これは人間の手で終わらせるべきだ」

進化した人類へと引き継いではいけない業だと確信するオズボーン。

戦いが終わる前に、サブレとアインが決着をつける前に終わらせ

る。たとえ……………」

「私に味方が一人もいないとしてもだ！」

一人駆け出していくオズボーンの脚乗りは意外と軽やかだった。

三時間かけてたどり着いた場所はコロニーの中でもトップクラスに重要な場所である。

木星帝国の幹部のほとんどは研究職を本職としている人間で、ここはその研究区画が集められている場所である。

むろん、ペペロもここに研究所を置いており、ここ以外には作りようがない。それは、EDMや木星帝国に隠れてモビルスーツや自身の複製を作るのは自分の研究区画だけ、オズボーンは確信と共に大きなドアの前へと佇んでいる。

傷だらけの体ではあるが、どれもが軽傷で済んでおり、たった一人でこの場所までたどり着いた。

「この奥が……………この奥に」

「この奥に行けばいいんだな？」

オズボーンという言葉に重なる様に声が聞えてくる。それは、オズボーンには聞き覚ええない声である。それも当然であり、その声の主はユージンだったからだ。

振り返ると、ユージンの後ろには元鉄華団のメンバーが集まっており、みんなが銃を持ちながら現れた。

「アンタがオズボーンだな。サブレ・グリフォンからの依頼で来たぜ」  
「そうか……………間に合ったのだな」

ユージン達はモビルスーツの相手を三日月達に任せ、自分達は任務を全うする為にこの場所まではせ参じた。

「といっても、ここまで来れたのは勘だったけどな。たまたま出入り口を探して、入ってみたら戦闘痕があったからな、後はそれを辿っただけだ」

ユージンは「勘が良かったぜ」とどこか得意げだ。

オズボーンはユージンに頭を下げる。

「どうか付き合ってくれないだろうか？人間の業を次の時代に引き継がないためにも、何より角笛の闇を暴くためにも」



「それが俺達の仕事だからな。鉄華団の最後の大事な仕事ってわけだ」  
オズボーンは議長権限でドアを強制的に開けさせる。

ドアの向こう側にあるものは何か、それは誰にもわからない証明  
だった。

## 選り取った未来V 《人類の業》

9

増えていくのではないかというほどのモビルスーツの大軍、ガンジユは三機でまとまりながら移動していく。

囲まれないように、小惑星やデブリを使用しながらの戦法、ビームサーベルを抜いてモビルスーツの胴体を真つ二つに切ろうと手を伸ばすが、クラウン・クラウンは三機がかりで受け止める。

「クソ！数が多すぎる！」

「でも、逆に言えば数で攻めないと勝ち目がないという事じゃ？」

ダンテの不満をエンビがうまく流して見せ、チャドはその間にクラウン・クラウンを一機落として見せる。

「三日月の戦いの邪魔になつてる。なるべく多くの機体を落とさない」と

チャドからの最もな意見に黙つてうなずきながら三日月の方を見る。

三日月は武者のようなモビルスーツと戦いながら、クラウン・クラウンと戦っており、大きなビームメイスが囲まれないように破壊していく。

「お前たちを破壊する。生かして返さない」

三日月への揺るぎ無い殺意。それを三日月はいつものクールさで受け流していた。

まだ本気を出すべき時ではない。

三日月はそう思いながらふとモニターの方へと視線を移す。

モニターも多くのクラウン・クラウンを破壊しながら『本物』を探していた。

「粘るねえく大丈夫う〜？」

「この中に本物が混じっているはずだ」

「どうかなあ〜？本物なんていないのかもよお？」

そんな言葉を聞き流しながら、ひたすら落としていく。ビームマシンガンで牽制しながらその後方に居る別のクラウン・クラウン目掛け

てビームサーベルで切りかかる。

減ったように見えない状況が全員を精神を追い込んでいく。

ダンテのガンジユの右肩にクラウン・クラウンの攻撃が直撃する。右肩を貫いたビームライフルの攻撃で右腕に不具合を起こす。

ダンテの右サイドに死角が出来てしまう。

「誰か彼の右側を守ってやらないと落ちるぞー！」

モンタークの一声でチャドが咄嗟に動こうとするが、チャドのガンジユの右足にクラウン・クラウンがしがみ付く。

ギギギ！という不快音を立てながらクラウン・クラウンが大きな閃光を周囲へと放っていく。

爆発と共にチャドのガンジユが黒焦げになりながら小惑星の隙間に落ちていく。

「チャドさん!？」

クラウン・クラウンが複数がかりでチャドにとどめを刺そうと囲み始める。

「チャドオ!!」

チャドとクラウン・クラウンの間にエンビのガンジユが立ちふさがり、ビームサーベルを抜いて襲い掛かる。

しかし、数が多く決め手に欠ける攻撃しかできない。すると、エンビのガンジユにも複数のモビルスーツがしがみ付いて自爆攻撃を仕掛けようとしてくる。

「エ、エンビー！」

チャドがうめき声のような叫びをエンビへと向ける。

さすがのガンジユでもこれだけのモビルスーツに囲まればひとたまりもない。

そんな時、三日月の中に居る昭弘が目を覚ました。

『これ以上……………失いたくない』

『分かっている。昭弘。力を貸して』

『言われるまでもない』

バルバトスに三つ目と四つ目のアイカメラが起動して、まるで四つの目を持つ悪魔のような風貌をしている。

尻尾から放たれるビーム攻撃で、エンビに捕まっているクラウン・クラウンを打ち落とす。

「ありがとうございます」

『エンビはチャドの防衛に集中』

三日月の声スピーカーを通じてちゃんとエンビに届き、ダンテもチャドの防衛に入る。

『行くぞー！三日月』『うん。行こう』

クラウン・クラウンをビームテールを振り回しながら、ビームメイスでクラウンクラウンを打ち落としていく。

「隙が出来た」

クラウン・クラウンを落とすのに夢中になっているバルバトス。その後ろから武者のようなモビルスーツが襲い掛かる。

しかし、バルバトスのサブアームが腰から姿を現し、ビームサーベルで攻撃を受け止める。

「な？」

『俺達は一人で戦っているんじゃない』

『俺達は二人で戦っているんだ』

『だから……このバルバトスはグシオンの名前も聞いている』

『ガンダムバルバトス・グシオン』

武者型のモビルスーツに乗り込むFは驚きと共に機体の態勢を整え、体をひるがえしてビームサーベルを抜く。

「君たちが全力だというのはよく分かった。ならこちらも全力でかかる。私の名前は『F』。この機体の名前は『零』。私には……何もない！」

零のビームサーベルとバルバトスのビームサーベルがお互いにぶつかり合う。

オズボーンと共にユージン達はペペロの研究所へと足を踏み入れ、薄暗い廊下を歩いていく。

足音だけが響き、一寸先が見えないような闇だけが広がっている。

生活感の無いような廊下にはドアが一つもない。

「ペペロはここで生活していたはずだが」

「なんか……ここがせいかつしていた感じがゼロなんだけだよ」

ユージンは不安そうな表情を浮かべ、オズボーンや他のメンバーにすら不安にさせる。それも仕方がない事だとオズボーンは思う。

人が歩いているのか不安になってしまうほど染みや汚れがな全くない。清掃をしているという風の感じではなく、単に人が生活をしていないような感じししかない。

『僕はクローンだ』

ペペロの声が廊下中に響き渡り、奥の方から一筋の光が見えてくる。光に向かってひたすら歩いていく。

『『アグニカ・カイエル』のクローンで、人間を人工的に進化させることが出来るのかどうかという目的で拉致された実験動物』

「どこから声がしてるんだ？」

ユージンは周囲を見回してみても何も見つからない。

スピーカーどころか、音を出すような隙間も見当たらない。

オズボーンが壁に手を触れ、かすかに感じる振動に確信を得る。

「どうやらこの壁がスピーカーの役割をしているようだな。声とは空気の振動だ。この壁は微かにだが振動している」

「確かに」

「周囲を全く同じ振動を放つことで、声が出ているような錯覚を与えているのだろう」

誰かがふとつぶやいた。

「まるで体内に居るみたいで不気味だ」

壁が生きているみたいで不気味な気分がやってくる。

恐怖心を表情に出さないようにオズボーンとユージンが率先して前を進む。

光りがさす方向へと、部屋の中へと足を踏み出した途端………声を失い。表情を引きつらせる。

『だから……僕はどうかやれば永遠の時間を生きることが出来るのか考えたんだ。そして、分かったんだ。肉体への執着を捨て、脳だけの存在になればいい。でも、それじゃあ脳のメンテナンスができない。かといって他人に任せる何て嫌だからね。だから考えた。行動を起ここ

し、実行して、完成させた。僕は僕を複製した』

そこにあつたのはガラス一枚挟んで、大量の培養器と培養器の中に入っているペペロのクローン体。

そんな培養器を動かしている機械。

正面に存在するコンピュータの画面すら、ペペロが全部動かしているようで、誰かが言った体内に居るみたいだという言葉、それがあながち冗談ではなかった。

「貴様……人間をやめるつもりか？」

『それで僕が永遠に生きることが出来るならね』

永遠に居る為に捨てた物、人で在る事、人間としての器をあくまでも仮初の入れ物としか考えない。

セブンスターズ、ギャラルホルンが三百年の間に作り上げた人類の業。

いや、そうではないとオズボーンは思う。

別段、ギャラルホルンだけが悪かったわけでは無い。

宇宙が上がってから大きな権力を持つてきた組織、それは多く存在する。そして、その多くが間違い、自らが戦火を広げていった。

その過程の中で進化した人類という『テーマ』を軍事力という形で落ち着けようとした。

それが間違いだったと誰もが気が付かない。

進化とは感じるものであっても、知るものではない。進化していない人間が、進化を知ることなどできない。なぜなら、進化したものですら知ることが少ないのだから。

そんな傲慢さ、浅はかさがペペロという化け物を生んだ。

「貴様是我々人間が殺すべき存在なんだな」

『僕だけでいいだよ。僕は……人間を超えたんだから!!!』

人類の業。

人工的な方法で人間が進化できるはずがなかった。

間違っていた。

そんな過ちを後に生まれてくるだろう進化していく者達へ引き継いで良いわけがない。

「俺達も協力するぜ。鉄華団の罪を償っていくためにもな」

ユージン達なりのやり方で『鉄華団』を終わらせる。

オルガや多くの仲間たちと共に混乱に陥れた罪、周囲が許しても彼らの心は未だに晴れない。

家族を手に入れた者、仕事を手に入れた者、多くのメンバーが今だ心晴れずにいる。

それもこれで最後にしよう。

ビスケットやシノと共にこれで鉄華団を本当に終わりにする。

何より、今傷つき、人類の生存を信じて戦っているたった一人の間『サブレ・グリフォン』。

ビスケットやシノが教えてくれたサブレの真実。

鉄華団が一人でも救われるようにと奮闘してきた者が居たと、傷つき、たった一人で憎しみを背負ってでも歩いている者が居ると。

自分を憎むことで、誰かが歩いてくれるならそれでいいと開き直り、一人になろうとした寂しがりやが居た。

しかし、多くの人を救ってきたように、彼もまた多くの人に救われてきた。

支え合う事が『人』であるという事であり、進化とは『人』を捨てる事ではなく、人で在る事だとサブレは悟った。

この数年間は決して無駄ではなかった。

一人で歩けないとオルガの戦いから通じて知った。

仲間を頼る事、敵すら救う事、憎しみからは何も生まないことを地球での戦いから知った。

憎しみを集めることをやめる事、愛することを知った火星の戦い。昔を知り、未来を求める。

だからこそ、サブレがその戦いに向かう中、そんな邪魔をさせるわけにはいかない。

「邪魔させるかよ！お前はここで俺達がぶっ潰す」

コンピューターをいじってみるが、手ごたえを感じない。

「どうやらこのコンピューターでは操作ができないようだ」

「だったらこの施設のどこかにあるんじゃないか？さすがに全部を

内部からコントロールはできないだろう?」

「だろうな。しかし、それなりに広さのある施設のようだし、一個一個調べて回るのは全滅を意味するだろう。どうやって……………」

本命を探し出すのか。

この施設のどこかにペペロの本体が居る。そして、そこにコントロールできる場所が必ずあると信じる。

すると、ここで殺そうとしているのか大量の培養器が一斉に動き出す。

「まずいぞ。ペペロの大群がここに押し寄せようとしてやがる」

「あの数はさすがにまずいな。それに、このウイルスに対するワクチンを製造する必要がある」

やるべきことが多すぎてどこから手を付けるべきか分からない。

しかし、そんな中三日月達を囲むようにさらに多くのモビルスーツが射出される。

「これ以上増えたらやばいぜ!!」

「ペペロ!我々を先に殺すのではなかったのか!」

『目の前で仲間たちが死んでいく姿を見ているといいよ!僕に教えてほしいな!絶望しているときの人間の表情を!!さあ!!』

「下種野郎!!」

多くのペペロが銃を持った状態で部屋の中へと入ってこようとしている。

「団長!!やばいっすー!」

「団長って言うんじゃねえよ!団長じゃねえしな!!」

こんな時でも頼もしいと思う。

三日月達もまだあきらめていないようで、必死に抵抗している。

すると、オズボーンは施設の地図とにらめっこにしていると地図の不可解さに気が付いた。

「電力の供給率に不透明な部分がある?」

地図の中に不審な供給ラインがあると気が付き、それが一点に集中している。そして、そのすべての配給ラインが何かに似ていると気が付いた。



「もしかして……………この施設。モビルスーツ？いや……………モビルアーマーか!？」

「どういふことだよ!？」

「この電力の配給パターンはモビルスーツやモビルアーマーと似ている。おそろくだが、この施設はモビルスーツやモビルアーマーへの変形を可能にしているんだ」

「はあ!?!この施設が……………変形するつて言うのかよ!?!マジで言ってるのか!?!」

「そう考えるのが自然だと思うが……………まだ、変形するほどではないと考えた方がいい。変形する前に決着をつけた方がいいだろう」

「でも……………このままだと三日月達の方が持たないぜ!」

「今は信じるしかない!」

そう言いながらオズボーンは外の様子を確認しながら廊下を歩いていく。どうやら、廊下の中や部屋の中には鍵をかける機能はまるでないらしく、その代わりに至る所にペペロが現れるためのスペースが存在する。

まずは、地図の中にあるウィルス研究室へと目指そうとする中、三日月達が地道に追い詰められていく。

特にダンテとチャドのガンジユが今にも落ちそうになる。

ユージンが見ている事しかできない悔しさをデスクにぶつける。

そんな時、多くのモビルスーツを一瞬で落とされていく。

「こちらEDM所属のパイロット『ジャーニー』と『ノイン』です。ガンダムスニーが援護に入ります」

同時に開発局専用の補給艦も同時に戦場に姿を現す。

「そちらのガンジユをこちらで修理補給いたします」

そう言いながらダンテがチャドと共に補給艦へと向かい、補給艦から大型シールドをエンビへと射出する。

戦局は総力戦へと向かいつつある。

## 選り取った未来VI 《罪と罰》

10

目の前に確かに存在していた付属品、小惑星は瞬く間に姿を変えていく。手足が伸びていき、それ以外にも触手のような首が伸びて、その姿はまるで八本首の竜のようにも見えた。

その変形に三日月とF以外があっけにとられていて、ペペロ全員が高笑いがまるで合唱のようにも聞える。不愉快で表情を曇らせるのはモニターだった。

三日月とFはこんな状況でも淡々と戦闘を繰り返している。

合体したスニーの大きな手が首のいくつかをつかみ取るが、ほかの首がスニーに噛み付こうとしていた。

それをエンビの大きなシールドが食い止めようとする。

「どうするんですか？」

エンビの素朴な疑問にジャーニーとノインは「分かんない！」っとだけ答えた。首を引きちぎろうとスニーの力を人一倍籠めるが、抵抗しようとして首が複数でスニーに襲い掛かる。

「この中に本体が居ると考えた方がいいだろう」

「ならこいつを落とせばいいわけですね？」

「そういう事だ」

モニターとジャーニーの会話を聞いていた他のメンバーも一斉にかかるが、そんな彼らにペペロはまるで楽しむかのように言っている。

「いいのかなあ？この中には君たちの仲間もいるんだよ？」

彼らが脱出不可能になった段階で閉じ込め、彼らを囷として使う。

実際スニーの手にかかる力が緩み始める。攻撃できないジレンマが全員を襲うか中、中ではそんな彼らの代わりに鉄華団とオズボーンが粘っていた。

そんな中、三日月とFの戦いが熾烈を極め始める。

三日月は大型メイスを振り回しながらFの駆る零を補足しようとする。スピードでは零が圧倒的に上で、速度の面で振り回されてい

る。

刀がバルバトスの後ろから振り下される。しかし、サブアームのビームサーベルで受け止めるが、ビームサーベルより零のビームカタナの方が出力が高いようで、押し返され始める。

バルバトスの大型ビームメイスを振り向きざまに、横殴りで叩きつけようとする。

それを腰を捻る形で回避して見せ、そのままカタナを振り下ろす。ビームシールドで攻撃を受け止め、サブアームがビームライフルで反撃するが、零は一気に距離をとり、カタナでライフルを打ち落とす。

機動力、速度の面で負けているバルバトスが勝てる一面は機体の破壊力という一点のみだ。逆を言えば一発当てれば勝つことが出来る。

Fの過去を三日月はサブレからおおよそで聞いていた。テラの陥ったサブレとの因縁。そこから発展して生まれたテラとの信頼関係。

それが火星での戦いにおいて終わってしまった。

テラが死んでしまったから、そして、ペペロに唆された。

しかし、三日月は同情するわけでも無く、ただ殺そうとするだけだった。

同情はしない。情けはかけない。今はただ殺すだけだった。

一瞬の間を探す三日月、押し通そうとする。

一瞬でも隙を見せれば死んでしまう。目の前に死がチラつくような戦いが、二人の目の前で繰り広げられており、吐く息のタイミングさえも考えてしなければ隙につながりそうな気がする。

いや、実際吐く息のタイミングすら隙に繋がりがかねないのだと理解できる。

思考するより、本能の部分で機体を操作している部分はお互いに大きい。

三日月や昭弘はもとより本能の部分で戦う事が多く、Fも思考より直感で戦う事が大きなアドバンテージだろう。

それはサブレとはまた違う戦い方だと本人達が把握している。

直感を思考で理解して、才能を知能でコントロールできる人間。そ

ういう人間が戦場では生き残りやすいのだと今なら分かる。

しかし、だからと言って今更考え方を変えることはできないし、変えようとは思わない。

羨ましいとも思わない。

生まれ持ったものが違うだけ。

実際、才能があつても失敗することはある。結局の所で周囲の人間……命の繋がりや行動が人生や運命を左右する問う事なのだろう。

鉄華団がもう少しましな人間、もう少し権力を持っている組織と出会えていたら違っていたのかもしれない。

今ならそう思う。

三日月や昭弘の後悔はそこなのかもしれない。立ち回りや行動というよりはもつと違う人間と出会えていればという後悔。

三日月はそう言う後悔はビスケットが一番大きいかもしれないと考えていた。

双子の弟が経済圏がバックにいる組織に所属しており、少しでも話していればと言う……後悔。

『人の運命を動かすことが出来るのはより多い人の行動でしかない』

サブレが最終決戦を前にして語ってくれたことでもある。

『人だけじゃない。あらゆる生き物の行動が運命になるんだ。どうしようもないことだつてあるし、変えられないことだつてある。だから、世界という道は多く存在するのが本来のカタチなんだ。未来は無限だけれど、過去は一本道だから。命は未来にしか進まない。だから、失った命の輝きは過去のモノ。未来には持つていけない。だから……俺は世界を元に戻したいんだ。俺は……』

苦々しい表情と共に繰り返される言葉は……空白だった。

『』

何を後悔し、何の為に戦うのか、三日月はそれを大事にしなければならぬ、これからもそうなのだと分かる。

しかし、三日月や昭弘には大切にしたい人たちがいても、同じ道を歩こうとは思わない。

影で過ごし、闇と共に生きよう。

世界の陰で、世界の抑止力になっていく。

皆が表で、光を浴びて生きるのなら、自分達は影の中で、闇を抱いて過ごすのだと。

全ての人間が光を浴びて生きれるわけでは無い。なら、その犠牲は自分達だけでいい。

そう思った時、三日月や昭弘の脳裏には、幸せそうにしている知人たちの姿が映った。

そんな世界を作る。

これを夢で終わらせない。

こんな世界を現実に変えよう。

改めて三日月の昭弘の気持ち有一段と引き締まる中、大型ビームメイスを振り回しながら、ビームテールを使つて牽制をしながら零の逃げ道を塞いでいく。

小惑星を盾にしようとするが、三日月はそれを粉碎しながら進んで行く。機動力と速度を売りにするのなら、それを塞いでみるだけだつと。

ビームテールと大型ビームメイスで小惑星を破壊しながら、破片を周囲にまき散らしていく。少しづつではあるが、機動力が奪われ始める。

小惑星の破片が、エイハブリアクターの疑似重力に引き寄せられているからか、視界がふさがれ、移動ルートに制限がかかる。

移動ルートが一本道になったところで前に立ちふさがり、大型ビームメイスを振り下ろす。しかし、零は小惑星の破片によるダメージなどを無視して回り込みながら、カタナを振り下ろす。

それをビームサーベルで受け止めながら、大型ビームメイスを振り回す。

その攻撃をよけようと思った時、零の背中に大きなダメージと共に身動きが止まる。

どうやら、ブースターに破片が入り込んでしまったようで、素早い動きが出来なくなり、仕方がないとカタナで攻撃を受け流そうとするが、腕が動かないことに焦りをにじませる。

小惑星の破片が腕の関節に挟まってしまい、動きに支障をきたしている。

Fの視界一杯に大型ビームメイスが移りこんだ数秒後、Fの意識は永遠に失われた。

研究所内に大きな振動と共に響き渡る衝撃、ユージン達は衝撃から身を守る為何かにつかまる。

オズボーンはそんな状況ですら、キーボードを打つ手を止めない。ウイルスに対するワクチンをその場で、即席で、すぐさまに作り出す。問題はそこではなかった。

この部屋を調べてもペペロの本隊を殺すための手段が分からなかった。いや、正確に言えば、ペペロの正体は分かったし、その居場所までは分かった。しかし、それを殺すための手立てが分からない。

「分かったんならそこまで行ってみようぜ！」

「まあ、それしかないのか……しかし、言ってもいいが、あまり期待しないでくれ。これを知ればどうやって殺せば良いのか分からなくなった」

そう言つてオズボーンが連れて行った場所は、一番目立つほどに頑丈な扉が強固に守られている部屋だった。

ペペロ達に追いかけられながらそのドアの前までたどり着き、ユージン達鉄華団がドアを破壊しようとする爆弾を取り付け始める。

爆弾を設置した場所は鍵の付いている場所を念入りに設置しながら、大きな爆発音と共にドアの鍵の部分が破壊され、ドアがゆっくりと開き始める。

その奥に鎮座しているそれは寂しさを感じさせるものだった。

ひとつの小さな脳みそが培養液に浸りながら様々な電気コードがつながっている。

「これが……こんなものが正体なのかよ」

「実際厄介だ。木星の衛星で見つかった人類最高強度の合金を使用した特殊ケースとでもいうのか。少なくとも外からの攻撃では破壊できないだろう」

キーボードらしいものも見つからず、打つ手が無いような空気が周

困を満たしていると、ユージンがゆつくりと顔を上げる。

「絶対あきらめるかよ！」

アサルトライフルを構える中、鉄華団が持っているタブレットには追い詰められていくモビルスーツ隊の姿が書かれており、スニーが奮戦しているが、それでも決め手に欠けている。

モンタークも機動力をうまく使って首を少しでも斬り落とそうとするが、それでも致命傷にはならない。

そんな中、ユージンは思考を巡らし、外の光景と自分が見ている光景を見比べた際、ある方法に気が付いた。

「全部のペペロは繋がっているんじゃないのか？ だったらどれか一つを使って連鎖崩壊を起こせねえか？」

今度はオズボーンが思考を巡らせる場面だった。

そして、目の前にあるワクチンを手でいじっている際、ペペロの機体の構造のおかしさに気が付いた。

「そうか！ ウイルスの事をずっと不思議に思っていた。ペペロはウイルスで体を構築しているんだ。だから、ウイルスの入っている機体でも問題なく動かせるんだろう。ペペロからすればワクチンは自分を殺すウイルスでしかないんだ」

「要するにそのワクチンをどれか一つでも刺せば？」

「いや、それでは不十分だな。この脳みそに直接打ち込まなくてはならない」

「それを言い出したら振出じゃねえかよ」

「いや、この培養液は定期的に入れ替えなければならないだろう。脳みそはデリケートな機関だからな。それを放置することはほしくないはず。という事は、どこかから薬品を注入する場所があるはずだ」

そう言いだすと、鉄華団のメンバーが気が付いた。

「あそこじゃないっすか？」

指さす方向はケースの上方、ハチの巢のようになっている部分が存在する。

「あそこから薬品を注入する必要がある」

「どうすればいいんだ？」

「外から差し込む必要がある」

ノートパソコンに映し出されている施設内外の地図、それと外のから送られてくる映像。二つを組み合わせておおよその場所を検討する。

「ちょうど首の付け根の部分に出し入れする場所が存在する。あの敵の数を掻い潜り、首の攻撃を受け止めながらワクチンを注入装置に入れる必要がある。それも、外のロックは内部からハッキングする必要がある。ハッキングは私がするが……問題はそこの外部ハッチからウイルスを受け取って、それを首の付け根に辿り着いてそのままワクチンを注入する者が必要だ」

全員が黙っている、外部ハッチの方からノーマルスーツを着た三日月が現れた。

黙って手をさし伸ばしている三日月、ユージンがオズボーンからワクチンを受け取ると、三日月に手渡す。

「首の付け根まで頼むー」

三日月は黙ってうなずくと、外部ハッチから再び戦場のど真ん中へと走っていく。

バルバトスがクラウン・クラウンを撃破しながら首元まで行こうとするが、そこまで来てバルバトスの機動力では掻い潜れそうにはなかった。

そんな三日月の目の前にモニタークのガフエインが現れた。  
「私が引き受ける」

三日月から手渡しでワクチンを受け取ると、三日月はモニタークにクラウン・クラウンを寄せ付けまいと次々と撃墜していく。

スニーはモニタークの代わりに敵の攻撃を受け止める役目を全うするべく、『HCCCPモード』を起動する。

全身が真っ赤に光りながら首を押さえようとする。

しかし、八個の首の内四つが襲い掛かってくる。首を引きちぎろうとしながら力を込め、竜の顔を模した頭部がスニーの左腕にかみついて、そのまま噛み千切ろうとする。

傷口からスパークがはじけ、激しい戦闘を物語る中、モニタークは





で即答してしまう。

全員が大きく息を吐き出す。

すると、全員の脳裏にヴァルハラが炎上していく姿が映し出されていた。

「何だよ？今のイメージ」

「おそらくは……サブレ・グリフォンから送られた現状ではないか？おそらくヴァルハラは今、陥落しそうになっているのだろう」

そこまで言われれば、ユージンのやりたいことは既に決まっていた。

「処理はあんたに任せてもいいか？」

「君たちはどうする？」

「俺達はビスケット達を助けに行ってくる」

ユージンはイサリビ改に乗り込むと、要塞目掛けて突き進み始める。

戦争は終盤へと移行していた。

## 選り取った未来Ⅶ 《デブリと称された未来》

11

叩き起こされ、大人たちに殴られながら戦う。生き残りたいのであれば一人でも多くの敵を殺すしかない。それがヒューマンデブリの毎日であった。

一日一日を全力で生きる。

生きていることを実感できる毎日であり、所詮デブリ——ゴミ。使い古されたら、役に立たないのなら殺されるだけ。殺されたくないのであれば——一人でも多くの敵を殺す。

歯を食いしばりながら生き残り、両手を血で染める。

そんな毎日は唐突に終わりを告げた。

「大丈夫かい？」

そんな言葉と共に差し出された右手を、優しさと同情を『12号』と呼ばれたヒューマンデブリは、殺意と怒りで返した。

そんな同情が欲しいわけじゃない。

自分達は生きているんだ。

自分達の『生きる』という事を否定するな。

そんな思いが、そんな心が殺意と怒りを滲ませて、男の命を奪った。『12号』と呼ばれ、生まれたときから名前など無い。親も知らず、愛も知らず。知っているのは相手を殺す事、食べて、寝る事。

それ以外は知らない。

みんな殺してやる。

そんな殺意と衝動で戦う兵器と化した『12号』の目の前に悪魔が現れた。

「お前の生きる場所を与えて上げましょう。戦って死ぬ場所を与えてあげるわ」

同情しているわけでも無く、かといって見下すわけでも無い。ただ、見ているだけ。

「私の計画の為に戦いなさい。そうすれば、戦いの中でも死を与えてあげる。約束するわ」

その言葉は『12号』に新しい居場所を与えた。

「あなた『12号』というの？呼びにくい名前ね。『ジャック』と名乗りなさい。さあ。ついてきなさい」

『ジャック』にとつて生きる場所が出来た。

瞑想をしていたわけでは無いが、昔を思い出していて、これから向かう死地の事を想う。

ようやく死ぬことが出来る。仲間達の所に行くことが出来る。

一緒に行こうと信じて、死んでから一緒に旅だとうと信じた仲間達。家族とも違い、友とも違う。やはり一番いい言い方は仲間なのだろう。

誰一人家族を知らないヒューマンデブリ仲間だった。

いつ死ぬのかしら知らない者達。

ジャックは第一連結部で待機しており、宿敵が来るのをずっと待っていた。

きつと彼ならばここに来てくれると信じ、戦って死にたい。

ククナの本来の計画を話されていた数少ない人間の一人として、ここで戦って死ぬこと。あくまでも、戦って死ぬ。

それがジャックの計画。

さあ、来い。そんな気持ちと共に昂る感情を押しえながら、ブルーレイは戦う時を待っていた。

明楽は要塞側面を移動しながら侵入場所を探し出していた。

いくつか入る場所を見付けたのは良いが、モビルスーツが周囲を散開して邪魔になっている。

周囲を散開しながら、モビルスーツを撃墜しながら侵入口を探し出すと、細い道を移動していく。

第一連結部周辺の地図を展開しながら、現段階の居場所を照らし合わせて表示させる。

明楽が大きな『No.1』と書かれたドアの前まで来ると、明楽はそのドアを開ける。ゆっくりと開きながらその奥に居るジャックの姿が少しづつではあるが見えてきた。

「ヒューマンデブリ廃止条約の陰で起きたあるコロニーを占拠した一

連の事件。その事件の裏で起きた別の事件。ある宇宙海賊への条約違反行為に対する制裁は熾烈を極めた。乗組員全員と摘発に向かった全メンバーが行方不明になった」

ギャラルホルンが隠していた真実。

「ギャラルホルンは当時、戦力になりそうな人間たちを集めており、元ヒューマンデブリも決して論外ではなかった。EDMとの条約を破って宇宙にメンバーを上げ、ヒューマンデブリを回収する。EDMの目がコロニーの事件に向いている間に行われた事件は、ギャラルホルンの手で封印された」

ギャラルホルンが壊滅した今になって少しづつ分かってきた真実。

「元々宇宙海賊はEDMの攻撃で壊滅状態になっており、風前の灯火に近かった。それをギャラルホルンは漁夫の利を狙って戦いを挑んだ。しかし、そのほぼ全部のメンバーが壊滅的な打撃を受けた。その正体は……」

EDM本部の人達から聞いた真実。

当時コロニー事件の裏で起きた殺戮と隠蔽の数々。陰謀が渦巻く中で起きた二つの勢力による奪い合い。

木星帝国はヒューマンデブリを使ってギャラルホルンの内側にスパイを送り込んだ。

ギャラルホルンはヒューマンデブリを使った戦力増強を図った。その結果。

「木星帝国の先遣部隊とギャラルホルンによる工作部隊による疑似的な戦争状態それが真実。それに際し先遣部隊が勝利を収め、ギャラルホルンの中へとヒューマンデブリをスパイとして送り込んだ」

明楽の言葉を受け、大きく開いた空間の中に佇むブルーレイ。

ジャックは集中しているのか、ゆっくりと目を開き、明楽の方を見つめる。

「それが俺。数少ない生き残り」

それだけが真実。

第一連結部の中は細いパイプがいたるところに伸びており、モビルスーツが一对一で戦うには十分な空間と言えるだろう。

シムカスはショートアックスを両手で構え、ブルーレイはビームサーベルを装備している。

先に攻撃を仕掛けたのはブルーレイであった。

二本のビームサーベル。それを乱れ切りする様についでくる様を、シムカスはショートアックスで攻撃を捌きながら素早くその場から移動する。

シムカスはパイプを足場に跳躍し、壁に体を預けているブルーレイに切りかかる。しかし、ブルーレイは背中の翼から見えない衝撃をシムカスに浴びせ、シムカスは衝撃で体を反対側へと吹き飛ばした。

「僕達ヒューマンデブリにとって戦って死ぬことが当たり前だった。それを奪われる苦しみを体で受けてみる！」

ブルーレイの背中の翼は速度の上昇以外にも、圧縮したエイハブ粒子を物質的な攻撃手段になる。実際シムカスはパイプを破壊しながら吹き飛んでしまう。

ブルーレイは目にも止まらない速度で突っこんでいくと、見えない壁にぶつかるような衝撃と共に音がコックピット内に響き渡る。

「な!？」

背中に付いている大型シールドから発せられた見えない壁。通称ステルスシールドが三百六十度全域に張り廻らされており、機体がぶつかった程度では壊れることは無い。

「そんなの俺だって分からない。でも、死ぬことが当たり前なんて悲しすぎるから」

シムカスの斧で身動きが取れなくなったブルーレイに襲い掛かり、ブルーレイはそれを二本のビームサーベルで受け止める。

ビームのつば競り合いで火花が目の前でちり、ガンダム同士の額がぶつかりそうになる。

「僕達にとつて死ぬことでしか自由になる手段がないんだ。名前が無く。戦いしかない。上に居る『人間』を守るための『ゴミ』なんだ」  
「それが……それが自分のしたい事なのか!？」

「そうだ……!」

ブルーレイはシムカスを右側に吹き飛ばし、追撃する様に機体を走

らせる。パイプを切りながらシムカスの視界をうまく塞いでいき、死角を周囲に作る。

シムカスの周囲のパイプが死角になり、ブルーレイがどこから襲撃するのかがいまいち予想できそうにない。

明楽は目を瞑り、精神を集中しながら周囲からくる殺気に神経をとがらせる。

パイプが弾かれる音、スラスターが火を噴く音、それが周囲を飛び回り、シムカスの右下から一気に近づいてくる。

明楽はシムカスの右足を犠牲にする形で隙を作る。

ブルーレイはシムカスの右足の直撃を受けて、二秒だけ隙が生じてしまう。

シムカスはその隙に斧をブルーレイ目掛けて振り下ろそうとする。ブルーレイもビームサーベルで対抗しようと手を伸ばし、お互いに急所目掛けて手を伸ばそうとする。

幼い明楽の目の前で起きた戦闘は今になってなお印象に残っている。決して最新鋭とは言えない古めかしいモビルスーツ（今に思えば訓練用のモビルスーツだったと推測できる）。そんなモビルスーツが海賊のモビルスーツを次々に撃墜していく姿は印象に深い。

母親が苦戦し、追い詰められていた集団を十分に全て撃墜して見せた姿は、明楽にとって『ヒーロー』に見え、憧れるには十分な姿であった。

全てのモビルスーツを撃墜し、こちらを振り向くモビルスーツの姿は今もない瞳の奥に残っている。

だからこそだろう。

艦に辿り着き、助けられた人々の手の中で、助けてくれたモビルスーツから降りてきたパイロット、そんなパイロットが自分とそのまま変わらない年齢の少年だったと知った時、あまりにも衝撃だった。

ヘルメットを脱ぎ、汗を飛ばそうと首を左右に振る姿に明楽は見入っていた。

学校に入ると決めたのも、サブレについてきたのも憧れていたためである。

サブレは憎んでも、殺意を抱いてなお誰かを救おうと手をさし伸ばし、その分だけ自分の心を傷つける。

心も、身体もボロボロになったアフリカの戦いにおいて、サブレは自分の闇と決別した。

切り離した。

それを明楽は知っている。

でも、だからこそサブレは進化した。

歩き続ける中、今もなお多くの人を救おうと悩み、迷い、苦しみながら出した結論を信じて前に進む。

そんな姿を一番近い所で見てきた明楽。

だからこそ、負けるわけにはいかない。

サブレが負けない限り、自分も負けない。

しかし、そんな時、本当にここでブルーレイを落とすことに、ジャックを殺すことに疑問を抱いた。

サブレは自分を救った。敵すらも救った。

そう思った瞬間……ブルーレイのコックピット目掛けていた斧の攻撃を逸らしていた。

ビームサーベルはシムカスの端に逸れ、アックスはブルーレイの両腕をに付いた武器を切り落とした。

「どうして?..どうして殺さない!?!」

「先輩を俺を救ってくれた。先輩を多くの人を救おうと努力している。敵すらも手をさし伸ばそうとする。そんな先輩の背中を見ているんだ」

傷ついている姿を見てきたし、それを助けられなかった。

憧れているからこそ、背中を追い続けてきたからこそ、自分がどうしたいのかを考えられる。

「俺はお前を憎めない。死ぬことが救いだってわかっている。でも、それでも……俺はお前に生きてほしいんだと思う」

「ふざけんな!!」

ジャックはそんな明楽の言葉に大きな怒りと共に返した。

「俺達からそんなに『死』を奪うのか?!俺達ヒューマンデブリにとって



死ぬことが唯一の救いだっただ。楽になる方法だった！お前達『人間』は俺達から全てを奪い、その上身勝手な同情心で俺達を生かすのか！？」

「そうだよ」

間髪入れず、「そうだよ」つと告げる明楽に驚きの視線を向ける。

「同情することが悪い事？可哀そうだって思う事はひどい事？虐げるつもりは無いし、かといって無責任なことはできないよ」

明楽はサブレにはなれない。

たとえ憧れていたとしても、なることはできないのだから。

だったら、自分なりの生き方を見付けよう。

「生きてくれて言うつもりも無いよ。でも、俺は……………生きてほしい」

「!？」

複雑な表情を浮かべ、どうしていいのかが分からない表情へと変わっていくと、呻き声を上げながら飛び去っていく。

明楽はショートアックスで連結部を攻撃していき、破壊していく。消えていった方向を眺めながら、ジャックの事を想っていた。

「先輩。俺……………正しかったのかな？」

そんな答えが出るわけでは無かった。

戻ろう。

そう決めたとき、明楽は仲間たちの待つ場所まで戻っていった。

ジャックはブルーレイから降りていき、ハンドガンを取り出して自分の頭にピツタリつける。

息が荒れ、引き金にかかる指が人一倍力が籠ると、パンつという発砲音。そんな音とは別にハンドガンの銃口が持ち上がるのが分かる。

驚きと共に視界をそちらに向けると、そこには死んだはずテラの姿が有った。

包帯で体中を覆い、杖を突きながら現れた痛々しい姿に怒りの表情を向ける。

「手を離せ!!死ぬんだ！」

「なら……………余計に離せんな」

抵抗をしていたが、テラの握る手は決して緩まずその内諦めた。

「生き残っていたの？」

「死ぬつもりだった。『あの男』の手によって生き返ったのでな。後は自由に生きようと決めた。しかし……………」

『あの男』という言葉に一人の確信を得た。

ゲイナー。

彼がテラを助け出したのだろう。何が目的かは分からないが、しかし、こうしてテラはこの場所までたどり着き、偶然この場所に居た。

「安易な死を望むか？ならその命私と共に歩いてみないか？」

「何の為に？」

「君の仲間達が生きた理由。君が彼らに出来る弔いを」

ジャックは驚きと共にテラを見る。

「ヒューマンデブリと称された者達の分まで、生きた輝きを見付けてみないか？」

ジャックは何も返さない。

「生きて、生き続けて。苦しんで、苦しみ続ける。その先に待つ答え。世界に償いながら、生きてみないか？」

それはジャックにとって地獄の答えでしかないのだろう。いや、地獄の道の入り口である。

しかし、ジャックは明楽の言葉をすぐに思い出した。

『俺は……………生きてほしい』

そんなことを言われたのは初めてだった。

「もつと早く言っただけ良かった。俺は……………何の為に生きてきたんだよお…」

きつともつと早く言っただけ良かったのだろう。

『生きていいよ』

そんな言葉を。そんな当たり前の言葉をずっと待っていた。

明楽がこの答えに辿り着いたのは、サブレの意地悪な言葉を聞いたからだ。

サブレは答えを教えない。

答えに見えるが、それは答えではなく、ヒントに過ぎないのだ。

何故なら、サブレは「自分で考えろ」っといつだつて言い続けてきた。

考えるためのヒント。

思考は迷路。

壁にぶつかつて、引き返してはまた考え直す。

そうやって自分の答えや、その人が求めている何かを見つけ出す。

ヒューマンデブリが求めていた言葉を、明楽はサブレの言葉から考え、導き出した。

かつて、鉄華団に所属したヒューマンデブリ達はきつと生きていいのだと、生きたいと思える場所を得たのだろう。

「生きる理由は自分で決めなさい」

そう言つてテラは要塞の奥へと足を進める。

過去の罪を償うために、目を逸らしてきた愚かしさと向き合うために。

ジャックは立ち上がり、テラと共に歩き出す。

デブリの未来を見付ける為に。

## 選り取った未来Ⅷ 《愛ユエニ憎ム》

12

もし——、そう考えてしまう事は多い。

もし、鉄華団が違う選択肢をしていたのではないかつとふと考えてしまう。しかし、何回やり直しても、あのままでは何も変わらないだろう。きつと鉄華団の仲間達ならきつと同じ選択肢をしていたはずだ。

後悔はやはり後悔でしかなく。

可能性も、IFも、このままでは何も変わらない。

皆で同じ後悔と過ちを繰り返す。

それを変えたい。そんな不毛な未来。後悔と罪を繰り返す輪廻のような未来を変えたいと願ったのは、ノルバ・シノの上司で在り、鉄華団時代の仲間であるビスケットの弟であるサブレ・グリフォンだった。

憎しみも、怒りも、喜びも、愛すらも飲み込み、生きていく。しかし、ノルバ・シノにはそれはできなかった。

目の前で大切な人を、ヤマギを失った時、どうしようもない深い怒りと憎しみが心を満たし、頭の中をかき乱す。息が荒れ、同じ記憶が繰り返される。その内自分が何をしていたのかが分からなくなり、気が付けば……鉄華団時代の仲間達に捕まる形で連れ去られていた。

錯乱し、派手に取り乱して仲間達にきつく当たった。  
分かっている。

彼らの所為ではない。

未熟だった。その為に大切な人を一人失った。

失って気づくとはよく言ったもので、ヤマギを失い一人で苦しんでいると自分を見ている女性に気が付いた。

イオリはシノを抱きしめた。

シノにとつてそれは特別な瞬間だったのかもしれない。

愛することを知った。失う辛さも知った。守ることの大切さも知った。

だから戦う。大切な人の為に、憎しみを晴らすために戦う。だから、目の前にレッドクイーンがいる。

二本のランスを構えて、大きなドレスを腰につけ、まるで女王のように佇むその姿と、それを裏切るかのように不気味に細かく動く姿が、シノの精神を奮い立たせる。

アルミリアの精神は限界に到達しようとしていた。

機体もそれに応じるかのように、現すかのように不気味に動く。まるでブリキの人形のように。

女王のブリキ人形のように動く不気味な姿、槍を一心不乱に握りしめ、見つめる目は女王というより獰猛な猛獣と言った所だろうか。

女王の姿をした獰猛な猛獣が襲い掛かろうと、深い息を体中から吹き出しているように見え、そんな姿をシノはこう例えた。

「まるで……悪魔みたいだ」

そんな言葉が今の自分の精神状態から発せられたことが奇跡のように思え、無駄に冷静になっていく。

精神が彼女の姿を見る度に冷静に陥っていく。

しかし、それでも憎しみも怒りも決した失ったわけでは無い。むしろ、そんな姿を見る度に怒りと憎しみが沸きあがってくる。

どうしようもない状況だとわかっているけど、今更目の前の敵を殺したところで、滅ぼした所で、ヤマギが返ってくるわけでは無いって分かっている。

しかし、それでも殺さなければ心が持たない。

そうでなければ、シノを見つめるイオリに答えることもできない。

永遠に彼女を傷つけ続ける。それだけは嫌だった。

失う以上の苦しみを永遠に彼女にも、何より自分自身につきつけねばならない。

だから、戦おうと決めた。

「ぶっ殺してやる!!」

シノのメテオは襲い掛かる。

愛を、憎しみを知る者同士、殺し合う。狂気の戦いが始まった。

薄暗い部屋。

アルミリアは、帰ってきてくれることを祈っていた。愛する人が返ってくることを、一緒に罪を償おうと。決めたのに、帰って来たのはやり遂げた男の顔をした兄だった。

兄の口から発せられた言葉、マクギリスを殺した事だった。

どこか後悔しながらも、やり遂げたという表情にアルミリアは………彼女は、絶望した。

父も、兄も、周囲も喜び、まるで悪魔が死んだような答えが待っているだけで。誰もが、アルミリアを同情し、慰める。その度に、そんな憐れみを受ける度に、アルミリアの心は一つ、一つ壊れていく。

知りたい。知ってみたい。愛する人が、マクギリスの事を………全部！

そう思い、彼女は治療だと言い訳して、お金を大量に持ち出して旅立った。

愛する人を追いかける旅に。そこで知った、マクギリスの出生と悲劇の人生の経過を。

呪ったのはギャラルホルンと両親全てだった。

何がマツキーは悪だ。まるで悪魔を殺したかのような喜びを示す父親たちに対する復讐心が湧き上がってきた。

「憎しみにとらわれているな」

そんな声をかけてきたのが、いったい誰だったのか今ではもう思い出せない。いや、そんな人間の表情を見ていたのかすら曖昧で、もしかしたら復讐で既に心は壊れていたのかもしれない。

「教えてあげる。復讐の仕方を……」

それは………まるで、ピエロのようだった。

ジャマダハルとランスが火花を散らし、シノは拡散ビーム砲を至近距離で撃つが、アルミリアは機体を逸らして回避して、蹴ることで距離をとる。

「何なんだよ………今の」

頭の中に見えてきたイメージ、アルミリアがたどった経緯。

進化したからこそアルミリアが放出しているイメージを至近距離で受信してしまっていた。

アルミリアの戦う理由、忘れていても、力だけがきちんと覚えている。覚醒者としての力が。

同情してしまいそうになる。

あの戦いにも正義は無かった。あつたのはそれぞれの生きるための選択肢だけだった。

苦しみながら、戦い抜いて見つかった未来は金を持つ者達が権利を握る世界だった。それをEDMと木星帝国はそれぞれの理由からぶっ壊した。

木星帝国はある意味復讐だったのかもしれない。

地球しか見ず、木星などの他の惑星を助けもしない。そんな物達への復讐。

それに対しEDMは、仕返しと改革を目的に動き始め、両者はギャラルホルンをはさむ形で戦争を始めた。

ギャラルホルンは両勢力から影響を受けながら各地で悪事を働いてしまった。信頼は落ちてしまい、各経済圏はギャラルホルンからEDMへと権利を譲渡してしまう結果を招く。

ある意味アルミリアの復讐は成った。

しかし、心が晴れるわけでは無かった。

┌───┐

心が壊れて襲い掛かる彼女のランスを紙一重で回避しながら、ジャマダハルの連撃で追撃する。かわしきれない攻撃が容赦なくレッドクイーンに切り傷を与える。

レッドクイーンは周囲にファンネルを展開すると同時に、シノの脳裏にチリチリするような感覚を得た。周囲から感じる殺気をそういう感覚で感じ、どこからどう襲われるのかがはっきりよく分かる。

回避しながら再び距離をとるメテオ、それを追撃しようとスラストを吹かせるレッドクイーン。ランスの一撃を回避しようと無理な行動が仇になり、足をパイプに引っ掛けてしまう。右肩のキャノンが吹き飛んでしまい、シノはジャマダハルで反撃を試みる。

ジャマダハルがレッドクイーンの左腕を吹き飛ばし、レッドクイーンはメテオを逃がすまいとシールドでメテオを固定する。

「分かんねえよ……何言ってるのか!!」

何を言いたくて、何を言っているのかがまるで理解できなかった。分かるのは、脳波で受信できる内容だけ。憎しみ、怒り、呪詛の想い。

殺しても、何度殺しても足りない、満ち足りる事のない憎悪。何度忘れても、心は覚えていて、その度に憎しみを増幅させる。

ランスでコックピットを潰そうとレッドクイーンがランスを押し付け、メテオは抵抗しようと二本のジャマダハルで対抗する。

目の前で火花が散り、メテオが押されそうになる。

シノは左肩のキャノンを目の前でレッドクイーンに向けて放ち、レッドクイーンの顔の右半分が吹き飛んでしまう。体勢が大きく崩れ、メテオはレッドクイーンを逆に押し倒してジャマダハルを至近距離で突きつける。

形勢は逆転してしまい。

アルミリアは声にならない罵倒のような呪詛を吐くだけになった。後はジャマダハルをコックピットに突き刺すだけで復讐を完了する。そう思った時だった、シノの中に本当に復讐を完遂させていいのかどうか悩みが生まれた。

決して憎しみが無くなったわけでは無い。

それでも、このままでは自分は彼女と同じになってしまっているのではないか。

憎しみと復讐を繰り返す。

それは何も変わらない輪廻のようにも見えた。

ヤマギはそんな不毛な繰り返しを望むだろうか？

望むわけが無かった。

むしろそんな中にシノを陥れてしまったことを後悔するはずだ。

そう思った瞬間、シノは殺すことを止めようと手を離す。

ヤマギが、イオリが愛しているつと告げてくれた自分が、自分本位の行動で戦って居のかどうか、分からなかった。



助けたいわけでも無い。

モニタークに言われた通り、彼女を殺すことが彼女を救う唯一の方法なのだ分かっている。

どうしたらいいのか悩み、苦しみながらその場で呆然としているとレッドクイーンが動き出した。強引に動き出す。

メテオはとっさに距離をとってしまい、レッドクイーンが残ったファンネルを展開させメテオに追撃を仕掛ける。

悩みが生んだ一瞬の隙、それを見逃さないように、強引な攻撃が続く。

殺すしかないのかという想いが脳裏をよぎり、同時に殺せば復讐したことになるのではないかっという想いが鈍らせる。

最後の攻撃が出来ずにいると、レッドクイーンのファンネルを落としたりとここで、レッドクイーンがメテオの真後ろに回り込む。

もう殺すしかないっという気持ちでジャマダハルを構えるが、それでも腕が動かない。

目の前にランスが伸びるが、それより早くレッドクイーンのコックピットにビームサーベルが突き刺さった。

コックピットギリギリで止まったままの状態で止まり、レッドクイーンの後ろからどこか最低限の修理を終えたかのようなブルーレイが姿を現した。

混乱するシノ。

シノの脳裏には最悪の状態がよぎったが、そんなシノの予想とは裏腹にジャックはシノに話しかける。

「明樂に……よろしく伝えておいて」

そう言っただけ振り返り立ち去ろうとする。そんなジャックを今度はシノが話しかけて引き留める。

「どうして……助けてくれたんだ？」

「別に………しいて言うなら、アルミリアが苦しそうにしてたから楽にしてやろうと思っただけ。あんたはついで」

シノは「あれは苦しみだったのか？」っと小さくつぶやく。

「いいんじゃない。復讐しないって決めたんだろ？ならそれを貫きな

よ。でも、大切な人を守りたいなら………戦え」

戦わないことは不誠実にもなる。

大切な者を守りたければ、時に残酷になることも大切だと、ジャックはシノに教える。

「じゃあね」

そう言っただけでその場から去っていく。それと同時に大きな部屋の中に明楽が入ってきた。一足先に戦闘を終えた明楽がシノに近づく。

ちやうどジャックとすれ違う形になる。

「シノ先輩！早くしないと！」

シノは明楽が生きていることに安心してしまう。

シノは連結部までたどり着き、ジャマダハルを突き刺して何度も切りつける。

大きな爆発音と共にメテオとシムカスは現場から離脱する。

「さつき、ブルーレイが助けてくれてな」

「え？ジャックは何か言っていました？」

「お前によるしく伝えておいてくれてさ」

明楽は嬉しそうにしながらシノの前に立つ。

仲間たちの所に帰ろうとスラストの勢いを人一倍強くする。

(なあ、ヤマギ………これでいいか?)

『いいんだよ。シノ。ありがとう。忘れないでね………僕達がここに居たこと』

ヤマギのそんな声が聞えた。

「ああ、忘れない。やつと………」

「先輩？何か言いました？」

「いや、なんでもねえ」

そう言っただけで明楽の横に並ぶと二人で帰還した。

やつと………心が晴れそうだ。

アルミリアの意識が少しづつ覚醒していき、苦しみも痛みすら感じない。それどころか、そもそも自分が誰で、なぜこんなことになっているのか分からない。

でも、どこか懐かしく思う場所で。

「もういいんだよ」

声が聞える方向に振り向くとそこにはアルミリアが一番愛していた人がそこにはいた。

「マッキー？」

優しくうなずき、マクギリスへと思いつきり抱きしめる。

記憶はハッキリせず、両親の事も、兄妹の事すらも思い出せず。あ  
るのはマクギリスの事だけだった。

苦しみも、悲しみさえも今はどうでもよく。

「大丈夫だ。もう………行こう」

後悔が未来を変えるための戦いを、後悔が別の未来を創ることを信じて、死者は待ち続ける。

「行こう。アルミリア。別の未来へ行こう」

アルミリアは意味をよく理解できなかったが、それでも恐怖は無かった。マクギリスと一緒にならどこまでも行けそうな気がしたから。

頷き、歩いていく。

どこまで進んで行こうと思う。

「マッキー………愛してるー」

「私もだ。アルミリア」

そう言つて二人は歩き出す。

別の未来へと——まっすぐに。

## 選り取った未来IX 《愛してる》

13

明楽とシノが手分けして連結部の破壊へと赴いていた時、クレアは黙って姉の元へと行こうとしていた。

姉を止める為、死すら覚悟して歩き出そうとした。

銃なんて使った事はおろか、持ったことすらない。

しかし、これだけは誰にも譲れない。譲ってはいけない。

そんな覚悟と共にクレアはノーマルスーツを着て、ヴァルハラを降りてそのまま細い通路に向けて体を投げ出す。

体を丸めて、回転させながら細い通路へとたどり着く。モビルスーツからの攻撃を受けなかったのは幸いで、クレアはそのまま真っすぐに暗い通路へと飛んでいく。

サブレはファンネルをミサイル形式で、武装タンクと呼ばれるコンテナから三十個ほど射出し、そのすべてを木星帝国モビルスーツ群へと飛ばす。

最前線で粘っているスニーの元へと向かう。

「ジャニー、ノイン！お前達は補給艦一隻と共に木星本国へと向かえ、お前たちの速度なら十分かからずにとどり着ける！」

「でも……」

ジャニーが口を開き、抵抗しようとするが、サブレの一声がそれを阻害する。

「いいから行け。さっきから向こうで嫌な感じがする。どのみちアインがコロニー前で粘っている以上お前たちが出来ることは無い！」

そう言いながらサブレはそのまま敵陣へと突っ込んでいき、スニーは補給艦と共に姿を消す。

遠くにまとまっているモビルスーツ群に向けて大型ビーム砲を容赦なくぶちかます。其の姿を遠目で確認していたのはアインだった。

「死にたくないなら出てくるな！死にたい奴だけ目の前で立ち塞がれ」

そう言いながら敵を蹴散らしていく姿を、舌打ちしながら眺めている

たアイン、周囲を飛び交うモビルスーツを打ち落としていく。  
仕方がない。

そんな思考がアインの脳裏をよぎり、後方に待機していたモビル  
スーツ群に指示を出す。

死ねという指示を。

「後方に待機しているモビルスーツ隊にエデンの相手をさせろ。エデ  
ンの武装をぎりぎりまで削るんだ。エデンの性能も見ておきたい」

しかし、アインは実際の所前半の指示はともかく、後半に関しては  
あまり期待していなかった。

まあ、装備を削ってしまったえばまだましだと思えたからだ。墜ちた機  
体の倍の数を自分が落とせばいいだけの話だと感じたからだ。

ミサイル・ファンネルと共に両腕のガトリング・ファンネルが周囲  
を飛び、次々と打ち落としていく。

サブレの方も次々と落としていくが、さすがに木星帝国の精鋭部  
隊。簡単には落ちたりしない。

タンクにしがみ付いてタンクの外壁が剥がれ落ちそうになる。振  
り払い、ミサイル・ファンネルで落とそうとするが、それでもなおし  
がみ付く。

「ほう。意外と耐えられるものだな」

重宝しておいた方が良かったかもしれない。そう思ったが、今更だ  
と判断が付いた。

だったら全員死んでおいた方がいいと冷静な判断を下し、サブレの  
方へと突き進んでいくが、同時にサブレもアインが近づいてくるのを  
感じ取った。

後方に待機している艦や部隊に敵モビルスーツの波が押し寄せよ  
うとしているのを視認すると、サブレは後方へと戻ろうとする。しか  
し、それを前方から突っ込んで来ようとしているアインが邪魔をす  
る。

「ここまで来ておいて、逃げられると思うのか!? サブレ・グリフォン  
！」

「あくまでも邪魔をするのか!? アイン！」

エデンとエンペラーが衝突しような距離になった時、サブレの脳裏に姉の元へと向かうクレアの姿が見えた。

「一人じゃダメだ！兄さん！」

その思念がビスケットの元へと届くことになる。

ビスケットがサブレから思念を受け取ったのはそのすぐあとである。

「え？クレア？イオリ！クレアさんはどこに!？」

「え？えつと……あ!?!後方ドアが開閉された痕跡が！」

「俺がクレアさんを追いかける！みんなは迎撃戦を続けてて！」

そう言うのとビスケットはハンドガンの準備をしながらクレアが出ていった後方ドアへと急ぐ。

後方ドアはすでに開けられており、ビスケットはそこから飛んで移動する。背中につけておいた個人移動用スラスターの推力で移動しつつ、細い通路へと足を進めていく。

ビスケットはクレアが入ったかどうかすら分からなかった。

「まあ、考えればここしか人が入るような道は無いし、それにクレアさんの行きそうな場所には心当たりがあるし」

きつとククナの場所だと判断できた。

この場所に来た時には既に決めておいたのだろう。

「危険すぎる。一人で行くなんて」

そう思い通路を歩いていきながら、ククナがおそらくいるのである。う कोरोニーレーザーコントロールルームへと足を進めていく。

しかし、そんな中一人の女性の悲鳴と複数の兵士の声が聞えた。

「クレア様。申し訳ありませんがあなたを見つけ次第殺せというのが皇帝最後の指示でしたので」

「でもよ。もったいなくねえか？遊んでからでも」

「放してください！」

どうやらここまで来てすぐに兵士に見つかったらしい、ビスケットも出ていきたいところだが、白兵戦すらまともにこなしていないビスケットには、人質を取られたまま戦う術がない。

しかし、助けられない理由にはならない。

一瞬でかたづけなければと心に覚悟を決める。

その時だった。見知らぬ声が出た。

「何やってるわけ？」

「ジャック様!? 連結部の防衛任務があるのでは？」

「連結部なら全部落ちたよ。君達も早く逃げた方がいい。今はまだ無事にいるけど五分もしないで要塞が崩壊し始めるよ」

そこまで言われたのだろう。ジャックという名の少年の冷静な声と反対の慌てふためく兵士たちの声がビスケットにも聞こえてきて、それと同時に要塞が大きく揺れる音と衝撃がビスケット達を襲い掛かる。

壁や天井から破片が落ちてくると、兵士たちはジャックの言葉が嘘ではないと確信し、そのまま逃げていく。

ビスケットは出ていくべきかどうか悩んでしまったは、ジャックという少年の声がビスケットにも届いた。

「そこに隠れてる人。出てきたら？」

ばれていると確信し、ゆっくりと姿を現す。

「ビスケットさん」

どこか居心地を悪そうにしつつも、ジャックから離れるようにクレアはビスケットの後ろに隠れてしまう。

「どうしてあなたが私を」

クレアが言っている意味が分からず疑問顔をしていると、クレアは耳元で真実を告げる。

「ブルーレイと呼ばれているガンダムタイプのパイロット。お姉様の手駒の一人」

そこまで言われればビスケットの警戒心も最大値まで引き上げられた。

「ふうん。あんたがエデンのパイロットのお兄さん? そうは見えないけど」

「よく言われるよ。俺の方が弟っぽいって」

それは真実。

昔からそう言われ続けてきたし、今だってそう思っている人は多

い。それを否定するつもりも、肯定するつもりもない。ただ認めなければならぬ。

自分がどれだけ弟に依存してきたのか。

それが弟をどれだけ苦しめてきたのか、今ならよく分かる。家族の依存がサブレという人間の性格や人格に影響を与え続けてきた。

それをいやした人物は多くいるだろう。オルガも、サイガも、クレアも、レレも、アスナだってそうだ。

「それが理解してるならいいや。どうやら、ある程度は認めてるようだし」

そう居ながら振り返るジャック、疑問の顔をする二人に対してジャックは予想外を告げる。

「ククナの所に行きたいんでしょ？案内してあげるよ。今はシャトルに向かって待っているはずだし」

そう言って歩き出すジャック、どうしたらいいかと悩んでしまいが、少なくとも彼には敵意を感じないというのは二人の共通した意見だった。

なら一緒に行動した方がいいだろうというのが最終的な考えだった。

歩いて三十分もすれば目的地に辿り着き、広い格納庫に寂しく鎮座しているシャトルがむしろいように見える。

そんなシャトルのドアでククナはまるで待っていたと言わんばかりに座って待っていた。

「まさかジャックが連れてくるなんてね。その様子だと、違う結論を出せたようね」

ジャックは「ふん」と言いながら近くのコンテナに座りこむ。

クレアが一步前に入る、ククナはただ微笑むだけで表情の先が見えない。

ビスケットだけが警戒していると、クレアはゆっくりと口を開く。

「お姉様。どういふつもりなのですか？何をしたいんですか？」

ククナは黙っているだけで、それ以上を使用としないが、ビスケットはサブレからおおよその理由を聞いていたし、自分の中でも結論は



出て居た。

ビスケットがクレアから一步前に出ると真実を告げる。

「ククナさん。あなたはわざと負けるつもりなんですか？」

クレアは驚き、視線を姉の方へと向け、ククナは神妙な表情でうなずくだけ。

「木星帝国の中に居る戦争肯定は予想以上に多いのよ。それを抑え込んで、地球に樹立されるであろう新しい政府機関の提示する妥協案に乗るとは考えずらい。少なくとも皇帝は納得なんてしない。むしろ、その条件を利用してうまく地球を乗っ取るでしょう。私はそれがどうしてもいやだったのよ」

だから殺したと冷静に告げる。

冷静過ぎて冷たさを感じるが、それだけククナにとって父親……：皇帝などすでに親ですらなかったのだろう。

しかし、そこまで言われれば誰にもわかる。

「でも、私はある時気が付いてしまった。私がどうしようもなく父親に似ているつという事にね」

愛に溺れて、愛に死ぬ。

そう思うたびに、クレアの母親であった彼女フレアが本当の母親だったただれだけよかったのかと思わずにはいられない。

「あなたを愛するたびに、私があの人母親じゃないのかと思わずにはいられない」

ククナのクレアに対する地合いの表情と「愛している」という言葉がクレアの胸に突き刺さる。

ククナがクレアをどこかで避けている理由。触ればその人の記憶を読むことが出来る才能。一回でも触ればばれてしまうから。計画も、想いもすべてが。

クレアは「嘘」つとつばやき、今までの思い出がどんどんあふれてくる。

「嘘！だってお姉様は」

「嘘じゃないわ。愛さなかった日々は一度だつてない」

「嘘よー！」

「嘘じゃないです」

ビスケットの鋭い一声がクレアの意識をビスケットの方へと向ける。

「地球に居たとき、あなたを殺すチャンスはアフリカに居たころにはいくらでもあったはずですよ。それでも、殺さなかった。それに触れれば分かるはずですよ」

ククナは観念したのか、シャトルから降りて、両手を広げて待つ。クレアは躊躇いながらも一歩、一歩近づいていきゆっくり抱き着く。

その瞬間にククナの想い。その真実に触れる。

愛していたからこそ遠くに離しておき、愛していたからこそ気になっっていた。

「お姉………ちゃん」

その時、ビスケットの視界にそれは映る。ちょうどジャックからもククナやクレアからも隠れた位置に居る傷だらけの男だった。

それが誰なのかは分からず。分かるのは包帯で傷を強引にふさいでいる老人に見える。少なくともビスケットには身に覚えのない男。ハンドガンを一手に照準の狙いはクレアとククナだった。

ハンドガンで打ち落としても遅い。そんな技術が自分にあるとは思えない。

咄嗟に駆け出していく、二人を押しした瞬間とハンドガンの発砲音は同時だった。

ビスケットの右腹部に小さな穴が開き、驚きと共に倒れるクレアとククナ。ジャックが驚いて振り返りハンドガンの引き金を容赦なく傷だらけの男へと向ける。

右腹部から血が染み出てきて、傷だらけの男はその場で苦しみながら腕を押さえる。その手には既にハンドガンは無く、ハンドガンは遠くに落とされている。

「皇帝陛下!?!」

ジャックが驚きと共に声を上げる。ビスケットには初めて見る皇帝の姿と、腹部から感じる鋭い痛み。貫通したみたいで出血している。

クレアがビスケットの傷の手当をしていると、ククナが立ち上がって銃をとる。

「死んでいればいいのに」

そんな本心からくる殺意に驚くビスケットだが、皇帝と呼ばれた男は憎しみ、痛みを引きつけるような表情をしている。

小さく「殺してやる」つつぶやく姿は妖怪や悪魔のようにも見え、皇帝を撃とうとするが、それより早く皇帝の後ろから発砲音が皇帝を襲う。

皇帝の心臓近くから血のシミが浮かび上がり、その場に倒れてしまう。

暗闇の奥から出てきた人物はテラだった。

ククナは驚きしかなく、ジャックはある程度分かっていたため無表情。ビスケットもクレアですら驚きしかない。

「その表情を見られただけで生き返った意味があつたな」

そう言いながらテラは自らの役目だとばかりに皇帝へとハンドガンを向ける。

「貴様!?裏切るつもりか!」

「もうやめましょう。我々は負ける。この先にあなたの時代も、私の居場所も無いのです」

「ふざけるな!どいつもこいつも!」

「先に逝ってフレア様に会ってあげてください」

そう言って何度も、何度も発砲音を響かせる。

動かなくなり、テラはハンドガンをその場に捨てる。ビスケットのノーマルスーツ越しに手当てをすると、ククナに「行くよう」告げる。「行きたいのだろうか?愛している人の元へ」

ククナは自らの役目を既にこの地では終えていた。要塞が崩壊するまでこの場で時間を稼ぐ事、そしてクレアに真実を告げる事。

ククナは優しそうに微笑みながらシャトルへと乗り込んでいく。クレアがそれを止めようとするが、ジャックがそれを邪魔する。

「こんな……ダメなお姉ちゃんでごめんね?」

「お姉ちゃん!!おねえちゃん!!」

「まだ……私を姉だと呼んでくれるのね。さようなら。幸せにね」  
そう言つてシャトルのドアが閉まり、隔壁の奥へと歩いていく。

「お姉ちゃん!!嫌あ!!!」

今生の別れ。

真実だけを告げ、彼女は最終決戦の地へと急ぐ。サブレとアインが最後の戦いへと踏み込んでいた時、鉄華団も最終決戦を終え、この地へと向かおうとしていた。

様々な人々の想いを終わらせる戦いは、悲しみも、憎しみも、怒りも、喜びも、愛すらも飲み込む。

## 選り取った未来X 《楽園の獣》

14

戦場はコロニーレーザー攻防戦へと自然と移行していき、エデンとエンペラーは巨体をぶつけ合いながら戦っている。

現状はエンペラーが優位に働いており、戦艦タイプの外見では人型に近い外見をしているエンペラーの強化装備の方が優位なのは明白であった。

しかし、攻撃を受け、取り付かれながらもサブレは一機でも多くの機体を落としていく。

そうする間もコロニーレーザーをめぐる戦闘は激しさを増していくばかり、お互いの戦艦が肉薄するほどの至近距離で主砲を放つ。

また一つ、また一つと人が死んでいく。

その度にサブレは死を感じるだけ、そのすべてを新しい分岐した世界へと連れていく。

後悔が新しい道へとつながる世界を、そう信じてサブレは最後のマイル・ファンネルを周囲へと一斉に解き放つ。

その瞬間、エンペラーがその大きな巨体毎突っ込んでくる。

エデンの強化装備の後方にしがみつき、圧迫で破壊しようとするエンペラーを振り落とそうとするが、エンペラーは全身をうまく使って抵抗している。

いつそのことエンペラーをコロニーレーザーにでも、ぶつけてしまえば落とせるのではないかつとも考えるが、その前にスラスターがやられてしまう。

このままでは落ちるだけだと覚悟し、サブレは強化外装から出る覚悟を素早く決め、飛び出していく。

エンペラーの視界にもその機体の存在に気が付く。

それがエデンだという事はすぐに理解したし、サブレの気配も同様に移動している。間違いない。

しかし、同時にどうしようもない不気味な気配がその機体から感じる。

基本的な色合いは白と青と赤のトリコロールカラーである。その辺は変わらない。機体だけを脱出させたからだろう、盾やライフルや翼などの装備もついていない。

それでも、体中から放たれる威圧感が周囲のモビルスーツを寄せ付けない。

機体中の装甲に線引きがされているようにも見え、背中しか見えなくてもまるで傷を負っているようにも見える。しかし、背中のバックパックですら折りたたまれている。

「でも……知っている。これを……この化け物を知っている」

機体の正面が見えてくると、それはガンダムには見えなかった。

両足、両腕は普通のモビルスーツに見えなくもないが、やはり体中に線が見える。それに最大の違いは頭部だろう。

顔はバイザーで覆われて隠れており、頭部にはガンダムには無い縦並びの二本角が見えてくる。

「ユニコーン……ガンダム!？」

バイザーの隙間から二つの目が光って見え、同時にアインの背中に嫌な汗が流れる。

異変はエンペラーの強化装備の両腕に起こった。

抵抗しようと両腕の武器の引き金を引くが、手ごたえがないどころか無反応。

「どうなっている!? 接続不良? 内部パーツを解体したのか!？」

焦りと動揺がアインの心に広がり、ミサイル・ファンネルを展開する。まっすぐエデンの方へと向かうが、エデンに近づいたミサイル・ファンネルが爆発することなくエデンにあたって弾かれてしまう。

またしても内部パーツを解体してしまう。

もつと言えば、周囲の木星帝国のモビルスーツも解体されてしまう機体が現れる。

「全機に及んでいられるわけでもあるまい。範囲に限界があるのだろう。それと大きすぎるようなものは全部解体できるわけじゃないようだな。それに、サイコフレームを搭載機も解体できないと見た。落ち着けはどうかでもなる」

アインは強化装備からエンペラー本体を脱出させる。

その隙にエデンの装備を強化装備の中から呼び出す。

エデンは大型シールドと多機能ライフル、背中には壊れた翼の代わりにスラスタ搭載式の大形シールドを三枚が装着される。

エンペラーも背中に大きなハンド・ファンネルを装備、両腕にはビームシールドとビームライフルを装備、背中にビームサーベルを二本、腹には圧縮ビーム砲を装備。

お互いににらみ合いが続き、サブレのビームライフルの一射で戦火が開かれる。

ハンド・ファンネルがエデンの後ろに展開すると、エデンの背中の大型シールドがファイールドで防いで見せるが、一瞬後ろに向けられる意識の中、エンペラーがあつという間に距離を詰め、ビームサーベルを振り下ろす。

左腕の大型シールドで防ぎながら、至近距離で多機能ライフルで反撃を試みる。

細い一筋の光が遠くからでも見える。

しかし、エンペラーはそれをぎりぎり回避、ビームサーベルを引っ込めながら蹴りで反撃する。

右腕で受け止めながらエデンはシールドで叩きつける。

「そこまで憎いのか!? 人類が……世界が!? 俺にはどうしてもわからな  
い。かつて裏切られたからというのは理解できる。でも、それだけで  
全ての人類と全ての世界を滅ぼそうとは思わないはずだ。全ての命  
を……世界を……滅ぼすなど!」

並大抵の覚悟ではない。

全ての命を滅ぼし、全ての世界を無に帰す。命も、世界も、全ての虹  
の彼方に押し込み、リセットする。

自分と自分が大切にしている人以外のすべての命をリセットして、  
新しいアダムとイブになる。

「貴様に理解されたいとは思わない。自分が思う理想の為に戦い、理  
想の為に滅ぼす」

「人を拒絶し、なぜ理解まで拒絶する! 世界には意思はない! 世界に

は罪なんてない!」

「……いったいどれだけの世界があつたと思う?」

アインの唐突の問いかけにサブレは驚きと戸惑いを浮かべる。

「数えきれぬわけがないだろう?」

「そうだ、数えきれない。しかし、生死は均一でなければならぬ。生が増える世界もあれば、減る世界もある。それは自然の審理でもある。しかし、増える世界はこの基本世界以外にあり得ない。基本世界を存続するための別世界でもある。その数多くの世界のすべてが人類は停滞した偽りの平和の中に居る。進化を拒み、前に進むことに恐怖を覚え、誰もが不幸という名の沼に首まで浸かつて生きる。不幸の中に居る小さな幸せを奪い合う世界。分かるか?多くの分離した魂が多くの中で経験した全てで全く同じ結果だったんだよ!何も変わらない!何も変化しないんだ!世界はそれを許容し、許容し続ける限り人は我々を犠牲にし続ける!そんな人類に何を期待する!!?」

怒りで表情を歪ませ、暴力的にエデンを吹き飛ばす。シールドで正面からやってくる攻撃に耐えて見せ、スラスタペダルを全力で踏みながら圧力を耐えて見せるサブレに対し、アインは怒りに身を任せてライフルの引き金を引く。

サブレは右側の操縦桿の近くにある小さな画面を操作してライフルの機能を変更する。マグナムモードに切り替えると、エンペラー目掛けてライフルを両手で持つ。引き金を引くと、射出する際の威力だけでエデンが吹き飛びそうになる。

目の前からくる殺意にとっさに回避行動をとり、攻撃を大きく移動することで回避する。ビームマグナムの威力は別の木星帝国製のモビルスーツにかするとそのまま蒸発してしまった。

「単純な戦艦の主砲クラスより上……」

回避して動きが一旦止まると、サブレは再び機能を変化させ、ビームマシンガンへと変化する。

牽制目的でエンペラーへと攻撃すると、エンペラーはハンドファンネルのフィールドで防ぎながらも一つのハンドファンネルが襲い掛かる。



エデンを後ろに飛ばして回避すると、エデンはビームサーベルを抜き一気に距離を詰める。エンペラーとエデンのビームサーベルのつば競り合いと、火花が目の前で散る。

「たええそうだったとしても！自らの行動も原因だったはずだ！完全な被害者なんてこの世界には存在しない。すべての命は自らの行動を選択するしかないんだ！周囲の行動は結果として選択肢を狭めるだけだ。決めるのは、決断するのは自ら自身だ!!」

「たええそうだったとしても、人を不幸にして、自らが幸福になろうとする愚か者が居る世界で！何を……何を信じる!!?」

「分かる！でも……！それでも!!」

エデンはエンペラーを吹き飛ばしながら再び距離を詰めていく。ビームマグナムに変化させ、牽制替わりでビームマグナムの引き金を引く。

同時に背中中のシールドの中に隠しておいたネオ・ファンネルを周囲に展開させる。

「そんな言葉が人類を愚かに変えていく！だから、リセットすると決めた！」

サブレはその言葉を引き金にしてファンネルによる一斉攻撃を始めるが、エンペラーのハンドファンネルの中に隠れていたファンネルが周囲を飛び交い、防御する。

「誰かが示すべきだった！言うべきだったんだ！進化することは、前に進むことだと！恐れず進むことで命は繁栄してきたんだと！今自分達が居るのは祖先が進化し続けてきたからなんだと!!」

誰かが言うべきだった。

恐れず進むことを進言するべき人間がもつと早く表れていれば、そう言うてくれればきつと変わったはずなのだ。

そう思うと、不甲斐なさの方がきつと大きい。

サブレは歯ぎしりしながら押し返していく。

「お前だってそうなんじゃないのか!?あの時にああしておけばよかったと！そう後悔しているはずだ。だから、誰かが教えてやるべきなんだ、後悔は決して無駄にはならない!!俺はそれを証明したいだけなん

だ！」

「そんな言葉がなんの役に立つというのだ？ あんな奴らに後悔などクソの役にも立たない！」

エンペラーが踏みとどまり、押し返そうとするが、その言葉に、その行動に怒りが最大値まで高まったサブレの心に、エデンが反応して見せる。

サブレの正面の小さな画面に『E F - S』《エデン・フォーエバー・システム》という文字が見えてくると、コックピッチ中に虹色の光で満たされる。

全身に虹色の光が装甲の隙間から漏れ出し、足から少しづつ装甲がずれて中身が露出する。最後に頭部のバイザーが隠れていき、ガンダムフェイスが姿を現す。最後に二本角が分かれていくとアンテナに変化する。

「この……………馬鹿野郎が!!」

『E F - S』システムが発動されたと同時に両足と両腕に内蔵された隠しスラスタが機能し始める。

推力が高まっていき、徐々に押し返されていく。

エデンの目とエンペラーの目が完全に合う、恐怖が一瞬心をよぎり、距離をとろうとする。ファンネルを呼び戻し、一斉攻撃で反撃を試みるが、サブレは体中についていた全部で四枚の大型シールドをまるでファンネルのように操る。

両腕にビームシールドを構えて一気に距離を詰める、シールドとビームサーベルでファンネルを落としていくと、再び距離を詰めていき、エンペラーのハンドファンネルがエデンをつかもうとする。しかし、シールドがそれを邪魔し、エデンがその隙に後ろにまわってハンドファンネルを落とす。

「クソ！もうあれを使うしかない」

そう言うと、戦艦の隙間を縫うように要塞方面まで戻っていく。其の姿にサブレは嫌な予感を抱く。

「あつちにはヴァルハラが!? まずい！」

そう言って追いかける。

基本武装をビームマグナムに切り替えると、エンペラー目掛けて引き金を容赦なく引く。何度か回避したとき、要塞に近くなつてくると、エンペラーの足が吹き飛ぶ。

『サブレ。ライフルにチャージされているエネルギー不足。ライフルの使用を一旦停止を推奨。銃口も射出の熱でダメージを受けています』

「言わなくてもわかつてる！」

サルガからの警告にそう言ってビームサーベルに再び切り替え、距離を詰める。エンペラーは振り返りざまに反撃を試みるが、サブレはそれをうまく操縦しながら回避し、同時に反撃する。

エンペラーの左腕が宙を舞い、エデンのビームサーベルがコックピット目掛けて突き進む。

このままでは要塞外周の格納庫への出入り口にぶつかってしまいうようになる。

しかし、サブレはそんな気にはしないように突き刺す。

それでも、手ごたえがない。

アインの気配が消えない。

要塞のドアが開き、エデンとエンペラーの体が要塞の中へと倒れ込み、同時にサブレの視界に小さな戦闘機のような機体が見えた。

それを視認するとサブレはエンペラーからビームサーベルを引き抜き、エンペラーの背中を見る。

そこは空だった。何もなかった。すっぽり抜けていた。

「コアブロックシステム!? 脱出機能付き!? そんな古臭いシステムを採用しているのかあの機体！」

急いで追いかけるが、距離が開いてしまった上、通路が狭くぶつからないように移動するだけで精一杯である。

ライフルを使うとするが、サルガから忠告が入る。

『サブレダメです。ライフルはエネルギー不足で後1分使用できません』

「クソ！こんな時に！」

『自分の使い方が悪いのでしょうか？ あんなに適当にバカス力撃てばあ

あなります』

サルガからの忠告にサブレは内心舌打ちをしながらも、自らの責任ゆえに反論もできずにいる。

「バルカンを使いー」

頭部に格納された実弾兵器であるバルカン。本来は牽制以外には使えない武装であるが、コアブロックと呼ばれる戦闘機を破壊する事は出来る。

しかし、左右上下に動く対象物に対し、バルカンの弾丸は小さすぎる。

当たらない。

コアブロックが閉まりゆくドアの奥へと消え、エデンの前の前に大きなドアが隔たれる。

ドアをどうやれば破壊できるか刹那の思考の果て、向こう側の風景が見えた気がした。

新しいガンダム。それにコアブロックがくつつき両目が開く、同時に背中についている大きなバスターライフル以上の大きさの長距離兵器。それが……まっすぐエデンの方を向く。

「シールド!!」

四枚のシールドが正面に展開すると同時に凄まじい衝撃がシールド越しにエデンを襲う。

シールドをエデンが押し返そうとするが、そのままシールド毎外へとはじき出される。

機体は無事でシールドもダメージなく周囲を浮かんでいる。しかし、要塞の奥から漂ってくる威圧感を前にエデンは動けずにいる。

「ククナに隠れて用意するのには大変だな。ペペロが用意していたクラウン・クラウンや零のデータやレッドクイーンとブルーレイの戦闘データを元に私自身が開発した新しい機体。ガンダムアーク」

「ノアの箱舟……ノアズアーク」

「その通り。創世記において描かれる人類が生き残るための船。私は私を選んだ人類と共にやり直す！その為のガンダムだ！」

エンペラーより多少大きいガンダムが姿を現した。背中の中距離

砲が存在感を出しているが、それ以外にもビームカタナや高性能スラストターなど最低限の武装ながら、シンプルに出力だけを高めていると言える。

エデンと同じ。

あえてトリツキーではなく、あくまでも性能の底上げを図る。

「ガンダムの箱舟と言った所かお前が楽園を作るなら、私は箱舟を作る」

サブレはエデンを走らせ、アインはアークを走らせる。

ビームサーベルとビームカタナがぶつかる中、同時に大量の脳波が宇宙中に広がる。

## 選り取った未来Ⅺ 《ヴァルハラ》

15

時を同じくして要塞内部の撤退を指示していたテラは、ある資料に目を通していた。その資料にはアインが隠れて建造していたガンダムアークの資料であり、様々なモビルスーツの資料も同時に見つかった。

アークの資料には細かな所で様々なモビルスーツのデータが書かれていた。

加速システムは零と呼ばれるモビルスーツが、システム周りは簡易性を求めつつ、スピードを持たせるため、直感的な操作を求める為にクラウン・クラウンと呼ばれるモビルスーツが、機動力はブルーレイが、遠距離武装にはレッドクイーンが選り取られている。

Fの体を回収しなければと思う反面、三日月と呼ばれる人間と戦って生きているとも思えない。しかし、それは救う理由にはならない。

「優先させるべきか悩むな。まあ、オズボーンに任せるか」

そう一人で呟きながら、部隊の動きが一点に集中している事に気が付く。

フアントムブラッド隊旗艦ヴァルハラへと向かっている。

「ふむ。堕ちるのは良いとして、死んでもらっては困るのだがな。しかし、サブレ・グリフォンは応援に行けまい。となれば……せめて鉄華団のメンバーが駆け付けるまで彼らを守る必要があるわけだ」

そこまで言った所でビスケット・グリフォンと別れてしまったことを失敗したと認識した。

ジャックの方を一度だけ見てみると、ジャックはテラが何を言おうとしているか分かったのだろう。大きなため息を吐き出す。

「嫌だな。負けて、勝手に生かされて、その上おめおめと目の前に助けに行けと?」

ものすごく不満げに告げると、テラはやれやれと頭を左右に振りながら仕方がないつという風な表情に変わる。

「その勝手に生かした相手が勝手に死なれてはお前も困るのではない

か？それに、なんだかんだ言っただけで気になっているのであろう？お礼を言いに行くついでに助けてくればよいではないか。鉄華団が来るまでの時間でよいのだぞ？」

「……………なんでそんなことを」

最後の抵抗とばかりにブツブツ呟きながら表情を曇らせる。しかし、最後の一押しとばかりに突きつける。

「それとも……………会うのが気まずいのか？」

「別にそんなんじゃないし!!」

つい反抗的に返してしまうが、憤慨しながら振り返って救出に向かう。

「助けて見せるし！見てろよ!!朝飯前だって証明するからな」

「おう。行って来い」

そう言いながらテラは歩きながら手元の端末を操作し、オズボーンに連絡を取り始める。

ビームサーベルとビームカタナがぶつかり合い、一秒に満たない時間膠着し、再びお互いの距離を離す。

スラストターの出力、細かい動きまでがほとんど同じ。

「しかし、新しいエデンはユニコーンガンダムをモチーフにしているようだな。というのなら、フレームは全てサイコフレームで作られているという事か。それはこちらも同じことさ」

そう言うときアークの肩や胴体の装甲がスライドし、内部のサイコフレームが見えてくる。

虹色を放つエデンに対し、真っ黒な色をしているサイコフレームが姿を現す。

全身が白というより灰色に近い色合いで、武装や背中のバックパックは赤で染め上げられている。そこに黒が加わると邪悪なイメージがある。

少なくともサブレには箱舟というより、悪魔のようなイメージが強い。

「ペペロをそそのかすのも大変だね。システム周りの最適なパターンを見付けさせ、同時にスピードに特化させたブースターの開発。武装

や機動力はブルーレイとレッドクイーンを参考にした。おかげで完成させることが出来た。ククナが勝とうとしていないのは分かっていたのでな」

「そこまで分かっていたのなら。どうして……………」  
やるせない気持ち。そこまで分かっていたのなら、分かり合う道だっけと彼にはあつたはずなのだ。

こんな方法ではなく。

「勝たなくてはいけなかった。それ以外に自らの正しさを証明する手段など無い！」

そう言つて背中のカannonでエデンの視界を一旦埋めると、アインは距離を詰めてシールドで守ったエデンを蹴り飛ばす。

今度は左右に大きく揺れる中、意識を目の前に居るガンダムアークへと向けるが、アークは両腕で刀をコックピット目掛けて振り下ろす。

それをエデンのシールドが反射的な速度で防いで見せ、エデンを後方へと大きく移動する。

『ファンネル使用不可。残り武装はライフルとサーベルとバルカンのみです』

「見ていればわかる。いちいち言うな！」

機体を走らせて、背中のカannonに警戒しながら回り込み、背中のカannonを破壊しようとライフルを構える。

しかし、引き金を引くと同時に身をひるがえして回避する。背中のカannonの矛先をエデンに向けるとエデンの眼前をカannonの熱線が通り過ぎる。

『今の戦い方を続けていたら死にますよ』

「言わなくてもわかっている！」

コックピット近くの装甲が多少焼け焦げており、そのまま機体の速度を緩めず一旦コロニーレーザー方面まで駆け出していく。

アインも後に続くように足り出すが、サブレの脳裏にヴァルハラの状態がよぎる。

ヴァルハラは両エンジンが止まり、もう離陸は不可能な状況になっ



ている。

消火に急ぐ者、周囲ではサラ達がいまだに奮戦しているがそれ以上のモビルスーツが集まりつつある。ブリッジに居たメンバーも要塞内部からヴァルハラ内に侵入しようとしている白兵部隊と戦うのに必死になっている。

このままでは落ちる。

サブレの中で確信に変わっていく。

「届いてくれ」

そう思う一方でビスケットがヴァルハラへと戻る光景。同時に青いガンダムが近づいていく光景。

「敵か？ いや………敵意を感じない。明楽かな？」

明楽があつた元ヒューマンデブリの男を『助けた』のだろう。文字通りの意味で。

命ではなく、魂を救った。

「なら俺は鉄華団が来るまで時間を稼げる。しかし、ヴァルハラは持たない………なら」

ビスケットへと脳波を送る。

「兄さん。逃げろー！」

その言葉はビスケットへと届いた。

明楽とシノが到着したとき、ヴァルハラの内側から火が噴き出していた。

「おいおい！ 大丈夫なのかよ？」

「大丈夫に見える？」

シノの言葉にサラがすぐさまに反応して見せる。すると、レオもすぐさまに反応。

「最初の内は外からだけだったのに、気が付けば要塞内部からも出てくるようになった」

明楽とシノがそのまま外へと出ていき、サラとレオと共に外の敵を迎撃していると、ビスケットがクレアと共に帰還する。

「ビスケットさん!?! どうしたんですか？」

イオリがすぐ様にビスケットに駆け寄るとビスケットの腹から血

が流れている。アトラが驚きながら治療し始め、クレアは悲しみからうつむいたままで、するとビスケットとクレアの脳裏にサブレの音が響き渡る。

『兄さん。逃げろー!』

ビスケットは通信機に接続し全メンバーに指示を出す。

「艦長より全クルーに命令。全時刻をもってヴァルハラを放棄。クルーはシャトルで脱出。モビルスーツ隊はシャトルの護衛を」

「ですが。シャトルでは近くの艦に回収されるまでどれだけかかるか。その時間守り切れませんか」

「大丈夫だ。イサリビ改が近づきつつある。それに回収してもらおう」

サラの当然の疑問。ビスケットが同時に見たイサリビが近づきつつある状況。サブレが教えてくれたことだった。

「全員急いで」

シャトルに乗り込み、一機一機がヴァルハラから出ていく。周辺のモビルスーツを破壊しながら防衛状況になると、シャトルに目せ帝国製のモビルスーツが近づいていく。

明楽がカバーに入ろうと機体を走らせるが、明楽よりはやくブルーレイがモビルスーツを落とす。

「ジャック………さん?」

「勘違いするなよな。テラに言われたから助けに来たただだからな」

まるでツンデレのような事を言われて明楽は「クスクス」っと笑い出す。

ジャックは顔を真っ赤に染めながら木星帝国のモビルスーツに向き、明楽はジャックに背中を預ける形になる。

「………ありがとう」

「?なんか言った?」

「言っていない………」

「何て言ったのか教えてよ」

「分かっているだろ!?!」

明楽とジャックがそんな言い争いをしている間にビスケットとクレアが最後のシャトルに乗り込み、誰もヴァルハラに居ないことをゼ

ム・ロックが確認すると、シャトルは勢いよく出ていく。

すると、まるでヴァルハラはそれを待っていたように爆炎に包まれていく。

全身が炎に包まれると、そのまま沈んでいく。

皆が沈黙に包まれ、落ちていく艦を眺める事しかできなかった。

何とも言えない感覚が皆の心を満たし、少しづつではあるがイサリビ改が近づきつつある。

助かったという感覚と、寂しさをにじませる感覚が複雑な心境を作り出し、そんな感覚を吹き飛ばすようにユージンの声が聞こえてくる。

「お前達！大丈夫か？」

バルバトスたちが戦局の一部を引き受けると、コロニーレーザー一帯ではさらに厳しい攻防戦が繰り広げられていた。

後方からくる攻撃を掻い潜り、壊れた木星帝国製の艦の中へと隠れる。アークのキャノンが艦ごと吹き飛ばそうとするが、エデンはそれを使って再び身を隠す。

漂うデブリを掻い潜り、再び捨てられた艦のそばまで寄ると、今度の中ではなく外の物陰に隠れる。

同時に周囲を漂っていたモビルスーツを艦の中へと入れてやる。

間の奥からする反応にアインが一瞬で反応し、攻撃をすると艦の推力に火が点いて周囲を明るく照らす。

サブレはギリギリまで気配を消しながら一気に近づき、サーベルで斬りつけると思いきや至近距離でマグナムの引き金を引く。

しかし、アインは直前で攻撃に気が付きエデンのライフルの銃口を上へと多く蹴り上げる。

攻撃が逸れたことで隙が生じるが、エデンは素早くライフルを捨て、サーベルに切り替えると、シールドでアークの視界を潰すと、サーベルで襲い掛かる。

アインは殺気から攻撃手段を推察し、カタナを使って攻撃を受け止める。

「お前は何のために戦う？何のために人類を滅ぼそうとする」

「人類は一度滅ぼすべきだ。同じことばかりを繰り返す！何度でも！」

「その原因は貴様にあるはずだ!!」

エデンがアークを蹴り飛ばし、艦をライフルで攻撃するとアークは赤い目を更に光らせる。

「貴様に何が分かる!? 耐えたんだ！二千万年もの間耐え続けた!! もう我慢ならない！滅ぼす！そう決めた！行け！ファンネル！」

アークから射出されたファンネルが一斉にエデンに襲い掛かる。

攻撃の隙間を掻い潜る様に回避し続け、ライフルで襲い来るファンネルを落としていく。

「我慢した!? 耐え続けた!? お前が……お前たちが邪魔しなければまだ違う道があった！それを邪魔したのは貴様だ!!」

「そうさせたのは人類だ！自らの欲望の進むまま多くの犠牲を強いる。意味のない犠牲をだ！」

「それは貴様も同じことだ！意味のない犠牲なんだ！」

左腕はサーベルでファンネルからの攻撃を弾き落とし、右腕ではライフルで一つ一つ落としていく。

「もう失わない！その為の勝利と、その為の犠牲だ!! 人類に、世界に教えてやる！お前たちがしてきたことをそのまま返してやるっ!!」

「そんなことはさせない！させてたまるか!!」

エデンから放出される謎の衝撃はファンネルの動きを完全に止める。

「ええい！厄介な！一度離れた端末まで支配できるのか!?!」

「お前の思い通りにできると思うなよ」

アインは目の前の画面からコロニーレーザーが放出体勢に移行してきたことを知る。

後は中から操作するだけだと理解し、エデンの後ろにある艦へとランチャーで攻撃し、視界を封じている間にコロニーレーザーへと向かう。

サブレも後を素早く追いかけるが、追いつける気がしない。

コロニーレーザーの中へと入っていくアインを追いかけ、大きな砲

台の中へと突き進む。アインはその奥にある小さな通路の奥へと入るが、エデンはその前で一旦止まり、ゆっくり奥へと進んで行く。

すると、古い町並みが残る場所に出ると、アインのアークが建物の陰に隠れて、アインだけがショツピングモールの中へと入っていく。

アークを破壊するべきかどうかで一瞬だけ悩むと、アインが何の対策も無しにアークを置いていくはずがないと考え、サブレもエデンを物陰に隠してそのままショツピングモールの中へと入っていく。

薄暗い建物の中はどれだけ昔の建物なのかが見当もつかない。あちらこちらがひび割れ、今にも崩れそうになっている。

「ここは宇宙世紀に作られた当時最先端と呼ばれたショツピングモールだ。しかし、時間が経てばこれもただのゴミだ」

どこかから放たれる声にサブレの警戒心は最大値まで高まり、殺気がした方向にハンドガンを向ける。

二階からアインが銃をサブレの方へと向け、サブレもアインの方へと銃を向ける。

「この場所は……この街は始まりの場所。お前もここを知っているはずだ。お前の魂が知っているはずだ」

サブレとアインがにらみ合う中、語られるのは二人の出会いの話。

## 選り取った未来Ⅱ 《安らかな場所》

16

お互いにハンドガンを構え合う、にらみ合い、殺意を向け合うこの状態はいつたいどちらが有利かという、断然アインが有利である。しかし、アインとて決して油断していい状態ではない。

「人間は同じ文明を何度となく繰り返して滅ぼしては繁栄する。何度でもこれを繰り返す。意味のない行為をこれからも繰り返すのか？」

「脱却する術があると信じる。戦っていく」

「人間がそんなに賢い生き物だと思えるか？」

「俺はお前が思う以上に人間を信頼している」

建物が大きく揺れるのがパイロットスーツ越しにもよく分かる。しかし、サブレとアインが本当に語りたことは別だ。

ここがアイスがマイクと出会った場所である。

アイスが大学一年生だった時、マイクは大学三年生のあるゼミ生であった。精神医療を目指すアイスに対し、マイクは精神干渉というジャンルの研究をしており、アイスは必要以上に研究をしようということは無く、単純にカウンセラーとしての就職を目的にしていた。

マイクはこのころから軍方面から精神干渉方面で協力をしており、これが後にニュータイプ開発に発展していくとは誰も思わなかった。大学では人間の脳みそが日々解明されており、そんな中宇宙移民計画でマイクとアイスはそれぞれ大学ごと宇宙コロニーに移住することになった。

初めての年末、年越しの準備をするアイスは大学三年生のマイクとぶつかってしまう。

お互いに持っていた荷物をばら撒き、集めている間にお互いに荷物がかぶっていると気が付いた二人は自然な流れでゼミへと向かった。ゼミの教授はアイスの持つ才能に驚いた。

彼女は人の頭の中をのぞくことが出来る才能を秘めており、それ以外にも脳波を周囲へと飛ばしていることもよく理解できた。

教授は次第に実験内容を過激にしていく。

そうしている間に、あの痛ましい悲劇が起きた。

マイクはアイスを実験動物のように扱う教授のやり方に耐えられなかった。だから逃げようとし、シャトルに乗って移動していた際の事である。

アイスはシャトルの席でテレビを見てみると、気持ち悪くさせ、同時にマイクはそんなアイスの背中をさする。

「どうしたんだ？」

「死んだ……多くの人が、死んだ」

涙を流し、マイクにもその光景が流れてい来る。

悲劇が頭の中に流れ字こんでくる。

コロニーが爆発していく光景、人が外に投げ出され、死んでいく。

宇宙世紀元年1月1日。

その数か月後に反政府運動を理由に二人は殺されることになる。

二人が出会い。絆を紡ぐきっかけになった場所。

宇宙コロニー『ラプラス』

多くの人の命が奪われ、殺され、長く続く悲劇のきっかけになっていく。この日を境に人類は繁栄と滅びの輪廻を繰り返すようになってしまった。

今、人類は完全に滅びる直前まで追い詰められていた。

ハンドガンの引き金を引こうと人差し指に力を籠める。すると、より大きく地面が揺れる。

ハンドガンから出る弾がお互いに当たらず、遠くへと着弾する。

「なんだ？」

『サブレ。コロニーレーザーへの攻撃が始まっています。脱出を』

サルガからの指示が出るとサブレはいち早く建物から出ていく。

出ていく際に、一瞬だけだがアイスとマイクが出会う瞬間が映った気がした。

心残り。アイスはずっと考えていたあの日、出会わなければこんな結末にはならなかった。

出会わなければよかったのではないかと、そうすれば少なくとも人類が滅びるような結末にはならなかった。

そんな心残りがサブレに幻を見せた。

この出会いがなければ、こんなところにはまではこなかった。

サブレは幻を背に駆け出していく。

素早くガンダムエデンに乗り込むと、アインも同時にガンダムアークに乗り込んでいく。

ショツピングセンターを破壊しながらアークがエデンに向けて突っ込んでいき、エデンは突き出される右拳を受け止める。しかし、攻撃力を受け止めきれなくなり、エデンは膝をつく。

「分かっているはずだ。人間は進化してすらも同じことを繰り返す。お前だって分かっているはずだ！」

「分かっているさーそれでも……!!一度信じると決めた！」

少しづつ押し返していくと、エデンは背中中のブースターをの位置を調整する。

先ほど見えていた。エデンが安置されていた場所の近くにガスタンクがあつたのを見ていた。

中身があるとは考えずらいが、あれば逆転の目があると信じていた。

ガスタンクの方に背中を向けるとエデンのスラスターを最大値まで高めた。

アークを押し返し始めるが、それだけでは駄目だった。すると、アークもスラスターで押し返そうとし結果としてアースのスラスターの火がガスタンクの表面を焼き始める。

焦げて、溶け出していき、大きな爆発を起こしていく。

サブレのエデンを包み込んでアークへと炎が包み込む。

アインはとっさの事で手を離してしまうが、その隙にエデンがビームサーベルを抜き取ってアークへと突っ込んでいく。

アインの視界がエデンのビームで視界を潰されていく。

咄嗟にアークのキャノンの引き金を引き、相打ちを狙いお互いの視界を光りが潰していく。

もし……生まれ変わるなら何になりたい？

そう聞いたのはアイスだった。



僕は『鳥』になりたい。つとあった。

アイスがふと空を見上げると、そこには鳥がいた。青い鳥だった。なれるといいわね。そういったアイスは優しく微笑み返した。

君もなるんだよ！そう僕はいった。

私は……なれないわ。そんな風に自由にはなれない。

僕はいつか君を救って見せる。そう力強く告げた。

それはあなたの役目ではないわ。そう悲しそうな目で告げたのは僕の心に深く残っている。だから……助けたかった。

僕は助けられなかった。

君を失った。

助けに行つたとき、君は殺された所だった。

悲しみに苦しみ、声を上げてその場で憎んだ。

だから、君が生まれたんだよ。サブレ・グリフォン。

サブレはふと気が付くとアイスが殺された場所に立っていた。

いや、正確ではないだろう。これはアイスと『彼』の記憶だ。

『彼』が誰なのかは分からないが、少なくともマイクではないだろう。

「君は僕の中にある彼女を『助けたい』という願望と『憎しみ』を原動力に、彼女の世界を救いたいという気持ちの軸にして生まれたんだ。彼女の才能が二千万の時を経て熟成されたような物さ」

「まるで漬物みたいに言うな」

「褒めているんだよ。君の魂は全く新しい所から生まれたんだ。彼女の才能を受け継いでいるという点ではやはり生まれ変わりになるのかな？でも、おかしいとは思っただろ？」

「まあ、彼女の生まれ変わりなのに男という点では一番早く疑問に思った。でも、そういうものなんだと勝手に解釈していた」

「アカシックレコードは真実を話していないと思う。君は地球連邦軍の軍人がマイクを殺したって告げられたんだろ？」

「ああ。違うのか？」

「違う。マイクを殺したのは……僕だ。エヴリー・ロンそれが僕の名前だ」

エヴリー・ロン。絵本の作者。

サブレは理解した。

(ああ。アカシックレコードは真実を告げていない。むしろ嘘と真実を織り交ぜながら話していたんだ。あくまでも人類に選択を強いる為に。ああいえば、人類が選択を強いる可能性が高いと踏んだのだから。あくまでも人類が進化する気があるのか？ないのか？ならば……………)

「なら、俺が生まれると分からなかったというのも嘘？」

「おそらくは……………多分、イオリア・シュヘンベルグと出会った際にサブレ・グリフオンの到来は予想していたはずだよ。そのタイミングで、僕が作った絵本を僕のDNAで作ったクローンでばら撒く。PN01の素体の誕生目的じゃないかな？もちろんそれだけじゃないとは思うけど、人間を知るのは人間の素体を手に入れる必要があったし、今まではクローンを使っていたはずだ」

「なら、どうして今回に限ってはオルガ……………死体を使ったんだ？あれもクローンなのか？それとも……………」

あれはAIではないという事になる。あれは、オルガ・イツカのクローン、もしくは死体を作ったのだというのはサブレにも予想できる。

「クローンは細胞の劣化速度が速いからね。それに、いくつかバリエーションが欲しかったんじゃないかな？人の間に関係を持つならいくつかバリエーションが欲しいからね。まあ、オルガって人はどうもクローンぽいけど。あれは単に君の気を引きたいからだよ。気づかせたら君は追いかけると確信していたんだろ？実際君は追いかけた」

そして、アカシックレコードの元までたどり着いた。

「まあ、これは特別な空間だからね。真実は君の記憶の中にあるよ。探してごらん。後、君のAI君。えくつとサルガだっけ？感謝するといいよ」

どういう意味なのか尋ねようとするが、その前に現実に戻される。

現実には引き戻されるとエデンの間コックピット前にシールドがエデンを守っており、サブレはとつさにビームサーベルの持つ右手を見る。

キャノンの熱で焦げ始め、融解が始まっている。

『サブレ。目が覚めましたか？現在右腕が融解しています。離脱を推奨』

ビームサーベルはコックピットの右隣を貫いてはいるが、まだアインの生存を強く感じることから、まだとどめにはいつていない。

「だめだ。ここで距離を開けられたら倒せない！」  
負けてしまう。

ここで逃げたらだめだつと考え、サブレはエデンの右腕を更に横に向けて動かす。動かすたびに腕が悲鳴を上げているようにも見え、今にも腕が壊れそうだった。

「まだ抵抗するか!？」

「……………どうして?」

「貴様が裏切るから!!人間が愚かだからだ!!」

「……………どうして……………どうして彼女を守らなかつた!!」

アインの表情は驚きに満ち、同時にサブレの姿がエヴリー・ロンと重なった。

その瞬間アインの右半身がビームで焼けていき、同時につぶやく。

「また……………お前が俺を殺すのか?」

その言葉はサブレを再び夢の奥へと連れていく。

マイクがアイスの所に戻るときには、彼女は既に息絶え、マイクもまた傷だらけだった。憎しみの言葉を口にするマイクに対し、それを遠くから眺める一人の視線にはマイクは気づけなかった。

もし、こんな状況でなかったとしたら二人は別の関係があつたはずで、遠くから眺めている視線の主はエヴリー・ロンだった。

エヴリーにはアイスが死んでいるという事しか分からず、それだけで思考が大きく乱れ、ハンドガンの引き金を引かせるには十分な心理状態だった。

発砲音と共にマイクの左胸に赤い血のシミが広がっていく。

「!?誰だ?」

心臓を撃ち抜きさえしなかったものの、体中から力が抜けていくことが分かっていくマイク。

発砲音の先には見知らぬ男性が興奮状態で立ち尽くしており、ハンドガンを構えていることから犯人であることは把握できた。

殺してやろうとハンドガンを手に取るが、それより早く怒鳴り声と発砲音が聞えてきた。

「なんで彼女を助けなかったんだ!?この……人殺し!!!」

誤解と勘違いからくる発砲で今度こそ心臓を撃ち抜く。

すると、マイクの視線は自然とアイスの方を向く。

彼女とエヴリーの関係を理解したとき、マイクもまた誤解からくる憎しみを覚えていた。

これこそが彼女が見た悲劇の入口。

どう彼女が関係をただそうとしてもこの二人は愛する人をめぐって殺し合う関係でもある。

それをじつと監視カメラ越しに見ていたのはアカシックレコードであった。

サブレは涙を流す。

エヴリー・ロンは誤解からマイクを殺し、結果から見て呪いを振りまいてしまった。

後悔だったのだろう。全ては。だからこそ彼の体はアカシックレコードによってクローンの素体に。魂は彼女の生まれ変わりになるサブレ・グリフォンの為に使用された。

生まれ変わって鳥になりたい。

そんな願いすら叶わぬものと知りながら。

サブレはコックピットから飛び出し、ハンドガンを握りしめながらアークのコックピットのハッチをひっぺ返そうとする。

時間はかかったが、ビームサーベルの熱で溶けかけていたハッチを外し、中に居るアインに向けてハンドガンを向ける。

「待ってー!」

その声の主の方へとハンドガンを向けるとそこにはククナがノー

マルスーツ姿で立っていた。

「コロニーレーザーはじき陥落する。このままでも死んでしまうわ。どうせ右半身のほとんどは無いわけだし。私が責任をもって彼の死に付き合うから………お願い」

サブレ一瞬悩んでしまうが、彼女の目を見て、彼女の立ち振る舞いを記憶し、彼女の覚悟が自分では変えようがないことを確認しハンドガンを下ろす。

「ありがとう」

サブレはエデンへと帰っていき、ククナはコックピットの中で今にも死にそうになっているアインを抱きしめた。

「がんばったね?もう………頑張らなくてもいいからね。私は最後まで一緒に居てあげるから。一緒に………死のう」

その姿を見ながらサブレは崩壊し、火が噴いているコロニーレーザーから脱出しようとする。

その瞬間。

コロニーレーザーが自爆シークエンスに入っていることに気が付いた。

「自爆!?規模は?」

『戦場一帯。戦艦はともかく、シャトル程度であれば大破するでしょう』

外に居るビスケットの事を考えたサブレ。

救いたい。

その気持ちサブレの心を満たしたとき、エデンの背中からまるで天使の翼のような光が際限なく広がっていく。

サイコフレームの共振が世界を満たし、コロニーレーザーを温かい光で包んでいく。

ビスケット達シャトルがイサリビに回収されようとしていた時、コロニーレーザーが大きな光を各所から放ちながら崩壊していくのが見えた。

しかし、同時にコロニーレーザーがまるで圧縮する様に縮小しているのも見てわかる。

「やばいぜ！自爆しようとしてやがる！」

ユージンの焦る声が聞こえてくるが、実際シャトルの回収はまだ半分も終わっていない。

「爆発の規模は!？」

「分かんねえ!?下手をすると戦場一帯が……」

ビスケットは作業を急がせようとするが、そんな中サブレの温かい光をクレアと共に感じ取る。

いや、全員が異変を感じ取りコロニーレーザーへと視線を向けると、コロニーレーザーが温かい光に満ち溢れ………消滅した。

何も残らず。

残さない。

エデンごと姿を消して、サブレの気配もまた消えてしまった。

「サブレエ!!!」

皆がサブレの名を叫ぶ。

アインはククナと共に温かい光に満ち溢れていた。

安らかな場所だ。

そういう気持ちで心を満ち溢れ、アインはようやく手に入れたい物を見つけた。

そうか………この暖かさが欲しかったんだ。

二人の魂をエデンは多くの魂と共に抱え、連れていく。

さあ、長い旅の始まりだ。

行こう。安らかな場所へ。

## 選り取った未来XIII 《また逢う日まで》

17

赤子の泣く声が聞えてくるとうたた寝していたらしい母親は顔を上げる。隣で泣く赤子を抱きしめながら母親があやしていると、窓の向こう側で虹が見えた気がした。

窓から顔を覗き込むと、一瞬だけだが天使のような影が虹の向こう側に見え、身を乗り出してのぞき込みが、それは一瞬の事で、もう見えない。

気のせいだったのか。

母親は窓を閉め、未だに泣きわめく赤子をなだめる。

テレビの向こうではニュースキャスターが原稿を読むのに苦戦しているようで、見ていて微笑ましい気持ちにさせられる。

赤子は窓の向こうを見つめて泣き止み、虹の向こう側へと両手を差しそうに伸ばす。

見えない何かを求めるように。

もしかしたら先ほど見えた気になった天使を赤子も求めているのかもしれない。

母親は愛おしそうに見つめ、赤子は楽しそうに笑う。

サブレはその姿を見ると安心して再び旅立っていく。

多くの世界が生まれた、虹の彼方は本来のカタチへと昇華していく。アインとククナの魂もあるべき形へと向かっていった。

これで大丈夫だろう。

最後の二人を導く必要性がある。

そう思い、サブレは真のアカシックレコードへと向かう。

一面が鏡面のような湖に出ると、そこには一人の女性が立ち尽くし、サブレの登場を待っていた。

エデンが右膝をつき、サブレの中から出てくるようにエヴリー・ロソが姿を現す。

「行こう。僕が君を守るから」

「でも……………」

「大丈夫だよ。彼なら………ううん。彼等ならきつとこれから先の時代だって歩いていけるさ。信じよう」

「そうね」

エヴリー・ロンはアイスの手を握りしめ、アイスはエヴリー・ロンの方を見つめながら微笑む。

「今度は僕が君を守るから」

二人はサブレの目の前で青い鳥に変わると、世界の向こう側へと旅立っていく。

サブレはどうしても自分がやっておきたいことを果たすため、ある世界へと旅立っていく。

褐色肌の中年の男性は幼い少年に語り掛ける。

「三日月。オルガを見なかつたか？」

そう尋ねる少年は首を横に振るだけ、二人は部屋一つ一つを調べ始め、サブレはそんな姿を微笑ましく見つめながらオルガ・イツカが眠る場所へと向かう。

ガンダム・バルバトスが眠る場所で、温かい場所で気持ちよさそうに眠る彼の額に触れながらサブレは後悔の記憶を強く呼び覚ます。

「俺が出来ることはこれだけだ」

そうすると、オルガはまるで悪夢を見ているように寝苦しさを顔に移す。

「オルガ？」

三日月のオルガを探す声が近づいてくると、サブレは物陰に隠れる。

オルガは三日月のしつこい声に目を覚ます。

「大丈夫？うなされてたけど」

「ああ？なんか………嫌な夢を見たような気がする」

（いつか分かる日が来るさ。生きてくれ。そして………）

サブレはエデンと共にこの地を離れていき、今から戦い始める友人を想う。

「いつか………もう一度逢う日まで。俺はいつだって待ってるから」  
旅立っていく。



この地ならサイガもうまくいくだろう。

そんな思いと共にサブレは帰っていき、自分の還るべき世界へと歩き出す。

何も無くなった空間を多くの人々が眺めて三十秒も経っていないだろう。しかしまるで空間を引き裂くように虹の光が出現し、光は裂け目のように広がっていき、その奥からサブレの乗るエデンが帰還する。

誰もが安心する声を放ち、エデンは素早く仲間達の元へと向かっていく。エデンは少しづつ通常モードへと変形していき、二本角へとアンテナを変形させていく。

クレアは待ちきれずシャトルを飛び出し、サブレはコックピットから飛び出していき、クレアを受け止める。

「危ないだろ」

「あなたが心配だったから」

その温かさを感じ取り、二人だけの空間が広がっていくような気がしていく。勿論それは錯覚で、そんなことは無いのだが、まるでエデンが気を利かせるように二人の体を周囲から隠すように両手で優しく包む。

「大丈夫だ。もう………大丈夫だから」

抱きしめる彼女に言い聞かせるように、まるで自分に言い聞かせるように何度もつぶやく。

「お姉さんは………ククナとアインは別の世界へと生まれ変わる。今度の世界ならうまくいくことを願おう」

「うん」

「これからは一緒だ」

「うん」

「もう君を一人にしない」

「うん！」

「結婚しよう！」

「うん!!」

力強い言葉と共に二人は強く抱きしめ、永遠のような時間が流れ

る。

「帰ろう。帰るべき場所に」

それから、木星帝国最高議長であるオズボーンによって木星帝国は解体され、オズボーンによって太陽系共和国が樹立され、太陽系共和国太陽系議会初代議長にはクーデリア・藍那・バーンスタインが選ばれた。

太陽系議会の参加人数は最高議長を含めても四人のみ。

地球議会最高議長であるタカキ・ウノ。

火星議会最高議長であるアスナ。

木星議会最高議長であるオズボーンの三名と太陽系議会の最高議長とアルン議会の最高議長を兼任しているクーデリアの全四名である。

ルールとして、太陽系議会の最高議長は地球議会と火星議会、木星議会とアルン議会の最高議長だけが集まり、話し合う。

金星や一部のコロニーも参加を求めているが、太陽系議会が正確にまとまるまで保留という形になった。

木星の参加には一部で非難も起きたが、木星帝国の軍事力は太陽系連邦軍が全て押収するという形で決着を迎えたのと、賠償として旧経済圏に金を支払うという形で納得させることになった。

なにより木星帝国を無暗に外せばむしろ新しい争いの火種になると判断したのも大きかったのだろう。

あの戦いの終結から一か月、様々な思いやしがらみを乗り越えて、クーデリアはアルン中央広場で記者会見を開こうとしていた。しかし、今日はあいにくの雨模様。

そのため場所を移し、議会本会議場の中で行う事になったが。しかしビスケツト達はそうもいかない。

今日は長引かせていた元鉄華団メンバーの葬儀の日でもある。

ライド、雪之丞、ヤマギヤそれ以外にも多くのメンバーをアルン墓地へと埋葬する手筈になっていた。

こちらは雨でも行う。

それに、これ以上メリビットの家族を待たせるわけにはいかない。

メリビットはアルン第三都市で農場と孤児院を経営しながら、アフリカユニオン出身のファンの孤児たちもそちらで済むことになり、ファンは農場でとれた小麦粉でパン屋を経営することにしたらしい。この一か月で下準備が進んだとはいえ、これからが大変な時期なのに、これ以上待たせるわけにはいかない。

何より、多くのメンバーが気持ちの整理を付けたがっている。

たった一人を除いては……：ノルバ・シノだけはいまだに完全に整理がつかない状態が続いていた。実際、葬儀にはシノは参加していない。

雨がしつこいと感じる日が来るとはビスケットは思わなかったが、今日くらいは晴れてほしかったと心から思う。

一つ一つの墓に花束を添え、一人一人が仲間達に別れの言葉を胸につぶやく。

中には永遠の別れに涙を流し、ある者はそっけないそぶりをしながら端っここで涙を流している。

タカキも今日の為にクーデリアに告げて休みを取っており、葬儀にわざわざ参加していた。そんな中、ビスケットにユージンが近づいていく。

「シノは参加しない……：か」

「仕方ないよ。まだ気持ちの整理がつかないだろうし」

シノは逃げていた。

ここに来れば現実を直視しなければならぬし、それを避けての行動だろう。

「今はどこに居るんだ？」

「？テム・フォースっていう人に預けたってサブレが言ってたけど？詳細は知らない。サブレは大きな計画に組み込まれているらしくて、完全に別行動なんだよね。明楽は明楽でメアリーと一緒に行動中みたいだし……：最近皆バラバラなんだ」

「しかた……：なんじゃないか？そういう……：もんだろ」

ユージンの言葉に頷きながら同意して、ビスケットは花束を置く暁の姿を遠目で見ていると、光が差し込んで見えてきた。

ふと全員が空を眺めると雨は上がってしまったようで、一筋の光が墓石の雫に反射して光って見えた。

宴会場でみんなが悪酔いをしていると、まるでその場は花見でもしているかのようなカオスを映し出す。

ビスケットは酔いを醒まそうとこつそり部屋から出ていき、裏口から出ていくとこれまた偶然かサブレと明楽とテムが三人で話していた。

「じゃあお前達も決めたのか？」

「そりゃあ先輩がいないと活動できないし」

「同じく！」

「独立しようという気持ちはないのか!？」

「ないです!!」

「即答するな! 全く……: 本当にその気なのか? 『外宇宙探査隊』に志願するという事は最低でも十五年は帰ってこないんだぞ?」

「メアリーは付いていくって!」

「特にそう言う後悔無し!」

テムと明楽の自信満々の声にサブレがため息を吐き出し、二人はその後もこそこそと話している。

話の内容を全部聞いた限りでは、『外宇宙探査隊』は移動型大規模コロニーとかなりの数の軍隊を載せて向かわせるらしく、クレアやメアリーもついていくつもりらしい。

「そういえば、テラはどうなったんですか?」

明楽のもつともな疑問にもサブレは特に隠し立てせず答える。

「どうやらペペロの研究所の残骸を回収して、三日月やモンタークと共に姿を消したらしい。时期的に考えれば一緒に行動しているのかもしれないが、オズボーンは放っておいてもいいだろうってさ。まあ、可能性の話をすればだけどな……」

ビスケットは声をかけるわけにもいかず、そんな勇気が来るわけもなく、ただ茫然としてみると、軍の車両が三人を連れて行った。

「サブレ達……: 何も言わないで行くつもりなのかな?」

そんな気持しが心のしこりになっていた。

もう……土星は過ぎただろうか？

そんな思いがふとテラの心をよぎり、それが後悔ではなく寂しさなのだと思いついた時、死んでしまったFや去っていく故郷を想つての事だと把握できた。しかしそんな寂しさは旅立ちには不要だと斬り捨て、大規模移動コロニーは太陽系は離れる為移動を続けている。

中にはゲイナー一派も参加しており、三日月やモンタークも参加していた。

皆、今の世界には関われない者達ばかりで構成されている。

モンタークの足元に黒い髪の少年が存在する。

彼の後悔。アインのクローンの記憶の一部を引き継いだクローンアイン。

彼を育てる事、それが彼の次の目標でもある。

次の時代の事は次の世代に任せよう。そう決めた時、そう決めた時、自然と後悔は無かった。

ゲイナーはあの後、まるで見届けたのを待っていたかのように息を引き取り、テラは彼らを拾った。

さあ、行こう。

そう一人で口を開き、見えぬ旅へと旅立っていく。

きつと、地球に帰ることは無い。それでも彼らは歩いていく、罪と罰を背負いながら。

どうするべきか、ベットの所で悩んでいると、アトラが部屋の中へと入っていく。

三日月が旅立ったかもしれないこと、サブレと一緒にに行けば会える可能性がまだある事、自分はいけないことを話すべきかどうか。

すると、暁は眠たそうに両目を擦り、ビスケットのベットへと入っていく。

「ごめんね。暁がどうしてもビスケットと寝るって聞かなくて」「ううん。甘えたい年頃だもんね」

あつという間に眠ってしまった暁の頭を優しくなでると、ビスケットは意を決してベットに腰掛けたアトラに話しかける。

三日月の事、サブレの事、自分が軍の中核から呼ばれており、アル

ンを離れなければいけないこともすべて話した。

しかし、アトラの答えはあっさりしたもので、この場所に残るとい  
う決断だった。

「三日月が何も言わないで行ってしまったのも、きつと私達の事を  
想つての事だし、それを邪魔したくない。それに、暁を不幸にしたく  
ないし」

もう、長い事暁が寂しい思いをしていた。

これ以上は離れない。

「でも、ビスケットはどうするの？このままでいいの？」

アトラからのまっすぐな問いに俯きながら悩む。

「邪魔をしたくないし、できないよ」

「そうじゃないよ。そうじゃなくて、ビスケットは何も告げないで  
いの？それで後悔しない？」

そう言われてしまうと悩んでしまう。

出来ることはあるだろうか？アトラからの声に自らの心を奮い立  
たせ、ビスケットは暁の頭をもう一度優しくなでる。

ビスケットはメリビットの経営する孤児院と農場を訪れていた。

農場ではちらほらと牛が放牧されており、孤児院の子供たちが遊ん  
でいる。メリビットが寂しそうに三階建ての家の一階のベランダの  
椅子でゆっくりしており、ビスケットは後ろから話しかける。

メリビットもビスケットの存在に気が付いて無理に表情を作る。

「わざわざ会いに来てくれたの？」

「ええ、気になったので。大丈夫ですか？」

そんな言葉は聞くまでも無いが、とっさに口に出してしまう。

メリビットは大丈夫だと言いながらどこか気丈にふるまえてさえ  
いない。

「無理しないでくださいね」

「うん。あの子達の為にも強く生きないとね。それに……………あの人は  
あの子達を守る為に命を懸けたんだし」

「メリビットさんだってその中に入っていると思いますよ」

「……………ありがとう！」

ようやくメリビットは心から微笑む。

「そういえば。何か用事があるんじゃないの？」

「あー！そういえば……雪之丞さんが使っていた工具一式がありませんか？お守りみたいなペンダントを作ってみました」

あれから二か月、第一期外宇宙調査隊の出立の時が来ようとしていた。

メアリーとイオリが別れを惜しむ中、サブレ達はあえて誰にも告げずに別れの時を迎えようとしていた。

「そういえば。シノはお前に任せていたからてっきりシノは来るんだと思ったが？」

「？来ないけど。ていうか連れてこないよ。面倒見たつもりも無いしね!!」

「分かってたけどな」

クレアがその他複数の人と共に姿を現したところで、サブレが表情を引きつらせる。

「言ったのか？喋ったのか？」

「？みんな知ってたのよ。てっきりサブレが話したんだと思ったけど」

その奥でビスケットが微笑んだのが見て取れ、みんなの別れを惜しむ中、ビスケットはサブレに手作り感あふれるペンダントを手渡す。

「？なにこれ？」

「真面目に仕事してくれませうよ」

「何？皮肉？何も告げなかった事への」

「別に……怒ってないし、ふてくされても無いよ。だから……ちやんと帰ってきなよ？この場所に」

「分かってるよ」

そう言つてサブレはカバンを持って通路へと飛び出していく。それに続くようにクレア、明楽、メアリー、テムの順番に入っていく。

三十分後、コロニーと同規模の大きさを誇る外宇宙探査宇宙船は静かに動き始め、星の彼方へと旅立っていく。

「行ってくる」

「行ってらっしゃい」  
「また逢う日まで」



## 設定集其の二

キャラクター

サブレ・グリフォン

概要……幼い頃より分野問わず優秀な成績を残し、両親から絶大な信頼を寄せられていた。しかし、その信頼は同時に長男であるサブアランとの確執や溝へとつながっていく。その溝はサブレの心に深い闇を作るきっかけになる。親の信頼にこたえようと自らの心を追い込んでいき、結果親の死にストイックになっていく。その姿はビスケットに不安感を与え、サブレが孤独に向かうきっかけになる。しかし、テムや明楽など周囲の人々とかかわる中で自らの闇を意識しない日々が続く。しかし、オルガやサイガの死を切っ掛けに自らの闇を切り離す選択をしたことが、別の問題を発生させる。当初はクレアやレレなどの女性陣からの恋愛に疎く、鈍い振りをする場面もあったが、自らの闇と向き合う過程でクレアへの恋心を自覚する。アインと戦っていく間に自らの『選別者』としての能力を使いこなすようになる。オルガからの願いでもある鉄華団のメンバーを助けるために行動したりと、原動力になっていた。最終決戦では人類を信じ、後悔が生かされる世界を作る為アインと戦い、自らは外宇宙へと旅立っていく。

クレア・フォン・フレイア

概要……幼い頃より人の心や記憶に触れる力を持っており、父親はあくまでも彼女をフレアを生き返らせるための生贄にしか考えておらず、それがククナが父親を殺そうとするきっかけになる。ククナの目的に関しては最後になるまで気が付けなかった。サブレの事は当初は同じ覚醒者同士という事で注目していたが、接していく間に惚れていく。最終決戦後は姉が自分を生かした意味を知る為、サブレについていく決断を下す。

ビスケット・グリフォン

概要……鉄華団に元々は所属していたが、崩壊後はEDMに転職する。EDMの幹部の一人として活躍し、『フロントムブラッド隊』の

一人として活躍する。幼いころにサブレを見放してしまったことに  
関しては後悔しており、今でも引け目に感じている。妹に甘くサブレ  
との関係は周囲に「サブレの兄には見えない」と言われることもある。  
最終決戦後はEDMの後継組織である『太陽系連邦軍』の上層部枠に  
呼ばれており、招集に応じる構えを見せ、サブレの旅立ちを見送った。

明楽・アルトランド

概要……：背が低く幼い顔立ちをしていて、若干空気が読めない所  
があるが、モビルスーツの才能は人一倍高く、その点はサブレにも評  
価されている。サブレに制してもらわなければ暴走すると一緒くた  
にされる。周囲に影響をすぐに受ける癖があり、巨乳好きもシノの影  
響を受けた結果である。最終的にはメアリーから好意を受け取るが、  
まるで気が付いていない。最終決戦後はサブレやメアリーと共に外  
宇宙に旅立っていった。

ノルバ・シノ

概要……：ビスケットと同じく鉄華団崩壊後EDMに就職した。  
サブレから焚き付けられたとはいえ、EDMに入り少しは自信をもつ  
てヤマギと出会うことを目標にしていたが、最終決戦の折、ヤマギを  
失ってしまう。しかし、イオリの優しさに触れる中で多少はましに  
なっていく。最終決戦後は地球に残る。

メアリー・シユシユ

概要……：イオリの姉としての自覚が強く、過保護な一面を持つ。  
しかし、過保護すぎる一面はクリュセ攻防戦においてイオリに悲恋を  
経験させることになる。後悔やサブレに結局の所で押し付けてし  
まった事への想いや明楽が自分へ優しくしたことなどで泣いてしまう。  
それが明楽への恋へと変わっていく。最終決戦後はイオリへの依存  
を辞める為、明楽と共に外宇宙に旅立っていく。

イオリ・シユシユ

概要……：メアリーの妹として過保護に育てられ、少々危機管理  
能力が欠ける一面がある。クリュセ攻防戦において悲恋を経験する  
ことになり、その後シノ自身もヤマギと悲劇の別れを経験したことで  
お互いに慰め合う関係になる。最終決戦後は姉とは違う道を進むた

め地球に残った。

アトラ・ミクスタ

概要……鉄華団において給仕係を担当しており、鉄華団壊滅を見届けた人物の一人。三日月の生存についてはある段階から確信しながらも、三日月の意思を尊重する事にしており、大人びた様子を見せる。最終決戦までフアントムブラッド隊の給仕係を務め、最終決戦後もビスケット宅に残る決断をする。

アイン・ダルトン

概要……火星出身者でククナに助けられて以降ククナに対し特別な感情を抱く。サブレと会うまでは選別者としての自覚は薄く、どこか儂げな存在であったが、サブレと戦ったことで前世の記憶が目覚めていった。サブレの中にある闇の存在にも一番早く気が付き、黒衣の騎士を作ろうとして策を練る。クリユセ攻防戦においても黒衣の騎士を使う事でサブレを追い詰め、黒衣の騎士とサブレの同士討ちを狙いながら自らは黒衣の騎士を使って進化しようと考えつく。ククナを愛している一方で、ククナに勝つ気がない事にも気が付いており、サブレに勝つための機体としてアークを建造する。人類のほとんどを消去し、自分の愛するククナだけと自分が生きている世界を作ることとで人類への復讐を目的にするが、サブレと戦い敗れ去る。ククナと共に新しい世界へと向かっていった。

ククナ・フォン・フレイヤ

概要……木星のスラム街出身で木星帝国人である父が愛人との間に作った子供であるが、父や母親からのまともな愛情は受けておらず、義理の母親であるフレアを母親として慕っている反面、父親には憎しみに近い感情を抱くようになる。木星帝国に所属したのも皇帝を内側から殺すことが目的だった。アインの最終的な目的やアイン達の存在する理由はある段階で気が付いており、人類そのものにはあまり興味は無いが、妹が生きる未来を見付けたい一心で行動を起こす。アインと共に最後を共にすると決め、サブレの手によって新しい世界へと向かっていく。

ジャック

概要……元ヒューマンデブリであり、幸せになる方法が分からずある意味八つ当たりのような気持で戦い続けてきた。彼自身の本心としてはヒューマンデブリ廃止は反対であり、唯一の居場所を奪われる行為以外何者でも無かった。戦いの中での死に場所を探し、明楽を宿敵としてとらえつつ、ククナの計画を遂行するためのメンバーに選ばれる。最終的には明楽と戦い、明楽から「生きてほしい」という言葉を受け、生きて人間として自分に何が出来るのかを探す旅に出る決断をする。最終決戦後においてはテラたちと共に旅立つ。

アルミリア・ファリド

概要……マクギリス・ファリド事件後に彼の過去を知り、ギャラルホルンを激しく憎悪する。父やガエリオ達に対する復讐を兼ねてアインの計画に参加しており、復讐を果たした後は記憶を消して行動していたが、木星との戦いではそれが災いし愛し合っている者の波長に耐え切れず、ヤマギを殺してしまう。シノとの戦いで敗北、ジャックの手によって殺された後はサブレの手によって次の世界に導かれた。

モントーク

概要……ガエリオ・ボードウインの現在の名前。表向きは死亡したことになっており、クリュセ攻防戦の前後からゲイナー一派と共に行動することが多くなる。最終決戦ではペペロを倒す。最終決戦後はアインのクローンを引き取り、テラと共に旅立っていった。

三日月・オーガス

概要……昭弘と肉体を共有することでかろうじて生きており、肉体のほとんどは機械で補っている。こんな肉体をアトラたちに見られたくないという気持ちと、元鉄華団としての責任を一人で背負っており、結果から見てビスケットにアトラを譲る要因になる。最終決戦ではFを殺し、その後はフロントムブラット隊の防衛を終えた後はモントークとジャックと共に現場をあとにし、鉄華団の責任を背負ってテラたちと償う旅に出る。

F

概要……三日月同様のサイボーグの肉体を得ており、テラに対し

て忠誠心を持っている。テラが死んだ（と思い込んでいた）時は復讐心から前が見えなくなっており、ペペロの口車に乗せられてしまう。ペペロの計画を遂行する為に三日月と戦うが、一瞬の隙をつかれて敗れ、命を落とす。

ペペロ

概要……アグニカ・カイエルのクローンとして生まれ、自らの肉体や生まれた意味に対して歪んだ認識を得るに至る。自分だけの世界を作ろうと作戦を練るが、オズボーンや鉄華団の前に敗れ去る。自らの肉体を捨て、脳だけになるなど様々な実験を行っており、自らの野望の為ならあらゆる犠牲もいとわない。

オズボーン

概要……木星帝国の幹部の一人で木星議会の議長を務めるなど、あくまでも裏方に徹していたが、ペペロの野望を知り戦いを挑んで勝利を収める。最終決戦後は太陽系議会の一人に選ばれる。

テラ

概要……木星帝国の幹部の一人で亡くなったと思われていた。しかし、実は生きており最終決戦において介入する。Fの死をみとり、その後は三日月達と共に償うたびに出る。

ゲイナー

概要……人体開発のスペシャリストで木星帝国やEDMからも一目置かれている存在。隠れることを得意としており、長年木星帝国から逃げ続けていた。最終決戦後はテラに自らのメンバーを任せ息を引き取った。アカシックレコードの計画に加担していた人物の一人。

登場機体（ただし最終決戦時に大きな変更が加わった機体か新しく登場した機体のみ）

ガンダムエデン・フォーエバー

概要……ガンダムエデンが木星での戦いにおいて損傷してしまい、改修を余儀なくされた際に、アカシックレコードから提供されたユニコーンガンダムとフェネクスを取り込んで作られた機体。外見

はユニコーンガンダムそのものであるが、角が二本とカラーリングがトリコロールに変更されている。シールドもユニコーンガンダムとフェネクスが使用していた物をそのまま流用しており、武装は切り替え式のライフル。ビームサーベルとネオ・ファンネルのみになっている。原型であったユニコーンガンダムに搭載されていたNT-DはEF-Sというシステムに変更されている。しかし、ユニコーンガンダムのフレームに強引にコックピット周りとエイハブリアクターとパーテイクルドライブを強引に搭載したものになった。開発時間さえあれば更に高性能な機体が出来ており、実際に開発プランには上位機が用意されていた。

#### ガンダムアーク

概要……サブレに勝つ為にアインが用意していた機体。両肩にキヤノンと高機動力用のスラスターなどあくまでもシンプルになっており、最終決戦において大破したエンペラーに変わって戦いを挑んだ。当初は押ししていたが、アイン自身の油断とサブレの機転、運の良さでA Iの存在によって逆転を許してしまう。最終的にコロニーの崩壊に巻き込まれてしまう。

#### ガンダムエンペラー最終決戦用装備パーフェクト

概要……ククナが最終決戦へと向かうアインの為に開発した機体だが、機体性能はエデンフォーエバーより下で在り、終始押されることになる。最終的にはエデンの手によって大破しながらもサブレの足止めには成功する。

#### ガンダムバルバトス・グシオン

概要……ガンダムバルバトスとグシオンの性能を合わせることに成功した機体。三日月と昭弘が二人で扱う事が前提になっており、全体的にバランス良くパワーアップしており、最終決戦においてはスピードで負けていたが、退路を塞ぐ先方の前に勝利を収める。

#### 零

概要……F専用 pepeロが開発した新型機、恐ろしく速い機体であるが、かなり脆く、一撃必殺のような強力な一撃を受けた場合は一撃で破壊されてしまう。実際アインがアークを完成させるために

造ったスピード特化型の機体。外見は鎧武者を連想させるような見かけをしている。

クラウン・クラウン

概要……ペペロが開発したモビルスーツでピエロの見かけをしており、量産型機と同性能であるが、ペペロが一人で動かすことを目的にしており、システム周りは真新しいものが採用されており、アインの目的はこのシステムであった。

ガンジユ

概要……EDMの新型量産モビルスーツ。ごつつい見かけに反し素早い機動力を持っており、今までの戦闘データをもとに開発された。様々な武装を搭載でき、基本的な姿はバランスよくできている。鉄華団にも一時的に貸し与えられる。

その他の設定

太陽系共和国……経済圏に変わる全く新しい国の名前。現在は地球と火星、木星が参加しており、金星も参加を表明している。

太陽系連邦軍……EDMと経済圏の防衛軍などが合併して誕生した軍隊。木星帝国の軍事力も吸収されており、初代元帥にはアルベルトが襲名した。誕生したばかりで部隊編成に追われているが、そんな中外宇宙探査船団を組織するなど細かい行動を起こす。

外宇宙探査隊……大きな移動型コロニーと覚醒者を中心に作られた外宇宙を調べることをメインに組織された部隊。軍隊以外にも多くの組織や人々が搭乗することで完成された。初代代表にはサブレが抜擢され、まずは最も近い地球型惑星へと向かっていった。エピローグでは第一期外宇宙調査隊が帰還するところから始まる。

## 繋がっている世界 エデン・オブ・フォーエバー

あれから十五年が経った。

木星帝国との激突、多くの別れと前を向く戦いは終わり、俺達はそれぞれに未来を選び取った。分かれて進んでもきつとこの世界のどこかでまた会えると確信している。

きつと今日はその最初の一ページになるだろう。

弟であるサブレが帰還を果たそうとしていたからだ、今日は第一期調査隊が帰還する日である。だからだろう港では大混乱の真つただ中、何せ第七期調査隊が今日出立するのだから。

あれから世界は外宇宙への調査隊を派遣する一方で、太陽系内の治安維持をおこなってきた。

僕ビスケットは太陽系連邦軍の大將にまで上り詰め、今ではアルン防衛部隊の全権を任されている。

港の大きな窓に近づき、見上げていると、視線の先にはコロニーの倍はありそうな大ききな新型移動型コロニーが出発を前に第一期の到着を待っている。

後ろからの声に気が付いて振り返ると、暁が軍服をきちんと着こんで現れる。

「後五分で到着だつて義父さ……大將！」

聞こえるように大きなため息を吐き出し、顎先を撫でる。すっかり髭面になった自らの顔はきつとしかめっ面に見えているだろう。

「全く。仕事中は対象と呼べつていつも言つてるだろ？ どうして守れないんだ」

「だって。いつも義父さんつて言つてるから……何だつたらパパつて呼んだ方がいい？」

俺は背筋が凍る思いをし、それが表情に出る。なんて恐ろしいことを思いつく息子なのだろう。この発想は三日月でもアトラでもない。明らかにサブレの発想だ。

さてはこつそり連絡を取り合つていたな。

新型アリアドネの通信テストで遊んでいたな。



「そんなに嫌な表情しなくてもいいじゃない。俺ってパパって言うような時期がないからそう言うのに憧れる」

「その年でパパなんて言われると……な。それにいい加減暁も大人なんだから少しは自立しないと」

「うっ！父さんだっつていい加減体重落とさないで健康診断にまた引っ掛かるよ！」

「最近はお鍛えているんだ！体脂肪率も落ちていくし！」

必死に弁明しているみたいになってしまったが、実際体脂肪率は落ちている。まあ、体重も変わらないけどさ。

しかし、髭面になってからみんなから「誰？」っと言われるようになった。

腕などもさらに太くなり、落ち着いていると本当に誰か分からないっつと言われるようになった。

「あ！？義父さん！」

「だから！」

仕事中は義父さんと呼ぶなっと思おうと思ったが、そんな言葉は吹き飛んでしまう。第一期の船が帰ってくると、第七期の船との大きさが目立つ中、一機のモビルスーツが七期モビルスーツに近づいていくのが見えた。その姿を見て安心してしまふ。

エデンが舞い、七期の船に近づいてそのまま降下していく。

俺達の目の前に降りてくると感慨深さで言葉が出ない。暁はニヤニヤしながらその姿を見ていたが、そんなことが気にならないくらい俺の心は目の前のガンダムに夢中だった。

第一期の船から一人エデンに乗って舞っていると、大きな船を確認する様に移動する。側面には『第七期調査隊』つと書かれており、俺達に乗っていたあの船とは違い街中はさらに進化したように見える。

エデンを好奇の目で見ている人々の姿を楽しげに確認すると、懐かしの気配のする方へと降りていく。

エデンが足を地につけると、ガラス越しに髭面の厳つい男がいた。なんていうか………熟練の手練れを思わせるその風格に兄なのだとなっつさに思えず、同時に否定したい気持ちになった。

「昔はかわいらしかつたな」

どこで間違えたのだろう。

こんな昔に戻りたいという気持ちにしてくれる兄に驚きがある。エデンを格納庫の整備士に任せ、自らはそのままパイロットスーツを脱ぎ捨て、予め持つてきておいた外宇宙探査隊用の軍服へと着替える。

すると、エデンから金属の塊が抜け出し、サブレに近づいていく。「なんだ、ついてくるのか？ついてきてもいいが……勝手に同化するなよ？」

『分かっている。我々も君達を理解しているつもりだ』

「ならいいけどな」

『それに、エデンにもそこまで同化しているわけでも無い。人間の生 態をよりよく知ることとは今後の交流にもなる』

二人で脳波で交流しながら大きなロビーに出ると、厳つい髭面の兄へと再会を果たした。

さあ、少し虐めてみよう。

「……………」

どうやら言葉が出ないようで詰まらせていると俺は言ってあげた。

「どなたですか？」

「忘れられた!？」

激しいショックを覚え、厳つい髭面が面白い顔つきへと変化を遂げ、俺は内心爆笑を隠せずにいると、兄は怒りで肩を震わせながら睨みつける。

おお！普通に怖い。

「またからかったね！あと新型アリアドネで遊んだらろ！」

「暁？喋ったのか？」

「言っていないよ！オジサンとの会話は何も言っていないし！」

三人で面白い会話をしていると、ようやく二人の視線は俺の少し後ろに漂っている金属の塊に移った。

金属が漂っているという変わった状況にさすがに対応できず、口を開閉を繰り返している。

「面白いなく」

『説明したらどうだ?』

そこまで言われて俺は仕方がないなんて言葉を吐き出して口を開く。

「これは俺達は『エルス』となずけているんだけどな。金属生命体だと思ってくれ。今回の帰還に付き合うつと言つてな」

兄は「そっか……」とつぶやきながら渋々納得する姿を面白く見ている。

「変わらないね。見た目も」

「外宇宙探査隊は老化が遅いからな」

そんな事を言いながら俺達はアルン市街へと歩き出した。

アルン市街への車に乗り込み、暁とは一旦別れて行動しサブレが助手席で窓の外へと呆けている。

「そういえば、あのおっさん亡くなったんだっけ?」

あのおっさん。マハラジャさんは三年前に亡くなった。

「うん。病死。治療すれば長生きできるって言われたんだけど、嫌だって断ったんだ。それでも長生きした方だよ?でも……」

サブレも何も言わなくてもマハラジャさんが治療を断った理由は理解したらしく、何も聞いてこなかった。

マハラジャさんはきつと親友は娘の元へと早く逝きたかったのだろう。

「シノは行方不明だったけ?イオリも一緒に」

「うん。メアリーは何も知らないの?」

「知らないってさ。まあ、子供じゃないし無事にいるでしょって意外と達観してたけどな」

「へえ〜意外だね。もう少し焦っているのかと思っただけど。まあ、多分地球に居るよ。降りていくところだけは最後に確認できたんだ」

「じゃあ、今もどこかを旅しているのか、それとも永住場所で過ごしているか。いや、意外と地球から離れているかもしれないぞ」

「いや、それはないよ。宇宙に出たら目立つし、それなら俺達の元へと情報が来てもおかしくないよ」

アルン市街に足を踏み込むと大きなメインストリートへと車を移動させる。

「明楽は向こうに残ったの?」

「ああ。惑星ヘラーっと呼んでいる場所にな。なんでも調査が難航しているらしくてな。そうそう。向こうは第三期も合流しているはずだけだ」

「じゃあ。クッキーも合流してるんだ」

クッキーは第三期で出立していき、外宇宙の生物調査を調べる為に。今では明楽とメアリーと一緒に居るに違いない。

「?クラツカは聞いた?」

「いや何も……………」

「クラツカはね大学の教授だよ。今は火星の新生物調査をテーマに論文を書いているらしくて、若くして教授に抜擢されたって有名だよ」

サブレは「クラツカが教授?」っと驚愕の表情で制止しており、俺はしてやったりという気持ちになった。

「すごいでしょ?クッキーに負けないんだって意気込んでたんだよ?死んじやった桜おばあちゃんも喜んでるだろうな」

つい涙ぐんでしまったが、それでも前を向く。

「ほかのみんなも頑張っているんだよ。チャド、ダンテ、エンビも結婚して農場や孤児院をしながら子育てに忙しいし、アトラはもう専業主婦一筋だけだね。そうだ。サブレの子供にも会いたいな」

「ああ、一年ほど滞在予定だからな。この後会わせる」

そう言っていると、俺はクレアさんは帰ってきていないのかっと思ふと思う。

「クレアさんは?一緒に帰ってきていないの?」

「?いるけど?子供と一緒に合流するってさ」

「じゃあ、お墓で合流できそうだね。アトラも来るって言ってるし」

そんなことを言っていると俺達は墓地に辿り着いた。

墓地の中を二人で歩いていると、サブレは『マハラジャ・ダースリン』と書かれた墓の前に小さな花束を置いて黙祷する。

きつと思うところがあるのだろうか。

ないわけが無いのだ。

ある意味父親なのだから。

そんなことをしていると、アトラが息子のサヴァランと共にやって来た。

「パパー！」

「サヴァランー！」

黙祷を終えたサブレが俺の方へとジト目を向ける。

「自分の息子にサヴァランって……どうなんだ？」

「別にいいでしょ？俺の子供なんだからさ。可愛いでしょ？まだ五歳だけど。マハラジャさんも抱っこしたんだよ。ねえ？サヴァラン」  
「うんー！」

楽しそうな表情をしている姿を見てサブレも微笑んでいる姿を見ると、マハラジャさんの楽しそうにサヴァランを抱っこする姿を思い出す。

すると、更にその後ろからクレアさんも息子さんを連れて現れた。

「ごめんなさい。この子つたら色々な場所に興味を持つちゃって」

「たく。ほらこつちにこいジン」

「パパー！」

サブレの方へと走っていき、抱っこしてもらおうとどこか楽しそうにしている。

「久しぶりだな」

そんな声と共に振り返るとそこにあユージンが立ち尽くしていた。

「あれ？火星本社方面に居たんじゃないの？」

「帰ってくるって聞いたら駆け付けるに決まってるだろ？そうだ。サブレ。開発部の奴らが新型エンジンのテストをしたって言って言っただぜ。協力してやってくれよ」

「ああ。構わないさ」

いつの間にか二人も仲良くなっていてようで、なんて思っていたらサヴァランとジンがユージンの足回りではしゃいでいる。

そうしていると、ジンがユージンのポケットから財布を取り出し、そのままサヴァランと一緒に駆け出していく。

「あつ!? コラー! お前達!!」

ユージンは「返しやがれ!」と叫びながら墓地内で走り回っており、楽しそうにしている。

俺はサブレの耳元で耳打ちする。

「知ってた? ユージンとサラ二回破局したんだよ」

「付き合っていたこと自体初耳だが? あの二人付き合っていたのか?」

「うん。今も付き合っているはずだよ。傍から見たら楽しそうに見えるな」

ユージンが駆け回っている姿を見ると、ふと笑ってしまう。

シノが薪を割ると後ろからイオリがお昼ご飯を作って現れる。二人は無人数で二人で過ごしていた。

明楽とメアリーの前の前でクッキーとクラツカはお互いに発見した新種を通信しながら見せ合いつこしている。

暁の目の前に雪之丞の息子が現れ、二人で格納庫へと向かう。

メリビットはダンテ、チャド、エンビ達が孤児院の子供たちとはしゃいでいる姿を見ながら微笑んで編み物をしていて。

タカキは久しぶりに会えた妹と食事に出かけていく。

きつとこんな毎日がこれから続いていくのだろう。

エデン・オブ・フォーエバー

世界は繋がっている。どこまでも際限なく。これがサブレが守りたかった世界で、これから生きていかなくはない世界なのだから。

永遠などないつと知っているからこそみんなは諦めず進めるのだと知っている。

サブレはビスケットとともにエルスの力を借りてほんの少しだけ別の未来を垣間見ることにした。

そこにはオルガがいて、ビスケットやサブレがおり、鉄華団のみんながいる。楽しそうに微笑んで、見たことも無い未来へと向かっていく。

別の未来へと飛翔する。

諦めないからこそ見えてきた未来だ。

彼らもつかめたのだろう。未来を。手に入れたかった未来を。一緒に。

「良かったよ」

「ああ。後悔はより良い未来へと変わる。それが分かった。間違っていたのかもしれないし、間違っていなかったのかもしれない。それはこれから俺達がこれからの世代と一緒に見つけていかなくちやいないんだ」

「うん。これからだって人間は争っていく。でも、いずれはたどり着けると信じてる」

「迷い。時に傷つけ合い。後悔しながらまだ見ぬ未来へとたどり着く」

アインに胸張ってこの未来でよかったと胸を張る為にも歩いていかなくてはいけない。共までも広がるこの未来を守り、生き抜く。

サイガは別の未来で手に入れたかったものを手に入れただろう。

サブレもまたそれを見届けることはできないけれど、きつと今度こそうまくいくつと信じる。

生きたことは無駄ではない。

生きていくという事は受け継いでいくという事で、受け継ぐという事は世界が繋がっている証明だから。

俺達は証明していくんだ。

この世界は繋がっているという事を。

さようならは言わない。

また逢う日まで!!